

楽園爆破の犯人たちへ 求

XP—79

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

復讐を終え、騎士を取り戻したルルーシユは穏やかな日々を迎えようとしていた。

だがルルーシユと入れ替わるように復讐の道を歩み始めたスザクは、絶望と裏切りの狭間でもがき続けていた。

そして全てを知ったナナリーの決断がルルーシユを戦いの渦へと放り込んでゆく。

ルルーシユは、ルルーシユに語る。自身の意味、その有様を。

※ルルーシユが女体化しています

※整数でない話数の話は、ルルーシユが口口に語っていない内容の話です

※2019/2/9 さよならルルーシユ。またいつか。

目次

恩讐のかなた

1. ナナリーの幸せが大事だったんだ | 1

2. 復讐に明日は無い | 20

3. そうだ。俺達は嘘つきだからな | 40

4. 純真のままできて欲しいという願いは、傲慢なのだろうか

59

5. この時にスザクを止めていれば、まだ、 | 73

6. 俺が悪かったんだ。分かっている | 91

7. 人は成長する。そしていなくなる。しょうがないことなん

だ | 111

亡羊のかなた

8. 黙っているというのは、嘘をついているのと同じだ | 130

9. 生きていくんだ。そのために戦うんだ。そう決めたから

150

10. なりたい職業になるためには、能力よりタイミングが問題

だよなあ…… | 174

浩然のかなた

11. 水泳部メイド、乙女騎士、魔女、ワンコ系騎士、オレンジ

サイボーグ、無駄にイケメン皇子……世間から俺ってどんな趣味だ

と思われているんだろう…… | 199

11. 5 夜の終わりのバラ | 221

12. 藤堂にはもう少しボーナスをやっておくべきだった

248

13. 世界終末の日に何をやる? | 272

楽園のかなた

14. 母親似と言われることが多いんだがぜんっぜん嬉しくな

い | 292

14. 5 楽園のかたち | 313

15. 恋は人を変える。良くも悪くも | 329

15. 5 楽園のありか | 355

15. 75 楽園の： | 376

15. 875 ロロ | 400

16. 大丈夫だ、安心しろ | 415

17. 世界は続いてゆくものだから | 433

0. ゼロの再誕 | 465

Epilogue

Epilogue 1. 楽園爆破の犯人たちは | 487

Epilogue 2. 楽園爆破の犯人たちが | 512

Epilogue 3. 楽園爆破の犯人たちへ | 537

おまけ く復活についてネタバレしたくない方はバックプリーズ

580

恩讐のかなた

1. ナナリーの幸せが大事だったんだ

「何故ですか兄上！何故、ユファイを殺害した輩を捜索してはならないのですか!!」

ブリタニア宮殿の隅々に繊細な彫刻が施された廊下を歩みながら、コーネリアは先を歩くシュナイゼルに叫び続けていた。

悲鳴のような声を発するコーネリアには普段苛烈な印象を与える強靭さは無く、顔面の血流が全て途絶えてしまったかのような酷く白い顔をしていた。

シュナイゼルは一度振り返り、痛々しいコーネリアの様子を目の当たりにして胸を痛めながらも首を横に振った。

人間としての感情を取り戻したシュナイゼルは、妹であるユーフェミアが非人道的な実験の結果殺害されたことへ、頭痛がするほどの怒気を抱いてはいた。しかしコーネリアとは違い、シュナイゼルにとつてのユーフェミアは唯一無二の至玉という訳では無かった。そして彼の為政者として相応しい冷静さは全てが手術の副産物ではなく、生来の性質として持ち得ているものでもあった。

ユーフェミアを殺したのがギアス嚮団であり、ギアス嚮団という組織がブリタニア皇帝の直轄であることを踏まえると、シュナイゼルは余計に藪をつつく愚を犯す決断は下せなかった。

病床にある末期患者のような顔をした妹に、シュナイゼルは悲痛な顔をして口端から漏れ出るように声を発した。

「……ユファイの殺害犯は逮捕されただろうか？コートランド伯爵だったか」

「あれは皇族の体面を保つための嘘でしょう!?!確かに彼らはリ家に敵対しておりましたが、実行犯と考えるにはあまりに無理がある！あんな、ユファイに、あんなっ」

コーネリアはぶるぶると手を震わせ、棺に納められたユファイを瞼の裏に浮かび上がらせた。

生前とあまり変わらない白い肌と長いストロベリーブロンドの髪は、若く美しい皇女を鮮やかに彩っていた。花が敷き詰められた棺の中でまるで眠る様に瞼を瞑ったユフィは、肩を揺すれば目を覚ますのではないかと思う程に生前そのままの顔をしていた。

しかしユフィの胸から下は存在しなかった。細長くしなやかな胴体の代わりに不揃いな太さの人工チューブが胸の下に横たわってユーフエミアの命を吸い上げていた。それは悪辣という表現さえ徒爾に思える程の有様だった。

コーネリアが愛したユーフエミアの魂はもうそこには無く、残された体は人の形をしていなかった。ユフィの美しい形と在処は無残に凌辱され、コーネリアに残ったのはユフィに最も似合わない憎悪という暗赤色をした感情のみであった。

しかしコーネリアは憎悪という感情に振り回されはしても、叩きのめされることは無かった。脳を噴出する怒気という炎に焼かれながらも、彼女はユフィを殺したのはテロや貴族ではありえないだろうと冷静な判断を下していた。

「兄上、あなたなら何か知っているのでしょうか!?教えてください、お願いしますっ、どうか、私が持っているものならなんでも差し上げますから、皇位継承権を献上しろと言うのならそうしますから……!」

「……コーネリア、私がなんでも知っていると思うのなら、それは間違いだ。むしろ私が知らないことの方が世界には多く、多くの物事が私の予想の範囲外にある」

「でも知っているんでしょう!?ユフィを誰が殺したのか、知っているのでしょうか!」

コーネリアはシュナイゼルの服を掴んだ。

シュナイゼルが知らない訳が無い。この男が知らなければ、他の誰が知っているというのか。

自問に呼応するようにコーネリアの脳内にゼロの仮面が浮かんだ。ユーフエミアの遺体が発見されたときにスザクと共にいた男。

ゼロが中国の砂漠で何を調査していたのか。その調査内容とユーフエミアの死に関連があることは確かだったが、コーネリアは未だに

ゼロとの面会を果たすことが叶わなかった。

それはゼロが通信越しにでもコーネリアと顔を合わせることを拒んでいるのではなく、むしろコーネリアの方に問題があった。彼女の足を止めていたのは皇族としての楔だった。

黒の騎士団へと通信しようとする、本国の官僚が細々とした声でコーネリアの邪魔をする。テロリストに頭を下げ、情報を乞うなど、皇族としてありえない。むしろゼロが首を垂れて情報を献上して、くるのを待つべきではないか。皇族がわざわざ御声をかけるなどブリタニア皇室に傷をつける結果になるのではないか……

馬鹿馬鹿しい。全く以て。自分の立ち位置、皇族というものの価値。それは妹の復讐を果たすために首を下げることで容易に失われる程度のものであったのか。

彼女はそうは思わなかった。自分の価値、そして尊厳は、ここでゼロに頭を下げなかった場合にむしろ永久に失われるように感じた。

だがエリア総督という権力を失い、恥ずべき敗者として本国に戻ったコーネリアは政治に口を出す実権どころか自由に身動きする権利さえ失っていた。

今のコーネリアの短い手が届く範囲で掴めるものは、シュナイゼルの服の袖しかなかった。

「兄上、お願いします、どうか、名前だけでもつ、ユフィを殺した奴らの名前だけでも、」

「……教えるわけにはいかないんだよ、コーネリア。これは君のため、」

そこまで口になるとシュナイゼルは喉を詰まらせた。胸元をコーネリアに締め上げられたのだ。

本質的には武人であるコーネリアの白兵戦の能力は、シュナイゼルなどとは及びもつかない境地にある。

鉄鋼が振れるようなぎりぎりとした音が耳の中で反響し、顔面の血液が滞留して熱を持つ事実をシュナイゼルは他人事のように認識していた。間近で見る妹の萎れかかった薔薇のような刹那的な美貌に彼は目を細めた。

「知っているんですね……っ、ならば、教えて下さい、教える!!」
声を荒げる妹にシュナイゼルは何と言っているのか分からず言葉を詰まらせた。

コーネリアの身の安全を思うのならば、何も喋らない方が良いことは明らかである。ルルーシュやユフイと違い、魔女と名高いコーネリアが皇位継承権を破棄すれば世界中のナンバーズが彼女に殺意と敵意を向けることだろう。

だがその未来を察知しながらも、シュナイゼルは口を噤む決断が正しいとはとても思えなかった。

今のコーネリアは、あまりに見えていられない。ユーフェミアの残火を探して地上を這いまわる幽鬼のようだ。白く変色した顔にはユーフェミアの復讐のため無業の人々を手にかけることさえ辞さない危うさがあった。

もしコーネリアがそこまで道を踏み外してしまえば、それはもうコーネリアとは呼べないだろう。

——コーネリアの生きる意味がユーフェミアにあるのならば、ここで喋らないのはコーネリアを殺してしまうのと同じではなからうか。

未熟な感情しか持たないシュナイゼルも、コーネリアが無知の幸福より、知者の隘路を行くことを望んでいることは余りあるほどに察せられた。

シュナイゼルは服を掴むコーネリアの腕を叩いた。

「いいだろう」

その一言で察したのだろう、コーネリアは腕から力を抜いた。気道に流れ込む空気は乱気流を巻き起こし、シュナイゼルは数回咳をして息を整えた。

「兄上、」

「ギアス嚮団だよ」

ともすればあっさりとした様子で、シュナイゼルはコーネリアに答えを提示した。しかしシュナイゼルと長い付き合いのコーネリアは、彼がいつになく悲壮な色に瞳を染めていることに気づいた。

しかしコーネリアの意識はギアス、とは何かという疑問に終始しており、常になく情感豊かな様子のシュナイゼルを気に掛ける余裕も無かった。

「……兄上、ギアスとは何なのですか？」

「ギアスとは他者の意志を歪ませ、自分の願望を成就させる王の力……私も君も、ギアスの実験台として作られたのだよ。幸運にも我々は失敗作であったわけだが」

シュナイゼルは瞳を細めて、苛烈な色に瞳を瞬かせるコーネリアへ惜別を送った。

「ユフィを殺した者の名はV・V。ギアス嚮団の幼い嚮主であり――
我々の伯父だ」

コーネリアはその日の内に皇位継承権を破棄し、姿を晦ました。

彼女の行方を知る者はおらず、皇宮には小さな混乱が起こった。しかしエリアー11において大敗を喫した皇女にはもう皇宮内における大権は無く、彼女の消失を喜ぶ者はいても、態々行方を探そうとする者は誰もいなかった。彼女の騎士であるギルフォードは主君の心境を察し、行方を捜索することは無かった。

妹が去っていった皇宮の只中で佇みながら、シュナイゼルは彼女がどこへ向かったのか思考を巡らせていた。

ギアス嚮団の本部を探しに行ったことは間違いない。だがそれがどこにあるのかはシュナイゼルにも分からない。中華連邦にあった本部はとつくにもぬけの殻と化している。

何れにせよ、彼女は妹のために全てを投げ出したのだった。地位、権力、金、そういった多くの人が求めてやまないものを、躊躇せずに捨て去ってしまった。

その行動は6年前に自分が日本へと送り出した一人の騎士と重なって見えた。捨てたものの大きさは妹の方が遙かに巨大であったものの、高潔性という意味においてかの騎士は妹に聊かも劣ってはいなかった。

ただ一つ違いがあるとすれば、騎士は主君の明日のために全てを投げうったのであって、コーネリアは妹の失われた魂のために全てを置いて走り去ったのだった。

あの騎士は今日も主君の傍にいたいことだろう。捨てた地位や権力に未練があるかと問えば、笑って首を横に振るに違いない。

妹はどうなるのだろうか。いつか、笑って未練は無いと告げることが出来るのだろうか。

シュナイゼルはその日が来ることを心から願った。



一瞬青い光が瞬いたような気がした。

網膜の端に澄み渡るような爽やかな色は瞬時に眼球へと染み渡り、強張った筋肉を柔らかく解す。

ナナリーはぎこちなくも数回瞬きをして、眩しい光から神経を守ろうと目尻を震わせた。

自分が目を開いていることに気づくまでナナリーは数秒の間を要した。視界の中心には2人の男が立っていた。

一人の男は、6年前に顔を見た時と容姿は大きく変わっていないかった。だが多くの経験が顔表面を覆って色味を増しており、実年齢よりも落ち着いた貫禄を男に持たせていた。気位の高い猛禽類のような容姿は迫力を増し、平時に生きる男とはとても思えない危うさを漂わせている。

それがジェレミアだとナナリーはすぐに気づいた。ジェレミアの容姿は人並みではなく、むしろ圧倒的に優れていると万人が認めるところにあるだろう。

しかしその隣に立つ人間と比べれば凡庸という評価は否めなかった。

ジェレミアの斜め前には、少年と青年の只中で彷徨う紫水晶のような美貌の持ち主が凜とした姿で立っていた。

彼が誰なのか、ナナリーは一瞬分からなかった。こんなに美しい生き物がこの世界に存在するのかとナナリーは感嘆を通り越して驚嘆する思いだった。自分が目を閉ざしている間に、世界の美の水準はこの青年一人の存在で随分と上がったことだろう。

彼が男にしては高めの、しかし耳によく馴染む柔らかかな声を発して、ようやくナナリーはその男が自分の兄であることに気づいた。

「ナナリー、大丈夫か？」

「ナナリー様、」

「は、はいお兄様。眩しくて」

眩しい。そうだ眩しいのだ。ああ、眩しいとは、なんて美しい言葉なのだろうか！

「ゆっくり瞬きをするんだ。ゆっくりでいいから。ジエレミア、部屋の照明を落としてくれ」

「はい、ルルーシユ様」

部屋の明かりが落とされ、ナナリーは恐る恐る瞼を開いた。先ほどよりも穏やかな色味をした世界が広がっている。ぱちぱちと瞬きを繰り返して、懐かしい世界の色を網膜に馴染ませた。

6年ぶりの世界は想像していたよりも色鮮やかで、脳内に流れ込む情報過多な色彩にナナリーは眩暈を起こした。ルルーシユは頭をくらくらと回しているナナリーのアツシユブラウンの髪を撫でて、「大丈夫、大丈夫だ」と何度も繰り返して眩いた。

「見えるかい、ナナリー」

「はい。見えます。お兄様、お兄様——ああ、お兄様はそんな顔をしていらしたのですね」

「うん。どんな顔かな？」

差し出されたルルーシユの顔の隅から隅までを眺めながら、ナナリーは感慨に溺れそうになっていた。

こんなに完璧な容姿を持つ人間が自分の兄だなんて信じられない。陶器色の肌をした顔に指を這わせると、自分が触れた部分だけが影を作り、完璧な兄の容姿が翳るような気がしてナナリーはぱっと手を引いた。

「……お美しいです、お兄様」

まるで天賦の才を持つ彫刻家が、命を削って彫り込んだ彫像のような形をしている。ナナリーの感嘆は美しい美術品を前にしたそれと同等のものだった。しかしそれは彫像ではなく生きた人間で、ルルーシユは微苦笑を零した。

ナナリーの心からの感嘆よりも、ルルーシユは透き通った薄紫色の瞳に映る自分の姿に涙が滲んだ。

綺麗な瞳だ。混じりけの何もない、湖面のように澄んだ色をしている。色の深い自分の瞳とは違う、ナナリーの純粹さを表すような透明度の高い色合いに、ルルーシユは嗚咽が零れそうになるのを耐えた。「ありがとう。でもナナリーの方が可愛いくて綺麗なだよ。本当に綺麗な瞳の色だ——ああ、目が見えるようになったんだから、これから服と一緒に買いに行こうか。ナナリーが好きな色合いとデザインの服を買おう。それに絵画や、インテリアも。ナナリーの好きなものを買おう、それに、」

「私はそんなに沢山のものは要りません。ただ……」

「なんだい？」

「……ユファイ姉さまに、会うことはできませんか？」

ナナリーの言葉にルルーシユは息を詰めた。

リ家の生き残りは今やコーネリアしかない。ユーフェミアの母方の類系は誘拐犯に一人残らず惨殺されている。そのためにユーフェミアの遺体を直接見た者は、スザク、ルルーシユ、ジェレミア、カレン、そして遺体をブリタニアに移すよう手配したシユナイゼルト、遺体を受け取ったコーネリアしかないなかった。

皇族であるユファイの死は大々的な葬儀を執り行われてしかるべきものだ。しかしコーネリアは周囲の声から耳を塞ぎ、頑なに密葬に拘った。当然だろう。あの遺体を表に出すなど、できる筈が無い。

「すまないナナリー。ユファイの葬儀はコウ姉上とスザクだけで行いたいんだ。日時も分からないから……もしかしたらもう済んでしまったかもしれない」

「そうですか……ユファイ姉さまが死んでしまうなんて、どうして……」

ユファイ姉さまをもう一度見てみたかった。そう呟いたナナリーの頭を撫でる。ユファイは顔を持ち上げてルルーシユの顔をまつすぐに見た。

「お兄様、ユファイ姉さまはどうして死んでしまったのでしよう?」

「誘拐犯はブリタニアの貴族だったらしい。醜い皇宮内の権力争いに巻き込まれてしまったんだろう。ユファイは高い皇位継承権を持っていたから、ユファイを嫌う人は多かった筈だ」

「そんなのおかしいです。皇位継承権でユファイ姉さまの性格が決まる訳ではないのに、ユファイ姉さまは誰より優しい心を持っていたのに、立場や血統などのせいで嫌われて、殺されてしまうなんて」

「ああそうだ。ナナリーの言う通りだよ」

でも正論だけで世界が成り立っている訳ではないんだよ。そう告げるにはあまりにナナリーは純粹過ぎるし、意味がない事だとルルーシユは口を噤んだ。

「ユファイは優しかった。人の喜びを、自分の喜びのように感じられる人だった。だからナナリーが目が見えるようになったと知ったらとても喜んでくれただろうね」

「はい、はい……お兄様」

「何だい?」

「今日は、一緒に居てくださるんですね?」

ナナリーはぎゅ、とルルーシユの袖を握った。

そういえば最近黒の騎士団の活動が忙しくてまともに傍にいてやれていなかった。ブラックリベリオンに巻き込まれて不安だっただろうに、咲世子にナナリーの世話を任せきりにさせてしまっていたのだ。

心から大事に思っているのに、それを体現していなかった。だからその気持ちは無いのと同じだ。

たとえゼロの仕事が忙しかったとしても、ジェレミアがいない間、ナナリーの唯一の保護者としてあまりに不甲斐ない有様だった。罪悪感と共にルルーシユはナナリーの手を握った。

「ああ、勿論だよ。アツシユフオードKMF開発部の仕事は辞めたん

だ。ジエレミアも帰ってきたし、合衆国日本が建国したおかげで戸籍も3人分手に入った。もう何も心配することは無いんだよナナリー」
幼い子供にするようにナナリーを撫でる。

甘やかな手つきが嬉しくてナナリーは目を細めた。

「ありがとうございますお兄様、それにジエレミアさんも」

「仕事のためとはいえ長い間お傍を離れることとなり、申し訳ございませんでした」

「いえ、そんなことは……それより、どうして突然目が見えるようになったのでしょうか？」

目が見えるようになったことは本当に嬉しい。これまで手が届く範囲しか存在しなかった世界が大きく広がり、なんでもできるような心地よさがナナリーの全身を包んでいた。何よりこれで、もう自分の介護をしなければならない兄の負担が格段に減るだろう。

しかし同時に、これまで見えなかった目がいきなり見えるようになったことへの驚きもある。

「確かに突然だったけど、器質的な問題じゃなく心的外傷が原因だったんだから、いきなり見えるようになってもおかしくはないんじゃないかな。ちよっととした切っ掛けで目が見えるようになることもあると精神科のドクターも言っていたし」

「そうなのでしようか……？」

そう聡明な兄に断言されると、そうであるような気がしてくる。

精神医学の専門的知識を持たないナナリーは、恐らくはジエレミアが帰ってきたことへの安堵感が切っ掛けとなって目が見えるようになったのだろうと結論付けて納得した。

「ナナリー、目が疲れてはいないかい？やっぱり暫くはそんなに明るくない場所にいた方がいいかな」

「いいえ。大丈夫です。むしろ外に出たいです。空の色が見たいし、葉っぱの緑色や綺麗なお花の色も見たい。それに何より、生徒会の皆のお顔が見たいのです。私、皆さんのお顔をずっと想像していたんです。こんな性格と声をしている人は、どんなお顔をしているんだろうなって」

「分かった。ニーナはもう本国に帰ってしまったけど、まだシャーリーは日本にいるよ。シャーリーと、それにカレンとリヴァルとミレイ会長を呼ぼう。植物園が近くにあるからそのまま皆で行ってみようか。今の季節なら春の花が沢山咲いているよ。クローバーでまた一緒に冠を作ろう」

「はいー」

目を開けて笑うナナリーに、ルルーシユは涙を滲ませて抱きついた。細い首筋に顔を埋めて、耐え切れないと声を震わせる。

「お兄様？」

「よかった、本当に良かった、ナナリー……」

「ルルーシユ様、」

ジェレミアはルルーシユの隣に片膝をついて、彼女の華奢な肩を叩いた。

ルルーシユは片腕を持ち上げてジェレミアの背中に回した。

2人の家族に囲まれて、ナナリーは視界がけぶるのを感じた。

大丈夫だ、もう大丈夫なんだ。

これから先は3人で暮らしていけるんだ。

もう何も心配することなんてなくて、穏やかに、ささやかな日々の幸せを甘受して生きていけるんだ……

少なくともナナリーは、そう信じていた。

生徒会メンバーは開かれたナナリーの瞳に歓声を上げて、一緒に一日中を過ごした。

植物園に行き、シヨツピングに行き、クラブハウスに戻ってルルーシユとミレイが作った食事を一緒に食べた。

夜を迎え、喜び疲れたメンバーは名残惜しそうにしながらも家に帰り、ナナリーも突然色彩の暴力に晒された気疲れからすぐにベッドに入って寝息を立てた。

時刻が21時を回る頃、ルルーシユの私室にはルルーシユとジェレミア、そしてC・C・が集まっていた。

「ナナリーの目が見えなくなっていたのはギアスのせいだったか……こんなに長期間、心因性の視覚障害が続くことなんて珍しいと医師が言っていたから、まさかと思って試してみたが」

「こうなるとマリアンヌ様の暗殺にもギアス嚮団が関わっていそうですわね」

「恐らくはな。マリアンヌ、ナナリー、それにお前……全く、忌々しい」
舌打ちするルルーシュへ向けて、ベッドの上に寝そべる神秘的な美女が桜色の唇に笑みを滲ませた。自嘲の色が見える笑みだった。

1年近く前、トウキョウの地下でルルーシュが保護した女性だとジェレミアはすぐに気づいた。C・Cは初めて見るルルーシュの騎士へ、今度は挑戦的な笑みを浮かび上がらせた。

「お前がジェレミア、オレンジ君か」

「オレンジ？」

「……………ジークフリートがオレンジっぽい外見だったから、つい、」
操縦者がお前だと知っていればオレンジだなんて呼んでいなかっただと言い訳がましく呟いたルルーシュに、相も変わらずのネーミングセンスだとジェレミアは微笑ましきを感じた。

「私は気にしてはおりませんよ。それよりルルーシュ様、この女は何者ですか」

「私の名前はC・Cだ。この女などと呼ばわれる筋合いは無いぞ」
主導権を握りたいという欲求を露呈するような口調で喋るC・Cに、これではこの女性にルルーシュは敵わないだろうな、とジェレミアは一人頷いた。

ルルーシュは基本的に女性に甘い。それもミレイ・アツシュフオードのような押し強い美女に迫られるとつい耳を傾けてしまう。ナイト・オブ・ワンに名を連ねる程の女傑であった母親への捻くれた思慕の露出か、それとも母親のような女性が自身の理想形であるからなのかは分からないが、ともかくルルーシュはC・Cのような強い女性に弱い。

そしてジェレミアとしても気の強い女性は嫌いではなかった。気が弱い女性より余程良い。

強い意志を持ち、自らの道を実力で切り開く颯爽とした高貴な女性がジエレミアは好きだった。髪色は神秘的な新緑色ではなく夜空のように静かな黒色の方が好みであったが。

「それは失礼した、M s. C. C.」

「M sはいらん、堅苦しい」

鼻で笑ってひらひらと手を振るC. C. は、紳士的な微笑みを浮かべるジエレミアの眼を見据えた。

左目はオレンジ色の仮面で覆われていて瞳の色は見えない。だが青色をしていることは既にC. C. もルルーシュも知っていた。

「ギアスキャンセラーを持つ騎士か。また随分と異端の能力を持って帰ってきたものだ」

「好きでこうなつた訳ではないがな」

「全くだ、死んでいたかもしれないんだぞ」

ユフィのように、というルルーシュの言葉は音にならなかつたが、ジエレミアは確かに聞いた。

ユフィの無残な死体を思い出すと、華憐な皇女の末路としてはあまりに哀れだという感傷と共に、自分がああならず済んでよかつたという安堵が浮かぶ。

あまりに自己中心的な安堵の念に自身への嫌悪感が増したが、しかしそれ以上にユフィの遺体は凄惨を極めていた。

「ジエレミア、ギアス嚮団にはユフィみたいに実験体にされていた奴らが沢山いたんだな？」

「ええ。V. V. というコード保持者が嚮主として実験を主導しておりました」

「V. V. というのは何者か分かるか？」

「……いえ、そこまでは。しかしビスマルクを従えていたことから、恐らくは皇族だと思われれます」

「ふん、そうか」

ルルーシュはC. C. に目をやり、しかしふいと逸らした。

C. C. が何か知っていることは明らかだが、C. C. は共犯者であり、部下ではない。詰問する権利は自分には無い。

それにC・C・が喋ろうとしないことを無理に聞き出そうとでもすれば、彼女は気まぐれな猫のようにここから離れてしまうだろうということは想像に難くなかった。

「ギアス嚮団がまだ中華連邦にあれば、総攻撃を仕掛けることも出来るのだが……」

「オレンジがユーフェミアを連れて脱走した時点でもう移動しているよ。今、ギアス嚮団の本部がどこにあるのかは私にも分からない」

C・C・はぴよん、と床に飛び降りた。

「行方が分からない以上、探すしかないだろう」

「そうだな。暫くは合衆国日本の舵取りをしながら地道な搜索活動が続くわけだ」

ルルーシユは腕を組み、息を吐いた。

ユフィを殺し、非人道的な実験を続けるギアス嚮団はブリタニアと大きく関わりがある。であれば暫くはゼロとして活動を続け、ギアス嚮団の居場所を探る方が得策かもしれない。

「藤堂と話をしなければな、随分待たせてしまっているから——
できればあと1年以内に片を付けたいところではある」

「藤堂というと、スザクの師であった軍人ですか」

「ああ。今は黒の騎士団の軍事総責任者の役職にある。ゼロがルルーシユだと知っている数少ない人間の一人だよ。他に知っているのは紅月カレンと、咲世子と、スザクとシユナイゼルかな」

「——スザクはともかく、シユナイゼル殿下は……」

目を険しくするジェレミアにルルーシユも頷いた。

シユナイゼルに最悪のカードを握られている状況は変わらない。たとえシユナイゼルに人間らしい感情が戻っていようとも、元々の人格に問題があれば何の意味も無い。

一度会話をした限りでは割と温和そうな人柄ではあった。しかし一度きりの会話で何が分かるというのか。

シユナイゼルであれば油断を誘うために態と温和そうな人柄を演じて、その裏で薄暗い策謀を張り巡らせていても何の意外性も無い。むしろその方が現実味がある。

あのシュナイゼルが、その実はルルーシュよりもユーフェミアの方に似た優しい心を持つ青年であつたなど容易に信じられるものではない。

「ブリタニアが合衆国日本をいつまでも放置しておくとは考え難い。ブリタニアが再度日本に侵攻してくる時が来れば、ゼロが皇族であることは黒の騎士団、ひいては合衆国日本にとって不利になる……これは感情を取り戻したシュナイゼルがどの程度マシな人間であるかに掛かっているが」

「まあそれはそれとして、だ」

C・Cはルルーシュに抱き着いて豊満な胸を腕に押し付けた。

「そんなに先のことを心配してもしようがあるまい。それより今夜のことだ。ルルーシュ、この男はこれからここに住むだろうか？私、お前、そしてナナリーに咲世子と、今は女しか住んでいないこのクラブハウスに」

「？そっだが」

ルルーシュはこてんと首を傾げた。何か問題でもあるのかと言いたげな仕草にC・Cはジェレミアへ同情の視線を向けた。その視線の意味を明確に受け取り、ジェレミアはゆっくりと顔を伏せた。端正な顔には諦念と遺憾がまだら模様になって浮かんでいた。

「何か問題があるとは思わないか？」

「だから、何がだ」

「危機管理の問題だ。こいつは20代後半の男盛りの強靱な男で、私達は美しくか弱い乙女だ。こう、ちよつとは危ないとは思わんのか？」

「別に」

今度こそC・Cは哀れな子羊を見る目でジェレミアを見やった。

ジェレミアは肩身が狭そうに身を振った。

ルルーシュは指先を突き刺すようにジェレミアへ向けた。

「こいつが女子供に対して無体を働くわけが無いだろう。その点について警戒する必要は全く無い」

「ああ良かった。私の言っている意味はちゃんと理解していたんだ

な。子供がキャベツ畑から生えてくるとでも思っているんじゃないかと心配したよ」

「よしジェレミア、今日からこの家に住む乙女は3人だ。餞別代りに引越しの手配をしてやれ」

「ほう、お前はこれから政庁に寝泊まりするのか。家に帰る間もない程に仕事が忙しいんだものな。安心しろ、ピザの請求書の宛先はきちんと政庁に変えておいてやるから」

「出ていくのはお前の方だ。生憎と俺はそこまで初心じゃないし、何も知らん小娘のように馬鹿にされるのは気に食わん」

「おや、お前は生娘なのか？」

「……どうだかな。覚えていない」

謎は謎のままの方が美しいんだろう？とルルーシュは挑戦的な笑みを浮かべて肩を竦めた。

「ほう、小娘が、言うじゃないか」

「お前の言葉だ」

「成程、流石私だ。良い事を言う」

「いい加減になさってください。もう深夜ですよ。ナナリー様もお眠りになっているんですから」

話が険悪な方向に移りそうな気配を察し、ジェレミアは二人の間に割って入った。二人はよく似た懽然とした表情を浮かべた。

揃って類稀なる美貌の女であるというのに、間に挟まれると圧迫感しか無く、美女に囲まれている多幸福感は欠片も無い。二人揃って一筋縄ではいかない性格をしていることを知っているからかもしれない。

二人は不機嫌そうな顔をしながらも、ルルーシュはC・Cの隣に体を横倒しにした。ごく自然な仕草でルルーシュは隣に女性1人分のスペースを確保し、そこに自然な体運びですっぽりとC・Cがおさまったことから、こうして二人が同衾するのは初めてではないことは明らかだった。

頻繁に同じベッドで寝ているのか。

仲が良いのか悪いのか。喧嘩友達とでも言うのだろうか。ルルーシュはシーツを自分とC・Cの上にかけた。

「疲れたからもう今日は寝る。とりあえず明後日はお前を黒の騎士団に連れて行くから、明日は休めよ。急な仕事も無いし、俺も明日は休暇の予定だから」

「イエス、ユアマジエステイ」

「うん、お休み」

ひらひらと手を振るルルーシユはシーツの下でC・Cと体を寄せ合っているようだった。

ジェレミアは深淵怪奇な女性の付き合いというものを理解することを早々に諦めて、自室へと引き上げていった。



机の上に一枚の辞令が落ちている。

辞令にはシュナイゼルの名前が直筆で書かれており、皇族であり宰相でもあるシュナイゼルが宛先の軍人へ最大限の敬意を表していることが読み取れた。

だが辞令の宛先であるスザクは辞令に目をやるでもなく、体を床に投げ出してぼうつと天井を見ていた。

もう数日、何も食べていないような気がする。

そろそろ何か食べないと死ぬかもしれない。

スザクはのろのろと体を起こし、私室に備え付けられている冷蔵庫へと向かった。

中に入っていた適当なカロリー補充剤の詰まった瓶をひつつかんで、ざらざらと掌の腕に広げて口内に押し込む。何の味もしない錠剤を噛んで、ミネラルウォーターで胃に流し込んだ。

もう数日間、錠剤だけで体を保っている。そろそろちゃんとした食事を取らなければ体に深刻な影響を及ぼすことは想像に難くない。次の食事はちゃんと摂取しようとスザクは決めた。

それだけではない。ちゃんと体を動かさなければならぬ。筋肉

が削げると力を失ってしまふ。それにこのままこの部屋で徒に時間を食いつぶしていると、遠からず精神が死ぬだろう。

まだ自分は死ぬわけにはいかない。

顔を洗おうと洗面台に向かうと、鏡の向こうには死人のような顔をした男が呪詛でも吐きそうな表情でこちらを冷ややかに睨み据えていた。

童顔だとよく言われる顔は、今は実年齢より10は年上に見える。それはここ数日の荒んだ生活のせいではなく、世界の全てを憎んでいような暗い表情のせいだった。落ち窪んだ瞳は腐った汚泥のような色をしていた。似合いの色だとスザクは思った。

髭を剃り、顔を洗い、服を着替える。

身綺麗になったスザクは机の上に置かれた辞令を手を取った。

長つたらしい文章の頭部分だけを何度も読む。

O F F I C I A L A N N O U N C E M E N T
I n d e r S u z a k u K U R U R U G I t o t r
a n s f e r t o t h e U n i t e d S t a t e s o f
J a p a n e m b a s s y .

「……ルルーシユやクラスメートの所で、心安らかに過ごせとでも？」

無理な話だ。空虚な笑いが浮かんだ。何を今更。

部署の異動を決定したのはシユナイゼルだろうとスザクは予想し、そしてその予想は当たっていた。

シユナイゼルは、スザクが親友であるルルーシユの傍でギアスに翻弄される事無く心を癒した方が良くと考えて、合衆国日本に新設されたブリタニア大使館へ派遣することにしたのだった。

表向きにはユーフェミアを守ることが出来なかつた失態への処罰として、危険性が高く、誰もやりたがらない任務へ左遷させたと取り繕って。

スザクは、シユナイゼルは騎士がいかなるものか理解していないと肩を竦めた。

ルルーシユも、シユナイゼルも、選任騎士がいかなるものか本質的に理解していないようだった。それもそうだろう。彼らは時代の指導者として君臨する才覚を有する代わりに、他者へ混じりけの無い忠誠心を抱く素養はまるで無い。

「――復讐」

スザクは小さく呟いた。誰に聞かせるわけでもなく、自身の有様を確認するためにスザクはその言葉を何度も繰り返す声にした。復讐、復讐、復讐。脳細胞へ刷り込むように何度も呟く。

主君が死ねば復讐する。それが騎士だとスザクは6年前に教えてもらった。

子供だった自分はその言葉の意味がよく分からなかった。だが今はジェレミアの言葉の意味を、スザクは芯の髓まで理解していた。

主君が死ぬと、騎士には生きる意味が何も無くなる。忠誠心とは魂の根本にあり、主君が死ぬばその向かう先は空虚になり、復讐だけが残る。

さらにスザクにとりユフイはただの主君では無かった。

スザクはユフイを愛していたのだ。自分の人生よりも、日本よりも、彼はユフイを愛していた。

復讐、馬鹿なことだ。スザクの理性はそう分かっていた。ユフイはこんなこと望んでいない。

しかしそれでもスザクはそれを為さなくてはならなかった。でなければ、何故自分はまだ生きているのか？

辞令を手の中で握り潰す。汚泥色の瞳が暗い部屋で瞬いた。

2. 復讐に明日は無い

合衆国日本の国家としての機能は未だ脆弱である。

内閣府は未だ設立しておらず、国内の混乱も治まっていない。日本軍もまだ設立していない。

そのため革命軍であった黒の騎士団は現在、実質的な合衆国日本軍として機能していた。

黒の騎士団は人材も装備も充実しているとはいえ、これまでの敵対勢力への軍事行動とは毛色の違う、国防の仕事が任務の大半を占めることとなったために現場では混乱が多い。ゼロと幹部は定期的に会議を開いて業務内容に不具合が無いか嚴重にチェックしていた。

定例会議に姿を現したゼロは、見慣れないブリタニア人を伴っていた。

ジャーナリストが本業であるデイトハルトとはまた雰囲気の違いで、軍人のように禁欲的な身なりをしている。立ち姿からして隙が無く、その男が会議室に姿を現すなりカレンと藤堂以外の幹部陣は自然と緊張を高めた。

雰囲気張り詰めたことを察しているだろうにゼロは言葉無く着席し、背後にジェレミアを立たせた。その口調は普段と同じく淡泊だった。

「時刻となったので、これより定例会議を始める。まず彼を紹介しよう。彼は今日から私の親衛隊の一員となった、ジェレミア・ゴットバルトだ。今後、私の身辺警護は彼に一任する」

「ふうん、そいつが昨日運び込んだあのでっかいオレンジの操縦者かい？」

「そうだ」

戦場で敵対関係にあつた巨大なKGF、ジークフリートの存在は軍内に知れ渡っている。その操縦者が突然黒の騎士団に入団した、それも精鋭のゼロ親衛隊に。

何か思惑があるのではと疑惑の眼がジェレミアへと集まる。衆目の視線を肌身で感じながらもジェレミアは表情を微塵も変えず、ブリ

タニア人らしい彫りの深い顔を無表情のまま保っていた。

我関せずといった態度に反感を抱いた者も、敵意を向けられながらも崩れない泰然とした態度に感心した者もあり、会議室には一時的に騒めきが満ちた。

しかし技術長官のラクシャータは敵意も好意も顔に上らせず、常の艶っぽい表情のまま煙管から白煙を吐いた。

「ま、私としてはあのジークフリートとかいう機体に触らせてくれれば文句は無いけど。あれ、弄ってもいいのよねえ？」

「あれは生体結合を前提とした機体だから量産には向かんだろう。しかし改良・整備は貴女に頼むこととなる。好きにだけ触ると良い」

「へえ、生体結合……ふうん、あんたサイボーグかい？」

「——ああ。一部ではあるが」

冗談だと思ったのだろう、ラクシャータはきやらきやらと弦楽器のような笑い声を上げた。

扇は戸惑った顔をしながらジェレミアとゼロの顔を交互に見ながらおずおずと口を開いた。

「ゼロ、お前が決めたことなら俺は反対しないが……その男は信用が置けるのか？あの機体の操縦者ってことは、敵だったんだらう？」

「彼は私がゼロを名乗る前からの知り合いだ。ゼロが私であることを知って、ブリタニアを裏切り私の味方になることを決心したらしい。故に彼はゼロ親衛隊に入って貰うが、黒の騎士団の方針に関わることは無い」

「つまりさあ、そのブリタニア男は黒の騎士団のメンバーっていうより、ゼロの個人的なお友達ってこと？」

「どうでもよさそうな心情を隠すことなく告げた朝比奈に、どう返答しているものかルルーシュは一瞬首を捻って曖昧に頷いた。

自分とジェレミアは友達ではない。しかしどういった関係なのかと問われると非常に困る。言葉にできるような類のものではない。

「公私混同しないのであれば問題も無かろう。ゼロは内政の仕事が多くなった分、移動も多くなった。護衛は多い方が良く、気が知れた者の方がより護りやすい。女性の紅月だけでは護衛するのに困難

な場面もあるだろう」

藤堂から援護射撃を貰い、ジェレミアは軽く頭を下げた。

後で説明して貰いたい、という意図を込めて藤堂はゼロを見やり、その意図をルルーシュは正確に察知して小さく頷いた。

「ではジェレミアについては良いとして……次に、皆に報告することがある」

「良い知らせと悪い知らせ、どっちだい？」

「両方だ」

ゼロは机を指先で叩き、自身を落ち着かせようと試みた。

背後のスクリーンにブリタニアから送られてきた文書を映す。

「——神聖ブリタニア帝国宰相、シュナイゼル・エル・ブリタニアが合衆国日本を承認するという旨の連絡をしてきた。そのためブリタニア宰相と合衆国日本の間で会談を設けて欲しいらしい。要求を受けるのならば、来週にはブリタニアと合衆国日本間で、初の会談を開くことになるだろう」

その場にいた全員は言葉を詰まらせ、画面に移された公式文書を視線で焼き尽くすことを試みているかのように見入った。

今や英雄を支えた名将と世界に知られる黒の騎士団幹部ともある者達が、揃って啞然とした表情を隠そうともしない光景に、しかしジェレミアは無理もないと息を吐いた。長年ブリタニアに支配されてきた日本人には予想もしていなかった展開だろう。

神聖ブリタニア帝国が合衆国日本を承認することは、ブリタニア側にはもう日本を侵攻する意思がないことを公に認めたことと同義になる。それは日本だけでなく、その向こうにある中華連邦やインドを併呑することも諦めたことも意味する。

実質的なブリタニアの敗北宣言であり、永遠に続くかと思われた戦争の終結へようやく指先がひつかかったと言える。

「それって、もう戦争が終わるってことじゃあ、」

「ただしっ」

純銀製の鐘のように響くゼロの声は会議室に広がった喜色を切り裂くように響いた。

「シュナイゼルの判断によりブリタニアが合衆国日本を承認することは、そもそもが不可能なことだ。専制国家である神聖ブリタニア帝国においては、皇帝が国政に関する全権限を掌握している。そしてブリタニア皇帝はこの件に関して未だ何の発言もしていない。これは皇帝を蔑ろにしたシュナイゼル宰相の単独暴走とも捉えられる」

「でも宰相が認めたんだろ？ だったらもう戦争は終わりってことでいいじゃねーか！」

楽観的な玉城の発言に、藤堂は苦々し気に顔を顰めた。

「そんな問題ではない。もしこの件を切っ掛けにシュナイゼルと皇帝が争うような事態になれば、我々はシュナイゼルの味方をせざるを得なくなる……」

「ブリタニアの内政に踏み込むのはリスクが高い……でもシュナイゼルが合衆国日本の味方をしてくれるというのなら、リスクを冒す価値があるんじゃないか？」

南の発言にゼロは首を横に振った。

「シュナイゼルが皇帝排斥のための武力を欲して黒の騎士団に近寄ってきたとして、彼の思惑通りに事が成った後まで合衆国日本を容認しておく理由には成り得ない。我々は大掃除を終えた後のボロ雑巾とされる危険性さえある。とはいえ、無視をする訳にもいかない」

ゼロは画面に映し出された公式文書を忌々し気に見上げた。

「——あちらが平和を望むのであれば、受け入れるのが筋だ。銃を向けていない相手に銃を向けてはならない。それは黒の騎士団の理念でもある」

「でもさあゼロ、シュナイゼルがマジで皇帝と事を構える気だったらどうするんだ？」

「我々は内政干渉を行う権利を持たない。シュナイゼルとは友好的関係を築くことになるかもしれないが、彼へと積極的に協力する義務はない」

「でもシュナイゼルが『合衆国日本を亡ぼされなくなかったら俺の味方をしろー！』とか脅迫してきたらどうするんだよ。あいつはコーネリアより強いんだろう？」

朝比奈の沈んだ声色に、ゼロは机上で結んだ両手を軋ませた。その背中からは暗色の覇気が漂っていた。

捕食者に対する本能的な恐怖に似た酷寒が会議室に吹き荒れた。「その時はこの私に喧嘩を売ったことを後悔させてやるまでだ。あの男の掌上で踊ってやるつもりは私には無いし、日本を貢いでやるつもりもない。」

あの男がお綺麗な顔で我々を脅迫した瞬間が、皇帝と黒の騎士団、双方を敵に回す瞬間となるだろうよ」

黒い姿から立ち上る圧倒感に朝比奈は身を竦ませた。

朝比奈はゼロよりも藤堂の方が黒の騎士団の総司令官として相応しいと思っている。

それは藤堂に対する義理や、ゼロが日本人ではないという事実ではなく、ゼロの秘密主義的な思考が朝比奈には受け入れがたいものであったからだだった。

皆がゼロの指揮の下命懸けで戦っているというのに、人種も名前も明かさないうゼロの態度はまるで部下を駒のように扱う傲慢なもののように映る。さらにゼロだけではなくその愛人であるC・C・も来歴が全く知れず、明確なC・Cへの特別扱いは、愛人のC・C・さえ無事であれば他の団員が死んでも眉一つ動かさないだろう酷薄な態度を顕著に示しているようであった。

だがそんな朝比奈でさえ認めざるを得ない程に、ゼロの能力は本物だった。

藤堂が黒の騎士団のトップであったらこんな短期間で合衆国日本の建国は成らなかつたらろう。

そこまで理解できているからこそ、藤堂が今一步ゼロに及ばない現状がどうにも気に食わない。

ゼロがもつと無能であったのなら陰から嘲り笑うことで少しは留飲が下がったものを。

「どうした朝比奈」

「いや、別に」

朝比奈は口元を吊り上げるような笑みを浮かべて肩を竦ませた。

「まあ、ゼロがそう言うならそうすればいいんじゃないかな。トップはゼロなんだから」

ゼロに対して朝比奈が批判的であることは周知されており、皮肉気な口調を誰も咎めはしなかった。

一人ジェレミアだけが、朝比奈の態度に薄っすらとした嘲りの表情を浮かべていた。



ゼロの自室に戻るなりルルーシュは仮面を剥ぎ取った。

部屋にはカレン、C. C.、ジェレミア、そして藤堂がおり、ローテールを囲んでソファに体を沈めていた。ルルーシュもマントと仮面を置いた後にジェレミアとC. C. の間に体を滑り込ませた。

藤堂は視線をジェレミアに注ぎ、過去を思い出そうを首を捻っていた。

「ゼロ、いや、ルルーシュ君。彼は確かか……」

「藤堂は会ったことがあるだろう。俺の騎士のジェレミアだ」

俺の騎士、という言葉を目にしたカレンは歯の根から金属が軋む音のような音を発した。

彼女の方を振り向いたジェレミアは、令嬢然とした可愛らしい顔が嫉妬で覆われているのを目の当たりにし、この少女もルルーシュの魅力の犠牲者かと察した。

良くも悪くもルルーシュは人を惹き付けて止まない。だが彼女の懐に受け入れられるのは至難の業であり、それ相応の資格が必要となる。その資格条件を知っているのはルルーシュしかない。しかしジェレミアには、自分はルルーシュの懐の中でも最も深い場所にいるという眩すぎる自覚があった。

自分がいない間に騎士の代理を務めていた少女へ仄暗い優越感が湧き上がり、ふふんと鼻で笑ってみせる。

試合のゴング代わりにカレンの形の良い眉が跳ね上がった。

「へえ、騎士。騎士ねえ。その騎士様はこれまで一体どちらにいらしたのかしら？ああ、そういえばブラックリベリオンの最中で見かけたような気がするわ。でもルルーシュを殺そうとしていたように見えたのは私の気のせいかしらああ？」

カレンのカウンターは優越感で浮ついていたジエレミアの自尊心を見事ノックアウトした。

破碎された騎士としての自負心と共に、ジエレミアは悲鳴とも呻き声とつかない声を上げて顔を俯かせた。

「ジエレミアが、ルルーシュ君を殺そうと……？」

「色々と事情があったんだよ。気にするな。俺は気にしていない。カレンも、あんまりジエレミアを虐めるのは止めてくれ。自分の意思でどうにもならなかったことを責めるのは騎士として相応しい行為ではないと思わないか？」

宥めるようなゼロの口調にカレンはむくれてぷい、と顔を逸らす。

ジエレミアは痛む胸を押さえながらも藤堂に向き直った。

「し、失礼した。諸事情あり、これまでルルーシュ様のお傍にいられなかったのだ。今後はゼロの親衛隊の一員として黒の騎士団に加わらせて頂く」

「ゼロがそう決定したのなら私に否やは無い。そもそもルルーシュ君がゼロであるのなら、選任騎士である貴公がいないという方がおかしい話だ。今後はよろしく頼む」

儀礼的な返事を返す藤堂の厳めしい顔は、良くも悪くも6年前とも変わっていないように見えた。

上からの命令へ忠実に従い、それ以上のことをしない。

ジエレミアから見て藤堂は確かにゼロの良い部下として映ったが、それ以上に成り得るとはとても思えなかった。まだ藤堂よりカレンの方が自立性が高く、覇気がある。カレンの若さもあるだろうが、日本人とブリタニア人のハーフという立場がカレンの精神を強く育んだのだろう。

ルルーシュの次の発言を知っているからこそジエレミアは藤堂へ同情の目を向けた。過分な職責程に、藤堂のような真面目な人間を追

いつめるものは無い。

「それでルルーシユ君、私を呼んだのは……」

「分かっているだろう、俺の次のゼロについての話だ。シュナイゼルと協力することになるにせよ、このまま中立を保つにせよ、ゼロが皇族であるという事実は黒の騎士団にとり不利だ」

その話は藤堂の予想していたものと寸分違わなかった。

だとすればこの話の結末も藤堂の予想していたものかもしれない。額から冷汗が零れるのを感じながら、藤堂は冷然とした表情を崩さないルルーシユへと声を荒げた。

「しかし発覚さえしなければ問題は無いだろう。君以外の者にゼロが務まるとは思えない……」

「もうシュナイゼルは俺がゼロだと知っている。ブリタニアにとつても反ブリタニアの旗手が皇族であることは、皇帝玉座が脅かされるリスクを高める要因となりえるから、そうそう簡単に報じたりはしないだろうが……しかしシュナイゼルが本気で皇帝に反旗を翻すつもりであるのならば、私をネタに黒の騎士団を脅迫してもおかしくはない。ゼロが皇族だとバラされたくなければ自分に協力しろ、とな」

「だがそれを言えばシュナイゼルも自分の首を絞めることになる。ゼロがルルーシユ君だと世間が知れば、君をブリタニア皇帝に勧める声は小さくないだろう」

「あいつは俺が皇帝になっても気にしないだろうよ。むしろ人の陰に立って世界を操ることを好む男だ。ゼロが皇族であると発覚して黒の騎士団の存在意義が瓦解しても、俺が皇帝となってシャルルを追放することになっても、黒の騎士団がシュナイゼルに全面的な協力を結ばざるを得なくなっても、あいつには利益しかない。早めに無用な芽は摘んでおくに限る。だが……」

ルルーシユは不満げに鼻を鳴らした。

「お前の言う通り、未だ不安定な合衆国日本を俺がここで放り出す訳にもいかん。ひとまず内閣府が安定するまでは俺がゼロを務めよう。だがその後は俺以外の者がゼロとなった方が良い。そして俺の次のゼロだが、」

董色の瞳が藤堂のそれと交わった。冷汗が頬を伝い、顎から零れ落ちる感覚が妙にゆったりと感じられた。

藤堂は自分の最悪の予想が当たってしまったことを確信した。

「藤堂、貴公に頼みたい。全ての弱者の味方として、世界の理不尽へと叛逆の狼煙を上げる、英雄ゼロとなってくれ。今の段階においてそれができるのは貴公しかない」

奇跡の名よりも、ゼロの名はさらに重いのではないか。

藤堂は身震いし、ぶんぶんと首を横に振った。とんでもないことだ。

藤堂は聡明であり、自身の能力をわきまえていた。あくまで自分は軍人でしかなく、その範疇から抜け出せる器量を持たないことも察していた。戦術レベルに終始する軍司令官ならともかく、戦略眼が何よりも必要となるゼロを自分が務められる筈が無い。

ルルーシュは俯く藤堂を窺めるように告げた。

「俺がゼロを辞める頃には、ゼロは単なる平和のアイコンになっているだろう。お前は戦争が完全に終結するまで、戦術レベルでの勝利を積み重ねてくれればいい。戦争が終わればもうゼロも必要がなくなる。長く見積もってもあと3年はかからんだろう」

「その3年の間にどれだけの人間が軍人になり、どれだけの人間が戦場に向かい、どれだけの人間が死ぬと思っているんだ……っ、ルルーシュ君、私は君のように聡明な人間ではない。だが器量にすぐわない権力を得ることがどれだけ愚かな事か知っているつもりだ。私はその役目を受けることはできない。そこまで愚昧な人間に成り下がることは、私にはできない……」

「では探せ。藤堂、俺の代わりにゼロと成り得る人間を探し、俺の前に連れてこい。出来なければお前がゼロになるんだ。シユナイゼルとの会談が今週中に迫っている以上、時間の猶予はあまり無いぞ」
どうしてこうなってしまったのか。

藤堂は膝の上で拳を握り締めながら、ゼロの代わりに成り得る人間を脳裏で探した。自分も含めて、実力と才覚のある人物を端から端まで吟味し尽くした。

だがその誰もがルルーシユという輝きの前では色褪せた小石のようにはしか見えなかった。



合衆国日本に新設されたブリタニア大使館の職員として、スザクは合衆国日本へと向かった。会談のため訪日することになったシユナイゼルの護衛も兼ねており、そのいで立ちは軍人のそれと変わらな

い。

到着した飛行機の窓から遠目に富士山が見えて目を細める。

タラップを降りて、スザクはシユナイゼルと共にそのまま車に乗り込んだ。柔らかいクッションの後部座席に体を沈める。

カノンは助手席に座り、張り詰めた背後の空気にちらちらと視線を向けた。感情の欠片さえ表情に出そうとしないスザクへシユナイゼルはどう対応すれば良いのか分からず、手を拱いているようだった。

「枢木卿、疲れていないかい？」

「はい」

「……君が私の護衛なのは会談予定のホテルに到着するまでだ。あくまで大使館職員として配属されてきたのだから、君には私と同行する義務は無いのだからね。トウキョウに到着した後は好きにきなさい。勤務は来週からだから、それまではゆっくりするといい。アツシユフォード学園に再入学したいならそう手配しよう」

「はい。お気遣いありがとうございます」

「……………その、何か必要なものでもあれば、」

「殿下」

スザクの目は全ての温度を失っていた。復讐のため旅立ったコネリアとはまた違う色合いであった。その口調には感情の起伏らしきものは全く見受けられず、地面を這うように響いていた。

「私程度の者に殿下が配慮なさる必要などございませぬ。神聖ブリタ

ニア帝国と合衆国日本の行方は今、殿下の双肩に掛かっていらつしやるのです。殿下ともあろうお方が小官のために宸襟を悩ますなど、光栄ではありませんが帝国の在り様に忝りましょう」

「……………君が心配なんだよ」

シユナイゼルの言葉にスザクは眉を顰め、「いらぬ心配です」と返答して口を閉じた。

それきり木石のように佇み続けるスザクの対応は自分の手に余ると察し、シユナイゼルはルルーシユに全て任せることに決めた。スザクは友人であるルルーシユにそれなりに心を開いている様子であったし、人心掌握に長けるルルーシユならば少なくとも自分より上手い対応を取るだろう。ここで余計に話しかけて、さらに頑なな態度を取られては敵わない。

車はそのままトウキョウに到着し、スザクはシユナイゼルと別れて真っすぐにクラブハウスへと向かった。だがそれはシユナイゼルの目論見通りにルルーシユやナナリーと会うためではない。

むしろ二度と自分は彼らに近づかない方が良いだろうとスザクは思っていた。日本を取り戻し、戸籍を手に入れ、ジェレミアを取り戻したルルーシユにはこれ以上戦う必要は無い。

ルルーシユは長い戦いの末、ようやく安寧を手にする機会を得たのだ。その彼女に自分が接触すると、無用な戦いに巻き込んでしまう可能性がある。

スザクがクラブハウスに向かった理由はルルーシユやナナリーとは別にあつた。

あの女はルルーシユの傍にいる。恐らくはクラブハウスにいるだろう。クラブハウスにいなければ政庁か、斑鳩にいるかもしれない。そうなれば厄介である。

クラブハウスの扉をノックするとルルーシユが顔を出した。ルルーシユは最後に会った時よりも肌に色味が加わり、人間らしい柔らかな雰囲気醸し出していた。剥き出しにされていた警戒心や敵意

が皮膚の後ろに隠され、代わりに生来の苛烈さと甘やかさが入り混じった複雑な人間性が瞳の奥で瞬いている。

元から並外れて整った容姿であったが、今や神々しきささえあった。スザクの姿を視界に入れたものの、ルルーシユはそれが一瞬誰なのか分からず怪訝な顔をした。だがスザクのアジア人にしては淡い特徴的な色彩に瞠目した。

「す、スザ、」

「ルルーシユ、久しぶり」

久しぶりに顔を合わせたスザクの顔に、ルルーシユは二の句が継げなかった。

若く生き生きとしていたスザクと今のスザクは、顔の造り自体は変わらない。しかし今のスザクはルルーシユの知る優しいスザクと同一人物とはとても思えなかった。

濃い肌色は土気色に変色し、薄く引き締まっている唇には紫斑がまだら状に浮かんでいる。特に変化しているのは瞳だ。大粒の翡翠のように澄んでいた碧眼は、今や淀んだ川底のように濁っており、見ていると背筋が粟立つような忌避感呼び起こした。

ルルーシユは内心の動揺を顔に出さないよう奥歯を噛みしめながら、なんともなさげに笑みを浮かべた。

「——ああ、久しぶりだなスザク。聞いたよ、大使館に左遷させられたんだって？ 災難だったな」

「うん、でもしようがないよ。主君を護れなかったんだから……ねえ、入ってもいいかな？」

「勿論だ。紅茶でも淹れよう、いい茶葉が入ったんだ」

「ありがとう」

スザクは彼女を探すため寸断なく眼球を動かしながら、クラブハウスへと足を踏み入れた。

ルルーシユと共にリビングへの扉を開ける。

暖かい空気がリビングから流れ込んできた。風に混じって花の匂いがする。夕暮れ時の赤い日の光が部屋に差し込んでいた。

部屋の中を見回すと、ソファの背もたれに隠れて栗色の髪を持つ少

女が座っていた。

「……ナナリー」

小さなスザクの眩きにナナリーは振り返った。ナナリーの眼は開け放たれていた。ルルーシユよりも青味の強い紫色がスザクの方へと向く。瞳が開くとナナリーの印象は一気に大人びたものになった。大輪の花を思わせるような華やかな容姿は、ナナリーが少女から女性へと成長している証のようだった。

初めてナナリーの瞳を目の当たりにして、スザクは全身が打ち震えるのを感じた。

ナナリーの目が見えるようになったことへの驚きだけではない。ナナリーの瞳の色はユーフェミアのそれとあまりにもよく似ていた。高貴で純粹な、無垢な瞳——

これから先の人生で二度と見ることは無いだろうと思っていた美しい瞳に、スザクはまるで自身が咎められているような気がして目を伏せた。

「……まさか、あの、スザクさん？」

「うん。そうだよナナリー」

「ス、スザクさん、スザクさん！お久しぶりです！」

目の開かれたナナリーは花の精のように愛らしい風貌をしていた。コーネリアより余程ユフィに似ている。

スザクは頬を無理やり吊り上げて笑みの形を作りながらナナリーに近寄り、跪いて両手を握った。

「目が見えるようになったんだね」

「はい……はいっ、スザクさんは6年前とちつとも変わってませんね。髪がくるくるしていて、瞳の色も綺麗な碧色で、お顔も優しくて、」「ありがとうナナリー。僕も君の瞳がこんなに綺麗な色をしているだなんて知らなかったよ」

間近で見る年上の幼馴染の微笑みと、あまりに真つすぐな誉め言葉に、ナナリーはかっとならに血を集めた。

スザクとユフィが思い合っていたということ、ナナリーは薄々気づいていた。テレビから聞こえてきた2人の声には騎士と主君以上

の好意が込められていたし、遊びに来たスザクがユファイについて話す時の声には滲み出るような恋情が秘められていた。

しかしそれでも、と心の端で思ってしまう。だつて、ユファイは死んだのだ。

そんな自分が情けなく、浅ましいと思いつつも、ナナリーは握られたスザクの手を強く握り返した。

「スザク、時間があるなら夕食と一緒に食べないか？今日は咲世子さんと一緒に俺とナナリーが作るんだ。丁度和食にしようと思つていたんだよ」

「いいの？じゃあお邪魔しようかな」

「邪魔だなんて、スザクさんが一緒に食べて下さつてくれるなら嬉しいです」

「僕もナナリーが作るごはんが食べられるなんて嬉しいよ。でも怪我はしないように気を付けてね」

「はい。でも料理をするのは初めてなので……味に期待はしないで下さいね」

頬を赤らめるナナリーの頭を撫でて、スザクは音も無く立ち上がりルルーシユの方を振り返った。

「ごめんルルーシユ、ちよつとお手洗い借りてもいいかな」

「ああ。場所は分かるか？」
「うん」

「ちゃんと手を洗えよ。これから食事なんだからな」
「分かつてるよ、もう」

スザクは苦笑しながら手を振ってリビングを出た。その瞬間に浮かべていた微笑みが消失する。

五感を研ぎ澄ますと、人の気配が5つ感じられた。ルルーシユとナナリーの他に3つ。キッチンに猫のように身軽な気配がある。メイドの咲世子だろう。そして軍人特有の体捌きをする男が1階に一つ。これはジェレミアだ。

そしてもう一人。

スザクは気配を殺して2階に上がった。その気配はルルーシユの

私室にあった。

扉を開けると整然とした部屋の中で、新緑色の長い髪をした美女がベッドに寝そべっていた。部屋の主の潔癖性を表すように塵一つなく整えられた部屋の中で、その女性の周囲にだけゴミが散乱している。しかしそのことを気にする様子も無くC・C・は顔をチーズで汚しながらピザを頬張っていた。

C・C・は扉を開ける音に振り向き、面倒臭そうに眉根を顰めた。「なんだ、枢木スザクか。ルルーシュならここにはおらんぞ」

「お前がコード保持者だな」

背筋が凍り付くような敵意が満たされた、臓腑の底を這うような声だった。その場にいたのがC・C・でなければ恐怖のあまり泣きわめいたかもしれない声色をしていた。

しかしC・C・はほんの少し顔を顰めただけで、全ての感情を削ぎ落したようなスザクを静かに見上げた。

スザクは部屋に入り、後ろ手に扉を閉めた。

そのままスザクは怪訝な顔をするC・C・に大股で近寄り、細い腕を掴んで捻り上げた。

ピザがシートの上に落ちる。C・C・の腕は掌が容易に回る程に細く、軽く握り締めるだけで赤褐色に鬱血した。

そのまま柔肌に爪を立てる。腕に筋が浮く程の力を籠めると、肌が裂けて血が滴った。爪先が肉に埋まる生暖かい感触がする。赤い雫が腕を伝って白いシートを汚した。

「おい、何を」

「貴様のせいでギアスがばらまかれているそうだな。ユファイはギアス嚮団のせいで殺されたんだ。お前が無関係だったとは言わせない」

「私はユーフェミアの一件に関りはない。そもそもどうしてお前は私にコードを持っていると思うんだ。私が誰かにギアスを渡したところを見たとも言うのか？」

「頭」

コツコツ、とスザクはC・C・の頭蓋をつついた。頭蓋骨が指の一本で軋むような音を立てた。

欠片程の温度も無いスザクの瞳に見据えられ、C・C・は喉を引き
攣らせるような笑みを零した。

この少年は化け物だ。ルルーシュも相当だが、彼女とはまた方向性
が違う。

500年もの時を生きっていると、異様な程に突出した才能を持つ人
間を目にする機会が幾度かあった。カレン、スザク、ルルーシュ、そ
してシュナイゼル。彼らと同等の豊かな才覚を持つ人間も少なから
ず存在した。

だが戦争に特化した才覚を持つ人間が、同時代にここまで多く存在
したことはこの500年無かった。

これは集合無意識によるもののだろうか。時代を次のステージ
に移すため、才覚のある人間を同時期に産み落としたのか。

それともリアンヌとシャルルの計画に対抗するため、それに相応
しい人間を用意していたのだろうか。

ならば集合無意識は、リアンヌとシャルルの計画を受け入れる気
は無いのだろうか——

薄ぼんやりとした顔つきでどこか遠い所を見据えているC・C。
に、スザクは意識を取り戻させるべく骨に罅が入る程の力を籠める。

鉄線が振れるような音と、焼けた鉄串に突き刺されるような痛みに
C・C・は唇を噛んだ。目の焦点がスザクに合わさる。

「おい坊や。女性へはもっと紳士に振る舞うものだぞと教わらなかつた
か？」

「ブラックリベリオンでお前はジェレミアさんに頭蓋を吹き飛ばされ
た。だというのに脳を露出して、どう見ても致死量の血を流しながら
も普通に立って喋っていた。そして今も生きている」

スザクはぱ、とC・C・の腕から手を離れた。爪の形に抉れていた
肉が急速に修復される。

時間の流れを拒絶するかののように肉体が元の形に戻るのをその眼
で確認し、スザクはC・C・の首に手をかけた。徐々に手に力を込め
ていく。柔らかい気管の存在を親指の付け根に感じた。抗議するよ
うに動脈が波打つ感触が指の腹を押し上げる。

「……ギアスはコードを所有する人物が与えることができる。ギアス嚮団の嚮主は代々コード保持者が務める。そしてコードの所有者は不死身だそうだな」

「その、情報を、がはっ、どこでっ」

「シユナイゼル殿下からだ。殿下は心優しくなり過ぎた。あの人はユフィと、そして多くのギアス嚮団の犠牲者のために情報収集を行い、ギアス嚮団と戦う準備を進めている——だがそんなことはどうでもいいだろう？」

スザクは片腕でC・Cの首を絞めたまま吊り上げた。白い足が白い顔面が赤黒く染まる。眼球が飛び出んばかりに見開かれ、空気を飲み込もうと舌が犬のように飛び出した。

指でがりがりと腕を引っ搔かれながらも、しかしスザクの強靱な腕は微塵も揺るがず、能面のような表情も変わらなかった。

「不死身でも痛みはある筈だ。意識を保ったまま四肢を切り落とされたくないのならば、ギアス嚮団について知っていることを全て喋れ。本拠地はどこにある。構成員は何人だ。どんな研究をしているんだ。そもそもギアスとは何なんだ。貴様らの目的は。ルルーシユやジェレミアさんを弄んで、ユフィを殺して、そこまでして果たしたい貴様らの目的とは——」

その瞬間に背筋が粟立つような敵意を感じ、は、とスザクは腕を離して横に飛びずさった。

扉が開け放たれ、長身の男が部屋に乱入する。

ジェレミアの足がスザクの服を掠めて宙を切った。

そのままジェレミアは前に足を踏み出し、スザクの胸元目掛けて腕を伸ばす。だがスザクはジェレミアの服の袖を捕まて床に引き落とす。ジェレミアの重心が崩れる。

その隙を突いてスザクはジェレミアの腹部目掛けて足を振り上げたが、機械の左手が膝を受け止めてそのまま横に逸らされた。

スザクは咄嗟に服の袖から手を離し、背後へと下がった。息を整える。

このまま戦えば、かなりの確率で勝てるだろう。短いやり取りの中

で、スザクは白兵戦において自分がジェレミアに僅かながら勝っていることを察した。だが手加減できるような相手ではない。

このまま本気で戦うと殺してしまう恐れがあった。ルルーシユの選任騎士であり、昔からの知人である彼を殺してしまうことは、スザクにとり望ましい事では無かった。

状況からしてみれば場違いなほどに冷静な声でジェレミアはスザクに問いかけた。

「スザク君、君は何をしているんだ」

「それはこちらのセリフです。コード所有者を匿つて、あなたもルルーシユも一体何のつもりなんですか。彼女がギアス嚮団と関わりがあることは間違いないでしょうに。持っている情報を全て引き出させるべきです。どんな手段を使つても……！」

「彼女はルルーシユ様の共犯者であり、捕虜でも敵でもない。礼を失する行動をとるべきではない。それに黒の騎士団が設立されてからC・C・はルルーシユ様のお傍にいる。ギアス嚮団と繋がりが無い事は確かだ」

「黒の騎士団が設立される前はどうなんですか。それにルルーシユの目を盗んで行動していた可能性だってある。あなたもルルーシユもギアス嚮団の犠牲者なのに、どうしてコードを持つその女を庇うんですか！」

「——止めろ、スザク」

声の元をたどり瞳だけを動かすと、扉の前にルルーシユが立っていた。冷ややかな表情はこれまでスザクに向けられたことの無い、ほんの僅かばかりの敵意を含んでいた。

肌を刺すような冷徹なルルーシユの瞳に見据えられてスザクは一瞬怯んだものの、しかしすぐに睨み返す。

ジェレミアは咄嗟にルルーシユの前に盾となるべく立ち塞がったが、ルルーシユは宥めるようにジェレミアの背を叩いた。

「C・C・は俺の共犯者だ。彼女が俺に協力する代わりに、俺は彼女の望みを叶えると約束した。C・C・の過去は関係ない」

「僕には関係がある。僕はもう復讐のために手段は問わない。問わな

いことに決めた。この女がギアス嚮団に関わりがあるというのなら、生皮を剥いでも必ず口を割らせてやる」

「復讐は免罪符に成り得るものじゃないんだ。そんなことをしていいとも思っているのか。スザク、お前はそんな奴じゃないだろう。お前は——」

「っ、君がそれを言うのか!! よりにもよって、君が!! 復讐のためにゼロとなって戦争を起こして、何千何万と人を殺した、君がそれを言うのか……!!」

ぶるぶると全身を震わせて、スザクは汚泥色の瞳を閃かせた。

ルルーシュはスザクの言葉に眉根一つ動かすことなくC・Cへと歩み寄った。

C・Cは床に倒れて荒い呼吸を繰り返していた。肌には滞留した血液のせいでまだら模様が浮かんでいたが、見る間に元の美しい白い肌へと戻って行く。

特に問題なく体が回復していることを確認し、ルルーシュはC・Cを庇うように立った。眼には先ほどまでの敵意は無く、むしろ憐れみの色を濃くしていた。ルルーシュはスザクへと手を伸ばした。

「……俺もユフィのことは許せない。それにジエレミアもギアス嚮団のせいで酷い目に遭った。だから協力しよう。シュナイゼルもギアス嚮団へ思うところはある筈だ。黒の騎士団と、シュナイゼルと、俺とお前が協力すればできないことは無い。そうだろうか?」

スザクは差し伸べられた手のひらを見た。

女性特有の、柔らかい脂肪が骨を包み込む甘やかな造りをしている手だ。KMFの操縦桿を握り締めて、鉄火の中を飛び回るに向いているとはとても思えない手だ。

スザクはルルーシュに背を向けた。

「——その手はシュナイゼル殿下と結ぶべきだ。僕じゃない」

ルルーシュは手を握り締めて、声を張り上げた。

「スザク!」

「何だ」

振り向かないまま、スザクは凍り付いた声で応答した。

これまで聞いたことの無いスザクの声にルルーシユは首を振り、喉から声を絞り出した。

「今のお前を一人にしてはおけない。止めるんだ。復讐をお前ひとりですす必要は無いじゃないか。俺はお前の友達だ。出来る限りの協力はする。だから——」

「——君はジェレミアさんの復讐をすると決めて、そのことを僕に話した？」

スザクは片目でC・C.とジェレミアに囲まれたルルーシユを見やった。

「それが答えだ。さようならルルーシユ」

踵を返し、スザクはそのまま部屋を出て行った。

こうなつてはC・C.を尋問することは難しくなるだろう。

他にギアスの手がかりと言えば、各地に散在する遺跡だろうか。日本にもギアスに関する遺跡があった筈だ。神根島と言ったか。

枢木家に何か手がかりでも残っていないだろうか。枢木は古い家だ。遺跡についての記録があるかもしれない。

一度枢木家に帰ってみようと思ひ、スザクは拳を強く握りしめた。

スザクの足音が階下へ降りた後も、ナナリーは壁の陰に隠れて耳を澄ませていた。

人並外れて優れた聴力は目が見えるようになった後も健在で、スザクの微かな足音がクラブハウスを出ていく音までをも明瞭に拾っていた。しかしナナリーはスザクの後を追うことはなく、ただ聞こえた情報を受け止めることができずに体を震わせるばかりであった。

「——お兄様が、ゼロ……？？？そんな、そんなことって、嘘……嘘、ですよね——？」

ナナリーの問いに答える声は無かった。

3. そうだ。俺達は嘘つきだからな

合衆国日本承認の式典は、拍子抜けするほどあっさりと終了した。全世界に放映されながら、シュナイゼルの優雅な指先は書類へのサインを終えた。そのままゼロへとその紙を差し出した。

受け取ったゼロは書類の内容を淡々と読み上げた。

皇帝に政治の全権が委任されているブリタニア宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアの名において、合衆国日本の存在が神聖ブリタニア帝国に承認されたことが全人類へと通達される。

神聖ブリタニア帝国にとっては寝耳に水のことであり、本国ではシュナイゼル以外の皇族が発狂寸前まで混乱していたが、当のシュナイゼルはにこにここと柔らかな笑みを浮かべてメディアに向けてその美貌を晒している。

まさか、本当にこいつの性根は穏やかな青年のような容姿と同じ純粹なもののだろうか。

ぞつとしない想像にルルーシュは仮面の下で鳥肌を立てた。

仮面の下で若干の怯えも混ざった表情を浮かばせながら、しかし毅然とした動作でゼロはシュナイゼルに手を差し出した。躊躇なくシュナイゼルはその手を取る。

「ゼロ、色々あったけれど、これから先私は是非友好的な関係を日本と築いていきたいと思っている。これがその第一歩になれば私は嬉しい」

「……………はい、私もそう思います。神聖ブリタニア帝国が剣でなく言葉で交渉を望むというのならば、合衆国日本は神聖ブリタニア帝国の良き友となれるでしょう」

人好きのする笑みを浮かべたシュナイゼルは、ゼロの言葉に顔を明るくして、「そうなることを、私は心から望んでいるよ」と呟いた。

ルルーシュは鳥肌を抑える我慢の限界に達し、失礼に見えない最低限度の速度で手を離れた。

式典の後、シュナイゼルは宛がわれたホテルの一室でソファに身を沈めていた。

最高級の一室はホテル一階分の敷地面積とほぼ同等の広さを誇っており、復興の最中にある日本を一望することができる。小ささまざまな灯が飾るトウキョウの夜景は幻想的で見ごたえがあつた。

だがその部屋にいる面々は夜景を見下ろすこともなく、部屋の中心で対面するシュナイゼルとルルーシュに視線を注いでいる。嘆息を禁じ得ない美貌の兄妹が向かい合っている光景は、華麗な絵画の一幅を思わせた。

部屋にはシュナイゼルと仮面を脱いだルルーシュの他、C・C、カレン、ジェレミア、カノン、そしてロイドがいる。シュナイゼルがルルーシュを自室に呼び、その警護としてジェレミアとカレンが同行し、ギアスに関する話だろうと予測を付けたルルーシュがC・Cも呼び寄せたのだった。

シュナイゼルの前にはルルーシュが深々とソファに腰かけており、その左右にカレンとジェレミアが護衛のため立っている。ルルーシュは足を組み、困つたような、しかし日向のように無邪気な微笑みを浮かべる兄を精一杯見下ろそうと背中を反らしていた。

「兄上、あなたはどうしたんですか。人非人の冷血漢はどこに行つたんですか。変なものでも食べたのですか。頭のネジが100本程緩んでいるのではないですか。ロイドに一度メンテナンスして貰った方が良いのではないのですか」

「ルルーシュ殿下あ、僕にもコレを直すのは至難の業だよ。改造しろって言うなら話は別だけどさあ」

「止めてくれロイド。君が言うとお洒落にならない」

「大丈夫ですシュナイゼル殿下。改造は長いようで意外とあつという間に終わりますから。多少理性と記憶は吹き飛びますが運が良ければ戻ります」

「君が言っても洒落にならないから止めてくれ……ところでジェレミア卿。左半身が機械化したと聞いたけれど、ロケットパンチとかできるのかい？」

「できません」

「じゃあ目からレーザーが出たりとかは？ジャパンアニメではレーザーとロケットパンチはサイボーグの定番なんだろう？」

「出ません。さらに言うなら自爆機能もありませんからね。ギアスキャンセラー以外に変な機能は付随していませんから。多分」
「多分？」

「私もまだ自分の体がどうなっているのか完璧には分かっておりませんので。確認されているのはKGFへの神経伝位接続システムと、赤外線センサー程度です」

「兄上、ジェレミアをそんなにキラキラした眼で見ないでください。気持ち悪い」

不快さを前面に押し出した董色の瞳がシュナイゼルに突き刺さる。

シュナイゼルはわたわたと両手を振りながら額に汗をかいた。

「ち、違うよルルーシュ。別にジェレミア卿をどうこうしようとかじゃなくて、サイボーグを実際に見たのが初めてだから、つい好奇心が……」

「あげませんよ」

ルルーシュはジェレミアの服の袖を引っ張って身を寄せた。

妙なところで独占欲が強いお人だと、ジェレミアはつい緩みそうになる唇を無理やり真一文字に引き結んだ。

「いや、本当に……何が目的なんですか。合衆国日本の承認をするあなたの利益は無いに等しい。ブリタニア本国ではあなたを宰相としての座から引きずり落とす算段でもされているでしょうよ。今やあなたは自国の領土を切り落とした売国奴なのですから」

じとりとねめつけるような瞳で睨まれたシュナイゼルは頬を引き攣らせた。

自分の過去の所業は記憶に残っているものの、ここまで実妹に嫌われているとは思わなかった。いや、嫌われているというより、人間性を疑われていると言った方が近いのだろうか。

「……私は戦争を終わらせたいんだよ。そしてギアス嚮団を壊滅させて、ブリタニアの悪しき流れを断ち切りたいんだ。裏表なく、本当に

私はそう願っているだけなんだよ」

「あなたの言葉を額面通りに信じられるほど俺が馬鹿だと思えますか？」

「私の言葉が信じられないのなら、君が私にかけてギアスを信じて貰えないかな」

「俺があなたにかけてギアスは、感情を取り戻せ、です。元々のあなたの性格がそれだなんて、信憑性が無いにも程がある」

「…………私の人間性って、そこまで信頼度が低かったかな」

地面に沈むようなシュナイゼルの言葉に、その場にいた面々は即座に頷いた。

「ああ」

「はい」

「ええ」

「そうですね〜」

「…………申し訳ございません殿下」

一人カノンだけが黙って首を横に振った。

ソファに寝そべっていたC・C.がおい、と声をかける。

「いつまで下らんことを話しているんだ。その白いキラキラ野郎はルルーシュに何か話があるんじゃないのか？」

「白いキラキラ野郎…………」

「まあ、間違っってはいませんわよね」

ギリシャ彫刻にも似た美貌を誇るシュナイゼルは確かに、周囲に光が舞っていかのような輝かしい美貌を誇っている。感情を取り戻し、表情豊かになった後はさらに人間らしい温かみも加わり、どこか神聖な存在感さえ放っていた。

シュナイゼルは自身の人間性を罵倒された悲しみからその美しい顔をしょんもりと俯かせて、端末を起動させた。ディスプレイが壁に表示される。画面は世界地図を映していた。

「…………ユフィが中国で見つかったから、ギアス嚮団の跡地に残っていた情報を解析してみたんだ。どうやら嚮団は世界中の遺跡を調査、発掘しているらしいね。そして確認されているだけでも全世界に13

か所以上の遺跡が見つかったている」

「何を調査しているんだ？」

「分からない。ただ各遺跡には扉の形状をした石板があつて、それを特に調査しているらしい。見かけ上はただの石板なんだが、ギアス保
持者やコード保持者が向かうと何か反応があるかもしれない、と思う
んだが……」

シユナイゼルはちらとルルーシュとC・C・を見やり、ルルーシュ
は得心して頷いた。

「分かった。俺のギアスを使つてみよう」

ギアス、と聞いてカレンがぱちりと目を開いてルルーシュを見た。

この場でギアスについて知識が無いのはカレンだけだ。ロイドと
カノンは何も反応していないところから、シユナイゼルが話をしたの
だろう。

好奇心で目を閃かせたカレンに、ルルーシュは息を吐いた。

ここまで首をつつこんだ以上、カレンには知る権利がある。だがこ
れはブリタニアの問題であり、黒の騎士団であるカレンが関わつたと
しても彼女にとって不利益にしか成り得ない。

無論その程度の理由でカレンが引き下がるとはルルーシュも思っ
てはいないのだが。

「カレン、ギアスについて知りたいか？」

「……ええ。あなたは知る必要は無いつて言うでしょうけど」

「ああ、そうだ。ギアスに関する問題はブリタニア皇族の問題だ。ゼ
ロの問題ではない。ゼロの親衛隊隊長である君にとっては不要な、む
しろ知らない方が良い情報だろう。知れば今後、ブリタニアの問題に
巻き込まれる可能性さえある」

「——そうね。でも、ルルーシュは私の友達だもの」

カレンは腕を組んで直つすぐにルルーシュを見据えた。

悪戯めいた表情でカレンはにやりと笑った。

「ルルーシュが巻き込まれてるっていうのなら、アツシユフォード学
園生徒会代表としてカレン・シユタツトフェルトも一緒に巻き込まれ
てあげるわ。あだし、あなたの力になれると思うのだけど。人手はい

くらあつても困らないでしょ?」

「——馬鹿だな、カレンは」

こう答えると知っていて、カレンを護衛として連れてきたのだから自分も相当だが。自嘲の笑みが零れる。自分の騎士はジェレミアだが、ゼロの騎士はカレンであり、そして貴重な友人だった。

できればカレンには、これから先も傍にいて欲しかったのだ。友人として。

カレンは胸を張り堂々と言い放った。

「アツシユフォード生徒会はパワフル・ダイナミック・エネルギーがモットーの、走り出したら止まらない暴走車を目指しているの!馬鹿なんて承知の上。ここで引き下がるなんて女が廢る!って、ミレイ会長なら言うでしょ?」

「分かった」

ジェレミア、と声をかける。

はい、という返事と同時にジェレミアの左目から青い光が一瞬点滅した。

シユナイゼルは思わず体をのけぞらせて、その光から離れようと身を振った。ジェレミアもカレン以外がギアスキャンセラーの範囲内に入らないよう注意はしていたが、水底に陽光が反射するような鮮烈な光はキャンセラーの範囲外の者にもはつきりと見えた。

カレンは一瞬瞳を赤くして、呆けた。その後ぶるぶると頭を振る。

「……あれ?ええと、今のは……あたしが初めてルルーシユと会った時の、」

「そうだ。あの時俺はカレンにギアスをかけた。俺の質問に答えろ、とな」

「——うん。それであたしはルルーシユの質問に……へえ、便利ね」
背筋に寒気を走らせながらカレンはなんともなさそうな顔を取り繕った。だが額に滲む冷汗だけは隠しようも無かった。

これがギアスカ。自由意思をいとも簡単に奪い、支配下に置き、記憶さえ消失させる。

もしこの力を持っているのがルルーシユでなければ、どんな悪用が

なされるのか想像するだけで恐ろしい。ブリタニアという大国が現在進行形でギアスの研究しており、ギアスの所持者はまだ複数人いるだろうという予測も恐怖を助長させた。

「それで、今その、ギアスが消えたのは」

「ジェレミアの力だ。ギアス嚮団に連れ去られて改造されて……副産物のようなものさ」

「私には使わないよう気を付けて欲しいね」

シュナイゼルが真剣みを帯びた瞳でジェレミアの閉ざされた左目を見やった。

ルルーシユは、ギアスキャンセラーを使えば元の胡散臭い似非貴公子に戻るのだと思うと、この薄気味悪い純朴な青年にキャンセラーを使つてしまいたい衝動に駆られたが、合衆国日本承認の調印を無効にされないためにも耐えた。

カレンは突如記憶が戻った衝撃が過ぎ去り、今度は興味深そうにルルーシユを見やる。

「それで、このギアスの能力を人にあげることができなのがコードな訳よね？」

「そうだ。そしてコードの保持者は不老不死でもある。ギアスとコードを研究しているのがギアス嚮団であり、ブリタニア皇族はギアス嚮団のモルモットだ……俺もユフィも、そこにいるシュナイゼルもな」

「失敗作だったけどね」

ひらひらと手を振るシュナイゼルは苦笑を浮かべていた。

カレンは以前の、日本との開戦の鯉口を切った頃のシュナイゼルがギアスを手に入れた場合を想像をして全身を強張らせた。

なんて恐ろしい仮定だろうか。日本は独立を果たすどころか、完全に滅亡していたかもしれないのだ。

「す、すぐにコードとかいうものを壊さないと危ないんじゃないの？ そんなのがぼんぼんそこら中にあつたら」

「ギアスが発現するのはごく僅かの限られた人間だけだ……とはいえ、その数はゼロではない。そう頻繁にギアスを渡すのは控えて欲しいものだな」

ちらとC・C・を見ると、にやりと嗤ってひらひらと手を振った。
あ、とカレンは口に手を当てた。

不老不死の女。ブラックリベリオンでC・C・がジェレミアに銃撃を受けた光景をカレンは遠目から見ていた。

「C・C・、あんたがコードを持つてるのね」

「ほう、気づいたか」

「脳みそぶちまけられて生きてるんだから、人間じゃないとは思ってたけど……」

カレンは目を細めて、嗤うC・C・を見下ろした。

敵意は込められていないが明らか不快感が瞳に浮かんでいる。

ルルーシユは「カレン」と、やや強い口調で呼びかけた。

「今、そいつはギアス嚮団と関わりは無い。そいつは確かに俺にギアスを渡したが、同意あつてのことだ。」

「……そう、ならいいけど」

不信感の籠った青い瞳がC・C・を差す。

C・C・は視線を軽くいなして鼻で笑った。二人の美少女を見ながら、役者が違うとルルーシユは一人頷いた。外見はあれだが、年齢500を超えるC・C・にカレンが敵う筈もない。

かつ、と頬を紅潮させたカレンの背中を諫めるように叩く。

「ギアス嚮団の嚮主がコードを持っているらしい。研究の主導者も、ユフィを殺したのもそいつだ」

「我々の父上も研究には関わっているようだけれど、主導者はその男だ。ちなみに我々の伯父上殿らしいけれどね……ふふ、全くもってブリタニア皇族という血筋は狂っている。ユフィやナナリーが我々の血筋から生まれたことは奇跡だったんだろうね」

「殿下、」

「事実だよ。血が濃くなり過ぎたのさ。滅ぶ時期が来たんだ。永遠に国が続くなんて考える方が愚かしい」

ゆつたりとソファにもたれ掛かり、シユナイゼルは口元に皮肉気な笑みを浮かべた。シユナイゼルの刹那的な、見ようによっては破滅的な思考は生来のものであるようだった。

ルルーシユはそれで、と話を繋げた。

「話を戻そう。遺跡を調査して手がかりを見つける方法しか無いというのは、あまりに短絡的だ。ギアス嚮団本部の居場所を探す手がかりは無いのか」

「コーネリアが単独で探しているけれど、まだ報告を聞かないからね。ギアス嚮団は用心深い。そうそう簡単に尻尾を出してはくれないよ。うだ。V・V……伯父上を見つけることさえできれば、ギアス嚮団の凶行も止められるのだが」

「監禁するにしても、四肢を切り落としてコンクリートに埋めて永久凍土に葬るにしても、まずは見つけなければ話にならない」

吐き捨てるように呟いたルルーシユにシユナイゼルは頬を引き攣らせた。

言葉だけでなく、ルルーシユならば本当にV・Vを永久凍土に投げ捨てるくらいのはするだろう。ジェレミアが殺されかけて、ユーフェミアが惨殺されたのだ。明確に敵であるV・Vを葬り去ることをルルーシユが躊躇する訳が無い。

「いや、そこまでしなくとも、今コード保持者を殺害する方法を探っているところだから」

「何だど？」

C・Cがソファから跳ね上がった。目を見開いてシユナイゼルを見やる。

常に余裕の色を浮かべている琥珀色の瞳が興奮で瞬いている。

「何か見つかったのか？コード保持者を、コードを持ったまま殺害する手段がっ」

「……まだ、コードの消失が可能であるか確信は持てないのだけれどね」

シユナイゼルは今度はディスプレイに現在開発中の新兵器の図面を出した。

ルルーシユはその図面を見て、一瞬で顔を引き攣らせた。ロイドもあはは、と乾いた笑いをたてる。

「ね、すっごいでしょ。もう理論からしてヤバイよね」

「実戦投入されれば戦術が根本的に否定されかねん。これは……」
これがあれば、シュナイゼルは容易に合衆国日本を殲滅できるだろう。

ルルーシユはそう察し、しかしそうとしないシュナイゼルに、ようやくこの男の性根は正しく純朴であるのではないかと疑った。

力を持たば使わないではいられないのが人間だ。ギアスにしろ武力にしろ、力というものは依存性の高い麻薬のような作用がある。その誘惑に抗する人間こそが高潔な人間であると言える。

ギアスを復讐という私欲のため乱用した自覚のあるルルーシユは、新兵器を純粹にコードを破壊するための物として扱おうとしているシュナイゼルの人格が高潔に値するものであると、不本意ながらも認めなければならなかった。

「理論はニーナ・アインシュタイン嬢が作成した、サクラダイトの核分裂反応を応用したものだ。名前はフレイヤ。物質を原子レベルまで分解するために効果範囲内であれば大気すら消失させる。これならば、コードを消滅させることが可能なのではないかと私は思っている」

「実戦にはいつ使えるようになるんだ？」

「もう使えるよ。試作もいくつかある。しかし存在が知られるだけでも問題になる大量破壊兵器だ。陰に隠れてこそそそ作っているから開発に時間がかかってしまったね。これを使って世界中の遺跡を全部吹っ飛ばしてしまおうかとも思ったんだけど、まだ数が足りないんだ」

「そうですか。一応聞きますが、その兵器の対抗策は用意しているのですよね？」

「凶面に目を通しながら聞くと、シュナイゼルは当然とばかりに頷いた。

「組成が変わりやすいのがフレイヤの唯一の弱点でね。ニーナに命じてアンチ・フレイヤシステムの開発を進めてもらっている。フレイヤの理論を悪用しようとする団体がこれから先出ないとは限らないから、ニーナには頑張ってもらっているよ」

「……ニーナは、元気なんですか？」

カレンが聞くと、シユナイゼルは友人を心配する少女に向けて、優しい気な微笑みを零した。

「ああ、元気にしているよ。ちよつとワーカホリック気味なところが心配だけど、健康面では何も問題はない。ただ、ユフィのファンだったらしくてね。ユフィが死んでしまつてから随分と気落ちしている」
「そう言えば物理学の賞を授賞した時にユフィに会つたと言つていたな。ニーナは控えめで臆病だから、優しいユフィが好きだつたんだろう」

ただでさえ華奢で折れそうな体躯の、精神的に強靱とは呼べないニーナが気落ちしていると聞いて、ルルーシュとカレンは彼女の身を案じた。

イレブン嫌いの彼女は合衆国日本より本国で暮らした方が精神的には良いのだろうが、アツシユフォード学園を辞めて、人間関係の構築に難がありそうな彼女が特派で働くのは難しいようにも思えた。

「そう心配しなくても大丈夫だよ……彼女は強い。君たちが思つているよりもね」

年相応にクラスメイトの身を案じるルルーシュとカレンにシユナイゼルは微笑んだ。

「それより私が心配なのはズクの方さ。ブリタニア本国にいるよりはと思つて合衆国日本の大使館に配属させたんだけど……もう会つたかい？」

「ああ。殺されかけたぞ」

はつ、とC・Cは鼻で笑つた。

「殺されかけた？」

「ギアス嚮団について知つていよう、全て吐け、とな。女性の扱いがなつていない坊やだ」

「……大丈夫だったの？」

カレンが戸惑いの色濃く尋ねる。C・Cは一瞬意外そうな顔をして、しかしすぐに常の笑みを顔に浮かべた。

「私はC・C。だぞ？死ぬことは無い。オレンジとルルーシュが途中

で乱入してくれたことだしな」

「シュナイゼル、スザクはギアス嚮団探索に関わらせるのか？」

「協力してもらおう以外に無いだろう。彼はギアス嚮団を心底憎んでいる。復讐が為されない限り、彼は現状から一步も動けないかもしれない」

「……あいつ、もう学校に戻れないのかしら」

独り言のように零れたカレンの囁きに、ルルーシュは静かに頷いた。

「カレン、復讐は止まらないんだ。正しいとか間違っているとかいう理屈じゃない。かけがえのない人を失って、生きる意味の全てが復讐にシフトする感覚は……あれは、経験した者にしか分からない」

「あたしは分かるわよ。あたしも、ブリタニアへの復讐を誓ったんだから」

でも、と呟く。

「もう戻れないってというのは、悲しいわね。あんなに平和で楽しかったのに」

「平和だから幸せっていう訳でもないからね。ジエレミア卿もルルーシュ殿下のために一回身分権利全部捨てて平和から遠のいちゃったわけだけど、でもだからってブリタニアに残った方が幸せだった訳じゃないでしょ？スザク君も、復讐しないまままで安穏とした平和の中にいる方が幸せって訳でもないんだから」

「しかしスザクは復讐を果たそうとするんじゃない……酔っているのさ。復讐のためなら何でも許されると思っっている。あいつは力づくで情報を聞き出そうとする手段を取るような奴じゃない」

スザクはギアス嚮団の調査に加わることを望むだろう。彼の要請を拒否することはルルーシュにはできなかった。

しかしスザクがC・Cへ向けた敵意と増悪を、不老不死でない他の人間にまで向けることはない。ルルーシュは断言できなかった。何故ならば、復讐の夢に耽溺していた頃の自分が、復讐を果たすために無業の一般人を殺害する必要がある場面に直面したらどのような判断を下すか、考えるまでも無く理解していたからだ。

あいつは作戦行動中においても、冷静な態度を取れるだろうか。ジェレミアの復讐に酔っていた自分のように、幾多の人々の命を巻き込むことは無いだろうか――

部屋に端末の着信音が鳴った。

ルルーシユは懐から携帯端末を取り出す。咲世子からの連絡だった。耳に押し当てる。

「咲世子？ どうした」

「ル、ルルーシユ様、ナナリー様、ナナリー様がっ」

控えめな咲世子の声は常になく焦っていた。

続く咲世子の報告に、指から端末が零れ落ちた。



枢木邸は巨大な廃屋と化していた。

ブリタニア軍の侵略に遭い、さらにそれから6年の月日が経過している。記憶の中にある和風の整然とした屋敷は、あちこちに隙間風が通りすぎ、昔ここに日本の首相が住んでいたとはとても思えない有様に成り果てていた。

スザクは玄関を通り抜け、父の書斎に向かった。廊下は床が抜けそうな程に傷んでおり、体重を少しかけただけでぎいぎいと抗議する。あちこちに蜘蛛が巣を張っており、鼠の糞がそこかしこに落ちていた。今や枢木家の当主は蜘蛛と鼠になっているようだった。

書斎に繋がる扉の前に立つ。小さい頃はとてつもなく巨大で厚い扉に見えていたが、今はあまりに小さい。扉を開けると埃が白煙のようには舞った。

咳をしながら埃を払うと、凄まじい数の書類、分厚い本、飾られた幾多もの勲章、そして埃くさいベッドが目に見え込んできた。記憶の通りの配置だったが、受ける印象は子供の頃とは真逆に近い。

昔は、立派な大人の男の書斎とはこういうものなのだと思っていた。仕事を立派にこなしていて、見返りとして賞状や勲章を沢山も

らっているという事実は、幼いスザクが父親を尊敬する理由足りえるものだった。この書斎は、常時繁忙で厳格な父親の象徴であった。

しかし今日の前に広がる、病的なほどに権威や権力を誇示することを試みているこの部屋は、虚勢という檻を張り巡らされた牢獄にしか見えない。

父には日本の首相足る器は無かったのだろう。あれから成長して軍務に携わる職務に就き、ルルーシュやシュナイゼル、ユーフェミア、他にも神楽耶やコーネリアなどを身近に接する立場に立つとそう思わざるを得ない。

年齢や学歴だけでは推し量れない広い度量が指導者たる者に必要であり、それが父にあったとは思えなかった。

壁にぶら下がっているいくつもの勲章を見ると埃塗れになり色がくすんでいる。

絨毯に目を落とす。黒い染みが今もその存在をありありとこの部屋に示している。その黒い染みから手が生えてくる想像が一瞬スザクの脳裏を掠めた。

黒い染みが水溜まりになり、水面下から太い腕がぎゅんと這い上がってスザクの足を捉える。

敗戦と敗北、そして何もかもから忘れられようとしている怨恨を顔面に塗りたくった枢木ゲンブの巖のような顔が、ぷかりと過去の泉から浮かび上がる。首相の息子として日本を救うという役目を果たさず、あまつさえ敵国の姫の騎士になったスザクへ憎悪を秘めた緑の瞳を向ける。

日本を捨て、ユーフェミアの復讐に囚われた最後の枢木家の一族を、日本の首相として、そして枢木家元当主として許せる筈が無い。ゲンブは顔を般若のように歪めたまま、スザクの足を万力を込めて握りしめて、そのまま冷たい水底へと引きずり込み――

「……馬鹿馬鹿しい」

死者は喋らない。会話もできない。姿を現すはずが無い。

もしここに枢木ゲンブが現れたとすれば、それは罪悪感が生んだ妄想に過ぎないものだ。結局は自分自身の自己満足でしかないものだ。

スザクは絨毯に蔓延る染みを土足で踏みつけ、机に放置されていたPC端末へと向かった。無論のこと電気など通っていないため、用意していた携帯充電器に端末の電源を差す。6年間触れられていなかったというのにPC端末は無事に起動した。流石に首相の持ち物だけあって当時の最高品質を備えていたのだろう。

ディスプレイが立ち上がり、セキュリティコードを入力するよう求められたが、こちらも予めロイドに貰っておいたウイルスソフトで破壊する。ディスプレイが姿を変えてデスクトップを映し出した。大量のファイルが整然と並んでいる。6年前の規格であるために画像の端々がどことなく古臭い。

携帯用情報収集器を本体に差し込み、そのまま端末に入っている全ての情報を移し出す。

情報転送が完了するまでスザクはベッドに腰かけて、部屋に大量に置かれている書類を片端から捲った。

書類には当時の政治関連の情報しか書かれていなかった。ギアスの文字はどこにも見当たらない。ただ神経質そうな父のサインが書かれた書類が、6年間の月日で黄ばんだ姿を晒している。

転送が完了し、情報収集機を回収してスザクは父の書齋を出た。

枢木本邸から出て、ふとスザクは焼失した土蔵へと目を向けた。当然ながらそこには何も存在しなかった。燃え尽きた土蔵の灰さえ無く、幼少期、純粋に友達だった自分とルルーシュを象徴するものは何も残されていなかった。

そのまま踵を返して、その場を後にする。

この場に残る必要性は今のスザクは何も存在しなかった。

スザクはそのまま現在の自分の職場である大使館へ向かった。

大使館とはいっても、実際にはただの駐屯地のようなものではない。多くのブリタニア人にとって合衆国日本は未だ敵地であり、和平を結ぶどころかその存在さえ許しがたいものであった。

そのために大使館に所属している文官の多くは本国から左遷されたか、元々エリアーに住んでいた者ばかりであり、ブリタニア大使

という仕事への意欲など欠片も無い者が大半だった。

そもそも合衆国日本におけるブリタニア人の処遇は政治権限を一手に握っているゼロに全決定権があるため、大使館の仕事が無いのだ。大使館の職員の仕事といえば、新たに設立された合衆国日本の政庁から送られた情報をそのままブリタニアに転送するだけのことしか無く、殆どの時間を酒を飲むか愚痴を垂れるかで過ごしている。

私室で情報端末を弄る枢木スザクを、「ブリタニアへ尻尾を振っていた癖に、合衆国日本が設立するなり戻ってきた裏切りの騎士」と揶揄する声こそあれ、職務怠慢を非難する声は無かった。

スザクはPC端末を前に枢木邸から持ってきた情報に目を通していた。

ルルーシユのような情報処理能力は無いために、書類を流すペースはそう早くも無い。目に映る情報に目新しいものは無く、ギアスやコードのような目につく単語は何も乗っていなかった。

「政治に関するものばかり……当時の世界情勢に関する情報、論文、報告書……当時の内閣の集合写真に、あとは枢木本邸の監視カメラ映像ぐらいか」

当てが外れ、スザクは息を吐いた。

端末を長々と弄る仕事は自分には向いていない。スザクはため息交じりに、最後に残ったデータの、当時の枢木本邸の監視カメラ映像ファイルをクリックした。

ディスプレイに映っている大量の報告書の上に薄暗い監視カメラの映像が浮かんだ。今の廃墟じみた枢木邸の姿からは想像するのも難しい華美な屋敷の光景が画面いっぱいに広がる。本当にただの映像データのようで、ギアスに関する情報を隠している訳ではないようだ。

ふとスザクは、誰が父親を殺したのだろうと思った。

当時の情勢を考えると、徹底抗戦を唱えていた父を殺す必要があったのはキョウト六家か、または日本軍だろうと予測はつく。ブリタニアと日本の軍事力の差を考えると日本に勝ち目がない事は明らかであり、日本の寿命を延ばすためには早期の降伏、そして戦力の温存し

か道は無かった。

今から6年前の監視カメラの画像は荒く、人の顔もまともに映らない。人がカメラの前を通り過ぎれば服装位は分かるだろう、という程度の画質でしかなかった。

スザクは父が殺された日付の夜中へと監視カメラの時間を移動させたが、カメラには人影一つ映っていない。

ハッキングでもされていたのか。そうになると機械に疎い自分では手出しができない。

スザクは別にここでデータを捨て置いてても良かった。

何しろ、父を殺したのがキョウト六家だろうが当時の日本軍だろうが、今の枢木スザクとは何の関わりもないことだったのだ。ただスザクは好奇心と、ギアス嚮団に繋がる手がかりが何も見つからなかった苛立ちから、ほんの思いつきでデータを特派へとメールで送った。

数十分後、暇だったのか、それとも六年前の枢木邸の映像というところからスザクにとっての重要事項だと思ったのか、セシルがすぐにハッキングされていた監視カメラの映像データを直して送ってくれた。

メールには、スザクのことを心配していることと、無茶をしないことを約束するよう念を押ししており、年上の優しい女性にスザクは何と言つてよいのか分からずメールの文面から目を逸らした。復讐するということに、無理をしないという選択肢などはなから無い。何より今の自分にはセシルから温かい言葉を向けられる価値があるとは思えなかった。

映像を画面に開く。ハッキングした者の腕がいくら良かったとしても、6年前の技術で現在最新のデータ解析技術に敵う訳が無い。セシルがデータ復旧の過程で彩度を高めてくれたおかげで、画質は先程よりも格段に良くなった。

父が殺された当時の場面に時間を戻す。

夜中だ。薄暗い。音声が付随していないため、画面の向こうの世界はあまりに物寂しいように見えた。

絨毯の敷かれた廊下を深緑色の髪をした男が歩いている。

鍛え上げられた体は洗練された身のこなしで画面を横切り、歩く姿からして手練れであることが同じ軍人であるスザクには容易に察せられた。

今よりも若く見えるが、顔立ちに大きな変化は無い。だがその眼光は普段の穏やかな表情からは想像もつかない程の憤怒を迸らせており、自分の知る人物と同一だと気づくまでに少々時間を要した。

スザクは複数の監視カメラを同時に画面に映し、男の行く先を追った。長身の男は廊下を歩き、屋敷の奥へと向かい、音も無く書斎へと侵入した。

書斎の中までは映像で追えない。部屋に入ってから30分後、男は書斎から出てきた。

男の全身は血の雨を浴びたように濡れており、手には血が滴る刃物を閃かせていた。

男は部屋に入る前とは打って変わって清々しい顔をして、機敏な動作で屋敷を抜け出ていった。

その時自分はどんな顔をしていただろう。

スザクは映像を何度も繰り返し眺めながら、自身の精神が音を立てて擦り切れるのを感じた。

瞼の裏に色々な場面が思い浮かぶ。ぶつぶつと途切れながら点滅する過去の光景と、デイスプレイの血まみれのジェレミアの姿と、柩木邸の消失した土蔵の荒れ果てた姿がハレーションを起こして視神経を苛んだ。

一緒に遊んだルルーシユのはしゃぐ姿。自分へ騎士の何たるかを語ったジェレミアの生真面目な顔。ユフィの騎士となったことを祝ってくれたルルーシユの微笑み。燃え盛る土蔵の姿。薄暗い書斎の中、肉塊になった父だったもの。ユフィの遺体を腕に慟哭する自分の傍で、仲睦まじく寄り添って立つ騎士と主君――

「あはは、」

顔を両手で覆った。指の腹が雫を感じた。

「あははははははは………」

何を信じればよいのだろうか。何を。

法律も正義も信ずるに値しないものであった。それらは全て変わりゆくものだった。

友情も、未来も、希望も、同じ形であり続けるものなどこの世界には何一つとして存在しない。

それが確たるものとして存在するという言葉は、嘘だ。

そもそもこの理不尽な世界には、信ずるに値するものなど、最初から何一つとして無かったのだ。

その時スザクの端末が高らかに鳴った。

通信元はシユナイゼルだ。通話ボタンを押して耳に押し当てる。

動転したシユナイゼルの声が、ナナリーが行方不明になったと告げた。

4. 純真のまままでいて欲しいという願いは、傲慢なのだろうか

黄昏時の黄金の光が石畳を照らしている。それは背筋が震えるような美しい光景だった。

ナナリーは震える手で車いすの肘置きを握りながら石造りの階段を見上げた。

長い階段の上には2人の男が立っている。逆光のせいで2つの黒い彫像のように見えるが、目を凝らせば2人の容姿がそれぞれ並みならぬ迫力を持つていることに気づく。

少年は身の丈より長い長い淡い金髪を地面に引きずっていた。見た目は10かそこらの少年であるというのに、瞳は病床にある老人のように濁っている。

そしてもう一人は白くカールされた髪を持つ初老の男だった。年はずもう60を幾分か越えているようであり、頑強な体軀は苔生した巨木を思わせる。初老の男の方にナナリーは強い見覚えがあった。

「お父様、」

「久しぶりだな、ナナリーよ」

記憶にある中の父と姿かたちは寸分違わない。だが瞳はどこか物憂げな色をしており、声色は温かかった。

ひ、と声を引き攣らせてナナリーは車いすの上で身を振らせた。実父は昔からナナリーにとってとても怖い人だった。

声が大きく、体も大きく、自分と兄を日本に送った人だ。お母様の葬式にも来てくれなかった人だ。

今度は何をされるのかと身構えるナナリーの警戒を他所に、シャルルはゆっくりとした足取りで階段を下りた。

ナナリーの目の前まで辿り着くとシャルルは車いすからナナリーの体をひよいと抱え上げた。大きな掌は兄のものと随分違った。しかし爪の形は兄とそっくりであるように思えた。

視点が突如として高くなったことにナナリーは小さく悲鳴を上げ

てシャルルの服を強く握った。

「きやあつ」

「落ちないように捕まっておれ」

ナナリーはその言葉通りしつかりと生地の厚い皇帝の衣装を握り締めた。

シャルルはそのままゆっくりと階段を上がる。兄とは違う大柄な体躯の胸元に体をそわせて、ナナリーは父の体温が人より高めであることに気づいた。歩きながらシャルルは腕の中に収めたナナリーに話しかけた。

「ナナリー、すまなかつたな。いきなりこんなところへ連れて来てしまつて」

「いえ……いえ、それよりお父様、何故私の居場所が分かつたのですか？お兄様と私は隠れ住んでいたのに、」

「前から知っておつたよ。いくら隠れて暮らしていても名前を変えぬままでおれば探すのはそう困難ではない。しかしルルーシュもお前も、陰謀渦巻く皇宮で暮らすより市井で暮らしていた方が良いと思つてな。手を出さなかつたのだ」

それは畏怖を覚えていた父親とはとても結びつかない穏やかな口調だった。

シャルルはナナリーを階段のてっぺんに座らせて、今度は車いすを取りに行くために再度階段を下りた。

入れ替わる様に小さな少年がナナリーの方に歩み寄る。少年はナナリーより3つか4つは年下であるように見えた。

少年はナナリーの顔を品定めするような無遠慮な目つきでまじまじと見つめた。

「ふうん、ナナリーはシャルル似なんだね。顔立ちも髪色も幼い頃のシャルルにそっくりだ。ルルーシュはリアンヌにそっくりな憎たらしい顔だけど、ナナリーは可愛らしいね」

長い金髪の少年はナナリーの隣に腰を下ろした。にやにやとした笑みが口元に浮かぶ表情は相手を小馬鹿にしているように見える。

「え、ええと、あなたは」

「僕はV・V。君の伯父だよ」

「伯父？」

自分よりも年下に見える少年に、まさか、と言おうとしたが、深い紫色の眼光の奥に例えようもない不気味な質感を感じてナナリーは身を震わせた。生ぬるい泥濘のような色をしている。覗き込んだら引きずり込まれそうな底の知れなさがあった。

怯えるナナリーに気づいていないのか、それとも無視をしているのか、V・Vは子供らしい甲高い声で話を続けた。

「そうだよ、伯父さ。つまりシャルルの兄。ああでも口の形はマリアンヌにそっくりだね。耳の形は僕に似てるのかな？」

「兄上」

ナナリーの頬をぶにぶにとつつき始めたV・Vに、車いすを持って戻ったシャルルが窘めるように呟く。

「お戯れはそこまでになさって下さい。あまり時間もありません。ルルーシユはすぐに気づくでしょう」

「それもそうだね。ねえナナリー、君はルルーシユがゼロであることを知っているかい？」

可愛らしく首を傾げたV・Vにナナリーは息を飲んだ。

この少年は何者なのだ。伯父というのは本当なのだろうか。何故父は私をここに連れてきたのだ。

多くの疑問が口の中で渦巻いていたが、それ以上に兄のことがナナリーの心中を占めていた。つい先日知った兄の正体をまだナナリーは消化しきっていないかったのだった。

「何故それを……」

「もう知ってるんだ。なら話は早いかな。でもそれだけじゃないんだよナナリー。ルルーシユは君に他にも沢山の嘘を吐いているんだ。酷いよね、実の姉妹なのに」

「……姉妹？」

「あれ？そのことさえ言ってないんだ。本当にルルーシユはナナリーのことを信頼していないんだね」

シャルルは飄々と言葉を続けるV・Vを一瞥したが、言葉を発す

ることなく黙して目を閉じた。

ナナリーはじりじりと詰め寄ってくるV・V・から離れようと階段の上で後ずさる。

近寄ってくる顔は客観的に見れば整っている部類に入るように思われた。形の良い眉と額はつるりとしていて聡明そうな印象を与える。白金に近い色彩の金髪は艶やかで一つのほつれも無く、紫色の瞳は高貴に瞬いている。

しかしそれ以上にV・V・は不気味な雰囲気が強すぎた。またナナリーが愛する兄を、まるでナナリーよりも知っているような口調で話す様はナナリーにとってあまりに不快だった。

ナナリーにとって兄は絶対の存在だった。兄は器用で聡明で心優しく美しい、完璧な人間としてナナリーの心の神殿に君臨していた。人間らしい醜さを持たない兄は、神像のような神々しきでナナリーの心象を照らしていたのだ。

兄がいないと、肉体的にも精神的にも、自分は今生きてはいないだろう。

だから兄の言うことは間違っている筈は無いし、兄は自分を他の何よりも大事にしてくれていると心から信じられた。

兄と自分はとても特別な関係で、唯一介入できるとすればジェレミアくらいだろうが、彼にしたって自分程に兄に近くはない。

ナナリーには兄に誰よりも愛されている自覚があったのだ。

だというのにV・V・は兄の行動の短慮さをあげつらうかのように嬉々として口にする。

思慮深い兄の行動には必ず意味がある筈なのに、非難の口調を隠しもしない態度。そしてナナリーよりルルーシュのことを知っていると言わんばかりの傲慢な口調。この2つはナナリーにとってどうにも我慢ならないものだった。

「確かに、お兄様は私に嘘を吐いたかもしれませんが。お兄様が本当にゼロなのだとしたら……しかし、お兄様にだって事情はあった筈なのです。お兄様は優しいから、滅亡する日本を見捨てておけなかったのかも知れない。私を護るためにブリタニアと戦わないといけなかつ

たのかもしれない。だから、私は酷いとは——」

「ゼロとして何万人もの人間を巻き込んだ戦争を起こしておいて、酷くない？そんなことはありえない。ありえないんだよナナリー。どんな理由であれ、人殺しをした人間が酷くない訳が無いんだ」

V・Vはナナリーの頬に手を沿わせて薄い董色の目を見下ろした。

「ナナリー、君は人が死ぬということがどういうことか分かるかい？戦争では蠟燭が消えるように、それはあつけないことだ。でもそれぞれの人間には家庭があつて、友人がいて、まるで蜘蛛の巣のように人間の関係性はこの世界を覆っている。彼ら一人一人がかげがえのない役割を果している、喜怒哀楽のある存在なんだよ。戦争はそんな価値ある人間たちを弾薬や機材と同じ消耗品のように消費してしまうものなんだ。ルルーシユはゼロとして戦争を起こした。その背後にどんな事情があれ、その事実の前ではルルーシユに弁明する権利なんてありはしないんだよ」

「でも……でも、お兄様は優しい人なんです！ずっと、ずっと私を護ってくれたんです！だからお兄様は酷い人ではないんですっ」

「そうだろうねナナリー。君にとっては、ルルーシユは心優しい完璧なお兄様だっただろうよ。君にとっては、だ。しかし他の人間にとっては、戦争を起こして日本人もブリタニア人も大量に死ぬ原因を作った殺戮者さ。世界中がブリタニアによって統一されれば争いの無い平和が訪れるというのに、再度反乱を起こすような真似をして。これで暫くはまた戦争が世界中で続くことになる。君が望む優しい世界を置き去りにして、ね」

ひらりと手を振りながらV・Vは立ち上がった。

シャルルは茫然とするナナリーの体を抱き上げて車いすに乗せた。

ナナリーは何を信じてよいのか分からなくなっていた。兄は自分に優しくかった。それは間違いない。

しかしそれが自分にだけ優しくかったのだと言われるとナナリーには否定する言葉を持たなかった。何しろ自分はルルーシユの、自分に向ける顔しか知らないのだ。他の人に向ける顔がどんな顔なのか知

らないし、知る術も無かった。

この世界は理不尽で、優しくなんてない。視力と足に障害を抱えていたナナリーはそのことを痛いほどに知っている。

この世界は人種や国籍で人を差別するし、障害を持つ人間には不利なようにできているし、性別や年齢でも人々に大きな隔たりを作っている。

だからナナリーは多くの人々が差別なく、誰もが平等に幸せになれる世界が来ることを願っていた。その願いを兄は知っていた筈だ。

だが兄はその願いを、ただの子供の世迷い言だと思っていたのだろうか？

ナナリーに向ける言動は優しく、その実ナナリーの願いは理解していない。そして他人にはナナリーに向ける優しさの欠片も見せず戦争を先導するなんて、完璧とは程遠い非道な人ではなからうか。生まれて初めて芽をつけた疑惑に、ナナリーは身震いするように頭を振ってV・V・を睨みつけた。

「でもそれはしょうがない事なのです。だって私には力がなくて、何一つとして世界を優しくするために成し遂げてはいないので。から。優しい世界を夢見ても、行動が伴わなくてはベッドで見る夢と同じでしかないのですから。お兄様が私の願いを子供の夢だと笑い、私の望まない行動をしてしまうのは当然のことなのです。私とお兄様が別個の意識を持つ別個の人間である以上、私と同じ優しい世界を夢見たいと思うなんて身勝手に傲慢極まりない行為ではありませんか」「つまり、力があれば君はルルーシユに思い知らせることができるわけだ」

V・V・は顔面に花が咲くような笑みを浮かべた。

「思い知らせる？」

「君が本気で、優しい世界を夢見ているってことをだよ。君がルルーシユの庇護を必要とするような弱い子供じゃなくなればいいんだ。ルルーシユの吐いた嘘を全部知っている独立した一人の人間になれば、きつとルルーシユは君の言葉をちゃんと聞いてくれる筈さ」

V・V・の瞳は何百年もの倦んだ歴史を内包しているような複雑

な色をしていた。

ナナリーは薄っぺらい自分の体を貫くようなV・Vの視線に耐えられずに顔を背けた。背けた先にはシャルルが立っていた。

「ナナリー、全てを知りたくは無いか？」

その場に膝をついてシャルルはナナリーを見上げた。

「っ、私は、私はお兄様を信じなければならぬのです。お兄様が沢山の人を殺したとしても、それはしょうがないことだったのだと。事情があつたのだと………そもそもV・Vさんの言うことは無茶苦茶ではありませんか。お兄様がゼロとして戦争を起こさなければ世界は平和になつただなんて、そんなの何の根拠も無い推論でしかないでしょう！」

「そうだ。根拠は無い。だからこそ知ることが必要なのだ。もしかしたらの世界と現実を比較したいのなら、正しい知識しか人間には継る術が無い。しかし人は嘘を吐くから正確な情報を得ることは困難であり、言われるがままの言葉を信じることしかできぬ場合もある」
悲し気にシャルルは目を細めた。遠い過去に思いを馳せているような、夢を見ているような顔をしていた。

「だがナナリー、おぬしには全てを知り、全てを変える力があるのだ」
シャルルの言葉には教師が出来るの悪い生徒に言い聞かせるような優しさと抵抗し難い圧力があつた。しかしその口調には同時に他者へ懇願するような情けなさも同居しており、複雑な響きとなってナナリーの鼓膜を揺らした。

「……力？」

「ルルーシュの嘘を、そして世界の真実を。この世界でそれを知る力を持つのはお前だけだ」

「力が欲しくはないかい？ 兄に負けない力、自分だけで生きていく力。兄と対等になれる力だ」

兄に負けない力。ナナリーは考えたことも無かつた。

いつだって兄は完璧で、何でもできたから。

兄は9歳で戦場に行き、初陣で華々しい戦果を上げた。その後も戦場に立ち多くの戦果を挙げ、流石はマリアンヌの息子だと称賛を浴

び、ヴィ家の次期当主として多くの人々から期待された。

庶民の血を持つ皇族を苦々しく思う貴族達はルルーシユのブリタニア人らしからぬ黒髪や女のような容姿を馬鹿にして、ルルーシユが戦場で死ぬことを望む言葉を幾度も口にしていた。ルルーシユさえ死ねばヴィ家は終わりだと、そう思っていることは明白だった。

母が死んで日本に送られて学校に通うようになってから、兄には沢山の友達ができた。生徒会に所属してからは沢山の人に頼られて、沢山の人に好かれて、多くの人の羨望を一身に集めていた。

兄には幼いころから忠実に従う騎士がいて、ずっとその人は兄に仕えていて、他の人など目に入らないようだった。

スザクは自分と遊んでくれたけれど、本当に仲が良いのは兄の方で、ブリタニア人の兄を親友と呼んで憚ることは無かった。

兄は気づいていなかったようだけれど、多くの女子、男子学生は、兄に声をかける時に声の内に熱い思慕を潜めていた。兄に恋をしていることを、兄を愛していることを全身で訴えていた。

眼が見えるようになって初めて目の当たりにした17歳の兄は目が眩むほどに輝かしい容姿を持ち、そこらの女性よりも、自分よりもずっと美しく、体は至って健康そのもので何の瑕疵も無かった。その精神も強靱であり柔軟で、学校に向かう途中も、外に遊びに行っている時も、まるで兄が立つ場所が世界の中心であるかのように衆目の視線を一身に集めていた。

自分はどうかだ。

全身の血管が凍結するような寒気がナナリーを襲った。それはずっと長い間、無意識の内に考えないようになってきたことだった。

完璧な兄。なんでもできる兄。自分を守ってくれる兄。沢山の人に愛される兄。なんでも持っている兄。

思慮深い頭脳も、誰もが見惚れる容姿も、健康な体も、身命を懸けて尽くしてくれる騎士も、一生ものの親友も持っている兄。

兄。兄。

それは巨大な壁だった。壁は常にナナリーを護ってくれていた。完璧な壁。絶対に乗り越えることなど不可能な壁だった。いつだっ

てその壁はナナリーのことを思いやり、その巨大さでナナリーを押し潰そうとした。

それが自身の被害妄想であり、真実兄は自分のことを愛してくれていると分かっているからこそ、ナナリーの鬱屈は誰にも告げることができず、腐って種の芽吹く土壌となっていた。それでもこれまでナナリーの兄に対する態度に欠片も陰が滲んでいなかったのは、偏にナナリーの自制心によるものだった。

父と伯父がナナリーにちらつかせたのは自制心を抑える疑惑の種であり、壁に指をかける力であった。

「…………お兄様に、負けない力」

「そうさ、ナナリー。君はルルーシュより遙かに優れた力を持っているんだよ。ギアスという王の力を」



南極大陸。

E・U・共和国連合の1.4倍の面積を誇る広大な大地は98%が氷床に覆われている。

サクラダイトを保有しない極寒の大陸は現在どここの国にも所属していない。ブリタニアの研究施設がいくつか点在するのみであり、居住する人間もいない。

謎の多いこの大地にはオカルト染みた逸話も多く、分厚い氷層の下にはエイリアンの基地が存在するのだ、実は南極大陸がアトランティスだったのだという眉唾ものの説がまことしやかに語られていた。

その説を証明しようという気概のあるロマン溢れるオカルトマニア達がいけないことも無かったが、しかしあまりに厳しい南極の環境と、複雑に絡まり合った南極大陸を巡る国際問題のために彼らは軒並み臍をかんできた。

茫漠とした氷の大地には、しかし今何千というKMFの影が落ちていく。ゼロが現在動かすことのできる黒の騎士団の全兵力が南極大

陸の上空に終結していた。

整然と並ぶKMFの中心には当然といった様子で蜃気楼が浮かんでいる。周囲を親衛隊に囲まれた蜃気楼は強い存在感を放つ黒い機体を晒し、メインカメラを白一面で覆われている大陸に向けていた。

ルルーシユはメインカメラが映す大陸に、ドルイドシステムに算出させたギアス嚮団の居場所を示す地図を重ねて表示させた。薄い氷床の下でナナリーの居場所を示すGPSが点滅している。ユフィが誘拐された後、ルルーシユは万一の可能性を考えてナナリーの服にGPSを装着させていたのだった。

ナナリーが誘拐されたという最悪な状況だが、そのおかげでギアス嚮団の本部の居場所が分かったというのは皮肉な結果だった。

サブモニターには心配そうな顔をしたシユナイゼルが映っている。『ルルーシユ、いいのかい？ブリタニアから兵を派遣しなくて……』「ええ。兄上はブリタニアの国内を治める方に時間を使ってください。こちらは黒の騎士団で対応します。スザクを貸して下さっただけでも感謝しますよ」

『あまり無茶はしないようにね。戦闘員は少ないだろうけどギアスユーザーがいることは確実なのだから。いくらKMFに搭乗していてもギアスにかからない訳じゃない』

「兵力は圧倒的にこちらが有利な上に、キャンセラーを持つジエミアもおります。あまり心配しないで下さい。……あなたに心配されると調子が狂う。作戦が終了次第また連絡します」

『うん。何度も言うようだけど、無茶はしないようにね。あくまでこれはブリタニアの問題なんだから。それに寒いだろうから暖房はちゃんと効かせて、不用意にKMFの外に出ないように。気温は氷点下なんだろう？それにギアス嚮団の本部は地下にあるからさらに寒いかもしれない。それと、』

「もう切りますよ兄上」

『ああ、うん……じゃあ、また後で』

通信を切る。画面は暗転し、すぐに元のモニター画面に戻った

シユナイゼルからしてみれば、ブリタニアの問題であるギアス嚮団

への襲撃に黒の騎士団を使うということに聊かの戸惑いがあるのだろう。しかし現在合衆国日本の承認をしたことでシュナイゼルの宰相としての立場が弱体化している。この上で理由を明瞭にできないままブリタニア軍を動かすのは難しい。

代わってゼロはブリタニアが運営している非人道的化学施設を襲撃する、という名目を掲げることができる。

名目ではなく事実なのだが、いくらか隠してある事実はある。その内の一つはこの作戦の最大の目的はブリタニアの施設の破壊でも、人体実験の犠牲者の保護でもなく、ナナリーという一人の少女の確保にあることだった。

作戦開始時刻が迫る。画面に各部隊長の顔が浮かび上がった。

『ゼロ、各部隊配置完了した』

『斑鳩もOKだ。出撃サポート準備終了している』

『サイバーサポート関連もOKよ』

『ゼロ、親衛隊はいつでも出れます！』

その後も次々に続く各部隊の状況を聞き終えてルルーシユは大きく息を吸い込んだ。

合衆国日本設立後から大きな作戦が無かった分、団員の意気は高い。

「よろしい。では諸君、これよりブリタニアの非人道的実験を行っている目される施設を襲撃する。事前に説明したように、人体実験の犠牲となつている者が多くいることは確実であり、特に子供の犠牲者が多いものと思われる。犠牲者は可能な限り保護すること。しかしその他は全て殲滅せよ」

『子供使つて実験たあ胸糞わりいぜ』

『だからあたしたちが助けに行くんでしょ？』

『これだからブリタニアはサイテーなんだ』

『止めなさいよ。シュナイゼルと講和したんだから。下手なことは言わないようにしないと』

ルルーシユは椅子に体をもたせかけ、通信越しに騒ぐ幹部たちの会話に目を細めた。普段であれば作戦前に余計な口を叩く曲がりなり

にも幹部である連中に苦言を呈する所だが、今回ばかりは口を噤む。

この会話をしている人々の何人かが死ぬだろうことをルルーシュはこの時点で既に察していた。

ギアス嚮団の本部には確実にギアスユーザーがいる。

たとえ相手が単なる化学施設であり、非戦闘員しか居住していなかったとしても、こちら側の犠牲は少なくは無いただろう。超常の力であるギアスには彼我の戦力の差を覆す理不尽な力を秘めている。

だがそれでもルルーシュにはギアス嚮団にいる全ての人間を虐殺しろという命は下せなかった。保護対象となる幼い子供の中にギアスユーザーが紛れている可能性が高くとも、である。

それはルルーシュの良心によるものではなく、ナナリーが巻き添えとなることを防ぐためだった。

たとえこの作戦の中でギアスユーザーの手により黒の騎士団員が何人死のうとも、非戦闘員の研究者が何人死のうとも、ナナリー一人の命には代えがたかった。

だが、だから何だと言うのだ。ルルーシュは自嘲を零した。合衆国日本を建国したのは、ナナリーと自分とジエレミアの戸籍を作り平穏な暮らしを手に入れるという私欲のためだった。そもそも黒の騎士団を造ったことさえ、復讐という私欲のためだった。

今更この程度のことですら揺らぐような浅い覚悟は持ち合わせていない。

作戦開始時刻になり、ルルーシュは声を張り上げた。その声自体が砲撃のような威力に満ちていた。

「黒の騎士団に告げる！…これよりブリタニアから残虐な扱いを受けている人々を救い、二度とこのようなことが起こらぬようこの施設を完全に破壊する！徹底的にだ！これは弱者を救う正義の行いである！A―1からC―5部隊構え!!」

空中に整然とKMFが並ぶ。空を埋め尽くす程のKMFがガウエインを中心として左右に展開された。

ガウエインの右側を紅蓮可翔式が飛び、左側をジークフリートが護る。

ルルーシユはちらと後ろを見やった。背後にはC・C・が乗る暁直参が控えている。そしてそのさらに後方にはランスロットがいる筈だ。

しかしガウエインの位置からランスロットは視認できず、画面上でLancelotと表示された青い小さな点がいじましく瞬いているだけだった。

ルルーシユは一度その小さな点を見やったが、すぐさま苛烈な炎の宿る視線を南極の広大な大地へと向けた。

「撃て!!」

ルルーシユの号令と共に空に砲撃が飛んだ。南極大陸を覆う氷床が吹き飛び、その地下に空いている巨大な空間が姿を現した。

スザクはランスロットのコックピットに身を沈めて、操縦桿を握り締めていた。



時間は数時間前に遡る。

スザクがシユナイゼルの許可の下で黒の騎士団と合流し、ギアス嚮団殲滅任務のため出現する寸前のことだ。

調整が済んだランスロット・コンクエスターは格納庫に佇んでいた。出撃前に一人にして欲しいと言ったスザクの言葉通り格納庫には誰もおらず、一人スザクだけがランスロットを見上げていた。

そこで格納庫の扉が突如開いた。扉の向こうにはニーナが立っていた。

ニーナの瞳はスザクとよく似た色をしていた。少し淀みながらも爛々とした、強い意志と諦念が混ぜ合わさったような奇妙な色だった。スザクは首をぐるんとニーナの方へと向けた。

「ニーナ、持ってきてくれた?」

「ええ。ランスロットに砲撃可能なサイズに圧縮して、発射してから約8秒後に核分裂反応が起こるよう調整してあるわ。調整の時間が足りなかったから前後0.5秒未満の誤差はあると思う。砲口初速

は約1500m/sec。使用する時には核分裂反応が始まる場所から5000mは離れるようにして、発射後は即時離脱してね」
「分かった」

淡々とした返答にニーナは一度頷き、職員に合図して持ち込んだ砲弾を床に置かせた。格納庫にはKMFの調整のため必要な機材はほとんど揃っている。ニーナは腕まくりをして、砲弾とその発射装置の装着に取り掛かった。

一時間もせずにニーナが運び込んだ新兵器はランスロットの背中に搭載された。

ニーナは砲弾発射用のプログラムをランスロットに叩きこみながら、背後で自分の作成した兵器をぼうっと見上げるスザクの存在を感じていた。

「スザク、ユーフェミア様の復讐を成し遂げてね」

「ああ。分かっている」

スザクはニーナに視線をやることも無く、ランスロットが背負った兵器の重みを目算で測っていた。

「絶対だ。僕は絶対に復讐を成し遂げる」

5. この時にスザクを止めていれば、まだ、

「お兄様が、こんなに酷いことを…」

ナナリーは燃え盛るビルの波を目の当たりにし、慄然としていた。ナナリーがいる場所は、地下に網の目のように張り巡らされたギアス嚮団本部の内部でも、最も高い建物の最上階に位置する部屋だった。地下に建設されているというのに眼下には大小様々な建物が並び巨大な街が広がっており、地下空間特有の閉塞感とは無縁な造りとなっていた。

一面のガラス張りに顔を擦り寄せて、ナナリーは傍らに立つシャルルの服の袖を握り締めた。そうでもしないと耐えられそうになかったのだ。

ルルーシユが、ゼロが率いる黒の騎士団は、まるで虫でも追い立てるかのように無抵抗な研究者達を殺害していた。それに反撃しようとする少年少女達はまるで犯罪者のように捕らえられ、その場に拘束されている。

地下空間には非戦闘員達の悲鳴が反響して、まるで数万人もの悲鳴が渦を巻いているようだった。視界一面は炎で埋まっている。そこは地獄だった。

シャルルは震えるナナリーを落ち着かせようと肩を撫でた。

「こんな、こんなことって、彼らには戦闘能力なんてないでしょうに。お兄様であれば話し合う機会だって作れる筈なのに……っ」

「——怒りで目が眩んでおるのだ。ユーフェミアを殺したのはギアス嚮団であるから……復讐という大義名分の前では、実際にユーフェミアに手をかけたのがその内の数名であることも、研究を主導していた兄さんに責任があることも、些末な事でしかなからう」

瞳目してシャルルを見上げる。

ユーフェミアを殺したのはV. V. だったのか。

しかしあの幼く華奢な少年がユーフェミアを。それはあまりに想像し難かった。言動は確かに大人びていたが、ナナリーの目にはV. V. は鬱屈を抱え込んだ幼稚な子供にしか見えなかった。

コード保持者は不老不死なのだと言われ、シャルルに教えて貰ってはいる。しかしV・Vの幼児性は外見よりも身勝手な言動からより強く感じられる類のものであり、まさか本当に伯父だとは思えなかったのだ。

「ユファイ姉さまを、V・Vさんが？」

「そうだ。兄さんが殺したのだ。わしに何も話さないで、勝手に誘拐して、ギアスの研究の材料にしてしまった……取返しをつかないことをした」

シャルルは瞼を震わせた。自分よりも兄よりもずっと大きな掌が頭の上に落ちてくる。それは初めての感触だった。ナナリーの身近にいる大人の男はジェレミア位しかおらず、彼は常に臣下としての一線を弁えており、また父親と呼ぶには年齢が近すぎた。頭を撫でる掌は熱かった。

優しくアツシユブロンドの髪を撫でながら、シャルルは独り言のようにぼつりぼつりと呟いた。

「昔、兄さんはわしの唯一の味方だった。お互いに嘘はつくまいと約束した。どれだけ喧嘩をしても、どれだけ仲違いをしても、嘘だけはつくまいと決めたのだ。あの頃、皇宮には嘘と敵しか居なかったから。お互いだけは絶対に裏切るまいと誓った。

——しかしその約束は破られた。しようがないとも思う。生きていけば人間は変わってしまうものなのだから」

シャルルはナナリーの瞳を見下ろした。ギアス嚮団の研究史上最高のギアス適正値を誇る脳細胞と、その薄紫色の瞳は連結している。

「ナナリーの力を、わしに貸して欲しい」

「私の……」

「そうだ。お主の力があれば、」

シャルルが言葉を繋げる前に轟音が部屋の中に響いた。突風がガラスをうち破らんばかりに吹き付けて、蜘蛛の巣のようなひび割れが走った。

咄嗟に車いすを握り締める。シャルルはナナリーを庇うように体を支えた。

シャルルの背に守られながら、ナナリーは恐る恐る顔を擡げた。ひび割れた窓ガラスの向こうにランスロットが飛翔していた。戦闘装甲騎にしては不必要な程に美しい造形をしたランスロットは、滞空飛行を続けながら青いレンズにナナリーの姿を映した。

ズクはナナリーの傍にシャルル皇帝の姿を認めて一瞬動揺したが、即座に気を取り直して操縦桿を握り締める。

現時点における最優先事項はナナリーの保護だ。ギアス嚮団に深く関与しているシャルルをこの場で始末したいという思いは確かにあるが、ナナリーとシャルルの立ち位置はあまりに近すぎた。

ナナリーを巻き込んで怪我をさせることだけはできない。

ガラス越しにズクはランスロットの掌をナナリーに差し出した。

『ナナリー、見つけた。さあ、一緒に帰ろう』

外部スピーカーからズクの声が反響する。

ナナリーは初めて間近に見たKMFの迫力と威圧感に後ずさりしながら、首を横に振った。

『ナナリー?』

「わ、私は帰りません、」

身を震わせるナナリーは、兵器であるランスロットを目の前にして怯えてるといっただけではないようだった。

あまり時間がかかるとV・Vがギアス嚮団から逃げ出してしまいかもしれない。ズクは焦りで喉奥を焼きながら、心中に残った僅かな労りの心を懸命に舌の上に乗せた。

『どうして。ルルーシユもナナリーを助けるために来てるんだよ? ジェレミアさんだって。カレンだって来てる。ここは危ない場所なんだ。早くアツシユフォードに帰ろう』

「私は、私は助けて欲しいなんて思っています、こんな、こんなに沢山の人を殺してまで助けて欲しいだなんて、私は一度も思ったことなんて無かった!!」

はらはらと涙を零しながらナナリーは声を張り上げた。

歯を食いしばり、頭を振り乱しながら車いすの肘置に拳を叩きつけ

る。

「お兄様はゼロだったのでしょうか!? スザクさんもそのことを知っていて、私に話してくれなかったのでしょうか!? これまで沢山の人を殺しておいて、何も私に話さないで、全て隠していて、それで助けるなんて、無抵抗の人々をこんなにも沢山殺した、血まみれの手を差し伸べられて、嬉しいと、喜ぶとでも思ったのですか!? もう、私はお兄様も、スザクさんも信じられない……っ」

スザクは皮肉気に目を細めてナナリーを見下ろした。

実兄が、それもずっと自分を守っていた絶対の存在だった兄が、戦争犯罪人のゼロだったという事実は確かに衝撃的だろう。平和的な思考を持つ、ただの中学生として生活していたナナリーにとってその事実が受け入れ難いのも当然だ。

しかしスザクにはその程度のことかどうした、としか思えなかった。

状況はそれよりずっと先に進んでいる。今のスザクにはナナリーの混乱の極みにある心情を慮る余裕は無かった。スザクの心情にはもう復讐以外のものが入り込む余裕は残されていなかったのだ。

『じゃあナナリーはそこにいるシャルル皇帝は信じられるのかい? 君とルルーシユを日本に送り込んで殺しかけた、妻の葬儀にも顔を出さなかったような世界最悪の大量殺人犯を』

「お父様にも事情があったのですっ、それに、お兄様とお父様の話は別問題でしよう!? 話を逸らさないで!」

『そうだよ。別問題だ』

スザクの声は絶対零度に近い声色をしていた。その声にひ、とナナリーは背筋を震わせた。聴力が余人より遙かに優れているナナリーは、スザクの荒廃しかけている人格をその声色から察することができた。今のスザクは、ナナリーの知る、優しくて頼りがいのある年上の幼馴染では無かった。

彼は復讐者だった。その邪魔をする者は誰であれ彼の敵でしかない。シャルルの隣にいるナナリーが未だシャルルと共にスザクに殺されていけないのは、彼の心の中に残った僅かな優しさが消滅する前の

最後の煌めきなのかもしれない。

『これはルルーシユが信頼に値する人間かどうかという話じゃない。君の人間性と、君の隣に立つその男の罪の重さの問題だ。ナナリーの言う通り、ルルーシユの性格や素行や倫理観には確かに多大な問題がある。彼女は多くの罪を犯した。彼女は友達のこと……友達だと思っていた、僕のことまで裏切った。』

ルルーシユは僕の父さんを殺して、ずっとそのことを黙っていたんだ。一度の謝罪も無く、ずっと黙っていたんだ』

スザクの言葉にナナリーは息を飲んだ。

スザクの父親を、枢木ゲンブを、あの兄は殺していたのか。

ナナリーは枢木ゲンブとそれほど多くの交流があった訳ではなかった。

6年前、日本に送られた直後の頃、自分と兄は枢木ゲンブの住む枢木邸の一角に住居を構えていたが、彼と顔を合わせた機会はそう多くは無かった。彼は日本の首相であり、自分達に構う暇もないほど多忙であったのだろう。

しかし彼は定期的に枢木邸に自分と兄を住まわせてくれて、頻回に美味しい食事を提供してくれた。衣服も布団も、風邪をひいたときは薬も用意してくれていたのだ。幾度か食事を共にしたこともあるが、一度として当時敵国であったブリタニアの皇族である自分たちを非難することはなかった。

寡黙ではあったものの、穏和な対応をしてくれた心優しい人であったと覚えている。口調はぶっきらぼうだが心優しいスザクの性格は父親に似たんだろうとも思っていた。

開戦の日に兄とジェレミアと一緒に土蔵を逃げ出した時、兄もまだ子供だったのに何度も優しい言葉をかけて自分を励ましてくれた。

戦争の最中であっても優しい言葉をかける余裕のある強靱な精神と、冷静に考えて行動できる実行力を併せ持つ兄のことをとても凄いなと思った。

兄が枢木ゲンブを殺したならば、土蔵を逃げ出す直前のことだっただろう。

兄は友人の父親を殺したその直後にあんなに優しい言葉を吐けるような人間なのだ。それもたった12歳の時に。兄がゼロだという事実よりもそれはずっと恐ろしい事のように思えた。

あの美しい兄は人間の命を何だと思っているのか。

過去に思いを馳せて打ち震えるナナリーを他所に、スザクは痛々しいほどに現在しか見ていなかった。

『でも彼女がこの6年間献身的に君の介護をしたことも事実だ。君はこれまで君に尽くして、尽くして、尽くし続けたルルーシュが、お綺麗な君に相応しくない薄汚れた殺人犯だからとボロ雑巾のように捨てて、事情はどうあれ事実として実の娘を日本に捨てたそのクソ野郎を選ぼうとしているんだよ。』

それが君の人間性だ。そんな君に、ルルーシュの人間性を非難する権利があるとも思っているのか。ある訳が無いだろう。散々に戦争で人を殺した僕に父を殺したルルーシュを責める権利が存在しないように、ルルーシュに守られ続けていた君がルルーシュを非難する権利なんてどこにもありはしないんだ』

「ではスザクさんはお兄様を肯定するのですか!? ギアスを使ってユフィ姉さまを卑怯にも操ったお兄様を、ずっと何もかもを黙っていたお兄様を!!」

破裂するようなナナリーの声にスザクは軽く眉を動かした。

『……そうか、やっぱりルルーシュはギアスを持っていたんだね。それも、ユフィに使っていたんだ』

ふふ、とスザクは腹の底から込みあがってきた笑い声を僅かに零した。

ルルーシュがユフィにギアスを使ったのだとしたら行政特区日本のある時だろう。ユフィが、ルルーシュがゼロだと知っていて撃つ訳がないのだから。

ユフィを殺したギアス嚮団への怒りを口にしていながら、ルルーシュはそうやって裏切るんだ。自分が親友だと思っていた人はそんな奴だった。

だがそうと知ってもスザクには何の迷いも無かった。元よりル

ルーシユへの信頼などもう完全に失われていた。

『でも、だとしてもだ。君はギアスを卑怯だと言ったが、そのギアス嚮団の大本は君の後ろに立つその男だ。なのに君はその男を庇っている。君の行動と言葉にはあまりに大きな解離がある。つまり君は理論で物を考えているわけじゃなくて、ただ感情的になっただけだ。今の君は嘘を吐かれたと駄々をこねるただの幼児だ』

投げやりで言葉の棘を隠そうともしない口調はナナリーからスザクへの憧憬をはぎ取るのに十分な威力を持っていた。

しかしナナリーが自分に対して抱いていた親愛や憧憬が無くなることに、スザクはもう何も思わなかった。そんなことはもうどうでもいいのだった。

それよりもユフィの死に深く関わっているシャルルが未だのうのうと生きているという事実が不快でならない。

『たった一時君に優しくしただけの男を、今優しくしてくれるならと、言葉を尽くして弁明したからと許すのか？昔のことを全て水に流しても良いというのか？馬鹿馬鹿しい。君の言う優しい世界と真逆のことをそいつはしたんだぞ。僕とルーシユが殺した人間の数を足して十倍にしても、その男のせいで死んだ人間の数には達しないというのに！』

「罪の大きさは人の命の数で数えられるものではありません！」

『じゃあ君はどうやって数えるんだ！罪の重さが人の数で数えられるのなら、その理由で測るのか!?正義の名の下に殺したらそれは許されるのか!?馬鹿馬鹿しい！そんな薄っぺらい言葉でどうにでもなるようなもので人の罪が計量されてたまるか!!ユフィを殺したのはそいつ等なんだ!!ギアス嚮団に所属する全員がユフィの敵だ!!死んでも許してたまるものか!!ナナリー、早くそいつの隣からどけ!!この場でぶち殺してやる!!』

「……っ、どきませんっ」

ナナリーはシャルルの腕を握り締めた。

どうしてもナナリーはシャルルを護りたかった。それがどうしてなのかは、ナナリーにもよく分からなかった。

スザクの言う通り父のせいでもんでもない数の人が殺されて、不幸になったことは知っている。兄よりもずっと沢山の人を殺した人だ。今日の前で広がっている虐殺よりも、ずっと酷いことだっただけかもしれない。

自分をこれまで護ってくれた兄を信じられないというのに、自分を捨てた父を護りたいと思うのは理屈に合わない。分かっている。この感情が、父からの庇護を失いたくないという私欲だとか、完璧な兄に対する幼稚な反抗だと言われても否定できないことさえ分かっている。

しかしそれだけではないのだ。ナナリーの目には、シャルルは途轍もない孤独を抱えた、寂しい人であるように映った。

とても怖いと思っていた父親は、本当はそんなに怖い人ではなかった。ただ、寂しい人だった。

父がずっと仲良くしていたV・V・はもう今は信じられなくて、部下は沢山いても友達はいなくて、妻も子供も沢山いるけれど、誰も父を護ろうとなんてしてくれないのだ。

本当の意味では独りの、寂しい人だ。

だから自分一人くらいは父の味方をして良いのではないだろうか。

それは理屈立って説明できない、ただの同情の色が濃い感傷でしか無かった。

それでも何もかもに置いて行かれる寂しさというものを、ナナリーは理解できてしまっていた。だから孤独に佇む父を見捨ててはおけないのだった。

スザクは顔を怒りに歪めて、こうなれば無理やりにもナナリーを奪還しようとランスロットの拳を振り上げた。

しかし脇腹に凄まじい衝撃が走った。そのまま横に数十m吹き飛ばされて地面に追突する。

ランスロットを吹っ飛ばしたトリコロールカラーのKMFは命令を待つ犬のように空中に静止していた。その隣にはもう1機、毒々しい薄紫色にカラーリングされたKMFが浮かぶ。

シャルルはランスロットが吹き飛ばされた方向へ一瞥を向け、簡素な命令を下した。

「枢木スザクを止めよ」

『イエス、ユアマジエステイ』

『イエス、ユアマジエステイ』

命令された直後、2機のKMFが追撃のため飛翔する。

「お父様……」

「行くぞナナリー。最後の準備をしなければならぬ」

ナナリーは開始された激しい戦闘で散る火花に一瞬目を向けて、振り切るように顔を背けた。

スザクはすぐさまランスロットの体勢を立て直して空中に飛び上がった。その軌道を予測していたようにトリコロールカラーのKMFがランスロットに襲い掛かる。

これまで見たことも無い機敏な戦術にスザクは舌打ちをしながら軌道を変更し、ハドロンプラスターを起動させた。

一閃が地下空間に輝く。着弾点の周囲が一瞬で崩壊した。瓦礫が崩れながら地面を覆い粉塵を巻き上げる。

だがその粉塵を吹き飛ばしながら、そのKMFは独楽のようになってくると空中に飛んだ。視認で確認できる限り掠り傷程度しか負っていない。

咄嗟にハドロンプラスターの有効範囲から逃げ出したらしい。なんて奴だ。

『さっすがシュナイゼル殿下直属特派の最新機、ランスロット・コンクエスター！威力やばいな！』

通信が勝手に繋がられたらしく画面上に機体名が示された。画面を見下ろすと、予想していた通りの名前が点滅する。

Kn ight Mare Frame ; Type Tr ight
an-RZA-3F9
code ; 20171029-Steiner Konzer

Pilot ; GEN. Gino Weinberg
Knight Mare Frame ; Type Perce
val-RZA-10JS
code ; 20171102-Britanian—the
Vampire
Pilot ; GEN. Richiano Bradley

『デヴァイサーは枢木スザクだっけ？こうして話すのは初めてだな、俺は、』

スザクは敵であるナイトオブスリーのワンオフ機、トリスタンを睨みつけながらルミナスコーンを起動させた。ランスロット全体が淡色のブレイズルミナスで覆われる。

エナジーフル。機体損傷ゼロ。

『え、いや、ちよ、ちよい待ち！俺は確かにシャルル皇帝にスザクの足止めしろって命令されたけど、破壊しろとは一言も言われてないからさ、そんな戦う必要は、』

ランスロットが轟音を立ててトリスタンの飛び掛かる。トリスタンは豪速で繰り出される足をギリギリのところで受け止めた。舌打ちする。通信からはわあわああと男の悲鳴交じりの声が聞こえた。

『ちよ、待って、知らない俺のこと!?!この機体とか見たことない!?!』

「ナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグだろう」

『そうそう！知ってるんじゃないん！だったらちよつとぐらい待って、』

「敵であることに変わりはない。シャルル皇帝がギアス嚮団に関わりがあると言うのなら、僕の敵だ」

ランスロットの一撃がトリスタンの足を打ち砕く。トリスタンがバランスを崩した瞬間に再度ハドロンブラスターが閃く。

しかし背後からパーシヴァルが襲い掛かってきたために一旦離脱した。

上空に逃げるが即座にヴァルキリエ隊に囲まれる。全部で4機。ヴァルキリエ隊はスラッシュハーケンを放ち、ランスロットの四肢を捕縛して空中に磔にした。

『枢木スザク、お前の大事なものはなんだあ〜』

空中で身動きの取れないランスロットへパーシヴァルが真正面から襲い掛かってくる。

ぬめぬめとした気味の悪い声色が通信越しにスザクの鼓膜を揺らした。

『そう、それは命だああ!!』

「ふん」

右腕のヴァリスを起動し、ヴァルキリエ隊の1機のコックピットを消滅させた。

的確にパイロットの命のみを奪われたヴェンセントがぐらりと揺らいで地面に落ちる。

『マ、マリーカ、マリーカ!』

『よくもマリーカをつ』

他の3機が動揺し、ほんの少しだけスラッシュハーケンを引っ張る力が弱まる。

その隙について独楽のように体を回転させる。3機のヴェンセントが互いにぶつかり、一塊になる。ハドロンプラスターで3機を丸ごと爆発させ、ランスロットは襲い掛かってきたパーシヴァルの右腕を引きちぎった。

「大事なもの?復讐だ。もう他には何も無い」

上空からトリスタンが躍りかかる。離脱。

『ブラッドリー卿、単独で攻撃するのはよせ。あれは特派の、』

『イレブンの猿が!薄汚い血を持つ蛮族の輩がブリタニアのつ』

特攻をしかけてきたパーシヴァルのルミナスコーンの矛先を機体を振じって避ける。

ふわりと上空に浮かび、ランスロットはパーシヴァルのコックピットを足で叩き潰した。

ぐしゃり、と音がしてパーシヴァルはそのまま地面に激突する。ランスロットの足は赤黒く染まっていた。

体勢の崩れたランスロットへトリスタンがハドロンスピアを放つ。だがブレイブルミナスの壁にぶち当たり軌道がずれた。

脇を通り抜けたハドロンスピアを握り、へし折る。離脱したトリスタンに追いつがるようにランスロットが飛ぶ。

エナジー残り85%。機体損傷ゼロ。

『いやちよ、待って待って、そもそも俺はギアス嚮団とやらについて何も知らないのに護衛のために引つ張り出されただけなんだって！俺だって事情を知りたい！シュナイゼル殿下はいきなり合衆国日本を承認するし、だっていうのにシャルル皇帝は「俗事はあ、シュナイゼルにい、任せるうう」としか言わねーし！シュナイゼル殿下に任せられねーから聞いてんのにあんのブリタニアアンロールはっ』

バランスを崩しながらも流石にトリスタンの防御は固い。

スザクはヴァリスを起動させて即座に撃った。胴体部を掠めて火花が散る。

『待って待って、話聞いてマジで！コミュニケーション大事！お前イレブンなんだろう!?イレブンはコミュニケーション大事にする民族なんじゃねえの!?』

「何事にも例外はある。それに生憎僕は今君と話をする理由も余裕も無い」

『俺にはあるね！本国ではさっさとシュナイゼル殿下を宰相から引きずり降ろせてわーわー騒いで煩いし、でもシュナイゼル殿下以外に宰相務まる人選なんてある訳ないし、そんなドン引きレベルの大混乱の中で、なんつって皇帝が南極に来るのか訳分からん！しかもなんか黒の騎士団がいるし、もう、ちよつとほんと誰でもいいから説明して欲しくてたまらないんだよ！マジで！』

「だったら今すぐどけ。君が邪魔をしなければ今ならまだシャルルに追いつけるかもしれない」

『話聞いてた!?ていうか俺もナイトオブブラウンズだからな!?皇帝に逆らうなんてできる筈ないだろ！』

「じゃあ死ね」

ハドロンプラスターが空気を貫くように閃く。

通信越しに息を飲む声が聞こえ、同時にトリスタンから脱出装置が排出された。

無人となったトリスタンにハドロンプラスターが突き刺さり、そのまま空中で爆散した。

排出された脱出装置は地下空間から飛び出して、脱出を果たした。スザクは手の届かない場所まで逃げおおせたジノ・ヴァインベルグを一瞥して手元の液晶画面に目を落とす。

ナナリーの居場所を寸断なく示していた白い点が消失している。恐らくナナリーはシャルルと共にいるだろう。二人共無事にギアス嚮団本部から逃げおおせたらしい。

「シャルルが殺せなかったのは惜しいけど……でもV・V・はまだいる筈だ。ナナリーがいないのなら」

スザクはニーナが設置したボタンに目を落とした。



「また派手にやるねえ」

V・V・は轟音が鳴り響く外に一瞥を向けて嘲笑した。

嚮団の最奥、V・V・は数名の護衛を率いて黄昏の扉に向かって歩いていった。

足取りは軽やかだった。計画が始まるまでそう時間はかからない。ナナリーの準備が整えばすぐにも始められる。

今やギアス嚮団本部が壊滅しようとも、それはV・V・にとって些末なことだった。何しろ既にラグナレクのシステムは完成している。人の生死はもう白紙の裏表程度の違いでしかない。

しかしギアス嚮団本部の全域から聞こえる悲鳴交じりの爆裂音は、聞いていて愉快になれるような音楽ではなかった。V・V・は元来静寂を良しとする男だった。何も聞こえない、自分以外には誰もいない空間こそが、人類が到達し得る最高の幸福であり平和な世界であるとV・V・は心から信じていた。

そのV・V・の性質からして、あまりに煩いこの環境は好ましいものではなかった。

「ユファイとジェレミアと、そしてナナリーのことですら随分頭にくてるみ

たいけど……自分が殺している人もまた誰かのナナリーだったということにルルーシユは気が付いているのかな？気が付いているのならとんでもない自己中心女、気が付いていないのなら、単なる馬鹿だよね。まあ前者なんだろうけど。本当に女っていう生き物は……」

ふとV・V・は言葉を切って背後を見やった。

「恐ろしいよ」

一人の護衛の背中が切り裂かれ、血が噴水のように噴き出した。悲鳴が轟き、混乱した護衛が慌てて拳銃を取り出す。

柱の陰から飛び出したのはコーネリアだった。血濡れた剣を両手に構えている。長期間に渡り調査と潜伏を繰り返していたコーネリアは顔や衣服を泥と埃塗れにしながらも、瞳を爛々と輝かせてV・V・を睨みつけていた。

その姿を認めてV・V・は溜息を吐いた。

「混乱に乗じてここまで乗り込んできたの？よくやるよねえ。ま、弟妹のためなら何だってやるのが先に生まれた者の使命みたいなものだしね」

コーネリアはV・V・に向けて剣の切っ先を構えた。

足を踏み出して切りかかる。周囲の護衛はコーネリアに銃口を向けたが、一閃の下に斬り伏せられた。

今のコーネリアは大軍の指揮官ではなかった。ただ妹の復讐のことのみを考える、激情に駆られた一人の姉だった。コーネリアの視線にはただV・V・のみが映り、彼の少年を殺すことだけに身命を賭していた。

限界まで研ぎ澄まされた殺意はコーネリアの優れた武人としての性質をさらに鋭くし、一個の凶悪な武器としていた。

絨毯に護衛の死体が零れ落ちる。コーネリアは勢いのままにV・V・へと駆け寄り腹に剣を突き立てた。

そのまま横倒しになったV・V・をさらに滅多刺しにする。

咆哮を上げながらコーネリアはV・V・を何度も、何度もV・V・の小さな体に剣を突き刺した。V・V・の華奢な手足が千切れて、内臓が腹から溢れ出ても、何度も。

「ユファイ、ユファイ、ユふイ、ユーフェミア、ユふイ、ゆふイ……」
教徒が神に縋るような声でコーネリアは幾度もユファイの名前を呼んだ。

涙と血で視界がけぶる。

小さいユファイ、優しいユファイ、可愛いユファイ、幸せになるべきだったユファイ。脳内でストロボのように様々なユファイの姿が点滅する。

幸福だった情景とV・V・の肉片が飛散する光景が交じり合い、コーネリアの中で一つの歪な塊になった。

復讐はこれで成った。成った筈だ。しかし何も達成感は無かった。終わったのだという寂しさだけがコーネリアの中で段々と水嵩を増した。

V・V・の胸元に深々と剣を突きたてる。地面に縫い留められたV・V・はごふりと口から血を吐き出して動きを止めた。

悲惨な光景だった。年端も行かない少年の無残な死体を前にコーネリアは涙を流した。

こんなことをしてもユーフェミアは帰ってこないし、喜ぶことなど絶対にしない。

そうとコーネリアは最初から分かっていた。しかしそれでもこうせざるを得なかったのだった。

「…………ユファイ、私を許してくれ。お前の名前を呼びながら、私は」
頭を振り、コーネリアは嗚咽を零しながら逃げるようにV・V・の死体に背中を向けた。

夢遊病者のような足取りでコーネリアはその場から姿を晦ました。

コーネリアがその場から立ち去ってから、V・V・は胸元に突き立てられた剣を抜こうと身を振らせた。

しかし深々と地面に突き刺さった剣を抜くことは幼い少年の手には聊か無理があった。暫く抜こうと奮闘したが、何の成果も無く徒労に終わる。疲労で溜息が零れる。

「痛いなあ」

斬り落とされた両足や内臓がじくじくと痛みを訴える。不老不死

であつても痛覚はちゃんと残っていた。痛みを感じなくなることなんてありえない。痛み慣れることはあつても、痛みが無くなることは無いのだ。

人は生きている限り痛みに苛まれ続ける。それは生まれ持った人間の業であり、逃れられない運命だ。しかしV・Vはそれから逃れようとしたのだった。そのためはずつと、ずつと走り続けてきた。

V・Vは自らの体を苛む剣の刃を指で撫でた。

「痛いな。痛いよ。でも生きてるって証拠だよね」

そのまま暫くその場でV・Vは待った。黄昏の扉へ続くこの道に、きつとそう時間を置かずにシャルルはナナリーを連れてくる。

数分後、予想通りに近寄ってくる足音が聞こえてその方向へと目を走らせる。重い足音と車輪の音だ。

シャルルは血まみれで地面に横たわるV・Vの姿を見つけて瞠目し、痛ましそうに顔を顰めた。V・Vは体を捻ってなんとかシャルルの顔を視界に映した。ごぼごぼと口から血を流しながら、V・Vは囁くような声量でシャルルへ訴えた。

「シャルル、酷いんだ。コーネリアも、ルルーシユも。ギアス嚮団の皆を問答無用で殺しているんだ。話し合いで全てを解決するなんて、一緒のテーブルにつくことが出来なきや無理な話さ。早くこんな世界を終わらせよう。すぐにラグナレクを接続しようよ」

「まだ準備が足りません。ナナリーが十分にギアスを使いこなせるようになるまでは待たないと」

シャルルは車いすの上で血まみれのV・Vに怯えるナナリーの頭を一度撫でてV・Vの前へと跪いた。

「兄さん、一つお聞きしたいことがあるのですが、よろしいですか?」「勿論いいよ。可愛い弟の質問には何でも答えるさ。でも剣を抜いてからでもいいかなあ。さつきから痛くてたまらないんだ」

ほら、と胸から生えている剣を指さす。

シャルルはすぐさま剣を引き抜いた。胸中を刃が通り抜けるおぞましい感触にV・Vは顔を顰めたものの、刃が完全に抜かれたと同時に表情を和らげた。

剣が抜けてもまだ体は動かない。しかし幾分か呼吸がしやすくなりV・V・は深く息を吐いた。

「ありがとうシャルル。もう、コーネリアも酷いよね。実の伯父を殺そうとするなんて」

「ユーフェミアを殺したのは兄さんなのですか」

それは疑問の形式をとっていたものの、事実を確認しているだけという硬質な声色だった。

V・V・は頬を引き攣らせたものの、それはほんの一瞬のことだった。V・V・はまさか、と首を振った。

「違うよシャルル。ユフィを殺したのは本国の貴族の誰かだろう？ もしくはテロかもしれない。それは分からないことだよ」

常と全く変わらない声色のV・V・にシャルルは寂しげに顔を歪めた。

V・V・は自分相手にこんなに自然に嘘がつけるのだ。その時のシャルルの表情は、ゲンブを殺したのが兄だと知った時のナナリーと酷く似通っていた。

「——兄さんはまた嘘をついた。私は……私は寂しい。兄さんに嘘をつかれて」

シャルルは手のひらをV・V・に押し当てた。

「兄さんは変わってしまった」

50年もの長い年月の間、常にV・V・と共にあった集合無意識の欠片が抜け落ちてゆく。それはシャルルの掌を伝い、シャルルの意識へ流れ込んだ。

V・V・は血液が流れ出て行くよりもずっと冷たい虚無感を感じた。それは荒野のど真ん中に放り出されるような感覚だった。このままでは死んでしまうと、脳の底が焼けるような焦燥感がぴりぴりと痛んだ。

しかしシャルルの腕を振り払うだけの力が自分には無かった。それは全身を切り刻まれたせいだけではなかった。なにしろシャルルは壮年の男性で、自分は虚弱な少年の姿をしている。50年間の歳月が二人の間には横たわっていた。

「うん。生きているからね。でも、じゃあこれからはシャルルが背負っていくんだね」

自分に押し付けたシャルルの厳つい掌に、V・V・はそつと自分の小さく柔らかい掌を重ねた。

50年前は同じ大きさだった。時の流れは残酷だ。シャルルは変わってしまった。そして自分も変わってしまったのだ。

しかしシャルルを愛する心は何も変わらなかった。

変わった方が自分もシャルルも幸せになれただろうに。本当に人の感情とは、意識とは、思い通りにならない。それを思い通りにしようとするこの何が悪いというのだ。

ラグナレク計画はシャルルが引き継ぐだろう。であれば、これはただの一瞬の別れでしかない。

悪戯する弟を見守る兄として、V・V・は優しく微笑んだ。

「いいんだ。許してあげるよ、シャルル。実際大したことじゃない。死んでも終わりじゃないことを、僕はもう知っているから」

6. 俺が悪かったんだ。分かってる

ギアス嚮団の内部は煉獄と化していた。地下とは思えない広大な空間は燃え盛り、悲鳴と爆発音が反響している。

予定通り壊滅への一途を辿っているギアス嚮団を真下に見ながら、ルルーシュはギアス嚮団の本部があるだろう奥へ、奥へと向けて蜚気楼を飛ばしていた。ナナリーが持つGPSの信号はそこから発せられていた。

抵抗する力を持たない研究者が悲鳴を上げながら走り回り、泣き叫びながら銃弾で体を穴だらけにしている姿が見えたが、どうでもいいと視線を逸らした。どうせ自分やシュナイゼルの体を弄り回し、ジェレミアを殺しかけ、ユフィを殺し、ナナリーを誘拐した連中の一人だ。慈悲をかける余裕も理由も無い。

それよりナナリーだ。ナナリーを助けに行かなければ。

着信音が響いて視線をコンソール画面に落とす。C. C. から通信要請が入っており、即座に画面に指を滑らせて通信許可を出す。常と変わらない落ち着いたC. C. の声が響いた。

『ルルーシュ、左下の扉から突入しろ』

「分かるのか？」

『ギアス嚮団は世界中に幾つも隠れ場所を持っているが、どこも構造は大体同じだからな。V. V. はその扉から入った先にいる』

「あれか」

地下空間の中央には、時代錯誤甚だしいバロック建築風の巨大な教会が聳え立っていた。見た目は教会だが宗教染みた文様や装飾の一切が省かれている、実務一辺倒の造りになっている。

蜚気楼の進路を左下に構えられた巨大な扉へと向ける。フロートユニットにエネルギーを傾けると、即座に蜚気楼の速度が上がった。そのまま巨大な扉へ突入をしかける。

だが突如として建物の頂上付近から何かが凄まじい速度で吹き飛ばされて視界を横に一閃した。それは轟音を上げて地面に叩きつけられた。

画面に目を落とすと、ランスロット・コンクエスターがナイトオブスリーのジノ・ヴァインベルグ操るトリスタンに攻撃されたと示してあった。トリスタンの隣にはナイトオブテンのルキアーノ・ブラッドリーが乗るパーシヴァルもおり、周囲には4機のヴァルキリエ隊が浮かんでいる。そのまま7機のKMFは乱戦に入った。

「ジノ・ヴァインベルグとルキアーノ・ブラッドリーか。優秀なデヴァイサーだという情報はあるが、」

『スザクなら勝てるでしょ。あつちがナイトオブブラウズを2機抑えてくれるなら、こつちはその隙にナナリーを取り返しに行った方が良いわ』

カレンの言葉にルルーシユは頷いた。

相手が何であれスザクが後れを取るとは思えない。心配するだけ時間の無駄だろう。

カレン操る紅蓮可翔式、ジェレミアの操るジークフリート、そしてC・C・Cが乗る暁直参を伴い、蜃気楼は速度を落とすことなく内部へと突入した。

石壁と扉が容赦なく吹き飛ぶ。衝撃で崩落した柱と壁が、聖堂のように美しく整えられていた内部へ飛散した。

内部には避難してきたらしき白衣を纏う研究者が数名たむろしていた。腰を抜かしてその場に蹲っている。

ルルーシユは蜃気楼の銃口を彼らへ向けた。音声マイクを外部出力にする。朗々とした声は広々とした空間に反響し、尋問めいた迫力を帯びていた。

「V・V・はどこだ」

「ぎよ、嚮主様になにを、」

「私達は何も喋らんぞ！嚮主様こそ、嚮主様こそがこの苦難に満ちる世界の一縷の希望なのだ！」

彼らの眼は一様に虚ろで、今を生きている人間の目では無かった。リフレイン中毒者のように瞳には霧がかかり、やせ細った体躯は長年地下に生きてきたせいか陶器よりも白く変色していた。

ルルーシユはコックピットを開けて外気に肌を晒した。

肌を突き刺すような冷気がパイロットスーツ越しに全身を苛む。歯の根が噛み合わさらなくなるような寒気と眼球を針でつつくような頭痛を感じながらルルーシユは仮面の瞳部分を開いた。

「貴様らに命じる。私に従え。V・Vと、そしてナナリーはどこだ！」

その場にいた研究者全員が瞳を赤く染め上げた。人形のように全身から力を抜き、ぼんやりとした表情でコックピットから身を乗り出しているルルーシユを見上げる。

「……………祭壇奥の第2ブロックに向かっていらつしやいます。Cの世界へ続く黄昏の扉の前に」

「ナナリー・ヴィ・ブリタニアは嚮主様と、そしてブリタニア皇帝と共にCの世界へ向かっています」

「Cの世界？」

ルルーシユの問いに応えるように、その場にいた研究者全員が顔に喜色を浮かべた。餌を前にした豚を思わせる、どうにも忌避感を覚えさせるだらしない笑みに思わず眉を顰める。

「Cの世界こそ全ての意識が集合する彼方。全ての形が集合する、魂の本当の在処」

「真の平和と幸福はCの世界にあり。嚮主様とシャルル様は思考エレベーター経由でCの世界に全ての意識を集合させることで、全世界に平和を齎そうとしているのです」

「肉体の要らない世界にこそ真実の優しさが存在し得る。非物質的な虚数空間であるCの世界においてのみ人類の平和は——」

「っ、分かった分かった、もう良い。ナナリーはそのCの世界とやらにいるんだな。どうやったらそこに行ける」

新興宗教のような熱狂を含んだ口調に本能的な嫌悪感が沸き上がり、現在一番の優先事項を問いたです。

一人が先ほどまでとは打って変わって淡々とした口調でルルーシユの問いに答えた。

「物質的な肉体がある状態では不可能です」

その研究者の言葉はルルーシユの脳へ突き刺さり、反響した。

血液が抜け落ちるように現実感が体から抜け落ちて行く。自分の鼓動が耳元で酷く大きく聞こえた。

ナナリーは歩行障害があるものの他は至って健康的な肉体を有している。しかしこの男は、ナナリーは肉体を有しては行くことのできないCの世界にいると言った。

つまりそれは、

『ルルーシュ、コード保持者の補助があれば肉体を持っていてもCの世界に行ける。私がいれば問題ない。ナナリーもV・Vの手引きでCの世界へ向かったのだろう。決して死んでいる訳ではない』

通信越しのC・Cの言葉にルルーシュは詰まっていた息を吐いた。呼吸が引き攣るような感覚がした。

荒く呼吸を繰り返す。ジェレミアも蜃気楼と通信を繋げて、気遣わしげな口調でルルーシュに言い聞かせた。

『中国基地と同じ造りならば祭壇奥第2ブロックはこちらになりませ。僭越ながら私が先導しましょう』

「あ、ああ。頼むジェレミア。カレン、お前もジェレミアと一緒に前へ。こいつらの話が正しければシャルル皇帝もここにいることになる。ならばスリーとテン以外にもナイトオブブラウンズが護衛として控えている可能性は高い。気を抜くなよ」

『イエス、ユアマジエステイ』

『了解しました、ゼロ！』

前に行くジェレミアとカレンの後をルルーシュは飛んだ。そのさらに後ろをC・Cが護衛する。

遮る壁を躊躇なく粉碎しながら飛ぶ。整然と造られていたギアス嚮団の本部は、ルルーシュが突入してから数十分と経たずに瓦礫を撒き散らかされた廃墟のように様変わりしていた。

壁をぶち抜きながら飛び続ける。暫くするとそれまでとは明らかに様相の違う、長く広い廊下に出た。ジークフリートが通り抜けられる程の広さがあるというのに明かりは少なく、薄暗い。夕暮れの墓地のような沈鬱で陰気な雰囲気満ちている。

廊下の只中に差し掛かったところで、ルルーシュは嚮団の信徒だろ

う死体を数体見つけた。並ぶ死体の中心には場違いなほどに幼い少年がうつ伏せに横たわっている。

少年は長い金髪を夥しい量の血で染め上げており、顔色は紙のように白く、死体であることは明白だった。

『っ、V・V・！』

「なんだと!？」

ジェレミアの言葉にルルーシュは視線をその少年へと向けた。すぐに蜃気楼をその場に降ろす。

「カレン、ジェレミア、お前たちはその場で周囲を警戒しながら待機。C・C.、」

『私も降りるぞ』

言うが早いのか、C・C.は暁直参を着陸させてコックピットを開け放った。ルルーシュもコックピットを開けて地面に降りる。

絨毯を踏みしめながらルルーシュはV・V.に近寄った。ルルーシュの目には、V・V.は何の変哲も無い12歳かそこらの子供のようにはしか見えなかった。幼げな造りの顔は精彩を欠いているもののシユナイゼルやクロヴィスの系統に類する華やかな容姿であり、確かな血縁を感じさせた。

背中に斬りつけられた傷が一つ。そして刺傷が複数。致命傷になったのは胸部を貫通している一撃のようだ。容易に即死できないよう計算された傷痕であり、致命傷を負わせた者がかなりの手練れであることが察せられた。

C・C.は横たわるV・V.の傍に蹲ってその顔を覗き見た。目は気が強そうに吊り上がっており、唇は微笑みを形作っている。生前には滅多に目にするこの無かった、穏やかな微笑みだった。

「……………こいつがV・V.だ。間違いない」

「こんな子供…………いや、見た目だけか」

V・V.がシャルルの兄であるならばもう60歳は超えている筈だ。

しかし見た目だけならばV・V.は戦火に巻き込まれた哀れな美しい少年でしかなく、ユフィを殺し、ジェレミアを殺しかけ、さらに

ナナリーを誘拐した非道な初老の男には見えなかった。

ルルーシユはV・V・の頸動脈に指を這わせた。何の鼓動も無い。床に広がる血液量は致死量を遙かに超えている。瞼を指でこじ開けて瞳を見ると濃い紫色の中心には大きな黒点が広がり声高に死を訴えていた。

「こいつはコードを持っていったんだろう。何故死ぬ」

「コードを奪われたんだ。コードは……一定のレベルに達したギアス所有者が奪い取ることができる。コードを奪われた者は、普通の人間と同じように死ぬことができるんだ」

なるほど。ルルーシユは項垂れるC・C・の額に目を落とした。

シユナイゼルが話したフレイヤへの食いつき方を見るにC・C・が死を望んでいることは明らかだろう。そしてギアス所有者はコードを奪うことができる。

つまりC・C・が自分の共犯者となった理由は、自分へコードを押し付けるためなのではないかと自然に予想がつく。

ルルーシユは不老不死という予迷い事にこれまで全く興味が無かったし、また同様に積極的に死を望むような破滅的思考を持ったことも無かった。コードの存在を知ってからその価値観は変わらず、自分が抱いている死生観は至って平凡なものだろうと思っている。

それ故にC・C・の心境は理解の範疇外にあつた。それは自分だけのことではない。何百年と生きてきたC・C・のことを理解できる人間はこの世界にはいまい。こちらに背を向けてV・V・の遺体の近くに蹲るC・C・の背中はいつになく細く、頼りなく見えた。

「ルルーシユ、行こう。ここにはもう何も無い。V・V・のコードを奪ったのは恐らくシャルルだ。あいつはギアスの達成人だから。シャルルはきつとこの先に、ナナリーと一緒にいる」

C・C・は立ち上がり、V・V・を見下ろしながらルルーシユの袖を引っ張った。V・V・の死体を見下ろすC・C・の目には隠しよもない羨望が浮かんでおりルルーシユは背筋を震わせた。

死を望むC・C・の心境をルルーシユは理解できない。理解できないなどと妄言を吐くつもりもない。理解したくもない。だがC・C・

は自分の大事な共犯者だった。

死んでほしくは無い。だがそんなにも悲しい表情をしてほしくも無かった。C・C・には笑ってほしかったのだ。

「C・C。」

「なんだ」

振り向いたC・C・へ赤く染まった瞳を見せた。

「フレイヤでもお前が死ななかつたら俺はお前のコードを継承しよう。それがお前の望む契約なんだろう？」

あつさりとした口調で言われた言葉にC・C・は一瞬きよとんとした顔をして、すぐに泣き笑いのような表情を浮かべて理解できないと首を振った。

外見年齢通りの素直な顔だった。ナリタ連山の洞窟の中で見た時と同じく、強気の殻に覆われたか弱い女の顔は例えようもなく美しくかった。

「ふ、ふふふ、信じられない馬鹿だなお前は。そこまで察していながら契約を破棄しないとは」

「既に対価を貰っているのに契約破棄をするわけにはいかない。俺はそこまで無責任じゃない」

「馬鹿だ。だが、まあ」

一度鼻を鳴らして、C・C・は伸びあがってルルーシユにキスをした。反射的にルルーシユはC・C・の背中に手を回す。C・C・は応えるようにルルーシユの首に腕をかけた。

触れ合うだけの唇の接触は余韻を残すようにゆっくりと離れた。間近で見る琥珀色の瞳は微かに潤んでいた。

耳に口を寄せてC・C・は囁いた。

「お前はいい女になった。私程ではないがな」

「そうか。ありがとう」

『ちよ、ちよ、ちよっと、何やってんのよあんたたち!!』

外部マイク越しにカレンは悲鳴を上げてC・C・をルルーシユから引っぺがそうと紅蓮可翔式の指を動かしたが、ひよい、とC・C・は体を振らせてルルーシユに抱き着いた。

「見れば分かるだろう。キスだ」

『だ、だから、それが何なんだってっ』

「カレン、C・C・のすることに一々取り合うな。きりがない」

『あんたがそうやってC・C・を野放しにするから増長するんでしようがー！ていうかキ、キ、キスされたのにどうしてそんな、はっ、まさか本当はあんたC・C・とそういう関係なんじゃ……っ』

「いや同性同士のキスなんて挨拶みたいなものだろう。それよりカレン、先へ急ぐぞ」

『……紅月、ルルーシュ様とC・C・の関係性を疑うのは時間の無駄だ。気にするな』

『なんであんたは動揺しないのよ!?!あんたの主君が魔女にいかがわしい真似されててもいいっていの!?!そういう性癖なの!?!』

『違う。同衾しているのだからこの程度は予想範囲内だというだけだ』

『ど、は!?!同衾!?!』

マイク越しにカレンの悲鳴と、どこか諦観の滲むジェレミアの溜息を聞きながらルルーシュは蜃気楼に戻り、コックピットに身体を押し込めた。C・C・も同じように暁へと戻る。

エンジンを再起動させ、飛翔滑走翼を展開する。蜃気楼は空中に飛びあがり、黄昏の扉へと真つすぐに進んだ。ジークフリートと暁直参、そして若干の動揺を残す紅蓮可翔式が蜃気楼を守るように飛ぶ。

瞬間目の奥に激痛が走り、思わずルルーシュは目を手で抑えた。視神経が燃え上がるような痛みだった。だがそれは一瞬のことであり、すぐに痛みは収まった。

『どうされましたか?』

「いや、何でもない」

最近よく感じる頭痛に、しかしルルーシュは構うことは無かった。それより一刻でも早くナナリーの救助へ向かうことを優先しなければならなかった。

そのまま先へと進むと巨大な扉に突き当たった。

しかしそれは扉というよりも、扉のレリーフが刻まれた巨大なアン

テイクのようであり、開閉する機能を持ち合わせているようには見えない。取っ手も無く、一見するとただの彫刻品でしかない。

ルルーシユは蜃気楼に乗ったままその扉に接近した。ドルイドシステムでその扉の成分を調べるも、ただの古い彫刻であるという解析結果のみが画面に表示される。蜃気楼の指先で扉の文様をなぞるが何の反応も無い。

「これが黄昏の扉なのか？」

『これってただの遺跡じゃないの？道を間違えたんじゃない？』

『いや、これが黄昏の扉だ。物理的な意味の扉ではないんだ。これからコードで思考エレベーターのシステムを起動させる。少し衝撃があるが抵抗せずに、しっかりと意識を保って、』

C・C.の言葉の途中で頭上から空気を切り裂く音がした。咄嗟にジークフリートが蜃気楼を護る。

金属が軋む耳障りな音が響く。落ちてきたのはKMFだった。そのKMFはジークフリートの球状の機体に傷を付けてバウンドするように跳ね返った。踊るように優雅な動作で地面に着地した黒と白の色彩を持つKMF、ギアラハッドは再度ジークフリートへと向かう。

「っ、ナイトオブワン！」

『だけではないぞー！』

紅蓮の背後からもう1機のKMFが襲い掛かった。

しかし紅蓮は凄まじい速度で体を捻って攻撃を躲し、攻撃をいなされてバランスを崩したKMFの頭部ユニットに掴みかかった。

だがスラッシュハーケンが蜃気楼に向けて放たれ、一瞬動揺したカレンが紅蓮から力を抜く。その隙に離脱される。スラッシュハーケンは絶対守護領域にぶち当たって跳ね返った。

ルルーシユは画面上にKMFの解析情報を表示させた。

Knight Mare Frame ; Type Galahad-RZA-1A

code ; Excaltibur-the-ONE

Pilot ; G.A. Bismarck Waldstein

Kn i g h t M a r e F r a m e ; T y p e F l o r e
n c e | R Z X | 1 2 T M I
c o d e ; B r i t a n i a n | A l e x a n d e r d r o
n e

P i l o t ; G E N . M o n i k a K r u s z e w s k i
「ナイトオブワンとナイトオブトウエルブか」

皇帝の護衛役の2人がここににいるということは、間違いなく皇帝は黄昏の扉の先にいる。そして恐らくはナナリーも皇帝と共にいるだろう。

舌打ちする。居場所が分かったのは良い。だがこの2人は容易に見逃してはくれまい。モニカだけなら大した障害でもないが、ビスマルクは邪魔だ。

ルルーシユの命令を待たず紅蓮可翔式とジークフリートが飛び出した。そのまま敵の2機に襲い掛かる。

『C・C、ルルーシユ様を』

『ごっちはあたし達がなんとかするわ!』

「っ、だがあいつはナイトオブワンだぞ!?俺も、」

『足手纏いよ!あんたは早くナナリーを助けに行つて!』

『こちらはお任せを。ルルーシユ様はナナリー様を!』

『——ルルーシユ、その場から動くな』

通信越しにC・Cの声が響く。奇妙なことに、その声は耳元に直接伝わったようにルルーシユの鼓膜を揺らした。

視界が白で侵食される。

ギヤラハッドと紅蓮可翔式、フローレンスとジークフリートの間に散る火花が網膜へ落とした影を最後に、目の前の光景は全て白で染め上げられた。

水中に浮かぶような奇妙な浮遊感と心地よさが体の表面を撫でる。ギアスをC・Cから受け取った時と似た、点滅する白い世界が目の前に広がっていた。

ここはどこだ。どういうことだ。つい一瞬前まで蜃気楼の狭苦し

いコックピットに座っていた筈なのに、今いる場所は閉塞感の欠片もないだっ広い空間だった。

何が起こったのか分からず、きよろきよろと周囲を見回す。すると目の前にC・Cの姿が浮かび上がった。まるでレリーフが浮かび上がるように突如として現れたのだ。

C・Cの額には赤い鳥が羽ばたいている。C・Cはルルーシュへ向かって白い手を差し出して、珍しく皮肉の混じっていない柔和な笑みを浮かべた。

「お前は暁直参に乗っていたのだろう。どうして、」

「言っただろう？物理的な存在はこの先では意味を成さないんだ。さあ、行こうルルーシュ。虚数世界へ案内しよう。ナナリーとシャルルが迷い込んだCの世界へ。全存在の在処と形が意味を無くす、この世の彼方へ一緒に行こう」

白い光に包まれた蜃気楼を視界の端に認めながら、カレンは扉を背にナイトオブワンと対峙した。その隣ではジェレミアがナイトオブトウエルブと睨み合っている。

Cの世界とかいう訳分からない空間に、C・Cというこれも訳の分からない女と一緒にルルーシュを放り込んだのだから心配でならないのは確かだ。しかしそもそもそのルルーシュにしたって、カレンにとってはあまり訳の分かる人間ではない。だから心配するだけ無駄なのだろう。物理的な脅威が無い状況であれば、ルルーシュならば一人でなんとかする。理由なくカレンはそう信じられた。

しかし。ちらりと隣のジークフリートを見やる。やや過保護のきらいがあるらしいこの騎士はどう思っているのだろうか。

『ねえちよつと、いいの？あんたはルルーシュと一緒に行きかけたんじゃない？今からでも追いつけるんじゃない？あたしは別にナイトオブラウンズ2機相手でも全っ然平気だけど』

『それは慢心に過ぎる。ナイトオブラウンズは、特にナイトオブワンは一人で手に負えるような相手ではない』

はつきりとした声にはカレンを侮っているという雰囲気は含まれ

ていなかった。だがそう断言されると、曲がりなりにも黒の騎士団の
エースとして不機嫌にもなる。不満そうにカレンは鼻を鳴らした。
スザクがナイトオブブラウンス2機を相手にしても何も言わなかった
のに。自分はスザクより弱いと思われているのか。

だがナイトオブワンの手強さは直に対面したことのないカレンよ
りもジェレミアの方がよく知っていた。6年以上前には幾度か手合
わせをしたこともあり、1年前には白兵戦でズタボロにされた。ビス
マルクは名実ともにブリタニア最強の騎士であり、その実力は他のナ
イトオブブラウンスとは格段に違う。

カレンという少女はルルーシュが素の顔で接することのできる貴
重な友人であることをジェレミアは知っていた。さらに学園のクラ
スメートと違い、彼女はルルーシュの身分から事情までを知っている
数少ない理解者だ。

カレンを失うことは年齢相応の繊細な精神を持つルルーシュに
とって深い傷跡と成るだろう。

それにカレンの強気な性格と純粋な忠誠心はジェレミアにとって
好ましい部類に属した。ブリタニアの騎士道精神を女性だてらに備
えている、有望な若者だ。血気盛んに過ぎるのが玉に瑕だが。

ここで見殺しにするのは気分が悪い、と思う程度にはジェレミアは
カレンを認めていた。

それに何よりルルーシュの護衛として共にCの世界へ行くよりも、
ここでカレンと共闘した方が勝機は上がる。

『ナイトオブワンはナイトオブブラウンスの中でも別格だ。スリーとテ
ンを相手にしたスザクのようにはいかない。ルルーシュ様とC・C・
が二人きりになったことは紅月にとって不本意だろうが、そう言って
いられる状況でもないことは分かっているだろう』

『カレンでいいわよ』

紅蓮可翔式のエンジンが唸る。戦意の籠る青い瞳が帝国最強の騎
士へ向く。

『ま、気に入らないけど別にいいわ。そもそもあたしの一番のライバ
ルはスザクでもC・C・でもなくあんたなんだから、ここであんたに

手柄を独り占めされないように頑張る方がよっぽど建設的よね』

いや、頑張るまでも無くKMFの操縦技術でカレンに勝てる気は全くしないのだが。

ジェレミアがそう思うのとほぼ同時に、紅蓮可翔式が繰り出した輻射波動弾とギヤラハッドが抜き放ったエクスカリバーがぶつかり合い、閃光を放った。

■ ■ ■

そこは黄昏の光に満ちていた。

昼と夜の一瞬の境目が永遠に続いているような、美しくも歪な光景だった。傾いた太陽はいつか確実に来る落日へ抗うように顔を真っ赤に染めている。

ただ白だけの虚ろな空間から追い出され、ルルーシュはいつの間にかこの黄昏色の空間に追いやられたようだった。

「ここは……」

周囲を見回す。背後には蜃気楼が立っている。特に損傷も見当たらない。上空には幾つもの雲が浮かび、天使の梯子を無限に造り続けている。

足元は空中に浮かぶ巨大な石板に支えられていた。いや、石板ではなく石畳だ。重力など存在しないかのようには、確かな質量を持つ筈の石畳は空中に静止したまま微塵も動かない。もしかするとこの空間における重力は自分の知る世界の重力とは異なるのかもしれない。物理的にありえないが、そう考える方が論理的だ。

途切れた石畳の向こう側には厚い雲が広がっており大地が見えない。そもそもこの空間には大地など存在しないのだろうか。

目の前には階段が伸びている。階段の上を見上げると、車いすに座る少女と、その隣に聳える巨躯があった。

ナナリーとシャルルだ。

「久しいなあ、ルルー」

「ナナリー!!」

シャルルはゆつくりと口を開いたが、ルルーシュの視界にはシャルルの入り込む隙間は微塵も存在しなかった。

それよりもナナリーだ。ナナリーを目にした瞬間にルルーシュは今自分がいる不可思議な空間も、シャルルの存在もどうでもよくなった。

ナナリーがいる。そのことだけが脳内を占拠する。怪我はしていないようだ。でも顔色が悪い。早く家に連れて帰ってあげなければ。こんなところに無理やり連れて来られたのだから体調が悪くなるのも当然だ。温かい食事を用意して、柔らかな衣服に着替えさせて、いつもの日常に戻してあげないと。

「ナナリー、ナナリー！大丈夫か？怪我はないか？遅くなっちゃってますまない、早く帰ろう」

「……ゼロ、さん」

そこまで言っただけでルルーシュは自分がゼロの恰好をしていることによくやく気付いた。仮面もそのままだ。

一瞬戸惑ったが、ルルーシュはすぐにゼロの仮面を剥ぎ取った。認めたくはないが、シャルルは自分とナナリーの父親だ。

いくらゼロが救国の英雄として合衆国日本で扱われているとはいえ、正体不明の仮面男と実父では後者を選んでもしょうかもしれない。ましてやゼロはテロリストだ。それもクロヴィスを殺した、ナナリーからしてみれば兄弟殺しの殺人者だ。

しかしゼロが自分だと知れば、きつとナナリーは驚愕しながらも自分の下へ向かってきてくれるとルルーシュは信じたのだった。

だが予想と反して、ナナリーはゼロの仮面の下から現れたビスケットに似て透ける肌を持つ兄の顔を見て口を引き結んだ。涙を耐えるように顔に皺を寄せる。

「——お兄様、初めてお兄様の顔を見たような気がします。それが……っ、それが、人殺しの顔、なのですねっ」

声には嗚咽が混じっていた。口に掌を当てて、う、う、と引き攣る様な声を上げて哀れっぽく歯を食いしばっている。

そこでようやくルルーシュは、ナナリーにとって自分がゼロだという事実は受け入れ難い悲劇だったのではないかと思いつつた。

ここ数カ月にはわたりゼロは合衆国日本の救世主と呼ばれ、世界各国からも英雄として扱われている。無論のことその実は人殺しであり、ブリタニア人から忌避の目で見られるのは当然であるとルルーシュも分かっている。

だがブリタニアの敵国、つまりは強者に蹂躪される弱者からしてみればゼロは至って人道的な革命家であり政治家だ。心優しい、優しい世界を夢見るナナリーがゼロを非難することはあっても、拒絶することはないと思っていた。

しかしそれはゼロがナナリーの知らない人物であった場合の話だった。

ルルーシュはナナリーの唯一であり、完璧な存在だった。その兄が実は戦争を引き起こし、大量に人を殺し、さらに実兄クロヴィスを殺した世界有数のテロリストだと知れば受け入れるのは困難であった。

兄は心優しい完璧な存在だと、自身の不完全さに鬱屈を抱くほどに信じ切っていたナナリーは、ゼロを受け入れることはできても、ゼロがルルーシュである事実は到底受け入れ難いのだった。

「どうして、どうしてお兄様はこれまで沢山、沢山酷いことをなさったのですか。沢山の人を殺して、クロヴィスお兄様まで殺して……っ」「それは……」

涙を流すナナリーへ、どう説明するのが正しいのか。ルルーシュは言葉を詰まらせた。

ジェレミアの復讐のためにはクロヴィスを殺す必要があった。だがジェレミアがギアス嚮団に改造されたことをナナリーは知らない。それに復讐のために人を殺すことを、優しいナナリーは認められるだろうか。

ルルーシュは喉奥から声を絞り出した。

「クロヴィスは多くの日本人に圧政を敷いていたんだ。そのせいで多くの日本人が無為に命を落とした。お、俺は日本人を、弱者を救うために、」

「クロヴィスお兄様は優しい方でした。少なくとも、私達には優しかった！話し合う余地はあった筈です！」

「ナナリー、弟と話し合うだけでそれまでの政策を否定する程、クロヴィスは馬鹿ではなかったよ」

「ではお兄様はクロヴィスお兄様と話し合うことを試したのですか？話し合って、そして否定されたから、しようがなく殺したのですか？そうしなければ日本人を助けることができないと確信して、他の手段が無かったから、最後の選択肢として殺したのですか？」

ナナリーの言葉はあまりに真つすぐだった。それは理想論だとルルーシユは叫びたかった。

現に、それを言ったのがナナリーでなかったらルルーシユはその主張を一笑して相手にもしなかつただろう。

しかし階段の上から自分を見下ろすナナリーをルルーシユは仰ぎ見ることしかできなかった。ナナリーは自分の唯一であり、世界で一番大事な存在だったのだ。ルルーシユの世界はナナリーが中心になって回っていた。ナナリーを護ることがルルーシユの存在意義と言っても過言ではなかった。

「どうしてお兄様はゼロになったのですか。本当にそれは日本人のためだったのですか？本当は、私やジェレミアさんのためではなかったのですか？もしそうなのだとしたら、私がそんなに沢山の人を殺してまで、助かりたいと願うとも思ったのですか？」

「それは、でもっ」

「どうして枢木首相を殺したのですか。あんなに私達に良くしてくれた人を。スザクさんのお父さんを！」

「ナナリー、どうしてそのことを知って、」

「スザクさんのお父さんを殺しておいて、どうしてスザクさんの友達だという顔ができるのですか!!」

「それは、俺は、」

「どうしてお兄様は本当は女性であることを私に隠していたのですか。みんなには教えていたのに、私にだけ、私にだけっ」

「っ、シャルルに聞いたのか、でも、それは、俺が女だと知ったら、」

ゲンブが俺に何をしたのか、聡いナナリーに気付かれることを恐れていたんだ。

だがその事実をルルーシユは口に出せなかった。口に出してしまつたら何か、決定的なものが終わってしまうような気がしていた。そのことだけはナナリーに知られたくなかった。自分が男に股を開いて娼婦のような真似をしたから、自分達は生き延びたのだと。そんな汚い真実だけは純真無垢なナナリーに知られる訳にはいかなかった。

それはナナリーのためではなかった。ナナリーを護ることがルルーシユの存在意義であつたから、自らナナリーの純真さを汚す行為は自分の存在理由を否定する行為に等しかつた。

何を賭してもナナリーを自分は守らなければならなかつた。そのことだけが、国を追われ、凌辱された自分が持つ生きる価値だつた。

だからそのためにナナリーへ嘘を吐くことにルルーシユは疑問を覚えなかつた。

ナナリーはルルーシユの滑らかな唇が普段のように饒舌に動いて完璧な反論を紡ぐことを望むように一心に見つめた。しかしルルーシユは黙り込んで顔を俯かせた。

次に顔を持ち上げたルルーシユの表情は獰猛さに満ちた捕食者のそれだつた。瞳は爛々と輝き、見る者に畏怖を覚えさせる圧倒的な生命力に満ちていた。

ルルーシユは挑むようにナナリーを見上げて声を上げた。そう大きな声ではないというのにルルーシユの言葉はCの世界へ凍てつくような冷厳さを持つて響いた。

「——ああ、そうだナナリー。お前の言う通り俺はゼロとして戦争を起こし、さらには兄クロヴィスを殺し、過去には枢木ゲンブを殺した。しかしそれら全ては俺の私欲による行動でありお前のためなどではない。俺は俺のために、俺が生き残るために、そして俺の欲のために人を殺し、そうしてここまでやってきたのだ」

言い訳や反論を一切含まない、人を殺した罪悪感を欠片も感じさせない凍り付くような声色にナナリーは息を吐いた。

まさか、と思った。自分で言っておきながら、ナナリーは兄が私欲で人を殺すような人ではないとどこかで期待していた。

違うんだナナリー。それは実は全部これこれこういう理由があったて、俺は無実で人殺しなんかじゃないんだ。全部父さんとナナリーの勘違いだよ。

父さんは母さんの葬式に出てくれなかったから気に食わないけど、ナナリーが間に入ってくれるならちゃんと仲直りするさ。

父さんと仲直りができれば他の兄弟達とも仲直りできるかもしれないね。ナナリーのおかげでみんな仲良く平和におさまるだろうな。

心配をかけてしまってすまなかった。さあ一緒にアツシユフオードへ帰ろう。

ナナリーはそういった、どこまでも平和的で大団円でご都合主義な話の終結を望んでいた。

だが現実には遙かに厳しかった。兄は人殺しだ。それも大儀を持たない、自分の私欲のために人を殺せる冷徹な人間であり、自分が想像するよりずっと恐ろしい人だった。

圧倒的な威圧感に晒されて打ち震えるナナリーに、ルルーシユは凍り付いた鐘が響き渡るような声でさらに言葉を重ねた。

「俺を捨てたブリタニアが憎かった。だからゼロとして戦争を起こした。皇族としての権限を恣にするクロヴィスが気に入らなかつた。だから殺した。ブリタニアと日本の戦争が起きれば皇族の俺はまともな扱いをされないことは分かっていた。戦争を生き延びるためには枢木ゲンブを殺して日本軍の目を晦ませて、その隙に逃げる方法が最善だと判断した」

ルルーシユの声は朗々と響き渡った。

「だから殺した。生きるためだ。その何が悪い」

歯を食いしばり、ナナリーは前のめりになりながらルルーシユを睨みつけた。

「お兄様、あなたという人はっ」

「お前の隣にいる男もそうだ。自分の欲のために数えきれない程の人を殺した。ナナリー、俺を信じないというならそれでもいい。だがそ

れならばシャルルを同様だ。そいつは俺よりもずっと多くの人を殺したんだ。それも自分の命のためではなく、領土や金や権益のために。

ナナリー、早くその男から離れろ。そしてアッシュフォードに帰るんだ」

ルルーシユはナナリーの元へ向かって歩き出した。ナナリーは何度も頭を横に振った。

「嫌です！もう、もう私はお兄様のことを信じられない！」

「俺のことは信じなくていい。それでもいい。俺と一緒に暮らすのが嫌だと言うのなら俺はお前の前から姿を消そう。もう、それでもいい……とにかく帰るんだ。」

シャルルと一緒にいてもお前にいいことなんて何一つとしてありはしない。その男には父親として振る舞う価値なんて無いし、お前が傍にいる価値も無いんだ。そいつは最悪の人殺しで、人の痛みなんて分かりもしない男だ。人間として最低な奴で信じる価値なんて欠片も無い。ましてや人の親になる権利なんてありはしない、最悪の、本当は誰も味方なんていやしない……」

「止めて!!」

張り上げた声はルルーシユを射抜いた。

その時初めてナナリーはルルーシユを排斥すべき敵として睨んだ。ナナリーは自分よりも弱く、哀れな生き物を庇うかのように車いすを動かしてシャルルの前に立った。

「お父様をそんな風に言うのは止めて、止めて上げてよ……可哀想でしょう……っ」

はらはらとナナリーが零した涙に、ルルーシユはさらにシャルルへ向けようとしていた悪口雑言の矛を収めた。

シャルルは巨木のように表情を変えないままルルーシユを見下ろしている。自分を庇っているナナリーの頭をゆっくりと労わるように撫でた。

その手つきは甘やかで、親が子供に与えるにふさわしい優しさを含んでいることに気付いてルルーシユはぞつとした。今更この男は何

をしているのか。今更、許されるとでも思っているのか。まさか許されたいとも思っているのか。

生きていないと自分達の命を否定したくせに。日本に捨てて殺そうとしたくせに。

いい歳をして自分よりもずっと小さい、捨てた娘のナナリーに庇われて。

「気持ち悪い」

思わず口から出た言葉を耳にして、ナナリーは弾けるようにその眼差しを鋭くしてルルーシユを睨んだ。

しかしルルーシユはナナリーの怒気に満ちた視線を感じながらも、シャルルへ向けた汚物を見るような目を下げようとはしなかった。

「もうよせナナリー、そしてルルーシユ」

軽やかな足音を立ててルルーシユの背後から女性が飛び出す。それはC・C・Cだった。

C・C・Cはルルーシユの隣へと立ち、窘めるような視線を睨み合う姉妹と、車いすに座す娘の背後で黙して動かないシャルルへと向けた。

「見苦しいぞ。双方ともにな」

7. 人は成長する。そしていなくなる。しようがないことなんだ

「何の用だC・C.」

「大した用じゃない。こいつの妹を取り返しに来たんだ。ついでに旧友と話し合いにもな」

この世界で唯一皇帝と称される男を前にしてC・C.は微塵も怯える様子も無く胸を張った。シャルルもC・C.の不遜な態度を見咎めることも無くただ静かに喋り続ける。

「我々の計画にはナナリーの協力が不可欠だ。それを知っていて邪魔をすると言うのかあ？」

「それを決めるのはナナリーだ。シャルル、お前じゃない。確かにナナリーもルルーシュも、シュナイゼルもユーフミアもお前の血から生まれた人間だろうがな、だからと言ってお前の所有物ではないんだ。お前が父親の所有物でありえなかったように」

「分かっておる。分かっておるよ……だからこそ、わしはナナリーの意思を確認した上で計画を完成させるのだ」

「ほう。ではナナリー、お前はシャルルから計画の全貌を聞いたのか？」

琥珀色の瞳に見据えられてナナリーはゆっくりと頷いた。

「はい。全てを。まだ……協力するかは決めておりませんが」

「計画？」

C・C.の方を振り向いたルルーシュに、どう説明したらいいのやらとC・C.は俯いた。

C・C.はシャルルの計画内容をほぼ全てを知っている。陰で暗躍しているリアンヌのことも、ギアスキャンセラーが計画の中でどのような役目を負っているのかもだ。そしてその計画の目的についても知悉していた。

だが計画に賛同したことがある身として、全てをルルーシュに伝えるのは躊躇われた。一応自分は、彼らの共犯者であったのだから。

そして何より計画の全貌を説明したとしてもルルーシユにはとても理解できまいとも思う。

永遠の楽園を作るなど、常に前へ前へと進み続けることを願う生命力に満ちたルルーシユには考えもつかない愚行でしかない。

言葉を失ったC・C・の代わりにシャルルが口を開いた。川底を這うような質量を伴う声をしていた。

「——全人類の意識をギアスにより肉体から引きはがし、そしてCの世界と現実世界を結ぶ思考エレベーターを利用することでこの星に存在する全生命をCの世界で1つに纏める。そして唯一存在となった我々は思考エレベーターによつてCの世界から現実世界へと凱旋を果たす。」

唯一存在、集合無意識となった我々には最早物理的存在は意味を為さない。肉体は存在価値を無くし、ただ意識だけがこの地球に存在することになる。

これによりこの星には「他者」という存在が無くなる。自分という絶対多数の前では全ての諍いは存在する意義を無くし、全ての嘘の存在理由も無くなる。而して我々はこの宇宙に永遠の楽園を築く。わしはこの計画を、ラグナレクの接続と命名した」

シャルルが口を閉じた時には、ルルーシユはほかんと口を開いていた。何か返事を返すべきなのだろうが、何を言っているのか分からない。真面目な会議中にいきなり大道芸人が乱入してきたような、理解が追いつかない感覚に脳内をかき回されている。

現実主義の寵児であるルルーシユはシャルルの言った言葉の半分も理解出来なかったのだった。

ようやく何となく、本当に何となくシャルルが意図する計画をぼんやりと感じ取ったルルーシユは、まずシャルルの正気を疑った。

「……本気で言っているのか?」
「本気だ」

「本気で貴様は旧約聖書に出てくるような楽園を再現しようというのか? 精神科を受診した方がいいんじゃないか? 医療保護入院が必要となれば同意書ぐらいいは書いてやるぞ」

「これは誇大妄想などではない。元よりイブがいたことが間違いだったのだ。全ての存在が余計な感情や経験を持たない、たった一つの存在（アダム）でいれば世界はずっと平和なままであっただろうに」

「そ、そんなつ、馬鹿なことがあるか！アダムとイブが荒野に進出する前の、神の言うことをはいはいと聞くだけの家畜のような日々に戻って、それが楽園だと、平和だと、お前は本気で思っているのか!?馬鹿馬鹿しい。人間は前に進む生き物だ。嘘や戦争や差別があつたとして、それがどうだというんだ。完全な平和を作ることができないから、これまでの人類の進歩を全て否定して足を止めるだなんて認められる筈がない！」

「それはお兄様が強者だから言えることです」

鋭い瞳でナナリーはルルーシユを睨んだ。

「足を動かし続けることのできない人だっているんです。足を止め、ひたすらに穏やかで優しい世界の中で生きることを望む人だっているんです。その人たちにとってこの世界はあまりに残酷過ぎるのです。お兄様は、戦えない人のことを考えたことはあるのですか」

「確かに戦い続けることは不可能だ。休息は必要だろう。足を止めて過去を振り返り、思い悩む時間は必要かもしれない。でもこの世界から戦いが無くなることなんて無いんだ。生きるためには戦うことが絶対に必要なんだよ」

「では、ではっ、戦いたくない人はどうすればいいんですか！人を傷つけることも、傷つけられることも嫌な、戦う力の無い人々はどうすればいいんですか！何千年も戦争が無くならない、いつまでたつても差別が蔓延る理不尽なこの世界で、戦う力の無い人はどう生きればいいんですか!!」

空気を裂くナナリーの訴えにルルーシユは一つしか答えを持たなかつた。

それ以外の答えを返すことはルルーシユにはできなかつたのだ。ルルーシユはまだ若く、そしてこれまで生きてきた人生はあまりに過酷過ぎた。ルルーシユはナナリーが理想とする安楽な、何も心配のいらない世界というものを想像することすらできないのだった。いつ

だって人生には暗い影が付きまとい、そしてそれはルルーシユにとって当然のものだった。

生きるということは戦い続けることであり、自分の安寧のためには他の何かを犠牲にしなければならぬという考えが深くルルーシユの中に根付いていた。一瞬でも足を止めれば、それは即ち死に繋がることだという思考が彼女の意識の根底に横たわっていた。

「戦えなければこの世界では死ぬだけだ。この世界は優しくない。いつだって理不尽にできている。だから戦うんだ。剣でも銃でも、言葉やペンでも、知識や技術でも、何かを自分の武器にして死ぬまで戦うしか俺達には道は無い」

「だからそれがっ、耐えがたいのではありませんか!」

ルルーシユには何故ナナリーがそう悲痛な顔をしているのか、何故シャルルの妄言に付き合ってるのか理解ができなかった。

確かにナナリーは足は動かないがもう目は見えるし、頭脳は明晰で、容姿は他に比較するものが無い程に美しい。そして兄である自分もいる。それら全てがナナリーの武器になる。皇族出身という経歴が邪魔をするかもしれないが、合衆国日本が設立して正式な戸籍を得ることができたのだからそう問題になるとも思えない。

だというのにどうして永遠の楽園などというシャルルの甘言に惑わされるのか。明日を捨て去ってまで。

戦うことに慣れた、戦わない生活を思い浮かべることさえできないルルーシユには、戦う力が無ければ明日を迎えることも出来ない世界を厭うナナリーの心情はとても理解できないものだった。

「お兄様には分かりません。弱者の味方をすると言いながら、お兄様はきつと死んでも、本当に弱い人の気持ちなんて分からないのです……」

「しようがないだろう。俺は弱者じゃない。弱者になりたいとも思わない。負け犬のままでもいいという奴らの気持ちなんて分かってたまるものか」

「っ、だから、それだからお兄様はっ」

激昂するナナリーの前にC・C・が立ち塞がった。

クラブハウスで幾度か見かけたことのあるC・C・はこれまで見たことの無い深い思慮を讃えた瞳をしていた。

「もう止めるナナリー。誰かが誰かを本当に理解することは不可能なんだ。結局お前はお前にしかねないし、ルルーシユはルルーシユにしかねない。お前の考えをルルーシユに押し付けるな。ルルーシユ、お前もだ。お前にはナナリーの考えを否定する権利なんてない。そうやって意見を戦わせても何の意味も無いだろう」

C・C・の意見は正論だが、現状においては容易に肯首し難かった。

ルルーシユはナナリーを説得して同道することを承諾させなければこの場から脱出することはできない。無理やり連れて行くことも出来なくはないだろうが、コードを持つシャルルが傍にいてはそれも難しい。シャルルのコードがC・C・の持つコードと同じ力を持つのであれば、触られただけで昏倒してしまう。

もうナナリーにギアスを使うしかないのか。だがそれだけではどうしてもしたくない。

歯噛みをしながら頭を悩ませていると、突如目に痛みが走った。またか。だがそんな痛みにも構っている暇も無かった。

ルルーシユは両目を見開いて真つすぐにナナリーを見た。

左目は深紅に染まっていた。ナナリーは黄昏のように赤く光る瞳に見入った。

瞳目したC・C・が止める間もなくルルーシユは口を開いた。

「ナナリー、お前はお前の一番正しいと思うことを、お前の好きなようにしたらいい。そうする権利は誰にだってある。でもな、」

何気なく言い放たれたその言葉はナナリーの意識の根底に深々と突き刺さった。ナナリーの瞳の淵がうつすらと赤く染まっていた。

正しいと思うことを、好きなようにする。

その言葉が脳裏に浮かび唐突に一つの姿を表した。

その考えは弱者である自分の道を照らし、争いと差別が蔓延る暗鬱としていた世界を輝かしく見せかけた。

そうか。自分はそのために生まれてきたのか。

その馬鹿馬鹿しいまでに壮大な計画のために。本当に、誰かが誰かを心から理解することを可能とするために。

全世界が手を取り合う唯一の可能性のために。

寄り添い合う愛し合う夫婦でも、心から信頼し合う親友でも、誰よりも愛おしい姉妹であつても、死ぬときは一人だ。それはきつと世界で一番寂しく、残酷なことだ。

その残酷な世界を否定するために自分はきつと生まれたのだ。

本当に大好きな人と理解し合つて、一つになるために。愛し合うために。

その考えはナナリーに心地よい使命感を齎した。生きる意味というものが生まれて初めてはつきりとした形を持つてナナリーの中に去来したのだつた。

それはルルーシユにとつてのナナリーを護ることへの使命感と似た、魂を燃やすような力に満ちていた。

「——分かりました」

ナナリーはシャルルへと目を向けた。狂気にも似た生命力が赤く瞳に瞬いていた。

「私はお父様の計画に協力しましょう」

「はっ!? ナナリー!? 何故、」

悲鳴を上げるルルーシユを睨みつけて、ナナリーはとてこの間まで平穏を享受していた少女とは思えない冷ややかな声を出した。その瞳の淵が赤く染まっていることに気付いてルルーシユは驚愕した。

「な、何故だ、俺はギアスを使つていないのに!」

「お兄様はこの計画に賛同されないのでしよう?」

「あ、当たり前だ! なんて馬鹿なっ!」

「ならばお兄様は私の敵です」

ナナリーの瞳は痛いほどに澄んでいた。ギアスの支配下に置かれたその瞳は、これまでのナナリーの人生の中で最も生命力に富んでいた。

ナナリーはルルーシユから自分が一番正しいと思うことを、自分の好きなようにするというギアスを受けた。

ギアスの力によりナナリーは兄の庇護下から完全に脱して、自分の意思で決断を下すことを可能とした。ギアスによりナナリーは自身のはっきりとした自我の形を認識したのだ。それは自己意識とも呼べるものだった。

ナナリーは自己意識を持つ一人の人間として、全ての個を否定するラグナロクの接続こそが自分の使命だと決断を下した。

爛々としたナナリーの赤い瞳を目の当たりにして、ルルーシユは懐から拳銃を取り出して銃口をシャルルに向けた。シャルルさえいなければナナリーが惑わされることは無かったのだ。あの男が全ての元凶だ。

しかしナナリーがシャルルを庇うように前に立つ。あまりに体格が違うためにナナリーがシャルルを庇ったところで大して意味も無いのだが、予想着弾点の近くにナナリーがいるだけでグリップを握る手が震えて、銃口がぶれる。

何故だ。自分がナナリーにかけてギアスは、自分の正しいと思うことを、自分の好きなようにするというギアスだった。

だから今、ナナリーはシャルルを護ることが正しいと思っていることになる。

コードを手に入れたシャルルが不死身であることは分かっているだろうに。

そもそも、あの男にはナナリーが庇うような価値などありはしないのに。

拳銃を下ろすことも撃つこともできないまま膠着状態に陥る。解策を思い浮かばせようと脳を動かすも、その前に突如として携帯端末が鳴った。こんな時になんだと、銃口を構えて視線をシャルルから逸らさないままに懐から携帯を取り出す。発信源はスザクだった。

他の人間だったならば無視しただろう。しかしルルーシユがナナリーの救助に当たっていると知っていて尚もスザクが通信をしてくるというのだから、尋常ならざる事態であることは明らかであったために無視するわけにもいかなかった。

拳銃を構えたまま通信ボタンを押す。芝居のセリフを読み上げて

いるような、温度の無いスザクの声がマイクから響いた。

『ルルーシュ、聞こえるか。すぐにそこから脱出して欲しい』

「っ、まだ駄目だ。どうしたんだスザク、何か不測の事態でも起こったか？」

『起こってないよ。予定通り僕たちはギアス嚮団を蹂躪している。ただ、』

「ただ、何だ」

焦りが籠るルルーシュの声に反響するように、スザクは酷く冷たい声色で宣言した。

『これから10分後に僕はフレイヤを発射する。ギアス嚮団は瓦礫も残さず崩壊することになるだろう』

あまりのことに言葉を失ったルルーシュに追い打ちをかけるようにスザクが言葉を重ねる。

『V・V. を消滅させるためにはフレイヤしか手段が無い。逃げられる前にフレイヤで消滅させる方が得策だ』

「待て、待つんだスザク！もう、」

『蜃気楼がまだギアス嚮団内部にいても10分後には僕はフレイヤを撃つ。ナナリーのGPS信号はもうギアス嚮団内には無いから安心して欲しい。だからすぐに君は逃げてくれ』

「駄目だ、駄目なんだ！頼むスザク、話を」

『嫌だ!!』

破裂するような声は強い非難と疑念を含んでいた。スザクの絶望と怒りが撃ち放った声はルルーシュを一瞬黙らせるのに十分な威力を有していた。

『嫌だ！ユフィをギアスで操って、僕の父さんを殺して、そのことをずっと黙っていた君の言葉なんてもう信じない!!信じられるか!!信じてたまるかっ……君に嘘をつかれるのは、もう沢山だ……っ』

端末を握る手が震えた。

枢木ゲンプを殺したというスザクの怒号は、既にナナリーに深々と傷つけられていたルルーシュの心の弱い所に突き刺さって血が噴き出した。

6年前の、今もまだ脳細胞に染みついているあの屈辱の日々の欠片が水面に浮上するようにフラツシユバツクする。

太い指が股座を蹂躪する痛み、胸に吸い付く唇と舌の湿った感触。腹の中に放出される悍ましい液体の熱。

太腿の間からこちらを見上げる淀んだ碧の瞳の色。

嗚咽が喉奥に込み上げてルルーシユは体をくの字に折り曲げた。そうだ。確かに自分は枢木ゲンブを、スザクの父親を殺した。でも、でもそれは。

弁明しようとルルーシユは端末を握る手に力を込めたが、何も唇から言葉として出てはこなかった。それを言うことはどうしてもできなかった。

その一瞬の空白の間にぶつりと通信が切れた。通話が切れる断絶音によりルルーシユは一瞬手元から離れた意識を取り戻して、焦りのために声を荒げた。

「ま、待て、待つんだスザク!!」

携帯端末を再度スザクに繋げようとコールする。だが通信は拒絶され、すぐさまに切れた。

駄目だ。

ルルーシユは端末を放り投げて階段目掛けて走り出した。

石畳の階段を駆け上がる。その光景にナナリーは昔、枢木家へ向かうため自分を背負って階段を上った時も兄はこんな顔をしていたのだろうと思った。ルルーシユはひたすらに前だけを向いて、必死の形相でナナリーを見つめていた。

「ナナリー、すぐに逃げるぞ!」

「私はここにお父様と一緒におります」

「そんな我儘を聞いている場合じゃないんだ! フレイヤが来る! あれが炸裂すればギアス嚮団は一瞬で消滅するぞ!」

「それでも私は、」

ナナリーは目の前まで迫ったルルーシユを静かに見据えた。

瞳は静かな決意に満ちていた。

「私は計画を完成させます。それは私にしかできないことなのです」

腕を伸ばしてルルーシユは無理やりになナリーの体を引き寄せようとした。だがその手をC・C・が阻んだ。

ルルーシユの手首を握ってC・C・は首を振った。

「悪いルルーシユ。だがこれ以上はもう無駄でしかない」

「何を、」

「ギアスがかかってしまった以上、ナナリーの説得は不可能だ。私はお前だけでも逃がす」

そう言うや否や、C・C・が触れた個所から体が力を失い階段の上に崩れ落ちた。コードのフラッシュバックだと気付く頃には、視界は朦朧とした霧に覆われて、意識は虚空へと埋もれていた。

眼球をナナリーに向ける。敵を見据える冷たい表情はこれまで散々に向けられたことがあった。

だがナナリーがどうしてそんな表情を自分に向けるのか理解ができず、ただ胸が痛んだ。

「どうして、ナナリー」

向けられる敵意にそれだけを言い残し、ルルーシユは意識を手放した。暗転。

がくりと倒れた華奢な体をC・C・が支える。

C・C・はルルーシユを背中に背負おうと身を振るが、自分よりも長身のルルーシユを抱えられる程にC・C・の筋力は強くなかった。

見かねたシャルルが意識の無いルルーシユを軽々と抱え上げて横抱きにする。長身とはいつても細身のルルーシユの体重など、巨軀を誇るシャルルにとつてそう重いものではなかった。

「おい」

「……………あのKMFに乗せればいいのだろう」

シャルルはそう言うて階段を下りた。ルルーシユと同じ色をした瞳は腕の中に横たわるマリアンヌに似た妖艶な美貌にじっと落とされていた。

そのまま蜃気楼のコックピットへと横たわらせる。丁寧なシャルルの動作を呆れ交じりで眺めながら、C・C・は蜃気楼の操縦席に身

体を押し込んだ。

蜃気楼の操縦はしたことは無いが単純な飛行程度なら問題なく可能だ。メインエンジンを起動させるとモニターが白く発光し、出撃を待ちわびるように蜃気楼は唸り声を上げた。シャルルは名残惜しそうにルルーシユの頭を撫でてその傍から離れた。

シャルルが離れるなりC・C・は操縦桿を握りながらも愛おしそうにルルーシユの髪を撫でた。珍しく優しい表情をしているC・C・へ、シャルルは咎めているにしてはあまりに心細そうな声色で問いかけた。

「わしらを裏切るのか、C・C。」

「悪いなシャルル。私はもう暫く生きることにした。この世界は興味深い。500年ではまだ足りないようだ——コックピットを閉めるぞ、離れろ」

深い諦観の滲む顔をしてシャルルは巨木のような体を蜃気楼から離れた。

娘に触れた手を見る。ルルーシユに触れるのはあれが最初で最後になるのだろう。

ルルーシユは思っていたよりも華奢で、軽い体をしていた。ブリタニアへ反旗を翻す程の膨大な生命力が詰め込まれているとは思えない程に彼女の体つきは弱弱しかった。シャルルは手を強く握りしめた。

蜃気楼の飛翔滑走翼を起動させながらC・C・は思考エレベーターを開いた。

計画を実行するというのならシャルルはもう現実世界に戻る気は無いのだろう。だが自分は違う。そしてルルーシユもそうだ。

自分達が生きる場所はある残酷で理不尽な現実でしかありえないのだ。虚数世界に引きこもって夢を見続けるなどまっぴらごめんだ。それは生きているとは言わない。通信をジークフリートに繋げる。

「おいオレンジ君、聞こえるか」

『C・C・か？今は待て、ナイトオブワンとまだ交戦中、』

「あと7分程度でフレイヤがギアス嚮団にぶっぱなされる。スザクの仕業だ。私は今ルルーシュを連れて逃げている」

『……………はあ!?!』

驚愕のあまり言葉を失ったジエレミアに、しかし驚きが治まるまで待つ余裕も無いためにC・C・は畳みかけるように言葉を繋げた。

「すぐにCの世界を脱出して現実世界に戻る。お前たちも逃げる準備をしておけ。あと6分も無いぞ」

『わ、分かった!』

そう言うや否やジエレミアは通信を切った。蜃気楼が現実に戻るなりすぐにギアス嚮団を脱せられるよう、黄昏の扉からナイトオブワシとナイトオブトウエルブを引き離してくれるのだろう。話が早くて助かる。

「……………すまない」

C・C・は床に横たわりすうすうと寝息を立てているルルーシュに向けて小さく呟いた。聞こえていないだろうと分かっているも言わずにはいられなかったのだった。

人の日記を勝手に見てしまうのと似た罪悪感がC・C・の中で渦巻いていた。

「さっきお前を気絶させた時な、お前の記憶を見たんだ。だから……だから、どうしてお前がナナリーに自分が女性だと言えないのか分かった。お前がそうやって、傷だらけになりながらも必死になってナナリーを護ろうとしていたんだってことも知った。だから私は……私は、お前を選ぶよ」

ルルーシュはいつだって戦いながら生きてきたのだ。不器用に。
C・C・はルルーシュのために一粒だけ涙を流した。

「その程度でお前が汚れるわけがないだろう————馬鹿な子だなあ」



Cの世界にはナナリーとシャルルだけが残った。2人しかいない空間は鼓膜が痛む程に静かだった。

シャルルは自分の隣で飛び去った蜃気楼の後姿を見つめるナナリーに目を落とした。

「どうしておぬしは、わしに味方をしてくれるのだ……？」

「哀れだからです」

ナナリーはきっぱりと言い放った。

その姿からはスザクと対面したときの弱弱しさは完全に払拭されていた。凜と背筋を伸ばし、ナナリーは自分よりもずっと体の大きな、年上の、この星で最も強大な権力を持つ父親を、本来ならば雨の中を彷徨う小動物へ向けるに相応しい慈愛と同情を煮詰めた蜜を含んだ瞳で見上げた。

「お兄様よりもお父様の方がずっと寂しくて、ずっと弱い、孤独で、哀れな生き物だからです」

「……わしが、可哀想だど？ わしはブリタニア皇帝だ。この世界の三分の一を手に入れた、最も権力を持つ人間だ。それを知っていてナナリーはこのわしを哀れむのか」

「お父様はこの世の栄華を極められたでしょう。その気になればブリタニアの宮殿を宝石でいっぱいにして、美しい女性を何百人と侍らせてお父様への愛を口にさせることもできるでしょう。お父様がそれらに価値を見いだせる程に即物的で短絡的な男であったのなら、お父様は幸せになれたのかもしれませんが」

そうではないでしょう、とナナリーは目を落とした。

それらにだけ価値を見出す人間の、なんと幸せな事か。世界中の人間が物理的な世界で、物理的な欲を満たすことで幸せになれるのなら、ギアスやコードなどに頼らずとも世界から戦争を無くすことは可能なのではないかとナナリーは思った。

しかしそれだけが世界の全てではないのだ。目には見えぬ形として触れることもできないものへの欲は、小さな人の体の中ではち切れんばかりに蠢いているのだ。自立欲求、知性や理性への欲、承認欲求、他者に服従したいという甘えた欲。愛欲。

ナナリーの目に父がとてつもなく哀れに見えてしまうのはまさに、父がこの世界で一番権力を握っているからだ。三角形の頂点はいつだって一点でしかない。

馬鹿な男だ。衣食住に不自由しない恵まれた立場にあるというのに、少し周囲を見回せば自分を愛する人間なんて簡単に見つかるだろうに、嘘が嫌だと駄々をこねて馬鹿な計画に人生の大半を費やしている。

その有様は今の自分と似ているように思えた。自分だって兄の下へ戻れば物理的には恵まれた生活が送れるし、兄は一身に自分を愛してくれるだろう。自分を見る人間がいれば一様に自分を馬鹿だと貶すに違いない。自分だって馬鹿な真似をしていると分かっている。

そうと分かっているのに自分がここにいるのは完璧な兄への反抗であり、父への同情であり、そして何の瑕疵も無い完璧な優しい世界のためだ。この3つの中で最も優先順位が低いものはどれかなどと考えるまでもなかった。

「お兄様には沢山の友人と、何人もの騎士と、強い精神と知性があります。少なくともお兄様はお父様のように、世界中の生きとし生けるものを一つにして孤独を埋めようなどという馬鹿な真似はしないでしよう」

「馬鹿な真似だと……」

「馬鹿な真似です」

はつきりと言い切り、ナナリーは皮肉気に唇を歪ませた。馬鹿な真似と知っていないながら自分も加担しているのだから救いようがない。

「お父様はお兄様より弱い。お兄様どころか、この世界の大半の人より弱い。本当に強い精神を持つ人が、地球上全ての生物の意識を統合させて孤独と嘘を無くそうなどというふざけたことを考える筈が無いのですから。そして私もお父様と同じくらい弱い。」

……だからその馬鹿な計画に乗ってあげましょう。馬鹿馬鹿しいですが——もしかすると本当に、それこそが優しい世界に成り得る唯一かもしれませぬ」

馬鹿馬鹿しいですが、と再度ナナリーは繰り返した。

「あまりに強い人は弱い人の心が分からない。強いお姉様より、弱いお父様の方が私が思う優しい世界により近いところにいるのかもかもしれませんもの」

シャルルはどう言っているのか分からなかった。自分を弱いと言いつけるナナリーの精神がそう弱いとも思えなかったし、ブリタニア皇帝たる自身が弱い生き物だともこれまで思ったことが無かった。

ただナナリーの言葉は容易に否定できない力を以ってシャルルを屈服させようとしていた。

暫くの静寂の後に、ナナリーとシャルルの間に割り込むようにしてビスマルクが姿を現した。

戦闘を終えた直後だからか少し汗を纏いながらも確かな足取りでビスマルクはシャルルの前に跪き、朗々とした声を上げた。

「ただいま帰還致しました。ジェレミア卿のギアスキャンセラーは予定通りに機能しております。計画に十分使えるかと」

「よろしい。では予定通りに進めよ」
「はっ」

まるで犬のように父の足元に蹲るビスマルクを見やり、ナナリーは鼻で笑った。

「お父様は、本当にお可哀想な人です」



黄昏の扉の前に白い光が走り、次の瞬間には蜃気楼がそこに佇んでいた。

『ルルーシュ様！』

『意識は無いが無事だ、私が今は操縦している!!』

珍しく張りのあるC・C.の声にジェレミアはよし、と拳を握った。

残り時間はあと5分といったところだろう。蜃気楼の速度ならばギリギリだが間に合う。

『カレン！』

『はいはい！』

ジェレミアの言葉だけで意図を察したカレンはギヤラハッドとフロレンスの前に立ち塞がり拡散輻射波動弾を放った。その隙に蜃気楼は全てのエネルギーを飛翔滑走翼に回して、放たれた矢のように飛び出した。

ジェレミアはジークフリートを飛ばしながら蜃気楼に向けられる攻撃を先んじて防ぐ。背後でギヤラハッドが黄昏の扉に向かったようだが、そんなものを気にしてられる余裕は無い。時間はあと6分あるか無いかというところだった。

『カレン、これ以上相手をする必要は無い！すぐに離脱しろ！』

『分かっているわよ！というかあんだ、ルルーシュの代わりに黒の騎士団に指示を！』

『承知している！』

ジェレミアはジークフリートの通信を蜃気楼に繋げた。そこからドルイドシステムを呼び出し、ルルーシュに任されている自身の全権限を以てゼロの代理として自分を認めさせる。

ジェレミアの声はジークフリートにより電子化され、無線通信で蜃気楼に飛んでゼロの声に変声された。

ゼロの声をしたジェレミアの言葉は黒の騎士団に所属する全てのKMFに響き渡った。

『こちらゼロ、黒の騎士団全軍に告ぐ。即時この地下空間から離脱し全速力で南極大陸から離れよ!!』

『っ、はあ？』

『え、どういうことですか？』

『ゼロ、まだ任務は、』

『現行の任務は全て中止だ！即座に離脱せよ！今すぐにだ！』

ゼロの、ジェレミアの命令には質問を許さない迫力があつた。

普段とは違う声色と突然の命令に戸惑うものの、蜃気楼から発せられているゼロの声なのだからこれがゼロの命令であることは疑いが無い。各々はすぐさまに命令に従いその場から離脱した。

黒の騎士団にとってゼロの命令は絶対だ。それに加えてこれまで

も作戦中にイレギュラーが起こり、ゼロから変則的な命令が下ったことが幾度もある。そしてそういった時のゼロの命令が間違っていたことは無かった。

ギアス嚮団のあちこちからKMFが宙に浮かび上がり、日没寸前の蝙蝠のように洞穴から飛び立ってゆく。

通信を終えたジェレミアも、ギアス嚮団の地下空間から抜け出ようとフロートシステムにエネルギーを籠めようとした。だがそこで偶然外部カメラに映った濃いストロベリーブロンドの髪を持つ女が眼に入った。

見覚えのある顔にまさかと思うも、同時にV・Vの悲惨な死体を思い返す。そういえばあの死体は自分が惨殺した枢木ゲンブの死体とどこか似ていた。

執拗なまでに痛めつけられたV・Vの死体には復讐というやりきれない感情が籠っていた。ただ殺すだけなのであればあそこまで無惨に切り刻む必要は無い。

V・Vに恨みを持つ人間は世界中に多々いるだろうが、あそこまでの剣技を持ち、さらにギアス嚮団本部の場所を探るだけの調査能力のある人間は限られている。ではやはり。

ジェレミアはジークフリートの進行方向をその女の方へと向けた。

「時間か」

スザクは時計に目を落とした。ルルーシュに通信を入れてからもう10分を過ぎている。

最後の確認のため液晶画面に目を落とす。南極大陸の上空には多数のKMFが浮かんでいた。蜃気楼もその中に紛れて空中を浮かんでいる。その両隣には紅蓮とジークフリートが蜃気楼を護るように立ちはだかっていた。

いずれもフレイヤの影響範囲外まで到達している。

スザクは口元に小さな微笑みを浮かべた。

「ユフィ、約束したね」

小指を見る。ユフィと小指を結んで約束した時のことを、今でもスザクははつきりと思い返すことができた。

あの時に手を離さなければ、一緒にブリタニアへ戻っていればと何度も後悔した。

しかしいくら後悔しても何も戻ってはこなかった。ただ何度も思いついたユフィの笑顔と、最後に交わした約束だけがスザクを縛っていた。

「僕は生きて帰って来る。ゼロも死なない。コーネリア様も死なない……ルルーシユも、ナナリーも死なない。そう約束したね。約束は守るよ。千本の針なんて怖くないけど、約束を破ったと怒る君は怖いから」

その光景を想像して、喉奥から笑いが込みあがってきた。約束を破らなかつたとしても自分が成した復讐のためにユフィは怒るだろうことをスザクは分かっていた。

だがそれでもスザクは良かった。ユフィが自分を怒ってくれるのなら、それでも良かったのだ。

あの可愛い顔を真っ赤にして、自分を小さな拳で殴ってくれるのなら、自分は何だってできるだろう。

永遠に訪れることのないその想像のために、スザクはフレイヤの発射スイッチを押した。

楕円形の砲弾がランスロットの背中から発射されてギアス嚮団の内部へと飛ぶ。多くの砲弾に紛れたそれは、やや巨大ではあれどその目を惹くようなものではなかった。

逃げ遅れた黒の騎士団員が紡ぐ喧しい戦場の唸り声はその砲弾一つを気にする余裕も無く、フレイヤは誰に邪魔されることも無く悠々と戦場を飛び、その中心部へと達した。

ランスロットから発射されてから約5秒後のことだった。それは閃光だった。

非戦闘員だった研究者、ギアス嚮団のモルモットにされていた被害者、虐待を受けていたギアスユーザー、何も知らない黒の騎士団団員。

それら全てをフレイヤの光は差別なく平等に覆い尽くし、静かに飲み込む。

眩いばかりの光の中で全ての物体は粒子レベルにまで分解された。分解された粒子は個の別の無い存在として一つになった。

極密度まで圧縮された無数の粒子には意識も欲も信念も無く、ただ圧倒的なフレイヤという存在の前でモザイク状の塊となり、そして爆散した。

目にも見えない大きさの粒子が大気圏に達する程の速度で吹き飛ばされ、フレイヤの影響力圏内は真空と化した。

文字通り何も、誰も無くなった完全な調和を誇る真空空間は、しかし物理的世界において存在が許容されない。

空間を埋めるべく大量の空気が爆風となって吹き荒れて二次的災害をまき散らす。

後にはただ真円状の荒廃だけが残った。

亡羊のかなた

8. 黙っているというのは、嘘をついているのと同じだ

「……う、」

「目が覚めたか」

C・C・の声にルルーシユは身を起こした。

目を開くと、寸断なく周囲の景色を映す液晶画面がちかちかと光っている。ブウウウンと静かな唸り声を上げる機械類は怒っているようだ。蜃気楼の中か。固い床に横たえられていたせいで体が痛い。

「……C・C、何があった？」

「このコンタクトを付けろ」

「コンタクト……？」

「ギアスの乱発を防ぐためだ。説明は後ですから、」

操縦桿を握りながらC・C・はコンタクトケースをルルーシユへと放り投げた。

突然投げられた小さなケースを戸惑いながらも受け取って、言われたとおりに眼球へ貼り付ける。コンタクトが角膜に馴染むよう何度か瞬きを繰り返しながら、混乱で沸き立つ脳を落ち着かせようと試みた。

何があった。記憶がどこか朧気で、足元がふわふわしているような現実との乖離感がある。しかしそのままじっとしていると段々と頭も落ち着き、肉体と感覚の乖離感も徐々に治った。

床に座り、記憶を絞り出そうと息を吐く。何が起こった。

記憶が確かなら、ナナリーがギアス嚮団に誘拐され、GPSからギアス嚮団の本部を割り出して黒の騎士団で襲撃したんだ。そしてナナリーは黄昏の扉の向こうにいると聞き、急いで向かうと、途中でV・V・の死体を見つけた。

黄昏の扉に辿り着くもビスマルク卿とモニカ・クルシエフスキーに行く手を阻まれ、ジェレミアとカレンに任せられた。その隙にC・C・の

能力で黄昏の扉の向こう、虚数空間であるCの世界へ向かったんだ。そこは美しい黄昏の世界で、ナナリーがシャルルに囚われていた。だからナナリーを助けようとしたんだ。なのに拒絶された。

ナナリーはシャルルの手を取ったのだ。

そしてスザクがフレイヤを……

そうだ。フレイヤだ。シユナイゼルがニーナに命じて作成させた、原子レベルまで物体を崩壊させる、コードを消滅できる可能性のある唯一兵器。

弾けるように立ち上がってメインカメラと繋がるモニターに縋りついた。喉が引き攣るように息を飲みこむ。現実と俄かには信じ難い光景が広がっていた。

荒涼とした氷の大地に、巨人が掌で大陸を掬い取ったような穴が空いている。大地と宙の境目はナイフで切り取ったように鋭く、穴の中は何の残骸も残っていない。完全な空白空間が広がっていた。元々そこに都市とも呼べる巨大な施設が存在したことを示す名残は何も無かった。

耳に煩い程の風が吹き荒んでいるのは、一時的に巨大な真空状態が出現したことによる二次的災害によるものだろう。

「ナナリー……」

ぼんやりと呟く。実のあることは何も考えられなかった。

ただ、あの場所にいたナナリーが脱出できた可能性は皆無であるという、体を押し潰すような事実がルルーシュに押し掛かっていた。

もうナナリーはこの世界にいない。

自分が何よりも守らないといけなかった、誰よりも愛する妹が。

生きる意味など無いとシャルルに否定された自分の、唯一の存在意義が、いなくなってしまうのだ。

手足の末端から溶けていくような気がした。それは至極当然の感覚だった。ナナリーがいなくなってしまうのに、自分が生きているだなんて。

自然災害にも匹敵する光景を前にして黒の騎士団員も我を忘れていた。だが団員の多くはブリタニアとの激戦を生き残った猛者であ

り、自失の時間はそう長くは無かった。

目の前の光景が夢ではなく、現実だと受け入れた団員は我先にと蜃気楼へ通信を繋ぐ。蜃気楼のコックピット内に各部隊長の焦りと怒気の籠った声がガンガンと叩きつけられる。しかしルルーシュはぼんやりとしたまま、巨大な半円球状に穴の開いた大地を見つめていた。

『ゼロ、指示を！』

『何が起こったんだ、ゼロ！なんとか言ってくれ！』

『仙波が、ゼロ、卜部も巻き込まれて……嘘だろ、まさか』

『井上がああ!!ゼロ、ゼロ、早く救助隊を組織してくれ!!』

『おい、一体何人死んだんだよ……ゼロ、俺達はどうすればいいんだ、指示を、』

騒めく声にルルーシュは暫く何も反応も返せなかった。それだけの心理的余裕が無かったのだ。

だが今よりもさらに最悪に至る可能性に思いつき、ルルーシュは元々白い顔をさらに青く変色させて通信機に縋りついた。

自分の騎士へと通信要請を送る。1コールも待たずに通信は繋がった。

通信が繋がった瞬間にルルーシュは肺の底に淀んでいた息を吐いた。ジェレミアは生きていた。吐きそうな程の安堵感が込みあがった。

「ジ、ジェレミア、ジェレミア、無事か？怪我は無いか？」

『私は問題ありません。ゼロ様はご無事であらせますか？』

無事か、と聞いたものの、ジークフリートからは無傷の蜃気楼が目視で確認できる。ジェレミアが確認したかったのはルルーシュの心理的側面における傷跡だった。

ナナリーの生存が最早絶望的である以上、無事な訳が無いと分かり切ってはいる。しかしカレン以外他の団員は誰も知らないルルーシュが抱える痛みにジェレミアは触れる義務を感じていた。

ルルーシュにとってナナリーは単なる妹ではない。実父に生を否定されたルルーシュにとって、ナナリーを護ることだけが明確な存在

意義だった。ナナリーを護るという理由があつたからこそ祖国に捨てられても、親友であるスザクと敵対することになつても、唯一の騎士である自分が死んだと思つても、ルルーシュは真つすぐ前を向いて歩いて来れたのだから。

「ジェレミア、ナナリーを探せ」

その言葉はジェレミアが予想していた命令と一言一句違わなかつた。だが予想以上にルルーシュの声は悲痛に満ちていた。

その声は通信の繋がっていた他の黒の騎士団にも伝えられていた。

慌ててC・C.が強制的に通信を切つたものの、一度伝えられた言葉は取り消せない。無線通信の向こうにいた黒の騎士団幹部は、ナナリーとは誰だ、救助活動より優先する理由があるのか、そもそもどうしてゼロは新参者のブリタニア人の安否を真つ先に確認するんだと疑問を生んだ。

しかしルルーシュは黒の騎士団幹部が疑惑の芽をつけたことに気づく余裕も無く、ジェレミアに繋がる通信に取り縋つた。

『しかしゼロ様、もう……』

「頼むジェレミア。お願いだ。お前にしか頼めないんだ。ナナリーは死んでないんだ。ナナリーは俺の妹なんだから、俺より先に死ぬわけがないんだ。生きているんだ。絶対に、生きているんだよ」

通信越しに聞こえた引き攣るような嗚咽と、歯を食いしばる軋む音に、ジェレミアにできることは『イエス、ユアマジエスティ』と答える以外に何もなかった。



フレイヤ爆発の二次的被害の影響か、見渡す限り雲は一欠片も浮かんでいない。地面を這うように動く太陽に照らされて雪原が眩しいほどに光っている。しかし雪盲を恐れるような体ではないため、ジェレミアは上空から大地をじつと睨み、アッシュブラウンの髪の一筋でもないかと探した。

漠々とした南極大陸の上空をジークフリートが飛ぶ。

藤堂により救助隊が組織されてはいるものの、フレイヤの影響力圏内には文字通り何も残っていない。救助対象は見当たらず、遺体すら消し飛んでいる。

真下にはお椀状に抉れた大地が広がるだけだ。他には何も無い。せめて遺品だけでも、と救助隊が雪を払いながら何か落ちていないかと探している。揃って顔は沈鬱で、墓場の掃除でもしているようだった。ジェレミアの心境も彼らと似たり寄ったりだ。

ルルーシユの心の支柱であるナナリーが死んだとなれば、彼女の精神は酷いダメージを受ける。それに個人的にも長い間仕えたナナリーの生存を願っている。しかし現実的にはナナリーの生存は絶望的であり、搜索する場所すら消滅していた。

上空を無意味に数回旋回していると、抉れた大地の斜面に金の装飾が施されている青い瞳のKMFが立っているのを見つけた。そしてその程近くにダークブラウンの髪をした人物が項垂れている。

ジェレミアはランスロットの隣にジークフリートを降ろした。

耐寒装備の必要のない機械の体であるため、コックピットから抜け出てそのまま極寒の大地を歩く。

枢木スザクは南極用の耐寒装備を身に着けているようだったが、日本人らしい小柄な体格は風に吹かれて折れそうに見えた。それは彼の体格というよりもその心情によるものだったかもしれないが。じっとフレイヤ跡地を見て身じろぎもしない枢木スザクは痩せ枯れた樹氷のようだった。

「満足か？」

ジェレミアの言葉に枢木スザクは肩をびくりと震わせて振り返った。

「……ジェレミアさん」

「復讐は成ったぞ、枢木スザク。ユーフェミア皇女殿下を殺害したV.V. は死んだ。君の手によりギアス嚮団も壊滅した。もうこれでギアス嚮団の勳り者になる人間はいなくなるだろう」

それで、とジェレミアはスザクの隣に立った。

「満足か、枢木」

「分かりません。僕のしたことが正しかったのかさえ……今は……」
スザクの言葉はこれまでになく弱弱しかった。ふるふると頭を振る。

フレイヤにより数万人が死亡し、その中にナナリーがいたことをスザクはシュナイゼルから聞いた。

液晶画面に映っていたシュナイゼルの顔は感情が無かった頃と似た完璧な無表情だった。彼は機械のように淡々とフレイヤによる被害をスザクに伝えた後に、勝手にフレイヤを持ち出して実戦で使ったスザクの処分は後に通達するという一言を添えた。

それが酷く重い罪であることをスザクは願った。スザクは今、断罪を求めている。

どうして自分はこうなってしまったのだろう。スザクはフレイヤ跡地に注いでいた視線をずらして、隣に立つ騎士然とした姿をしたジェレミアを見上げた。

6年前はジェレミアを父と同じ大人の男だと思っていたが、あの時のジェレミアと今の自分は3歳しか違わない。今や能力的にもそう大きな違いはないだろう。むしろ戦闘能力という点では自分の方が圧倒的に優れている。

あの時のジェレミアにあって今の自分に無いものは何だろうか。ルルーシュのために人を殺してその後も表情一つ変えずにいたこの人と、自分は、一体何が違うのだろうか。復讐を心に決めた自分は、一体どうすれば良かったのだろうか。

「ジェレミア卿ならどうしましたか？もしもルルーシュが……もしも6年前ルルーシュが日本に送られて来た時に、日本人に殺されていたら。やはりあなたも僕と同じようにみんな殺してやろうとしたでしょうか」

「仮定は仮定に過ぎない。だがもしそうなら、私は日本人を恨んで恨んで恨み切って家畜のように扱い、獣を追い立てるように殺し、ナンバーズを心底軽蔑してとことんまで差別していたかもしれない。もしかしたらフレイヤで綺麗に皆殺しにした枢木よりもずっと酷いことをしたかもしれないな」

ジェレミアはスザクを見降ろした。その眼はぞつとするほど冷たく輝いていた。

「しかしどれだけの人間を殺し尽くすことになろうとも、私はお前のように後悔したりはしない」

この言葉は比喩でも冗談でもない。スザクは心底から確信した。この人はルルーシユのためならば、ルルーシユを害すること以外のことなら何でもするだろう。

オレンジ色の瞳は照らされた雪の光を反射して小さな光を角膜の表面に幾つも浮かべていた。右目はまだ生身のままでというのに、まるで網膜が電氣的に発光して常に周囲を分析しているように見えた。もしそうであるのなら、彼は全ての物事をルルーシユにとつて有益か、無益か、それとも敵かに分類しているに違いない。恐ろしい男だと思った。ジェレミアの能力ではなく、その狂信的なルルーシユへの忠義は常人には理解不能な域に達しており、だからこそ恐怖を感じた。

自分のユーフェミアへの忠誠がジェレミアのそれに劣るとはちつとも思わない。しかしスザクはジェレミアと違い、心のどこかで復讐なんてしてもユフィは絶対に喜ばないという恐ろしい事実を感じていた。復讐を終えた今だからこそ、全身を燃やし尽くそうとしていた。憤怒が鎮火して、その冷酷な事実が顔を表しているのだった。

その事実に向き直して、スザクは今になって自分のしたことに恐怖を感じ始めていた。

フレイヤに巻き込まれたギアス嚮団所属の戦闘員、非戦闘員、嚮団に囚われていた被害者、嚮団に飼われていたギアスユーザー、巻き込まれた黒の騎士団員。全て合わせれば数万人に達する。

その数はブラックリベリオンの犠牲者数より遙かに多く、行政特区日本の暴動に伴う犠牲者数より遙かに多い。

あれほどまでに頑張った行政特区日本では誰一人救うこともできず失敗したというのに、フレイヤを持ち込んだだけでこうも簡単に何万人もの人を殺せるとは。

乾いた笑いが込みあがった。

人を救うよりも、人を殺す方がずっと楽だ。もしくは、自分は人を助ける才能には恵まれず、人を殺す才能だけは多大に持ち合わせているらしい。

そんな自分がユファイの騎士になって、何を成そうとしていたのか。結局自分ができたことは、ユファイの名の下に大量の死体を積み重ねることだけだった。誰一人として救わずに。

笑い声は段々と大きくなって周囲に響き渡った。遺族のせめてものよすがとなるだろう遺品を探すために地面を這いずり回る救助隊は、スザクの異様に高らかに響き渡る笑い声を聞いて顔を歪めた。

ジェレミアは無言で笑い続けるスザクを見据えていたが、自分のできることは無いと悟りジークフリートへと戻ろうとした。だが去って行くジェレミアの後ろ姿にスザクは笑いを収めて問いかけた。

「ジェレミアさん、あなたは僕の父親を殺したことも後悔していないのですか?」

枢木ゲンブを自分が殺したことを知っていたのかと、ほんの微かにジェレミアは表情を驚きの形にした。しかしそれは一瞬のことだった。

「ああ」

「ルルーシユの命令で殺したんですか?」

「違う」

「では何故。ジェレミアさんは理由も無く非戦闘員に暴力を振るうような人では無いでしょう。ルルーシユの命令でもない限り、あなたは例え敵対国の首相であっても無暗に殺すような人じゃない」

何故殺したのかと問われて、あの薄暗い寝室での悍ましい記憶が噴出するように蘇り、ジェレミアの中で6年間ずっと燃え続けている怒気が再燃した。爪が掌に食い込む程に握りしめた。

少しでも気を抜けばスザクの目の前で、彼にとつては尊敬の対象であろう父親をありとあらゆる罵倒で侮辱してしまいたいになり、ジェレミアは辛うじてまだ残っている冷静さをかき集めて舌に乗せた。

「私は……君の父親が心底気に食わなかったのだ。まるでルルーシユ様とナナリー様を奴隷のように扱い、あんな粗末な家に住ませて、碌

に食事もとらせなかった。高貴な血を引く皇族であらせられるあのお二方をあのように冷遇する男など無惨に死んで当然だ。ブリタニアと日本が開戦すれば首相である枢木ゲンブの警備は厚くなると思いい、そうなる前にと腹いせ代わりに殺したんだ」

「腹いせ代わり……」

「そうだ。だから、君の父親の仇は私だ。ルルーシユ様ではない」

その言葉は決して嘘では無かった。

ルルーシユは枢木ゲンブを殺せとは命じたが、人間としての原型を無くすまで切り刻んで惨殺しろとは命令しなかった。ジェレミアが命じられてもいないのに枢木ゲンブに出来得る限りの苦痛を味わわせて惨殺したのは、あの男がルルーシユの純潔を弄んだことへの復讐であり、腹いせだった。

そのことへの後悔は全くない。あるとすればもつと無惨に殺してやりたかったという昏い怒りだけだ。

しかし生前の枢木ゲンブの所業がいかにか許し難いものであったにせよ、枢木スザクからしてみれば自分は父親の敵であることに変わりはない。あんな屑であつてもスザクの父親ではあつたのだ。それもシャルルと違って養育の義務をきちんと果たした、立派と言えるかどうかは分からないが父親と呼ばれて然るべき存在だった。

スザクが自分へ怒りを向けるのも当然、復讐しようとするのも当然。

ルルーシユの騎士としての役割がある以上そう易々と殺されてやる気は無いが、罵倒ぐらいは聞いてやろうとジェレミアは続くだろうスザクの怒気に溢れる言葉を待った。

だがスザクは黙って首を横に振った。

「——もう、分からない」

「何が？」

「何が良いことなのか、何が正しいのかも……僕はあなたに怒る権利はあるのかもしれないけど、でも、怒ることが正しいことなのか分からない。あなたに、怒りを向けたいのかさえも分からないんです」

両手で顔を覆ってその場に座り込むスザクがあまりに哀れで手を

伸ばしそうになったが、ジェレミアはその手を途中で握り、ジークフリートへと踵を返した。

自分が伸ばした手に何の価値があるというのか。同じか、下手をすれば彼以上に血塗れの手で慰めたところで何の救いにもなりはしない。彼は傷の舐め合いなど望んでいない。

自分だけではない。ルルーシユやシユナイゼルも、黒の騎士団も、ブリタニア軍も、皆手を血塗れにしながら祖国や愛する人のために戦っている。白く美しいまま必死に戦おうと足掻いていた手は、この世界のどこにも存在しない。彼の血塗れの手を拭えるユーフェミアの手はとつくに失われてしまっていた。

もう遅いのだ。彼も自分もルルーシユも、血塗れの手を携えて、触れるものすべてを血で濡らしながら生きて行くしかないのだ。

ナナリーを探すために飛び立ったジークフリートを見上げて、スザクは夢見るように小さく呟いた。

「――僕は、人を殺すことしかできないんだ」



ルルーシユは合衆国日本の政庁に備え付けられているゼロの私室に閉じ籠っていた。ソファに座り込んで顔を両手で覆い、もう数時間も微動だにしない。

フレイヤによる影響で多くの死者が出た。合衆国日本の国防に関する業務も溜まっている。すぐに対応しなければならぬ案件が山のように積みあがっている。

しかしそうと知りながらもルルーシユはまだナナリーのいない現実に戻って来ることが出来ないで居た。

もしかするとこれは全て夢なのかもしれないとルルーシユは半ば本気で思っていたのだ。ルルーシユの意識は現実から離れ、自分に都合の良い夢を彷徨っていた。

ルルーシユの意識はほんの数日前まで続いていた平凡な日の夜明けまで飛び立ち、クラブハウスの自室にある柔らかなベッドの上に横

たわっていた。

もうちよつとで朝が来るからそろそろ起きなければならぬ。起きたら咲世子さんをお願いしてコーヒ―を淹れて貰って、ジエレミアに今日の業務内容を纏めておくよう命令して、その後ナナリーを起こしに行くんだ。

ナナリーの髪は豊かな上に癖毛で、セットするのに手間がかかる。髪の端まで丁寧に梳いて、ヘアブローで寝癖を直して、最後は花の匂いのするヘアオイルで整えることが毎日の日課に組み込まれていた。その時間が好きだった。最愛の妹が自分に甘えている事実をダイレクトに感じることもできたから。

櫛を手にしてソファに座るナナリーの髪を一房手に取る。アツシユブラウンの髪の感触は滑らかで、腰に至る程に長い。自分とは違う女性らしいロングヘアは眩しいくらいに綺麗だ。

髪を痛めないように丁寧に梳くと、寝ている間に絡まった髪束が整列して波を打った。自分の手で美しく整えられた髪を撫でながら今日のナナリーの髪型を思索する。

「今日はどんな髪型にしようか。ハーフアップはこの前やったしな……そうだ、この前簪を買ったんだ。ナナリーに似合うと思つて」

髪ゴムやシユシユと一緒に準備していた漆塗りの簪を手取る。桜花の飾りがついたシンプルな簪は清楚なナナリーの雰囲気によく似合つた。

ナナリーに見せようとソファの前に回ると、彼女は寂しげな顔でこちらを見上げていた。

「ナナリー？どうしたんだ？」

切なげに目を細めるナナリーを見ると、心臓に氷を詰め込まれたような寒気に襲われる。どうしてナナリーは、こんなに悲しそうな顔をしているんだろう。

次の瞬間、ナナリーの顔は蠟のように溶け落ちた。驚く間もなくその下から全く違う顔が湧き上がる。

可愛らしいナナリーの顔を押しやる様に生まれ出てきた顔は、どんなでもなく醜悪な顔だった。そしてどこかで見ることがある。それは

自分の顔だった。

自分の顔はこんなに醜い顔だったのかとルルーシユは驚き、一体ナナリーはどこに行ってしまったんだと焦った。

「ナナリー、」

ルルーシユが目を開けると、そこには誰もいなかった。一人自分がソファに座っているだけだ。

ナナリーはどこへ行ったんだ。周囲を見回すがどこにも見当たらない。しかしついさっきまでソファで髪を梳いていたのだからそう遠くには行っていないだろうと部屋を歩き回る。だがゼロの私室に備え付けられている寝室にも、バスルームにもいない。

「ナナリー、ナナリーどこだ」

声を上げながら部屋の隅から隅までを探した。だがナナリーの姿の影さえ無い。この短時間でどこへ行ってしまったのかと頭を抱える。

もしや外に出てしまったのかと思うが、そういういえばそもそもここは黒の騎士団が所有する斑鳩の中だ。ナナリーがいる筈が無い。

ナナリーがいるとすればクラブハウスだろう。今日も学校はあるのだからすぐに髪を整えて、車いすを押して中等部棟まで送り届けてあげないと。早くしないと遅刻してしまう。慌ててクローゼットにしまっていた学生服に着替えて部屋を出た。

部屋の外ではC・C.と南、そして朝比奈が言い争っていた。南と朝比奈は揃って顔に強い不満と不信を浮かべて、敵でも見るような目つきでC・C.を睨んでいる。しかしC・C.は常の飄々とした態度のまま腕を組み、挑発しているのではないかと疑う程の尊大な口調を崩そうとしなかった。

ゼロの愛人としてかC・C.を認識していない南と朝比奈の眼には、ゼロの代理人のように振る舞うC・C.の態度は越権行為甚だしく映り、苛立ちのあまり米神に血管を浮かばせていた。

「だからゼロは体調が悪いんだ。暫くは部屋から出られん。何度も同じことを言わせるな」

「体調が悪いって、死にかけてるわけでもないんだろう？ 藤堂さんが

ゼロの代わりにずっと救助隊の指揮を執ってるんだ。本当はゼロがしなきゃいけない仕事だつてのに……それに合衆国日本の黒の騎士団員へも指示を出さないといけないのに、それすらしない。ゼロはそこまで藤堂さんに任せるつもりなのか」

「この緊急事態に何も指示を出さないどころかずっと私室に引き籠るだなんてゼロはどうしたんだよ。本当に体調が悪いんなら医務室に行くべきじゃないのか？」

「あいつは顔を晒せないんだから医者にも掛かれななんだよ。お前たちの言った事はゼロに聞いてみるさ。だからさっさと帰れ」

しっしつと虫を払うように手を振られて、朝比奈は顔を紅潮させてC・C・へ詰め寄った。華奢なC・C・が朝比奈にぶん殴られると冗談では済まない。おまけにC・C・はゼロの愛人なのだ。南は焦って朝比奈を止めようと肩を掴んだ。

だがゼロの私室の扉が開いて3人の視線はそちらに向いた。ようやくゼロが部屋から出てきたのかと思っただの。

しかしそこから出てきたのはゼロではなく、学生服に身を包んだ青年だった。青年は驚くほど目鼻立ちが整っており、同性愛者でない朝比奈と南でさえ一瞬陶然としてしまう程の美貌の持ち主だった。

言い争う3人を視界にも入れず、その青年は早歩きでその場を通り過ぎようとした。だが正気に戻った朝比奈が青年の肩を掴んだ。掴んだ肩は細くて柔らかく、軍人の類ではないようだった。

「おいおいなんだよあんた。ブリタニア人だな。どうしてゼロの部屋から出てきたんだ。何者だ」

恫喝めいた口調に怯える様子も無く、青年は徐に朝比奈を見上げた。深い紫色をした瞳と朝比奈の瞳が合わさると青年は笑みの形に唇を作り、指を押し当てる。中性的な美人の艶のある仕草を目の当たりにした朝比奈はのぼせるように顔を赤く染め上げた。

「俺はゼロとはちよつとした知り合いなんだ。個人的な、な。黒の騎士団に関わる者じゃない」

その声はハイティーンの青年にしては少し高めだった。おや、と違和感を感じた南は青年の顔と、そして服に隠された体つきを見やつ

た。小さな顔に繋がる喉には喉仏は無く滑らかで、肩幅は狭く、厚みは薄い。胴体部の服は布が少し余っていて腰に括れがあることを示している。

制服で上手く隠しているようだが、よく見ればすぐに分かることだった。

「そうか。あんたもゼロの愛人つてわけか？」

軽蔑交じりの南の言葉に朝比奈は首を傾げた。

朝比奈の眼に映るその青年は明らかに男性だった。確かに容姿は中性的だが、女性にしては身長が高く、胸の膨らみは全く無い。声は確かに高めだが個人的差異の範疇に入る。そして何より一つ一つの動作が力強く機敏で、拭いきれない男性的な雰囲気があった。

「何を言ってるんだ南。こいつはどう見ても男じゃないか」

「いや、服装は男子生徒っぽいけど女の子だろうか？体つきが違う」

言い合うも、しかしお互いに確信は無かったために、誰かに異なる意見を言われると実は違うのではないかと思いは始める。どっちなのかと2人は青年の頭の前から爪の先までを眺めた。しかし服の上からでははつきり明言するだけの診断材料は見つからない。

くすぐったくなるような視線に苦笑を返して、青年はおい、とC・C・に声をかけた。

「悪いが俺はちよつと席を外す。家に帰るよ」

「——分かった。しかし何故？」

「家に帰っているかもしれないから」

その言葉を聞き、C・C・は南や朝比奈の前で表情を変えないよう眉間に力を込めた。

ナナリーはCの世界に閉じ込められて永久に出ることは敵わない。だからクラブハウスに行っても無駄だ。

そう言うのは簡単だ。だがそう言ってもルルーシユはその言葉を現実とは受け入れないだろう。

好きに行動させて、現実を受け入れるまで待つしか無い。C・C・は一つ頷き、そうか、とだけ返した。

そのままくると踵を返してその場を去ろうとした青年に、朝比奈

が待て、と声をかける。

ゼロの私室への入室を許可されているのは現在C・C・とカレン、そしてジェレミアしかいない。だが今、この青年がその中に加わった。秘密主義者のゼロに関わる人物として朝比奈はこの美貌の青年から出来得る限りの情報を得たかったのだ。

「まだ話は終わっていないぞ、君はゼロの何なんだ。未成年に見えるが、まさか本当に愛人か？」

「下品な妄想だな。品性が知れる。まあ妄想するのは個人の自由ではあるから好きにすればいいさ。だが貴公の妄想に付き合う程に私は暇では無いのでね、失礼させて貰おう」

氷細工めいた繊細な容姿に似合わない挑発的な言動が飛び出して、南と朝比奈が一瞬言葉を失った隙にルルーシュは足早にその場を去った。

二人は後を追おうとしたがC・C・が道を遮る。面倒くささと不機嫌さが混ぜ合わさった顔をしていた。

「あいつはゼロの知り合いの、ただの合衆国日本に帰化した元ブリタニア人だ。詮索しても何も出ては来ないさ」

「あのブリタニア男と同じくゼロの個人的なお友達って訳か？」

「そうだ。まあ、本当にただのお友達かどうかはその下品な妄想にお任せしようか」

C・C・は付き合いきれないと肩を竦めて扉の向こうへと逃げ去った。

その場に残った南と朝比奈は、姿を消した美人2人の去った方向をそれぞれ見て舌打ちを零した。

「こんな時に愛人と遊んでるのかよ、ゼロは」

「それも美人2人とな。いい御身分だ。まるでブリタニアの貴族みたいな生活じゃないか」

朝比奈のあまりの言いように南は眉を顰めた。

ゼロが部屋に引き籠っている現状に不満はあるが、ナンバーズを散々に虐げたブリタニア貴族とゼロを同列に見るのは侮蔑が過ぎる。

ゼロは紛れもない世界の英雄であり、黒の騎士団が寄って立つ術な

のだから。世間一般から見れば彼を愚弄することは、これまでの黒の騎士団の活動が愚弄されることに等しかった。

「……流石に言葉が過ぎるぞ。今はあれだが、ゼロは俺達のトップじゃないか」

「今まではな。でも職務を果たしていない今もその地位に立つ権利があるのかどうか」

「朝比奈、誰が聞いているか分からないんだ。それ以上は、」

ガンツ、と何かが床にぶつかる音が聞こえて、2人ははつとその方向へ首を向けた。

通路の陰に誰かが隠れてる。床にはカメラが転がっており、さっきの音の正体はカメラが落ちた音であるようだった。

「誰だっ」

南の誰何に応える声は無く、ただ落としたカメラを拾うために陰から男が歩み出てきた。長身を折り曲げてカメラを拾い上げて傷がついていないか確認する。

隠れて陰から一部始終を見ていた男はデイトハルトだった。彼はその場に残っている2人の同僚を意識にも上さずに、額に冷汗を浮かべながらカメラを再生してゼロの私室から現れた美貌の青年の姿を確認した。

彼はその中性的な美しい容姿に、9年前に一度ヨーロッパ戦線で見かけたブリタニアの皇子の姿を重ねた。

「……ルルーシュ殿下？」

あまりに似ている。いや、もう同一人物としか思えない。あんな天使のように美しい容姿がこの世に2つとあつてたまるか。

さらによくよく思い起こすと、あのゼロの個人的な知り合いだというジェレミアという男にも見覚えがあるような気がする。もしかするとあの男はルルーシュの部下ではなかったか。

デイトハルトが一度だけ邂逅した小さな皇子は僅か9歳ながら軍の指揮官として辣腕を奮い、英雄としての片鱗を垣間見せた。言い換えればあの少年は、ゼロに成り得るだけの可能性を秘めていたのだ。

「ふ、ふふ、」

口端から笑いが零れた。まさかという思いと、あの少年ならばやりかねないという予測が混ぜ合わさってディートハルトに歓喜を齎した。

もし予想が当たっているとすれば、ルルーシュという青年の人生は嵐を突き進む小舟のように激しくもドラマティックな旅だっただろう。是非その人生の全貌を知りたい。そして記録に残したい。そして全世界に放映したい。

ディートハルトをディートハルトたらしめる、極限の混沌（カオス）を映像化することへの欲望が渦を巻いて波打っていた。

「おいお前、何を」

「正しく、カオス！ゼロとは想像以上のカオスだ！」

絶頂しているように全身を震わせるディートハルトから南と朝比奈は数歩離れた。

前々から変なブリタニア人だと思っていたが今は完全な不審者しか見えない。あまり近寄りたくない。全身をうち震わせて恍惚としている姿は、なまじ容姿が優れている分そこらのホラー映画並みに怖い。

しかし2人にドン引きされていることを気にもせず、そもそも気づきもせず、ディートハルトはハンドカメラを掲げるように持ち上げてくるくと回った。

「そうと知ったならばこうしてはいられない！早々に資料を集めなければ！まずは6年前の日本の情勢と、ルルーシュ殿下がどのような酷い扱いをされていたのか、そこからどのようにして這い上がったのか……！ああ、血が滾る！やはりジャーナリズムの仕事とはこうでなくては――」

「……おい、まさかヤクはやってないよな？」

ぼそつと呟いた南にディートハルトは澆瀨とした良い笑顔を向けて、高らかに言い放った。

「ジャーナリズムとはそんなものより遙かに創造的な快樂だ！凡人には体験できない混沌を自らの手で視覚化し、事実として世界に押し広

げる万能感に比べればそのようなモノは子供の玩具だ！ふふ、やはりゼロは素晴らしい……っ、では、失礼させて頂こう！」

ディートハルトは目をLEDライトのように輝かせて、二人の返事も待たずにスキップでもしそうな勢いでその場を後にした。

啞然としてその後姿を見送っていたが、朝比奈はディートハルトの言葉を思い返してぼつりと呟いた。

「ルルーシユ殿下……殿下ってことは、皇族か？」

「それってさっきの青年が皇族かもしれないってことか？確かに貴族っぽい綺麗な顔をしてはいたが、」

「ああ。ルルーシユ……聞いたことがあるような無いような」

記憶の端にそんな名前が引つかかっているような気がして朝比奈は頭を掻いた。

6年前、ブリタニアが日本に攻め込む大義名分となった皇族が確かそのような名前だったような気がする。朝比奈は端末を取り出してその名前を検索にかけた。

検索結果はすぐに表れた。華麗なるブリタニア皇族の略歴は公にされており、勤勉なブリタニア臣民が皇族の家系図を纏めたサイトは幾つもある。その中の一つに入り込むと、その名前はすぐに見つかった。

ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア。9歳から軍務に携わり主にはヨーロッパで辣腕を奮った、幼いながらも優秀な指揮官。

12歳の時に母親が死亡し、喪も明けないうちに日本へ留学する。留学先の日本人から虐待を受けて僅か12歳で夭逝。共に留学していた妹のナナリー・ヴィ・ブリタニアも同様に日本人の手で殺害され、9歳で夭逝する。もし生きていれば現在17歳。

あの青年はハイティーンといった年齢であったし、性格はともあれテレビ屋としては優秀なディートハルトが顔を間違えるとは思えない。

黙り込んだ朝比奈に南はまさかといった表情で声を荒げた。

「おい、それってゼロがブリタニアの皇族と繋がってたってことか？」
「それどころじゃないぞ。そういえばあの青年、身長はゼロと同じく

らいだった」

「つ、おいおいおい、それこそまさかだろう！そんな、」

そんな、の後に言葉は続かなかった。朝比奈は浅く笑みを零した。すぐにルルーシユとやらについて調べなければならぬ。ブリタニア皇族ならば写真の一枚くらいは残っているだろう。あの青年が皇族のルルーシユであるかどうかはすぐに分かる。

そしてもし本当にゼロがブリタニア皇族であったのなら、多くの幹部はゼロがそのまま黒の騎士団の頂点に居座ることなど容認できないに違いない。そうなれば黒の騎士団の頂点の座は藤堂に移る。藤堂以外に候補となるような人物は扇ぐらいだろうが、あの凡庸な男がそんな大役を果たせるとは思えない。

藤堂が黒の騎士団を率いて歩む。その想像は朝比奈を高ぶらせた。日本軍においても黒の騎士団においても藤堂は優れた才覚を存分に活かすことが敵わず、常に二番手以降に追いやられていた。藤堂を信頼し、信望さえしている朝比奈にとってこの現状は耐え難いものだった。

藤堂がとうとうその能力に相応しい地位を得るという想像は朝比奈の体を歓喜で満たした。

クラブハウスに向かいながらルルーシユは微笑を零した。

失敗した。ゼロが皇族だとバレたかもしれないな。

まあそれならそれでいいか。気持ちの良い解放感に幾分かの罪悪感を混ぜて、ルルーシユは春先に囁く小鳥のような笑い声を上げた。バレたならバレたでいいや。そうなればもう後のことはシユナイゼルとキョウト六家、新しく設立される日本政府、そして藤堂に全部任せてしまおう。

もうこれ以上自分には戦う必要なんて無いのだから。合衆国日本は設立したし、神聖ブリタニア帝国はシユナイゼルが皇帝になればそう悪い方向には向かわない。ギアス嚮団だって壊滅した。V・Vは死んで、シャルルだって死んだ。長い間自分達を脅かした問題は、もう全て解決した。

よし、決めた。もうこのままクラブハウスに戻って、二度とここには帰らない。血と鉄が混じった重苦しい臭いや、人命を背負って挑む戦場とはもうおさばらだ。

これからは大学に進学するなり就職するなりして、ペンや言葉で戦うんだ。疲れたらナナリーと遊んで、辛い事があつたらジエレミアに甘えよう。生徒会のメンバーともたまには会って、声が枯れるまで笑いたい。

これからはそうやって平和に暮らしていくんだ。

政庁を出ていくルルーシユの足取りはこの上無く軽かった。

9. 生きていくんだ。そのために戦うんだ。そう決めたから

クラブハウスに到着する頃には太陽が傾いていた。ルルーシユはクラブハウスの扉を勢いよく開いて見慣れた玄関へと飛び込んだ。

「ナナリー、ナナリー！」

声を張り上げてここにいる筈の妹の名前を呼ぶと、声を聞きつけた咲世子が焦った顔でぱたぱたとかけてきた。日本人らしく黄色がかった肌は蒼白に染まり、顔中に沈鬱な色が乗っていた。

咲世子がこんな顔をしているのは珍しい。家主であるルルーシユが家に戻って来たことに芯から戸惑っている様子だった。

「ル、ルルーシユ様、どうしてこちらに、」

「咲世子さん、ナナリーはどこですか？学校に遅刻してしまうからと思っただけで帰ってきたんです。俺がいないとナナリーは学校に行けませんから」

ルルーシユがそう言うのと咲世子は見る見るうちに顎を震わせて、力なく頭を横に振った。

「……咲世子さん？どうしたのですか」

「——ルルーシユ様、ナナリー様はこちらにはいらつしやいません……」

なんとか絞り出したような咲世子の言葉は酷く掠れていた。思いも及ばない返答にルルーシユはきよとんと眼を見開いた。

「どうしてでしょう。もう学校に行ってしまったんですか？」

「……いえ、いえ、申し訳ございませんルルーシユ様、私は……」

「っ、まさか一人で出かけてるのか!？」

詰まる咲世子の言葉に、まさかナナリーが一人で家を抜け出したのかとルルーシユは血の気を引かせた。

いくら目が見えるようになったと言ってもナナリーの足は動かないままであり、社会的弱者であることに変わりはない。

それに加えて、合衆国日本の設立に伴って日本人が勝ち得た人権の

中には、自分たちを虐げたブリタニア人へ復讐する権利も含まれているのだと勘違いする馬鹿もいる。現に日本人によるブリタニア人への暴行事件は数多く検挙されていた。

路地裏をうろつくナナリーに破落戸どもが群がる光景を思い浮かべると顔が青褪める。震える手足を無理やり動かして玄關扉を押し開いた。

「ルルーシユ様、」

「咲世子さんはここにいて下さい、ナナリーが帰って来るかもしれない！何か変わったことがあれば連絡をお願いします！」

そう言うや否やルルーシユはクラブハウスを飛び出した。

咲世子は目に涙を滲ませて、喉奥から肯定の返事を絞り出した。それ以外にどう答えていいのか分からなかったのだ。

ルルーシユが何をしようと全て無駄だと伝えるには、咲世子は仲の良い姉妹の姿を長く見過ぎていた。

ルルーシユが真っ先に向かったのは繁華街だった。昼間は多くの客が集まるシヨツピングモールが賑やかな笑い声を立てているが、夜が深まるにつれて色が変わる。

バーや学生向けの居酒屋も多く軒を連ねているため夜中もそれなりに賑やかではあるものの、一本路地を越えると雰囲気は埃っぽくなり、娼婦やチンピラの姿がちらほらと見えるようになる。戦争という台風一過の影響でエリアーであった頃より治安は改善しているものの、薄暗い影はどの時代のどの町にも存在した。

特に敗者であるブリタニア人に対して合衆国日本国民の心情は厳しくならざるを得ない。ここ最近では夜に街を歩くブリタニア人の姿は珍しく、額に汗を滲ませて路地を歩き回る美貌の少年は非常に多く目立った。

太陽はその姿を半分以上地面上に隠していて、黄昏が街を照らしていた。

以前シャーリーやリヴァルと遊びに来たことのあるカフェの一本奥の道へと入る。昼間の陽気な雰囲気はどこかに流れ去り、今は冷や

やかで沈鬱な空気が満ちていた。

タバコや空き缶、生ごみが点々と落ちる道を踏みしめながら歩く。奥まった路地は高いビルに囲まれているせいで夕暮れ時にしても薄暗く、人氣が無かった。

「ナナリー、」

ナナリーの名前を呼びながら視線を周囲に走らせる。

耳を澄ませるが酔っ払いが嘔吐する声や、娼婦が客引きする艶めかしい声ぐらいいしか聞こえない。どこか遠くから、路地裏で客を取っている娼婦のわざとらしい喘ぎ声が反響していた。

まだ日も暮れていないのにと上を見上げる。ビルのてっぺんが黄昏の陽に照らされて燃えるように輝いていた。

黄昏の色に目が焼かれるようだ。何かを忘れているような気がした。

「ナナリー」

ルルーシユは足を止めてその場に立ち尽くした。燃えるような黄昏に目を囚われた。

美しい黄昏だ。こんな路地裏の薄暗がりであつても変わらず眩しく美しい。

赤い黄昏が網膜に染み渡る。眩し過ぎて目を閉じると、瞼の裏に黄昏を背にして車いすに座るナナリーの姿が思い浮かんだ。

ナナリーは敵意の籠った瞳でこちらを睨み据えていた。ゆっくりと口を開いて、

「違う、嫌だ。違うんだナナリーっ、」

ルルーシユはぶんぶんと頭を振った。思い出したくない。それを思い出してしまつたら終わつてしまふ。

しかしぐんぐんと速度を上げて回転するルルーシユの脳はどこまでも現実的に容赦無くルルーシユを追いつめた。確実な過去が夕陽の光に照らされて瞬いた。

そうだ。夕陽はいつだって美しい。いつだって、美しかった。

邪魔なビルの群れが無いためかブリタニアで見た夕陽よりずっと美しい。日本という土地にあつて、海面を照らす夕陽はどこか郷愁を

感じさせた。

現実ではビルに囲まれているせいで夕陽なんて碌に見えもしない。精々がビルが反射する赤い光が視界に映る程度だというのに、ルルーシユの瞼の裏には海原に沈む陽光が煌めいていた。

体が崩れ落ちる。

「違う。これは、違うんだ」

都合の良い夢を見るために、ルルーシユの意識は幸せな過去を切り貼りして現実と滑らかに繋ぎ合わせようと苦悩していた。17年の過去の中で幸せと感じた記憶だけが膨大化して、他の辛い苦難の記憶は矮小化し、微睡むような心地よさが意識を乗っ取ろうと試みている。

しかし同時にルルーシユの意識は滾々と自分に言い聞かせていた。

こんなことをしている暇はない。早く立ち上がらないと。

立ち上がらないと。戦わなければならないんだ。

ルルーシユは呻きながら体を引きずって現実と夢の境界をふらふらと彷徨った。空虚な現実と満ち足りた夢、どちらかから逃げようとしていて、どちらかを探していた。しかし一体自分がどちらを求めているのかは、体を焼き尽くすように照らす黄昏のせいで目が眩んでしまい、とても分からなかった。

空き缶を蹴飛ばした拍子に酒瓶に足を取られて転げて、生ごみの詰まったバケツに頭から突っ込んでしまう。

腐った魚の腸がぶちまけられたような酷い臭いがした。体中に巻き散らかされたありとあらゆる汚物をぼうっと見下ろし、ゆるゆると立ち上がって振り払う。

恐らくは、自分は酷く疲れている。ナナリーが誘拐されて即座に黒の騎士団を集結させて、南極へ飛び、戦場の指揮を執って、色々なことがあって、その間一度も足を止めることは無かった。疲れを自覚すると、体の内からじくじくと蝕むような疲労が巨大化したような気がする。

それでも足を止めずにナナリーの名前を呼びながら歩いた。日は落ちて周囲は帳を降ろし、街灯の小さな明かりが夜光虫のようにぼつ

ぼつと周囲に漂う。

薄暗がりの中で気まぐれに姿を現す街灯と月明かりのみを頼りにふらふらと歩く。もう幾つめか分からない角を曲がると行き止まりで、溜息を吐いて踵を返した。

振り返った先には一人の男が狭い路地を塞ぐように立っていた。街灯は遠くにほんのりとマッチのような火を灯しているばかりで、唯一の頼りである月明かりでは顔もよく見えない。

しかしたったそれだけの明かりだけでも分かる程に、男は憤怒の形相でブリタニア人らしく白い肌をしたルルーシュを睨みつけていた。肝臓が悪いのか黄疸の目立つ眼球は眼窩から飛び出しているようであり、ぎよろりとした視線は魚に似ていた。

誰だ、と聞く前に大腿で近寄られる。そのまま一切の容赦無く横つ腹を殴られた。

容赦の無い殴打に息が詰まる。体が壁へ叩きつけられてそのまま地べたに落ちた。

ゆるゆると顔を上げると、いきなり殴りかかってきた男がこちらを見下ろしていた。顔面には悪役をコテンパンに倒した正義のヒーローを彷彿とさせる愉悅が浮かんでいた。肌の色や髪の色から推測するに日本人のようであり、年の頃は中年の後半に差し掛かった頃だろう。

寄生虫のブリタニア人が、だの、合衆国日本になったんだからブリキの国に帰れ、だのととりとめのない事を引っ切り無しにわあわあと叫んでいる。しかしルルーシュには彼の口から漏れ出る音を意味のある言語だと理解するだけの余裕が無かった。

ルルーシュの眼はその男性の背後に見えるビルの非常階段に注がれていた。階段は石造りでとてつもなく長く続き、幼いルルーシュが見上げて先が見えない程だった。

聞いてんのかよと男が喧しく罵りながらルルーシュの胸倉を掴み上げる。乱暴な動作のせいでボタンが弾けて男の指が制服の後ろに隠された柔らかい脂肪を感じ取った。

男は途端に無言になった。

まさか、という驚きの後に、自分の指先の感触が間違いではなかったことを確かめようと生地の厚い学生服を剥ぎ取る。学生服の下には男性にはあり得ない細い曲線で描かれた体軀があつた。薄いシャツは肌を滑る汗に吸い付き色味の薄い肌を見え隠れさせて、見る者を挑発させた。

女か。そう気づいた男は、虚ろな表情であつても稀な美貌を一切損なつてはいない、宝石細工のように繊細な容姿をじつと見つめて、猥欲を顔に貼りつかせた薄ら寒い笑みを浮かべた。

その類の笑みには吐き気がするほどに見覚えがあつた。体中に染み込んだ恐怖が6年間の眠りから息を吹き返す。脳の奥がかつと熱くなり、同時に下腹部が永久凍土のように冷たくなった。

ルルーシユは嗚咽に似た喚き声を歯の隙間から吐き出した。手足を振り乱して男を少しでも引き離そうともがく。しかし華奢な手足の抵抗は何の実も結ぶ事無く、シャツは呆気なく剥ぎ取られた。

首から臍までが空気に晒されて、小さいながらも白く柔らかい乳房が露わになる。獣のような荒い呼吸が聞こえたかと思えば、男性特有の骨ばつた太い指が小さな乳房を鷲掴みにした。

ちぎり取るうとするかのように爪が肌に食い込む。鋭い痛みにも声が口から零れそうになるが咄嗟に耐えた。

痛みに呻くような真似をしてもこの類の男は喜ぶだけだと既にルルーシユは知っていた。せめてもの抵抗にと男を睨むと、濁つた碧色の瞳が抵抗する術もない惨めな女を嘲るように見下ろしていた。

日本人にしては珍しい碧の瞳に見間違いかと瞬きをすると、男の背後に長く続く石階段が酷く鮮明に目に映つた。ゆるゆると視線をその上に向けると皇帝／枢木邸が立っている。

威圧感のある佇まいのそれを目の前にして、とうとう自分は狂つたのかと呆けていると、意識が自分から逸れたのが気に食わなかつたらしく、男は目の前に流れる黒髪に指を通して拳を思いつき握り締めた。ぶちぶちと髪が頭皮から引きちぎられる音と痛みを知覚はしたものの、意識が現実と夢の狭間から戻ってくることは無かつた。

男／枢木ゲンブの舌打ちがした。これは男が不機嫌である合図だ

からこれ以上機嫌を損ねないために従順な振りをしなくてはならない。でなければとても、とつても痛い目に遭うのだ。

一切の抵抗を止めた腕を骨が軋む程の握力で握られて、白い壁／＼ベッドに顔を押し付けられる。埃っぽい臭いがした。

ベルトを引き抜かれてあつという間にズボンを引き下ろされる。下着越しに股座を掌で摩られて背筋に怖気が走った。耳元ではあ、はあ、と湿度の籠った息遣いがしてこの上無く気持ちが悪い。耳の中をミミズがのたくっているような気さえする。

怖気のあまりに身を振るとニタニタとした醜悪な笑みが視界の端に映る。ズボン越しに膨らんだモノを太腿に押し付けられる。

嫌という程に慣れた懐かしい感覚だった。

「——あははっ」

またか。またなのか。

ナナリー一人さえ守れず、こうして現実を直視することさえ出来ない。似合いの末路というわけか。

視界が潤んで、それだけはと頬の内側を肉が抉れる程に噛みしめた。泣いてたまるか。泣いてたまるか。

泣く程のことじゃない。殴られるのも罵倒されるのも初めてじゃない。また立ち上げられる。

何回だって、自分とナナリーが生きていけば立ち上げられる筈だ。

でも、ナナリーがいなくなったらどうなるんだろう。

力が抜けて人形のように地面に崩れたルルーシュを、男は恐怖のあまり気絶したのだと判断して下着を引きちぎった。生まれたままの姿を晒すルルーシュはどこもかしこも美しい造りをしていて。露わになった淡い色の女性器を目の当たりにして、餌を前にした犬より呼吸が荒くなる。

あまりに美しい姿に、これは本当に犯してよいものなのだろうか。男はほんの一瞬だけ戸惑った。

日本に寄生する薄汚いブリタニア人とさえども、自分が組み敷いている生物は触れることさえ躊躇われる程に美しかった。若く瑞々しい女の、全身に蜜でも垂らしているように輝く完璧な造形は、人種の

別を超えた神々しさをその身の内に秘めていた。

しかしその美しさへ向けられた純粹な畏敬の念は、次の瞬間には届く筈の無い半神めいた美貌を組み敷くことへの征服感へと姿を変えた。

下卑た笑みを口の端に浮かべて、男の指が剥き出しになった淡色の花卉のような女性器へと伸びる。

ぼんやりと現実と夢の境を行きつ戻りつしていたルルーシユは視界の端に赤い影を見た。

きよろきよろと視線を動かしながら彷徨っていたらしきその影は、ルルーシユを視界に入れた瞬間に弾けるように駆け出した。ぐんぐんと近づくと人はあまりに見慣れた顔をしていた。

「……………ジエレミア？」

脳裏に真つ先に浮かんだ名前を呟いたが、しかしその人物はジエレミアにしては小柄で、そしてずっと若かった。何より女性だった。

空気に擦れる小さな音がしたかと思えば、ルルーシユを組み敷いていた男はすさまじい勢いで宙に吹っ飛んで壁に叩きつけられた。骨の二三本でも折れるような破裂音が小気味よく弾ける。

「ぎゃあああつ」

短く悲鳴を上げて地面に落ちた男をサッカーボールのようにカレンが蹴り飛ばす。男は再度吹き飛び、またどこかの骨が折れるような音と共に壁に衝突し、また地べたに落ちた。そしてまた蹴り、また壁に衝突し、また蹴る。

目の前で繰り返される暴行事件に段々とルルーシユの混乱も治まってきた。と言うよりもカレンは破裂しかけたトマトのような顔をしていて、見るからに頭に血が上っており、逆にルルーシユの方が冷静になったのだ。

よく見るとあの男は年齢と背丈以外は全く枢木ゲンブに似ていない。ビルの外付け階段はどう見てもアルミ製だし、無論のこと枢木邸の姿もシャルルの姿もどこにもない。周囲を見回しても飲み屋街の袋小路らしい薄汚い景色しか広がっていない。

意識が確実に現実に戻ってくるのを感じながら、何を馬鹿なことを

していたのかとため息が零れる。こんなことをしても結局何も変わりはない。無駄な時間を過ごす暇など自分には無い筈だ。

そうやって内省している間にも、カレンは飽きもせず男を何度も蹴り飛ばしていた。その度に猫が踏みつぶされたような悲鳴が短く上がる。

しかしとうとう悲鳴も上がらなくなってからカレンはようやく壁打ち人間リバウンダーを止めた。日本人らしい愛嬌のある容姿を仮面でも被ったかのように冷ややかに作り変えて、死にかけた羽虫を見る目つきで男を見下ろす。

「選ばせてあげるわ。3分の4殺しで楽になるか、それとも3分の3殺しで死ぬまで苦しむかどっちがいい？」

「ごきごきと指を鳴らすカレンに、それどっちでも死ぬんじゃないかと呟きながらルルーシユはよっこらせと立ち上がった。

ここで自分が首を挟まなかったら冗談でなくカレンはこの男を殺すだろう。正義感の強い少女だ。友人でありゼロでもある自分がレイプされかけた現場に居合わせて、それほど長くも無い堪忍袋の緒はとつくに引きちぎられている。

とはいえ敵とあれば躊躇も後悔もなく人を殺せるジェレミアと違い、カレンは未だまっとうな倫理観を持っている若い女性だ。カレンの将来を考えると人殺しに慣れるのはそう良いことではない。

「止めるカレン、死体は後始末が面倒臭いんだ。もういいから放つておけ」

「大丈夫よ。サクラダイトぶっかけて火をつければ一瞬で始末できるわ」

「飲み屋街でそんなことをしたら大惨事だろう。大騒ぎにはしたくない」

ヒーロー戦隊ものの悪役のように顔を歪めたカレンは、苛立ち交じりに男の脇腹を思いつきり蹴上げた。鈍音と共に頭から地面に落下した男は息も絶え絶えといった様子だった。ぴくりとも動かない。しかしまだ息はあった。

ルルーシユは男の臉を無理やり開かせてその瞳を覗きこんだ。瞳

の色は碧ではなく、日本人に最も多いダークブラウンをしていた。

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命じる。ここで起こったことを全て忘れて家に帰って……そしてその薄汚いペ〇スを包丁で切り落とせ」
「……ああ、分かった」

何の感情も籠らない返答を返して、奇跡的に足の骨は折れていなかったらしく、男はふらつきながらも立ち上がった。瞳を赤く染め上げてそのまま歩いて去って行く。運よく失血死しなければ明日には二度と女性に暴行を振るえる体ではなくなっているだろう。

いい気味だ。ルルーシユは鼻で笑った。

カレンは去って行った男を気に食わないと見ていたが、捕まえて警察に突き出すことはルルーシユの立場のためにできない。かといって殺すというのも、頭に血が上った状態だったからそう口にしただけであつて、戦争中でもないのに躊躇なく人殺しをすることのできないカレンには無理な話だった。それよりも今はルルーシユの無事を確かめようと駆け寄った。

「ルルーシユ大丈夫？ 怪我は？」

「怪我は無い。下着を破かれたぐらいだ」

カレンは般若のように顔を歪めて男が去って行った方向を一瞥した。もう2、3発は殴っておけばよかった。

喉元に込みあがる苛立ちをなんとか抑えて、地面に落ちている学生服を拾ってルルーシユに手渡す。

ボタンはちぎれていたが運良く上着もズボンもそれほど汚れてはいなかった。下着は台無しになってしまったが、帰るまでだけだと思えば我慢もできる。

素肌の上にズボンと上着を身に着けるルルーシユに、カレンは視線を彷徨わせながら、その、と話しかけた。

「ルルーシユ……ナナリーがあんなことになってショックなのは分かるけど、でもああいうときは怖くても助けを呼ぶのよ。そもそも最初からギアスを使っていればあんなことには、」

「怖くなんてないさ」

あつさりと言ったルルーシユは何も表情を浮かべておらず、言葉に

嘘は見当たらなかった。

しかし怖くないのならばさっさとギアスを使うだろう。ギアス使用が躊躇われるならば大声で助けを呼んだ筈だ。ルルーシユのプライドの高さが、女として襲われたことへ拭い難い嫌悪感を抱いているのかもしれないが、プライドの使いどころが間違っているとカレンは顔を顰めた。

「そんな虚勢張らなくても、怖くて当然でしょ。あんな、その、ああいったことは、慣れてなかったらそりゃあ、」

怖くて当たり前だし。ごによごによと顔を赤くしながら呟く。

思春期の女性らしい可愛らしい反応にルルーシユは苦笑を零した。苛烈な言動の目立つカレンだがこういった方面については年相応だ。

「いや、怖くないというのは本当なんだ。だがナナリーが……」

その名前を口にするのと胸が痛くなる。しかし顔は平静のままなんとか耐えた。

「ナナリーが、行方不明になって。それで混乱していたんだ。大丈夫だよ」

「……そっか、でもそうだったことは好きな人とだけすることなんだから……助けは呼ばないといけないわよ」

なんて純粹な子だろう。凜とした目元が清々しい強気な容姿からしてみれば意外なほどの——猫を幾重にも被った令嬢然とした時のカレンであればそう意外でもないが——純朴さに自然と胸奥から笑いが込みあがってきた。

その笑いがいつもとは違う、自身を苛むような響きを伴っていることに気付いてカレンは眉根を下げた。

「ル、ルルーシユ？」

「くははは、いつ、今更だ、カレン。俺は処女じゃないんだから、そんな、好きな人とだけって、はは、あははは」

堰が切れたように笑い続けるルルーシユに、え、とカレンは顔を真っ赤に上気させた。

それはつまり、ルルーシユにそのような相手がいたということだろうか。知らなかった。

恋する乙女として多大にショックを受けながらも、しかしカレンは薄らと納得もしていた。ルルーシユは同年齢だというのにどこか大人びた雰囲気がある。それが行政特区日本の騒動の時までゼロのことを成人男性であると思いついていた一因だった。

しかしだとすれば相手は。

そんな場合ではないと十分分かっていながらも、親衛隊としてではなくクラスメイトとして、そしてルルーシユに恋をしている身として好奇心と嫉妬心がむくむくと頭をもたげた。

ふらつくルルーシユに肩を貸して、2人で薄暗い路地に籠るアルコール臭を嗅ぎながら生ごみを踏みしめて歩く。未だにくつくつと笑いを零すルルーシユにカレンは恐る恐る問いかけた。

「ええ、あの、え、ええと……ス、スザクと付き合ってたの？」

「スザク？まさか。あいつはユファイ一筋だよ。それに好きな女がいるのに他に手を出すようなタイプでもないだろう」

「そ、そうよね。じゃあ、ええと、リヴァル……はミレイ会長にぞっこんだしね。じ、じゃあクラスの誰か？もしくは他校の生徒とか？」

「違う」

違うのか。学生のルルーシユなら付き合い合っている相手も同じ高校生だと思っただけけれど。

しかし違うのだとするのならばもう可能性があるのは1人しかないではないか。

あのロリコン野郎と米神に血管が浮かぶ。付き合いにしても、せめて18歳まで待てなかったのかと苛立ちが募った。沸き上がる嫉妬心と好奇心と苛立ちと、ほんの少しの老婆心が混ざり合っついで口早になる。

「それじゃあジェレミアさん？だとしたら、あたしたちより10近く年上の大人が未成年に手を出すつてどうなのよ。いくら同意の上でもちゃんと守るべきラインっていうのがあるでしょ。そ、そりゃあ色々事情はあるでしょうけど、あたしは何にもその、あんた達がどういった付き合いなのか知らないわけだけど、でもまだ18歳になってないんだし、そういつたことはまだ早いというか……」

「……ジエレミア？ああ、あいつか、あははっ、そうだな、そうか、俺達はそう見えるのか」

弾けるような笑い声を上げてルルーシユは地べたにひっくり返った。ばんばんと掌で地面を叩く。

楽しくて笑っている訳ではないことは一目瞭然だった。狂騒に近い笑い声だった。

「まさか、それこそ、まさかだ。あり得ない。違うよカレン。売ったんだ。俺は体を売ったんだよ」

瞠目するカレンを既に視界に入れていないのか、ルルーシユは笑いながら視線を自分のうっすらと膨らんだ胸に落とした。鷲掴みにされた爪痕が深く残っていた。

「別に好きな人が相手でなくてもできる事なんだよ。僅かな金や食料を乞う手段でしかない事だ。俺は何回も自分から股を開いたよ。媚びるような声を上げて、自分から腰を振って、男に跨って。娼婦も顔を青褪めるようなことを何度もやった。何度も、何度も」

笑い声はすぐに勢いを無くして、口内でごもった唸り声になった。体は胎児のように小さく丸めて、何もかもを拒絶しているようだった。

こんなに小さいルルーシユをカレンは初めて見た。幼い子供のような有様だった。

ナナリーが死んだかもしれないという、極限まで精神的に追い詰められた状況でなければ絶対に誰にも、いや、ジエレミア以外には見せることが無いだろうルルーシユの根底の、一番脆い部分が剥き出しになっっていた。それは触れるのも躊躇われるような無様で痛々しい姿だった。

「——何もかもが今更だ。俺は汚いんだ。取り返しがつかないくらいに汚れている。でももうそんなことはどうでもいいんだ。ナナリーが綺麗だから。俺が汚くても、人殺しでも、ナナリーが綺麗で、純真で、優しければ、俺は報われる。俺に理由ができる。ナナリーさえ……俺はナナリーさえ、」

祈るようなルルーシユの声にカレンは神経がぴりぴりと軋む感触

を覚えた。それは単に、惨めな格好を晒すルルーシユへの同情だけではなかった。

確かにルルーシユは可哀想なのだろうと思う。酷い目にも遭ってきたのだろうし、ナナリーも死んでしまった。

しかしそれにしたって、さつきから随分とルルーシユは自分勝手な事ばかり言っているのではないか。

ナナリーのためと言いながら、しかしルルーシユのしたことは結局は自分の自己満足のためでしかない。心優しいナナリーが自分のために姉が体を売ったと知って、どう思うのかと考えたことは無かったのか。一度でもナナリーを護られるべき無力な少女としてではなく、ちゃんと感情を持つ対等な存在と目して、相談したことはあったのだろうか。

それに今更だとか汚いんだとか言っているが、それではずっとルルーシユを守ってきたジェレミアの立場はどうなる。ずっとジェレミアに護られてきただろうに全く救われていないだなんて、それこそジェレミアにとってはいい面の皮だ。

さらにナナリーのためだけに動いてきただなんて、それではゼロに付き従ってきた黒の騎士団はどうなるのだ。本人がたとえナナリーのためだけに行動してきたのだとしてもゼロとして動いてきた責任はあるだろう。ナナリーが死んだとしてもまだ黒の騎士団としての仕事は残っているのだ。どうでもいいとまで言われて黙っていられるか。

そして何より、同情を誘うような言葉遣いで哀れっぽく叫んだところで、結局ルルーシユは誰の救いも求めていないのだ。ここで手を伸ばしてもその手を取ることは絶対にしない。馬鹿みたいにプライドが高いから。

なんて面倒な女なんだ。しかしそれがルルーシユだった。

呆れる程に自分勝手に傲慢でプライドの高い、何もかもを一人で抱えようとする女なのだった。一人では生きていけない程に弱い生き物ではないけれど、誰かに縋ることができる程に強い生き物ではなかった。

カレンは胸を突き上げる勢いのままに手を振り上げて、地面に蹲るルルーシユの頬を思いつきり引っぱいた。

パアンと高い音が響いた。ルルーシユは唇を動かすのを止めて、目を見開いてカレンを見上げた。

「さつきから黙って聞いてりゃあねえ……ルルーシユ、あんたの理想をナナリーに押し付けてんじゃないわよ！ナナリーはナナリー、あんたはあんたでしょう!？」

胸倉を掴んでがくがくと揺さぶる。人形のように頭が前後に揺れた。頬を真っ赤に腫らして、ルルーシユはぽかんと揺さぶられるがままになっていた。

「大体あんた女を馬鹿にしてるの!?!その程度のことですぐ汚くなるなんてある訳ないじゃない！セ、セックスするぐらい何よ、そんなことで人生最悪に不幸せですみたくない面してんじゃないわよ!!ばっかじゃないの!?!」

「……そんなこと、」

「そんなことよ!?!」

揺さぶる腕からは段々と力が抜けていった。カレンは齒ぎしりしながらどこにも向けようのない怒気を体中にため込んだ。

ルルーシユに乱暴をした男

男からルルーシユを護れなかったジエレミア

いなくなってしまったナナリー

フレイヤを撃ったスザク

フレイヤの製造を命じたシユナイゼル

自分勝手なことばかり口にするルルーシユ

一緒にギアス嚮団に向かったのにナナリーを救えず、何もできなかった自分

本当に理不尽なことばかりで嫌になる。何もかもを放り出して、安穩とした学園に戻って何もかもを忘れられたらと思う。しかしそうすることはできないのだ。それは目を閉じてベッドに逃げ込むのと同じだ。

それでは現実は何も変わらない。現実を変えるためには戦うしか

ないのだ。カレンはもうそのことを知っていた。

「だから、だからルルーシユは、汚くなんてないんだから。確かにあんたは馬鹿で卑怯でシスコンで自分勝手に馬鹿で人殺しなのかもしれないけど、でも綺麗なんだから。他の誰が汚いって言っても、あなたの敵になつても、あたしだけは絶対にルルーシユを護るんだからっ」

「——なんでカレンが泣くんのだ」

「あんたが泣かないからよ!!」

わあわあとカレンは声を上げて泣いた。

赤ん坊しかしないような泣き声を上げるカレンの頭をルルーシユはおどおどとしながら撫でた。頭を撫でる柔らかい感触にカレンはさらに音量を上げて泣きわめく。

ルルーシユは肩をびくりと震わせて、戸惑いながらも恐る恐るカレンを抱きしめた。即座に強く抱き返してくる両腕に息が止まりそうになる。しかしルルーシユは抱きしめる腕の力を決して緩めようとはしなかった。

徐々に泣き声を小さくして、とうとう啜り泣き始めたカレンに、ルルーシユは抱きしめるといふ行為の尊さを再確認した。

こんな風に言葉が意味を無くす瞬間に、体温を分かち合う以外に意味のあることは存在しない。

自分のためにこうして泣いてくれる人間はこれまで一人しかいなかった。カレンは二人目だ。ジェレミアは傷ついた自分のために涙を流して、いつでも抱きしめてくれた。その度に自分は、生きていてよかったと思うのだ。

自分のために涙を流す人間がいること。その人を抱きしめてあげられること。抱きしめ返してくれること。それがどれだけ貴重で幸福なことか。そのことに気づかないような人間なんて死んでしまえばいいんだ。

ルルーシユはすすり泣くカレンの首筋に顔を埋めて涙を零した。



「——つまり、ゼロがブリタニアの皇子であるか?」

「はい。そうです神楽耶様」

会議室には黒の騎士団の幹部が揃っていた。

全員が顔を沈鬱に顰める中で藤堂だけは額に汗を掻いていた。

何故この最悪のタイミングで、最悪の事実が発覚したのか。運の悪さに歯噛みをするしかない。

ナナリーがああのフレイヤの爆発に巻き込まれて死亡したことを藤堂はカレンから聞いていた。ならばゼロであるルルーシュが部屋に引き籠って出てこれないのも分かる。6年前から2人は非常に仲の良い兄妹、いや、姉妹だった。暫くルルーシュは戦える状態ではないだろう。

しかしだからといって、皇族としての嫌疑がかけられている今この時点においてゼロが引き籠るとゼロの立場が危うくなる。最悪、ゼロの立場を誰かに移すという話になるだろう。

そうなればその最有力候補は誰なのか。何となく予想がつく。胃がねじ切れる音が聞こえるようだった。

「おい、それって証拠は?」

「ゼロの部屋からブリタニアの皇子である、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが出てきたところが目撃された。その現場の映像をディートハルトが持っている」

視線がディートハルトに集まる。肩を竦めてディートハルトは一本のデータチップを差し出した。

南が無言でプロジェクターにチップを差し込む。画面に拡大表示された映像には一見女性にも見える美貌の青年がゼロの私室から出てくる様子が映っていた。

「間違いない。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアだ。残存している写真とも一致する」

朝比奈がブリタニア皇族年鑑に残されていた12歳頃のルルーシュの写真を画面に表示させた。

うわ、と声上がる。神楽耶は懐かしい顔を見て口元に手を当てた。初恋の少年が画面に映し出されていた。そしてその姿はゼロの

私室から出てきた青年と瓜二つだった。同一人物であることは疑いようも無かった。

「……確かに似ていますが、6年という時間が経過している訳ですしよく似た他人という線もあります。それに所詮は解像度の低いハンドカメラの映像。断定するのは聊か早過ぎませんか？」

「よくもいけしゃあしゃあと」

ルルーシユの姿を見てカオスだ何だと騒いでいたのは誰だったか。向けられる非難の視線を鼻で笑い、デイトハルトは視線を懐かしき英雄の雛へと向けた。

一応はゼロの嫌疑を逸らすような発言をしたが、ブリタニア人である自分の発言の重みなど高が知れている。黒の騎士団は根本的にブリタニア人を敵視しているために、ブリタニアの血が入っているというだけで蔑視される傾向にあるのだから。

誰もが口を噤む。沈黙に耐え切れなかったのか玉城がうじうじと口を開いた。

「……ていうかよお、扇はどこなんだよ。こんな時こそあいつが皆の意見を纏めるべきじゃねえの？出てこないっつーことはもしかしてあいつもゼロみたいに関人といちゃいちゃしてんじゃ、」

「違う。俺とゼロを一緒にするな」

会議室の扉が開く。扉の向こうには顔に影を落とした扇が立っていた。黒の騎士団服を着た扇は見慣れぬ女性を後ろに伴っている。

女性は水色に近い青みがかった長い髪と褐色の肌をした凛々しい容姿の美人であり、いかにも日本人らしい中肉中背の扇と並ぶとあまりに容姿の釣り合いが取れていないように見えた。だがその場にいる面々が顔を歪めたのは、その女が明らかにアジア人ではなくブリタニア人だったためだ。

事務総長という扇の役職を鑑みて藤堂が控えめに誰何する。

「扇、その女は誰だ。この会議は部外者禁止になっていることは知っているだろう。どうして連れてきたんだ」

「彼女は千草という。ゼロに関しての情報提供者だ」

軽くお辞儀をして千草は扇の隣に腰を下ろした。その動きには一

切の無駄が無く、恐らくは軍人だろうと藤堂は早々に気付いた。

「ゼロの情報提供者？」

「千草はゼロの仮面の中身を見たことがあるらしい。それがルルーシュだったそうだ。ゼロは、ルルーシュは……俺達を裏切っていたんだ。ずっと嘘をついて、俺達を利用していた」

最悪だ。藤堂は扇の頭をぶん殴りたくなる衝動に駆られた。

千草という女の証言が本当だろうと虚偽であろうとどうでもいい。問題は黒の騎士団の前身である扇グループのリーダーであり、現在は事務総長である扇がゼロを疑っているということが何よりも問題なのだ。

「待て扇、たとえゼロがブリタニアの皇子であったとしても彼が成した功績は何も変わらない。黒の騎士団の理念は生まれ育ちに関わらないで弱者を救済するものではなかったのか」

「でもあいつがブリタニアの皇子だってんなら、もしかしたら黒の騎士団を利用して皇帝になろうとしたのかも……」

「そ、そんなわけがあるか！ゼロだぜ!?ゼロがそんなことするわけねーだろうがよ！大体その女にしたって、しよーこはあんのかよ!!ゼロがブリタニアの皇子だっていうしよーこはよおー!」

千草を指さして叫ぶ玉城に、千草は至って冷静に頷いた。

「ああ、ある。シンジユク事変の時に私はゼロらしき少年にKMFを奪われた。そいつは間違いなくルルーシュだった。その直後にゼロは旧扇グループへ向けて私のKMFから通信を出したんだ」

「それでは証拠にならない。むしろ現状では、お前が虚偽の告白で黒の騎士団の瓦解を目論んでいるブリタニアの工員である可能性の方が高いくらいだ。これ以上証拠の無い虚言で会議を惑わすのなら即刻出て行ってもらおう」

「それだけじゃないんだ。ゼロが連れてきたジェレミアとかいうブリタニア人はルルーシュの選任騎士候補だった男だ。だから、」

「だから何だと言っんだ!!」

机を叩く音が高らかに響いた。

敵国であるブリタニアではなく、初めて味方に向けられた奇跡の

藤堂の怒りに全員が肩を震わせる。

しかし恐る恐ると言った体で扇が口を開いた。千草を背中に庇いながら小声で呟く。声自体は小さいものの、藤堂の一喝で湖面のように静まり返った会議室に扇の声は良く響いた。

「だから、ルルーシユは皇族なのかもしれないと……そもそもどうしてゼロは俺達に顔を見せてくれないんだ。それこそがおかしいじゃないか。仲間だって言うのに……」

「そうですね。家族や知り合いを人質に取られないためにメディアに顔を出さないのならともかく、幹部の俺達にまで顔を隠すなんておかしいじゃないですか。その時点でゼロに信頼なんてありませんよ」「今更それを言うのか!?!これまでゼロが仮面を被っていたことを容認してきておいて、その中身がブリタニアの皇子である可能性を示唆された程度で態度を覆すなんて、道理が合わないではないか!」

「日本人じゃないってことは確かに桐原から言われていたさ。だから皆ゼロは中華連邦か、E・U・か、もしくは他の小国の人間だと思っていたんだ。まさかブリタニア人だとは思ってもいなかったし、それも皇族だなんて……受け入れ難いのもしょうがないだろう」

「それにもう争いは終わったんだ。日本は帰ってきた。だからゼロがいなくたって問題は無いんじゃないか?」

扇の呟きは奇妙な程に会議に染み渡った。

それは全員が感じていた事だった。もう日本は取り戻されたのだ。英雄ゼロがいなくてもこれからはなんとかなる。無論いまいよりもいた方が色々と便利だが、戦争が終結した現状においてゼロは絶対不可欠で代替不可能な英雄ではない。

そんな状況でゼロが皇族かもしれないという面倒な事態が起きてしまったのだから、いつそのことゼロなんていなくても、という考えが沸き起こる。

普段は高らかなゼロの声色に対して反論をしたり賛同の声を上げたりと紛糾することが多い会議室にあって、異様な程の静けさが空気に溶け込んで部屋を満たした。

肌寒く、居心地の悪い空気に真っ先に耐えられなくなったのは玉城

だった。

「お、おいおいおい、なんかおかしくねえか!?俺達はゼロのおかげでここまで来たんじゃないかよ!なのになんだよ、扇も、てめらもよ、おかしくねえか!?よく分かんねえけど、よく分かんねえけどよう、」
「……玉城、何だかおかしいことは、俺達も何となく分かっている。でも……」

「彼は……彼がブリタニア人で、皇族であったとしても、一緒に戦ってくれたことは事実だ。感謝はしよう。藤堂さんではなく、ゼロの下で戦ったことに私は後悔は無い。しかしもう、これからは無理だ」

「彼は俺達に嘘をついた。そして人を殺させた。だから俺は……俺はもう、ゼロの下では戦えない」

ぽつぽつと心情を吐露する面々の中で、藤堂はどうすればいいのか分からず口を噤んでいた。

ここで、自分は前からゼロがルルーシュだと知っていたことや、実はゼロが女性であったことを告白すれば事態は変わるだろうか。

鬱々とした顔色のメンバーの中でたった2人、背筋をぴんと伸ばして鋭い目つきをしている千草と、顎に手をやって思索にふけっているデイトハルトへ視線を向ける。デイトハルトは何やら企んでいるようだがその意図までは読み取れない。

ふと奇妙な笑いが込みあがってきた。黒の騎士団の会議室にあつてブリタニア人だけが凜としているのもおかしい話だ。

最早自分が何を言っても変わらないだろうと藤堂は力なく首を振った。

多くの面々がルルーシュを受け入れられないのは彼女の所業ではなく血統だ。ならば彼女がこれまでどのような偉業を成し遂げてきたにしても、全くもって意味は無い。その生まれからして彼女は日本人に受け入れられることはありえないのだから、彼女の有能さをいかに藤堂が熱弁しても結局ゼロは黒の騎士団から排斥される運命にある。

むしろ彼女からしてみれば、ここらで黒の騎士団を辞める方が幸せなのかもしれない。

その考えが浮かび藤堂は口を開くのを止めた。17歳の少女に散々に色々なことを押し付けた。この上唯一の家族であるナナリーが死んでしまった彼女に、さらに戦えと言う権利は自分には無い。

彼女はゼロを辞めて休むべきだ。きつとそれが正しい。

ただしそれは排斥という形ではなく、他者に職務を委任しての勇退であるべきだった。血統というただ一点でもって仲間が排斥されるような組織のために、何故自分は今ここで戦ってきたのか。

馬鹿らしい。冷ややかな視線で頂垂れる黒の騎士団達を見回した。

戦争が長く続き過ぎたのだ。多くの者がブリタニア人とみれば敵とみなしてしまう程に長い戦乱だった。今ではルルーシュという人間を評価するのに個人の性格や能力ではなく、皇族というラベルだけを見て判断してしまう。

それではナンバーズだからと差別したブリタニア人と同レベルだろうに。

「お待ちください皆さん。私から一つ質問を」

静まり返った会議室の中で神楽耶が声を上げた。白い指先で千草を挿す。

「そちらの千草という方は、どうしてゼロ様がルルーシュ殿下と知っ
ていながらこれまで黙っていたのですか。お話を聞く限り、シンジユク事変の時からゼロ様の正体に勘づいていたというように聞こえましたが」

「それは……」

「千草は記憶喪失だったんです。撃たれて、海に落ちて。俺が見つ
けて助けたけど、最近まで記憶は戻っていなかったから、」

「撃たれた？」

「はい。千草がゼロの正体に勘づいていると知った誰かが、」

扇はじろりとデイトハルトを睨みつけた。

デイトハルトは軽く肩を竦めた。馬鹿な男だと思っても、これでは長居は難しそうだ。デイトハルトは掌の上に乗せた盗聴器を軽く摩って弄んだ。

シュナイゼルは背もたれのある椅子にゆつたりと腰かけて、耳に当てたイヤホンから漏れ聞こえる黒の騎士団幹部の会話に耳を傾けていた。

ルルーシュがゼロであるという事実によくの者が混乱を抱いたまま一旦会議に休憩が挟まる。それと同時にシュナイゼルも深く息を吐いた。

ここまで来てしまうと、たとえルルーシュがゼロであることを否定しても深い禍根が残るだろう。そもそもナナリーがいなくなり、さらに合衆国日本の戸籍が入った以上ルルーシュがゼロとしての地位に固執する理由は何もない。

詰め寄られるとあっさりゼロの座から身を引いてしまいそうだが、それで困るのは当の黒の騎士団なのだが、そのことに彼らはまだ気づいている様子がない。

つまりこちらにとっては好機と言える。シュナイゼルは端末を取り出してスザクへと連絡を繋げた。スザクはワンコールで通信に応えた。

『はい。こちら枢木スザクです。どうかされましたかシュナイゼル殿下』

「君への処分が決まったよ」

言われるまでも無く、それがフレイヤを勝手に持ち出した所業への罰であることは明らかだった。

スザクはしかし他人事のようにそうですかと答えるのみだった。通話の自動応答とも大差の無い温度を感じさせない声色だった。

『何であろうと、殿下の御決定を謹んで承ります』

「君をナイトオブ라운ズに昇格させる。二心なく皇帝陛下にお仕えしなさい」

シュナイゼルの言葉の意味をスザクは暫くの間噛みしめた。そうしてやはり淡々とした声で返答を紡ぐ。

『シュナイゼル殿下が次の皇帝におなりになるということでしょうか』

「違うよ」

それでは駒が足りない。シユナイゼルは脳内で絶対に勝つ手段を模索していた。

あのフレイヤでナナリーと一緒に皇帝が死んだと思う程にシユナイゼルは楽観的ではなかった。いつだって最悪を想定して、そして最悪の状況に至っても勝つ手段を確保しておくのがシユナイゼルの戦い方だった。

感情を取り戻したシユナイゼルの敵はシャルルであり、そしてギアス嚮団だ。自分の感情を奪い、兄弟たちの命を弄び、自分勝手に振る舞うあの馬鹿な父親をのさばらせておくことは沸き起こる怒りという感情が許させない。

あのシャルルが生き延びている確率が僅かなからであるにしても残っているのならば、対策を練っておかないと言う選択肢はシユナイゼルには無かった。勝つためにはそのための最善手を打っておく必要がある。

シユナイゼルは手のひらの内にある最強の駒を摘まみ上げた。

「次の皇帝はルルーシュだ。君には、ルルーシュのナイトオブブラウンズになってもらう」

10. なりたい職業になるためには、能力よりタイミングが問題だよなあ……

「会議室に来いと、扇が？」

「うん。扇さんがゼロと緊急で話し合いたいことがあるから探してくれって言うから、C.C.に居場所を聞いたの。そしたらクラブハウスに行ったって聞いて、急いでクラブハウスに行って、それでクラブハウスに行ったら咲世子さんからルルーシュを探してくれって言われて……」

「そうか。手間をかけさせたな」

自分が錯乱して出歩いたことで、カレンは随分と奔走したらしい。端末を見ると何百件と通知が入っていた。カレンを含めた黒の騎士団の幹部の名前が不在着信の欄に整然と並んでいる。この緊急事態にゼロが姿を消したのだから幹部の混乱は相当なものだっただろう。

しかしカレンはゼロを責める声色を僅かにも感じさせずに肩を竦めた。

「別に大したことじゃないわ、割と早く見つかったし。まあ誰か一人でも警護を付けて欲しかったけど……でもクラブハウスに行くためにゼロ親衛隊の隊員を警護につける訳にもいかないのよね。それだと親衛隊ではあたしかジェレミアさんか咲世子さんしか動けないか」「そうだルルーシュ。オレンジから報告があったぞ。もう少しで帰還するそうさ」

「……そうか」

早いなと思ったが、すぐにそれも当然だろうと思ひ直した。

瞼の裏に大穴の開いた南極大陸の光景を思い浮かべる。ナナリーを探せと命令したが、あの広漠とした氷の大地の一体どこを探すというのか。頬の内肉から血の味がするほどに歯を噛みしめた。

ルルーシュは合衆国日本政庁の最上階に位置するゼロの私室まで戻り、服を着替えていた。

私室とはいっても衣装ケース1つと机、そしてベッドしか置かれていない小さい部屋であり、少し広めの仮眠室程度の設備しか揃っていない。実際の所仮眠室としてしか使っていないため、それほどに設備を充実させる必要を感じなかったが故である。

破かれた下着の代わりを衣装ケースから引っ張り出して身に着ける。ささやかに盛り上がる胸はサラシで締め上げて押しつぶした。胸のサイズは平均よりずっと小さいとは言っても、パイロットスーツも兼ねるゼロの衣装は体に密着する構造をしており、しっかり潰していないと一見違和感がある。

慣れた手つきでサラシを巻くルルーシユを手伝いながら、C.C.は平坦な声でぽつぽつと喋った。

「ナナリーにギアスをかけた時のことだが……ギアスを使い過ぎると暴走してONとOFFの切り替えができなくなるんだ。お前に渡したコンタクトはギアスの効果を遮断するもので、これからギアスを使う時にはコンタクトを外してから使う必要がある」

「そうか」

「……悪いな」

「リスクのある力だとは最初から承知していた。甘く見ていた俺の責任だ」

C.C.は無言でサラシを巻き終えた。平坦になった胸を見下ろしてサラシに緩みが無い事を確認する。しっかりと胸が潰れたことを確認してからゼロの衣装を身に纏った。

全身を覆う黒の衣装を身に着け終えた頃に、扉が軽く擦れるような音を立てて開いた。

扉の向こうには疲労で顔を青くしたジェレミアが立っていた。その顔色はジェレミアの労苦に見合うだけの成果は得られなかったことを察するに十分だった。

今や唯一の家族となったジェレミアの顔を見て、この1日で身に沸き起こった全ての安堵と怒り、悲喜が混ぜ合わさったぐちゃぐちゃの感情が波飛沫をたてた。そこでようやく自分が立つことさえ困難な程に疲れていることを自覚する。ここ数日の間に色々なことがあり

過ぎた。

「ルルーシユ様、ただいま戻りました」
「ん」

ルルーシユはジェレミアに近づいてぽすんと抱き着いた。突然胸元に飛び込んできた主君に、しかし驚くこともなく、ジェレミアは薄らと浮き上がる背骨を一つ一つ確認するようにゆっくりと撫でた。

ナナリーというルルーシユの存在意義を失ったのかもしれないのだ。人前で自らの弱さを露出することを忌避するルルーシユだが、今は虚勢を取り繕うことが出来ない程に酷く疲れているのだろう。

「——お疲れですね」

「ん。思い出すと割と気持ち悪かったからリセットしている。やっぱりセックスって女に負担しかない行為だよなあ」

ぐりぐりと逞しい肩に顔を埋めるルルーシユは、ジェレミアが一瞬で顔を般若のように歪めたことに気付かなかった。

手つきは優しく細い背中を撫でながら、かっぴらいた瞳をぐりんと動かして事情を知っているだろうカレンに焦点を合わせる。オレンジ色の眼光が説明しろと怒鳴っていた。

ジェレミアが怒っている様子を見たことの無いカレンは、目を剥いて殺気さえ放つ形相をした騎士に顔を引き攣らせた。顔立ちが厳つい分、怒りを露わにした顔はそれだけで脅迫に等しい圧力がある。自分に向けている怒りではないと分かっているにもかかわらずも咄嗟に体が強張り喉が引き攣った。

路地裏での騒動を説明するべきなのだろうが、しかしどう説明したものやら。正直に路地裏をルルーシユが一人で彷徨っていたら暴漢に襲われかけたと言ってもいいのだろうか。だが性暴力の被害者であるルルーシユがいる場所で何をされたか思い出させるようなことを口にするのはどうなのだろうか。

葛藤するカレンを救ったのは平然としたルルーシユの声だった。「別に何もされていないからな。カレンに助けてもらったから」

それ以上の質問はするなという硬質の声色にジェレミアは口の端から零れそうになる疑問をぐつとこらえた。

聞きたいことはいくらでもあるが、ルルーシユがそう言うのであればこれ以上の追求は主君の望むところでは無いのだろう。

湧き上がる無数の疑問の代わりに当たり障りのなく、しかし最も聞きたい質問を口にする。

「そうですか。お体は大丈夫ですか？」

「うん」

普段の格好つけとは別人のように素直な声色だった。その声に、何もされていないのは本当なのだろうが、ルルーシユは心底から疲弊しているのだとジェレミアは察した。

プライドが凄まじく高いルルーシユは、もう10年を超える付き合いのある自分相手にさえここまで素直な顔を向けることは滅多にない。さらにカレンやC・C・の前では少年らしい幼い気概からか、できるだけ恰好を付けたいと思っているらしいのだから、今の疲弊度合いは相当だろう。

ルルーシユは深く息を吸い込んでジェレミアから離れた。

「ありがとう。大分マシになった」

「いえ。ルルーシユ様がご無事であれば私はそれで、」

世辞ではなく本心からそう思っているのだろう、労わるような視線を真正面から受ける。

その中には堪えきれない無力感が漂っていた。やっぱりそうだろうな、とルルーシユは泣きそうに顔を歪めた。

「それで……ジェレミア、ナナリーは？」

ジェレミアは俯き、ゆっくりと首を振った。それが何よりの返事だった。

「そうか」

そうか、と再度呟いてルルーシユは仮面を被り直した。

予想していた結果だった。倒れ伏して二度と起き上がりたくないという喚き声が脳内で響いたが、唇を強く噛みしめて決して表には出さないように耐えた。

「会議室に行く。ジェレミアとカレンはついて来い。C・C・はここに残って外部からの通信に対応しろ」

「イエス、ユアマジエステイ」

「承知しました。ゼロ」

ひらひらと手を振るC・C。を部屋に置いて、背後に2人の騎士を伴って歩く。扇に指定された会議室はそう遠くはない。

しかしその短い距離を歩くためには信じられない程の気力が必要だった。ナナリーがいないという、ただそれだけで呼吸するために必要な力でさえも普段よりずっと沢山必要であるような気がした。

しかしそれでもまだ自分はゼロなのだった。

だから責任だけは最後まで果たさなければならぬ。多大な責任感と義務感だけがもう死に体のルルーシユの体を突き動かしていた。だが足の動きも立ち姿も、普段の覇気に溢れるゼロとは違い、風に揺れる木の葉のような有様だった。



会議室には黒の騎士団の幹部が揃っていた。多忙な神楽耶までも議長席の隣席に小さな体を乗せている。

普段よりも冷たい空気を薄々と察しながらも普段通りに議長席へ腰を下ろす。処断されるべき被告人が目の前に姿を現したと言わんばかりに、扇が声を張り上げた。

「ゼロ、いやルルーシユ！お前は俺達を、ずっと騙していたんだな！」
いかにも悲痛そうな声に同調の意を示す獣のような唸り声がかかる。

しかし扇を窺めるような視線もあり、中にはあからさまに扇を馬鹿にする視線も幹部の中にはあった。だが彼らには一つの共通点があった。ルルーシユに向けられた疑惑を秘めた瞳だ。

判決を待つ被告人のように議長席に座り込みながら、ルルーシユの胸に沸き上がったのは怒気でも焦りでもなく、ああバレたか、じゃあおしまいだな、という素っ気ないものだった。

ゼロがブリタニアの皇族だなんて幹部からしてみれば容認し難い事実だろう。一方的に糾弾され、排斥されるのも当然の流れだと思え

る。

むしろルルーシユはもし自分の出生がバレるような事があれば、こちらの抵抗を防ぐため地下室へと呼び出し、問答無用で銃口を向けて対話の席を設けることも無く私刑に処されるぐらいの想定はしていた。

会議室で話し合いの体を取り繕っているだけでも、想定していた最悪の状況からは程遠い。

居並ぶ幹部達を見回すと、怒気を露わにする者が半分、もう半分は困惑で顔を塗り固めている。

他はルルーシユを護ろうと警戒心を露わにするジエレミアと、申し訳なさに眉尻を下げる藤堂、そして動揺のあまり視線を彷徨わせるカレン。神楽耶は普段の年齢に見合わぬ凛々しい表情を保ったまま、日本刀のように鋭い気品を纏わせて黒の騎士団の面々を睥睨していた。

衆目からの視線を一身に集めながらルルーシユは小さな笑い声を立てた。ジエレミアの耳にはルルーシユにしては珍しく投げやりで自嘲の成分が強い笑い声に聞こえたが、他の面々には黒の騎士団への嘲弄としか聞こえなかった。

「今になってようやく気づいたか。全く、洞察力も観察力も思考力も乏しい愚昧な輩としか言いようがないな。

——ああそうだと。俺はルルーシユ。ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア。神聖ブリタニア帝国第11皇子であり、閃光のマリアンヌが長子、ヴィ家の当主である。元皇位継承権17位を持つブリタニアの血を引く者だ」

糾弾されている立場にある筈のルルーシユは、しかし愚かしい民衆を威圧するような傲慢さで高らかに言い放った。

行政特区日本でゼロが放った何万もの民衆へ響き渡るような声ではないものの、その声は異様なまでの高潔さを孕んでおり、狭い会議室を破裂させんばかりの迫力があつた。

ほんの短い間会議室には静寂が満ちたが、次の瞬間には堰を切るように怒号と困惑がうねり狂った。

「お前、俺達に嘘をついていたんだな！弱者を助けるとか言っつて、お前はブリタニア人じゃないか！それも皇族だなんて……」

「どうせ皇位継承権争いのために黒の騎士団を利用したんだろう！」

「お前の命令で一体何人死んだと思っっているんだ！」

「戦争を玩具にして、どれだけの被害者を出せば気が済むんだ！」

「ちよ、ちよと待て皆！確かにゼロはブリタニア人だがこれまでの功績は評価されるべきだ。まずは話を聞くべきじゃないのか！」

「でも井上も、ト部も、こいつのせいでみんな死んだぞ!?ゼロがちやんとしていないから！」

「皇族だからって差別されるのはどうなのよ。確かに南極ではゼロのせいで指揮系統が崩れたけど、でもだからってこんな、皆でこんな寄つてたかつて、」

「ゼロの口の上手さは知っているだろう。話したところでどうせこつちが煙に巻かれるだけだ」

「だからって全部の責任をゼロにおっかぶせるのか？それは黒の騎士団の幹部としてどうなんだ！」

「おい何とか言ったらどうだゼロ！」

「そうだゼロ、言い訳でもないのか！」

「どうして南極では指揮権を放り出したんだ！」

「何か言えよ！言っつて、言っつてくれよ……」

嘖き上がる怒号をそよ風のように流しながら、自分の不甲斐なさにルルーシュは頭痛がする思いだった。

自分の出生が露見すればこうなることは目に見えていた。だから徹底して「ルルーシュ」の姿が黒の騎士団に見られないよう苦心してきたというのに。ナナリーが死んで錯乱したとはいえ、ゼロの私室からアツシユフォード学園の制服を着て出るなんてとんだ間抜けな失敗だ。

幾多の視線に晒されながらルルーシュは仮面を脱いだ。黒く濡れたような髪が額に散った。

仮面の下から現れた絶世の美貌を前に糾弾の雨が降り止んだ。絹布のように滑らかな肌は仮面を被って熱が籠っていたせいで淡く上

気している。花卉を散らしたように艶めかしい唇は皮肉気な笑みを浮かべており、定規で引かれたように真っすぐな鼻が気の強さを示すように尖っていた。

そしてブリタニア皇族特有の董色が長い睫毛の麓に咲いている。アジア人だの白人種だのという些細な違いを嘲笑うような、半神めいた美貌がそこにあった。

だが糾弾が鳴り止んだのはその美貌によるものではなく、ルルーシユの容姿が想像以上に若いためであった。

その場にいた面々は資料を読んでルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが17歳であると知ってはいたが、若木のような瑞々しさの滴るルルーシユの姿は世界の半分を敵に回して采配を振り、さらに戦争の全責任を背負う責務を任されるべき年齢にはとても思えなかった。

無論のこと自分達大人が糾弾することを許される年齢でもない。

向けようとしていた弾劾が口の中で彷徨い、変質して、杉山は思ったままの言葉をぽつりと呟いた。

「美人だ」

「ありがとう」

思わず、と感嘆を口にした杉山にルルーシユは慣れた口調で返答した。その動作に、目の前にいる人間が精緻な人形ではなくちゃんと血の通った人間であることをようやく察して各々は口々に思い思いのことを呟いた。それは先程のような怒号ではなく小さな騒めきとして部屋を沸き立たせた。

「お、思ってたより、わけえんだな」

「めちやくちや美人じゃないか……」

「女じゃないのか?」

「嘘でしょ、こんな年下がゼロだったなんて」

「カレンと同一年だと聞いてはいたが、こんな、」

放っておけばこのまま雑談が延々と続きそうな雰囲気、会議の発起人なのだろう扇を見やる。しかし扇も想定外の状況にわたたと慌てるばかりだった。

扇としてはこのまま黒の騎士団幹部にルルーシユを糾弾させて、そ

のまま引退を迫る流れを作りたかったのだろう。小心者の扇は周囲の雰囲気逆らう勇氣を持たず、常にその場の流れに自分の意見を左右されるきらいがある。

だからこそあまりに若く美しいゼロを糾弾する手が緩んだ雰囲気察しながらも、場の流れに逆らい動くことができないでいるのだった。

では、と藤堂を見やる。藤堂は罪悪感の籠った目でルルーシュを見やりながらも、しかし横に首を振った。会議に関わる気は無く高みの見物を決め込んだらしい。実に賢明な判断だ。羨ましい。自分もそうしたい。

それならばと神楽耶を見るが、神楽耶は扇とその背後に佇む見覚えの無いブリタニア人の女を冷ややかに見据えていた。しかし上から降り注ぐルルーシュの視線に気づいて顔を持ち上げてにつこりと微笑む。しかし何も言葉を発しようとはせず、こちらもこの場の収集を付ける気は無いようだった。

しようがないと溜息を吐く。どうして排斥されようとしている自分の方が会議をひっぱらなくてはならないんだと苛立ちが込みあがった。

このまま全部放り投げて帰ってしまおうかという誘惑が頭を掠めたが、そうしたらそうしたらでまた別の問題が起こることは確実だ。黒の騎士団はともかく、ジェレミアやカレンにさらなる迷惑がかかってしまう可能性が高い。

つまりこの場は自分が収めなければならないのだろう。不本意なことに。不機嫌さを表すようにルルーシュは指先で机を叩いた。

「話が脱線しているのではないか？諸君らはずまり皇族の血を引く俺がゼロであることが気に食わないのだろうか。それで、」

「そうだ！お前は俺達にずっと嘘をついてきて、」

「俺は嘘はついていない。黙っていたただけだ。喋っている途中で口を挟むな」

鞭がしなるような叱責に扇は顔を真っ赤にしながらも口を閉じた。それ以上の抗弁が無いことを確認し、ルルーシュは視線を扇に向け

る。

「それで、お前たちは俺に何を望む。ブリタニア皇族である俺がゼロであることが気に食わないから、それでどうしたいんだ。正体を公にして欲しいのか？それともブリタニア皇族という特権を使って神聖ブリタニア帝国に対して日本に有利な交渉でもして欲しいのか？その点を明らかにしなければこれ以上の会議の進展はあり得んだろう。扇」

「え、は、」

「このメンバーを集めたのは扇、お前だな。俺の出生を知ったのは南と朝比奈だろう。彼らから報告を受けたお前は俺に真実を喋らせるため、そして俺を弾劾するためだけに黒の騎士団幹部のほぼ全員をこの場に集めた。確実に俺の責任を追及するために。違うか？」

「それ、それは。ただ俺はお前が真実を語るべきだと思って、弾劾とは、」

「御託はいい。そんなものは結局ただの言葉遊びでしか無い。お前の目的は何だ。何故俺をここに呼び、俺がゼロを辞めざるを得ない状況を作り出した……その女に何か入れ知恵でもされたか？」

扇に寄り添うように立っている、褐色の肌に鋼色の髪を持つ明らかにブリタニア人の女に目を向ける。

ルルーシユの視線から女を護ろうと扇は椅子を蹴飛ばして立ち上がった。

「違う！千草は関係ない！」

「関係無いのなら何故黒の騎士団の幹部のみが集まる会議室に連れてきた。部外者を連れてくる必要性があったのだろうか？それは何故だ」「それは、違うんだ。千草が、」

「何が違う。喋る内容を明確にして口にしろ。大体その千草という名前は何だ。その女はどう見てもブリタニア人か、さもなければヨーロッパ人だろう。どう見てもアジア人には思えないが？」

扇の背に守られながらも千草の表情は酷く冷静だった。立ち姿や僅かな動きからして一般人ではない。恐らくは軍人だ。

会ったことがあるような気がしてルルーシユは記憶を弄り起こし

た。膨大なデータを掘り起こしていると、千草と同じ容姿のブリタニアの軍服に身を包んだ女性士官の姿が蘇った。

「お前……ブリタニアの軍人か。シンジユクゲッターにいたな」

あの時はジエレミアが死んだと思つて半ば錯乱していたが、この女軍人にギアスをかけてKMFを奪つた記憶がある。

ブリタニア軍という言葉聞いて皆の扇に向ける目つきの色が変わった。

まさか扇は千草という女に籠絡されてゼロを表舞台から引きずり降ろそうとしたのではないかという疑惑の視線が扇に突き刺さる。

「軍人？え？」

「扇、お前まさか、」

「ち、違う！違うんだ！」

「だから何が違うんだよ！」

冷汗を流しながらも扇は千草を背後に庇つた。恋人を必死に護ろうとする献身的な彼氏のような動きは、しかしやはり籠絡されて操られているのでは、という疑いを強める結果に終わった。

「確かに、その、千草は軍人だった。でも記憶喪失になって、俺が保護してからはブリタニアと密通なんてしていない！」

「それこそしよーこはあんのかよ！その女がブリタニアと繋がっていないっていうしよーこはよ！」

「そうだ！元ブリタニア軍人だなんて信じられるものか！」

「だったら皇族のルルーシュを信じるのもおかしいだろう！千草は関係ない！」

「喧しい!!」

砲撃のように藤堂の声が会議室に轟く。

部屋はしんと静まった。ここまで藤堂が怒気を露わにしたことは黒の騎士団では無かった。千葉などは驚きで目を潤ませながら体を縮ませている。

静まった部屋を睨みつけるように視線を四方に向けながら、藤堂は普段より一段と低い声を発した。

「その千草という女については後回しだ。もうゼロがルルーシュ君で

あることを認められた以上、証言者であるその女がこれ以上この会議に参加する意義は認められない。連れて出ていけ」

「しかし、」

「連れて出ていけ。黒の騎士団の会議内容を無用に漏洩する事態を引き起こしたいのか！」

扇は不満げに顔を歪めたが、黒の騎士団に所属する日本人の中でも尊敬を集めている藤堂に逆らうことはできなかったのだろう、千草を連れて部屋を出た。

藤堂はすくすくと部屋を出ていく扇の背中を軽蔑がたつぷりと籠った視線で見送った後に、今度はルルーシユへと目を向けた。視線には諦観が滲み出ていた。

「話を中断させたな。ルルーシユ君、続きを」

「え、ルルーシユ君って……藤堂さん、ゼロとお知り合いなのですか？」

千葉が驚きの眼で藤堂とゼロを見やる。ああ、と藤堂は鷹揚に頷いた。

「彼はブリタニアからの人質として枢木家に滞在していた。私はその頃近くで道場を開いていて、枢木スザクを介して何度か会ったことがある。当時から頭がよく回る少年だった」

「勿論私もお会いしたことがありますけどね！」

ぐい、と神楽耶はルルーシユの腕に抱き着いて頬を擦り寄せた。

ブリタニア人へ明らかな親愛を示す神楽耶に周囲は啞然としながらも、しかしルルーシユは平然とした表情で神楽耶を見下ろした。

「お久しぶりです神楽耶様」

「お久しぶりですわルルーシユ殿下。相も変わらず、いえ、以前にもましてお美しくなられましたね。こんなお美しい方の妻になれるだなんて私光栄で光栄で、」

「申し訳ございませんが、私などが神楽耶様の夫だなんて大それたことですよ」

明確な拒否の言葉にぶん、と神楽耶は頬を膨らませた。

「何を仰いますか。英雄であるゼロが、もしくはブリタニアの皇子で

あつたあなた様が私と婚約するとなれば日本中が祝福してくれるでしょう。無論ただの政略結婚とする気はありません。貴方様に愛されるに相応しい妻となるよう、私、精一杯努力させて頂きますわ！こう見えて房中術などはもう心得ておりますのよ!!」

「……いえ、あの、神楽耶様。私はもう表舞台からは身を引く予定ですから、」

「そんな、あなたほどの方が隠棲なさるなどあまりに勿体ない。今後もゼロとして、いえ、ゼロで無くなったとしてもどうか合衆国日本を支える一員としてどうかお力添えを頂きたいものですわ。外国人とということでも面倒くさいことを言う輩もおりましようが、私と結婚すればそんな喧しい連中など一掃してご覧に入れましようー大丈夫です、私がルルーシュ殿下の子供の一人か二人でも産めば誰も何も言わなくなるでしょうから、」

「ぎ、残念ながら私には想い合っている人がおりますので、そのような私が神楽耶様を恐れ多くも妻に迎えるなど非礼にも程がありません。ご容赦下さい」

ルルーシュは引き攣った顔で苦笑いを零した。

勿論、想い合う人などいない。口から方便である。そもそも同性婚がそれ程に珍しく無い今日であっても神楽耶と結婚するのは問題があり過ぎる。そもそも子供なんて出来る筈もない。

神楽耶はルルーシュの嘘を真に受けてしゅんと顔を曇らせた。

「そ、そうなのですか……想う人が……いえ、では側室としてでも……」
「そのような失礼な真似を神楽耶様になさるなど、自分で自分が許せません。申し訳ございませんが、どうか神楽耶様は神楽耶様に相応しい誠意ある男性をお探してください。これまで多大な支援を頂いておいて、誠に失礼であるとは存じておりますが……」

「いえ、謝る必要はございませんわ。こちらこそ、ルルーシュ殿下に想い合う方がいらつしやるなど思いもよらず失礼致しました」

神楽耶はちらりとルルーシュの隣に立つ炎のように鮮やかな容姿を持つカレンを見やったが、カレンはその視線の意味を乙女の勘で明確に察知して必死でぶんぶんと首を横に振った。

日本随一の権力者の不興を買う気はカレンには無かった。

ルルーシユは神楽耶から視線を逸らし、未だにだんまりを続ける黒の騎士団幹部へと視線を移した。

「話が逸れた。それでお前たちは俺を追い出すのか。それともこのまま従うのか。どちらかはつきり決めろ」

神楽耶と話していた時よりも遙かに重苦しい声色へ、返答は無かった。誰もが責任を押し付けるように視線を交わす。

そもそもこの場にいる人員を集めたのは扇だった。しかし扇は千草を外に出したまま帰ってこない。

帰ってきたとしても敵軍の女に籠絡された可能性のある男の言など誰も聞く筈が無い。それを察しているからこそ扇も帰ってこないのかもしれないが。

押しつけがましい視線が走る中で南が立ち上がった。

扇グループの頃からゼロの下で戦ってきた初期メンバーの一人に視線が集まる。肌に突き刺さるような視線を感じながら、南はおおずおずと口を開いた。自分の発言に絶対の自信を持ってないという心情がありありと見て取れる、躊躇いがちな喋り方だった。

「ゼロ、俺は……俺はあんたに感謝してる。本当に、心から。俺は朝比奈みたいに、お前がいなくてもなんとかなつたとは思っていない。むしろゼロがいないと合衆国日本は設立されなかつたと思う。それは俺だけじゃなくて、大体の幹部がそう思っていると思う。それは間違いない事、だと思う」

その場にいた団員は恐る恐る、もしくははつきりと顔を縦に振った。藤堂は深く頷いていた。朝比奈だけが無然とした顔でルルーシユを睨む。

周囲からの消極的な同意を得て、一語一語確かめるように南は続ける。

「でも俺は、俺はお前にこれ以上従うことはできない。それはお前がブリタニアの皇子っていうことが理由なんじゃなくて……いや、それも一つなんだけど、でもそれ以上にお前が若すぎるからだ。お前はまだ17歳なんだろう。そうデータに書いてあった。」

その、もう戦争は終わったんだ。カレンやお前がいないと戦争で勝てなかったことは分かっているし、お前の力がまだ必要だと思うけど、でもそれ以上に未成年の子供が軍人になるのは間違っている、俺は思う。散々に戦わせておいて今更だと思うかもしれないけど、でも子供は戦場に立つべきじゃない」

本当に今更のことを言われてルルーシュは虚を突かれた顔をした。皇族とかブリタニア人とかいう理由ではなく、未成年ということはそこまで重要なことなのだろうか。

ブリタニアでは未成年のナンバーズが徴兵されたりすることは珍しい事では無く、ブリタニアの占領地ではカレンのような未成年のテロリストも珍しくない。

流星に軍の司令官が未成年であることは滅多にないが、しかし成人と同等の判断力と責任感があるのであれば未成年であっても何も問題は無いのではないか。

だが南の言葉に同意するように藤堂は小さく頷き、他の団員達も囁き合いながら南へと賛同の意を送っていた。皇族であることを黙っていたルルーシュへ苛立ちや嫌悪の情を抱く者達も、別段悪感情を抱いていない者達も、むしろルルーシュへ深い感謝を抱いている者達も、揃って南の言を正しいと認めた。

彼らはルルーシュよりも大人であった。だからこそ、未成年であるという言葉の意味をより正しく理解していた。

未成年は大人に護られるべきだ。実際にそうであるかは置いておいて、そうであるべきなのだ。

戦争は終わった。ならばカレンもルルーシュも、戦場から離れるべきだという総意が部屋に渦巻いていた。それは常に自らを前線に立たせ続けていたルルーシュにはどうにも理解できないものであった。「だからゼロ、俺たちはお前を認められない。子供が戦場に出るだなんて、合衆国日本では許されるべきことではないと思うから。だから……その、ゼロを辞めてくれると、助かる、と思う」

沈黙が落ちた。南はすとんと椅子に体を落とした。後に続く者はいなかった。

息を吐く。ルルーシユには理解の及ばぬ理由で、どうやらゼロは黒の騎士団から排斥されることが決定したらしい。

「そうか、分かった。いいだろう。では予定通り藤堂に後を任せる」
ルルーシユは仮面をその場に置いて立ち上がった。あまりにあつさりど決まったゼロの退任に最も驚いたのは幹部達だった。

藤堂は驚きこそしなかったが、苦虫を噛み潰したような顔で、しかし首を黙って縦に振った。未成年の軍人はいない方が良いという意見は藤堂も賛成だがゼロの退任はそう易々と認可できるものではない。

しかしこうなってしまった以上ゼロの退任はもう避けられない事態でもある。胃がねじ切れるような痛み能耐えながら藤堂は頭を抱えた。

突然に全権を委任された藤堂を哀れに思いながらも、しかし既に黒の騎士団のために割く労力をルルーシユは有していない。Win—Shuは情の厚い人間ではなかった。

「斑鳩と政庁にあるゼロの私物は好きにしてくれ。そう重要なものは置いていない。俺は今すぐに出ていこう」

「え、そんな、すぐに出ていけとは……」

これでは追い出すようでは無いか、と焦る南にルルーシユは違う、と応えた。

「するべきことがあるから、俺にはこれ以上ここにいられる時間が無いんだ。俺は妹を探しに行く」

「妹って、ナナリー・ヴィ・ブリタニアのことか？」

「そうだ。死んだと思っていたけれど、もしかするとまだ生きているかもしれないから」

ナナリーはギアス嚮団本部がフレイヤにより消滅した時にCの世界にいた。Cの世界は虚数空間であり、物理的法則は意味を為さない。

ならばもしかしたらナナリーはフレイヤの影響を受けずに、まだCの世界で生きているかもしれない。

可能性がゼロでないのならばルルーシュには諦めるという選択肢は無かった。ナナリーを探しに行かなければならない。

どうやってCの世界に行くのか、それどころかまだナナリーが生きるのかどうかすら分からない。だがそれでも、ナナリーを取り戻すためにできる限りのことをしたい。

ルルーシュはマントを翻した。その後、ジェレミアが続く。その後ろに少し躊躇いを残すカレンが続いた。

「ゼロ、お前と戦えてよかった」

頭を抱えながらも藤堂が呟いた短い言葉にはありつただけの感謝が詰まっていた。送辞に似た言葉に、ルルーシュは年相応の柔らかい笑顔を浮かべた。

「ごちんこそ。では去らばだ諸君——楽しかったよ」

最後にルルーシュが見せた心からの笑みに幹部が呆けている隙に、ルルーシュ、ジェレミア、そしてカレンは黒の騎士団に背を向けた。

この日を境に、ゼロは黒の騎士団から永遠に姿を消した。



「なんで俺に付いてきたんだ、カレン」

「あたしだって未成年だから、あんたがあんな理由でゼロを辞めちゃったら私だって辞めざるを得ないの！もう、どうして素直に辞めちゃったのよ。どうせあと数か月もすればあたしもあんたも18歳になるんだから、それまで引つ張れば何も問題は無かったっていうのに」

「18歳でCEOは無理がある。そもそも合衆国日本における成人年齢は20歳だろう。だとすると、俺が成人するまであと2年以上もかかる。それだけの時間があれば合衆国日本はゼロという英雄を必要としなくなる。未成年だからという理由を出されたらもう俺は辞めるしかないんだ」

まあ別にそう未練も無かったのだが。

「それよりルルーシュ様、ナナリー様がまだ生きているかもしれないというのはい」

「文字通りだ。Cの世界という空間の特殊性を失念していた。Cの世界は虚数空間であり、物理的な意味は存在しないとC・C・Cが言っていた。ならばフレイヤによつて黄昏の扉が破壊されてもその内部は無事かもしれない」

「でもそれって、どうやってナナリーを助けに行くのよ」

「他の遺跡からどうにか……」

言っておきながら、割と行き当たりばつたりであることは認めざるを得ない。

他の遺跡からナナリーがいるCの世界へ向かうことができるのだろうか。そもそも他の遺跡は南極のものと同じようにCの世界へ繋がっているのか。そして奇跡のような確率でCの世界へ入り込めたとして、ゼロとしての権限を失った今戦力的に不足していることは明らかだ。あまりに不確定なことが多すぎる。

しかし今ルルーシュがナナリーのためにできることは、自らの足を動かして一つ一つ遺跡を当たって行くことしか無かった。

無いと思っていた。

ゼロの服を着替えて政庁のエントランスホールを横切る。背後にはいつものようにジェレミアとC・C、そして当然と言った顔のカレンが無言のまま付いてきた。

理由はどうあれ期間にして約1年、戦場を共に飛び回ってきた仲間たちからゼロとしての立場を追われた直後のルルーシュへかける言葉をカレンは持ち合わせていなかったのだ。

しかしジェレミアが口を開かなかつたのは別の理由からだ。ジェレミア自身には、別段ルルーシュがゼロを辞めさせられたことに思うところは無い。むしろごく短期間親衛隊に所属しただけの立場からしてみれば、ブリタニア皇族であり未成年のルルーシュが戦争の終結したこの時期にゼロを辞めさせられたことは至極当然であるようにも思えた。

ルルーシユという一人の女性（彼らは青年と誤っているが）の幸福と平和を思うのならば、ゼロなどという、英雄と言えは聞こえは良いが突き詰めれば人殺しのテロリストの名など背負わない方が良いのは自明だ。

今この場でジェレミアが無言を保っていたのは、何となく、本当に何となく嫌な勘が働いたためだった。

ルルーシユに告げるにはあまりに曖昧な不安感をジェレミアは口にするには無かった。

だがここでルルーシユが表舞台から姿を消して、ナナリーを助けるべく陰で動くようになるとはどうしても思えなかった。

いつだって運命はこの人を振り回して、弄ぶのだから。

政庁に相応しい大きさの正面扉が合衆国日本の心臓部から立ち去ろうとする4人の気配を感じ取って自動で横に滑る。

扉のすぐ外には黄金を溶かしたような美しい金髪と大気圏最外層の色をした瞳を持つ芸術品のように美しい青年が待ち構えていた。

少しの罪悪感が混じってはいるが、凄まじい意志と感情の込められた色の瞳はルルーシユさえも圧倒させる程だった。

護衛として付き添っているのだろうスザクと、秘書として付き添っているらしいカノン。何やら楽しそうな顔をしているデイトハルト、そしてあの千草と呼ばれていた女を背後に連れている。

自分以上の策謀の才があるかもしれない人物を前に、ルルーシユはひくりと頬を引き皺らせた。

シュナイゼルが千草とデイトハルトを連れているということは、会議室で起こったことは全てシュナイゼルの掌の上だったということだろう。

全てを察したルルーシユは盛大に舌打ちをしてシュナイゼルを睨んだ。妹の怒気の籠った瞳に睨まれてシュナイゼルは申し訳なきげに目を泳がせる。

「シュナイゼル兄上、どうしてここにいらっしやるのでしょうか。私の記憶が正しければあなたはブリタニア本国にいらっしやる筈で

しよう。喧しい貴族連中を抑え込むために忙しいのでは？それとも単なる学生となった私を嘲笑いにいらっしやっただけでしょうか？」

「いや、違うんだ」

「ほう、では何の理由だ。返答如何によつては、」

「いや本当に違うんだ、私の目的はきつと君のそれとそう違うことは無い筈だから、どうかせめて話だけでも聞いてくれないだろうか」

おろおろとするシュナイゼルに向けて踵を一度地面にぶつけ、音を鳴らす。

これが感情の無い頃のシュナイゼルであれば、護衛を後ろに立たせるといふ愚行を嘲笑してきつきと殺しているところだ。今そうしようと思えないのは、酷く残念なことに、それなりにシュナイゼルに情のようなものを感じてしまっているからだろう。

感情の戻ったシュナイゼルの性格がユーフェミアに似て優しく温かいのが悪い。

そうでなければ自分はきつとシュナイゼルが自分をゼロの座から追い落とすために策を講じている可能性を考えて、それなりに対策を練ることだつてできていただろうに。

怒りの籠った足音にシュナイゼルは肩を震わせたが、しかし強い意志に突き動かされるように口を開いた。

「ルルーシユ、頼みがあるんだ。君にしか頼めないことなんだ」

懇願するような響きに、不機嫌の頂点にあるルルーシユは溜息を吐きながら耳を傾けた。

自分を嵌めたシュナイゼルへの苛立ちが治まった訳ではないが、頼みとやらを聞かなければずつとついてきそうなほどの熱量が声色に含まれていたからだつた。

「何だ」

「君に、ブリタニアの皇帝になつてほしいんだ」



ゼロの訃報が全世界に報じられた、その一か月後である。

全国放送された映像には、ブリタニア首都ペンドラゴンに構える皇宮の最深部、王座の間が映っていた。

絢爛な装飾が隅から隅まで張り巡らされ、平民では一生触れることさえ許されないだろう豪華な絨毯が広大な床を全て覆っている。その場で整然と並ぶ数百人もの人々も身に数々の宝石を飾り、貴族の中でも高位、もしくは皇族にしか着ることの許されない華麗な礼服を身に纏っていた。

だが視線を一身に受けて王座に座る人物は、彼らの礼服さえ粗末に見える程に豪華な服を身に纏っていた。裾の広い純白の布地には赤い宝石がいくつも埋め込まれ、縁には金糸が繊細な模様を描いている。冠にはひと際大きな宝石が飾られており周囲を睥睨するように輝いていた。

豪華な服はその人物の美貌を引き立たせて支配者然とした迫力を増すのに一役買っていた。まだ10代の後半だろう、少年から青年へと移り変わろうとする時期にあるその人物は椅子の上で足を組み、肘をついて興味なさげに階下を見下ろす。

その場に控えた家臣達は瞳の淵を赤く燃やしながら口々に新たな皇帝への忠誠を叫んでいた。

「オールハイル、ルルーシユ！オールハイル、ルルーシユ！」

「新たな皇帝、ルルーシユ陛下万歳!!」

「ブリタニアの頂点に座すお方、ルルーシユ陛下に全ての忠義を!!」

「ルルーシユ陛下万歳！」

「万歳！」

「万歳!!」

皇宮を音量で破らんと試みているような大歓声は音響マイクを通して全世界に響き渡った。声はブリタニア全土、中華連邦、E・U；、そして合衆国日本までを揺るがせた。

テレビを見ている者の大半は何が起こっているのか理解ができていなかった。

これまで皇帝にしか従うことの無かった大貴族や皇族達が、素性も知れない一人の青年に忠誠の声を上げている。それもその正体不明の人物は絶対不可侵の玉座に座り込み、宰相たるシュナイゼルすら従えているのだ。

ブリタニアという世界の半分を占める大国の心臓部がこのように簡単に侵される筈が無い。その思いが目の前の光景を現実だと受け止めることを拒絶する。

だが現実として彼はそこに居た。

目の前で平伏する大貴族や、声も張り裂けんばかりの忠誠を口にする親戚たちを興味の無い眼で一通り見下ろした後にルルーシュは立ち上がった。途端に周囲が静まり返る。ルルーシュの視線は陶然としている。デイトハルトが構えたカメラに注がれていた。

「諸君、急なことで混乱するかもしれないが、本日より私が神聖ブリタニア皇帝となる。異論のある者はいるか」

馬鹿にしているのか、それとも出来の悪い冗談の類か。酷く軽い口調で告げられた王位篡奪宣言にその場では異論の口を挟む者はいなかった。

ブリタニア本国やエリアに住居を持つ貴族からは無数の異論が怒号と共に上がったのだが、ペンドラゴンの中心部、世界でも最高峰の警備を誇る皇宮に届く訳も無い。

静まり返っている玉座の間で、さて、とルルーシュは話を続ける。

「異論は無いようだな。では続けて我が騎士達を紹介しよう。まずナイトオブセブン、枢木スザク」

背後に控えていた、子犬のように柔らかな容姿を持つルルーシュと同年代の青年が足を一步前に踏み出す。容姿自体は愛らしいものなのだが、表情は硬く、冷ややかで、氷漬けの人形のようなだった。彼は騎士に選ばれた喜びも怒りも表に出すことはなく、ただ静かにルルーシュの騎士としてその横に立っていた。

「次に我がナイトオブツゥー、ジェレミア・ゴットバルト」

ごく自然にジェレミアはルルーシユの隣に立った。軍人らしい無駄のない足運びでルルーシユを護るように横に立つ。騎士然とした佇まいに、彼がナイトオブワンではないのかと多くの者が驚いた。

何しろもうルルーシユの背後に控えているのはルルーシユやスザクと同年代の、どこか幼さを残す美しい少女しかいなかった。前ナイトオブワンである、帝国最強の名に相応しい体格を誇るビスマルクとは似ても似つかない細い体軀はあまりに頼りなさ気だった。

「そして最後に、我が最強の剣であるナイトオブワン、紅月カレンー」
その名前に、それまでとは違う意味を持つ驚きの声の世界中で上がった。

それはゼロに仕える、黒の騎士団最強の騎士の名前ではないか。

カレンは震えそうな手足を押さえつけながら、ルルーシユの背に背中を叩かれて前へと踏み出した。スザクより前に立つジェレミアの、そのさらに前に立つ。ルルーシユに最も近い位置に。

カレンは自分の選択した道を真つすぐに見つめた。道は目の前に開かれており、障害は多かった。

だがもうあの薄汚れた路地裏で、この面倒くさい女を護ろうと決めたカレンに迷いは無かった。

3人の騎士の中心で、ルルーシユは高らかに鳴り響く鐘のように声を張り上げた。

「この世界に生きる全ての人々よ。生まれた国、性別、人種、その他全ての区別なく私は語り掛ける。自らの意思を持ち、戦う全て人々に敬意をもって、私は希い、訴えよう、我々は今一丸となつて戦うべきである」と

心身を震わすような声だった。あまりに圧倒的な声量は内容以前に人々を脅かした。

だがその内容は多くの人々にとって理解不可能なものに近かった。ブリタニアの皇帝となろうとする男が何故一丸などと口にするのか。

ブリタニア皇帝とは他国を蹂躪する強奪者ではないのか。

疑問に答えるようにルルーシユは言葉を重ねる。

「諸君らよ、今や世界は危機に瀕している。人命が無為なことに費や

され、尊い命が数多く奪われた。また無駄なエネルギーが戦争に費やされ、それにより多くの人々が満足な生活を送ることができず、戦争に関わりの無い技術の進歩は足を止めた。

だが我々はそろそろ、戦う敵について考えるべきだ。それは肌の色や生まれ育ちが違うだけの人間では無い筈だ。我々が戦うべきは、この世界に存在する全ての理不尽と、暴力と、我々の自由意志を遮る敵ではないのか。それは血を流さなければ倒せない敵なのだろうか」

問いかけに答えるように、何を今更、という大合唱が世界各国で上がった。

最早何もかもが遅い。流れた血の量だけ戦争を止めることは難しい。それも戦争を始めた側のブリタニアから世界に投げかける言葉ではない。

しかしその事実を察していながらもルルーシュは口を閉ざすことは無かった。

「ブリタニア人よ、戦いに疲れ果てたブリタニア人達よ、諸君らはよく戦った。最早手足を止めて休むべきだ。休息の後、諸君らは命を奪うのではなく、命を護るために戦うべきだ。」

ブリタニアに蹂躪された多くの国々の人民よ。私は諸君らを私と同じ人間だと思い、そうして扱う。諸君らの生活、仕事、安心、そしてありとあらゆる機会、そういった何もかもを私は保障しよう。当人の責任に寄らない生まれ育ちで非難差別が蔓延ることを、私は何よりも忌避することをここに宣言しておこう。

勿論、失われた数多くの命の復讐のために自らの命を使いたいというのならば、そうすればよい。諸君らは自由だ。復讐する自由も諸君らにはあるべきだ。ブリタニアへの復讐のために私の命を狙う者がいれば、私はその者達を尊敬すべき敵として迎え撃とう。私欲を満たさんとして私を追い落とそうとする貴族とは別格の、貴ぶべき敵として!!

だが諸君らよ、私がブリタニアへ怒る復讐者の手により命を落とす前に、そしてまだ世界が混迷の中にいる間に、言っておくことがある!!」

ルルーシユは何かに抗うように拳を振り上げた。

「戦え、諸君！命ある全ての者よ！！命の全てを振り絞って、疲れて倒れ伏すまで戦うのだ！！」

私は何度でも、何度でも、喉が張り裂けようと、手足が千切れようと訴えよう！

我々は戦うべきだ！！我々の明日のために！！より良い明日を掴み取るために！！」

皇帝に追従する歓声が鳴り響いた。同様に、戸惑いの声が世界中で鳴り響く。

今この瞬間世界の中心に聳え立つルルーシユは、隣に立つシユナイゼルを非難の籠った瞳で睨みつけた。

本来ならばこの面倒な位置に立つのはシユナイゼルの筈だったのに。

じつとりとした視線を受けながらシユナイゼルは満足げににっこりと笑った。

この瞬間より、神聖ブリタニア帝国は一人の青年の下で激動の時代を迎えることになる。

神聖ブリタニア帝国99代目皇帝、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアの治世の始まりである。

浩然のかなた

11. 水泳部メイド、乙女騎士、魔女、ワンコ系騎士、オレンジサイボーグ、無駄にイケメン皇子・・・世間から俺ってどんな趣味だと思われているんだろ
う・・・

ルルーシユが皇帝に登極してから2か月間という間に、ブリタニアという国は天地がひっくり返ったような騒ぎを幾度も起こし、そしてその度に鎮静した。灼熱の夏と極寒の冬が毎日交互にやってくるような民衆にとっては気の抜けない日々がこの60日間毎日続いている。

なにせエリアの立て直し、ナンバーズへの差別撤廃、貴族優位の法律改正、数々の改革が凄まじい速さで断行されているのだ。

中でも苛烈だったのが不当に私腹を肥やす貴族の処断である。

ルルーシユの皇帝登極を認められないと反乱を起こした貴族の数は数十を数えた。

彼らは反乱を起こした数日の内に、一人の例外も無く、ナイトオブワン紅月カレンとナイトオブセブン枢木スザク2名の働きにより一人残らず叩き潰され、全財産を没収されている。

反乱の中で幸運にも命を落とさなかった貴族は圧倒的な軍事力の差に絶望し、反乱を画策する他の貴族の名前や情報売り払い、小さくとも領地を確保して隠棲を図る。そうして反乱を画策していた貴族は捕縛され、捕縛された貴族は情報を皇帝に売り、そうして・・・国内の反乱はたった2か月でほぼ姿を消した。

こうしてブリタニア国内では貴族とは名ばかりの存在となり、平民は貴族に虐げられることは無くなった。

だが民衆やナンバーズはあまりに急激な生活の変化に対応することができず、ただ混乱するばかりだった。昨日まで許容されていたことが今日には違法になっている。勿論その逆の現象も同時に起きて

いる。公平平等な清水は泥水に慣れた人々に幸福と不安を同時に齎した。

若く優秀で美しい皇帝の登極を戸惑いながらも喜ぶ民衆は少なからず存在したが、それ以上にブリタニアの絶対支配者となったルルーシュがいつ化けの皮を剥がして冷酷な支配者になるのかと危惧する者が大半であったのだ。

何しろ長らく死亡したと思われていたルルーシュに関する情報はあまりに少なく、唯一分かっていることは彼が実父を殺して皇帝位を篡奪し、さらに国内を平定するために数多くの貴族を現在進行形で殺害しているという程度である。公平で優秀な若者なのだろうが、どう考えても温厚な人柄ではありえない。

2か月という期間の間に、未だ民衆はルルーシュという若すぎる皇帝への評価を決めかねていた。

そのような混乱の極限にありながらブリタニアの敵国がブリタニアへ侵攻することが無かったのは、ルルーシュの改革がナンバーズや庶民にとって利益にしか成り得ないものであったというだけの理由ではない。

ただ単純にシュナイゼルという参謀と、勇名高い枢木スザク、そして黒の騎士団最強の名を恣にする紅月カレンを前にして、そう易く喧嘩を売る馬鹿な国がいなかったと言うだけだ。

ゼロが生きていればまた話は違ったかもしれないが、もう3カ月も前にゼロの正式な死亡報道が黒の騎士団から出されている。

今や世界の改革の最前線であり、革命の騎手であるルルーシュの執務室には5名の人間が収まっていた。

シュナイゼルは宰相として部屋の奥に立ち、目を細めて部屋の中心で跪いている人物を見降ろしている。スザクは皇帝と宰相の護衛として部屋の端に控えていた。その表情には何の色も無く、皇帝の身を護ることのみに注力している。

そしてこの皇宮の主であるルルーシュは絢爛な執務室に相応しい黒檀の重厚な机に肘を突き、目の前で首を垂れる人物を見下ろしてい

た。

金髪の三つ編みを三つ垂らした十代中頃の少年は、年齢に不相応なまでの長身を折り曲げて臣下の礼を取ったまま身動きさえしない。どこぞの貴族のぼんくら息子のように派手な容姿ではあるが、ジノ・ヴァインベルグの佇まいは騎士の名に恥ずかしくないものだった。

その隣に同じように跪く少女が、光の籠っていない視線をルルーシュやシュナイゼルに向けて無遠慮に彷徨わせて「記憶」と呟いているのを見れば、その差は雲泥だ。年齢を考えればしようがないのかもしれないが、アーニヤの騎士としての実力はともかく、挙動はあまり褒められたものではない。

アーニヤをこの場へ誘ったジノは少し後悔をしながらもアーニヤならば大丈夫だろうと計算をしていた。

アールストレイム男爵家は元々ヴィイ家の支援をしていた数少ない貴族の家柄だ。多少の無礼な真似をしようとも、ルルーシュ皇帝からそう蔑ろに扱われはしないだろう。

問題は自分の方だ。

「シャルル先帝に忠義の全てを尽くすナイトオブ라운ズの2名が、私に何の用かな？暗殺に来るのであればもう少し良い手段があったと思うが」

アドバイスでもするかのような柔らかい口調で紡がれた言葉に自分の唇の端が強張るのを感じる。

下手を売ったらここで殺される。それは恐怖から来る妄想ではないことを、ジノは嫌という程に理解していた。

皇帝陛下への謁見を願い出て、皇宮の門を潜り抜けるまでは貴族らしい扱いをされた。だが皇宮に入る前に武器の一切は没収され、着ていた服を下着まで一つ残らず監視の下で脱がせられ、尻の穴の中まで確認させられた。ここに至るまでの道のりは囚人を扱うそれと変わらないものだった。

そしてもし皇帝陛下や宰相を害する——もしくは害そうとしたと捉えられるような——真似をすれば、即座に首を切り落とされるだろう。比喩では無く、物理的に。

冷ややかにごちらを見降ろす枢木スザクならば瞬き一つせずによれが可能だ。

「初めてお目にかかりますルルーシユ陛下。私はジノ・ヴァインベルグと申します。こちらは、」

「アーニヤ・アールストレイム」

かちやかちやとアーニヤは懐から携帯端末を取り出した。

どうして没収されていないんだと驚愕するまえに、アーニヤはぴろりん♪という音を立てて端末のカメラをルルーシユに向けた。

「記録」

突発的な行動にどう反応するべきかとスザクは眉根を顰めた。

敵対的な行動ではないが、皇帝陛下を前にしてあまりに無礼に過ぎる。だが交友を求めてきた元ナイトオブブラウンズを、現ナイトオブブラウンズである自分が叱責してもよいものか。スザクは皇帝陛下の裁可を仰ぐために視線を向けたがルルーシユは手を一振りして黙らせた。そして懐かしい顔に少し笑みを零す。

アーニヤとルルーシユには面識があつた。もう6年も前になるが、アーニヤは行儀見習いとしてヴィ家に仕えるメイドであつたことがあつたのだ。当時ルルーシユは12歳、アーニヤは9歳であり、妹と同年齢のアーニヤをルルーシユはそれなりに気にかけていた。

目の前にいるアーニヤの容姿は当時より成長しているものの未だ幼く、ナナリーと同じ位の身長と体格であることは跪いたままあつても容易に察せられた。

「久しぶりだな、アーニヤ」

「6年ぶりくらいです。もうちよつとで7年になる……です」

「もうそんなになるんだな。アーニヤも14歳か、大きくなるはずだ」

「あんまり大きくならなかつた……です。まだこれから伸びる。と思う。ます」

「……そうか。それでアーニヤ、これからどうするんだ？ ナイトオブブラウンズを引退したいというのならこちらから手配しよう。監査の結果、アールストレイム家の領地運営に落ち度は見つからなかったから財も領地もそのまま残る。家に戻つたとしても生活には困らな

いぞ?」

「今更貴族の子女に戻るつもりは無い。無いです。私が戦場に飽きるまではここに置いておいて欲しい。力にはなる。なります」

下手くそな敬語を気にもせず、ルルーシユはうーん、と唸った。

「未成年の子供が戦場にいるのはあまり良く無い事らしいんだが。アーニヤは若いし、戦場以外での経験を積んで、それからまた軍人に復帰しても良いと俺は思う。軍人などよりもっとアーニヤに合った、それでいて平和的で生産的な職業を見つけられるかもしれないぞ?」

「年齢は関係が無い。力のあるものが戦う。無い者は作物を作ったり、料理を作ったり、学校で教えたりする。その方が効率的で正しい。私に軍人としての適性があることは間違いない…です。他の職業を探すより、今適正があると確実に分かっている軍人の道を究める方が建設的、だと思えます」

「その意見は極端ではあるように思うが…これまでナイトオブランズを大過無く務めてきたアーニヤを追い出すというのも道理が無いな。それに私自身未成年だから、この論はお前を説得するには使えないな。良いだろう、アーニヤ・アールストレイム。私のナイトオブシックスの座を与えてやる。無理のない範囲で勤めよ」

「ありがとうございます」

「あと敬語を使い難いなら使わなくてもいい。6年前までと同じで構わないさ」

「流石にそれは対外的に問題がある。出来る限りで努力していく。していきます」

言いたいことだけ言い終わり、後はジノに任せる、とアーニヤは携帯端末を弄り始めた。

胆力がある少女だと以前から思っていたが、皇帝陛下を前にこの態度はどうなのだろうか。6年前の知り合いだからだとしても目の前に座するのは反乱を起こす貴族を悉く踏み潰し、この2か月間ブリタニア帝国に止まない血の雨を降らせている皇帝だ。

徹底的に効率的であり、現実的な皇帝の業績は在位2か月のこの時点で既に凄まじいが、流れた血の量だって凄まじい。

噴き上がる歓喜や怨嗟の声に眉一つ動かさず、私利私欲の一切を挟まずに全ての存在へ平等に益と罰を下すルルーシユの姿は、ジノの眼には人間を超えた何かのようにしか思えなかった。

それはジノのみならず、新皇帝の半神めいた美しい容姿も相まって、もしや戦争に酔ったブリタニアを変革するべく天から下された天使なのではないかという聊か滑稽な噂まである。

流石にジノも目の前の存在が人間ではないとまでは思っていない。だがそんな噂が立つのもおかしくないと思えるほどに、こうして間近で見るルルーシユは眩いまでに美しかった。とても男とは思えない程だ。

「話が逸れた。ジノ、先帝に忠義を尽くすナイトオブブラウンズであるお前が私の前に跪くとはいったいどのような冗談かな？笑えるものだど嬉しいのだが」

冷やかな笑みを浮かべるルルーシユに向けて、アーニヤに対しての態度が自分へのそれとは違いすぎませんか、という抗議の聲が上がりそうになった。口から出るまでになんとか噛み潰す。

自分の置かれている状況が分からない程に馬鹿ではない。

先帝のナイトオブブラウンズなど、新皇帝であるルルーシユからしてみれば反乱の芽以外の何物でもない。ましてや先帝シャルルを殺して帝位を篡奪したことを公言しているのだから猶更だ。ブリタニア各地で皇帝に反旗を翻す貴族と同じく、この場で惨殺されても文句は言えない。言う口も残っていないだろうし。

ジノは地面に頭を擦りつける程に平伏した。

「陛下、恐れ多くも陛下の言に訂正を加えさせて頂きたく。私が忠義を尽くしたのはあくまでブリタニアという祖国に対してです。シャルル陛下へではなく。私は私の忠義のために、ブリタニアを改革なさろうとしているルルーシユ陛下のお力になりたいと思ひ参上したまでのこと。他意は一切ございません」

ほう、とルルーシユは面白そうに唇を吊り上げた。

「つまり貴公は私が皇帝になったから私に忠誠を尽くすと言うのか？私より皇帝に相応しい者が現れて私を帝位より追い落とすようなこ

とがあれば、貴公の忠誠は泡粒のように消え去るということか」

「はい陛下。その通りでございます」

傲岸にも言い放ったジノにルルーシユは初めて興味を抱いた。

この場で少しでも敵意を見せれば、スザクに首から上を切り落とされるぐらいのことはこの少年も分かっている筈だ。

そうと分かっただけでブリタニアという国のためならば皇帝を捨てると言い放つただから、ジノ・ヴァインベルグという少年はルルーシユの性格を既にかなり把握しており、さらに強い胆力を備えているに違いない。

これまでの、足元を這いずる虫でも見るような視線とは違う、はつきりとした自分への興味が董色の瞳に浮かぶのを見てジノは自分が勝負に勝ったことを確信した。

ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは追従するだけの人間は好まない。主君が間違っていると思えば、礼儀などかたがた捨てて忠言するような人物が好みなのだ。それと同様に一本芯が通っている人物も好みであるらしい。

これまでのルルーシユの行動や、カレンやスザク、ジエレミアなどの騎士達の言動を鑑みてジノはそう判断した。そしてその判断は正鵠を射ていた。

「わが祖国、ブリタニアの頂点に立つに相応しい能力を備える御方であれば血統にも来歴にも拘ることはございません。人の上に立つに相応しいか否かは、ただその実力を以て証明されるべきことでしよう」

「面白い男だな」

「陛下にそう言っただけで頂けるなど身に余る光栄であります」

「貴公の言は私も同感だ。人の地位はあくまでその人物の能力、才覚に依るものであり、無能な人物が財や地位を占めるべきではない。私は今後実力ある者が上に立ち、下を率いて弱者を護る国を作っていくつもりだ。貴公も大公爵の家に生まれながら軍に入り実力でナイトオブライオンズにのし上がったと聞く。それは貴公の信念によるものか？」

「恐れながら陛下、父は確かに大公爵の爵位を持っておりませんが私はしがない三男坊。兄に家を追い出される前に糊口をしのぐため軍に入ったに過ぎません」

半分は事実であることをジノは苦笑交じりで口にした。

兄が大公爵の爵位を継げば目障りな自分が家を追い出されるのは明らかだ。しかし流石に着の身着のまままで追い出されることは無いだろう。大貴族が兄弟を家から追い出す時は男爵や子爵の地位を与えるのが伝統だ。

とはいえジノは自分の才覚が兄達よりもずっと勝っていることを、10歳になるかならないかの頃に既に確信していた。だからこそ少し先に生まれただけの兄が自分よりずっと高い地位につき、いつか自分が家を追い出されることが気に食わなかったのだ。

だから軍隊に飛び込んだ。先祖代々から受け継いだ爵位など意味を持たない、運と実力が全ての世界に。

そして今やヴァインベルグ家は新皇帝の手により財産の殆どを没収され、下り坂を駆け下りる真つただ中にあり、ジノは新皇帝の前で一世一代の大博打を打っている。

皇帝陛下の前でなければジノは大笑いしているところだった。なんて面白い人生だ。

「陛下、私には信念と呼ばれるべき真つすぐなものを抱いておりません。ただ、自分より無能な兄に家から追い出されるのが気に食わない、威張り散らす以外能の無い上官が部下を殴っているのが気に食わない、馬鹿な貴族が汗水垂らして働く庶民より良い服を着て、良いものを食べているのが気に食わない。私にはそれだけです」

「貴公が私を気に入ってくれている間は、私の部下として働いてくれるのか？」

「御意」

ジノの返答はルルーシュの中にある、騎士としての合格ラインを超えていたらしい。ルルーシュは微かに笑みを深めた。

「よろしい。ではその期間が出来得る限り長くなるよう努力しよう。ジノ・ヴァインベルグに忠義を尽くすことを許す。私にはではない。ブ

リタニアという国へ忠義を尽くすための地位を……ナイトオブスリーをくれてやろう」

「ありがたき幸せにございます、陛下！」

深々と息を吐いて、ジノは額から冷や汗を零した。手を強く握りしめる。

緊張を露わにしたジノへ小さな子犬を見るような視線を向けてルルーシユは声を上げて笑った。

「忠義を尽くして戦えよ、ジノ。しかしお前も未成年だ。そう無理はしないようにな」

アーニャとジノが退室した部屋で、シュナイゼルはルルーシユへと言葉を向けた。

「いいのかい？2人をナイトオブブラウンズにしてしまった」

「スパイである可能性も考えて暫くは地方の反乱の鎮圧任務にあたらせる。KMFに自爆機能でもつけておけば裏切ったとしてもすぐに始末できる」

「ギアスをかければ……」

「それも考えたが、ギアスを掛けられたものは命令通りの行動しなくなり。自分から意見を言うことが無くなってしまふ」

ジノの野心に満ちた瞳を思い出して、あの光が無くなってしまふのは惜しいとルルーシユは思った。

ああまで露骨に自分を売り出してきた人間はこれまでいなかった。ナイトオブブラウンズとしての実力があつてのことだろうが、若さもあつたのだろう。だというのに言動に嫌味はなく、むしろさっぱりしている。

「ああいった気性の、さらにナイトオブブラウンズについて詳しい人間がいればカレンも楽になるだろう。ただでさえカレンはデスクワークに慣れていないんだ。時間がある時にはジエレミアに手伝うように言っているが、あいつはあいつで俺の護衛の一切合切に加えて秘書みたいなことまで任せているから滅茶苦茶に忙しい。ジノはカレンの良い補佐役になる。年齢も近いしな」

「……ところでルルーシュ、どうしてジェレミア卿をナイトオブワンにしなかったんだい？」

シュナイゼルは背後で直立不動のまま動かないスザクを見やった。カレンにしてもスザクにしても、戦闘能力に関して言えばジェレミアより遙かに優れている。格上とさえ言えるだろう。

だが軍の指揮能力や、占領地の統治能力までもが要求されるナイトオブワンに相応しいのは3人の内で誰かと問われるとジェレミアしか有り得ない。年齢や経歴を鑑みると、士官学校にさえ通ったことのないカレンがナイトオブワンとなるのはあまりに未熟過ぎる。

そして何よりルルーシュと過ごした時間の長さや密度、そして信頼関係の強靱さという意味ではジェレミアは圧倒的な筈だ。

だがルルーシュは至極当然と言った顔で指を3本立てた。

「理由は3つ。まずブリタニアと日本人のハーフをナイトオブワンという地位につけることで、俺が人種的偏見と無縁であることを示す良いいアピールになる」

立たせた指を一つ折り曲げる。

「次に、紅月カレンと紅蓮の名は黒の騎士団のエースとしてよく知られていた。皇帝である俺のナイトオブワンにカレンが就任することは、俺の思想は黒の騎士団とそう違わない、強者を挫いて弱者を救済するものだという認識を助けることになる」

もう一本の指を折り曲げて、最後に残った指を振る。

「そして最後に……これは俺の個人的見解によるものだが」

ルルーシュは最後に残った指を掌の中に大事そうに押し込めた。「カレンは俺が失敗したら俺を殴れる。だけどジェレミアは俺を殴れない。これが一番の決定的な差だ」

「……よく分からないよ。どうして君を殴れるからナイトオブワンに相応しいんだい？」

「俺も正直よく分からない」

戸惑いを顔に乗せたシュナイゼルにルルーシュは肩を竦めた。

理屈に沿わない、感覚的なものだから説明しようがないという面もある。だが何となく、自分の決定は間違っていないように思えた。

もしジェレミアがナイトオブワンになったら、命懸けで自分を護ってくれるだろう。世界で一番自分を大事にしてくれるに違いない。自分が欲しいと言ったものは何だかって手に入れてくれるだろうし、やれと言ったことは何だかってするだろう。

だからもし自分がジェレミアに合衆国日本に住む人間を老若男女を問わず一人残らず皆殺しにしろと命令したら、あいつは戸惑い、命令を何度も聞きなおしながらも最終的には必ず実行するに違いない。

泣きわめくことしかできない赤ん坊から、逃げることも出来ない老人まで、一人も残さず血祭りに上げてしまう。その光景は容易に目に見えなかった。

だが、それでは駄目なのだ。それでは自分のナイトオブワンには足りない。

「——もしジェレミアがナイトオブワンになったら、あいつはビスマルクみたいになってしまう可能性がある。シャルルの計画をビスマルクが止めなかったように、俺が間違えてもそのまま何にも言わないで突進するがままに任せてしまふんじゃないかって」

もしカレンに合衆国日本に住む人間を虐殺しろと命令したら、手加減一切無く全力で顔面をぶん殴られるだろう。その光景も容易に目に浮かんだ。もしかしたらそのまま殺されるかもしれない。

だが主君が暴走するがままにさせておく騎士よりもそっちの方がまだマシだ、とルルーシュは思う。カレンのあの苛烈な気性は、未熟な経験や能力を差し引いても代え難いものだ。

「まあそれはいいだろう。ジェレミアもカレンも納得していることだ。それよりシュナイゼル——Cの世界へは、」

「C・Cの協力の下で世界中の遺跡を手分けして調査させているけれど、まだ何も成果は上がっていないよ」

「そうか……もう3か月にもなるというのに、向こうからのコンタクトも無い。手詰まりというところか」

「我々の御父上が言っていた計画が妄言でないのならば、いずれにしても向こうから接触はしてくるだろうけど……先手を取られるのは不味いね」

「大体世界を一つに纏めるってどういうことなんだ。精神を肉体から引きはがすというのも意味が分からん。何を考えているのやら」

顔を歪めてルルーシユは頬杖を突く。こうまで面倒な思いをして皇帝をしているというのに、明らかな成果は未だ見当たらない。

Cの世界がどのような世界かは知らないが、もし普通に飲食をしなければ餓死するような空間であれば、もうナナリーは飢え死んでしまっているだろう。その想像をするたびに焦るが、焦ったところでできることはそう多くはない。

ルルーシユが皇帝となつたのは、ギアスに関する情報を皇帝という地位についてかき集めて、さらに膨大な権力を手にすることで世界中のギアス遺跡を調査させるためだった。さらにもしシャルルが生きても現実世界に戻ってきた場合に皇帝という特権をシャルルが使えないよう立ち回り、さらにシャルルの味方をするだろう貴族共を先んじて潰しておくという目的もある。

だからシユナイゼルとは皇帝と宰相の地位が逆でもよかったのだ。じつと隣に立つシユナイゼルを見やる。

むしろブリタニア国内で最も皇帝の座に近い位置にいたシユナイゼルが皇帝となる方がずつと混乱は少なかっただろう。

だということになぜ自分が皇帝になっているのか。

理由は一つである。

「兄上、ナナリーを奪還したらもう俺は面倒事は御免だからな。在位中にごたごたは全部収めてやるが、その後は任せるぞ」

「神聖ブリタニア帝国100代目皇帝か……私がちょうど100番目ってなんだか微妙だなあ。どっちかというとルルーシユが100代目の方が良かったと思うんだけどなあ」

「何故」

「ルルーシユの名前が歴史書に残った時受験生が楽になるだろう？ 覚えやすくして」

あっさりとした言葉にルルーシユは呆れの視線を向けた。

ルルーシユの在任期間は最初からそうは長くならない予定である。

閃光のように現れたルルーシユ皇帝は、民衆のためにはなるが後に

まで禍根を残しそうな改革を短期間に行い、ありとあらゆる面倒事や悪名を全てしよい込む。

そうして出来得る限りの汚れ役を務めあげた後に、ルルーシユ皇帝は不幸にも若くして病死してしまう。

そうしてすつきり綺麗になった神聖ブリタニア帝国の新皇帝、シユナイゼル・エル・ブリタニアが善政を敷いて世界を平和に導く、ということになっている。

ちなみにルルーシユ皇帝は男性であり、女性であることを示唆するような噂や記録は一切存在しない。

そもそも衣服の着脱や風呂での世話を任せるメイドがいる以上皇族が性別を偽るなど不可能であり、ルルーシユは当然男でしかありえない。皇宮に仕えるメイドの大半が瞳の淵を赤くしたりしているが、別に大したことじゃない。

勿論アツシュフォード学園に在籍していた「ルルーシユ・ランペルージ」は「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア」とは無関係の別人である。だって性別が違うのだから、同一人物ではありえない。

ルルーシユ皇帝の在任中、ルルーシユ・ランペルージは皇帝によく似た容姿のせいで起こる面倒事を避けるためにE・U・に隠れ住んでいたが、ルルーシユ皇帝が病死した後には普通に社会復帰をする。

そうしてルルーシユ・ランペルージは妹と、ルルーシユ皇帝の面影を求めてやってきたナイトオブツーツと3人で平和に暮らすのでした。めでたしめでたし。

「……上手く行くかなあ……」

ぼそりと呟いたルルーシユの声はか細く、散々に幸福な未来を叩きのめされた者特有の警戒心を含んでいた。シユナイゼルは是とも否ともつかない唸り声を上げた。不確定要素が多すぎるため容易に首肯はし兼ねたのだ。

「……化粧ぐらい練習したらどうだい？あからさまに女性っていう化粧をして女性らしい恰好をすれば、ルルーシユ・ランペルージ≠ルルーシユ皇帝の印象を強められるかもしれないよ。あとは、髪を伸ばしてみるとか」

ルルーシユが最も不安に思っているのは、まず間違いなくナナリー奪還のことだろう。しかし現在こちらからCの世界に介入できる術はなく、シユナイゼルは思いつく中で最も建設的な案を提案した。

ルルーシユは隙を見せれば浮かび上がる未来への不安感から無理やり目を逸らし、自分が女らしく化粧をしてスカートを穿いている姿を思い浮かべてみた。思い浮かんだのは女装癖のある優男のような自分の姿だった。

「……やはり髪を伸ばさなければ女らしくならないな。エクステで一気に伸ばした方が印象も変わるか？改名も考慮して……ルルーシユという名にはそれなりに愛着があっただが、まあしようがないよな」

「新しい名前を作るんだったら早く教えて欲しいな。隙の無い完璧な新しい戸籍を作ってあげるから」

「じゃあ俺のに加えてナナリーとジェレミアの分も頼む」

「分かっているよ。その場合は彼らも改名した方が良いだろうね」

「そうだな……まあ、考えておくよ」

ジェレミアをジェレミアと呼べずに、ナナリーをナナリーと呼べなくなってしまう未来を思うと少し寂しかった。

だが先のことを考えてもしようがない。今はただ、ナナリーを奪い返すために行動するべきなのだ。

ルルーシユは政務を始めるようシユナイゼルに命じた。



夜は帳を降ろし、日付は変わろうとしている。ルルーシユは自室へと護衛のナイトオブツ、ジェレミア・ゴットバルトを連れて戻っていた。

本日皇帝の護衛任務に就いていたのはスザクだったが、地方で勃発した反乱の鎮圧のためにランスロットで向かわなければならなくなってしまうジェレミアと任務を交代したのだった。スザクならば明日には鎮圧完了の報告が聞けるだろう。

ルルーシユの姿を認めると部屋の前に立つ頑健そうな数名の警備兵が深々と頭を下げて、繊細な彫刻が施されている金の取っ手を押し、扉を開けた。部屋の中では出迎えのために待機していたメイド長の篠崎咲世子が深々と頭を下げていた。その向こうではC・Cが疲れた様子で広々としたソファに身を投げている。

背後で防音の分厚い扉が閉まるとルルーシユはそれまでの皇帝然とした威圧感を放散させて、幾分か疲れた顔を見せた。

「お疲れ様です、ルルーシユ陛下」

「お疲れ様です咲世子さん。すいません、遅くなってしまうて。時間も遅いですしももう上がって大丈夫ですよ」

「お気になさらず陛下。お飲み物はご入用でしょうか？」

「ではお言葉に甘えて、ホットココアを」

対外的には公平高潔で冷徹な皇帝然とした表情を崩さないが、懐に入れた相手にはこれだ。咲世子はメイド相手にも礼儀正しく礼を言う皇帝の姿が微笑ましくてならなかった。

同じように思ったのだろうジェレミアも苦笑を滲ませた。

「私は紅茶を」

「畏まりました」

部屋を辞する咲世子を見送り、ルルーシユは重苦しい皇帝服に引つ張られるように部屋の中央にでんと置かれた巨大なソファに身を投げた。華奢な体がぼうんと一度バウンドして柔らかい生地に軟着陸する。

疲れた。

いや、仕事量はゼロとして活動していた時よりも遙かにマシではある。何しろぶつとんで優秀なシュナイゼルに加えて、政治の手練手管を備えたブリタニアの文官という駒が手の中に大量にあふれかえっているのだ。ワンマン経営を強いられていたゼロの頃と比べるとありえない程に恵まれている職場環境ではある。

ルルーシユへと疲弊を齎しているのは膨大な仕事量による身体的疲労や、突然皇帝に登極したことへの精神的疲労などではなく、ナナリーが見つかっていないというただ一点に依るものだった。

ソファの上でもぞもぞと動きながらルルーシユは溜息交じりに愚痴を零した。

「シユナイゼルが調査してもCの世界へと向かう方法は未だ分からずか」

「C・Cの協力があっても通り抜けられないとは、向こう側から黄昏の扉を閉じることもできるのかもしれませんが。シャルル前皇帝がCの世界の仕組みをどの程度理解しているのかは分かりませんが……」

「私が全力でこじ開けようとしても開かなかったということはシャルルが黄昏の扉に何かしらの対策を施していることは間違いない。とはいえ扉のこちら側ではその対策へ対処する方法も分からん。手詰まりだな」

「厄介だな。物理的手段が意味を持たないとは」

赤い宝石が飾られた冠を放り投げるとジェレミアが慌ててそれをキャッチした。重苦しい冠から解放されて体が少し軽くなったような気がした。

口では厄介と言いつつ、疲弊していながらも、ルルーシユはそう気分が悪くはなかった。こうして黄昏の扉を調査してもCの世界へ介入できないということは、つまりフレイヤでもCの世界へ介入することは不可能であるという証明のように思われたのだ。ならば黄昏の扉がフレイヤで消滅したとしても、その向こうにいたナナリーは無傷のままCの世界にいる可能性が非常に高い。

部屋にせずしと戻ってきた咲世子が湯気の立つココアをルルーシユの前に置く。

ルルーシユの対面のソファに体を預けていたC・Cはそういえばと口を開いた。

「カレンが今日新しいメイドが入るから、紹介するためにここへ連れて来る言っていたぞ。恐らくそろそろ来るだろうな」

「……ああ」

ソファの隣にジェレミアのスペースを空けてやりやらずとココアを啜る。

皇宮で働くメイドの大半は貴族の子女でありかなり高い身分の者が多い。そのために前皇帝を弑逆した（ということになっている）上に、反乱を起こす貴族を片端から殺しまくっているルルーシユに危惧を抱いた貴族はすぐさまに娘を家に呼び戻したのだった。

質素儉約を是とするルルーシユの住居は皇宮の隅の一角のみであり、さらに皇族は今やルルーシユとシユナイゼルのみとなってしまったため、メイドの一斉大量退職はこれまでそう問題にならなかった。だがカレンの目から見れば今の皇宮はあまりに物寂しいように映ったのだろう。

「新入りのメイドは平民出身だから俺付きのメイドにはなれないらしい。だが皇宮で働く以上機密に触れる可能性もある。必要ならばギアスを掛けて欲しいんだと」

「貴族出身でない者が皇宮のメイドとなるのは珍しいですね。そのメイドはどんなコネを使ってカレンへの伝手を作ったのでしょうか」

「さあ。あまり詳しくは聞いていないが、どうせ父親が富豪だとかどこぞの貴族の弱みでも握っているとか、そこらへんだらう。もしかするとシユタツトフェルト家と関りがあるのかもしれないが……」

「あのカレンが実家から頼まれたからと見ず知らずの女にメイドの職を用意してやるか？ ナイトオブワンの地位に就いてもシユタツトフェルトの名前を名乗ることを嫌がったというのに、有り得んだらう」

C・Cの想った通り、ルルーシユもあのカレンがシユタツトフェルト家のために指一本動かすことは無いだろうとルルーシユも分かっていた。

不倫の末に子供を作った挙句、母を劣悪な環境に捨て置いた父親の家だ。貴族が冷遇されるルルーシユの御世にあつて重用されるカレンヘシユタツトフェルト家は繋ぎを作りたいだろうが、カレンの気性からして土台無理な話だ。

扉がコンコンと軽い音を立ててノックされる。許可を出す赤いマントを靡かせた騎士服のカレンが姿を現した。華やかな騎士服は牡丹色を基調にしながら所々に金糸の刺繍が施されており、カレンの

燃え上がるような瑞々しい容姿によく合っていた。

「お待たせルルーシュ」

ナイトオブワンとはいえ騎士から皇帝に向けるにはあまりに軽い挨拶に、ルルーシュはどう返答していいのか分からなかった。

別にカレンの態度を今更どうこう思いはしない。それよりもカレンの背中に隠れながら恐る恐るこちらを見ているメイド姿の美少女に頬が引き攣ったためだ。

長いライトブラウンの髪と猫のように大きな瞳に眩暈がする。

頭痛に耐えるように頭を抱えるルルーシュに気付いているのかいないのか、カレンは部屋にシャーリーを入れてアツシユフォード学園生徒会メンバーに相応しい楽しそうな顔をした。

「紹介するわ。今日から入るメイド見習いのシャーリー・フェネットさんよ。よろしくね」

「よ、よ、よろしくお願いします、ルルーシュ皇帝陛下!!」

ぱつと頭を下げた顔は緊張のせいか耳まで真っ赤だった。

深々と下げた頭は緊張する子犬のようにぶるぶると震えている。なんだか悪いことをしているような気分になってルルーシュは大きく息を吐いた。

「……………よい。頭を上げろ、シャーリー」

頭を下げた時と同じくらいの勢いで頭を上げる。勢いで長い髪が爆発するように四方に流れた。メイドとしてその落ち着きのない挙動はどうなんだと思うも、新米だしこれから色々と勉強することになるんだらうなあ、とルルーシュは軽い現実逃避に逃げた。

何故ならば、予想外だったのだ。

シャーリーは当然ながらルルーシュ・ランペルージの性別が女であることを知っている。そしてルルーシュ・ヴィ・ブリタニアⅡルルーシュ・ランペルージであることにも、恐らくは気づいている。でなければカレンに交渉してメイドとして皇宮に潜入したりはしていない。

カレンにはルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは皇帝を辞めた後にルルーシュ・ランペルージに戻ることを伝えているというのに。一体何を考えているのか。

「カレン」

「あら、何か不都合があるのならギアスを使えばいいんじゃない？」

ふん、と鼻で笑ってカレンは腕を組んだ。

「使うき。ただし非常事態にだ。ここは皇宮なんだぞ。俺の母親みたいにテロに巻き込まれてシャーリーが殺される可能性だってあり得る。余計な危険に晒す必要なんて」

「それを決めるのはシャーリーであってあなたじゃないでしょ？大体メイドが不足していたのは確かだし、皇帝陛下が無条件で信頼できる人間を優先して雇うっていう判断はそう間違っではないと思うんだけど？」

皇帝を相手に不遜な態度を崩さないカレンに、これは説得不可能だとルルーシユは視線をシャーリーに移した。

数か月前まで生徒会室と一緒に仕事をしていたが、今や2人の間には絶対的な身分の差がある。

シャーリーは皇帝陛下に拝謁したという緊張感のあまりに体を強張らせていた。たとえそれが自分の初恋のクラスメートだと分かっているとしても、所々に赤い宝石を散りばめられた純白の皇帝服を着たルルーシユはあまりに神々しく、自分と同じ世界に生きる人ではないように思えたのだ。

しかしここで怖気づいては何のためにカレンに頼んでメイドとして推薦してもらったのか分からなくなる。下っ腹に力を込めてシャーリーはぐいと頭をルルーシユへと向けた。

「シャーリー、また会えて嬉しいよ。でも帰ってくれ。俺は今ブリタニア中の貴族から恨まれていることは知っているだろう？生徒会で馬鹿をやっていた時とは違うんだ。戦う術を持たない君がいるべき場所じゃない」

「分かってるよ。でも、」

「いいや、分かってない。帰るんだ。ここにいと……」

「ううん、私は帰らないから」

シャーリーはぶんぶん頭を横に振った。メイド服の裾を血管が浮かび上がる程に握りしめている。

「私、ルルの力になりたいんだもの。カレンみたいに戦うことはできないけど、でもあたしにだってできることがあるかもしれないから。ルルの愚痴を聞くぐらいのことはできるかもしれないから。だからカレンに無理を言ってここまで来たの。ルルが迷惑じゃなかったら、あたしはもうここで働くって決めたから」

「……シャーリーじゃなくてもできる仕事しかここには無い。俺としては、君はアツシユフオード学園に戻って、」

「私がルルのためになる仕事をしたいの。それにあたしならルル―シユが女の子だって知ってるから、色々都合がいいんじゃないの？」

メイドには大体ギアスを掛けているから問題はないのだが、シャーリーは不動の構えでルル―シユと対峙していた。

助けを求めてジェレミアを見上げる。ジェレミアは顎に手を当てて考えていた。

ルル―シユの精神的な健康を思うのならば支えとなる友人は多い方が良く。ルル―シユはシャーリーがテロに巻き込まれて怪我をすることを心配しているようだが、ジェレミア、カレン、スザクの住居が皇宮にある現状ではブリタニア本国の中でここ以上に安全な場所はそう多くは無い。

総合して考えるに、シャーリーが皇宮で働くのはメリットが多い。

「良いのではないでしょうか」

裏切ったなこいつ、という視線をルル―シユから向けられて罪悪感に胸が痛まないでもなかつたが、しかしルル―シユの安寧を思うのならばちくちくとした視線程度どうということも無い。

ルル―シユとしてもそれなりに気心の知れた友人と好きな時に話せるという環境は望ましいものだった。カレンやジェレミアはナイトオブ라운ズとしての仕事が忙しいためにすれ違いになることが多く、スザクはとても雑談をするような雰囲気が無い。シユナイゼルとは一緒に仕事をすることも多く、それなりに雑談もするが、政務官も交えての会議が多いために胸襟を開いての話はできない。

シャーリーがメイドとして仕えてくれれば色々和心理的には楽に

なるだろう。

しかしそれでも友人をこんな薄汚い陰謀の渦巻く皇宮で暮らさせるということへの躊躇いは残る。

「……いや、でもやっぱり危ないから、」

「もー！いいの、ルルの意見はもう聞いてないから！あたしがメイドになるって言うんだからもうこれは決定なの！はい決定！咲世子さんこれからよろしくお願いしますー！」

「はい。よろしくお願いしますねシャーリーさん」

唾然とする皇帝を置き去りにしてメイド長がうふふとメイド見習いと挨拶を交わす隣で、カレンとジェレミアとC・C・はこそそそと頭を突き合わせた。

「あれ大丈夫かしら？シャーリーのせいでストレスさらに大きくなったりしない？」

「ルルーシュ様はどちらかというとかんやかされるよりかんやかしたいタイプであらせられるから……あの位の猪突猛進な方の方が丁度良いだろう。特に今はナナリー様がいらっしゃられなくなったせいで、かんやかす対象に飢えている様子であつたし」

「最近では何も無い所でエアナナリーの頭を撫でたり髪を梳いたりしているからな。割と気持ち悪い」

「エアナナリーって……滅茶苦茶追いつめられてるじゃない。スザクから報告を受けたけどもしかしてアーニヤにあんなに甘い対応したのって」

「ナナリー様と同じ年齢、同じ位の身長というところがドストライクだったのだろう」

「成程ね」

納得が行ったとカレンは頷いた。

「それにしてもシャーリーってあんなに押しが強い性格だったかしら。ていうかミレイ会長に似てきてない？」

「会長くらいのバイタリテイが無いとこれからは生きていけない時代だってようやく気付いたの！」

くわっとシャーリーは拳を振り上げる。

「あたしはルルーシュを支えるためにメイドになるって決めたの。カレンちゃんにも、C・C・さんにも負けなくらいに頑張るわ！勿論咲世子さんにも負けなくらいに！」

「いい度胸じゃないか」

にまにまとC・C・が笑った。

諦めの表情で自分の騎士とメイドを見やったルルーシュは「もう好きにしろ」と呟いてソファにダイブした。一度暴走したら止まらないアッシュフォード学園生徒会の2人+魔女を相手に勝てると思ったのが間違いだった。

カレンはルルーシュを取り囲む自分を含めて3人の女性を見回してふと言葉を零した。

「……そういえば日本では天皇に仕える3人の女官を三人官女って呼んでいたのよね」

「天皇？皇帝じゃなくて？」

「日本では天皇と呼ばれていたんだって。それで女官っていう女性の部下がいて、雛祭りに飾られる雛人形では3人揃って三人官女って呼ぶのよ」

「よし、じゃああたし達は三人官女……」

シャーリーは途中で言葉を切り、ルルーシュの隣に座るジェレミアを見やり、再度高らかに声を上げた。

「あたし達はルルーシュ陛下を支えるために戦う、三人官女with Bよ!!」

これが後のルルーシュ皇帝公認ファンクラブの前身、三人官女with Bの誕生である。

11. 5 夜の終わりのバラ

皇宮は広い。滅茶苦茶に広い。ちよつと常識外れなまでに広い。

皇宮にはブリタニアの政治の中心としての設備のみならず、客間やら舞踏会用の広間やら、果ては昼寝専用の離宮までもがぎゅつと詰め込まれている。全て合わせればトウキョウドームが10個は入るくらいの膨大な敷地面積を誇る皇宮は、一体何の目的でここまで巨大化したのかと建設当時の皇帝に詰問したくなる程に広い。

そのために敷地内の移動専用の車が常時配備されており、クーラー代や電気代などの維持費だけでも月に六桁は余裕で超える。それ程に皇宮は広大であり、ちよつと忘れ物をしただけでも大騒動だ。

それら全てが、今やルルーシユの所有物であった。

とはいっても根が貧乏性で所帯染みたルルーシユである。離宮の一つを潰してナナリーコレクションを集めてナナリー博物館を作ったこと以外には、これといって特に巨大で壮麗な皇宮に魅力を感じることも無かった。

そのために普段は皇宮の中で最も警備がし易い位置にある、こじんまりとした宮一つしか使っていない。使わない皇宮は職員の宿舎にしたり、国立美術館や博物館にしたりと有効活用が進んでいる。

ジェレミア、カレン、C. C. の3人は、現在唯一皇帝に使用されている宮の一室の前に仁王立ちで並んでいた。

扉の隙間からはアルコール臭混じりの泣き声や呻き声が漏れ聞こえている。扉の前に立つだけで酔いが回りそうな濃密なアルコールが周囲に漂っている。

あ、これヤバイやつだ。

賢明な3人はそう察しながらも皇帝陛下の勅命のため動けないでいた。

より正確に言うならば二人は皇帝陛下への忠誠と、確実に今も皇帝陛下の身に迫っているであろうアルコール中毒を心配して。そして一人はただの好奇心からである。

突然任された皇帝業務。

遅々として進まないナナリーの搜索。

ラグナレクの接続とかいう厨二病全開のふざけた計画。

全然仲直りできないためにめっちゃや他人行儀なスザク。

高校中退となつてしまつた最終学歴。

慣れないコンタクトレンズのせいで目がひりひりする痛み。

皇帝陛下 p r p r h s h s し隊非公認ファンクラブによる臣民奴隷化計画の発覚。

ナイトオブワンに蹴られ隊と皇帝陛下の愛人 N T R 隊の間で勃発したサイバー戦争への対応。

その他諸々。

積もりに積もつたストレスによりとうとうプツンしてしまつたルルーシユから「本日、俺の家で宅飲みを開催する!!手の空いている者は問答無用で参加すること!!皇帝命令だ!!飲んで吐いて飲んで吐いて吐いて吐いて全つ部忘れるぞ!!」という連絡を受けて、3人は指定された部屋へやつてきたのだった。

俺の家と言つたが仕事場もその場にいた面々の住居も言つてみればルルーシユの家(皇宮)の一部なのだが、そこは突っ込んではいけない。

「来たはいいけどこれつて吐くこと前提の飲み会なのよね。パワハラじゃないの?」

「あいつのことだから別に行かなくてもデートをドタキャンされた男のように後からごちゃごちゃ面倒な事を言うこともあるまい。それに先にルルーシユを潰してしまえば何も問題は無い」

「止める。急性アルコール中毒になつたらどうする」

「まあ記憶ぶつ飛ぶぐらいには飲ませていいんでしょ?というかルルーシユつてお酒強いの?」

「……そういえばあまり酔つておられる所は見たことが無いな。自宅ではあまり飲まれないというのもあるのだろうか」

さて、と意を決してジェレミアは扉に手をかけた。

途端にむわんと濃密なアルコール臭が鼻を突く。臭いだけで酔つ

ばらいそんな空気を掻き分けて部屋の中を見るとデイトハルトが狂喜乱舞しそうなカオスが広がっていた。

宰相閣下のグラスから溢れるのも気にせずワインを注ぎ続ける皇帝陛下。にこにこにこにこにこにこにこにこにこにこにこにこにこに水をのように飲むロイドとセシル。そして床に横たわり皇帝陛下の膝に頭を乗せて硬直している新米メイド。

毛足の長い絨毯の上には酒瓶が何十と無造作に転がり瓶口からアルコールの臭いをこれでもかと振りまいていた。一人当たりの酒量は明らかではないが、少なくともルルーシュは酷く酔っぱらっている。ようで膝に乗ったシャーリーの頭をひたすらに撫でまわしている。シャーリーは酔いのせいではない理由で顔を真っ赤にしながら皇帝陛下のお戯れに必死になって耐えていた。

一見ただけで分かるカオス状態に踏み込む勇気が湧かず、カレンとジェレミアは壁の花として立ち尽くした。

目線で「お前が特攻しろ」「いやあんたが」「ナイトオブワンだろう貴様。派手に散れ」「私の方が上司なだけと言うこと聞きなさいよ」と醜く押し付け合う。

C・C。だけはどっこいせとその場に横になってそこらに転がっていた未開封のウオツカをあおる。その姿は妙に様になっていた。むしろ手元にツマミが無いことに違和感がある。

ルルーシュは追加された羊3匹に気付くことも無く只管にシャーリーを撫でまわしている。

「……ねえC・C、ルルーシュはシャーリーを膝に乗せて何をしているの？」

「ふむ、妹力が足りないのだろうか」

「何よそれ」

「なるほど、妹力不足か。そういえばそろそろ妹力が切れてもおかしくない頃であったな」

「え、何このあたしだけ意味が分かってない感じ。妹力ってそんなメジャーな単語だったの？分かっていないとおかしい単語なの？」

「ルルーシュ様の騎士であるのなら知っていて当然の単語ではあ

る」

ふふんと鼻で笑うジェレミアにカレンはローキックを繰り出す。唸るような金属音が鳴り響いた。そういえばこいつサイボーグだったと思いついて顔を顰める。

事前情報が甘かった。次は右を狙おう。

「それで、何なのよ妹力って」

「ではナイトオブワンに僭越ながら私から説明させて頂こう。ルルーシュ様は極度のシスコンであらせられるため、定期的に容姿が整った女兒を甘やかしてその歪んだ保護欲を満たす必要があるのだ。そうして満たされることで得られる満足感こそが、そう、妹力!!」

「容姿が整っている女兒限定ってところが最高に気持ち悪いし腹立つな」

「ていうか主君のことを歪んだって言ったわよこの騎士」

ジェレミアはカレンの発言を無かったものとして流し、シャーリーを撫でまわしているルルーシュに目を移した。

「妹力はルルーシュ様の気力の源泉。故に妹力が極度に枯渇してしまふとルルーシュ様は無意識にローティーンの少女を目で探し、見つければ声をかけ、菓子を与え、そしてついには頭を撫でたり抱き着いたりして妹力の補充を図るのだ」

「もしルルーシュが美女じゃなかったら完全に通報案件ね」

「手術の副作用で女になってよかったな、あいつ」

「しかしやはりナナリー様でなくては完全な妹力の補充は不可能。それにシャーリー殿はナナリー様よりずっと長身で年も上。酒に酔っているおかげで誤魔化せているようだが、極度のシスコンであるルルーシュ様がそう長く騙されてくれるとは、」

ジェレミアの言葉が終わるより先にルルーシュは眉を悲し気に垂れ下げてぼつりと呟いた。

ルルーシュは自分よりも僅かに小さいだけのシャーリーの体に溜息を吐く。

「ナナリーは、こんなに大きくない」

「そりゃそうだ」

冷静なC・C・の突っ込みが部屋に響いた。

真つ赤なまま硬直するシャーリーの頭を優しく床に置いて、ルルーシユは次の犠牲者を求めて部屋を彷徨う。

B級ホラー映画に登場するゾンビのようによたよたと歩くルルーシユの前に立ち塞がったのは決死の顔をしたシュナイゼルだった。しかしアルコールのせいで白磁の肌は淡く上気しておりあまり迫力が無い。

「ルルーシユ、すまない。私は君を外に出してブリタニア皇帝が小児性愛者であるという噂を広めてしまう訳にはいかないんだ……」

「いやナナリーの年齢を考えるとそいつのストライクゾーンは15歳前後だろう。もう小児性愛の域には入らないんじゃないのか？」

「そもそもルルーシユ様がナナリー様に抱いているのは親愛や家族愛ですよ。紛れもなくセーフです」

「私は小児性愛者じゃないけど、ナナリーが可愛いというルルーシユの気持ちはよく分かる。私だって妹が可愛い。だからこそルルーシユには小さい女の子ではなくて同年代の、できれば高校生ぐらいの年齢で気が優しく力持ちで身元がはつきりしていて尚且つ容姿の整った青年と真つ当な恋愛をして欲しい」

「つまり殿下は純愛系スザルル推しなのね」

「駄目だわシュナイゼルもシャーリーも酔ってる」

「私は酔ってないわよ」

「酔っていないなら酔っていないでその発言は問題ですよフェネット嬢。止めて下さい」

「シュナイゼル殿下は陛下に滅茶苦茶飲まされてたよ。すつごい飲ませ方で一瞬でワイン瓶が空になっちゃった。陛下、皇帝辞めたらキャバ嬢とかになってみたらどうですか？絶対才能あると思いますよお」

「その発言は喧嘩を売っていると見なしでも良いんだなロイド？」

「いや無言で剣を抜かないでよ。目が笑ってないよ。冗談だって」

「お前の冗談は学生時代から下手過ぎる。友人としての善意でこの場で舌を斬り落とすことをお勧めする」

「いやちよつと待つてタンマタンマ。撤回するから。えーとえーと、キャバ嬢じゃなくて、け、結婚詐欺師とか……?」

「よし殺そう」

「君も昔から冗談が下手だよね!?」というか冗談だよね!」

ぎゃあぎゃああと騒ぐロイドとジェレミアを気にもせず、シユナイゼルは決死の表情でルルーシユの前に立ち塞がっていた。その足元にはワイン瓶がごろごろと転がっている。

凛々しい瞳は少し潤み肌はほんのりと桜色に染まっていた。瑞々しい色気がふわふわと周囲に漂っている。

傍から見ている面々は美青年のシユナイゼルと美女のルルーシユが見つめ合う光景を前に、内実はともかくとして外面だけ見れば似合いの2人だと納得せざるを得なかった。

この兄妹が揃っていると、たとえそれがどこであれ一幅の絵のように非現実的な美しさがあり、周囲の視線を捉えて止まない。

内実はともかくとして。

「だからルルーシユ、私は女兒ではないが今や数少ない血縁だ。それにだいぶ年上だが男性だ。という訳で今この場はどうか私で勘弁してはもらえないだろうか」

「生理的に無理」

そう言い放つとルルーシユはシユナイゼルに背を向けた。シユナイゼルはその場に崩れ落ちた。

部屋を見回して次の犠牲者をルルーシユは探す。残った中で最も長身であるため目立ったのだろうか、それとも単に最も見慣れた人物だったからか、ルルーシユはぱたぱたとジェレミアに近寄った。

近寄ってくる皇帝陛下を見てジェレミアは剣を左腕の内に仕舞った。ロイドは素早くセシルの背後に避難したが、ジェレミアの意識は既にロイドから完全に逸れていた。

「ルルーシユ様、どうし、」

手が届くまで近寄るなり背伸びをしてジェレミアの頭を撫でる。セツトされた髪がぐしゃぐしゃになるまでかき回して満足げな顔をしたルルーシユは、厚い胸板に抱き着いて脂肪の薄い背中をさすさす

と撫でた。細い指先が背中を辿る感触に顔に血が上る。

突然のことに硬直するジェレミアを気にもせず、そのまま暫くルルーシユはぎゆうぎゆうとジェレミアに抱き着いた。

しかし数十秒の後にぱつと離れる。

離れたルルーシユは顔を顰めて舌打ちした。

「オイル臭い」

実はちよつと気にしていることをストレートに指摘されてジェレミアはその場に崩れ落ちた。

足元で「無臭オイルを探してきますうう」と呻く騎士を無視して、ルルーシユは次の犠牲者を求めて再度彷徨い始める。

次にルルーシユの視界に入ったのは新たに部屋に入ってきた女性2人だった。

2人をじつと見比べて、まずはよりナナリーにより身長が近いカレンへと近寄る。

カレンの目の前に立ったルルーシユは豊満な胸をじつと見降ろした。

「ナナリーはもつと小さい」

「ねえそれって身長のこと？身長のことよね？違うところで判別してんだっいたらあんたセクハラで訴えるわよ」

真顔のまま米神に血管を浮かべるカレンから目を離して、ルルーシユはその隣に寝そべるC・C・に目を移した。

ルルーシユはC・C・の形の良い尻をじつと見つめた。

「お婆ちゃん、床に直に寝ると腰に良くないぞ」

「ほわっっちゃああ!!」

酒瓶を放り出して立ち上がり、勢いよく繰り出されたC・C・の拳がルルーシユの腹部にめり込んだ。

酔いで口の緩んだ報いを受けたルルーシユは蛙が轢き潰されるような声を上げてその場に崩れ落ちた。

「ルルーシユ様!」

「誰が、誰がお婆ちゃんだ、誰が!」

「落ち着いてお婆ちゃん!!ルルーシユも悪気があった訳じゃないのよ

!!つい本音が出ちゃっただけなのよ!!」

「うわああああ違う私は婆じゃない!!私は永遠を生きる永遠の美女で永遠の17歳なんだ!!スリーサイズだつて永遠に変わらないんだああ!!」

ぶんぶんと頭を振り乱すC・C。C。を押しえつけようとするカレンと、ぶつ倒れたルルーシュを抱きかかえるジェレミアを見ながらロイドとセシルはのほほんと笑っていた。

「地雷だつたんだ」

「地雷だつたようですねえ」

暴れるC・C。を完全に地面に縫い留めたカレンにシャーリーが「ワン、ツー、」とタップを取っている最中、ようやく復活したシュナイゼルが立ち上がる。

「ジェレミア卿、そろそろルルーシュを部屋に送ってあげなさい。酔い過ぎているようだから」

「い、イエスユアハイネ」

「じえれみあ」

腕の中で顔を赤くしていたルルーシュは何か耐えるように顔を顰めて、体を立たせようとするジェレミアへ抵抗するように騎士服の袖を握った。上目遣いの潤む瞳のままいやいやと首を振っているが、ここは心を鬼にしなくてはならない。

天使のように可愛らしいが、今のルルーシュの実態は手の付けられない酔っ払いだ。可愛いのは外見だけ。中身はアルハラ大魔神だ。

「動きたくない」

「ルルーシュ様、もうお酒は駄目ですよ。かなり酔っておられるようですし、」

「吐く」

「え」

ルルーシュの顔は信号のように赤から青へと素早く色を変えた。汗を垂らしながら両手で口元を抑えている。

ぶるぶると頬を膨らませているルルーシュを抱きかかえてジェレミアも同じように顔を青くして風のように走った。

皇帝陛下なのだから別にどこでリバーシしようが文句を言う輩は居ない。しかしルルーシユは人前で醜態を晒すことを何より嫌がる稀代の格好付けた。

そんなプライドがむやみやたらに高いルルーシユが人前で、それもC・C・ヤカレンやシャーリーの前で、酒を飲み過ぎて妹力を求めて暴れ回った挙句腹を殴られて胃の中のを全て吐き出したとなれば二度と復活できなくなるかもしれない。

普通の人間でも割と死にたくなる程の恥だ。ルルーシユであればどうなるのか想像もできない。

ばたばたと去って行ったジェレミアの後姿を見送った後、ロイドは優雅に椅子に座り直したシュナイゼルの隣に腰を下ろした。

「大丈夫ですか殿下？」

「君の辞書に労りの言葉が載っているとは思わなかったよ。明日は槍が降りそうだな」

「僕の辞書は割と語彙豊富ですよ？滅多に使わないだけで」「使わなければ無いのと同じだろう」

シュナイゼルの呆れ声を気にもせずロイドはテーブルに残った最後のワインの封を切って優雅な仕草でグラスに注いだ。ロイドの時折見せる些細な仕草だけが彼が生粋の貴族であることを感じさせる。

ギブギブと悲鳴を上げるC・C・を見ながらグラスを回してその中身を一気に飲み干し、ぶはあと息をつく。優男の外見に似合わない酒の強さにシュナイゼルの頬が引き攣った。

「ところで殿下あ、カレン嬢もいたっていうのにわざわざジェレミアに送り狼役を任せしたのは老婆心からですかあ？」

「まさか」

さも気に入らないと言わんばかりにシュナイゼルは鼻を鳴らした。

「こんなことで手を出すような男に妹を嫁にやってたまるものか」

「では何故あいつに？あいつはもう9年越しの陛下ラブですよ。そろそろ理性の限界が近いんじゃないですかねえ」

「……………認めないとは言っていない」

今やルルーシュとちゃんとした交流のある唯一の血縁であるシュナイゼルは慥然とした顔でぼそりと呟いた。

妹の恋愛に首を突っ込む程に野暮ではないが、しかしちよっかいを出したくなる程には気にしているのだろう。

矛盾を含む人間らしいシュナイゼルの人情にロイドは声を上げて笑った。あまりに人間味のある行動を当然のように行うシュナイゼルがおかしかったのだ。

長い付き合いだが、この人の部下でいると面白い事が絶えない。

ロイドに思い切り笑われて暫くぶっすりとしていたシュナイゼルはしかし突然はつと目を瞬かせた。

「……えっ、9年？さっき9年って言ったかい？きゅ、9年前って、まだルルーシュって9歳じゃなかったかな？」

「はい。だからあいつは真正のロリコンなんですつてば」

「……………」

「殿下、殿下。無言で警察に電話しようとするのは止めてください。あいつはロリコンですがイエスロリコンノータッチの紳士的な変態なんですから」

「……………」でも、9歳の頃から9年間張り付いているんだよ。もうストーリーカーの域だろう。アウトだ。完璧にアウトだ。国を超えてストーリーカーするような男に9年間張り付かれているだなんて通報案件じゃないかい？」

「あいつを日本に送ったのは殿下でしょうが。もしあいつがストーリーカーだとしても6年前に殿下の許可を得た上でストーリーカーをしているんですから、今更殿下が口を出す謂れは無いでしょう」

シュナイゼルは感情の無かった頃の自分の行動を心底詰った。



「ルルーシュ様、お部屋に着きましたよ」

「……………んいい、うゆう……………」

「ほら、目を覚まして下さる」

ジエレミアの腕の中でルルーシユは幾度か身じろぎをして目をごしごしと擦った。

うつすらと目を見開いてぽかんと口を開けている。

吐気の波はどうやら治まったようだった。しかし油断はならないため、できるだけ揺らさないように寝室まで運ぶ。

「ここ、どこだ」

「ルルーシユ様のお部屋です」

「おれのへやはもつとちいさい」

「皇帝位に登極なされてからお部屋が広くなったでしょう？」

「……そうだったっけ？」

「そうですよ」

「そうか。おまえがいうのなら、そうなんだろうな」

ルルーシユは一度大きく欠伸をして腕の中からぴよんと飛び出た。キングサイズのベッドへとふらふらとした足取りで歩みながら豪華な皇帝服を乱雑に脱ぐ。脱いだ服はそこらへんにぽいぽいと脱ぎ散らかされた。

肌着と下着のみを残して他の全ての衣服を床に落とした後、電池が切れる様にルルーシユは床にぶつ倒れた。短い黒髪が床に広がった。

ジエレミアは慌てて駆け寄って体を抱き上げた。酔っぱらっているルルーシユの身体は普段より熱くて重い。

そのまま焼け付くような煩悶と共に横抱きにしてベッドに寝かせた。溜息が何度も唇から零れた。アルコールで上気した淡い肌色が網膜に焼き付くようだった。

薄い肌着の下には幾重ものサラシが巻き付いてささやかに膨らむ胸をぎゅうぎゅうに押しつぶしている。

苦しい苦しいとサラシに文句を言っている姿を何度か見たことがあるため、このままでは寝苦しかろうと思いい薄い肌着の下に手を入れた。

指が肌を掠めてしまい子猫が親猫に甘えているような寝言が唇から零れた。別段やましい事はしていないというのに心臓が止まるかと思った。

いや、これはやましいことに入るのだろうか。分からない。

確かに言えることは下心が全くの皆無ではないということであり、つまり自分はこれはやましい事であると潔く認めなければならぬということだけだった。

あまり触れないよう注意しながら固定用の安全ピンを外してくるくとサラシを脱がせる。

サラシを取るとカレンやC・C・よりもずっとささやかながら、いかにも柔らかかそうな胸が薄い肌着越しに山を作った。

理性がチリチリと痛む。限界が近いとサイレンが頭の中で鳴っている。今日だけのことではないのだ。ルルーシユの年齢が上がるにつれて抱くようになった欲は、振り払っても振り払っても熾火のようにしつこく燃え続けていた。

あと2か月、あと2か月と理性を取り戻すための呪文を唱える。ルルーシユの18歳の誕生日まであと2か月に迫っていた。ブリタニアでは18歳で成人になる。

寝ころんだルルーシユに毛布を被せてベッドから離れようと体を浮かせると服の袖を引っ張られた。

「じえれみあ」

「はいはい」

「ねむい」

「ええ。おやすみなさい」

そう言うと、ルルーシユの頭は枕に沈んだ。服の袖を握る指先の力は緩まらない。

舌つたらずな口調で名前を呼ばれると心臓に悪い。血を吐きそうだ。そうなれば労災は下りるのだろうか。

しかし胃から血液が噴出しそうになる葛藤を抱えながらもジェレミアは何事も無いかのように笑みを作って艶のある黒髪を撫でた。騎士としての矜持というより、20代の半ばを過ぎた男の情けない意地だった。

ルルーシユはジェレミアの服の袖を握ったまますすうと寝息を立て始める。

ベッドに腰掛けるとスプリングが微かに軋む音を立てた。起こさないように注意しながらルルーシユの顔を見下ろす。花卉のような唇がほんの少しだけ開いていて、微かな空気の擦れる音が胸の上下に合わせて口笛のように鳴っていた。

袖を握る指を一本一本外すと物足りなさそうに指が開閉を繰り返して彷徨う。暫くして指は不満げにシーツを握り胎児のように背骨を丸く曲げてしまった。

肌着越しに椎骨が梯子の踏ぎんのように行儀よく並んでいるのが見えた。目で追うと背骨は緩やかな弧を描く細い腰に繋がっている。

腰のなだらかな稜線を辿るとショーツのみを纏った厚い臀部に辿り着き、その先には象牙細工のように繊細な形をした2本の脚が生えている。いつもは濡れた白磁の色をしている肌はアルコールのせいではんわりと赤らんで淡い桜色をしていた。

男性ではありえない脂肪の膨らみが柔らかく全身を包んでいて、きつとどこを触っても指を包み込むような柔肌なのだろうと容易に想像がついた。その想像だけで足先から下腹部にかけて痛み交じりの熱が走る。

つい欲が湧いた。決定的なこととは何もしないからと自分自身へ情けなく弁明しながら上半身を傾けて華奢な身体に覆い被さる。両腕の中に彼女を納めて細い首筋に顔を埋めた。香水を付けるような嗜みのある人ではないから、淀んだアルコール臭以外は何の匂いもしない。

色気が無いと思うも、そもそもまともに男性経験の無い未成年者に色気を求める方が間違っているというものだろう。ルルーシユは実際の際そういつた方面においては年齢相応か、それ以下だ。

そのことを良く知っているがために罪悪感がちくちくと胸を突く感触に顔を顰めながらも、もう少し、もう少しだけと言いつつ顔を突く。細い首筋に顔を埋めて首筋を舐めた。滑らかで何の味もしないが、アルコールのせいで少し熱い。ほんの少しだけ歯の隙間を開いて痕が残らないよう注意しながら吸い付く。

もし今日を覚まされたら観念して腹を括るか首を括るかしか道は

無くなる。前者は全力で歓迎するが後者はできれば遠慮したい。

最後に深く息を吐いて体を離して立ち上がった。熱を冷ますために深呼吸を繰り返す。

握り締め過ぎたせいで爪痕が残る手でルルーシユに毛布を掛けて部屋を出た。

扉の前では仁王立ちの三人官女がジェレミアを待ち構えていた。

「あそこで止める？ほんっとへタレね」

「へタレだな」

「でもあれ以上やってたらぶん殴ってたけど」

「流石に判定が厳しくないか？ペッティングまではOKだろう」

「え？お酒を飲ませて意識朦朧としたところを襲うんだからアウトでしょ？」

「そこはボーダーラインが難しいところだな。意識があったらもうちよつとぐらいはセーフだろうか」

「同意があればまあ……いやでも18歳になるまではアウトでしょ」

「この現代でそこまで慎ましいのもどうかと思うけどなあ私は」

「……………何をしているんだ」

「送り狼の監視」

「あとwith Bが抜け駆けしないかのチェックよ」

ふん、と腰に手をあててカレンが胸を張る。

見られていたという気まずさはあったものの、しかしカレンとC・Cは以前から自分の思慕に気付いているのだろうと察していたためにそう動揺も無かった。むしろ駄々洩れだっただろうとさえ思う。別に隠す気も無かったからいいのだが。

だが三人官女with Bの中でシャーリーだけがわなわなと体を震わせて動揺を露わにしていた。

ジェレミアは思春期真っただ中の恋愛に関して繊細であろう女子高生にどう声をかけたものか分からず、さらに出来ることならあまり触れたくない話題でもあったためにすぐさま逃亡することを決断した。

シャーリーがルルーシュに思慕を寄せていることは傍目から見ても明らかだったので色々と気まずい。これは戦略的撤退である。

「では私はこれで失礼する。お三人方もあまり夜更かしはなされないよう」

「はいはい。さっさと帰れ送り狼の成り損ないめ」

しっしつと手を振りながら罵倒を送るC。C。に口角が引き攣るも、その罵倒は非常に的確であったために反論しかけた口を閉ざしてそのまま自室へと逃げ帰るしか選択肢は無かった。

惨めな気分押しつぶされそうになる。しかし情欲のままに襲い掛かる方が遙かに惨めな気分になり、さらに死ぬほど後悔することは間違いなく、現段階ではこれで満足するべきなのだ。帰り道では何度も自分に言い聞かせた。

これで良いのだ。そもそも自分には酒に酔った女性をどうこうする趣味は無い。

それに自分はルルーシュの騎士であると同時に疑似家族でもあり、信頼は厚いが男女関係としては非常に微妙な立場にある。

さらにルルーシュには男性との性交に関して重大なトラウマがあり、それに加えて彼女の精神は純粋に女性とは言い難く、さらに大人びているとは言えまだ未成年であり、恋愛に関しては小学生以下の感性しか持ち合わせていない。

ハードルは山積みだ。この状況では信頼を損ねるような行動は控えないなければならない。

「……まあ徐々に外堀を埋めて追い詰めれば良いか。私以上に有利な立場にある男はいない現状を鑑みると、そう焦る必要も無い」

男に限らなければ三人官女という例外があるのだが、同性ならばそれなりに許容もできる。

うんうんと一人頷いて、とりあえず秘密裏にルルーシュの薬指のサイズでも計っておこうとジェレミアは足を軽くした。



ジエレミアが去った後、部屋の前に残った三人官女は顔を見合わせ、扉を勢いよく開け放った。

「で、起きてるんだろルルーシユ。どうせ」

「……………眠気が一発で吹き飛んだ」

毛布を跳ね飛ばしてルルーシユはのそりと体を起こした。アルコールが残っているせいで頬はまだ赤らんでいるものの目つきははつきりとしている。

「ミスったわねジエレミアさん。もう酔いが覚めてることに気付かないなんて」

「あの大量の酒瓶を消費したのはほとんどロイドとセシルとシユナイゼルで、ルルーシユはせいぜいワイン1本と日本酒3升程度しか今日は飲んでいないらしいのになあ」

「それでも普通はヤバい量なんだけどね……………」

「何を言う。マリアン又はもつとヤバかったぞ。あいつの娘ということを考えてらこいつはまだ弱いくらいだ」

「ちよつと2人とも黙ってくれ。俺はまだ混乱してるんだ。正気かあいつは。全然気づかなかつた。なんで俺なんだ」

顔を真っ赤にして頭を抱えるルルーシユを前にカレンとC.C.は顔を見合わせて一度頷き合った。

「そりゃあ……………ねえ。ルルーシユって顔は完璧だし、スタイルもバスト以外は完璧だし」

「お前顔はとんでもなく美人だからな。顔は。胸は洗濯板だが」

切れ味の良い返答にルルーシユは慥然とするしかなかった。予想していた答えではあったものの、もつと内面について言ってくれただけの優しさはこの2人には無いのか。

「おい、もつとこう、外見以外に俺が持つ武器は無いのか。性格とか才能とか」

「じゃあお前は自分が男に惚れられる要素は何だと思う?」

どうして質問に質問が返されるのだろう思いながら少しの間思考

を巡らせる。

そして真つ先に思いついた、男が最も好むだろう自分の要素を思いついたままに口にした。

「金と地位と権力」

あまりに淡々とした切ない言葉の響きに流石のC・C.とカレンも罪悪感に身体を震わせた。

自分で言っておきながら自分の性格をルルーシユは肯定することができない。面倒で不器用な女なのだ。

「……悪い、ほんと悪かったルルーシユ。お前だって性格はそんなに悪くないよな。少なくともV・V.や扇と比べればずっと彼女にしたい性格だと私は思うぞ」

「ごめんなさい私も言い過ぎたわ。ルルーシユの性格とつても男前でいいと思う。黒の騎士団を設立させてブリタニアに肘鉄くらわしたところなんて最高よ。彼氏にするならルルーシユみたいなさばさばした可愛げのない性格がいいって思うわ」

「お前らフォローしたいのか貶したいのかどっちだ」

あまりの言いようにルルーシユは口元を引き攣らせた。

自分だって自分の性格が女らしく可愛げがあるとは微塵も思っていない。だがまさかV・V.や扇が引き合いに出される程とは思っていないかった。ちよつと泣きそうだ。

「……ルル、」

「どうしたシャーリー」

三人官女の中で一人シャーリーだけが未だに顔を真つ赤にしてわなわなと全身を震わせている。声も一緒に震わせてシャーリーは興奮で上気した顔を上げた。

「ごめん、あたし知らなくて。ルルがその、ジェレミアさんとそんな関係だって」

「いや別に俺とジェレミアはそういう関係では」

「じゃあなんでセクハラだって言わないの!?!恋人関係か、もしくは両片思いじゃなかったらあれはアウトだよ!?!」

「いや俺の方が上司だからセクハラじゃなくて、精確には逆セクハラ」

「長い間の疑似家族的な主従関係、そこから生まれた恋、美貌の男装上司に募らせる年上部下の激しい恋心っ、でも愛する人は皇帝となり思いを伝えるにはあまりに遠い人になってしまった！たまに触れる指先以上の接触を求めて、ついにうら若い乙女である皇帝に手を出してしまふ……っ、はー！ヤバイ！冬コミまで締め切り近いのに！スザルルとシユナルルとカレルルの新刊だけで既に手いっぱいだっていうのにこんなネタを投下されたらっ」

「あんまり的外れでもないところが笑えるよな。こいつらの場合」

「シャーリー落ち着いて。ていうか皇帝の同人本って皇帝侮辱罪にあたるんじゃないの？」

C・C.とカレンの言葉はシャーリーの鼓膜には到達していただろうが、脳内にまでは伝わらなかった。シャーリーは身もだえしながら一人でフィーバーしていた。

「いつかはルルに彼女や彼氏ができるんだろうなって覚悟はしていたけど、まさかこんなに早く、それも彼氏の方が先にできるなんて……予想外過ぎる、絶対彼女の方が先にできると思ったのに！とりあえずそのごっこってごての目玉おやじ過激派みたいな皇帝服を脱がせてデー卜用の服を見繕わなきやー！」

「目玉おやじ過激派って何だ。お前ずつと皇帝服をそんな風に思ってたのか」

「ルルは身長高いモデル体型だから体のラインがはつきり出る服がいいよね。ジェレミアさんは年上だし、色はシツクで露出高めの大人っぽい秋服がいいと思うの！つまりズバリ、オフショルダー薄手ニットにスリット深めの膝上スカートと編み上げロングブーツの王道コーデよ!!」

「皇帝服以上に大人っぽい服は無いと思うんだが」

「露出は皆無だけどな」

「季節感もゼロよね」

「元ゼロだけに」

「C・C.、その上手い事言ったような顔止めろ。腹立つ」

「とりあえず私が明日までにルルに似合いそうな服をピックアップし

ておくから！カレンちゃんも一緒に来てね！絶対、絶対ルルのバスト以外パーフェクトなスタイルが強調されるようなお色気いっぱい服を買ってくるわ!!」

「バスト以外……」

「大丈夫、厚手のパッドも買ってくるから！寄せて上げるブラも買ってくる!!」

使命感に燃えるシャーリーにカレンは少し引きながらも、自分が選んだ女らしい服装を着たルルーシユを見てみたいという好奇心に駆られてしまい思わず頷いた。

「うん、まあ仕事が終わってからなら大丈夫よ」

「ミレイ会長は日本にいるけどスカイプすればアドバイスしてくれるだろうし、あとニーナにも連絡して、それからアーニャって子も誘えば来るかな？あと咲世子さんにも連絡して、」

「おいミレイ会長だけは止めてくれ。頼むから止めてくれ。散々に弄られる未来しか見えない」

「えー」

唇を尖らせるシャーリーの仕草は可愛らしいが、それ以上に言動が危険過ぎた。

ミレイが自分の恋愛事に絡むなんて厄介事を起こす予感しかしない。

確かに的確なアドバイスは貰えるだろうが、ミレイの得意技は噂話に尾ひれを付けて、ついでに角と翼と蹄を付けて捕獲不能のモンスターに仕立て上げることだ。

聡い上に洞察力もある女性だが言動全てが爆発物に等しい破壊力がある。下手をすれば「皇帝陛下ホモセクシユアル疑惑」を世界中に発信されかねない。

皇帝陛下に詰め寄るシャーリーの傍でカレンがちらりと時計を見ると既に日付が変わろうとしていた。

このまま放っておけばシャーリーはいつまでも暴走するだろう。なにせ名誉あるアツシユフォード暴走生徒会の一員だ。ブレーキな

ど搭載されていないのが仕様である。

同じく暴走生徒会メンバーとしてはこのままルルーシユの部屋で女子会に突入したい気持ちもあるが、ナイトオブワンとしては皇帝陛下を夜遅くまで拘束する訳にはいかない。明日も政務は普段通りにあるのだから。

「シャーリー、もう夜だしそろそろ帰りましょ。明日も仕事があるんだから」

「え……あー、そっか。そうね。もうこんな時間かあ。ごめんルル、居座り過ぎちゃった」

「別にいいさ。元はと言えば俺が飲み過ぎたせいなんだから」

シャーリーも皇宮に勤めるメイドとしてそう長く居座るわけにもいかない。名残惜し気にしながらも、大人しく部屋を出るカレンの後に続いた。

「じゃ、お休みルルーシユ。明日の政務は8時からだからね」

「分かっているさ。お休みカレン」

「じゃあねルル。また明日詳しく話そうね！」

「分かった分かった……ミレイ会長には連絡するなよ」

「はいはい」

軽い返事と共に部屋を出ていくシャーリーにルルーシユは頭痛がした。この返事をどこまで信用できるか分かったものではない。

二人を見送った後にベッドに戻るとC・C。C。が我が物顔でベッドの上に横になっていた。

どうして人のベッドでここまでこの女は堂々と寝られるのだろうと思ひ、まあC・C。だからなど一人で納得してベッドに腰を下ろした。

遠慮して部屋の隅に立っているようなC・C。C。はC・C。じゃない。

「お前は部屋に帰らないのか」

「私も酔ったから動きたくない。今日はここで寝る」

「そうか」

皇帝としての地位に相応しく、ルルーシユが腰かけるベッドは2人

どころかカレンやシャーリーも一緒に横になっても問題は無い程のキングサイズである。

クラブハウスの時は頻繁に一緒にベッドで寝ていたこともあり、ルーシユはもそもそとベッドに入り込むC・C・Cを気にもしなかった。

「それにしても面白いことになったなあ。大事じゃないか」

「ああ。全く、シャーリーどころかカレンまで、どうして人の恋愛事に首を突っ込みたがるのやら……」

「何を言うのかと思えば」

C・C・Cは未熟な女を嘲笑うように鼻を鳴らした。

「女同士の恋愛話なんてな、いじられるか嫉まれるかのどっちかだ。そしてオレンジの容姿と地位と年収を考慮すると大抵の女は後者に走る。前者であることをお前はむしろあいづらに感謝するべきじゃないか？」

「招集されるメンバーと俺自身の容姿と地位と年収を考えろ。大半がジェレミアより上だろ。そして大抵の女はと言ったが、俺やあいつの周囲には大抵という言葉の器に収まる穏やかな女がいた試しがない。お前も含めてな」

「……………まあそう言えばそうか」

「あとジェレミアは割と性格に問題があるからな。騎士としては優秀なんだが色々な面で残念過ぎる」

「そうか」

「思い込みは激しいし、言動が偏り過ぎだし、仕事馬鹿だし……もし俺とナナリーが日本に捨てられた時について来ていなかったら「イレブンにルーシユ様とナナリー様が殺されたー!」とか勘違いして日本人を逆恨みして純血派とか率いて散々に暴れ回った挙句、結局足を元をすくわれて権力を失って馬鹿にしていたナンバースに叩きのめされて落ちるところまで落ちてボロ雑巾みたいになっていたかもしれないくらいに残念な奴だぞ」

「嫌に具体的だな。長い付き合いだからどんな行動を取るのかも理解できるという訳か？」

どんな行動でもというのは過言だろうと返答を淀ませる。

家族同然の身としてそれなりに行動パターンを理解しているつもりだが、完全に理解し合っているとはとても思えない。なにせ違う人間なのだから完璧に理解し合うなんて無理な話だ。

生まれも育ちも性別も年齢も違う人間同士が、全く同一の存在のように理解し合うなんてできる筈がないじゃないか。

「何となくそうなんじゃないかと思うだけだよ。あいつの行動が全部読めるわけじゃない。実際の所、分からない事の方が多いくらいだ。そもそもあいつが俺を、まあ、そういう意味で、まあ、なんだ。こう、まあ、情欲というのか？まあ、あれだ、欲を抱いていたことは知らなかったし……それに、それならそれでどうして俺に手を出さなかったのかもあんまり理解できない」

「ああ、」

そう言えばそうだ。C・Cは素直に頷いた。

もう30に手が届く年齢のジェレミアは本来であればそれなりの地位にある貴族として妻を迎えて、それに加えて愛人を何人か持つていてもおかしくはない立場にある。だがルルーシュを主君としたせいで貴族に生まれながらも長年身を隠して生きなければならず、彼の身の回りは不自然なくらいに潔白だった。

とはいえルルーシュに取っ捕まった人生をジェレミアが不幸だと感じている様子は微塵も無い。つまりはルルーシュが傍にいれば彼は満足できるのだろう。

しかしだというのならば何故ルルーシュに手を出さないのか。肉欲を伴わない清廉な感情だけではないことは、さっきの無様な挙動からも明らかだった。

ジェレミアがルルーシュに向ける愛の形は愛のギアスを持っていたC・Cの理解の範疇さえ超えていた。

「あの男の思考回路は謎だな。いくら主君であつても自分の人生を狂わせた女に手を出す気概も無いとは。そこまで臆病な男にも見ええないというのに」

「6年も一緒に暮らしていたんだから機会はいくらでもあつた上に、

あいつの腕力なら俺なんてどうにでもなるだろうにな。俺にもよく分からん」

うん？とC・C・は違和感に首を傾げた。

「それはどういう意味だ」

「ん？」

「私はオレンジ君のことをよく知っている訳じゃないが、ああいう男は手を出すにしてもそれなりに手順は踏むタイプだろう？お前相手には手順を踏み過ぎてその場で踊っているようにしか見えんが。少なくとも女を腕力で屈服させて満足する輩では無いだろう」

「……でも性行為ってそういうものだろう。女は痛みに耐えながら我慢して股を開いて、男が満足して終わりじゃないのか。恋愛関係にあつたとしてもその根底は変わらないだろうにわざわざ手順を踏む必要性はあるのか？」

あっけらかんと返された予想以上に歪んでいる未熟なルルーシユの恋愛観にC・C・は天を仰いだ。

過去に色々とおつたにしてもこれは酷過ぎる。同時に何故ジェレミアが未だにルルーシユに手を出していないのかも理解できた。

ルルーシユは恋愛面に関して幼過ぎるのだった。手を出すどころか、普通の恋愛を迫ることすら危ぶまれる程に幼稚なレベルを彷徨つてる。

小児期に強姦された経験と、女性なのか男性なのか自分でもよく分かっていない精神、母親が暗殺されて父親に捨てられたという経歴、自己の存在意義を妹の保護に全て傾ける異様な価値観。

それら全てが混ぜ合わさってルルーシユは歪で稚拙な恋愛観を持つ絶世の美女になってしまったらしい。救い難い程に性質が悪い。

「予想以上に哀れだな。お前がじゃない。オレンジ君が、だ」

一つ屋根の下で一緒に暮らした6年間は地獄だったんじゃないかなるかと思ふ。意味が分からずルルーシユは首を傾げた。

「確かに俺はあいつの主君だからそう易々と性行為を迫る訳にもいかないか。そういう意味では哀れかもしれないが、」

「違う。違うぞルルーシユ。以前お前はいい女だと言ったが前言撤回

だ。お前は女としてはオール赤点の落第生だ。恋愛をなんだと思っ
ているんだ。もう一回小学生からやり直せ」

「そこまで言うか……そもそも俺は小学校に通ったことは無い。皇族
選任の家庭教師から性教育を受けはしたが、」

「男としてだろう。それだけではあまりに不十分だ。いつそのこと私
と練習しておくか？」

「は？」

ベッドに腰をかけているルルーシユにC・C・は嘲るような笑み
を浮かべて白桃のように膨らむ胸元をちらつかせながら迫り寄った。
二つの膨らみは自分のそれよりもずっと大きくて、C・C・が身動き
する度にたゆんと揺れて見るからに柔らかさそうだった。近寄らない
と気付かない微かな香水の香りが情感を攪る。

耳元に口を寄せて秘め事を打ち明けるように囁く。

「知らんのか。セックスは女同士でもできるんだ」

「ちよーつと待ってC・C・!!何やってるのよあなた!!」

暴風雨のように部屋に飛び込んだカレンは一目で状況を的確に判
断してルルーシユをC・C・から引っぺがした。

あと少しで胸に顔を埋める位置にまで近寄られたというのにル
ルーシユは顔色も変えておらず、顔を真っ赤にしたカレンを見てお
や、と首を傾げた。

「カレンどうした。部屋に帰ったんじゃないのか？」

「C・C・がまだあなたの部屋にいるって思い出して引き返したのよ
!ほんつと油断も隙も無いわね!!何してんのよC・C・!」

「何って、情操教育」

「あなたの情操教育なんてトラウマにしかならないでしょう!?これ以
上の皇帝陛下に対する無礼はナイトオブワンとして許容できないわ
!!」

「私は皇帝陛下の愛人だろう。陛下の無聊を慰めるのも愛人の務めで
はないのか？」

「うっさいバーカ!!」

子供のように罵りながらカレンは顔を真っ赤にさせてC・C・を

ベッドから引きずり下ろした。

「じゃあねルルーシユ!!この劇物は部屋に送っておくから!!また明日!!」

「あ、ああ。お休みカレン。C・C.も、」

「無粋な横やりだな。まあ良い。気も削がれたことだし、女の快樂が知りたいと思うならまた違う夜にでも教えてやろう」

「させるか!!」

シャー!と猫のように威嚇しながらカレンはC・C.を引きずって部屋から出て行った。

一人残されたルルーシユは嵐が過ぎ去った余韻を噛みしめながらのろのろと寝巻に着替えた。

広々としたベッドに横たわる。なんだか疲れた。

「女の快樂って何なんだよ」

悪戯にしても少々過激だ。どうせ冗談なのだろうが自分が男だったら間違いが起こってもおかしくない物言이었다。まあ女だからあんなことを言ったのだろうけれども。

「にしても、ジェレミアがな、」

どうせ一時の気の迷いだろうが、もし長く続くようならば困る。

どう困るのかはよく分からないが、多分とても困る。

痕は残っていないが僅かに噛まれた感触のした首元を摩った。家族としての親愛のハグは幼い頃から何度もしたことがある。

首筋を舐められた時には普段とは違う膨大な熱量を感じたものの、されたこと自体は普段のハグとあまり変わらない。C・C.の言動の方がよっぽど過激だった。

だからなのかは分からないが、あまり実感が湧かない。

今までずっと一緒にいたんだから、これからもそうする訳にはいかないのだろうか。いや、もしかしたら自分がずっとこのままでいたいと思うからこそあいつは我慢しているのかもしれない。

そして自分が見て見ぬ振りを続けて、ただの家族でいたいと訴え続ければあの男は我慢し続けるだろう。

「でもそれはあいつに我慢を強い続けるということか？」

それは良い事なのだろうか。よく分からない。疑問の声に答える声は無かった。

しかしこれまでジェレミアから非常識なまでの献身を受けてきた自覚はある。

そしてこれからも、ナイトオブツールとしてジェレミアには自分に忠義の限りを尽くしてもらわなくてはならない。だからここは自分がジェレミアの欲を許容すべきなのかもしれない。

性行為は気持ちが悪いし、べたべたするし、痛いし、何一つとして良い記憶が無い。愛する者同士であってもすることは結局は一緒ではないかと思う。組み敷かれて罵られる、嫌なことだ。思い出すだけでぞつとする。

しかし枢木ゲンブを相手に我慢ができたのだから、ジェレミアで我慢できないということは無いだろう。それこそC・C・にやり方を教わって事前準備をすれば多少は痛みもマシになるかもしれない。

だが女の快楽を教えると言ったC・C・が口頭で優しく教えてくれるだけに留まるとも思えなかった。実戦に連れ込まれると流石に笑えない。あのC・C・だ、何をされるか分かったものではない。女同士の性行為の実態を想像もできないが相手がC・C・というだけで嫌な予感がする。

他に誰か相談できるような、まかり間違ってそういった関係になっても問題ないと思える相手はいないだろうか。

ベッドに寝っ転がった素っ裸の自分の上に跨って滾々といかがわしい事を教授する相手を誰ならば許せるだろう。

ぽんつと一人の顔が浮かんだ。そいつは少し困ったような顔でこちらを見下ろして、さつきと同じように濡れたような眼をしていた。

一拍の間を置いてぶわつと顔面が火を噴いた。全身から汗が噴き出して真っ赤に染まる。

これまで使ったことの無い思考回路が錆びを振るい落とすようにぐんぐんと速度を上げて回転する。そのせいでくわんくわんと頭が前後左右に振れた。

では、まさか。いや、まさか。家族みたいなものだろう。それに俺の精神の半分は男だ。男の筈だ。

でも体は女で。それに昨今では同性愛なんて珍しくも無いし。いやこれは同性愛なのか？違うんじゃないか？いやそれはどうでもいいんだ。つまり自分の心情の問題としてはどうなのかということだ。勘違いではないのだろうか。

しかし探せども探せども否定材料は見つからなかった。自発的にそういった行為をする相手を想像してあの男が想い浮かんだのだから。それに長く続くと困ると思っただのは、絆される可能性を恐れて困ると思っただ可能性もあり、つまり単純に考えてしまうのならば、つまりは、つまりはそういうことではなからうか。

「うわぁ」

ルルーシユは枕に突っ伏し、暫く手足をばたばたさせて、急にぱたりと動きを止めた。

やや乱雑な手つきで部屋の明かりを消す間もルルーシユはぶるぶると小刻みに体を震わせていた。顔は耳まで真っ赤だった。

真っ暗闇になった部屋の中で突如として発熱に耐えるかのように再度手足をばたつかせて、暫くしてまた動きを止める。

突発的にシーツを頭から被って意味も無く左右にごろごろごろごろと転がる。勢い余ってキングサイズのベッドから落ちた。

暫くその場で動きを止めた後にのそのそとベッドに這い上がり、何回かベッドをぼふぼふと殴りつけて、またごろごろと転がった。

夜はそうして過ぎていった。

12. 藤堂にはもう少しボーナスをやっておくべきだった

元ナイトオブブラウンズ、ドロテア・エルンストが燃え尽きた灰のように海に落ちて行く。パロミデスは海面に打ち付けられて波飛沫を吹き上げた。

最後の残り1機に500機以上のKMFのメインカメラが突きつけられる。しかしノネット・エニアグラムは冷めた目つきでランスロット・アルビオンだけを睨んでいた。

コックピットで操縦桿の具合を指先で確かめながらスザクは眉一つ動かさずにノネットの動向を観察する。その眼は実験動物を観察する研究者のものに近い。

初の実戦投入となるランスロット・アルビオンの機体性能の掌握という冷やややかな目的が一つ。

そしてまた、主君を殺されたと思っっているナイトオブブラウンズが復讐のためにどう行動するのか興味があったのだ。

圧倒的に不利な状況にあっても、ブリタニア最高峰の騎士は降伏しないものなのだろうか。

そしてもしそうであったとして、それは正しいことなのだろうか。

「——リベリオンで、早々にゼロに降伏していれば、」

ユフィは死ななかつたのだろうか。そうしなかつた自分は間違えていたのか。

考えても仕様のない事ばかりを考える。白い歯が削り取られる程に歯根を噛みしめた。

睨み合う形になった2機のKMFを前に、アヴァロンへ乗船していたデイトハルトは鼻歌を歌いながらアングルを調節していた。凄まじい速度で繰り広げられる新旧のナイトオブブラウンズの戦闘を、全てとはゆかないものの十分にその激しさが伝わるようようカメラに収める。

始終敵を圧倒したランスロット・アルビオンの雄姿は、純白の装甲もありカメラ映えして素晴らしい。

爛々とした目つきで楽し気に映像をリアルタイムで編集するデイトハルトヘルルーシユは嫌々声をかけた。

デイトハルトが優秀であることは認める。しかし妙に人の気を逆撫でする男だ。

「デイトハルト、撮っているな」

「はい皇帝陛下。ライブで世界配信しております。素んっ晴らしい視聴率ですよ……！」

指揮官席に座りルルーシユはコンソールを前に笑い声を上げるデイトハルトの返事に満足げに頷く。

計算通り上手く行っているようだ。

元ナイトオブブラウンズと現ナイトオブブラウンズの勝負の結末は、始まる前から分かり切っていた。

ジノ・ヴァインベルグの密告により元ナイトオブブラウンズの潜伏地は呆気なく露呈した。潜伏地へ奇襲したこちらの兵力は、初の実戦投入となるランスロット・アルビオンを駆る枢木スザク。ロイドに無理を言って改良させたサザーランド・ジークに乗るジェレミア・ゴットバルト。そしてジノ・ヴァインベルグ。

更には予備兵力としてギアス調教済みの、ルルーシユのためなら命も捨てるブリタニア軍約500機のKMFが控えている。

全軍の指揮をしているのはシュナイゼルに献上させた、今は皇帝御乗艦であるアヴァロンに乗るルルーシユだ。アヴァロンには蜃気楼が格納されておりハドロン砲もスタンバイしている。

それに対して敵はノネット・エニアグラムとドロテア・エルンストの二機。ビスマルク・ヴァルトシュタインは皇帝と共にCの世界にいるのか姿が見えない。

多勢に無勢にも程がある。ドロテア・エルンストはまともに迎撃することも敵わず、ランスロット・アルビオンの初陣を粉塵で飾った。

空中で相対するスザクとノネットを見やる。

傷一つついていないスザク操るランスロット・アルビオンに対して、ノネット操るランスロット・クラブは酷い有様だった。腕は一本ちぎり取られ胴体部は破損している。

苛立つように機体を揺すりながらノネットは勝機を探す。しかし凄まじい速度と破壊力を誇るランスロット・アルビオンには隙がなかった。

ならば、と戦鬪を悠々と観戦しているアヴァロンに向けて突撃を仕掛ける。

スザクは動かなかった。矢のように飛ぶノネットへすぐさま追いつき、蠅のように叩き落とすのは容易ではあった。

しかしドロテアを倒した自分がさらにノネットを倒して功績を独り占めするよりも他のナイトオブラウンズの映像を世界中に流した方が戦力のアピールになるだろう。ルルーシユもそのためにこの過剰戦力を用意して、さらにデイトハルトを連れて来たのだろうか。

ルルーシユとスザクの意図を解して、今や皇帝親衛隊筆頭ロイヤルガードとなったジェレミア操るサザerland・ジークが動く。しかしランスロット・クラブが砲撃範囲内に入る前にその鼻先をトリスタンが二つに切り裂いた。

メインカメラが潰れて液晶が真っ黒に染まる。何が起こったのかと思う前に胴体部へ衝撃。タンクが破損し、ランスロット・クラブのエネルギー残量が赤く点滅する。

甲高い警告音が狂ったように鳴り響く。ノネットは握り締めた拳を機体に打ち付けた。サブカメラに映る、トリコロールカラーを纏ったトリスタンを眼球が飛び出る程に目を開いて睨み上げた。

ジェレミアは別に良い。12年前からずっとルルーシユに仕えていた騎士だと聞く。6年前にはルルーシユのために祖国さえ捨てた男だ。シャルルでなくルルーシユに付くのは騎士として当然の判断だろう。

スザクもまだ許せる。あの男はユーフェミアの騎士だった。主義者的思想を持っていたユーフェミア皇女の騎士ならば、シャルル皇帝

よりもルルーシュに靡く決断はまだ納得が行く。

アーニヤに関しては判断が難しい。彼女は元々ヴィ家の行儀見習いであり、アールストレイム家はヴィ家の後見をしていた数少ない貴族の一つだった。ルルーシュの登極に伴い元来の主君だったヴィ家の下へと戻ったのだと言われると幾らかは納得が行く。

だが一度はシャルル皇帝のラウンズとして忠誠を誓ったというのに、あまりに容易に主君を変える尻の軽さには眩暈のような怒りが湧いた。

しかし最も許せないのはこの男だ。尻尾を振って篡奪者に媚びる、忠誠の意味も知らないゴミ屑野郎。

機体のコンソールに叩きつけた拳から血が滲み出た。

「ジノ!!!この、騎士にあるまじき蝙蝠野郎め、ナイトオブラウンズにこびり付いた泥、恩知らず、忠誠の意味を解さないゴミ以下のおおお!!」

「機を見て敏と言うでしょう、先輩。さようなら」

躊躇容赦一切を振り切ったハドロンスピアがランスロット・クラブを襲う。ノネットは咄嗟に身を振らせて回避の姿勢を取ったが両足が根本から斬り落とされた。

胴体部と片腕のみのランスロット・クラブは、しかしそのままアヴァロンへと突き進む。死を覚悟した無茶な特攻だと誰もが理解した。

アヴァロンの前にはサザーランド・ジークが立ちほだかる。機銃の標準は既にランスロット・クラブへと合わせている。

ジェレミアは決死の特攻に向かうノネットに目を細めた。

「忠義のため命を懸ける騎士の姿、しかと見届けた。敵ではあれど君に敬意を表そう」

数秒の後、ランスロット・クラブは操縦者、ノネット・エニアグラムと共に爆散した。

「陛下、戦闘終了致しました。損傷は無し。こちらの勝利です」

「予定通りカメラをこちらに」

ルルーシユは指揮官席から立ち上がった。優雅でありながら畏怖を抱かせる仕草で背を伸ばす。

鼻息荒いデイトハルトは素早くカメラの標準を美しい皇帝に合わせた。時間にして数秒だったが、その間にルルーシユは世界からそうだと思われているように、聡明で平等だが、血も涙も無い改革を断行する冷徹な皇帝としての仮面を被った。

「スタンバイOKです陛下!! ああ陛下!! 全世界への歴史的声明という名のカオスが今、この私の手の中にいい……っ」

「うんデイトハルト、私語は慎めよ。お前が喋ると壁に染みついた頑固汚れを見るような目になってしまつて俺の顔が崩れるからな」

「イエス、ユアマジエステイ!!」

はあはあと息を荒くしてカメラを構えているデイトハルトに、ルルーシユはアツシユフオード学園の女子更衣室盗撮事件をつい思い出してしまった。

あの時は大騒ぎになつた。生徒会総出で犯人捜しを行い、最後にはミレイがロツカーの中にみつちりと詰まっていた犯人を見つけて通報したのだ。あの犯人は「ニーナたんハアハア」とか言いながら警察に連行されるまで必死でカメラに縋りついていた。その時に今のデイトハルトと同じような顔をしていたような気がする。嫌な記憶を思い出してしまい顔が歪んだ。

「皇帝陛下、そのお顔もとってもカオスで素晴らしいですが、それは冷徹な皇帝というより奴隷を見下す女王様の表情では？」

「誰のせいだ馬鹿」

精神的な疲労で溜息が零れる。

なんでシユナイゼルはこいつをわざわざ黒の騎士団から引き抜いてきたのだろう。いや、役には立つが。でももうちよつと性格がちやんとした奴がいい。でもこいつ程に仕事が早く、こちらの意図を察するのが上手い男はそうはいないのだ。イラつくことに。

気分を取り直してきりつと顔を作る。デイトハルトはにやけ顔のままカメラを恋人のように抱き締めた。

「その顔です!!冷徹非情ながらもつい首を垂れて命を捧げたくなる悪魔の顔こそ一番のカオス!!では本番いきますね!3、2、1、」

カメラが緑に点滅した。アヴァロンの司令官室は沈黙して皇帝の言葉を待つ。

透明なレンズ越しに無数の視線を感じた。敵、味方、中立、そして無関心な者の視線が混ぜ合わさって槍のように突き刺さる。

しかしルルーシュは緊張をおくびにも出さず、傲慢さの滲み出るような表情を保ちながら滔々と告げた。

「諸君、御覧になったかと思うが、今の映像で私が名実ともにブリタニアの支配者とお分かり頂けたことと思う。その上で私は合衆国日本との会談を望む」

もうブリタニア国内の反乱は終息した。最後の反乱の芽と成り得た元ナイトオブブラウنزはビスマルクを残して死に絶えた。

たとえ帝位を篡奪したルルーシュを認められない者がいようとも、表立ってそんなことを口にできる人間はいない。いたとしても圧倒的戦力でねじ伏せられる。

敵が合衆国日本であろうとも、E・Uであろうとも、中華連邦であつても同じことだ。その気になれば簡単に亡ぼすことはできる。完全なる一枚岩に作り替えた神聖ブリタニア帝国が恐れるものは、今はシャルル前皇帝しかない。

手を振り、マントを靡かせてルルーシュは高らかに言い放った。

「日本を占領し、戦争を推し進め、両者に無駄な血を流させた前皇帝と同じ愚を私は犯さない。共存と繁栄こそ私の求めるところである。時代は血と鉛で描かれていたページから、次の段階へと移り替わろうとしている。我々にはもつと言葉が必要だ。よりよい世界のために、より公平な世界のために、私には合衆国日本と手を取り合う準備があることをここに宣言する!」



神聖ブリタニア帝国と合衆国日本の会談場所はE・U・のベルギー州、ブリュッセルに決定した。

E・U・が会談場所となったのは現在、表向きにはあれど合衆国日本とブリタニア本国、両者にとって中立な立場の国はE・U・しか存在しないからだだった。とはいえ表向きの話であり、実際にはE・U・はかなりブリタニア寄りの国である。

E・U・はブリタニアへ併呑されることを望みながら、より良い条件を揃えるためにエリアー1の移民を受け入れてブリタニアと敵対し続けた経緯があった。

シユナイゼルに領土の半分を削ぎ取られながらも、上手く立ち回って最高のタイミングでブリタニアという巨大な傘の下に飛び込もうとしたのだろうが、ルルーシユの御世となり、ブリタニアがE・U・への侵攻を止めてしまったせいで頼る先を無くした哀れな国だ。

結果的に国民の目が衆愚政治に堕した政府に向き、大量の借金が明らかになって首も回らなくなってしまった。

もう残り半分の領土もブリタニアにぶん投げて問題事を始末してしまいたいという思惑のある政府は、神聖ブリタニア帝国からの申し出に対して、喜んでベルギー州最高級ホテルとその周辺施設全てを貸し出すことを即座に決定したのだった。

ルルーシユはやたらめったらにでかいソファに身を沈めて高級ベルギーチョコを貪っていた。

流石にE・U・でも指折りの最高級ホテル、その中でも一室しか無いロイヤルスイートなだけあって凄まじく広い。ソファがベッドぐらいに広い。そしてチョコも美味しい。

隣に座るジェレミアはきよろきよろと落ち着きなく周囲を見渡している。都会に慣れない田舎娘みたいな挙動だと思った。勿論そんなわけではなく、慣れない環境で警備に不安を感じているだけなのだが。

「その、ルルーシユ様、護衛のためでしたら私は立っておいた方がよろしいのではないでしょうか」

「親衛隊がずっと警備しているんだからお前がわざわざ立っている必

要は無いだろ。もうお前だけが俺の部下という訳じゃないんだから座って休んでおけ」

「……………ではお言葉に甘えて……………ルルーシユ様、チョコ、そんなにお好きでしたっけ」

「いや別に。ただなんというか、本場の国に来たら一応食べておかないと思つて」

C・Cとカレンへのお土産にいくらか買つて帰ろう。スザクの方はどうしようか。甘いものは好きでも嫌いでも無かつた筈だが、せつかくだし持つて帰つてやろうか。

呑気に土産のことを考えて思考を面倒なことから逃そうとする。しかし舌を滑つたチョコレートでは胃のむかつきはとれなかつた。

合衆国日本との会談が始まる前に行われた、E・U・首脳部との会談を思い出すと少し胃のあたりがちりちりする。

「四十人委員会は政治家よりも商人としての方が大成する連中ばかりが集まつているな。E・U・を高値で売りつけようとあの手この手で……………まあE・U・を併呑するのはいいんだ。いいんだが、借金がな……………ユーロ・ブリタニアを使えば赤字も解消されるだろうが、そこまですてやる義理も価値も無い」

「しかし中々に膨大な借金ですよ。ブリタニアの血税をE・U・のために使うというのも道理が通りません。たとえ属国になつたとしても、そう多大な援助をなさることは本国の国民が納得しないでしょう」

「本国からの援助は最低限に抑える。中華連邦に比べればE・U・はそう貧しくはない。衆愚政治を主導した馬鹿共のせいで見かけが貧しいだけだ。奴らは大量の金を抱えたまま退任したいのだろうが……………まあそうさせてやるさ。ギアスで、その無能さを金によつて償わせてやればいいだけだからな」

既にこの部屋に監視カメラ、盗聴器が無いことは確認済みである。もしあればE・U・を脅す種にでもしようと思つていたのだが、ここまで馬鹿ではなかつたらしい。

扉がノックされ、入れ、と告げると、灰色がかつた長い髪に水色の

瞳の女軍人が姿を現した。訓練された動きで敬礼し、踵をきつちりと揃えて鉄筋でも入っているかののように背筋をまつすぐに伸ばす。見本のように立派な軍人の姿だった。

「失礼致します皇帝陛下。キョウト六家当主皇神楽耶様、また統合幕僚長藤堂鏡志郎様、そして合衆国日本暫定首相田中ハジメ様、予定通り空港に到着されたそうです」

「そうか。では会談の開始まであと1時間というところか」

「然様かと思われませう」

「分かった。ご苦労だったなヴィレッタ。時間もあることだ、少しお互いに休憩しよう。話し相手になつてはくれないか？」

「……はい、皇帝陛下。恐縮でございます」

ヴィレッタは一度体をぶるりと震わせて、勧められるがままにソファへ腰を下ろしローテーブル越しに皇帝と相對した。

こうして真正面から見ると本当に隅から隅まで人形のように整った人だと驚嘆する。シンジユク事變の後にルルーシュ・ランペルージの素性を調べていたため、ヴィレッタはルルーシュ皇帝が17歳の女性だと知ってはいた。だが目の前の人間が単なる美女とはとても思えない。仕草や表情には青年のような力強さもあり、純白の皇帝服は彼女の男性的な優雅さを際立たせている。2種の性別が混ぜ合わさった目の前の生き物は背筋が粟立つように美しかった。

この皇帝が自分をどう遇するつもりなのか想像もつかず体が震える。

紆余曲折はあつたものの、結果的には諜報任務を無事に果たした功績を持ってヴィレッタはブリタニア本国に帰国した。しかし元々配属していたエリア11地方軍は既に壊滅しており、新たな配属先が決定するまで暫くは宙ぶらりんになることを余儀なくされたのだった。ただでさえ皇帝登極に伴い各方面の人事が一新されている中でヴィレッタのような一軍人に割く時間はルルーシュには無かった。

しかしそれでも仕事が無い訳でも無い。監視の意味も含めてであろうが、ヴィレッタは榮譽あるナイトオブツ―直属部隊に配属されることとなった。

皇帝に最も長く仕えており、現在は皇帝親衛隊隊長の任も兼任するナイトオブツ、ジェレミア・ゴットバルトの直属部隊は、強襲部隊としての色合いが強いナイトオブワン直属部隊とほぼ同等の地位にある。

さらに黒の騎士団の機密をブリタニアへ流した功績を評価され、ヴィレッタはジェレミアの副官として遇されていた。平民出身の女軍人にしてみれば眩しい程の栄転だ。

だがそれら全てが、皇帝にとって不利な言動をしないかという監視のためであることは言われずとも理解している。もし自分が、ルルーシュ皇帝が実は女性で、さらにゼロであったことなどを口走ろうものならナイトオブツが自分の首を躊躇なく刎ねる算段になっているのだろう。

自分が持つ全ての栄光は、目の前の皇帝の気まぐれ一つで全て剥奪されかねない儂い夢だ。

こんな筈ではなかったとヴィレッタは歯噛みした。

ゼロを追放した後はシュナイゼルが皇帝に登極するとばかり思っていたのに、まさかゼロだったルルーシュがそのまま皇帝の座につくなど想像すらしていなかった。

ゼロを追放した功績があれば皇帝となったシュナイゼルの下で立身が望めると思っていたのにルルーシュ皇帝の下ではそれも難しい。

今やヴィレッタは皇帝がゼロだったことを知る数少ない者の一人であり、シュナイゼルに命令されたためとは言えルルーシュをゼロの座から追放した一人でもあった。ルルーシュ皇帝にとってはあまりに不都合な人間だろう。

適当な理由を付けて処刑される自分の姿が脳裏に浮かび上がり、膝の上で握る手が微かに震えた。ルルーシュは喉を鳴らして笑った。

「そう緊張するな。貴公は優秀な軍人だとジェレミアから聞いている。登極のごたごたで話をする機会を今まで逃してしまったが、私としては貴公にはこのまま皇帝親衛隊の副官として勤めて貰いたいと思っっているんだ。本来ならばシュナイゼルの直属部隊へと配属するのが筋なのだろうが、良いか？」

「あ、ありがとうございます。小官などには勿体ないお言葉です」

頭を下げるヴィレッタにルルーシユはチョコの詰まった箱を押し出した。

「そうか。ありがとうございます。あと良かったらチョコを食べてくれないかな？ベルギー州知事がプレゼントしてくれたブランドチョコレートなんだが一人で食べるには多くてな。ジェレミアはあんまり食べてくれないし」

「申し訳ございません」

甘いものは苦手で、と苦笑するジェレミアに、ヴィレッタはではとチョコレートを手に取った。

流石に皇帝陛下に献上するだけあって美味しい。後を引かない甘さについても一つと手に取りたくなる。

「そういうえばヴィレッタ、お前は私の性別を知っているようだな？」

「ごほつ、と食べたチョコを吐きそうになりながらヴィレッタは肩を震わせた。

「そ、それは、」

「隠さなくて良い。シンジユクゲットーで貴公からKMFを奪ったのは確かに私だ。その時にアツシユフオード学園の制服を着ていたことから私の身元を調べたのだろうか？」

「……はい、あの時は皇帝陛下の貴い血筋のことを知らず失礼を致しました」

「血筋に貴いも貧しいもあるものか。それはもうよいのだ。問題は貴公が私がゼロであることを知っており、尚且つルルーシユ・ランペルージであることを知っているというその一点に尽きる」

足を組み悠然とした態度のルルーシユを前に額から汗が噴き出る。

直属の上司であるジェレミアを継るように見るも彼がヴィレッタに向ける視線は冷ややかなものだった。

その視線に、もしルルーシユが今この場でヴィレッタを殺せと彼に命令したのならば自分の副官であったとしても一切の躊躇なく切り捨てるのだろうかと思わされた。

皇帝に厚い忠誠を誓う騎士が、たとえ単なる気まぐれであったとし

てもルルーシユの決定に異を唱えるなど方に一つもありえない。

この場に自分の味方はいないことを悟り、ヴィレッタは皇帝から下される判決を待った。ルルーシユの声は思っていたよりも柔らかかった。

「しかしそれら全ては君の責任ではない。それに君は思っていたよりも有能だった。ジェレミアの副官をこのまま任せても良いかと思うくらいにはね……ジェレミア」

「はっ」

「キャンセラーを」

ジェレミアの左目から青い光が迸った。何が起こったのか分からぬうちにヴィレッタは青い光に包み込まれて、一瞬だけ瞳の淵を赤く染めた。

脳内にシンジク事変が思い出される。男子生徒の制服を着たルルーシユが前に立っている。ルルーシユはアラン・スペイサーと名乗って、父は公爵だと訴えた。それで自分はKMFから出て、それから、

「ヴィレッタ」

「は、はい！」

「こちらを見ろ」

浮かび上がる記憶に混乱しながらも言われるがままにルルーシユの顔を見やる。

吸い込まれるような紫色の瞳の隣には黄昏のように赤く光る瞳があった。オッドアイ？コンタクトで隠していたのか。何のために。

だが疑問を口にするよりルルーシユが口を開く方が早かった。

「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが命じる。ヴィレッタ・ヌウ、『ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアは男だと思いついて』」

「……………はい、承知致しました皇帝陛下」

ヴィレッタは瞳の淵を赤く染めて頷いた。

ゼロルルーシユ皇帝だということは別段バレても問題にはならない。

ルルーシユ・ランペルージゼロ、ルルーシユ・ランペルージル

ルーシユ皇帝、この2つさえバレなければ皇帝を辞めればすつきり身軽になれる。

むしろルーシユが皇帝を辞めた後にヴィレッタがゼロルルーシユ皇帝であることを公にした場合、病死したルーシユの遺志を受け継いで皇帝になったシユナイゼルへの追い風が吹くことにもなるだろう。

指先でチョコを摘まんでヴィレッタに差し出す。

「ヴィレッタ、チョコレートをもう一つどうだ？」

「……う、はい、頂きます」

一瞬遠のいた意識を疑問に思うも、あまりに一瞬のことであつたためヴィレッタはそう深く考えることも無くチョコレートを受け取つた。

「さて、話の続きだが——お前に私も思うところが無いではない。しかしもう終わったことだ。私はもうゼロではないし、君ももうスパイではない。今の君は私の最も信頼する騎士であるジェレミアの部下であり、そして私は皇帝だ……だがヴィレッタ卿、人を思う心は身分や立場のようにそうそう簡単には変わるものではあるまい」

ずい、とルーシユはヴィレッタに近寄つた。間近に迫るあまりに美しい顔にヴィレッタは後ずさろうとしたがソファの背もたれに衝突してそれ以上の逃亡は敵わなかつた。

迫る美貌にはいつもの皇帝然とした凛々しい表情は無く、純粹な好奇心だけが顔を彩っていた。恋愛小説を初めて読んだ中学生のようだと不敬ながらに思う。

「お前に扇への未練は無いのか？叱りはしない。正直に答えて欲しい。お前が望むのなら日本政府と交渉して合衆国日本国民に捻じ込んでやろう。扇の居場所も探してやる。お前が望みさえすれば、扇と夫婦になつて平穩な暮らしができるだろう」

「あれは仕事でした。私に未練など、」

「ヴィレッタ」

ルルーシユはにやりともにごりともつかない顔で笑つた。

「私はただ、祖国を捨てなければ成就し得ない恋愛に興味があるだけ

なのだ。人の思慕とはどんな熱量を持っているのか。好きな人のために努力して築き上げてきた経歴や身分を捨てるのは一体どのような心持の上でのことなのか。そしてそうしてくれた相手にどこまで尽くすのが普通なのか。私はあまりそういったことに経験が無かつたものだから是非知りたい。ヴィレッタ、お前は扇を愛しているのだろうか？お前はこれからどうしたいのだけ？」

いっそ潔いまでの野次馬根性丸出しの発言にどう返すのが正解であるのか分からず言葉が詰まる。

皇帝親衛隊の一員としての正解は、扇など愛したこともない、自分の忠誠は全て祖国ブリタニアと皇帝陛下の元にあると強く宣言することだろう。ルルーシュをゼロの座から突き落とした一人としてここは忠誠をアピールするべきだ。

だがこの皇帝陛下にそんな口先ばかりの嘘が通用するだろうか。

即座にヴィレッタは無理だろうと判断した。新皇帝に叛意など無いと嘘をついた貴族達が迎えた末路を思い返すと乾いた笑いしか浮かばない。

正直に答えるため自分の感情を探してみると、扇のことを思うだけでちりちりと後ろ頭をひつかかれるような熱情が未だに残っている。思っていたよりも強い火勢に自分自身で驚いた。

しかしいくらしつこく燃え続けていたとしても、それはもうすぐに燃え尽きる残骸のようなものだった。二度と燃え上がることは無いだろう。

愛していたことは事実だ。しかしルルーシュが自分に期待しているような、恋愛小説で語られるような情熱的な感情はもう何も残ってはいなかった。祭りの後のような寂しさだけがあった。

「失礼ながら……確かに私は敵であった、ナンバーズの扇要を愛していました。確かに。あんな、見目も良くない、能力も優れているとは言い難い凡人を……しかし私はブリタニアに忠誠を誓った身です。

扇を愛していました。もしかすると、今も愛しているかもしれない。しかし男一人のために祖国や家族を捨てる程に私は愚かではありません」

「……それは本当に愛していたと言えるのか？」

ルルーシユはこてんと首を傾げた。

子供らしい仕草に思わず微笑が零れかけて危うく押しとどめる。しかし元ゼロ、現ブリタニア皇帝であるルルーシユに向けるにはあまりに相応しくない印象はヴィレッツタの中に強く残った。

まるで恋愛小説に夢見る少女のようだと。

馬鹿なことだ。ルルーシユ皇帝は男であるというのに……そうだが、男だ。どう見ても男であるし、幼少期に皇子として育てられていたのだから女である筈が無い。服の着替えやバスタイムの介助をメイドに任せている皇族が性別を隠すなど無理な話だ。

「いやすまない。愛の形は人それぞれか。お前にはお前の価値観と幸せがあるだろうに余計なことを言ったな」

「いえ、お気遣いありがとうございます」

深々と頭を下げるヴィレッツタを前にして、ルルーシユはちらりと隣に座るジェレミアに視線を向けた。視線には呆れと諦観が絶妙な比率で含まれていた。ジェレミアには聞こえない声で「愛が重い」と呟いた。

扉がノックされ、兵士の一人が会議の準備が整ったことを告げた。

「よし、では行くか」

「イエス、ユアマジエステイ」

立ち上がったルルーシユの後ろに当然のようにジェレミアが付きそう。

これから合衆国日本との会談が始まる。ヴィレッツタが合衆国日本で過ごした期間は1年と少し。そう長い期間ではなかった。しかしその1年間は丸々全て愛した男と過ごした時間であって、常に上を目指して生きてきたヴィレッツタにとっては夢のように幸せな時間だった。

デイトハルトに撃たれて海に落ちて、記憶喪失になった自分を扇は匿ってくれた。

楽しい日々を過ごした。記憶の無かった内は、純粹に優しい扇のことを愛おしいと思えた。

記憶が戻ってから、お世辞にも人の上に立つ器を持たない扇が苦悩しながら足掻いている姿に恋をした。自分がそんな扇の支えになっっていることが嬉しかった。ブリタニア人でも軍人でもない、貴族の生まれでもない、ただの自分に優しくしてくれた男を愛していた。「扇を愛していた。あの優柔不断で弱い男を、でも愛していたんだ。愛していた。嘘じゃない」

誰にも聞こえないような小さな声で呟く。その言葉に偽りは無い。だがブリタニア本国に戻って軍人として仕事を始めると、あの日々がいかに関心にとって何の意味も無かったのかを理解してしまう。

ヴィレッタ・ヌウは士官学校を優秀な成績で卒業した文武両道の才女だった。平民の生まれと周囲から蔑まれることもあったが、実力でねじ伏せてきた。

扇のために合衆国日本に行くということは、本国で暮らす可愛い妹や弟達を捨てて、これまで必死に努力して手に入れた学歴も功績も捨てて、一人の男に縋りつくということだ。

そうして全て捨てて扇について行ったとして、どんな人生が送れるというのだろう。扇が自分に求めているのは頭脳や戦闘能力などではなく家を心地よく整える女でしかないだろうに。

男の食事を作って、寝床を整えて、股を開いて、それが人生か。ぶるりと体を震わせてヴィレッタはぶんぶん頭を振るった。あれは甘いだけの一時の夢だったんだ。

何もかもを全部捨てて好きな人について行ったとして、幸せになれる訳が無いじゃないか。陳腐なドラマや都合の良い恋愛小説と現実とは違う。

現実では、夢はいつか覚める。目覚めた後に続くのは幸福ではなく、苦難と後悔の海だろう。

「何をしているヴィレッタ卿。早く自分の持ち場に向いたまえ」「はっ、申し訳ございませんジェレミア卿。すぐに向かいます」ジェレミアに向かって指先まで神経を伝わらせて敬礼する。

見本のようなブリタニア軍人でありながら、貴族と平民を区別なく扱うジェレミアの部下に配属されたことは幸運だった。さらにジェ

レミアはルルーシュ皇帝の信頼も厚く、汚職に手を染めるような性格でも無い。そう易々と出世街道から外れることは無いだろう。この上司の下で実力を示せば更なる出世も叶うかもしれない。

機敏な動作でヴィレッタは自分の配属場所へと向かった。優秀な軍人らしい、しつかりとした足取りだった。



「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア皇帝陛下、ご入来!!」

金細工の施された両開きの扉をくぐると会議室と呼ぶにはあまりに豪華な部屋が目に入る。だがルルーシュは飾られた彫刻や絵画に一切注意を払うことも無く、部屋の中央に備えられている円卓へと向かった。

繊細な意匠の施された椅子に座って前を見ると知っている顔が3つ並んでいる。

神楽耶と藤堂、そして田中ハジメだ。その後ろには護衛としてついてきたのだろう南と千葉が立っている。

ルルーシュは背後にジェレミアとヴィレッタ、そして数人の護衛を立たせて田中に向けて笑みを浮かべた。

「お久しぶりです田中首相。枢木邸でお会いした以来ですね」

「ええ、お久しぶりですルルーシュ皇帝。まさかこうして再会できるとは思ってもみませんでしたけど……」

単に懐かしいとは言い難い感情を渦巻かせながら田中はなんとか笑みを浮かべた。

枢木首相の元秘書であった田中ハジメは、幼いルルーシュが枢木ゲンプに性的虐待を受けていたことを知っていたながら放置していた唯一の人間だった。今となつては後悔しかない過去だ。

その事を引き合いに出すのは自分がレイプされた事実を公表することにも繋がるため、可能性としては低いだろう。しかし好印象を持つてもらうことは不可能に近い。

だが田中の予想に反してルルーシュの笑みは心からのものだった。

当時田中がなにくれとなく自分に気を使っていたことは察していた。ジエレミアが枢木ゲンプを惨殺したことによる混乱の被害を受けて酷い目に遭っただろう彼に思うところは既に無かった。

「私もこうして会えるなど予想外でした。まさか首相になられるとは……これは失礼。田中首相の手腕を疑っているわけではないのですが、当時の田中首相を知っているとどうにも印象が違いました」

「陛下の言は尤もです。ルルーシュ皇帝陛下とお会いした頃の私は単なる枢木首相の秘書であり……そう、貴国との戦争を回避しようとして、結局何も成すことの無かった男でしたから。今も多くの優秀な部下達や、神楽耶様、それに藤堂統合幕僚長のお力があってなんとか首相としての面目を保っている状況です」

「ご謙遜を。英雄ゼロを失ったばかりで混乱の中にある合衆国日本の舵取りは貴方でなければ不可能だと、ブリタニアにあってもよく聞いておりますよ」

田中は過大な評価に苦笑せざるを得なかった。自分はゼロが作り変えた合衆国日本の首相に偶然据えられて、ゼロがいなくなつてから混乱の只中にある政治をなんとか立て直そうと奮闘しているに過ぎない。ちよつと運が違えば首相の座にあるのは自分では無かつただろう。

目の前の、たつた2か月で神聖ブリタニア帝国を作り変えたルルーシュと自分では格が違う。

「私もお久しぶりに会えて光栄ですわ、ルルーシュ皇帝陛下。お元気そうでなによりです」

「お久しぶりです皇殿。貴女もお変わりは無いですね」

「はい。陛下は暫く見ないうちに——随分とお変わりになられましたね」

2か月でゼロからブリタニアの皇帝に姿を変えらるとは夢にも思っていなかった神楽耶は苦笑いを零した。

こうなると知っていたならば、どう足掻いてでもルルーシュをゼロの座に留めておくべきだったか。

いや、と思う。ルルーシュが皇帝になったことで合衆国日本が得た

メリットは大きい。

そもそもあの時点でルルーシュがブリタニアの皇帝になるなど予想もできなかった。ならばこうなるのはあの時点において避けられない未来だったのだ。

「それにしても扇事務総長はどうしたのでしょうか。黒の騎士団の副司令ともあろう方がこの場にいないというのは聊か疑問なのですが」

「扇は軍の守秘義務違反で拘置所に拘禁されています。未だ判決は下っていませんがまず間違いなく有罪になるでしょう」

ルルーシュの背後でヴィレッタが一瞬息を飲んだのが伝わった。しかし背後を振り返った時にはヴィレッタは既に常の平静を取り戻していた。

再度藤堂に向き直る。

「失礼ながら証拠はあるのでしょうか。そちらの事情は凡そヴィレッタから聞いております。ブリタニア側の諜報員であったヴィレッタに情報を渡したのだとしても、騙されたと突っぱねれば抒情酌量もあるでしょうに。扇事務総長が積極的に黒の騎士団の情報を流したという証拠が無ければ有罪は難しいのでは？」

「ブリタニアの女軍人を自宅に軟禁し、報告を怠っていた時点で明らかに犯罪です。いくら敵兵だとしても軍に報告していなければ監禁罪の適応になる」

「……親告罪じゃないか、それは」

「なんとかごり押しするさ。ごたごたが片付くまで扇には塙の中にいて貰わなくては困る」

この場にはE・U・の人間はおらず、一切のメディアも入ることを許されていない。いるのは黒の騎士団幹部と、ルルーシュと皇帝親衛隊のみだ。藤堂の軽い口調を咎める人間はいなかった。

唯一事情を知らない田中は全ての事情を知るだろう神楽耶に視線を向けたが、につこりと笑う神楽耶に頬を引き攣らせて口を閉じた。

首を突っ込んで良いところとそうでないところのラインが分からない程の馬鹿ではない。ゼロは死んだと騎士団が明言しているのなら、つまりゼロは死んだのだ。その正体も生死も田中の関知すると

ころではない。

「そうか。他にあの後変わったようなことはあったか？」

藤堂の視線が皇帝親衛隊に向かう。どこまでこの場で話しているのか計りかねているのだろうか。

「こいつらは気にするな。何を話してもこの場からは何も漏れることは無い。皇帝親衛隊の口は天国への門より堅いぞ」

「……………分かった。あれから変わったことと言えば田中首相が就任されたことと、あとは朝比奈が謹慎になったことぐらいだ。ゼロの正体を直属の上司である私に知らせず、事務総長の扇に密告したのは明らかな越権行為だった。謹慎が解けたら後方部隊に回そうと思ってる」

「朝比奈からしてみればお前を思ってたことだったんだろうがな。常から俺ではなくお前が黒の騎士団のトップになるべきだと思っていたようだったから」

「軍隊は規律に厳格でなければならない。規律に緩い軍隊とはつまり最悪の犯罪組織だ。朝比奈は私を盲目的に信じすぎるあまりにそんな基本的なことを忘れていたんだ。そんな奴に、場合によっては人殺しもやむを得ない前線に立つ資格はない」

「厳しい事だ」

「当然だ。軍隊とはそういうものだ。とはいえ、その件に関しては色々と国民へ隠し事が多いのも事実ではあるが……………組織のトップとは存外難しい」

藤堂は顔を青くして笑った。ルルーシュがゼロだった時には見せることの無かった、顔を歪めるようにして無理やり浮かべた笑みだった。

「お前は変わったな、藤堂」

「この3か月で色々とおった。胃潰瘍で血を吐いて救急車で運ばれたよ」

「すまん」

「しかも働ける人数が少ないせいで病室でも仕事に埋もれていたものだから、入院中にまた血を吐いて千葉に散々叱られたよ」

「いやほんとすまん」

素直にルルーシユは謝罪した。ゼロを辞めた際に藤堂へ全部押し付けた自覚はある。

おまけに未成年を戦場に出すのは人倫に悖ると言われてゼロを辞めさせられたというのに、その1カ月後にはちゃっかりとブリタニアの皇帝に収まっているのだ。

ゼロの後始末に翻弄する藤堂が数多くの部下を率いて皇帝服を纏うルルーシユを見てどう思ったのか、想像に難くはない。

いくらその結果ブリタニアの改革が推し進められたとはいえ腹に据えかねるものはあつただろう。

「悪かったな藤堂。ブリタニア皇帝として合衆国日本を正式に承認するから、それで勘弁してくれ」

あはは、と笑いながら、ルルーシユは御璽を取り出した。



遺伝子配列のように絡み合う「意思」を前にナナリーは車いすに座り込んでいた。

近頃はこうしてぼんやりとそれを見ている時間が増えた。娯楽が無いこの世界では呻いたり笑ったりして振じり合う集合無意識を眺めていることだけが唯一の娯楽と言えた。

誰かと話して暇を潰すにしても、ここにいるのは父とビスマルクと母だけだ。父はなにやらラグナレクの接続のために細々と準備をしているし、ビスマルクはその手伝いで忙しい。

母は——母とはあまり話したくなかった。

優しくて美しいと思っていた母だが、それは幼い頃の憧憬が生み出した単なる妄想でしかなかった。

成程、確かに容姿は申し分なく美しいだろう。しかし母は父よりも兄よりも独善的で、自分の快樂のことしか考えていない女だった。その内面には美しいと形容されるに相応しいものは何も無い。

Cの世界で再会した当初は母が生きていたことに感動したりもしたが、今になってみると6年前に死んでいた方が思い出が汚されずに済んで良かったとさえ思う。

「——お父様はお母様のどこが良かったのでしょうか。容姿が美しいにしても、お父様ならばもっと美しい人を探すことだって出来たでしょうに」

「皇室は閉塞的な空間だ。ぶっとんだ性格のマリアンヌが物珍しかったんじゃないのか？」

独り言への返答に驚いてナナリーは背後を振り返った。兄によく似た男がこちらに向けて歩いてきた。

もしや兄がやって来たのかと体を震わせたが、彼の纏う雰囲気は兄とはほんの少し違うものだった。

高い塔の上で地上を睥睨する、手の届かない恐ろしい生き物のような。この世に存在するだけで他者に違和感を与える、理解の範疇外に属する何かをナナリーはその男から感じた。

「ナナリー、こんなところにいたのか」

「あなたは……ロロお兄様ですか」

一年以上顔を合わせることに無かった従兄——従兄ということになっていくロロは兄によく似た皮肉気な笑みを浮かべた。

「本当に久しぶりだなナナリー。最後に会ったのはC。C。がルルーシユの所へやってきた時だから破の6話ぶりかな。読者の皆様のには破の9話ぶり、約半年ぶりといったところか……まさか俺のことを忘れてはいないよな？」

「どこを見て言っているのですか？」

「パソコン画面だよ。もしくはスマホの画面」

こちらに向かって手を振ったロロは、さて、とナナリーに向き直った。

「少し見ない間に随分と変わったな、ナナリー。ギアスの影響がある

にしても自分の意思であの馬鹿馬鹿しい計画に乗るだなんて。シャルルの口車に乗せられただけかと思っていたのだけれど、そうでもないようだ」

「私はラグナレクの接続を自分の意思で肯定したのです。それより口お兄様、あなたは何者なのですか。黄昏の扉はお父様が全て封鎖している筈です。どうやってこのCの世界に……」

「異世界キャラはチートだという公式があるからね。ある意味では俺も異世界のキャラクターなんだからこの程度は造作も無いよ。詳しく考えるだけ無駄な事さ」

あっけらかんとした様子で口口は肩を竦めた。

説明になっっていない答えに眉根を顰める。何も言うつもりは無いということか。

この世界にやって来たのだから口口がコードを持っていることは明らかだ。初めて会った時から6年も経つのに全く容姿が変わらないのも不老不死であるからなのだろう。

一体いつからコードを持っているのか、そもそも口口とは何者なのかと思いを巡らすも、思い返すと彼について詳しいことは何も知らない。職業も年齢も経歴も、詳しいことは何一つとして知らなかった。

なにしろ口口という男は自分のことはあまり語らず、会うこともそれほど多くは無かった。あまりに兄に似た顔を持っているために血縁を疑ったことは無かったが、今思うとそれさえも嘘だったのかもしれない。

「口口お兄様もコードを持っているのですか。お父様が把握していない黄昏の扉からこちらに来て、お兄様へCの世界の状況を教えるつもりですか」

「俺が一番良い席で傍観するためだけにここに来たんだ。ナナリーの味方をするつもりも、ルルーシユの味方をするつもりも無いよ。この世界のナナリーとルルーシユの兄弟喧嘩に関わるつもりはない……いや、姉妹喧嘩かな?」

「お兄様の性別まで知っているのですか!?!」

「勿論。ナナリーが知らないことまで全てね」

掴みどころのない笑みを浮かべてロロはその場に座り込んで集合無意識を見上げた。見上げる表情には何の感情も含まれていなかった。

まるで自分は無関係と言わんばかりの態度は不快感というよりも強い違和感を与えた。

ロロの口振りはまるでラグナレクの接続の全貌さえも知っているようでさえある。しかし全て知っているというのなら彼がこうして泰然としていられる訳がない。

この計画に無関係な生物は、文字通り一つもあり得ないというのに。

「もう少しで全て終わる。そうなれば恐らく俺は連れ戻されるだろう。それまでの間、楽しませてもらうよ」

只管に不可解な存在であるロロの隣へと恐る恐る近寄り、ナナリーも集合無意識を見上げた。

ロロは不気味な存在だが、よく考えればそう怯えることも無い。この計画が無事に済めばロロのことは全て分かる。

何しろ全ての存在が一つになるのだ。ロロのことでナナリーが知らないことは何一つなくなり、同様にルルーシュについて知らないことも何一つ無くなるだろう。

誰もが自分を愛するように他人を愛することができるようになる。きっとそれは理想の世界だ。

「——楽しむというのならば、精々楽しまれて下さい。もう少しです、もう少しで世界は楽園へと導かれる」

楽園と聞いたロロは小馬鹿にするように鼻で笑った。

13. 世界終末の日は何をする？

コーネリアはルルーシュと相対していた。

後ろには選任騎士であるギルフオードが立ち周囲を神経質そうに見回している。しかし辺りには花に埋もれそうになりながら巡回している警備兵以外に動くものは無い。

テーブル越しに対面しているルルーシュは後ろにジェレミアを立てて、優雅に足を組んで指先でティーカップを摘まみ上げた。皇族の一人とはいえ皇位継承権は低く、さらに長年日本に捨てられたために碌な教育を受けていなかっただろうに仕草の一つ一つがこの上なく優雅だ。支配者然とした仕草にコーネリアは気に入らないと鼻を鳴らした。

掌の上で全てを操ろうとする酷薄な男はどうも気に食わない。

昔は可愛かったのに。コーネリアはアリエス宮に似た庭園を少し眺めて6年前の昔を思い返そうとした。しかしたった6年の間にあまりに情勢が変わり過ぎていて、あの和やかな日々を思い返すことさえ難しくなっていた。

ギアス嚮団からジェレミアにより救出されたコーネリアは黒の騎士団の捕虜となった。

とはいえ既に皇籍を持たないコーネリアは黒の騎士団にとって非常に扱いに困る存在であり、持て余していたのが事実だ。粗略に扱う訳にも行かず、かといって皇族として交渉材料に使えるわけでもない。

そして黒の騎士団と同盟関係にあったシュナイゼルが引き渡しを要求したために、これ幸いと恩を売る形で黒の騎士団はコーネリアをシュナイゼルに引き渡したのだった。

そのままシュナイゼルの庇護下に置かれたコーネリアはブリタニア本国へと移送され、捕虜の身分からは解放された。

しかし皇位継承権を返上したコーネリアは単なるり家の当主でしか無く、宰相の後ろ盾を得て皇帝に登極したルルーシュの敵には成り

得ない存在であった。良くも悪くも。

実家に戻るにしてもり家の邸宅はユファイがV・V・に誘拐された際に殺戮現場となっており、建物自体もかなり破損していた。難を逃れて生き残った使用人も既に解雇してある。

行き場を無くしたコーネリアにルルーシユは皇宮の一室を与え、またシュナイゼルの計らいにより選任騎士であったギルフォードがコーネリアの護衛に就くこととなったのだった。

ユファイの死を受け入れ、そしてユファイの敵を自らの手で惨殺したという事実を消化している間にも情勢は目まぐるしく変化する。

突如として姿を現したルルーシユ皇帝はブリタニア全土が未だ新皇帝の登極に混乱している最中、貴族の既得権益を剥奪する異例の勅命を下した。

その貴族の中にはり家の名もあり、有していた莫大な財産と領地の大半は没収され、大貴族であったり家はそこらの小貴族と大差ない規模まで落ち込んだ。失った財産はそう金銭に執着の無いコーネリアでさえ顔を青くする程に莫大であり、私欲に塗れた貴族が新皇帝へ反旗を翻す理由を察するに十分だった。

とはいえ元々武人としての気質が強いコーネリアである。平民を虐げて富を築く貴族の醜い所業を苦々しく思ったこともあり、実家が所有していた薄汚れた財産が没収された事へルルーシユに思う所は無い。

手元に残った財産も、慎ましく使えばギルフォードと2人でなんとか暮らして行ける程度の金額はある。高等遊民を気取るつもりも無く、シュナイゼルに頼んで新しい戸籍を用意してもらえば真つ当に働くことも出来るだろう。

しかし隠棲を決めるには未だ納得の行かないことが多すぎた。

ギアスとコード、ギアス嚮団、実験体。ユファイを殺害したギアス嚮団について調査している内に、これまで知ることの無かったブリタニアの暗部が露わになりコーネリアを揺さぶった。

ギアス嚮団はスザクにより消滅したとはいえまだギアスとコードがこの世に残っていないとは限らない。まだ自分の知らないことが

残っているやもしれない。

コーネリアは忙しいルルーシユを捕まえて、ギアス嚮団について知っている限りのことを教えて欲しいと乞うたのだった。

日の当たるテラスでスツールに腰かけて花の匂いを纏う風に吹かれる。居心地は良い。

しかしコーネリアは消化しきれなかった怒りが胸の内でも燃え上がるのを感じていた。内に籠る熱のせいで爽やかな外気へ気を向ける余裕も無い。

ルルーシユの口から聞いた事実は想像していたよりもずっと凄惨なものだった。

「——ユファイがギアス嚮団の手にかかり実験体として殺されたことは知っていた。しかしそれだけではなく、最初から、生まれたときからギアスの実験体だったのか。私もユファイも、お前もナナリも、シュナイゼル兄上も……」

「皇族そのものがギアスの実験のために改良されたモルモット一族と言っても過言では無いだろうな。兄上は感情を奪われ、俺は——ふん、ユファイは皇族の中でもギアスへの適性が高い方だったそうだ。さぞ有用なモルモットとして扱われたのだろうよ」

ルルーシユの背後でユファイを救助した当事者であるジェレミアが首を垂れる。

しかしコーネリアはジェレミアに恨みをぶつけるのは筋違いだと分かっていた。下半身を失い機械で置換されていたユファイの遺体を見れば、どう手を尽くしても生きて救出することは不可能であったことは嫌でも理解できる。

V・Vは自らの手で八つ裂きにした。ギアス嚮団はスザクがフレイヤで吹っ飛ばした。

しかしまだ全ての元凶であるシャルルは生きている。

ならば復讐はまだ終わっていないではないか。ユファイを殺した奴はまだ生きている。

両の手を筋が波打つ程に握り締めながら、しかしルルーシユの話聞いたコーネリアは同時に頭のひんやりとした冷静な部分で、何故こ

の短期間でルルーシユが皇帝に成り得たのかを悟った。ルルーシユもギアスの実験体だったのだ。

いくらシュナイゼルとルルーシユという希代の化け物2人が手を組んだとしても、皇位継承権を剥奪された僅か17歳の少年が碌に根回しをする時間も与えられないまま皇帝に登極し、さらに2か月で国内を平定するなど不可能な話だ。それこそギアスやコードといった不可思議な力でなければ説明がつかない。

「ギアス……人ならざる力か。お前もギアスを持っているのだろうか？ でなければ色々説明はつくまい」

真つすぐなコーネリアの問いかけにルルーシユは唇の端を吊り上げた。ようやく気付いたのかと言わんばかりの出来悪い生徒を嘲笑うような笑みだった。

「どうやら俺にはギアスへの適性があつたようだ。俺はギアスの実験体の中でも成功体に数えられるのだろうよ。別に嬉しくも無いが」

「だから貴族共がお前に次々臣従しているのか。ギアスの力を使って、オデュッセウス兄上やギネヴィア姉上まで……」

「気に食わないのか？」

「っ、気に食わないに決まっているだろう！」

歯を剥き出して飄々とした態度を崩さないルルーシユを睨む。

実の兄弟がルルーシユの下僕になつている現状についてに限ればコーネリアに思うところは無い。

生まれてからずっと兄弟間で命懸けの凄惨な権力争いを演じていたのだ。ルルーシユに負けた兄や姉が皇宮の使用人にさせられていること自体はコーネリアにとつて気に留める価値も無いことだった。

ただユフィの死の原因となつたギアスを使つているという一点において、コーネリアはルルーシユを容認することはできなかった。

「ギアスの実験の生贄としてユフィが死んだというのなら、私はギアスの存在を許すことはできない。お前がギアスを使い続けているとギアスの存在が公になる可能性が上がってしまう。その力を欲する者も出てくるだろう。そうなればギアスは世界中に広まり、また次なるギアス嚮団を生むことも有り得る。私はお前のその力を容認で

きない！」

「姉上の言うことは尤もだ。しかし既にそんなことを言っている場合では無いのだよ」

「……………どういうことだ」

「シャルルがナナリーにギアスを持たせて、何やらふざけた計画を企んでいる事は話したな？ラグナレクの接続だとか」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの口調を隠しもせず肩を竦める。

「全くもって徹頭徹尾馬鹿馬鹿しい計画だが、ギアスについて我々よりシャルルの方がずっと詳しいことは確実だ。あいつらがどんな手段を用いてラグナレクの接続を実行するつもりなのか予想もつかん。さらにCの世界に潜り込んでいる以上、こちらからシャルルに手を出すことが出来ない」

手詰まりだ。ギアスについての情報を皇帝権限でかき集めているが、今をもつてしてもルルーシュはどうやってシャルルがラグナレクの接続とやらを実行しようとしているのか予想もついでいなかった。

そもそも全ての人間の意識を一つにするということが、つまりは具体的にどういうことなのか全くもって理解ができない。情報があまりに足りていないのが現状だった。

「だからこそ現実世界におけるシャルルの力は一刻も早く削いでおきたかったんだよ。そのためにはギアスによる支配が一番効率が良い」
「お前とシュナイゼル兄上が手を組んだのならば、ギアスが無くともブリタニアを手中に収めるなんて容易な事だろう！」

「確かにギアスが無くとも私とシュナイゼル兄上ならば世界征服でさえ容易い。しかしそのためにはいくら急いでも最低で1年という時間は必要になるだろう。ラグナレクの接続まで時間が無いのですよ、姉上」

コーネリアは黙り込み目の前の弟を睨んだ。

理屈で物を考える弟が憎たらしい。ギアスに対する憎しみに目が眩んでいる自覚はあるが、それにしただってルルーシュはあまりに薄情であるように思えた。

ユフィもナナリーもジェレミアもギアスのせいで酷い目に遭った

というのに、そのギアスを澄ました顔で利用している神経が信じられない。人間とは思えない非情さだ。

ナナリーとジェレミアは言わずもがな、ユファイだってルルーシュの良い妹だった。身分差を気にせずルルーシュを兄弟として扱ったのはナナリー以外ではユーフエミアだけだったというのに。

目の前の弟へ沸き上がる怒りと疑念をかみ殺す。この弟は稀代の嘘吐きだ。冷静さを失うと適当にあしらわれて終わることだろう。

「……ルルーシュ、お前はユファイをどう思っていたんだ」

「——可愛い妹だと」

嘘なのか本心なのか見分けのつかない薄ら笑いを浮かべたルルーシュにコーネリアは喰いかかる。

「馬鹿な妹だとは思わなかったのか？お前はゼロだったんだろう。行政特区日本などという理想論を掲げて、その挙句に失敗した……愚かだと、先が見えない女だと思ったのだろう」

「少しは」

ふん、とコーネリアは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

そうだろう。現実主義者のゼロならばそう思つて当然だ。むしろそう思わない政治家の方がおかしい。

しかし今のルルーシュを見ているとあの時のユーフエミアとは真逆の方向に愚かなようにも思える。この弟は、昔からそうだが、実力に裏付けられた過剰な自信のせいで突つ走り過ぎるきらいがある。

幼い頃はそれも可愛いと思つていたが、ギアスという超常の力を持った今では不信感の苗床でしかない。ギアスの力を乱用して思うがままに突つ走る為政者など認められる筈もなかった。

「私もそう思つた。馬鹿な妹だと。理想のみを追い続けて現実を見ていないと……しかし現実のみを見ることの方が、理想のみを追い続けるよりも愚かなのではないかと今の私は思う。ルルーシュ、お前はギアスを使わないという選択肢を最初から投げ捨てているんじゃないか？本当にそれしかなかったのか？私の目には、お前はあまりに効率ばかりを追い求めているように見えてならない」

「現状における最優先事項はシャルルへの対策だ。他は後からどうに

でもなる」

「人の自由意志を散々に奪っておいで後からどうにでもなると?」

「罪を背負わずに歩める程にこの道はなだらかではない」

「道をなだらかに均す努力を怠っているのではないかと私は言っているんだ」

「時間と労力に余裕さえあればそれも可能だろう。しかし今は無理だ。ギアス無しで統治を行うと各地で無用な反乱と行政の滞りが出来る。犠牲者も数多く出るだろう。数少ない人々の自由意志を奪うことと、数多くの人々を見殺しにすること、お前はどちらがマシだと思うんだ……ユファイなら誰も彼もを救おうと言うだろうし、そう言う権利もあるう。だがコーネリア、ブリタニアの魔女よ、お前にそんな理想論を唱える権利があると思うなよ」

過去の罪科を見通すような透明な視線を向けられて無意識の内に顔に皺が寄る。

ブリタニアのために多くの命を屠った自覚のあるコーネリアは、犠牲無く国を治めろとは言えなかった。そこまで厚顔にはなれない。

しかしギアスに対する忌避感にはコーネリアの中に根深く張っていた。

ギアスとはつまり、ルルーシュ個人の力だ。軍という国の力ではない。もしルルーシュが乱心してギアスを私的に使うようになってしまふと最悪だ。

それだけは何としても避けなければならぬ。だがそう分かっているというのに、自らの力のなんと小さい事だろう。

コーネリアは振り絞るような声を出した。

「ルルーシュ、シャルルを止めた後はもうギアスを使うな。使うようであれば私はお前の敵になるぞ」

「貴女程度が敵になったところで俺は怖くありませんよ?」

嫌味ではなく単なる事実を告げるような声は不思議とコーネリアの中にすっと落ちて、更なる苛立ちを沸き上がらせることは無かった。

小さな言葉の中に皇帝としての矜持が詰まっていたからなのかも

しれない。皇帝の座を目指したことの無いコーネリアには理解できない領域にルルーシユは居た。

「そう言っている内はお前は完璧な君主には程遠いな」

「ええ、そうでしょうとも。私は完璧などではない。もし完璧であったのならここにはユフィとナナリーと、クロヴィスもいた」

予想外に素直な言葉にコーネリアは面食らった。ルルーシユはきよとんとした顔のコーネリアに向けて手を差し出した。

「だから私にはジェレミアが、シュナイゼルが、カレンが、C。Cが、……スザクが、そしてあなたが必要だ」

「何のために？」

「戦い、そして勝つために」

自分とルルーシユの共通の敵など一人しか思い浮かばない。自分達の実父だ。

ルルーシユが気に食わないことは変わらない。しかし今の所自分達の敵は同じであり、自分一人の力ではあの敵の元までたどり着けないことは明らかだった。

多大な躊躇の後にコーネリアはルルーシユの手を握り返した。

目の前の弟は憎たらしいが、最優先事項がシャルルであることは事実だ。今の所はこの手を取らなければ自分は一步も進めない。

今のところは、だ。

冷たい指だと思った。

「どうやら上手く纏まったようだね」

少し離れた場所でメイドのシャーリーと優雅にティータイムを楽しんでいたシュナイゼルは息を吐いた。手元にはジェレミアに持たせていた盗聴器と繋がる機器が転がっている。

コーネリアが心底からギアスを憎んでいることは明らかだったために、ギアスを持つルルーシユと和解するのは困難かと思っただが、少なくともシャルルを打ち亡ぼすまでは彼女が敵に回することは無さそ

うだ。

コーネリアは知らない事だが、シャルルを亡ぼし、そしてブリタニアの政治がひと段落すればルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは表舞台から姿を消す。ギアスを使うようなことも無くなるだろう。コーネリアがルルーシュの敵になる未来はもう訪れない。

ルルーシュが言ったように今更コーネリアは敵になってもそう怖い相手ではないが、実妹と再び殺し合いを演じるのは今のシュナイゼルにとって歓迎すべき事態ではなかった。

「はい。コーネリア皇女殿下は皇宮でもギルフォード卿以外に心を許せるような人がいないようでしたので、これで一安心ですね」

「……なんのことだい？」

「え、コーネリア皇女殿下がルルーシュ陛下と仲直りできるかどうかご心配だったのでは？」

シュナイゼルの真向かいでメイドらしからぬ拙い手つきで紅茶を淹れるシャーリーにシュナイゼルは目を瞬かせた。

「そう見えたのかな？ 私が、コーネリアとルルーシュが仲直りできるか心配していると」

「ええと、あの、はい。宰相閣下はコーネリア皇女殿下のことをよく心配そうな目で見られていたので、そうなのではないかと」

「そう見えたのかあ……思っていたより私は過保護なのかな……まあ妹だからね。心配もするよ。殊に前皇帝の下でエリアを蹂躪していた彼女の立場はルルーシュの御世にあっては難しいものだ。もしコーネリアがルルーシュに帰順することを公の場で宣言したとしても彼女の罪は拭い難い。コーネリアもルルーシュのように新しい戸籍を得て、新しい人生を歩む方が幸せなのかもしれないけれど——」

シャーリーは美貌の宰相の顔が静かに歪むのを見た。

「でもそれはルルーシュ・ヴィ・ブリタニアがルルーシュ・ランペルジに戻るのとは訳が違う。彼女の場合は本当に、これまでの人生を全て捨ててしまうことになる。ブリタニアの国是の下で戦い続けた彼女の人生を否定することになってしまう。それはなんというか、あま

り良い気分ではない」

もしここにカレンがいればシユナイゼルはぶつとばされるんじゃないかとシャーリーは思った。

罪は罪だ。全て捨てて新しい人生を、だなんて、なんて都合の良い。カレンならそう言うだろう。

「宰相閣下、その、それは」

「言わなくとも分かっているよ。コーネリアは罪を犯した。罪は罪。でもね……シャルルの御世においてはコーネリアの行動は称賛されるべきもので、そうあるべきだと彼女は教育されていたんだ。同じ教育を施された、彼女の兄である私がコーネリアを憐れんでもそう非難されることではないだろう。皇女コーネリアとして生きるにしても、ただの一市民として生きるにしても、彼女はこれから寂しい人生を歩むことになる」

「お、恐れながら宰相閣下、そのご心配は無用かと思えます。コーネリア皇女殿下にはギルフォード卿がいるではないですか。お姫様を愛する騎士が！だから大丈夫なんです！」

「……大丈夫かなあ」

「古典文学から乙女ゲーまで、ありとあらゆるジャンルで姫と騎士の逃避行はハッピーエンドで終わると決まっていますから、証明に必要なN数は十分です！きつと大丈夫です！」

シャーリーはぐつと拳を握り締めた。瞳はビーズのようにきらきらと光っている。

「ラブイズパワー！愛は力！愛する二人なら何だって乗り越えられると古今東西全ての物語が認めています！姫と騎士の身分差のある恋、立ちほだかる数々の愛の試練、そして逃避行！これぞ古典的ながらも王道のロマンス！」

「……そもそもコーネリアとギルフォード卿ってそんな関係だったかな？」

「きつとそうです！多分！」

まだまだ新米メイドのシャーリーだが、噂話好きというメイドの性質は既に獲得しているらしかった。可愛らしい顔の中心で瞳は興奮

と多大なる好奇心で煌めいている。

へえ、コーネリアが、あの眼鏡と、へえ……シャーリーとは対照的にシユナイゼルは若干遠い目をしていた。

別に反対するつもりはない。ルルーシュと違ってコーネリアはもう成人した女性であるし、ギルフオードは騎士然とした優秀な人物で、コーネリアとの年齢差もそう大きく無い。そもそもただの異母兄妹でしかない自分に口を挟む権利が無いことも承知している。

ただなんとなく、ちよつとばかり面白くない。

気に食わないが、ルルーシュは遠からずあのサイボーグとくつつくだろう。

カレンは最近騎士として先輩であるジノに色々と教えを乞うているらしい。

皇帝親衛隊の副官であるヴィレッタも、今は皇宮の使用人となったオデュツセウスと食事に行く所を幾度か目撃されている。

そしてあのロイドでさえ爽やかに整った容姿を持つ部下のセシル・クルーミーとよく一緒にいる。

シユナイゼルは一人婚期を逃しつつある自身の身を呆れとも嘆きともつかない目で見下ろしながら綺麗な紅色をした紅茶を口に含んだ。色は良いが香りも味も薄い。

「シャーリー」

「はいー」

「あと20秒は長く蒸らした方が良いかな。それと紅茶を差し出す時には決して揺らさないこと。指先が辛いのは分かるけれど、水面がばちやばちや揺れるのは頂けない」

「は、はいー」

「でも前よりはずっと美味しい紅茶だったよ。これからも頑張って練習すれば皇帝陛下に出しても恥ずかしくない紅茶が淹れられるようになる」

「はいーありがとうございますごじますシユナイゼル宰相閣下!!」

敬礼でもしそうな勢いのシャーリーに、でもこの友人の淹れた紅茶ならばルルーシュは文句も言わずに飲むのだろうな、とシユナイゼル

は脳内で付け加えた。

身内には激甘なルルーシユである。それもルルーシユを護りたいがために皇宮のメイドにまでなった友人だ。

色のついた水のような紅茶をにっこり笑って美味しそうに飲む程度の事、ルルーシユにとっては大した事ではないだろう。

「宰相閣下と呼ばなくてもいいよ。普通にシユナイゼルで」

「え、いや、あの、流石にそれは……」

数か月前までこうして会話をすることさえ考えられもしなかった雲上人にそう言われても、流石に暴走生徒会の一員であるシャーリーでさえそう簡単に頷くことはできなかつた。

シユナイゼルは世界でNo. 2の身分と役職に加えて、とんでもない美貌の持ち主でもある。金髪紫眼で細身ながらも女々しさの欠片も無い正統派皇子といった容姿は、比類なく美しいが中性的で妖艶なルルーシユよりも一部の女性から熱狂的な支持を受けていた。

生粋の皇子の微笑みを真正面から喰らって思わずシャーリーの頬は赤らんだ。

「君はルルーシユ皇帝陛下のことはルルと呼ぶんだから、その兄であり部下である私のことも普通に呼んでくれて構わないよ。気軽にシユナイゼル、と」

「ふわああ」

「……？まあ流石に呼び捨てだと周囲も煩いから、シユナイゼルさんの方が良いかもしれないね」

「ぐふつうんっ、……いえ、えい、いえ、その、それもあまりに恐れ多いので、シユナイゼル様とお呼びしてもよろしいでしょうか」

うん、とシユナイゼルは軽く頷いた。

ルルーシユやナナリーとは違い小さな仕草の一つから言葉遣いまで皇帝として相応しい振る舞いを叩きこまれているシユナイゼルは、その小さな領きさえ驚くほどに優雅であり、ブリタニアの古い貴族社会を反映するような厳かなものだった。

公の場では完璧な皇帝陛下を演じるルルーシユだが、普段は非常にフランクだ。

シャーリーやカレン、ジェレミア、そしてスザクの前ではアツシユフォード学園の女子学生だった頃と大して変わらない。

ルルーシユには無い近寄るのも躊躇われる生粋の殿上人といった雰囲気、そして煌めく皇子様オーラに中てられたシャーリーは全身を真っ赤に染め上げた。

「君がいてくれるおかげでルルーシユもカレンも、スザクも救われているところがある。本当に感謝しているよ、ありがとう」

溶けそうになる顔をシャーリーはなんとか気力で保った。

コーネリアとルルーシユの話し合いが終わり、席を立ったシユナイゼルを見送ったシャーリーは即座に端末を取り出して生徒会で唯一平凡な生活を送っている友人に連絡を取った。

数コールもしない内に『はいはい』という皇宮には場違いな間延びした声が響く。

「リヴァル、リヴァルう」

『お、ひっさしぶりだなシャーリー！元気だったか？』

「いろんな意味で元気よ。ルルーシユもニーナもカレンも元気」

『……？、そっか！俺は受験勉強で脳が溶けそうできあ。まあそっちはそっちで皇帝付きのメイドってことで忙しいんだろうけど、もうこっちは勉強がヤバくてシャーリーが羨ましいぐらい』

「だったら今からでもブリタニアの皇宮に就職してよ。もうやばいよここ。一般人があたし一人じゃ耐えられない。色々と爆発しそう。萌えとかロマンスとかそういうものが噴き出しそうなの」

『はあ？いやもう受験申込しちゃったから今更無理だつて』

「あたしだつてここに庶民一人でいるのは無理よ！こ、皇族つて、皇族つて………っ！」

なんなのよー！

■ ■ ■
コーネリアとギルフオードを連れ戻したルルーシユはジェレミアと共に執務室へ戻った。

対シャルルの戦線を組んだ以上コーネリアにはこちらの情報を渡しておく必要がある。とはいえギアスに関してコーネリアに渡していない情報はそう多くは無いのだが、それでも不測の事態を呼ばないために出来得る限りの準備はしておくべきだと思ったのだ。

資料をコーネリアに渡して幾つか話し合っているとジェレミアの端末が鳴った。

首を傾げながら端末越しに部下からの報告を受けたジェレミアは、皇帝と皇女の会話に申し訳なきそうにしながらも割り込んだ。

「失礼致します。陛下、耳をお貸し頂けますか」

「なんだ、また反乱か？」

「いえ……」

コーネリアの前で報告しても良い事かと逡巡したが、別にそう隠すようなことでもない判断してジェレミアは口を開いた。

「アーニヤ・アールストレイムが先ほど帰還致しまして、陛下に謁見を願っているそうです」

「アーニヤが？ 賊軍の残党鎮圧に向かってまだ2日だろう。あまりに早過ぎないか？」

「それが任務の最中に引き返して来たそうです。既にペンドラゴンに帰還したと」

眉根を擡めてルルーシユは首を捻った。

アーニヤならば反乱貴族の残党など敵にも数えられない雑魚だ。引き返す理由は無い。

任務が気に入らなかつたのだとしても、あの物怖じしない性格ならば任務を下された直後にルルーシユへ直接文句を言うだろう。

最悪の展開としてアーニヤがルルーシユへ反旗を翻したと想定し

ても、わざわざ敵地であるペンドラゴンに戻る必要も無い。

「そうか。では全ての武装を解除させた後にここに連れて来るといい」

「はっ」

短い返事の後にジェレミアはルルーシユの言った通りの内容を通信越しに部下へと伝えた。

それから30分もしない内にアーニヤはルルーシユの前に現れた。しかしそれがアーニヤだとルルーシユには俄かに信じられなかった。

礼儀の欠けた態度はいつものことだが、扉を思い切りよく開けて皇帝の前で仁王立ちになり、いつもの無表情はなんだったのかと思うような満面の笑みを顔面に広げている。

それは明るい笑みではなかった。蜜が滴るような妖艶な笑みはまだ幼いアーニヤの容姿にはあまりに不釣り合いな毒を含んでいた。場末の娼婦だつてもっと慎ましい笑い方をするだろう。

以前にもこんな、見るだけで酩酊するような笑みを見たことがあるような気がする。しかしはつきりと思いつけない。

「……どうしたんだアーニヤ、何か問題でもあったのか？」

「色々と私達のために準備をしてくれたようだけど、残念ながら全ては無意味よ。物理的に存在する全てのものは今日この日この時から意味を無くすわ」

「はっ？」

様子がおかしい。

ジェレミアが咄嗟にルルーシユの盾になるよう前が出る。

アーニヤはKMFデヴァイサーとしての能力に限れば早熟の天才だ。しかし白兵戦の能力は一般兵とそう変わらない。そしてジェレミアは白兵戦ではスザクに次ぐ実力を持ち、最早人外の領域にまで達しようとしている。

広い背中に隠れたルルーシユはそう焦ることもなく奇怪なアーニヤの言動に首を捻った。

同様にギルフオードもコーネリアを背に隠す。コーネリアはアー

ニヤの笑みを目の当たりにして茫然としたまま全身を震わせた。

「ギルフォード、あれは、」

「お下がり下さい皇女様。様子がおかしい」

「アールストレイム卿の様子がおかしいのは分かる。だがあの顔は……容姿はまるきり似てないが、まさか、まるで、まるでマリアンヌ皇妃のような、」

マリアンヌと聞いたアーニヤはあら、と妙齡の貴婦人のように口を手を当てて少し驚いた顔をした。

「表情一つで気付くだなんて、あなた思っていたより私のことが好きだったのね？」

「はあ!？」

「アーニヤ、さつきから何を言っているんだ」

「何って、コウちゃんが好きってことよ。嬉しいわ。これから一つになるんですもの、私のことを好きな人は多い方がいいものね」

困惑するコーネリアとギルフォード、そしてルルーシユとジェレミアを気にすることも無く、アーニヤの姿をした何かはその場で恭しくお辞儀をした。

「長閑な平穩の日々はこれにて閉幕。早くしないとナナリーもシャルルも待ちくたびれちゃうわ。せめて最後に皆で、私達を育んでくれた尊い物理世界にお別れの挨拶をしましょう」

顔を持ち上げて、アーニヤはちよこんとウインクを飛ばした。

「世界よさようならってね？」

世界中に存在する全ての生きとし生けるものにお願いがあります。肉体を捨てて下さい。そしてCの世界で一つになりましょう。

そうして楽園を、永遠に続く楽園を！

聞き慣れた声が耳の中で反響する。

それはナナリーの声だった。

全世界中全ての存在がナナリーのお願ギアスいを耳にした。

その瞬間に、この星に生きる全ての生命の意識が肉体から剥ぎ取られた。

その中には無論ルーシユも含まれる。肉体感覚としての痛みは皆無だった。何しろ肉体を失ってしまっているのだから。

しかし放り出された白一色の背景に広がる、大量の生物たちがひしめきながら螺旋状にうねり、鳴き声を上げる光景は頭痛のあまりに悶える程の情報量があった。

真っ白い空間の中で遺伝子の螺旋を描くありとあらゆる生物の姿には押しつけがましいまでの生命力が鼓動のように鳴っている。

骨が折れる寸前まで体を振じって遺伝子の波に乗る人間。その上を這う蟻。それを追うように滑る魚。羽ばたく鳥に、鯨、鹿、その他にも目にしたことの無い生物達。

そして自分もその中の一つなのだ。ぐるぐると旋回しながら遺伝子を描く波に飲み込まれて、自分以外の生物との境界線が曖昧になる程に密着する。

このままドロドロに溶けてしまいそうな熱量が肌の上を滑り、そしてそれは近い内に現実になるだろうと頭の隅で確信した。

その渦はありとあらゆる生命の意識の塊なのだと言われるまでもなくすぐに理解できた。

自分の意識が誰かの意識と触れ合う度に、経験したことのない記憶がさも自分のことのように浮かび上がる。

この遺伝子の螺旋はどこまで続いているのか。波に乗りながら目を細めてその先を見る。目を瞬かせると景色は一瞬で様変わりした。

ルルーシユが乗っていた波は透明度の高い美しい海のものだった。また自分の四肢も人間のものではなくなっていた。四肢……四肢？四肢とは何のことだろう。

冷たい海底に沈む自分は、鱗を滑る海水をヒレで叩いて悠然と泳ぐ魚だった。

昼なのだろう。糸のように細い陽光が水面から落ちて、海藻や珊瑚を幻想的に照らしている。岩礁の隙間を悠々と気の向くままに泳いでいると目の前にふよふよと美味しそうな虫が漂っていることに気付く。

まるで上から紐で吊っているように揺れ動く動きを奇妙だと思いつながらもぱくりと喰いつくと、目が潰れる程に眩しい水面へと引きずり上げられた。釣り上げられた先では巨大な雲海がこちらを見上げていた。

琥珀色の翼を広げて雲海の狭間を飛ぶ。上にはミルクのような色をした雲が薄く広がっていた。真下には灰に水を混ぜて宙に浮かべたような厚い雲が沈んでいる。

2重の雲層の隙間を自分は飛んでいる。ぽつぽつと下から飛んできた雨粒が翼を撃つ感触に嫌な予感がして高度を下げた。

その途端、追いついてるように雷が鳴り、羽毛を逆立てながら急いで地面に降り立った。

なんとか大雨になる前に地面に辿り着くも、今度は腹が減ってきた。現金なものだ。

針金のように細長い四肢を使って地面を歩いて昆虫特有のきらきらした瞳で周囲を見回す。

あのゲゴゲゴと鳴く大食漢の姿は見えない。ほっと安堵の息をついていつもの通り青々とした美味しそうな葉っぱの下へと這い寄った。

そのまま葉っぱの傍に直立する。最初は糸のように細かった体は年月を経る程に太く、高く育ってゆく。百を超える年数が経過した頃には大きな熊が寄りかかってもびくともしない体になっていた。

しかしある日、苔生した胴体へヴンヴンと煩い機械を持つ生物が近寄ってきた。一目で自分の体を家にしている鳥や、木の実を食べる猿とは違う生き物だと分かった。その生物はもつと荒んだ瞳をしていたからだ。

自分の体はその生物が持つヴンヴンと唸る機械であつてなく斬り倒され、地面に横倒しにされてしまった。

何が目的か分からないが、その生物は自分の体をこれまた大きな機械に乗せて運んだ。数日後には賑やかな街へと到着した。

その街でとある黒人と出会った。優しく穏やかだけれどユーモアのある素敵な人で、恋に落ちるのに時間はそうかからなかった。

数年後に自分達は結婚した。そのまた数年後には浅黒い肌に淡い髪色をした子供を産んだ。

最後まで結婚に反対していた両親の死に目には会えなかったが、子供は可愛く、夫はいつまでも自分を大事にしてくれた。両親と仲直り出来なかった後悔を抱きながらも過ぎる日々はこれ以上無く幸せだった。

年月と共に子供は段々と成長し、自分は夫と幸せに老いた。ある日胸の辺りに痛みが走り、慌てた夫に病院に運ばれたが、治療の甲斐無くそのまま死んだ。

死体に取り纏る夫の涙が蒸発し、雲海の中の一かけらになり、そして雨粒になって落ちた。

その雨粒は自分だった。

魚類、貝類、爬虫類、両生類、鳥類、哺乳類、岩石、山脈、植物、川、海、雨雲、雨の一滴——

螺旋の果てはいくら目を凝らしても見えない。ただ無数の意識が螺旋を形成している。

その中には60億を数える人間と呼ばれていた種族も含まれてい

た。しかし今や種族の名前など何の意味も無いのだった。

あらゆる意識にもみくちやにされ、ルルーシユは自分が人類と呼ばれていた種族の一つであった記憶が急速に擦り切れて行くのを感じた。

意識という流動体は川が海に流れるように渦を巻き、思考エレベーターを通してCの世界と呼ばれる虚数世界へと流れ込む。

非物質的なCの世界へ入り込んだ意識は混乱を来す前に個々の形を失い、温かい水と冷たい水が混じり合って一つの着地点に到達するように均一な存在を目指して進行を始めた。

目に見える実態を持たない意識はCの世界でくると踊り回り、記憶や感情を混ぜ合わせようとステップを踏む。

孤独や戦争という病から永遠に解き放たれた怒りや悲しみ、喜び、そういった感情、そして全ての命を合わせた何百兆年分以上の記憶が混ぜ合わさって一つの存在へと収束を目指す。

取り残された物理世界に動くものは無い。

その日、世界は死んだ。

楽園のかなた

14. 母親似と言われることが多いんだがぜんっ
ぜん嬉しくない

あれからどのくらいの時間が立ったのだろうか。

すごく長い時間のような気もするが、一瞬だったような気もする。
よく覚えていない。

思い出せないということとはそう大したことでも無いのだろうか。

頭の端にひっかかる疑念を他所に置いて、ルルーシユは捕らえた虫
を上機嫌で咀嚼しながら地面を這いずり回っていた。深い草を掻き
分けながら他に獲物は居ないかと探りながら進む。

だが突然に奇妙な音楽が聞こえてルルーシユは触手を擡げた。

ドンドンという張りのある音と、木管楽器のハウハウという柔らか
な音が重なり合って鼓膜を揺らす。

単音では耳に優しいばかりの音だというのに、紡ぐ音楽は異常に神
経を逆立てた。何か神聖なものの舌が肌の上を這いずり回って血管
の中まで侵してくるような、不可思議かつ冒瀆的な触感はこれまで感
じたことのないものだった。

性行為などという生ぬるいものではない。身の毛もよだつような
悍ましさにぶるりと体を震わせる。

魚眼をぱちりと開いて周囲を見回す。怪しい者は周囲一帯には見
えない。ではと今度は髭をぴんと立てて音が作る空気の波元を探っ
た。

すぐにその音はどこか奥底から聞こえてくるものだど気付いて、翼
を翻してそちらに向かう。

悍ましい音楽ではあるが、不気味な旋律にはどこか人を引き寄せる
魅力があった。自分はその魅力に一瞬にして囚われてしまったのだ
と気付いた時には全てが遅かった。

「——シユ様、」

そちらに向かうと決めた瞬間に視界が一面真っ暗闇に変貌したのだ。

瞳は役に立たない。超音波を発して周囲を探ると周囲一帯はうねうねとスライムのような物質で出来ているようだった。色彩はオーロラのように刻一刻と色を変えて一瞬も同じ景色を作り出さない。ただその存在を近くに感じて、毛並みを逆立てて後ずさりする。ここに向かつてきたのは間違いだった。

そう後悔するも不思議なことに体が動かない。身じろぎさえ許されない。

ドンドン、ホウホウ。奇妙な踊りを踏む幾つもの足音に鳥肌が立つ。

ドンドン、ホウホウ。ドンドン。ホウホウ。

そこでようやくこれは太鼓とフルートの音だと気付いた。

近づいてくる。乱舞のような不規則な足音がじりじりと地面を擦っている。

「——ルーシユ様」

太鼓とフルートの音が近寄ってくる。逃れるために体を振るが、全身が石化したように動かない。

太鼓とフルートの音が近寄ってくる。

太鼓とフルートの音が近寄ってくる。

太鼓とフルートの音が近寄ってくる。

太鼓とフルートの、音が、

「ルルーシユ様、ルルーシユ様！お気を確かにお持ちください!!」
涙が混じるような声に頭を揺さぶられてルルーシユは覚醒した。

耳の近くで擦れて引き攣るような音が引つ切り無しに騒めて煩かった。暫くして、ようやくそれが自分の荒い呼吸の音だと気付いた。開いた眼は緊張のあまり溢れた涙で濁っていた。

涙を振るい落とすように何度も瞬きをしてあたりを見回す。そこは雲海の上でも海原の中でもなく、首に繋がっている自分の体は雨粒では無かった。

ジェレミアが自分の体を抱えている。引き攣る筋肉をほぐすように身じろぎさせると、ジェレミアはゆっくりと体を地面に横たえさせた。

地面は石畳のような造りをしていてひんやりと冷たく、硬い。

冷たい。そうだ、感覚がある。つまり肉体がある。

ルルーシユは自分の手足を眼で見た。指は片腕に5つ生えていて、腕は2本ある。足も同様。自分の肉体は人間の姿そのままであり、自分の思い通りに動いた。そのことがまるで奇跡のように感じた。

上を向くとジェレミアも普段と変わらない深緑色の髪と琥珀色の瞳をしていた。どう見ても人間の姿だ。中身は半分機械なんだがそんな細かい事はどうでもいい。些細なことだ。鳥だったり昆虫だったりした経験が肌を撫でる今は心からそう思える。

「じえれみあ、」

「お体は平気ですか?」

「へいき、平気だ」

頭をぶるりと震わせて立ち上がる。何カ月も寝たきりだったかのように体が重い。

両足で地面に立つと眩暈がした。ふらつく体を支えられて瞬きを繰り返す。

「あれは、何だ、何だったんだ。あの音は、あれは……あの冒流的なお

ぞましいものは、」

「？・皇宮の執務室に居た時からまだ10分程度しか経っておりませんよ。何が起こったかは不明ですが、ギアスが使われたことは確かだと思われれます。ここは——」

ぐるりと周囲を見回すジェレミアの仕草につられてルルーシユも眼を周囲に向けた。

そこは奇妙としか言いようがない世界だった。

ドームの内側のように天井が空を覆っている。天井と壁は鉄色の金属光沢のある均一な素材で覆われていた。

細やかな紋様が天井を覆い尽くしていて古代遺跡のように厳かな雰囲気がするものの、近代的な機械がそこかしこに散在していて奇妙な調和を見せている。

整然と並ぶ紋様と機器類は綻び一つ無い精緻な機械のような印象を与えた。しかし足元には粗雑な石畳が敷き詰められていて、どこかちぐはぐだ。

埃の一つも無い純度の高い空気は冷たいが肌寒さは感じない。

目の前にはコーネリアとギルフオード、そしてC・C・が立っていた。起き上がったルルーシユを見てC・C・は安堵の息を吐いた。

「起きたか」

「C・C・、ここは」

「Cの世界だ。非現実的世界。本来ならば死後の魂のみが辿り着くことを許される一瞬の黄昏。物理法則の一切が通用しない虚数世界だよ」

ルルーシユは目を細めて四方に視線を向けた。そう言われれば一度来たことがある、南極にあった黄昏の扉から侵入したCの世界と雰囲気似ている。

現実離れた雰囲気の間は印象通り現実ではなかったらしい。

Cの世界に足を踏み入れたことの無いコーネリアはどの文明にも属さない巨大な遺跡のような空間を前に目を白黒としていた。

「ここはどこなんだ。こんな場所聞いたことが無い。私達は皇宮にいたのに何故一瞬でこんな所に」

「虚数世界——ここはシャルルが引き籠った世界ですよ、姉上」
「その通り！」

ぼつ、とオレンジ色のドレスを纏った美女が目の前に突如として出現した。

アラバスクのポーズからくるくと回転して、ドレスの端を掴まんで花開くように広げる。美しいポーズを保つ女の容姿は美女という言葉以外に形容し難いものだった。

長い黒髪に碧眼。星を飾っているように鮮やかな目元。二児の母とは思えない艶やかな肌。そして毒を振りまく満面の笑み。

息が詰まった。言葉を失ったルルーシユの肩を支えるジェレミアが驚愕の面持ちでその存在へ声をかけた。

「マ、マリアンヌ様……？まさか、お亡くなりになった筈では、」
「そうよジェレミア！久しぶりねえ、元気にしてた？」

くふふふ、と笑うマリアンヌは6年前と全く変わらない容姿をしていた。

ありえないと思うも、この数か月でありえないことがあまりに多く起こり過ぎていた。

母が生きていたということだろうか。

いや、あの女なら。あの抜け目なく質の悪い女狐が易々と暗殺されるとはむしろ考え難い。

そもそも何故あの女がギアスに何の関りも無いと思っていたのだろうか。自分もナナリーもギアス嚮団の実験体だったのだから生みの親が関わっていない筈が無いだろうに。

つまりこの計画にマリアンヌは最初から関わっており、死んだと周囲に思わせた後もずっとこの計画のために動いていたのか。全身が憤怒のあまりざわざわと沸き立つ。

自分とナナリーは最初からモルモットであり、母が死亡したという偽装を伝える価値さえ見出されていなかったのか。

血を分けた母とはいえ悍ましい女だ。父といい、自分の血は呪われているに違いない。いつかジェレミアの子供を産むようなことがあればまともに育つのだろうかと今のうちから疑念が湧く。

「——まさか生きているとは思いませんでしたよ母さん。たとえあなたでも全身マシンガンで穴だらけにされれば死ぬと思っていたのですが、一体どこまで人間を辞めたのですか」

「久しぶりのお母様との対面に酷い言い草ね。ま、種明かしをするからね、私もギアスを持っていたのよ」

ほら、とマリアンヌは瞳を赤く染めた。瞳の中には赤い鳥が飛んでいた。

「私のギアスは意識を自分の体から抜け出させて、他人の体に仮住まいするギアス。V・V・にアリエス宮を襲撃されて死にかかった私は、あのアーニャっていう子供の体に住処を移したってわけ」

「ギアス……マリアンヌ皇妃、あなたもですか」

コーネリアはぎりりと歯を食いしばった。どいつもこいつも、ふざけている。

怒りを抱いているのはルルーシュも同様だった。笑みを浮かべるマリアンヌを前にして腹の中に沸き上がる怒りを吐き散らかさないよう血流が逆巻く程の努力をしなければならなかった。

マリアンヌがアーニャの体の中にいたのならば、シャルルに進言して自分達が日本に捨てられることを阻止することも出来ただろう。そうでなくともナナリーに声をかけることぐらいは出来た。

幼くして兄妹二人で放り出されたナナリーが母が生きているという事実を知っていれば、どれだけ心の支えになっただろうか。

母の本性に大方気づいていた自分は良い。だが無邪気に母を慕っていたナナリーなんて仕打ちをするのだ。

「KMFに乗せられてE・U・まで連行された時から人非人だと唾棄していましたが、とうとう本当に人間を辞めましたか。寄生虫のように幼女に取り縋ってまで生きようとすると見上げた人格者だ」

「あら、人間は生きるために必死で努力するものよ？ 私は最大限の努力をしただけ。非難される謂れは無いし、あつたとしても口先だけじゃ私は痛くもなんともないわよ？」

「……貴様のような女からナナリーが生まれたことが何よりの驚きだよ」

にっこりと笑うマリアンヌの顔面に唾を擦り付けてやりたい誘惑に駆られたが、それよりも現状把握の方が先だった。

マリアンヌの背後には人の手足や顔面、動物の内臓、木の幹、昆虫の触角、そういったものが混ぜ合わさって構築されている巨大な螺旋が奈落の底から天にまで続いていた。石畳は螺旋の手前ですっぱりと切れて巨大な穴がその先に続いている。穴の底は見えない。ドームの天井は螺旋が繋がる付近には黒い穴が空いており、螺旋に纏わりつくように星が輝いていた。

うねりながら昇る螺旋は天才彫刻家が命をかけて彫り上げたように生々しい質感があり、非現実的な構造をしているのに圧倒的な生命力を感じさせる美しいものだった。しかしそれは作り物ではなく、寸断なく呻き声を上げながらゆっくりと混ぜ合わさってゆく。螺旋は重力を嘲笑うように少しずつ上に流れてより高い場所を目指していた。

だがその先に何かあるのかはあれも分かっていないだろう。

よく分かる。ついさつきまで自分もあの一部だったのだから。

「それは……意識か。この世界全ての——」

「ご名答。そうよ、これは集合無意識。我々自身であり、我々の神でもあるものよ」

すごいでしょ、見てみて、と言わんばかりにマリアンヌは目を煌めかせた。

目を細めて渦巻く集合無意識を見上げる。集合無意識は自身に視線を向ける矮小な一つの生物の存在など気にすることも無く、ただただ上だけを目指して上って行く。

10分程度だろうがあの中の一つとして存在していると思うことは一つだった。

あれは存在してはいけない。

自分という存在が摩擦して溶けて行く感覚は気味の悪い快感だった。何も考えなくて良い、何もしなくて良い、ただ海に揺蕩うように流される感触がまだ皮膚に残っている。

あのままずっと永遠に存在していられたらという欲望がまだこび

りついていることに気付いてぞくりと背筋を強張らせた。

「あれがラグナレクの接続とやらの産物か」

「ええ。ナナリーのギアスによるものよ」

マリアンヌは眩しいものでも見るように目をうつそりと細めて集合無意識を見上げた。どこぞの高貴な令嬢が芸術品を愛でているような顔だった。

「ナナリーのギアスは計り知れないほどに強力なものだったわ。あなたと同じ絶対順守のギアス、それも範囲型のね。ナナリーのギアスの範囲は地球一つを覆い尽くす程に広大だった。そしてナナリーは世界に対してギアスをかけたの」

「……なんて、」

「体を捨て去り、意識だけとなってCの世界へ向かえ、と」

低い声色に顔を向けると巖のように厳めしい顔つきをした男が姿を現した。シャルルだ。ゆったりとした足つきで歩くシャルルその後ろにはビスマルクが続いていた。

シャルルはマリアンヌと並んで実の娘2人を柔らかい視線で見やった。

10年前ならば身分の低い母と父が寄り添っている光景に何かしらの感慨でも抱いたかもしれない。だが今は米神に血管が浮かぶ。

もうこの夫婦に対してルルーシユは何の情も感じなかった。隣に立つコーネリアも同じだったようで、剣を鞘から抜きはらう硬質な音が聞こえた。

「父上は、マリアンヌ皇妃は、いや、貴様らはこんなことのためにユフィを犠牲にしたのか……あの集合無意識とやらを作るためにユフィを犠牲にして、私達も使って、そんなことのために、」

「そんなことじゃないわ。世界を楽園にする唯一の方法よ」

「楽園だと？」

「ええ。楽園よ。ジエレミアのギアスキャンセラーに引っ張られてCの世界へ抜け出すまで、あなたたちも感じたはずよ。差別のない絶対的に平和な楽園を——」

「あれが楽園だと？ふざけるな!!他の生物に意識をぐちゃぐちゃにさ

れて自分を見失うだけじゃないか！死とどんな違いがあると言うんだ！」

「違うわ、生き続けるのよ。あの中の一つになって。そう、ナナリーもあの中にいるわ。ユファイだって。貴方達以外の全ての生命体が争うことなくあそこで共存しているの。これが楽園でなくて何だというの？」

マリアンヌの言葉に息が詰まる。

あの存在の中には確かに楽園と呼ばれるに相応しい泥濘のような安寧があることを、コーネリアもルルーシユも、そしてギルフオードも寒気がするほどに理解していた。

理解できなかったのはナナリーのギアスが発動するのと同様にギアスキャンセラーが働き、一瞬たりとも集合無意識に取り込まれなかったジェレミアと、ギアスの効かないC・C。だけだった。集合無意識を直接に感じた3人は苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

集合無意識の中で胎児のように安堵という羊水を揺蕩う感覚は、確かに強制的に幸せを齎すものだった。

残る感覚を振り払うようにルルーシユは懐から拳銃を取り出す。隣でジェレミアも体に仕込まれた刃物を引き出した。ギルフオードはコーネリアを護る様に立ちはだかり拳銃を取り出す。

「ナナリーのギアスで意識が肉体から離れたというのならギアスキャンセラーを使えば済むことだ。さっさとそこをどいてもらうぞ。貴様らの戯言に付き合っていないか、我々は現実世界に帰る！」

「言われなくてもギアスキャンセラーは使ってもらわよ？このままじゃあずつと私達はCの世界に籠りつきりになっちゃうもの。ずーつとこの殺風景な世界にいるつもりは毛頭ないわあ」

マリアンヌは宙から剣を取り出して切っ先をルルーシユへ向けた。ビスマルクは目線でシャルルに許可を伺う。シャルルが深く頷くとマリアンヌの隣に立って剣を抜いた。

「肉体は食事と水が無ければ死んで腐ってしまう。だから生きとし生ける全ての者に、集合無意識の状態のままであと二カ月間位過ごして貰うの。二カ月もすればもう意識は完全に一つの塊になって元の姿

には戻れなくなる。それからギアスキャンセラーを使ってナナリーのギアスをキャンセルして、私達は元の世界に帰るのよ。意識を宿せる肉体が一つ残らず死んでしまった世界にね」

夢見るように呟く言葉は冗談を言っているようではなかった。

意識が無くとも肉体は生きる。眠っている間、気絶している間も肉体は健気に生命活動を続けている。

だがそう長くは続かない。肉体とは意識の入れ物なのだ。意識が無くては必ず滅びる。

かんらんかんらんと鐘が鳴るような笑い声上がる。

「肉体を無くした意識はどうなるのかしらね。死んじゃうのかしら？それとも全く新しい存在になるのかしら？」

「っ、はあー」

コーネリアがマリアンヌに切りかかった。常人であれば胴を2つに分かたれるだろう重い一撃をマリアンヌは優美な仕草で受け止めてそのまま押し返した。

力負けしたコーネリアが背後に後ずさり、体勢が崩れる。マリアンヌが上段に構えた剣の切っ先がコーネリアに向かう。

「皇女様ー」

ギルフオードが銃口をマリアンヌに向けた。だが引き金を引く前にビスマルクがギルフオードへ切りかかる。

ルルーシュは銃口をマリアンヌへ向けて即座に撃った。あらあらと呟きながらマリアンヌは銃弾を雨粒の様に剣で弾く。

ギルフオードへ襲い掛かったビスマルクの剣はジェレミアが咄嗟に受け止めた。

機械駆動の腕力でビスマルクの剛腕を振り払うと、力負けした事実に見開いたビスマルクはそのまま数歩下がる。

バランスを崩したビスマルクにコーネリアが切りかかる。

しかしビスマルクの首を切り落とすよりマリアンヌの剣の方が速かった。コーネリアの顔に血液が巻き散った。

「……ギルフオード？」

マリアンヌの剣にはコーネリアを庇ったギルフオードが突き刺

さっていた。

胸元を貫いた剣先は人形を引き裂くように上へと滑り、胸の中心から肩までに大きな裂け目を作った。ぐらりと倒れるギルフォードをコーネリアは受け止める。

「ギルフォード、ギルフォード!!」

「肉体を必要としない、数十億の意識が溶け合ったものが現実世界に戻ったら何を望むのかしら。肉体を欲しがるとかしら?それともう人間らしい欲求なんて何も持たない、何もかもを超越したものになるのかしら、ちよつと前のシュナイゼルみたいに——いいえ、神様みたいに」

血を吐きながら地べたに横たわるギルフォードの頬を摩る。

大量の出血はどう見ても致命傷であり、治療する手立ても無い。この世界には医者も医療機関も存在しない。

表情を失ったコーネリアはがたがたと震える体でギルフォードを抱きしめた。

マリアンヌは唇に微笑を浮かべて剣をぶらぶらと片手で持ちながら、息を止めたギルフォードに縋りつくコーネリアを見下ろす。

「こんなのを見ると、シュナイゼルは失敗作じゃなかったのかもしれないって思っちゃうわね。手術の副作用で感情が無くなったのかと思っただけけど、あれこそが完成した集合無意識の——神様の試作品だったのかもしれないわ。完璧な頭脳、完璧な容姿、私欲を持たず人類のために全力を尽くす完璧なる客観性の持ち主——あなたが余計なギアスをかけなければ今頃はシュナイゼルが世界を平和にしていたかもしれないわねえ」

「兄上は……っ、兄上は、感情がある人間だ!!ふざけた神なんかじゃない!!兄上を馬鹿にするな!!」

騎士に取り縋るコーネリアを馬鹿にするような口調へ怒気を露わにしながらもルルーシユの背筋は恐怖で冷えた。

この女は化け物だ。生きてはいけけないものだ。

ナナリーに縋りついて許しを乞うたシャルルなんて比ではない。この女こそが全ての災厄の源だったのだ。

顔を引き攣らせて銃口を向けるルルーシュに、マリアンヌは血に濡れた剣をステッキのように振り回しながら満足げに微笑む。

「そうよ。あなたはそれでいいの。あなたもすぐに集合無意識の一部になって、神になるのだから。神を馬鹿にする神様。集合無意識にアンビバレンツな要素を残す貴重な意識になるのかしらね」

「っ、ジェレミア！」

「はい！」

ルルーシュの声に応じてジェレミアがギアスキャンセラーを発動する。

左目を中心に青い光が満ちた。光は集合無意識に向かって注がれる。青い光に照らされて集合無意識に埋め込まれた顔は眩しそうに目を細めた。

しかしそれだけだった。

光が止んでも目の前の集合無意識は変わらずその場にあり続ける。変わらないうねりながらただひたすらに上空を目指していた。

キャンセラーを閉ざしたジェレミアはその場に膝をついて倒れた。息が荒く、頭を抱えて吐きそうな程に顔を真っ青にしている。残った一つの瞳孔はぼかりと開いていた。

尋常ではない様子に銃口をマリアンヌに向けたままルルーシュはジェレミアの傍へとにじり寄る。

キャンセラーが集合無意識に何の作用も齎していないのは見れば分かる。そもそも残ったギアス嚮団の資料から見ると、ナナリーと違ってジェレミアはキャンセラーへの適性が高かったわけではないようだった。機械化して無理やりに発動させているようなものだ。

だからナナリーのギアスがキャンセルできなかつたのなら分かる。だがジェレミアの様子は、ただ効果が無かつたという範疇を超えているようだった。

「どうした、何が起こった」

「……キャンセラーが正常に作動しません。容量がオーバーしているのかと思われます」

脳内で反響するぐわんぐわんという呻き声に耐えながらジェレミ

アは体を丸めた。

キャンセラーを使おうとした瞬間に脳内に大量の音が響き渡ったのだ。無数の鳴き声が入り混じった声はルルーシユが集合無意識の中で聞いたものと同じ無意識達の絶叫だった。

強靱な部類に入る精神力があるとは言え人間としての範囲は超えていないジェレミアに耐えられるものではない。

全世界の生命合わせて兆か、京か、それとも垓か。それよりさらに多いのか。その全てにギアスをかけたナナリーの能力は計り知れない。ジェレミアのギアスキャンセラーはナナリーのギアスとは比較にならない程に劣っており、近寄るだけで踏み潰されかねない脆弱なものだった。

C・C・がルルーシユとジェレミアの前に盾になるように立つ。細い背中には忌避感が刻まれていた。C・C・は忌々し気な顔で集合無意識を見上げた。

「ナナリーのギアスが強力過ぎるのか、膨大な数の意識にキャンセラーの許容量が追い付かなかったのか、もしくはあいつらの小細工だろう」

「強いて言うなら全部かしらね？C・C・、あなたが協力してくれないって言うから調整が色々と面倒だったわよ。シャルルのコード1つでなんとかしなくちゃならなくなっただから」

本当は2つ必要だったのに、とマリアンヌが悪戯な仕草で肩を竦める。

「でも私達の小細工が無くて、そもそも集合無意識にギアスキャンセラーをかけるなんて無理な話なのよ。だってあれは神様なんだから」

「神に王の力は通じない。増してやキャンセラーはコードの紛い物。偽の力が通じる訳も無い」

哀れみの籠ったシャルルの視線を睨み返す。

ジェレミアを抱えながらルルーシユは銃口をマリアンヌに向けた。

しかしこの女に銃弾など通じないことはもう分かっている。ビスマルクも同様だろう。シャルルに至ってはコードを持っているため

に何の意味も無い。

どうする、どうすれば良い。

ぐるぐると思考を巡らせながら目の前の集合無意識を見やる。

ナナリーのギアスを打ち破るにはどうすればいいのか。

シャルルとマリアンヌの言を信じるのなら、あと2か月のうちに集合無意識は完全に一つの塊になってしまいうらしい。あの言葉がブラフとは思えない。

たった10分程度で自己が摩耗しそうになった感覚がまだ骨身に残っている。あの状態が数か月も続く事を想像すると身震いがした。

むしろ2か月も持たないだろう。精々が一日かそこらだ。

その内にナナリーのギアスを解いて集合無意識を現実の世界に戻さなければならぬ。

あまり時間をかけてしまうと、たとえ肉体が生きている内に現実世界に帰れたとしても一塊になった集合無意識がまたバラバラになって元の自分の肉体に戻ることができぬのか分からない。

不確定要素が多すぎる。さらに負けは許されない。自然と息が荒くなる。

背後に庇ったジェレミアが息を整える音が聞こえた。

「ジェレミア、大丈夫か？」

「問題ありません。次こそは必ず」

唇を噛みしめたジェレミアは単なる強がりだと一目でわかる顔をしていた。こんな顔は12年に渡る長い付き合いだが初めて見た。

顔面はぞつとすると程に蒼白で、左目が痛むのか顔を始終顰めている。足はがくがくと震えて死にかけの病人より酷い有様をしている。

ギアスは他者の脳に影響を及ぼす能力がある。ギアスキャンセラーはギアスを取り消すために脳へ作用する。

ギアスキャンセラーが取り付けられたジェレミアの左目はその能力を発揮するために大脳に直接繋がっていた。オーバーヒートしたギアスキャンセラーは脳に繋がる神経をショートさせてばちばちと音を立てて発熱していたのだった。

脳が溶け落ちて流れ出しそうな痛みが頭蓋内で持続的に暴れてお

り、ジエレミアは引き攣る硬膜の痛みを吐き出そうと荒く息を吐きだした。

「動くなよオレンジ君。それ以上無理をすると脳が焼けて死ぬぞ」

「はあ!？」

「そうよ、あなたには全人類が死んでからキャンセラーを使つてもらわないと困るんだから。ここで無茶して死なれたら後が面倒よ」

「っ、もうキャンセラーを使うな!あとは俺がなんとかするから、」

腕に爪を立てるルルーシユを見下ろしてジエレミアは無言のまま首を振った。

ギアスが無かったことにできる能力は今の所キャンセラーしか無い。集合無意識にかけられたナナリーのギアスを消去することができるのは自分だけだ。視線をマリアンヌに向ける。

ずっと前にあの美しい皇妃を好きだったことがあった。多分初恋だった。

しかしその時の淡い感情を呼び起こすようなものはあの時と何も変わらない美貌には何も認められなかった。

「あなた方に命じられて私が素直にキャンセラーを使うとお思いなのでしょうか」

「ギアスが暴走するようにギアスキャンセラーだつて暴走するのよ?ましてやそれをあなたに取り付けたのは私達。暴走すれば脳みそぶっ飛ぶまでキャンセラーが使えるようにちゃんと取り付けてあるから安心なさい」

「貴様、ぶち殺す。絶対殺す」

ユフィの死体が脳裏に蘇る。ルルーシユは唾を吐いて母親を睨んだ。

次にジエレミアを見ると柔らかなくにこりと笑った。その笑みは命令されれば今すぐにでも脳みそぶっ飛ぶまで全力を尽くすだろう忠義に満ちていた。

ぞつとして視線を逃すと視界の端にギルフオードの死体に取り纏るコーネリアの哀れな姿が映る。押し殺された泣き声が鼓膜に突き刺さる。

可哀想だと思うが言葉をかける余裕は無い。自分のことしか考えることができない。極限の状態において人は本当に大事なことで以外に情動を傾ける余裕を失う。

ただ長い間連れ添った騎士を失ったコーネリアが周囲の全てを遮断して涙を流す姿にルルーシユは恐怖を感じた。

嫌だ。

嫌だ、ああはなりたくない。

「ルルーシユ様」

「ギアスキャンセラー以外にも手段はある筈だ。それに成功率はそう高くも無い。そんな無茶な手段を取って失敗したらどうする」

「ルルーシユ様」

「許可できない。お前は休んでいろ……いや、C・C・に案内させれば現実世界へ帰ることも可能だろう。お前だけでも戻れ。お前がこの場から去ればあいつらの計画も崩れるだろう。こちらは何とかする。お前はC・C・と退避している」

「ここに貴方一人で残って何ができると言うんですか。冷静になって下さい」

「これは命令だジェレミア」

皇帝服の裾を握り締めて集合無意識を睨むルルーシユの言葉には具体性も何も無かった。今のルルーシユは皇帝でもゼロでもなく、ただ目の前の問題から目を逸らしているだけの少女でしかなかった。

もしギアスキャンセラーを持っているのが自分でなければ、今や全生物の代表としてここに立つ者としてルルーシユは別の命令を下しただろう。そうと分かる以上ジェレミアは人形のように是と答える訳にはいかなかった。

シャルルの隣に立つビスマルクを見やる。ビスマルクは主君の傍であるからか碌に口を開くことも無く、集合無意識に意識を向けることも無く、ただ剣を抜いてシャルルの身を護ることばかりに注力していた。

たとえ死んでもああは成りたくないものだ。

ジェレミアは奥歯に力を入れて手を振り上げた。白く緩やかな曲

線を描く頬に向けて容赦なく振り下ろす。パアンという音が響く。白い頬が一瞬で痛々しいまでに赤く染まった。

ルルーシユは衝撃の走った頬を指でなぞりながらゆるゆるとジェレミアを見上げた。何の後悔も無い毅然とした顔があった。その表情には怒りさえ混じっていた。

初めてジェレミアに殴られた。

あのジェレミアに。

唇を動かすのを止めたルルーシユをジェレミアは見降ろす。ジェレミアは上司に進言する軍人の顔をしていた。しかしそれは同時に家族の顔でもあった。

「戦うと決めたのでしよう。生きるためには戦う必要があると確かに仰ったでしょう。ならば最善の選択をなさって下さい。逃げるのも目を背けるのでもなく、最も正しいと思う決断をなさるのです。それがルルーシユ様にとって戦うということなのではないですか？」

熱した鉄を叩くような口調だった。

そんなつもりで戦うと決めた訳じゃないと言いたかった。しかしそれを言わせてくれるような甘さをジェレミアは振り捨てていた。

確かにナナリーに向けて、戦うことのない人生などありえないと言った。しかしこんなことは想定していなかった。

どうして自分じゃないんだ。

いや、だめだ。そんなことを今考えている暇など無い。

戦うんだ。戦うのならば最善の答えを。

脳のひんやりとした部分が動き始める。頬の痛みに熱がとられて発熱していた脳が急速に冷たさを取り戻していた。

キャンセラーがナナリーのギアスが無効化すれば全てが解決する。

だがジェレミアが失敗し、更に死亡してしまった場合、キャンセラーを無くした集合無意識は二度と現実世界に帰ることなくCの世界を永遠に彷徨うことになる。そして自分もコーネリアも集合無意識に取り込まれることになるだろう。リスクは高い。

他に手は無いのか。

マリアンヌとシャルル、ビスマルクに目を向ける。

彼らは集合無意識に取り込まれていない。全生命が一つとなることが楽園だと言うのなら、彼ら自身が楽園に飲み込まれなければ意味は無い筈だ。

C・C、あなたが協力してくれないって言うから調整が色々面倒だったわよ。シャルルのコード1つでなんとかしなくちゃならなくなっただから――

「コードが無いと集合無意識を保てないのか？」

マリアンヌはぴくりと眉を揺らした。シャルルは僅かに目を細める。それで答えは十分だった。

どうしてナナリーがCの世界に囚われてから集合無意識を作り出すまで3カ月も必要だったのか。

ナナリーに幾度もギアスを使わせて強化するための時間かと思っただ。しかしそれだけでは無かったらしい。

集合無意識を固定化するためにはコードが必要なのだ。それも元々の計画では2つのコードが必要だったのだろう。C・Cがラグナレクの接続への協力を断ったことでコードを1つしか使えなくなり、その調整に時間が必要だったのではないだろうか。

痛む頬を拭ってシャルルを睨む。

「ジェレミア、シャルルのコードを奪うぞ。試してみる価値はある。少なくともお前のギアスキャンセラーに賭けるよりは勝算は高い」「しかし、」

「コードを奪った後の問題はその時に考える。不老不死になるよりあれにまた取り込まれる方が俺は嫌だ」

「……イエス、ユアマジエステイ」

ジェレミアは剣の切っ先をビスマルクに向ける。

シャルルのコードをルルーシユが奪うということは、ルルーシユが忌むべき不老不死者になるということに繋がる。C・Cは何か言おうとして一度口を開き、しかし何も言わずに首を振って閉じた。

黙ってルルーシユの盾となるべく立つ。ルルーシユは銃口をマリアンヌに向けた。

しかしマリアンヌに抗するだけの白兵戦能力はC・Cにもル

ルーシユにも無い。さらに肉体を持たず物理的な脳が存在しないマリアンヌに、脳に作用することで効果を発揮するギアスが効くのか不明だ。

背後でギルフオードの遺骸にしがみついて目を腫らすコーネリアにちらりと目を向ける。

「コーネリア姉上」

「……………ギル、」

「コーネリア、立て」

ルーシユは声を張り上げた。軍楽隊のラツパのように高らかな声だった。

「死体に取り縋り無力な女のようにいじましく目を腫らして満足か。V・V・を殺してユファイの復讐を果たしたお前の気概はどこに行った。騎士の復讐を成すのは主君の役目ではないのか。それとも惚れた男が死んだ瞬間にただの女に成り下がったか。ギルフオードをその程度の女に仕えた馬鹿な男にさせるつもりか。それが嫌ならさつさと立て、立ち上がれ、そして戦え！」

歯噛みする鈍い音が聞こえるようだった。

安い挑発にコーネリアが苛立っているのが手に取るように分かる。

しかしコーネリアは安い挑発だと知っていてもそれに乗らないという選択肢を持たない。なにしろプライドが桁外れに高い女だ。

さらに彼女は自分の騎士を目の前で殺されて、おいおいと悲嘆にくれるだけの淑やかな女ではないことをルーシユは理解していた。

そんな女とナリタ連山で戦った記憶は無い。

背後でコーネリアが幽鬼のようにゆらゆらと立ち上がるのが視界の端に見えた。

マリアンヌがにやにやと目の前で笑っている。片手で剣をくるくると弄んでいるが既にあれは臨戦態勢だ。

母親だからマリアンヌは自分を殺さないだろうという甘い夢は見えない。

じりじりと後ずさりしながらコーネリアの方向へと逃げる。

「私はジェレミアの復讐に一年かかった。お前もユファイの復讐に数か

月の時間を要した。だが今は目の前に仇がいる。幸運だとは思わな
いか？」

「何が、何が幸運だ!!」

コーネリアは吼えながら剣の切っ先をコーネリアに向けた。

「こんなことが幸運であつてたまるものか、何が幸運だ、何がっ」

ぶるぶると震える剣を構えるコーネリアに計算通りだと内心で笑
みを漏らす。

コーネリアの内心は怒りと悲憤で荒れ狂っていることだろう。

そして彼女は激情の全てをギルフオードの復讐相手であるマリア
ンヌにぶつける。その結果たとえコーネリアが負けたとしても、彼女
の実力ならば暫くは自分とC・Cの盾にはなるだろう。

その隙にシャルルの所に向かいコードを奪う。

しかし彼女はマリアンヌの前に突き出す盾としてはあまりに薄過
ぎた。マリアンヌがコーネリアを無視して執拗にルルーシュを狙え
ば彼女の剣は容易にルルーシュに突き刺さるだろう。額から汗が零
れた。

顔の造り自体はマリアンヌに似ていながらも、白い皇帝服を翻して
マリアンヌとシャルルを交互に睨みつけるルルーシュの顔はマリア
ンヌとは全く違つていた。もつと生き汚く必死の形相をしていた。

その生気に満ちた表情が、コードを手に入れて数百年もすれば虚ろ
で中身の無い人形のようなものになることを確信しているからこ
そC・Cは最後の確認をせずにはいられなかった。

「それがお前の決断でいいんだな。あの集合無意識に取り込まれてあ
いつらの言う樂園に向かうのではなく、コードを手に入れて現実に帰
ると、それで本当にいいんだな？」

「そうだC・C。俺はシャルルからコードを奪う」

ルルーシュの答えは毅然として変わらなかつた。

不老不死の苦しみを知らない子供の決断をC・Cは嗤うことも
無く黙つて頷いた。

「……分かつた」

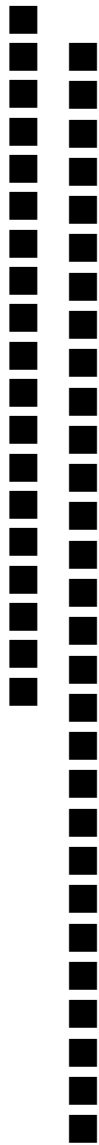
幾つもの言いたいことを飲み込んでC・Cはマリアンヌを睨む。

マリアンヌの優雅で、ただ美しいだけの顔を。

生きるということ。生き延びるということ。そのために戦うということ。

C・Cは忘れていたそれらの全てを背後の子供の表情に見た。

14. 5 楽園のかたち



気づいた時、皇宮では無い場所にスザクは立っていた。

その場所は皇宮の豪奢が故の居心地の悪さとは無縁の空間だった。広さはずつと狭いものの、胸奥を解す温かみに満ちた光景が目の前に広がっている。

「……」

周囲をきよろきよろと見回す。見慣れたと言うには恥ずかしい程の短期間しか居られなかった優しい空間にいるようだった。まさかと思うも、見間違える筈が無い。

スザクが立っていたのはアツシユフオード学園の生徒会室だった。

四方には記憶のままの光景が広がっている。クリーム色の壁。部活動誘のチラシで埋め尽くされた掲示板。高等学校にしては洒落た窓飾り。長細い机を4つ固めてその周りに配置してある椅子。

机の上には紙束や段ボールが山のように積み重なっていた。床には色とりどりの風船が放り投げられて自由気ままに跳ねている。

部屋のだ真ん中に陣取っているホワイトボードには「文化祭までデッドライン近し!」と妙に達筆な字で書かれていた。これはルルーシユの字だ。隅にはリヴェアルの癖のある字がうねっている。「各部落への連絡終了、各委員会からの報告終了、あとは搬入待ち(; ;)」

「……」

何だこれは。状況が把握できない。

皇宮で仕事をしてきた筈なのにと焦りを浮かべながら周囲を見回していると、自分自身にも奇妙な変化が起こっていることに気付いた。ナイトオブ라운ズとして仕事中は必ず重苦しく奢侈な騎士服を纏うこととなっている。だが今体を覆っているのは金色で縁取られた学生服だった。

更なる困惑がスザクを襲った。着替えた覚えなんて無い。そもそも自分は既にアッシュフォード学園を退学している。ここにはもう自分の居場所は無い。なのにどうして。

頭を抱えるスザクに背後からボールが弾むような声が響く。ブリタニアの頂点にある皇宮には相応しくない呑気で間延びした声だった。

「何やってんだよスザク、ちゃっちゃと準備しねえとミレイ名誉会長の雷が落ちるぜ〜」

「ほんと会长ってばちよくちよく来るよね。アナウンサーになってから忙しい筈なのに」

リヴァルは抱えた書類をよいしょと言いながら机に載せる。その隣にシャーリーが備品室から取ってきたのだろう絵の具やらキャンパスやらを重ねて置いた。平然とした様子の2人をスザクは茫然と見やった。

「リヴァル、シャーリー……」

「おう、持って来たぜ設計図。やーっぱニーナはすげえよなあ、案を出したらばばっと設計図作っちゃうんだから」

「今回の機材はニーナがいないと実現は無理だったもんね。あ、スザク君荷物搬入のトラック遅れるって。暫くゆっくりしておいて大丈夫だと思うよ」

「え、何、」

「何って、学園祭の準備よ」

さも当然のように告げたシャーリーにスザクは後ずさった。

学園祭。

そんなの、聞いていない。

ある訳が無い。

後ずさったスザクの肩に何かがぶつかつた。振り返ると呆れ顔のルルーシュが書類を持って立っていた。

ルルーシュもあの重苦しい純白の皇帝服を着ておらず、いつもの学生服を着ている。さも当然のように。

「ル、ルルーシュ、」

「何やってんだスザク。荷物の搬入は終わったのか？もう到着している筈だろう」

「ルル、まだ荷物届いてないよ。渋滞でトラックが遅れちゃってるんだって」

「そうか。じゃあスザクはリヴァルを手伝ってくれ。飾り付けをそろそろ始めないといけないからな。お前なら壁を走って校舎の外壁を飾り付けるぐらいできるだろ」

「あんたスザクを何だと思ってるのよ……」

溜息を吐きながらカレンが扉から3つ重なった段ボールを抱えて入ってくる。そのまま床にドンと段ボールを置いて手の埃を払った。

ここ数か月身に纏っている重厚な赤い騎士服を着ていない。シャリーと同じ制服だ。ナイトオブワンになってからさらに苛烈さを増した表情は影も見えず、年頃の学生らしく呑気で柔らかい表情を浮かべていた。

「カレンちゃんあの備品全部運んでくれたの？」

「あのくらいなら楽勝よ。早く済ませないと次が進まないしね」

「よし。じゃあカレンとシャリーは、」

「ちよ、ちよつと待ってルルーシュ。どういうことなんだ。君は皇帝だろう。学校なんて来れる筈が無い。僕だって、カレンだってもう学校になんて来れないに決まってるじゃないか。シャリーだって学校を辞めて皇宮に就職したのに、学園祭なんて、」

困惑を顔面に浮かべているスザクにルルーシュは首を傾げた。

「……寝ぼけてるのかスザク？俺は皇帝なんかじゃないぞ。それに皆学生なんだから学校に来るのは当たり前だろう」

「は、え？どうして、君はナナリーを助けるために皇帝になったんじや

ないか。そして僕とカレンを騎士にして、戦って、反乱する貴族を皆殺しにして、」

「ナナちゃんなら後でユーフェミア殿下を連れて来るって言ってたわよ?」

きよんとしたシャーリーの言葉を飲み込もうとして喉が詰まった。

何と言っているのか言葉を失った。

心配そうにこちらの顔を見ている生徒会メンバーの顔をぐるりと見回す。性質の悪すぎる冗談を言っているような顔ではない。

そして彼らの顔はあまりにリアルでこれが夢だとはとても思えなかった。

動き方を忘れた喉を叩き起こしてなんとかぽつぽつと言葉を吐き出す。

「ユフィが、来るの?」

「うん。一回生徒会を見学したいって言ってたからナナリーが案内して来てくれるんだって」

「ユーフェミア殿下生徒会に興味あるのかな。もしかして入っちゃう感じ?」

「仕事が忙しいから難しいんじゃない?入ってくれたら嬉しいけど」

「ユフィが、ユフィが来るの?生きているの?」

手足をぶるぶると震わせるスザクにルルーシュは怪訝な目を向けた。

何を当然の事を言っているのかと言わんばかりの顔だった。

「寝ぼけているのか?この前アッシュフォード学園に転入して来ただろう。大騒ぎだったじゃないか」

「民衆のことをもつとよく知るためーってごり押ししたんだっけ。すつごい騒ぎだったわよね。テレビもすつごい沢山来ちゃって大変だったじゃない」

「コーネリアが保護者面で一緒に来たせいで余計に騒ぎが大きくなったんだよ。当初の予定ではもつと穏やかに済む筈だったのに、本当に姉上はユフィに過保護で困る」

「コーネリア皇女殿下もルルーシユにだけは言われたくないと思うわよ」

「スザクが入学した時も枢木元首相がやってきて騒ぎになったもんなあ。そういえば結構年なのにスザクのお父さんって元気だよな。やっぱ日本人ってブリタニア人よりも老化が遅いのかな」

「人種の違いというより個人差じゃないか？シユナイゼル兄さんは割と若く見えるけどジエレミアは年齢の割に老けて見えるだろ」

「……………それジエレミアさんの前では言わないであげてね。ただでさえルルと年齢差があるっていうのに」

「割と気にしてるみたいだしなあの人」

「あはははは、と笑う生徒会を前にして、スザクは視界が潤むのを感じた。

掌に爪を立てたら痛みを感じる。

これは夢じゃない。肉体の感覚は至極リアルだ。

夢だったのはあっちの方だったんだ。

フレイヤを撃ってしまったことも。そのせいで沢山の人々が死んだことも。そのせいでナナリーがいなくなってしまったことも。

ゼロだったルルーシユと殺し合いをしたことも。

ルルーシユとジエレミアが父さんを殺したことも。

これまで沢山の、本当に沢山の人を殺してしまったことも。

ユファイが死んだことも。

全部、悪い夢。

「ほわっ、スザクどうした!？」

突然ぼたぼたと涙を零し始めたスザクにルルーシユは慌ててハンカチを取り出した。

何でもないと言おうとしたが歯の隙間から空気がこぼれ出るばかりで言葉にならなかつた。代わりに何度もしゃくりあげる。

「スザク君どうしたの？目にゴミでも入った？」

「う、うん。目に、痛くて。ゴミが、」

「あーもう、ほらスザクこれで拭え」

ルルーシユが乱暴な手つきでスザクの目元を拭う。容赦の無い手つきがごしごしと擦ったせいで目元は真っ赤に染まった。

「ちよつとルル、もつと優しくしてあげなさいよ！」

「撫でるぐらいじゃゴミは取れんだろう。ほらどうだスザク。ゴミは取れたか」

「あ、あはは、うん取れたよ。ありがとうルルーシユ」

スザクの返事にルルーシユは満足した様子でハンカチを仕舞った。

「別にいい。そういえば今日ミレイ会長が様子を見に来るとさつきLINEで連絡があつたぞ。差し入れを持って来ると」

「え？でも今晚のライブ放送のニュースキャスターをする予定でしょ？そんな時間、」

「時間はあるものではない。時間は作るものよ！」

扉が勢いよく開かれる。

扉の向こうにはミレイが仁王立ちで立っていた。アツシユフォード学園の制服は着ていないものの金色に輝く容姿は微塵も変わらない。恰好が私服であるせいか、まだ卒業から数か月しか経っていないのに大人びて見える。

豊満なバストを揺らしながらミレイは元気に手を振った。

「おっひさーみんな！元気してた？」

「ミ、ミレイ会長おお！お久しぶりです！このリヴァル、会長に会う日を一日千秋の思いで待つております」

「あ、リヴァルはいいから」

もう恒例となったあしらいを受けて一人撃沈するリヴァルを無視して、ミレイは懐かし気に生徒会室を見回した。アナウンサーとして

テレビ越しに見る姿よりもずっと生き生きとしている。

「会長、来るってLINEしてからまだ10分と経っていないじゃないですか」

「ふっふーん抜き打ち検査でもしようと思ってる〜」

「抜き打ち検査？学園祭準備がちゃんと進んでいるかってことですか？」

「そんなのルルちゃんがいる以上検査する必要なんてないでしょー？
そ・れ・よ・りい」

ミレイはつつつ、とルルーシユの傍に寄ってふにふにと白い頬を突いた。ルルーシユは赤ん坊にするような仕草に眉間に皺を寄せるも、頬をつつく手を払い落とそうとはしなかった。

系統の違う美女2人が戯れている光景は非常に美しく、他者の眼から見れば目の保養なのかもしれないが、スザクの眼から見ると捕食者（ミレイ）が獲物（ルルーシユ）を吟味している光景に他ならない。ミレイの蒼い瞳はきらきらと光っていた。

「生徒会メンバーのイロイロなことが心配で心配で夜しか寝られなくなっちゃったから思わず来ちゃったのよねー。色々噂は聞いているんだけど、実際はどうなのか見てみたいと好奇心が満たされなくて！」

「イロイロって何ですか」

「ルルちゃんはジェレミアさんとなかなか進んでるそうじゃない。ナナちゃんから聞いたわよん」

「な、え、はあ!？」

「とは言っても細かいところまでは聞けていないからもう気になって気になって」

じりじりと迫ってくるミレイから後ずさりながらルルーシユは顔を真っ赤にしてぶんぶん顔と顔を横に振った。

「それはナナリーの勘違いです！お、俺とあ、あいつがそんな、そそそそんなことをするわけが」

「……嘘つくの下手になったんじゃないのルルーシユ」

「というよりルルってミレイ会長限定で嘘が下手なのよね」

「流石会長だぜ！そこに痺れる憧れるう！」

「おい今は俺が生徒会長だぞ！助けろお前ら！」

「無理」

非情な合唱を受けたルルーシユはあわあわと逃げ場を探すように周囲に視線を走らせる。

縦横無尽に走る眼球は一人無防備に棒立ちになっていている親友をロックオンしてレーザーのようにかつと輝いた。ミレイが喰いつきそうな餌発見、と秀麗な顔に書かれてある。

ルルーシユは普段の運動音痴が嘘のように素早くスザクの後ろに回り込んだ。そのままスザクの背中に引っ付いて小動物のようにぶるぶると震える。

何故かルルーシユに触れられるのが酷く久し振りであるような気がした。親友だというのに、そういうばここ最近握手をしたり肩を組んだりもした記憶が無い。

何故だろうと思うも今は目の前で両手をわきわきとさせるミレイの方がずっと問題だった。

「ル、ルルーシユ？」

「会長、俺の方はそう大した進捗も無いですからそう楽しくもありませんよ。そうだろうスザク？お前だって知っているよな、俺とジェレミアがそんな関係じゃないって」

「いや12歳の頃から知ってるけど割とあれはアウトな」

「そんな関係じゃないよな!?!お前知ってるよな!?!」

事実がどちらであろうともミレイに疑られたが最後、根掘り葉掘り茎まで摩耗して無くなるまで質問攻めにされることは間違いない。ルルーシユの顔は必死だった。

縋るような眼を見返してスザクはなんとも言えない顔をして首を背けた。

「黙秘権を主張します」

「あ、逃げた」

「逃げたわね」

「スザク、おのれ、俺を、俺を裏切ったなあああ!!」

耳元で鳴り響く親友の叫び声に非常に微妙な気持ちになるも、ミレイを敵に回す程に愚かなことは無いことをスザクは生徒会メンバーとして身に染みて理解しており、背けた顔を前に向けることはできなかった。

N o b a d y c a n s t o p M i l l y . 生徒会に入会して一番最初に学んだのがそれだ。目を付けられたら最後、弄られて弄られて弄り倒されてミレイが飽きるまで終わらない。

しかし幾ら好き勝手に振る舞おうとも、駄々を捏ねながら我儘を言っても、憎まれるどころか敬意と親愛を大量獲得してしまうのがミレイの凄いところだろう。いつだって生徒会はミレイを中心に台風のように回転していた。ミレイが動けば生徒会も動く。そのため生徒会メンバーはミレイの動向への察しが非常に良い。

だからこそスザクはミレイがターゲットをルルーシユから自分に切り替えたことに瞬時に気が付いた。

「まあそつちも気になるんだけどお、今日のメインはベ・っ♡」
につこりと笑う笑みが怖い。蛙を見つけた蛇が笑うとしたらこんな表情になるのだろうか。にじりにじりとミレイがゆっくりとした足取りで近づいてくる。

背後を見ると危機を察したルルーシユはとつくにスザクの傍から離れていた。巻き込み事故を受けないように距離を取ったのだ。

もしや最初から自分を犠牲にミレイから逃れる魂胆だったのかとようやくスザクは気づいた。裏切ったと責めたその10秒後に自分が裏切る態度がいつそ清々しい。

スザクがルルーシユを責める間もなく、あ、ヤバいと思った時にはもう遅かった。

「スザクくんってえ、もうユーフェミア殿下とキスしたの？」
「キッ、っ」

がたんと背後に飛びすぎる。ミレイは初心な反応を心底面白がってにやにやと頬を吊り上げていた。

「ユーフェミア殿下が入学してくるなんて面白い事態を経験できなかったなんて、このミレイ・アッシュフォード、生涯の不覚としか言

いようが無いわ……1年ぐらい留年すれば良かった。というわけで今日はせめてスザク君の進捗具合を直に聞きたくて来ちやつたのよね〜」

「あ、それあたしも気になる!」

「スザク貴様つユファイにもう手を出したのか!?ゆ、許さんぞ!まずは短くとも3年間の清い交際の後に婚約期間を設けて、両者ともに社会人となってからきちんとした結婚式を挙げた後でなければ俺は認めないからな!!」

怒る猫のように歯を剥いてこちらを睨みつけるルルーシユにどう返事をしたものかと視線を彷徨わせる。

しかしスザクの味方をしようとする者はいない。皆楽しそうににやにやとしてばかりいた。

「違ふよルルーシユ、誤解だ、まだキスしか……」

「もうユーフエミア様とキスしたの!」

「さっすがスザク、手はやーい!」

「そんな会長、本当にまだそれだけしか」

「スザあああク!!貴様、キ、キ、ユファイと、キスだ?!早い、早すぎるぞ!!ユ、ユファイはまだ16歳だというのに、そ、そん、そそそそそそ」

「お兄様落ち着いて下さい。それでスザクさん、ユファイお姉様とはどんなところにデートに行ったりしたんですか?」

「ナナリー!」

視線を扉に向けると車いすに乗ったナナリーがくすくすと笑っていた。慣れた手つきで車いすを動かして生徒会室に入る。

「ナナちゃん、ユーフエミア皇女殿下は?」

「職員室に用があるということ途中で別れたんです。すぐにいらっしやられますよ」

車いすを転がしてナナリーはスザクに近寄る。満面の笑みには好奇心で光る瞳が埋め込まれていた。

気に入らないという顔を隠しもしないでぶつぶつと呟くルルーシユに少し呆れの視線を向けながらも、ナナリーは気にしないことに

決めたらしい。

ルルーシユのシスコンは不治の病であることを理解しているからこそかける言葉も無かつたのだろう。

「デート……デートだってまだ早いだろう。二人つきりでこんな奴と一緒にだなんて危ないにも程がある。まずは俺かコーネリア姉上同伴で遊びに行くことから始めるというのが筋だろう。行く先は図書館や美術館など品性のある施設で公序良俗を保つてあくまでもお互いの知識を高めるためn」

「それでスザクさんはどんな風にユフィお姉様をエスコートしたんですか？王子様みたいに手を引いてシヨツピングなされたのか、それとも映画館とか行かれたんですか？もしくは水族館とか？」

「あ、この前新しい水族館オープンしたよね。新しいデートスポットだって雑誌で紹介してあつたけどスザク君はもうデートで行ったの？」

「シャーリー、僕はまだそんな、デートなんて、」

「あーあ！いいなあ〜騎士に紳士的にエスコートされてデートとか……まあそんなのお姫様じゃないと似合わないんだろうけどさあ」

「大丈夫だってシャーリー。少なくともルルーシユよりはシャーリーの方がそういうの似合ってるだろうし」

「ルルーシユって本物のお姫様の筈なのにそういうの致命的に似合わないわよね」

「か弱さと嫺やかさと謙虚さが致命的に足りないからじゃない？」

「それだ！」

「喧嘩を売っているのかりヴァル。高値で買うぞ。俺だってその気になればカレン顔負けの猫を被って深窓の令嬢っぽく振る舞うことだってできる。あいつがか弱くて嫺やかな女はタイプじゃないと言うからやらないだけであって、」

「あんたが私に喧嘩売ってんのかしら？」

「ばきばきと指を鳴らすカレンにルルーシユは顔を引き攣らせて首を横に振った。」

シユナイゼルではないが、ルルーシユだって最初から負けが決まっ

ている勝負はしない。

はいはい、とミレイが手を叩いた。

「じゃあ学園祭が成功したら打ち上げで水族館行っちゃいますか！
ジエレミアさんに車を出して貰えばすぐでしょ？」

「さも当然のようにミレイ元会長も行く流れですねこれ」

「当つ然！いいじゃない、最近モラトリアムが足りなくてえ。ほんつとあの変態顎割れ上司『カオスが足りない！』て番組編成にねちねち文句言ってきたもんじゃないわ。仕事は出来るから誰も文句言えないし、無駄に声大きいから耳が痛くてたまらないのよ。ストレス発散でみんなで遊びに行きたいの。きやあきやあわちやわちやしたい。恋愛話を根掘り葉掘り茎が摩耗するまで聞き尽くして気の済むまで弄ってほっこりしたい！」

「それでほっこりするの会長だけでしょう。それにこの人数全員が車一台に乗るのは無茶だ。あと一人誰かに車を出して貰わないと」

「じゃあこの前免許取ったからあたしが……」

「これがスザクさんの望みだったんですね」

車いすに座ったナナリーが心底安堵した顔で呟いた。スザクを見上げる。

菫の花のように柔らかい色をする瞳の淵は赤く染まっていた。

「よかった。スザクさんも争いの無い平和な世界を望んでいたんですね。安心しました。スザクさんもしかしたらお兄様と同じように………いえ、もうよしまししょう」

「ナナリー？」

「お兄様もあと少しすれば来ますから。コーネリアお姉さまも、ジエレミアさんも………まだ彼らだけは私達の意識に残る記憶から抽出した幻ですけど、でもあと少しで本物になりますから」

えへへ、と笑ってナナリーはスザクの服の袖をついと握る。指先で

遠慮がちに服を摘まむ仕草はユーフェミアに似ていて目が細まる。

「スザクさんが望むのならずっと、ずっとここにいられるんですよ」

「……………うん」

目の前でわあわあど騒ぐ生徒会のメンバーを見やる。

誰も彼もが楽しそうだった。明日の命を心配する翳りの欠片も見当たらない。

自分も心底から明日も彼らが生きていることを信じられる。彼らは友達だと一切の躊躇なく心から言える。

全身を生ぬるい湯につけられたような気分だった。そうだ。自分
はこれが欲しかったんだ。

これだけがずっと欲しかった。

「学園祭だつてもう何の邪魔も無くできるんです。人殺しだつてしないで済むんです。お兄様と殺し合いなんてしないでいい、カレンさんと敵対することもない、ユフィ姉さまが死ぬことも無い。学校に行つて、卒業して、就職して、私達は普通に、そうして——」

「何を言っているんだい？」

こてんと首を傾げた。

こんなに平和なのに、ナナリーはどうしてそんなに物騒なことを言うのだろうか。

「そんなの当たり前だろう。僕たちは普通の、普通の高校生なんだから」

ナナリーは眉をちよつとだけ持ち上げて、しかしすぐに可愛らしい少女の微笑みへと戻った。

「それより早く学園祭の準備をしようよ。仕事如山積みなんだ。ナナリーも手伝ってくれるかい？」

「はい、勿論。力仕事は苦手ですけど計算とか、あと部活への連絡とかなら任せて下さい」

「頼もしいな。じゃあルルーシュに言つてまずは書類を、」

そう言った瞬間にナナリーの背後で扉がゆっくりと開いた。ナナリーの背中越しに扉へと目を向けると、誰よりも愛する人が立っていた。

大きい瞳。細くてなだらかな弧を描く眉。長いストロベリーブロードがドレスの上を滑って流れている。ドレスの端からは細い足首が2つ伸びてしつかりと地面を踏みしめていた。

五体満足で何の傷も無い。スザクの記憶のままの美しいユファイがそこにいた。

ユファイは半月のように目を細めて何の表情も浮かばせずにスザクを見ている。唇は一本の線のように閉じられていた。

「…………お、あ、」

ぶるぶると唇を震わせてスザクは言葉を探した。

ユファイがアツシユフォード学園に入学してから毎日顔を合わせているというのに、酷く久し振りであるような気がした。両足で地面に立ち、意志の強そうな瞳を輝かせている姿を見るだけで心臓が引き攣るような気さえした。

「ゆ、ふい」

「——スザク」

小さく紡がれたユファイの声にスザクの中で何かが決壊した。

もうこれでいいと思った。何か大事なことを忘れていたような気がしたが、そんなことはもうどうでも良かった。

本当に一番大事なものをさえ取り返せるのなら、他のことなんてどうでもいい。

そうやって本当に大事なものを以外を斬り落として行かなければ何も守れやしないのだ。スザクはそのことを知っていた。縋る様に声を張り上げる。

「ユファイ、ユファイ！待っていたんだ！学園祭の準備が大変で、ミレイ会長が来たんだ、ナナリーも一緒に、リヴァルも、シャーリーも、ニーナも……そう、ルルーシュが、そうルルーシュがいるんだ。ユファイ、ルルーシュがいるんだ。一緒に仲良くしようよ。ここで、ずっとここで

「スザク」

背を凜と伸ばしたユファイはスザクに近寄り淀んだ碧色の両目を見据えた。名前を呼ばれただけだというのに、何故か咎められているよ

うな気がした。

ユフィは細い指でスザクの傷だらけの手を包み込むように握る。体温が熱い。指先の血管に熱湯が注がれるような熱さだった。そこでスザクは自分の体が冷え切っていることに気付いた。

「スザク、あなたは嘘をついているわ」

「……嘘？」

ユフィは何を言っているんだろう。

指先の熱が心臓まで達して焦げ付いているような気がした。どくどくと鼓動が悲鳴を上げる。自分は嘘は言っていない。だがユフィの言葉にも嘘は無いように思えた。

嘘を言った。自分が。何を。

「スザク、本当に、本当にこれがあなたの望みなの？」

熱せられた剣の切っ先のような声色だった。全身がその熱さに打ち震えた。

静かな光に満ちた生徒会室が融解する。

机に載っていた書類は液状化して流れ落ちた。床を埋め尽くしていた風船は全部破裂してバンバンと喧しい音をたてた。

その場にいた全ての人たちは泥色の人形になってぼたぼたと倒れる。泥人形は床にぶつかつた衝撃で粉々に砕け散った。

タイルで覆われていた床は揮発して姿を消す。その下には果ての見えない広漠たる荒野が広がっていた。

心を慰める草の一本も生えていない。栄養の乏しい赤い土は塩のようにさらさらとしていて、風に吹かれては粉塵のように舞い上がった。視界を遮る褐色の道は、巨大な焼けた鉄の棒で大地を適当に引つ搔いたように曲がりくねっている。空気は肌に痛いほど冷たい。スザクは道の途上に立っていた。

道は地平線の果てに続いている。見上げると筋雲が矢印のように道の果てを指示している。空は赤く染まっていた。

永遠の黄昏が空を燃やしていた。

「そうだよ」

ユフィと二人きりになった虚構の世界で、スザクは痛々しいまでに
澄んだ瞳をしていた。



15. 恋は人を変える。良くも悪くも

ジェレミアにはギアスは効かず、また身体が機械化されたことでその身体能力は人類の限界を超えていた。

皮膚の下は金属装甲で隙無く覆われ、僅かな生体部分以外は刃物や銃弾を容易に弾く。筋力も人外の域にまで強化され鉄筋を素手でねじり切ることさえ可能であった。

しかしそれでもビスマルクの強さは圧倒的であり、身体能力で勝る筈のジェレミアを確かに押ししていた。

顔面や右半身に残る生体部分に幾つもの傷を負わされてじりじりと押されつつも、しかしビスマルクがルルーシユの元へ向かうことだけはさせないよう行く手を阻む。

攻防入り混じる中でジェレミアはルルーシユの身を案じていたが、しかし目の前の帝国最強騎士から意識を僅かにも逸らすことは許されなかった。

目の前で弾ける苛烈な攻防に目を走らせながらルルーシユはシャルルの居場所へ向かう隙を探す。

コーネリアは怒気で髪を逆立てて苛烈な顔で幾度もマリアンヌへ斬りかかっていた。踏みしめる足の力で石畳が砕けるかと思われる程だった。全身が倍に膨張したと錯覚するほどに力を満ちさせて、振るう剣はルルーシユ如きには視認さえできない。

だがそれでもコーネリアよりマリアンヌの方が残酷なまでに強い。

「駄目よコーネリア。実戦ではそんな型通りの剣戟なんて避けられて当然よお」

「くそ、くそおっ!!」

金属音が高鳴りコーネリアの剣が弾かれて、突き出された剣を咄嗟に顔を逸らせて避ける。

紅潮した頬に深い傷が走った。血が垂れて首元まで染まっている。

舌打ちが零れる。あまり時間が無い。この状況ではコーネリアが敗北するのも時間の問題だろう。

その前にさつさとシャルルのコードを奪いたいのだが、マリアンヌは絶妙なタイミングでシャルルとルルーシユの間に割り込んで行く手を阻む。

無理やりにマリアンヌの傍を通り抜けようと体を動かすと、その瞬間にマリアンヌはコーネリアを力任せに押しつけてこちらに剣を向けてくる。その度にC・C・Cがルルーシユの盾になり、マリアンヌはショックイメージを避けるために足を止め、コーネリアがマリアンヌの背後から斬りかかる。そしてマリアンヌはそれを容易に止める。

その流れをもう3度は繰り返していた。一向に進展が無い。マリアンヌが強すぎて埒が明かない。

マリアンヌに斬られた幾つかの傷から血を垂らしながらもC・C・Cは両の足でしっかりと立っていた。両目は鋭い眼光でマリアンヌの動きを追っている。

「おいC・C・C」

「何だ」

「コードを奪うためにはギアス所有者がコードに触れればいいんだな？」

「そうだ」

マリアンヌに全ての集中力を注いでいるC・C・Cの返答は短い。ルルーシユは視線をシャルルに向けた。シャルルの掌は赤く光っている。

「あいつのコードは掌にある。手首の先だけに触れていてもコードの移譲に問題は無いんだろうな」

「経験が無いので分からん。しかしコードの譲渡に必要なのは十分に成熟したギアスと、コードの宿る体と、コードを奪うという意味だけだ。コード所有者の体の状態には恐らく関りは無い」

「よっ」

ルルーシユはこちらと同じく膠着状態に陥っていることに焦れている様子のビスマルクに向けて発砲した。

即座に剣で銃弾を弾かれたものの、ビスマルクの意識が一瞬だけ逸れる。

しかしだからと言ってジェレミアがビスマルクに勝てる訳が無い。白兵戦のテクニカル面ではビスマルクがジェレミアを圧倒している。ジェレミアがビスマルクに勝るのは単純な身体能力のみしかない。ルルーシユは指先でシャルルを指さした。

「ジェレミア！」

「イエス、ユアマジェスティ！」

指先と視線の意図を明確に理解したジェレミアがシャルルの下へと駆け出す。

シャルルの下までルルーシユが辿り着くのは困難だ。マリアンヌの圧倒的な白兵戦能力の前では不可能に近い。

しかしシャルルのコードをルルーシユの所まで運ぶことは不可能ではない。コードの宿る手首の先だけ斬り落としてルルーシユの元へ投げて渡せば良いだけだ。

マリアンヌという強大な壁が立ちはだかっている以上容易ではないだろうが、少なくとも現状よりはまだ可能性がある。

ビスマルクがすぐさまに駆けだしたジェレミアを追うが、単純な足の速さではサイボーグのジェレミアに勝てる筈もない。ビスマルクとの距離はすぐさまに開ける。

駆けだしたジェレミアは剣の切っ先をシャルルへと向けた。

主君であるルルーシユの父親であり皇族の頂点に立つ前皇帝である男だが、ことこの状況に至っては手首を斬り落とすことに躊躇など微塵も無い。

コード保持者であるのだからショックイメージを使って来るかもしれないという思いが一瞬胸をよぎったが、しかしC・C・とは違いコードを手に入れてから日の浅いシャルルがコードの使い方を習熟しているとは思えない。

更にシャルルは皇帝だ。白兵戦の経験がある訳が無い。剣を向けられ惨殺される可能性を脳裏に浮かばせながらもコードを使う胆力があるようであれば、そもそもラグナレクの接続などという馬鹿げた作戦を練る筈が無い。

剣を構える。するべき事は一つ。ショックイメージを使う余裕を

与える間もなくシャルルの手首を斬り落とす。

一つだけ残ったオレンジ色の瞳を煌めかせる。一心にシャルルを睨みつけて走る。

マリアンヌは唇を尖らせてジェレミアを見やっていた。コーネリアの息は荒く攻撃には隙があり、よそ見をする余裕さえある。

「どうしましょうかねえ。ビスマルクったらあんな青二才に情けないこと。でも寄る年波には勝てないものなのかしら」

顔色を蒼白にしてジェレミアの後を追うビスマルクは滑稽だった。20年前の若々しいビスマルクであればジェレミアを追い越して首を斬り落とすことも容易だったというのに、歳月は人間に等しく、厳しく襲い掛かる。

口元が吊り上がる。ラグナレクの接続が終われば、しかし人類は歳月などを超越した存在になることができる。その想像は愉快だった。とはいえ状況はあまり笑える類のものではない。

斬りかかるコーネリアの剣は精彩を欠いていた。速度も重みも無い。

容易く剣を弾き飛ばす。体勢を崩したコーネリアの腹部をマリアンヌは躊躇なく蹴り上げた。口の中で籠った呻き声を発しながらも、コーネリアは倒れることも姿勢を崩すことも無く剣を真っすぐにマリアンヌに向ける。

ジェレミアがシャルルの手首を斬り落としてたとしても、計画には何の問題も無い。ルルーシュにコードを奪う余裕を与えなければ良いだけだ。

コーネリアの体力が完全に尽きるのも時間の問題でしか無く、あと数分後に自分はコーネリアの死体を床に転がしているだろう。そうすればルルーシュのような弱い女、簡単に始末できる。ルルーシュさえいなければコードを奪還できるギアス所有者は存在しなくなり、ラグナレクの接続を邪魔する者は居なくなる。

しかしシャルルが痛い思いをするのは望むところではなかった。コード所有者にだって痛みはある。

シャルルは夫であり共犯者であり、馬鹿で愚かで哀れで賢しい可愛い男だ。自分達は既存の言葉で表すのは不可能な関係にある。

自分はシャルルに執着している。親にも子供にも、何にも執着したことのない自分は唯一シャルルにだけ執着を感じる。

無理やり既存の言葉で表すのならば、愛しているのだろう。そして恋をしているのだ。

自分の男が痛い目に遭うのは嫌だ。

立ち上がりかけたコーネリアに斬りかかる。受け止められるが、今度は足を払った。体勢を崩したコーネリアは受け身を取る余裕もなく顔を床に叩きつける。

苦痛に身を振るコーネリアを捨て置いてルルーシュへと近づく。

傍に控えていたC・Cが盾となりルルーシュに覆いかぶさった。

息を思いつきり吸い込んでマリアンヌはCの世界中に轟く程の声を出した。地響きのような声だった。

その声は無邪気な子供の声と似て芯から無垢で、自らの正当性を微塵も疑っていない者特有の透明感があった。

「ジェツレミツアくーん！こつちを見なさい！」

見るわけがない。

ジェレミアは真つすぐにシャルルを目掛けて走っていた。外科医のように関節の隙間に刃物を差し込む技術など持っていない。力任せに斬り落とすことになるだろう。とはいえ単純な腕力ならば自分は枢木スザクにさえ並ぶ。切断面は汚くなるだろうが、手首を斬り落とすなど容易い。

シャルルまでの距離は直線距離であと5mもない。ジェレミアは手を伸ばした。泰然と構えるシャルルの掌に赤いコードが光っている光景がはつきりと見える。

あと数歩だ。あと少して届く。シャルルからコードを奪い、ルルーシュがコードを持てば全てが解決、

「早く来ないと、ルルーシュが死んじゃうわよー！」
「え」

疾走していた足が摩擦で火花を散らしながら止まった。

振り返る。コーネリアは石畳の上に仰向けに倒れていた。目を
かつぴらいたC・C・はルルーシュに覆い被さっている。

C・C・の体の下でルルーシュは何が起こっているのか分からな
いと目を白黒としていた。

その上で満面の笑みに冷汗を浮かべたマリアンヌが剣を構えてい
る。

一切の躊躇なく、慈悲なく、マリアンヌはC・C・ごとルルーシュ
を剣で貫いた。

C・C・は口から血を吐き出した。串刺しにした剣と体の隙間か
らはしゅうしゅうと漏れ出る空気が擦れて音を鳴らしている。逆る
血液が一瞬で二人の体と地面を塗り上げた。

ジェレミアの意識はシャルルから完全に逸れていた。踵を返した
重みで地面が抉れた。

胸が痛い。目の奥が焼けそうだ。頭の中で血流が渦を巻く音が
鳴った。喉奥は焼け付くようだった。

剣の切っ先をマリアンヌに向けて走る。

マリアンヌはすぐさまにC・C・とルルーシュを貫通していた剣
を抜き去った。貫通していた穴から血が飛び散ったがドレスには一
滴も降りかかることは無かった。

斬りかかる男から優雅な足取りで距離を取り、マリアンヌはドレス
の端を持って恭しくお辞儀をした。まるで社交ダンスの場であるよ
うな美しい所作だった。

しかしシヨックイメージを受けたのか足が細やかに震えており、額
には滝のような冷汗をかいている。だが声に一切の震えは無かった。
「ああ可哀想に、もうお終いね。私の可愛い子供のルルーシュ。沢山
沢山頑張ったのにこんな所で死んでしまうなんて」

弔辞を告げるようなマリアンヌの言葉は湿っていた。顔を背けて
口元を掌で覆い、美しい顔で心底悲しんでいるという表情を作る。

その挙動の一切を無視してジェレミアはC・C・を揺さぶり起こ
した。剣が抜き払われた胸骨のど真ん中に直径5cm程の裂け目が
開いている。そこから脈に合わせてぶしゃぶしゃと血液が噴出して

いた。顔色は紙よりも白かった。

「貴様のコードをよこせ、早く!!早くしろ!!」

首が千切れるのではと思う程に揺さぶるもC・C・は目を閉じて何の反応も返さない。

ただ全身をびくびくと痙攣させながら鼓動という指揮に合わせて乳房の間から血液を噴出している。真正面から血を浴びたジェレミアは全身が真っ赤に染まった。

「——やめろジェレミア。C・C・が死んでしまう」

か細い声にジェレミアははつと顔を向けた。

ルルーシユは薄らと目を見開いていた。顔を動かす元気も無いのか瞳だけを動かしてジェレミアを見上げている。まだC・C・より血色は良いがこちらも顔色は蠟のように白い。

「そんな状態のC・C・からコードを奪うと、死んでしまうだろう。それは嫌だ」

「しかし、しかしっ」

このままではあなたは死んでしまう、と言おうとしたが、止めた。言わずともルルーシユはそのことを分かっているに違いなかった。

ルルーシユの右胸からは血が溢れ出ているものC・C・程ではなかった。ただ貫通した傷口からは荒い呼吸に合わせて空気がしゅうしゅうと漏れ出ている。肺の一片が潰れてしまっているようだった。言葉を口にするのも辛いだろうルルーシユの声は細い糸を指先で弾くような微かな音で聞き難い。

「ジェレミア、悪い、マリアンヌを甘く見た。俺は、」

「喋らないで下さい」

出血を抑えるために傷口をぎゅうぎゅうと圧迫する。しかしあまりに強く圧迫すると気胸になるかもしれない。指の間に空気の抜け出る隙間を作った。

出血量は多量であるが夥しい程ではなく、恐らく大動脈や心臓は傷ついていない。C・C・が覆い被さっているからと言ってマリアンヌが剣の軌道を逸らされるとは思えず、咄嗟にマリアンヌへC・C・が向けたショックイメージのおかげで即死は逃れたのだと想像され

た。

しかし胸腔内を占拠するように溢れ出る血液は止めどなくジェレミアの手を汚した。自らが死にそうな程に青褪めて呼吸さえ止めているようなジェレミアにルルーシュは自分の死を悟った。

もし助かりそうな傷ならば、ジェレミアならきつと「大丈夫ですよ、安心して下さい」と下手な笑顔で笑う。この男には今そうする余裕さえ無いのだ。

死ぬのは嫌だ。肺が潰れていなければ子供のように泣いて叫んで喚きたい程に嫌だった。

しかし現状においては自分の死というのは小さな事ではない。それより考えないといけないことがある。

自分が死んだらコードを奪える人材がいなくなってしまふ。シャルルからコードを奪わなければあのふざけた計画が完成してしまうというのに。

あの計画が完成すれば自分はまたあの世界に、全てが一つになるあの世界で永遠に過ごさなければならなくなるのか。

スザクと友達として握手をした時の温かさも、C・C.にキスをされた時の擦ったい感触も、カレンに殴られた頬の痛みも、今自分に触れている掌が涙を拭った時の熱さも、永遠に感じられなくなってしまう。

体温は愛だ。言葉などよりずっと雄弁な。それがなくなってしまうのは寂しい。嫌だ。

「嫌だなあ」

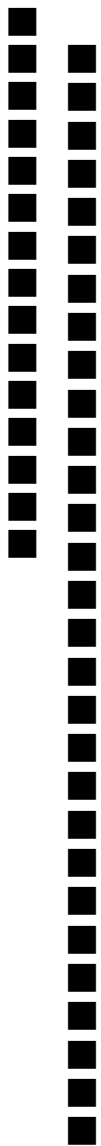
「ルルーシュ様、ルルーシュ様、駄目です、目を閉じてはっ」

意識が遠ざかって行く。瞼の裏は白黒に点滅していた。

モザイクのように記憶が思い浮かんで消えてゆく。フィルム映画を早回しで眺めているようだった。

ゼロとして合衆国日本の設立宣言をした時、スザクにギアスを掛けた時、カレンと出会った時、囚われていたC・C.を見つけた時、ジェレミアが死んだと思った時、スザクとナナリーと一緒に枢木神社で遊んだ記憶——そして、

ルルーシユはもう12年も前のことを脳裏に思い浮かばせた。



父と一緒にマリアンヌ皇妃に謁見した後のことだった。

アリエス宮は皇宮の一角にあるとは思えない程に慎ましいが、それでも一般的な家屋とは比較にならない程に広い。用事があると言って息子を一人アリエス宮に放置した父を待ちながら、ジエレミアは丸みを残した膝をぶらぶらと揺らして花畑のような庭を眺めていた。

本当に綺麗な庭だ。香水のような不自然さのない和やかな花の香りは庶民の身分から栄達したマリアンヌを反映しているように思えた。皇宮広しと言えども、ここまで均整の取れた美しい花園はあるまい。

とは言ってもそう長々と眺めていると飽きる。それにジエレミアは花と戯れることに喜びを見出す少女めいた感性は持ち合わせてい

なかった。むしろ華麗な花園を前に花を管理するための費用は幾らか、と計算するような可愛げの無い子供だった。

時計を見ると、父にここで待てと言われてから既に30分は経過している。父はまだマリアンヌ皇妃と話があるのだろうか。

美貌のマリアンヌ皇妃と話し合う父を想像すると羨ましさで口がひん曲がる。身分的にも年齢的にも容姿的にも能力的にも全く釣り合わない上に会話の内容は政務やら援助の金額やら、ロマンの欠片も無い素っ気ないものだろうが、それでも羨ましい。

それに加えてまだ子供だからという理由で政務に関する話題から引き離されて苛立つ気持ちがか途中で騒めいていた。

「もう私も15歳だというのに、あの父親ときたら……」『下手にマリアンヌ皇妃に気に入られることの無いよう謁見は控えた方が良い』などと言って放り出すなんて。家のために主君を選ぶ重要性ぐらい私もとつくに理解しているというのに」

ぐちぐちと呟いた後にはっと周囲を見回した。ヴィ家が所有するアリエス宮で口に出して良いことではなかった。遠目に暇そうに歩く警備兵が数名視界に映ったが、それ以外に人影は見えずほっと胸を撫で下ろした。

ゴットバルト家はそう家格の高い貴族ではない。長年騎士を輩出し続けている家としてそれなりの地位にはあるが、あくまでそれなりの評価に留まる。権勢凄まじいヴァインベルグ家やリ家と比較すると米粒サイズの価値しかない。

だからこそゴットバルト家は庶民出身で後ろ盾のないマリアンヌ皇妃の支援をしてはいるものの、それなり程度の付きあいでも済ませておくことが最善である。父に言われるまでも無く自分の代でもそうしようとジェレミアは既に決めていた。

家のことを思うのならばヴィ家ではなく、シュナイゼルやオデュッセウス、それにコーネリアの方に取り入るべきなのだ。いくらマリアンヌが美しく個人的な思慕を寄せているとはいえ、情に振り回される暗愚なロマンチストに成り下がる気はさらさら無い。

これから士官学校に入学し、卒業して騎士になった後はシュナイゼ

ルやオデュッセウス等、安定した権力を持つ彼らの下で働くことが自分のためにもゴットバルト家のためにも最善の手であろう。

皇族一人につき一人しか選ばれない選任騎士となるのは困難だろうが、運よく仕えた皇族が皇帝になればナイトオブブラウンズへの道さえ開ける。

それは夢物語ではないという自負がジェレミアの中で渦巻いていた。そこらの盆暗貴族とは比較にならない程に鍛えている自信はある。あと足りないものは経験だけでしかなく、それは時間が解決してくれる問題だ。

木製のベンチから立ち上がって背中を伸ばす。

体を動かさないでいるから苛々が蓄積されるのだろう。これだけ広大な花畑なのだから庭師もさぞ大変に違いない。このままここで座っているよりは草むしりでもして時間を潰す方がまだましだ。幸いにして天気も良い。

庭師に手伝いでもさせてもらおうと思いつて足を動かす。

しかし視界の端に黒い罅割れを見つけてジェレミアはぎよつと目を剥いた。

床や壁ではなく空中に罅割れが走ったのだ。それは奇妙な光景だった。夢でも見ているのかと頬を抓るが、目は覚めない。

アニメや漫画のチープな演出のようにその罅割れはパキパキと音を立てて広がる。ジェレミアがぼかんとしている数秒の内にその罅割れは人が一人通り抜けられる程の大きさにまで広がった。

「はっ、あ？」

いつの間にブリタニアは空中にCG画像を投影させる技術を生み出していたのか。それとも実は巨大な透明ガラスが目の前に立ち塞がっているのか。

どちらも現実的な発想ではないが、目の前で起こっている現象よりもそちらの方がずっと現実的であるように思えた。

「映画の撮影……？それともびっくりか？」

恐る恐る罅割れに手を伸ばすと、同時に罅割れの隙間からぬるりと手が這い出てきて指先がくつついた。

あまりに冷たい感触にぴゅつと飛びのく。そのまま全力で逃げ出し、物陰に隠れて視線だけをその男に向けた。罅割れから這い出てきたのは骨ばった男性の細い指だった。

そのまま前腕、上腕と続き、とうとうその男の体全体が罅割れからぺつと地べたに吐き出された。

男は艶のある黒髪を短く切り揃えていたが、距離があるため顔立ちまでは分からない。立ち上がる力も無いのか地面に四肢をついてきよろきよろと周囲を見回している。動揺が全身から滲み出るような挙動だというのにどこか品があった。貴族だろうか。

男の衣服は高位の貴族が儀式典礼の際に身に着けるような高価なものであり、まず間違いなく貴族だろうとジェレミアは頷いた。

それも同じよそこらの中流貴族などではない。生地は純白で金の縁取りがされており、要所要所を赤い宝石が飾っている。混じりけの無い赤の宝石はそれ一つで家が一つ建つだろう程に大きい。黒い刺繍は全体的なデザインを引き締めており、華美と品を同時に体现する見事なものだった。

しかし衣装の胸元はまるで剣で貫かれでもしたように真っ赤に染まっており、足元にまで血が滴っている。

もしや怪我をしているのかと思っただが男はすぐに立ち上がって歩き始めた。ふらふらと頼りない足取りではあるが痛みを感じている様子は無い。

あの男はアリエス宮への侵入者なのだろうか。どうやって。ここは皇宮の中だというのに。

入口で入念なチェックを受けなければ皇族以外の者は皇宮には一歩たりとも立ち入ることは許されない。どれだけ高位の貴族でもそれは変わらない筈だ。

少なくともあんな血塗れの恰好で皇宮に立ち入るような狼藉は絶対に許されない。

つまりあの男は内部からの手引きを受けて入り込んだ不審者か。怪我はしていない様子であるし、あれは返り血なのかもしれない。

そうだとすれば騎士を目指す身としてあの不審者を放っておくわ

けにはいかない。

正義感を全身に満ちさせてジェレミアは拳を握り締めた。

もしあの男が屈強そうな体格をしていれば、ジェレミアは躊躇なく警備兵の所まで駆けて行って一連のことを報告しただろう。しかし遠目から見ても分かるほどにその男は華奢であり、戦闘訓練を受けた者の挙動では無かった。

もやしのようにひよろいあんな男、まだ軍人でもない自分でも絶対に勝てる。

最近はめきめきと身長が伸びてきたし、筋力だって増えてきた。もう少しすれば士官学校にだって入る身だ。この程度のことでも人の手など借りなくてもなんとかなる。

尊敬するマリアンヌの住むアリエス宮へ立ち入った無礼者を自分の手で捕縛する。そしてマリアンヌ直々にお褒めの言葉を頂く。その想像でジェレミアの頭はいっぱいになっていた。

男が向かった先へ足音を潜めてついていく。

油断なく周囲をきよろきよろと見回して警戒する姿にやはり不審者だという確信が強まる。さらに足取りには迷いが無い。予めアリエス宮の内部構造を調べていたのだろう。

警備兵の薄い箇所を縫うように男は歩く。どれだけ皇宮の情報が漏洩しているんだと警備の質に苛立ちが湧いた。男はジェレミアの苛立ちなど知る由もなく人目のない庭を通り抜けて、外へと抜け出る道に続く真四角に剪定されたツツジの茂みの中に潜る様に姿を消した。

その姿を確認して、ジェレミアはすぐに駆け出して茂みの中に手を突っ込んだ。指先をさらさらとした髪感触が撫でて、こいつだと米神に血管を沸き立たせながらむんずと掴む。

「貴様、何者だ！……ここはマリアンヌ皇妃が所有されるアリエス宮だぞ！それを知っての狼藉か!!」

「っ、う、な、何」

「さっさと姿を現せこの無礼者！」

大声を上げて力任せに髪を鷲掴みにして、引きずり出そうと足を踏

ん張る。

思っていた程の重量を感じない。というか、軽すぎる。男は細身の体つきだったが長身であり、着ていた衣装も生地の厚そうなもので、手に感じる重量とはあまりに合わない。まるで子供のような重さだ。茂みから無理やりに引きずり出されて姿を現したのは長身で細身の男ではなかった。

幼いながらも目鼻立ちが抜群に整った少年の黒髪を自分はひつつかんでいた。年のころは6歳かそこらだろう。少年は無理やりに引き倒されたせいで服を土で汚しており、目元を真っ赤にして驚きと恐怖を顔面に貼りつかせたまま強張らせている。瞳は吸い込まれるような深い紫色をしていた。

その容姿を眼にして全身の血が逆流して体の中で暴れ回った。頭の中で脳みそがガンガンと煩く絶叫を上げる。

なんてことを。自分はなんということを。

生まれてきてから間違はなく一番に最悪の失態を犯してしまった衝撃のあまりに全身の動きをフリーズさせて、どうすればよいのか必死に考えた。

切腹か、首吊りか、はたまた銃殺刑か。

思考の渦を覗き込むも死以外の答えが見つからない。ジェレミア・ゴットバルト、弱冠15歳にして無礼討ちにて後世まで恥を晒す……あまりに酷い想像に気を失いかけたものの、幼い妹までもが兄の侮辱罪の波を被って野に下る光景が脳裏に浮んでカツと目を見開き、すぐさまに手を離して地べたに頭を擦りつけた。

「も、も、も、申し訳ございませんルルーシュ殿下!!!」

紫の瞳は皇族の象徴である。そして曲がりなりにも一端の貴族であるジェレミアは皇族の顔を一人残らず覚えていた。

目の前に立つ天使のように愛らしい容姿をした少年はマリアンヌの一人息子であり、皇位継承権17位を持つブリタニアの皇子である。

いくら庶民の血を引いているといっても皇族は皇族。ゴットバルト家のような中流貴族からしてみれば雲の上の存在だ。この皇子か

らしてみればジェレミアなど足元に転がる石、庭に生える雑草の一本に過ぎない。

そんな存在に髪をひつつかまれて地べたに倒されたとなれば。

がくがくと全身を震わせながら地面を額で掘り進めて、せめて妹だけは連座に加わらないよう遺書に書き記しておかねばなるまいと冷静な思考が呆れ声を上げた。

内心で遺書の文面を考えているジェレミアを他所にルルーシュは立ち上がって服についた泥を払い、ついでに目元を拭った。

自分の足元の地面を頭部で掘り進めている少年の姿に舌打ちする。貴族から嫌がらせを受けることは日常だが、髪をひつつかまれて引き倒されたことまでは流石に無い。

髪を無理やりに引き抜かれたせいで頭皮はじんじんと痛むし、茂みから引きずり出された時の衝撃で膝には小さな擦り傷が出来ていた。

だがいくら無礼な行いをされたからと言って他の皇族のように処断する権利をルルーシュは持っていなかった。否、持つてはいたが振るう立場が無かったのだ。

皇族とは名ばかりの庶民の出よ、卑しい血よと侮られる自分がこの男の無礼を咎めたとして、誰がこの男に処罰を下してくれるというのか。

他の皇族であればご機嫌取りの貴族が気を回してこの男が持つ領地を奪うなり身分を落とすなりするのだろうが自分にはそんな取り巻きはいない。傘下にない貴族に訴えたとして「そうですかお気の毒に」と嘲笑われて終わるだけだ。

そうと知っているからこそいつもは馬鹿にしてくる貴族に視線も向けず、そんな子供染みた悪戯など気にもしないという態を作るためにぴんと背筋を伸ばして立つのだ。そうして貴族はこちらの矜持の高さを気に入らないと顔を顰めて去って行く。

だが害を加えた後にいきなり土下座する者は初めてで対応に困る。

とりあえず顔を下げているままでは誰なのかも分からない。全身を小刻みに震わせている深緑色の髪の少年に声をかける。

「貴公は何者か。何を思って私にこのような無礼を働いたのか話せ。

口を開くことを許す」

「は、はい！わ、私はジェレミア・ゴッドバルトと申します。先ほどこちら茂みに怪しげな男が入りまして。もしやアリエス宮に侵入した不届き者かと思ひ捕縛しようとしたのです！」

「それで間違つて私の髪をひつつかんだ上に地べたに引き倒したと」

言葉も無くジェレミアはさらに地面に額を擦り付けた。

このまま前頭骨が擦り切れるまで地面を掘り続けかねない勢いである。ゴリゴリと音がするぐらいだ。思わず痛そうだなと眉根を顰める。

引き抜かれる程の力で髪を鷲掴みにされたのも初めてならば、こうまで盛大に土下座を繰り返されるのも初めてだった。何かにつけて大げさな少年なのだろう。挙動の一つ一つが眼に五月蠅い。

土でも食べかねない勢いの土下座を前にしていると、さつきまで胸を占めていた怒りが霧が晴れるように霧散していくのを感じた。少年の言動に嫌味なものが欠片も無いことも拍車をかける。

終には怒気よりも、この少年の頭の造りに対する心配が勝るまでになった。このまま放っておくと前頭葉が摩耗してしまうのではなからうか。溜息が零れた。

「…………もう良い。私を貶めようとした訳でもなさそうだしな。頭を上げよ」

「し、しかし、」

「くどいぞ。私に同じことを言わせる気か」

ジェレミアはあんな無礼なことをしておいて顔を上げる権利などあるのだろうかと思巡した。しかし皇族というブリタニアのヒエラルキーの頂点に立つ者からの命令に逆らうことは許されぬ。

恐る恐る面を上げる。目の前に立つルルーシユは未だ6歳とは思えない凜とした表情をしていた。しかし目元はまるで先ほどまで泣いていたように赤い。

「悪意が無いのなら私は気にしない。それよりその不審者の特徴を覚えていくか」

「は、はいー」

「よし。お前の端末を貸せ」

慌てて懐から取り出した端末をルルーシュはさっと摘み上げてどこかへと連絡した。

慇懃な口調で一言二言話した後に端末をジェレミアへと手渡す。恐る恐るといった手つきでルルーシュから端末を受け取ったジェレミアは耳に押し当てた。

通信先はアリエス宮の警備担当の男らしく、軍人らしいきびきびとした口調で不審者についての情報開示を請求してきた。言葉の端々には苛立ちから発せられる砲弾のような響きがあり、はなからジェレミアの目撃証言を信じていない思いが透けて見えた。連絡したのがルルーシュでなければ不審者を見かけたなどという報告は一笑に付されただろう。

ジェレミアも、アニメのように空中へ裂け目が出来て、そこから皇帝服に勝るとも劣らない豪華な衣装を着た血塗れの青年が出現したなどと言う訳にも行かず、不審者の外見的特徴を伝えるに留まった。それでも十分に非現実的な状況であるのだが、事実だからしょうがない。

報告の後、そんな派手な服装を着た男が侵入などできるものか、という意図を込めた苦笑が受話器越しに聞こえた。ジェレミアも自分の眼で見えていなければ到底信じられなかっただろうと思いい口を閉ざす。一応警戒を強めてくれるそうだから、それで十分であろう。

あんな派手な格好で皇宮から脱出するなど不可能に違いなく、自分が心配するだけ無駄なことだとジェレミアは端末を懐に仕舞った。

あの男がアリエス宮について皇族並に知悉していればまた話は別だろうが、まさかそこまで情報が漏れているとは考え難い。

「報告は終わったか。警備兵は何と」

「直ぐに警備の人数を強化して不審者の捜索にあたるそうです」

「それだけか。貴公の発言は随分と信頼されているようだなジェレミア卿」

その口調には嘲りは無かったが皮肉は多分に含まれていた。頬を引き攣らせながらジェレミアは口を閉ざした。

「確かにその、派手な外見の侵入者でしたから……見間違えと言われ
てもしょうが無いかもしれません」

「お前は確かに見たんだな」

水底に落ちた紫水晶のような瞳に睨まれて思わず背筋が伸びる。
外見は天使のようだというのに視線一つ向けられただけで全身が震
え上がるような迫力がある。

これが皇族か、と腹の底から声が噴き上がった。

「は、はい！」

「なら肩を落とすな。お前のしたことは何も間違っていない。報告は
重要だ。もし不審者がお前の単なる見間違えだったとしても、ここは
皇妃であるお母様が住むアリエスの離宮、異常を発見したのならば即
座に報告すべきだ。そもそも警備兵より先に来客であるお前が異常
を発見したのだから、むしろ警備兵は自らの失態をお前に謝罪するべ
きなのだ」

淡々と告げられた言葉に、本当にこの子供は6歳なのかと目から鱗
が零れ落ちる思いだった。

合理的な考え方を真つすぐに口にして、他者を肯定すること。単純
なことだが難しい。特に人間関係の複雑化した貴族社会では。それ
をこの子供はいとも容易くやってのけた。

流石、武勲と美貌のみならず比類ない聡明さでも知られるマリアン
ヌの御令息だ。

出会ってまだ数分しか経っていないというのに腹の奥底に忠誠心
とか敬意とかいったものがふつふつと沸き上がってくる。

そして同時に自らの失態に対する罪悪感も沸き上がってきて再度
ジェレミアは頭を下げた。

「本当に申し訳ございませんでしたルルーシユ殿下。大変な失礼を致
しました……その、お怪我は、」

「別に無い」

ぷいと顔を逸らしたルルーシユはこれ以上話すことなど無いと無
表情を貫いていた。

子供らしくない冷たい面持ちにそれもそうだろうと胸が痛む。

マリアンヌが庶民の出ということとその子供であるルルーシュとナナリーも貴族や皇族から多くの嫌がらせを受けている。玩具を壊されたり、下剤を混ぜた菓子を食わされたり、社交の場では血の卑しさを散々にあげつらわれたり。ジェレミアが噂に聞く限りでも枚挙にいとまがない。

流石に後遺症の残るような酷い虐めは受けていないようだが、幼い皇族2人が日常的に子供染みた嫌がらせを受けている事実は公然の秘密であった。

ジェレミアは紳士の嗜みとして持ち歩いているハンカチを取り出して「失礼致します」と告げてからルルーシュの目元を拭った。眉間にクレバスのような皺が寄る。子供のして良い表情ではない。

「貴様、何をする」

「も、申し訳ございません。しかし、」

涙の痕が、と続けようとしたが一瞬で般若のような怒り顔に変貌したルルーシュを前に口を閉じた。

マリアンヌの息子は可愛げが無いとよく聞くが、子供らしくない毅然とした態度の裏でこの少年はこうして物陰に隠れて何度も泣いていたのだろう。隠れて泣くのは母や妹に心配をかけないためか、それとも皇族らしくプライドが高いためなのかは分からない。

いずれにせよ人目に触れないよう隠していた秘密を自分の不注意な行いが暴いてしまったのだ。せめて気づいていない振りをすることが最低限のマナーであるように思われた。

怒り顔のルルーシュは震える手で顔を拭うジェレミアを咎めることもせず、目を閉じて息を吐いた。咎めたことでこの一々言動が大げさな少年が、泣いていたでしょう、と口にしたらと思うと耐えられなかったのだ。

むつつりと不機嫌さを露わにした顔になるが、少年と青年の最中にある指先は躊躇いながらも動きを止めようとはしない。

暫くして両目を拭い終えたジェレミアはハンカチを懐に仕舞ってその場に膝をついた。

「大変失礼な真似を致しました。この無礼、未熟で非才の身には償い

ようもございませぬ。どうか寛大なる御処分をお願い致します」

「……俺は庶民の血をひいている。そう畏まる価値もあるまい」

「何を仰いますルルーシユ殿下。皇族の方にお目通りするのはブリタニア臣民にとつてこの上無い榮譽であります」

はきはきと返す言葉に嘘は無かったが、しかしルルーシユに向ける感情には他の意味があった。

ルルーシユの母親であるマリアンヌ皇妃は平民の出でありながら素晴らしい才覚と豪気な性格によりナイトオブ라운ズにまで出世を果たし、さらにその美貌と高潔な性格により皇帝に射止められて皇妃となった、ブリタニアを象徴するような女傑であった。

平民出身と侮られることも多いマリアンヌだが、喧しい貴族を相手にもせずいつも柔らかな微笑みを浮かべる姿は美しいの一言に尽きる

ゴットバルト家はマリアンヌの支援をしている数少ない貴族の一つであり、父に連れられて初めてマリアンヌに謁見した時にはこんなに美しい女性がこの世にいるのかと呆ける程に驚いた。溶けるように柔らかい笑みを向けられれば自然と胸は熱く高鳴り頬は真っ赤に染め上がった。

マリアンヌと皇帝の間に生まれた子供であるという、ある意味では初恋にのぼせるジェレミアにとつて絶望的な事実がルルーシユを皇族の中でも特別な場所に置くことになった。

複雑な心境ではあったもののルルーシユはマリアンヌにあまりによく似ており、巨体の皇帝を思い起こす特徴が何一つないことがジェレミアのルルーシユに向ける感情を良い方向に向かわせた。

「騎士の家系を誇るゴットバルト家らしい言葉だ。そうか、お前がゴットバルト家次期当主か。歳の割に気難しそうな顔をしているな。本当に15歳か？」

「はい。中等部3年になります」

ルルーシユはまだ十代半ばだというのに既に甘さの無い、無駄に緊張したドーベルマンのような顔をしているジェレミアを見上げて苦笑を零した。成長期の只中にあるというのに身長は既に成人並で、ト

レーニングでもしているのか体格も良い。

まだ少年と呼べる年頃でこれなのだから、あと5年もすればさぞ可愛げのない大柄で強面の男になるだろう。

「確かお前も騎士を目指しているんだっただか？お前も父と同じ道を行くつもりか」

「その通りでございます殿下。来年には士官学校に入学する予定です。卒業したら皇族直属の騎士になりたいと思っております。未だ半人前の身でおこがましいとは重々承知しておりますが、」

「皇族直属というと選任騎士志望か？シユナイゼル兄上は流石に難しいしコウ姉上は既に候補がいるから、ギネヴィア姉上かクロヴィス兄上あたり狙いか。まああちらはあちらで倍率が凄まじいようだがな」
「え、いえ」

ルルーシユの言葉通り、将来的に騎士になるのなら上を目指したいという野心がジェレミアの胸の内では燃え盛っていた。ブリタニアにおいてはナイトオブブラウズ、その少し下は選任騎士が騎士としての最上位にあたる。

いずれは皇族の選任騎士に、そしてゆくゆくはナイトオブブラウズに。それはジェレミアの夢だ。

しかしだからと言って選任騎士にしてくれる皇族ならば見境なく仕えたいと思う程の節操なしでは無い。出来れば尊敬できる才覚を持ち、尚且つ高潔な性格をした皇子に仕えたいと思っている。

自分が尊敬できる人間でなければ心底から仕え続けることなどできないだろう。そして皇女は遠慮したい。

コーネリアという特例を除いて皇女はほぼ例外なく政略結婚の道具にされる運命にある。そんな女性の騎士になって恋愛関連の揉め事に巻き込まれたり、嫁入り道具宜しく扱われるのは勘弁願いたい。

クロヴィスは尊敬できる才覚を持つかという点においては疑問がある。ギネヴィアは未婚の皇女だ。

しかしかといってルルーシユに対してクロヴィスはあからさまに無能だから嫌だし、ギネヴィアは男性問題が怖いから嫌だ、などと馬鹿正直に言う訳にもいかない。自然と当たり障りのない受け答えに

なる。

「ゴットバルト家は中流貴族ですから皇族の方々との繋がりはその強くは無いのです。クロヴィス殿下もギネヴィア皇女殿下も既に何人もの選任騎士候補の方がいらっしやいますし、今更私のような者がその列に加わるなどあまりに恐れ多いことです」

「そうか。ならば渡りを作ってやっても良いが？それでも兄弟だ。ギネヴィアは難しいがクロヴィスならば割と頻繁にアリエス宮にやって来る。望むのならば適当な理由を付けて会わせてやっても良いぞ」
なんともなさ気に言うルルーシユに目が点になる。

同じ皇族であるルルーシユが橋渡しとなつて皇族に名前を売るなど、千載一遇の好機だ。もし本当にクロヴィスの選任騎士になりたいのであればすぐさまに飛びつくまたとない好機だった。

しかしジェレミアはその申し出に驚くより先にあっけらかんとそんなことを言ったルルーシユの方へと疑問が湧いた。

「どうしてあのような無礼を行った私にそこまでして下さるのですか？」

む、とルルーシユは唇を尖らせて顔を俯かせた。地面に視線を落とすしてぼそぼそと喋る。

「……………チを、」

小さく呟くような言葉はジェレミアには聞こえなかった。

何でも無い、とルルーシユは言葉を続けたが、耳をそばだてるジェレミアに呆れの視線を向けて舌を打つ。

引く様子の無い少年へ、先程までの凜とした口調が嘘のようにぼつぽつと告げた。頬はリンゴのように真っ赤になっていた。

「……………ハンカチを差し出したのはお前が初めてだ、だから……………」

その先はぷい、と顔を逸らして頬を膨らませたために聞けなかった。天使のように可愛らしい皇子にジェレミアはぱああと顔を赤らめた。

なんて可愛くてひねくれていて言葉足らずでとんでもなく可愛い子供なんだろう。

しかし思わず相好を崩したジェレミアが気に食わなかったのか、ル

ルーシユはすつと表情を冷まして腕を組んだ。

「貴族のくせに随分と情勢の読めない馬鹿だと思ったんだよ。赤子のように手を引いてやらねば不安になるほどにな。来年には士官学校に入学する年齢だというのにまだ6歳の俺に心配されるような拙い有様で恥ずかしくはないのか？もつとしつかりしたらどうだ」

さつきまで顔を赤くしていた可愛いお子様と同一人物とは思えない、鼻で笑う可愛げの無いクソガキの態度にジェレミアは崩した相好のまま頬を引き攣らせた。

容姿が天使のように可愛らしい分、年齢にそぐわない大人びた言動と生意気な物言いが非常に鼻につく。貴族から虐められているのは血統云々以前にこの性格のせいではないかといぶかしむ程の変貌だった。実は二重人格なのではなからうか。

「いえ、はあ。申し訳ありません」

「別に謝罪はいらん。情勢を読めと言ったんだ。額から血が出るまでヴィ家の皇子に頭を下げる必要がどこにある」

「いえルーシユ様は皇族であらせられますから」

「……お前も私の境遇程度は知っていよう。無駄なことだ」

自嘲と嘲笑混じりの表情に、容姿、性格、血統と全ての面において複雑な子供だと思いつながらジェレミアは跪いてルーシユを見上げた。

「無駄ではございませんよ。私はマリアンヌ様を尊敬しております。マリアンヌ様はお美しく才覚に満ち溢れた素晴らしい方です。その御令息であり、尚且つ高貴なるブリタニアの血をひくルーシユ様にあのような無礼な真似をしてしまったのですから、本来は死しても償えないほどの罪です」

「世辞……の類ではなさそうだなあ」

ジェレミアのきらきらとした瞳は演技でよく見かける皇族への阿りの類には見えなかった。

感情が表情にそのまま表れる奴だ。まるで犬のような男だと思つた。嫌いじゃない。

相手によつて仮面を付け替えるように表情を作る貴族共より、馬鹿

みたいには正直なこの男の方がずっとマシだ。

「私への阿りは何の意味も無いものだ。しかし私以外の皇族への媚びには意味がある」

「媚びではありません。私は、」

「分かつているさ。お前は馬鹿正直な性質のようだから言っておくが、時には情勢を見て相手を選ぶことが貴族には求められるんだよ。知っているだろう？お母様は今皇陛下の寵姫だがそれもいつまで続くか分からん。あまりヴィ家には関わらず他の皇族へ媚びることが、お前とお前の家のためには良いことだ」

「……分かつております」

「御父上からはあまりお母様に肩入れするなと言われてるんだろう？ゴットバルト家の立場を考えるとそれが正しい。お母様に心酔するのは勝手だが、足元は見失うなよ」

ジェレミアがぐつと息を飲んだ。

貴族である以上当主の言うことは絶対だ。だから父があまりマリアンヌへ肩入れしないようにと釘を刺した以上その言いつけ通りにする義務がある。

これまではその方針に疑問を抱かず素直に飲み込んだが、しかしそれはつまりこの少年を放置しておくということになるのではないか。

そうすればこの可愛くて生意気で捻くれた意地っ張りな皇子はまた物陰で泣くのだろう。

敬愛するマリアンヌもそのことを知らない。庶民出身の彼女は貴族社会の陰湿な虐めに疎いだろうから、もしかするとルルーシュとナリーの境遇に気付いてさえいないのかもしれない。

もしいつかそうと知れば、あの心優しい皇妃は幼い我が子に無理を強いていたことにどれだけ胸を痛めるだろうか。

未だ当主でない以上勝手な動きは出来ない。

しかしジェレミアは大きく息を吸い込んで一つの決め事をした。

「わ、私ジェレミア・ゴットバルトはルルーシュ様が成人するまでのあと12年、あと12年の内にはゴットバルト家の当主になります！」
「いやそれ12年以内にお前の父親が死ぬって言ってるのと同義なん

だが」

「父は糖尿病高血圧高脂血症をコンプしておりますから、きつと死にます！死んでなくても脳梗塞で半身麻痺ぐらいにはきつとなつていきます!!だからきつと私がゴツトバルトの家名を継いでおります！」

ええー、とルルーシュが内心でドン引いているのを他所に、ジェレミアは真つすぐに言いたいことだけを口にした。

周囲を気にせず、いつだって言いたい事を言いたい時に言う。ジェレミアは場の空気を読まない術に非常によく長けたお子様だった。

「だからルルーシュ様が成人される時には私がヴィ家の味方をします！そうすればきつとルルーシュ様を馬鹿にするような奴はいなくなります！」

「……中の上程度の家が一つ味方になつたぐらいじゃ俺の環境はあんまり変わらないんだがな……」

「だ、だったら私がゴツトバルトの家をもつと大きくします！そしてルルーシュ様に忠誠を誓います！」

ぐ、と握りこぶしを作るジェレミアにルルーシュは思わず苦笑いを零した。

たつた12年でそう家格が変わる訳も無い。確かにブリタニアは実力主義を標榜してはいるものの、それでも侯爵以上の爵位を持つ家にはそれなりの歴史がある。

ゴツトバルト家は貴族の中では割と新参者で、コツコツと武勲を積み重ねてようやく辺境伯まで昇りつめた家だ。この先順調に功績を重ねたとしても、社交界で一目置かれる程の家になる頃には目の前の少年は壮年になつているだろう。

この少年はそれだけの月日を卑しい血統の自分に尽くせるだろうか。

無理だろうなとルルーシュは苦い思いを飲み込んだ。結局皇族などというものは血統が全てだ。

同年代の子供と比べて聡明である自負はある。いつか戦場に出て軍師か、もしくは政治の方面で活躍する自信だつてある。

だが碌な後ろ盾を持たない自分ではまず重職に就くことが困難だ。

功績を上げたい貴族や兄弟達は数多い。後ろ盾のない自分が後回しにされることは間違いない。

そして運よく職務を得て功績を上げたとしても、より高い皇位継承権を持つ輩に成果を横取りされるか、出世の道具として子飼いにされる定めだ。

しかし目の前の少年のオレンジ色の瞳がビー玉のようにきらきら光っているのを見て、どうせお前もいつかは嫌になるんだと告げようとした言葉が口の中で迷子になった。

その代わりに自分よりも年上の癖に自分よりもずっと純朴な少年に当たり障りのない言葉を告げてやる。

年頃の少年らしく不憫で幼い皇族を憐れんで正義の味方を演じたいのだろから、適当なことを言つてやれば満足するだろうという意地の悪い思いがその口調には多分に込められていた。

「じゃあお前がずっと、ずっと私に忠誠を示し続けければ、いつかお前を私の騎士にしてやるよ」

「光栄にございますルルーシュ殿下。このジェレミア、非力非才の身なれど身命を賭して御身にお仕え致します！」

そう言つて15歳のジェレミアは、6歳のルルーシュに向けて未だおぼつかない手つきで敬礼をした。

15. 5 楽園のありか

「スザク、何を見ているの？」

「ルルーシュとジェレミアさんが初めて会った時の記憶を」

広大な荒野の中でスザクはユフィから顔を背けて視線を宙に彷徨わせていた。

視線の先には草の一本も生えない乾いた大地が開けているが、網膜は12年前のアリエス宮を写し出していた。

ルルーシュとジェレミアが初めて出会った光景を見たいと思うと脳内に自然とその光景が思い浮かんだのだ。異様にリアリティのある夢のような感覚だった。しかしそれは夢ではなく、12年前の実際の光景なのだということはしっかりと理解していた。

とても不思議な感覚だった。脳細胞の一つ一つが違う人生を歩んだ人間で作られていて、12年前のあの光景を見た人の記憶を盗み見ているような感じがした。

実は自分も彼らと同じ脳細胞の一つでしかなくて、今は彼らに押し上げられて主人格として表に立っているだけなのかもしれない。

自分を表に出せ、そこをどけ、と叫ぶ無数の人間が頭蓋骨の内部で騒めいているような落ち着かない感覚がした。

「どうしてルルーシュとジェレミア卿の記憶を見ていたの？」

「ユフィにまた会えて嬉しいから……嬉しいけど、どう話していいのか分からなくて。あの二人は一番最初に出会った時どんな話をしたんだろうって思ったんだ。そうしたら頭に浮かんできた」

「二人の出会いは参考になった？」

「ううん、あんまり……僕は君にあんなに失礼なことではできない。それに僕は君の騎士としてはもう失格だろうから、ジェレミア卿みたいに君に忠誠を誓う権利はもう無いんだ」

頼りなく首を振るスザクを前にユフィは笑みとも悲しみともつかない顔をしてドレスの裾を握り締めた。

ユフィを愛している。心からの忠誠を誓っている。だからその復讐を自分は成した。

そのことへの後悔は呆れる程に無い。

だがあれだけの虐殺をした自分にはユフィの前に顔を出す権利が無いことぐらいは承知している。

だから本当ならば今、自分は走ってこの場所から逃げ出さなくてはならないのだった。

でもそれはできなかった。目頭が熱くて目が見えないから。直視出来ない程に。見なかった振りなど出来ない程にユフィは美しく眩しかった。

「……ユフィ、君はここはどこなのか知っているの？僕は皇宮で仕事をしていたのに、いつの間にかここに来ていたんだ。ユフィがいるから現実の世界じゃないことは分かるけど……僕は夢を見ているのかな」

「スザクはここがどこだか分かる？」

透き通った瞳で見据えられると心臓がリズムを狂わせる。

何もかもを見透かすようなユフィの瞳が今は怖かった。以前のような純粹さを持ち合わせていないことを咎められているような気がした。逃れるように周囲をぐるりと見回す。四方全てが雑草さえ生えない荒野に囲まれていた。

「荒野、かな。アフリカ大陸とか、多分そこらの……すごく荒廃していて、近くに人は住んでいないと思う。人どころか動物もいない。草さえ一本も生えていない。一面枯れ果てているよ」

「そう。それがスザクの今の気持ちなのね」

寂しげな顔をして俯いたユフィは、しかしすぐに気を取り直すように顔を持ち上げた。

「私にはね、スザク。ここはトウキョウに見えるわ。アツシユフォード学園が見えて、その向こうには政庁があるわ。人通りがすごく多くて、私とスザクはスクランブル交差点の真ん中に立っているの。でも誰も私達に気を留めないで歩いているわ」

「それがユフィの今の気持ち？」

「ええ。トウキョウと一緒にデートしたことがあるでしょう？あの時と似てるけど、ちよつと違う気分。すつごくドキドキしてるけど、

ちよつと寂しいの」

ユフィは近寄つてスザクの手を握った。酷く冷えて強張っていた。「スザクは私に会えて嬉しくないの?」

「嬉しいよ。これまで生きてきて一番嬉しい。できたらずっと、ずっと一緒にここに居たいと思う。でもそれと同じ位に、君にだけは会いたくなかった」

「それはあなたが沢山の人に酷いことをしたから?」
「うん」

深く頷いたスザクは目の前に広がる荒野がぐにやりと歪んで形を変えたことに気付いた。

足元には氷の大地が広がっていた。上空はフレイヤの二次災害を受けて雲の欠片さえ吹き飛ばされている。

フレイヤで抉れた大穴の底に自分とユフィは立っていた。凍り付きそうな寒さに身震いしながらも、温かいユフィの指先から手を離したくてしようがなかった。

こんな寒い場所にあつてもユフィの指は温かい。自分が触れていたら凍えてしまうだろう。

「僕は君の騎士として相応しくないんだ。君を護れなかった。それに僕は何をしても、どう頑張つても人を殺してしまうから——僕は人を不幸にしかできないから」

「でも私はスザクが騎士になつてくれて幸せだったわ。騎士叙任式の時にはもう一生分の幸運を使い果たしちゃったんじゃないかって思つたくらいに幸せだったの。スザク以外に、皇女の私じゃなくて、お姉様の妹の私じゃなくて、ただのユフィを見てくれた人はいなかったもの」

「……………僕がいなくても、いつかは僕よりずっと君のことを大事にできた人が現れたよ」

「それでも私が好きなのはスザクなの。スザクだけなのよ」

水中に開いた睡蓮のような掌がまだ10代の青年のものとは思えない傷だらけの拳を覆うように包み込んだ。温かいを通り越して熱

い掌だった。

もう死んでいる筈なのにユフィはスザクよりもずっと生き生きと
していた。瞳は暗中を突き進む蛍のように爛々と輝いていた。むし
ろ自分の方が死んでいるようだと思う。氷の壁に囲まれて、ここは棺
桶のようだった。

「失敗したことばっかり気にしてちゃあ駄目。下ばかり見ているは、
駄目。胸を張ってよ。前を向くのよ」

「ただの失敗じゃないんだ。沢山の人が死んだんだ。僕は、」
「じゃあそれ以上の人を助けましょうよ！」

只管に輝かしいユフィに、自分が好きになったユフィは確かにこの
ユフィなのだとスザクは泣きたくなかった。

愚かだったかもしれない。でもユフィはいつだって前しか見てい
なかった。前に突き進んでいた。そんなユフィが好きだった。

どうして好きになったのかと思うと、それは、自分は前を向いてい
ても前に向かって歩くことはできないでいたからだろう。自分が欲
しいものを持つている人はとても美しく見える。

日本を救いたいと思い、ブリタニアの暴走を止めたいと思い、その
思い自体は間違っていないなかっただろうが、そのための手段を悉く間違
えた。一歩も前に進むことができなかった。

今から思うとそれも当然だと思う。だって自分は誰かを幸せにす
ることなんて出来ないのだから。

誰一人として自分が幸せにできた人なんていないのだ。

ユフィだって、ナナリーだって、ルルーシュだって、日本人と呼ば
れる人たちだって。

だから何もしない方が良いんだ。

「馬鹿じゃないの」

それはユフィの声ではなかった。ユフィよりもずっと棘がある苛
立ち交じりの声だった。

顔を上げると、大穴の上に燃えるような髪色の少女が立っていた。
カレンは先程までの学生服姿ではなく鮮やかな赤色の騎士服を靡か
せて堂々とした姿を晒している。

遙か頭上に立っているカレンは陽光のような瞳を輝かせてスザクを睨んでいた。

「カレン? どうして」

「どうしても何もあんたの中にいたのよ。あんたが呼んだから出てきたの」

自分の中に。 どういうことだろう。

疑問符を頭に浮かっているスザクを米神に血管を浮かべたカレンが指先で突き刺した。

「あーもう! まだ気づかないの!? 今、あんたの中に地球全部の意識があるの!! 私も今はあんたの一部なの!! あんたが集合無意識神なのよ!!」

「は、え?」

「ルルーシユのギアスですよ、スザク」

糸がピンと張るような声が響く。ユファイは苦笑いをしていた。瞳に影が落ちていた。

「ルルーシユにかけられたギアス、覚えていますか?」

「え? 僕がルルーシユにギアスを?」

覚えがない。

記憶を掘り返そうと意識を集中すると、網膜の表面にそっとその時の光景が差し出された。

まだルルーシユがゼロの時のことだった。 もう1年近く前になる。

自分はジークフリートに追いつめられたゼロを地面に縫い付けるようにして拘束した。ゼロの仮面を剥いで名誉ブリタニア人としてシユナイゼルの庇護下に置こうとしたのだ。

当然ゼロは暴れて抵抗して……その後の記憶が無い。

そこまでで映像は途切れて、瞳はフレイヤの大穴を再度写し出した。ユファイとカレンが揃ってスザクを見ている。ユファイは同じ高さから、カレンは高みから見下ろして。

「あの時か、僕は……」

『俺に触るな!』だってさ」

やれやれと首を振るカレンにスザクは訝し気に眉根を顰めた。

ルルーシユが自分にかけてギアスは接触を阻害するものだったのか。そう考えると、これまでルルーシユに触れようとした時に悉く体が動かなくなったことの原因がつか。

しかし敵対関係にあったあの時期ではギアスの力で無理やり配下に加えた方がずっと有益だっただろうに。何故そうしなかったのだろうか。

疑問を浮かべているスザクに答えることは無く、ユフィは掌でスザクの傷だらけの拳を握って滾々と言葉を続ける。

「ナナリーのギアスにより全世界の人々は肉体を捨てて、集合無意識として一つになりました。集合無意識の中には優劣は存在しません。いずれも等しく融解して、ぐずぐずに溶けて近い内に同一の存在になり果てるものです」

「唯一の例外が、あんたよ」

「僕？」

「うん。スザク君だけなの」

2人とは違う、鈴のような声の出所を探して視線を上げるとメイド服のシャーリーが大穴の淵に腰かけていた。猫のように大きな瞳は陽だまりのように柔らかい色でスザクを見降ろしていた。

「集合無意識の中には沢山の記憶があつて、その中にはルルの記憶もあるから。ルルに触れないために、スザクの意識は集合無意識に取り込まれないよう抗っているの」

「それにこのままナナリーの思い通りに行くとルルーシユも集合無意識に取り込まれかねないからね。あんたの意識は、ルルーシユのギアスの力で集合無意識から脱しようとしてんのよ」

「ルルーシユに触れないために、僕が？」

「ナナリーのギアスは強力だから完全に集合無意識からの脱出はできないみたいだけど、集合無意識の中ではあたし達よりあんたが頭一つ分飛びぬけた位置にあることは確かよ」

だから、という言葉の後にカレンは大穴の上から飛び降りた。

穴の底からつぺんまで高層ビル程の高さがある。傍から見ればカレンの行動は自殺行為でしかなかった。

慌てて落下予測地点までかけようとしたが、ふと、そもそもどうしてこんなに距離があるのに声を張り上げている風でもないカレンやシャーリーの声はつきり聞こえていたのだろうと疑問が湧いた。

声だけではない、米粒程の大きさにしか見えない程の距離があるというのにカレンやシャーリーの姿は間近にあるようにはつきりと見える。

そこで、ここは現実ではないのだから、と気づいて駆け出していた足を止めた。予想通りカレンは重力を感じさせない滑らかな足取りで大地に降り立ち、そのままスザクへと歩み寄ってきた。

目の前で仁王立ちして腕を組むカレンは歴戦の勇士といった面持ちで、とても同年代の少女とは思えない風格があった。

「今はあんたがあたし達の、地球全体の代表なのよ。気に食わないことにね」

「……代わる?」

「代われるもんなら代わりたいわよ、この馬鹿!!」

もしカレンが猫だったら全身の毛を逆立てて威嚇していただろう顔つきで睨まれる。

「カレンさん、これはスザクのせいではありませんから……」

「黙ってなさいこの頭の中すっからかん皇女!! 苛々するのよこいつ見ると! ブリタニアと黒の騎士団で敵対してた時も苛々したけど、今はあの時の30倍は苛々するわ!! いっつも暗い顔!! いっつも後ろ向き!! いっつつつも、自分が世界で一番不幸ですみたいな顔して!! あんたより不幸なのにしっかり前向いて生きてる人間が腐る程いるっていうの!! 馬あああああつつつ鹿じゃないの!?!」

がしっつと胸倉を掴まれたかと思えば遠慮の欠片も無くぶんぶんと揺さぶられる。

体格では自分の方が良い筈なのに、カレンは性差の劣位を意にも介さず両腕の筋力のみでスザクを吊り上げて頭蓋骨をシェイクした。頸椎が軋む不穏な音が鼓膜の内側で鳴り響く。

そこで、どうしてカレンがこの場に現れたのかスザクは理解した。自分はどうして誰かに詰って欲しかったのだ。その適任者として力

レンを選んだ。だからカレンが現れた。

自分の知り合いはみんな優しい人で、こうして遠慮なく自分を詰ることのできる人は少ない。ルルーシユならできるかもしれないが、父を殺したと責めた今では無理な話だろう。

それに今、集合無意識自分の中にルルーシユはいない。残る人類の中で知り合いであり尚且つ躊躇なく人をぶん殴って声高に非難できる人物はカレンだけだったのか。

「流石はナイトオブワンだね。どうしてジェレミアさんじゃないのかなって思ったりもしたけど、そうか、だからだったのか……カレンは凄いな」

もし自分ではなく、カレンがユファイの騎士だったら。

想像しても何の意味も無いことだが、その想像は脳裏を搔きむしつて目頭が燃えるように熱を孕んだ。もしそうであれば、ユファイは死ななかつたかもしれない。

そう思った瞬間に頬を引っぱたかれた。女の腕力とは思えない威力だった。フルスイングしたフライパンでぶん殴られたような衝撃が頭蓋骨全体を揺さぶり脳の血管が数本千切れる音を聞いた。

倒れないよう足を踏ん張って少し低い位置にあるカレンの顔を見下ろす。燃える瞳は命の危険を感じさせる程の怒気に塗れていた。しかし同時にはつとする程に美しかった。

そうか。カレンは自分自身の中にいるのだから、自分が何を考えているのかもカレンには分かっってしまうのか。

「あんたはそうやっていつ迄、もしああだったら、こうだったらって考えるのよ！いい加減ちゃんど現実見なさいよ！もう終わっちゃったことなの！そして今はあんたが全世界の代表なの！あんたが私達、集合無意識の一番前に立ってんのよ！ルルーシユでもシユナイゼルでもユーフェミアでもなく、あんたが!!」

「……無理だよ。僕は人を不幸にしかできない」

「無理とかどうとかじゃないのよ、スザク。あなたにしか出来ないの。ギアスに対抗できるのはギアスキャンセラーかコード、もしくは他のギアスだけなのだから」

「スザク君しかないの。今地球にいるみんながスザク君なんだから。ユーフェミア様も、カレンも、ロイドさんも、ミレイ会長も、リヴアルも、あたし達もみーんな、スザク君っていう大きな船に乗ってるの。スザク君が舵取りをしてあたし達を連れて行ってくれないと、あたし達はみんな迷子になっちゃうのよ」

「あんたが行く方向にあたし達は行くしかないのよ！それだけでも滅茶苦茶気に食わないっていうのに、あんたがそんなにうじうじしてたらバキバキになるまでぶん殴ってやりたくなるわ!!」

勝手なことを言う。

正確な状況さえ理解していないというのに、彼女たちはみんなスザクに全てを押し付けてくる。

ユフィは集合無意識がスザクだと言った。確かに自分の中には無数の意識が蠢いている感触がある。その全ての意識の中で一つ浮いた、主人格とも呼ぶべき存在が自分であるということも、何となく分かる。

しかしだからと言って何をすればいいんだ。どこに行くべきなのか。

今はどこにいるのか、それすらも分からないのに。

頭を抱えて蹲る。肩から背中を撫でる指は優しいけれども背中を押す力強さに満ちていた。

「どうして僕なんだ……」

「偶然よ。運命と言われたいならそう言ってもいいけど、でも言葉を変えただけで別に何も変わらないわよ」

「ねえ、スザクは自分が不運だと思うの？」

「こんな目に遭ったら不運だと思いたくもなるよ」

「そうね。何かを選ぶって、誰かを背負って歩くのって大変なことだから」

でもね。ユフィはスザクを抱きしめた。癖のある髪へ愛おしそうに唇を落としたり。

酷く温かかった。ずっとこのままここにいたいと思った。細い胴体を抱きしめて首筋に顔を埋めた。

母親が赤ん坊にそうするようにユファイは縋りつくスザクの頭をゆつくりと撫でた。

「沢山の道の中から一つを選ぶのは大変な事だけれど、不幸なことじゃないのよ。それが生きるっていうことなんだから。強がって、傷ついて、空回りしながら、それでも選ばなくちゃならないの。」

スザクだけじゃないのよ。私たちは皆、そうやって戦っていくの。それは不幸なことだと、私は思わない」

「僕は……どうすればいいの？教えてよユファイ」

すつとユファイはスザクの背後を指さした。

指先に吸い寄せられるように視線を向ける。指示された先には急斜面の氷の壁が聳え立っているだけだったが、ふとその中心が光っていることに気付いた。

あれは何だろうと思うと、それは突如として大きくなり、スザクの眼前にその全貌を現した。

それはランスロットだった。青い両眼のレンズは強く、脆弱な所有者を非難するかのように煌めいていた。

「それはスザクが考えないといけないことなのよ」

はつと振り返ると、さつきまで自分を抱きしめていた筈のユファイがもう手の届かない場所へと遠ざかっている。

ユファイだけでなく、カレンも、シャーリーも、スザクを見据えたまま氷の大地と共にスザクを置いて行こうとしていた。

ランスロットだけをその場に置いてスザクの周囲全ての光景が、打ち寄せた波が引いて行くように過ぎ去って行く。

「どうしてスザクが全ての主導権を握っているこの世界で、あたし達がこんなに厳しい事をスザクに言っているのか分かる？」

「待って、待ってユファイ！行かないで！ずっと、ずっと一緒に居てよ！ユファイ!!」

「スザクがね、そう望んでいるからなのよ。このままここに居ちやダメだって、スザクはもう気付いているの」

「だからスザク君は思い出すだけでいいの」

「訳が分からないよ！ここはどこなんだ！僕は一体何になってしまっ

たんだ！どこへ行けばいいんだ、どうしてユフィは僕を置いて行くんだよ………っ」

「思い出して、スザク」

「どうしてスザクは戦おうとしたの？どうして今も戦っているの？スザクは、どこに行きたいの？」

「待って、待ってよ、待ってよ!!」

伸ばした指先は何も捉えることは無かった。3人の姿は消え去り、周囲は全て只管に薄暗いだけの空間になった。

耳が痛いほどの静寂が満ちていた。自身の息遣いだけが妙に大きく聞こえた。

「みんな、みんな………どうして僕を………僕だけが、」

「どうしたのおスザク君？」

背後から聞こえた声に驚いて振り向くとロイドが立っていた。

「ろ、ロイドさ、」

「ランスロットの調整は上手く行ってる？初陣だからってあんまり緊張しちやあだめだよお」

周囲を見ると、そこはKMFの格納庫だった。

ブリタニアのペンドラゴンに備えられてる巨大な格納庫ではない。E・U・の駐屯地に据えられている、カビ臭くてみすばらしい場所だった。そこらに錆びついた部品が投げ捨てられていて、磨き上げられた芸術品のような美しさを持つランスロットが異様に浮いて見えた。

スザクはランスロットのコックピットに座り込んで慣れない手つきで体を座席に固定している最中のようだった。ランスロット・アルビオンのものよりもっと単純で粗雑な印象を受ける造りは、ランスロット・エアキャヴァल्ली……いや、その前のフロートシステムさえ導入されていないランスロットの初期型のものだった。懐かしい。初期型ランスロットの造形は確かに美しいが、ランスロット・アルビオンを知った今を思えば洗練されているとは言い難かった。

スライド式のコックピットに体を固定しているスザクをロイドがにまにまと眺めている。

覚えがある。これは自分の初陣の光景だ。もう2年近くの前のことだ。

埃臭い空気に眉を顰めながらスザクは初陣への武者震いを抑えようと歯を噛みしめた。

「いえ、はい。緊張はしていません」

「それはいいねえ。良いデータが取れそうだよお」

『長官、早く司令部に戻ってください』

「はいはい！すぐ戻るよセシル君。じゃあねスザク君。健闘を祈ってるからね」

「ありがとうございます」

ロイドが離れると同時に座席がランスロットの体内へと滑り込んでゆく。

ガシヤンと座席がコックピットに固定された途端に計器類が発光して、メインカメラに映る画像が目の前に広がった。

予め受けた説明通りに操縦桿を握って、機体状態を確かめる。

エンジンOK、エネルギーオールグリーン。メインカメラは数か月前まで住宅街だった、今は廃墟と化したE・U・の街並みを映してい

る。

『スザク君、準備は良い?』

「はい、セシルさん。問題ありません」

『冷静でいいねえ。本部との通信状態も問題なし。じゃあ発艦準備行くよ、時間もあんまり無いからね』

着慣れないパイロットスーツを体に染み込ませるように身を振り、操縦桿を拳に慣らすように握り締める。

そうだ。初めてKMFに搭乗した時は心臓がうるさくてしよすがなかった。絶対に手柄を上げて、出世して、日本を取り戻すんだという思いがぐるぐると胸の中で渦巻いて痛いほどだったのだ。ちょうど今みたいに。

『エネルギーブースト、オールグリーン』

『チヨークアウト!ランスロット、発艦!!』

「ランスロット、発艦!!」

両足をすさまじい速度で押し出されて大地に吹き飛ばされる。

その勢いのままに全速力でランスロットを走らせる。瓦礫という障害物を反射で避けて、足場にして、廃墟になったE・Uの街並みを一本の矢のように白いKMFが駆け抜ける。

初陣はブリタニアへのテロ行為を繰り返しているテロリストの殲滅が任務だった。

スザクはそのままテロリストの本部まで駆けて行って無茶苦茶に暴れまくった。碌にKMFも揃えられない弱小のグループだったため、10分とかからず殲滅した。

ブリタニア司令部からロイドが大量に集まったデータを前に楽しそうな声を上げているのが聞こえて苦笑を零す。新しい上司は子供のような人だということを知った。

本部が潰れて散り散りになったテロリスト達を、今度は虫を追い立てているかのように市街地を駆け回る。ランスロットの姿を見るなり悲鳴を上げて重火器を乱射するテロリストを、おもちゃを壊すように次々に倒していった。

そうだ。あの時は倒しているんだと思った。人を殺すために銃を

撃つ悪い奴らを、正義のヒーローみたいにばったばったとなぎ倒して
るんだって。

でも実際は殺していたんだ。

殺さないように手加減はしていた。でも初陣で、ランスロットの細
かな操縦まではできなかった。そもそもKMFと人がまともに戦う
ことが不可能なのだ。少し力を込めただけで頭蓋骨は割れて脳は潰
れてしまう。そっと押しただけでも肋骨が折れて肺に突き刺さって
しまう

死屍累々が重なる瓦礫の中で、セシルから撤退指示を受けてスザク
はランスロットの進行方向を司令部へと向けた。だが背後から風船
が破裂するような銃声が聞こえて、反射的にランスロットの拳で背後
を薙ぎ払った。

軽い衝撃がランスロットの拳を震わせた。あまりに軽い感触にま
さかとメインカメラを向けると、ライフルを構えたままの酷く痩せた
子供が地べたに横たわっていた。瓦礫に全身を叩きつけられたらし
く、ぽつぽつと血痕が瓦礫から地面を濡らしていた。

こんな子供が自分の意思でテロに参加している訳が無い。きつと
脅されて無理やりに銃を持たされたんだ。

慌てて駆け寄り、無事を確かめようとカメラをひしゃげたヘルメツ
トの下に合わせる。

どくどくと額から血を噴き出している少女はどう見ても即死だっ
た。脳はヘルメットごと潰れて脳漿を垂れ流していた。

しかし少女は眼球の形が分かる程に目を見開いてスザクを睨みつ
けていた。頭蓋骨の形が分かるくらいに痩せた頬から黒く汚れた歯
を剥きだしにしてランスロットに向けて唾を吐いた。

「よくもお父さんとお母さんを殺したな。よくもあたしまで殺した
な。許さない。許さないからな。死んでも絶対に、絶対に許さないか
らな」

言葉を失い、全身を打ち震わせる。

あの時殺した少女は、今、スザクの中にいる。

周囲の光景がうねって姿を変えた。

今度はパイロットスーツではなく、スザクはただの一般兵の服を着ていた。すぐに、これはまだ自分が騎士ではなかった時のことだと分かかった。

アフリカで勃発した戦線の後方部隊に派遣された時の光景が目の前に広がっていた。何年前のことだろう。3年前か、そこらだろうか。

乾燥した大地で細々と暮らす集落から徴収した木造の小さな建物の中で、スザクは怪我人を数えていた。丸太のように目の前には軍服に身を包んだ兵士たちがごろごろと横たわっている。水、水、水、という呻き声が合唱になって地震のように建物を揺さぶっていた。

この時この地方は乾季の真ただ中にあり、尚且つ気温はブリタニア人からしてみれば信じられない程に高かった。なのに補給線が半分以上潰されたせいで供給される水が少なく、派遣されていたブリタニア兵はみんな苦しい思いをした。

特に名誉ブリタニア人のスザクは死なないギリギリの水分しか補給されず、喉が乾燥し過ぎていつも痛みを感じていた。

早く仕事を済ませようと粗末なシーツの上に横たえられている兵士の数と容体を紙にメモして行く。ふと背後から視線を感じて振り返ると、扉には黒い肌をした10歳前後の子供たちが眼を輝かせてス

ザクを見ていた。

この地域では黄色人種は珍しいのだろう。手を振ると、にぱつと子供たちは笑って手を振り返してくれた。

凡そをメモし終えて上官に報告しようとして外に出ると、先ほど手を振ってくれた子供の一人が薄汚れた土器をスザクに差し出した。器には並々と水が注がれていた。

「水？僕に？」

「Kunywa maji！」

「え？」

「Unaonekana umechoka。」

「Nitakuwanzuribaadaya maji ya

akunywa！」

「……………とりあえず、くれるってことでいいのかな？」

押し付けるように渡してくる器を、水が零れないように慎重に受け取って中身を飲み干す。

水には小さな泥が浮いていたが、そんなものが気にならない程に喉が渴いていた。水が乾ききっていた口の中を潤した。ぬるくて泥臭い水だったが、とてつもなく美味しかった。生まれてきてこんなにおいしい水を飲んだのは初めてだとさえ思った。

飲み終えてぶはあと息をついて、スザクは器を子供たちに返した。

「ありがとう、すごく美味しかったよ」

「Weweni baridi. Hebu niolewe！」

「Nitawapamajitena kamakichako。」

何を言っているのかは分からないが子供たちは満面の笑みだった。ブリタニアや日本ではあまり見かけない、太陽を写し取ったような笑顔は目が潰れそうな程に輝かしかった。見ているとこちらも自然と笑顔になるような、圧倒的なエネルギーを全身から放射しているようだった。

ばいばいと手を振る子供たちに手を振り返して、スザクは幾分か取り戻した気力と共に上官の下へと向かった。

その夜、スザクは他の名誉ブリタニア人と共に粗末な宿舎で雑魚寝をしていた。

寝苦しい夜で、何度も寝返りを打ったが眠れそうにない。妙に目が覚めていた。

眠らなければ明日が辛いと分かっているため、なんとか寝ようと目を瞑る。しかし夜中に響き渡った悲鳴に思わずスザクは眼を見開いて肩を揺らした。

甲高い金管楽器のような声はただ事ではないと周囲に知らせる響きを持っていたが、戦場では珍しくも無い音であったために一緒に枕を並べていた誰もが気にしなかった。

この国はブリタニアの敵国であり、この集落は既にブリタニアの占領下にある。

占領下にある民衆への略奪行為は重罪だが、咎める者がいなければそれは無かったことになる。軍隊はそうやって持ちつ持たれつで回っているのだ。

スザクだって占領した村人から食料を奪ったことがある。そうしなければ碌に食料が補給されない名誉ブリタニア人の兵士は死んでしまうからだ。だから常の事ならば、スザクはその悲鳴を無視しただろう。

しかしその声は明らかに年端も行かない子供の声だった。飢えた軍人が食料や水を奪うにしても子供を襲うだろうか。嫌な予感があった。

スザクは薄い毛布をそつと捲って宿舎から抜け出した。小用だと思っただろう、誰も止めなかった。悲鳴の尾を掴んで外へと足を向ける。

数分もしない内に悲鳴を発した少女の下へとスザクは辿り着いた。昼間、水をスザクに手渡した子供の首が千切れて地面に赤黒い模様を描いていた。

模様を辿ると痩せた浅黒い肌の幼い四肢を貪るようにスザクの直

属の上官がのしかかっていた。

首から先を無くした遺体の足を肩に担ぎ上げて、上官はズボンの前だけをはだけて、死後硬直の未だ始まっていない膣内に挿入しているらしかった。

軍人らしい大男の律動に合わせて少女の細い踝がぶらぶらと揺れる。それは縁側に吊られた風鈴が風に煽られてゆらゆらと揺れている様に似ていた。

茫然と立ってるスザクに気付いた上官が振り向いた。少尉の階級を持つ上官は、報告書を持って行った時は疲れた中年男といった顔をしていたが、今はあの時よりずっと若々しく満ち足りた顔をしている。

立ち尽くすイレブンに何を思ったのか、吸っていたタバコを地面に擦り付けた上官はにぱりと人好きのしそうな優しい笑みを浮かべた。

「おう、お前もやるか。名誉ブリタニア人は配給が少なえから疲れるだろ。使い古しで悪いが、まだ温けえから楽しめるぞ」

「い、いえ、僕は」

「遠慮すんなって。ああ、それとも生きてる女じゃねえとダメか……まあそれが普通だけだよ。でもずっと戦場にいると段々狂ってきちまうんだよなあ」

あはは、と笑う上官は、名誉ブリタニア人でも差別しない人道的な人だと評判だった。

スザクも軍人になってから暴力的だったり差別思考が酷かったりする上官に散々な目に遭わされてきた身だ。目の前で少女を貪る今の上官は、これまで経験した上官の中で一番優しくて気配りの上手い人だった。

首を振って後ずさる。

スザクにその気がないと悟った上官はさっさと寝ろよと告げて行為を再開した。

ぶらぶらと揺れる少女の滑らかな足首に、このあまりに惨い行為を止めるべきだということは分かっていた。しかし止める訳にもいかなかった。

暗黙の了解として、占領下の民衆への暴行は見逃されている。

この上官は良い人だから、スザクが止めたら止めてくれるかもしれない。だが軍隊では足並みを崩す輩を嫌う。名誉ブリタニア人を差別しない珍しい上官を非難してしまうと、名誉ブリタニア人にさえ疎外される立場に立つことになるかもしれない。

それにいくら止めたとしてもそれは今日限りのことで、明日にはスザクに見つかからないようこの上官はまた他の少女を殺して遺体を強姦するだろう。

そうと分かっても、しかしスザクには死体になっても辱められる少女を見捨てて逃げることもできなかった。

その場に縫い付けられたように身動きのしないスザクへ、そういえばこの兵士はまだ戦場に慣れない15か16歳程度の少年だったと思いついた上官は腰を止めた。

戦場の習いとはいっても世慣れぬ雰囲気の少年が眼にするには酷すぎる光景だろう。増してやスザクはアジア人らしく童顔で、ブリタニア人の上官から見ると戦場にいることさえ違和感を覚える程に幼く見えた。

途端に胸中で膨らんだ罪悪感のために汗を滲ませながら上官は乾いた少女の膺から自身を抜こうと身を動かした。

ぬちやりという音と共に欲が少女から抜かれると同時に、パアンと銃声が鳴った。上官の左肩からパツと血が散った。

「ぐあつ」

「N i n i c h a k u f a n y a k w a d a d a y a n g u ! ! ! !」

銃声の元に目を向けると、物陰から少女とあまり歳の変わらない少年が眼に涙を溜めて飛び出した。

洪水のような星の輝きが少年の手に持つ拳銃に反射して鈍く光っていた。

「M i m i n i t a k u u a ! ! N i t a k u u a ! ! !」

目に殺意を灯している少年にスザクは咄嗟に飛び掛かり、手首を地面に縫い付けた。

痩せた体軀には見合わない筋力でばたばたと暴れる力強さに動揺しながらも、スザクは押さえつける手を緩めずに少年の動きを封じた。うーうーという呻き声と零れる涙に喉奥が焼け付くような痛みが走った。しかし痛みを飲み込んで、スザクは左肩を抑える上官へ目を向けた。

「少尉、ご無事ですか!？」

「っ、ああ、肩を掠っただけだ、糞、ふざけやがって」

少尉は腰に装着していた拳銃を取り出して銃口を少年の頭に向けた。指は引き金にかかっていた。

思わずスザクはぱつと少年の手を離してしまった。このままでは少年が殺されると思ったのだ。

逃げろと言う前に、少年は素晴らしい速さで手に持った拳銃で上官の額を撃ちぬいた。

上官が地面に崩れ落ちる。

軍人らしい大きな体格をした男が重力に引き崩されて、どきりと音がするとほぼ同時に、少年はパパパパと乾いた連続音と共に全身から血を噴き出して死んだ。

軍靴が地面を蹴り飛ばす音が数人分聞こえてきたが、スザクはその場から立ち上がれなかった。3つの死体に囲まれてスザクはただ項垂れていた。少女の遺体のすぐ傍に割れた器が落ちているのが見えた。

「銃声が聞こえたんだが何があったんだ!」

「おい、あれ、少尉じゃ……?」

「少尉、少尉!!」

「枢木、何があったんだ。説明を——」

騒々しい声は段々と遠ざかる。

地面に落ちた3つの死体の、首だけが捻じ曲がって真つすぐにスザクに視線を向けた。何れも非難の色をした瞳だった。

「どうして私を凌辱するのを止めてくれなかったの?」

「どうして少年から手を離したんだ。俺はそのせいで死んでしまった」

「どうして僕が復讐するのを止めたんだ。殺してからすぐに逃げれば僕は死なずに済んだかもしれないのに」

「つ、それは、違う、違う、僕は、」

涙がはらはらと零れた。

どうして自分はあの時、あんな行動を取ってしまったのだろう。

違う行動を取っていればもしかしたら一人は助けられたかもしれないのに。

いや、この時だけじゃない。ずっとそうだった。

誰かを助けられる瞬間に、自分はいつだって、誰かを助けたいと思いながら、誰も助けられない選択肢を選んできた。

人生は選択することだとユフィは言った。もしそうなのだとしたら、人生は酷い。

間違えたら二度と戻れない。後悔しても何も変わらない。死者は生き返らない。

前になんて進みたくない。ずっとここにいたい。

明日なんて来なければ良い。あの楽園に帰りたい。

スザクは両の拳を握り締めてアッシュフォードのあの穏やかな生活に戻りたいと一心に願った。

今は自分が集合無意識神なのだとシャーリーとカレン、ユフィが言った。だったらあの平和な日々に戻りたいと願えば、戻れる筈じゃないか。

心からそう願ひさえすれば。

荒涼とした風景がぐるぐると回転する。降ってくるような星空から本当に星が降ってきて、きらきらと発光しながらスザクの周囲でゴムボールのように飛び跳ねた。全部の星が落ちてしまったせいで真つ暗闇になった空が全てを覆い隠す。

行き先はアッシュフォード学園、いや、ブリタニアでも、どこでもいい。

ユフィも父さんも、誰も死んでいない、誰も自分のせいで死んでいない世界であれば――

零れ落ちた星屑は港町を照らす街灯に居場所を変えた。窓枠から広がる街の景色を見てスザクは息を吐いた。

穏やかな街の有様は表面だけだ。あの灯りの一つ一つに、普段は子供や親のために頑張って働いているが、人種や国籍の違う人間を前にすると鬼のようになる人々が住んでいると思うと、不思議になる。

今日もルルーシユは街の人に石を投げられた。だが今日がいつもと違うのは、普段なら器用に石を避けるところを買い物途中だったために荷物が邪魔で石を避けられず、さらに運悪く頭に当たって血が出てしまったことだ。

幸いなことに血はすぐに止まった。痛みも無いと本人は言っていたが、頭の怪我は後から酷くなることもあると聞く。父の勧めもあり今日は大事を取って柩木邸に泊ることになったのだ。

スザクは幼い手足でナナリーの車いすを押しながら柩木家本邸を歩いていた。

数か月前に赴いた廃墟のような柩木邸ではない。6年前の記憶通りの、目がちかちかするような豪華な内装が周囲に広がっている。

12歳の時は普通より綺麗で大きな家だと無邪気に思っていたが、18歳となった今柩木邸を見回すと纏まりのない内装に落ち着かなさを感じる。

皇室の品良く尚且つ洒脱な内装に慣れたせいなのかもしれないが、見た目に派手な和洋の調度品が統一感なく入り混じっていて、見回すだけで目がちかちかとするのだ。

車いすに座るナナリーが眉を顰めるスザクを見上げた。

「どうしたのですか？スザクさん」

「ううん、何でもないよナナリー。ただルルーシユがなかなか帰らないなって思ってる」

「お話が盛り上がっているみたいですね。お兄様は政治のお話が好き

ですから」

「……僕にはまだ早いつて父さんには書斎にも入れて貰えないのに」
ブリタニアからやって来た兄妹が柩木邸に泊る時、必ずルルーシュは父と夜遅くまで話をする。その時間があの頃は嫌いだった。

ルルーシュは確かに聡明だ。それでも自分と同一年の子供だというのに、どうして自分と違って一人前扱いをされているのだろうかと不満だったのだ。

今思うと、あれは自分より大人びていたルルーシュへの幼い嫉妬でしかなかった。尊敬する父に褒めて貰った記憶は一つもない。乾いた承認欲求の矛先がルルーシュに向いていただけだ。

今となつては、あの幼さであそこまで聡明にならざるを得なかったルルーシュの背景に哀れみとも驚愕ともつかない感情だけが込み上げる。

しかし今の自分は12歳の少年だ。だからあの頃のように不満げな顔を作つて頬をリスのように膨らませなくてはならない。日によく焼けた少年の頬をナナリーは指先でつんつんとつついた。

「ちよつとナナリー」

「ふふふ。スザクさんのほっぺは柔らかいですね」

「ナナリーのほっぺだつて」

仕返しにつつき返すと綿が詰まったぬいぐるみのような弾力がしてつい笑みが零れる。ナナリーは本当に可愛い。いつも憎まれ口を叩くルルーシュの妹とはとても思えない。

「もう、スザクさんだったら。ほっぺが潰れちゃいますよ」

「潰れないつて。でも本当にルルーシュは遅いな……」

時計を見るとあと数分で日付が変わろうとしていた。

父とルルーシュの話し合いはいつ頃終わっていたのか、結局知らず仕舞いだった。ルルーシュは朝にはベッドに戻つてぐつたりと熟睡していたが、夜中にベッドに戻る所を見たことは一度も無かった。

あの時ルルーシュは父と何をしていたんだろう。湧いた疑問のままにスザクは車いすの行き先を寝室から書斎へと変更した。

どうせこれも現実ではない。それに自分はこの世界の神様だ。こ

の程度の事実との乖離は、この世界を構成する無数の意識も許容してくれるだろう。

「ちよつと見に行ってみようか」

スザクの提案にナナリーは小鳥のように首を傾げた。

この時間帯にアポイントメントも取らないで首相を訪ねるなど非常識だとナナリーにだって分かってている。

「でも、お邪魔じゃありませんか？」

「ちよつとぐらい大丈夫だよ。それにナナリーだって6年前にルルーシュが父さんと何を話しているのか気になるだろう？」

「……………そういえば、あの時お兄様は枢木首相と何を話されていたのか結局教えてくれませんでしたね」

あの時、と明らかにこの光景にそぐわない言葉を聞き咎める者はいない。

ナナリーの容姿は9歳、スザクの容姿は12歳の時のそれだ。スザクの方がやや大人びているとはいえ、両者共に手足は短くもちもちとしていて、顔立ちは子供らしく丸みがある。

しかしスザクとナナリーの精神は15歳と18歳のままだった。二人共が、これは現実ではなく無数の意識により構成された過去の情景を追回想しているだけなのだ^{と既に気付いていた。}

ここは6年前の枢木邸を模した、スザク^神の願いにより集合無意識が創った幻想だ。

だが二人共がこの異常な状況について何かを口にすることは無かった。

スザクは楽園に戻りたいと願った。その結果ここに至ったということは、この時点から全てをやり直すことであの楽園のような、誰も傷つけることの無い未来に到達できるのではと思っただのだ。

カレンが言うことを信じるのならば自分は集合無意識^神であるらしい。自分が神であるのならこの世界は、もしかしたら何もかもを誰も傷つけずに護ることができる、そんな都合の良い世界であるのかも

しれない。その可能性がある以上スザクは自らこの幻想を壊す行動は取れなかった。

一方ナナリーは集合無意識が完全に同一となることで来る楽園をただ待つていた。

たとえスザクが集合無意識の先導をする立場になったとしても、暫く待てばスザクという意識は集合無意識の中に融合して個の別を失う。全ては時間の問題だった。

だからスザクがこの過去の情景に遡り、もう一度あの時から全てをやり直したいと思うのであれば、この茶番劇に付き合っても良いと思っていたのだ。

それに加えてナナリーもスザクと同じく6年前の日のことに違和感を感じていた。

政治の話をしているのだとしてもこの時のルルーシュはまだ12歳だ。日付が変わるまで子供を拘束するなど常識的とは言いがたい。

無口ではあったが優し気な男性だった枢木ゲンブがそのようなことをするだろうか。

スザクはナナリーの車いすを押して記憶にあるがままの枢木邸の廊下を歩き、書斎の前に辿り着いた。

記憶にあるより扉が小さく見えるのは大人になってから枢木邸を訪れた記憶や、書斎に入ったことのある田中ハジメ、その他警備の人員や枢木家関係者の記憶も入り混じっているからだろう。ノブを握ると冷たい金属の感触に背筋が震えた。

6年前には取らなかつた行動に胸がどきどきする。12歳の少年の小さな掌で重厚な扉を押した。いつも鍵がかかっていた扉は、しかし何の抵抗も無く開いた。

開いた扉の向こうは薄暗い。これが父の書斎なのかと少々の感動が胸の中に灯った。幼い頃の書斎に入ってみたいという純粋な好奇心の高鳴りと、父に対する憧憬がない交ぜになってスザクの中を温かくした。

籠った空気は埃の臭いを帯びていたが、それ以上に生臭い。塩素系

の消毒液をまき散らしたような異臭が鼻を突いた。

様子がおかしい。12歳の外見には似合わない軍人めいた眼光で部屋の中に視線を走らせる。何故こんなに部屋の中が薄暗いのだろう。それにこの臭いは何だ。

部屋に走る眼球は床に落ちている少年の小さな衣服と下着を映した。ゴミのように床にうち捨てられた衣服は一つの可能性を思い浮かばせた。

まさか。まさか。血の気が引く。全身を氷水に漬けられたような気がした。

獣の断末魔に似た呻き声がスザクの意識をぶん殴って正気に戻す。滑稽な程にぶるぶると体を震わせながらスザクは声の方向へと顔を向けた。ベッドの上で、大小二つの肉が一つの塊になって一定のリズムに沿って蠢いていた。塊からはああ、あ、ああ、と小動物が殴殺される寸前に出すような短い金切り声がりズムに沿って吐き出されていた。

蠢く肉をよく見ると、それは全身に汗をびっしりとかいている中年の後半に差し掛かっている男と、色白の幼い少女だった。少女はシートを噛みながら眼球を剥き出しにして身を襲う獣欲に耐えていた。常の気位の高い猛禽類のような美貌はそこには無かった。

父が幼いルルーシユを食っているのだった。

そうと気づいてスザクは胃の中に入っていたもの全てをその場に吐き散らかした。胃酸の臭いが精の臭いに混じって形容し難い異臭になる。呼吸するだけで喉が痛い。

ナナリーはその光景を前にして最初は石像のように全身を硬直させていたが、全てを悟ると嗚咽を零して両手を口に突っ込んだ。吐くのを我慢しているようだった。この時点では盲目であるという自身の状態を忘れたかのように目をかっぴらいて、自分の指を血が出るまで噛みしめた。

「嘘だ、嘘だ」

集合無意識

「……違う、ここに嘘は無いぞ、スザク」

のそりとゲンブは顔をスザクに向けた。

苛立つ程に緩慢な動作で美しい少女から自身を抜いて、床に脱ぎ捨てられたバスローブを拾い上げて身に纏う。ルルーシユは打ち上げられた魚のように身動き一つしない。気絶しているのかもしれない。吐瀉物を拭い、スザクは涙を滲ませたままベッドに駆けた。途中で床に捨てられていたルルーシユの下着と服をかき集める。

ありとあらゆる体液で無惨に汚れたシーツを引っぺがして、むき出しになったマットレスにルルーシユを転がした。ベッドの上にルルーシユの服を置いて、クローゼットを乱暴に開いて中にぶら下がっていたシャツを数枚引っ掴む。

真白いシャツでルルーシユの全身を拭った。シャツはすぐに汚れた。あらかたの汚れが落ちてから、小さな手でスザクはルルーシユに下着と服を着させた。その間、ずっとスザクは泣いていた。

「嘘だ——嘘だ、そんな、なんで、父さん」

「これは日本のためなのだ」
「嘘だ!!」

服を着させたものの、体は氷のように冷え切ったままのルルーシユを背後に庇ってスザクは唇を震わせた。人形のように為すがままにされるルルーシユに怖気が立った。あの人並外れてプライドが高いルルーシユがこうなるまで打ちのめされるだなんて。

何が日本のためだ。ルルーシユはまだ子供なのに、なんてことをするんだ。

こんなことで日本が救われてたまるか。もし救われたとしても、そんな日本に誰が胸を張れると言うんだ。

地表を歩く蟻を見る目つきでゲンブはスザクを見下ろす。

「聞け、スザク。私とルルーシユが夫婦になれば私は皇族の一員になる。このままでは日本はブリタニアとの戦争に勝てないだろう。しかし私がルルーシユの夫として、占領された日本の総督となれば、」
「うるさい、煩い!!もうお前は黙れ!!僕は嫌だ!!そんなのは間違っているんだ!!」

こんな男が自分の父親だったのか。こんな男を自分は尊敬していたのか。

知りたくない現実が目の前に垂れ下がっていた。全てを無かったことにしたかった。

しかしいくら神となっても、一度起こったことを無かったことにはできないのだった。変えられるのは未来だけで、過去は変えられないのだから。

もし都合の良い夢を見たいと思えば、きつと目の前の光景は父とルルシユが仲良く談笑している光景に変わるだろう。

でもそれは夢だ。救われて、良い気分になって、それで終わり。何も変わらない。夢は夢でしかなく、現実は何も変わらない。

傷ついた幼いルルシユは救われない。ナナリーの、ルルシユを傷つけて生き延びていたという苦しみも。何も気づかなかつたというスザクの後悔も。

「……ルルシユ一人が我慢をすれば日本は救われるのだ。それに悪いようにはしない。妻として大事に——」

「大事にするって!? 父さんは自分が何をしたのか分かってないのか! お前なんかと結婚してルルシユが幸せになれる筈が無いじゃないか!」

「支配される幸せもあろう。いくらプライドが高くともそれは女だ。男に守られ、家を護るのが女の幸福だ」

「詭弁だ! お前なんかにはルルシユの何が分かる!」

「お前は分かるのか? ナナリーを殺しかけた、ルルシユを裏切ったお前は」

ゲンブの言葉はスザクを突き刺した。南極の抉れた大地が脳裏に浮かび上がった。

ナナリーはフレイヤで死ななかつた。しかしもしあそこでルルシユがナナリーを連れ帰っていればこんな事態にはなっていなかつただろう。ナナリーはギアスを得ることは無く、集合無意識は生まれなかつた。

同じ碧の瞳は無言でスザクを責めていた。その向こうにスザクは苦しんでいる無数の人を見た。

お前のせいで集合無意識になってしまったのに、どうしてお前が主

人格なのだ、と。

こんな幻想に引き籠つて。都合の良い夢ばかり見ているお前が。「私と結婚していればナナリーは今もまだルルーシュの隣にいたかもしれない。ルルーシュは何よりナナリーが大事な女だ。もしそうならなっていれば、今よりも幸せであつたかもしれないとは思わないか？」

「もう黙れ、」

「そうであればユーフェミアがエリアーに來ることも無く、死ぬことも無かつたかもしれない。全てが平和に、お前が望む樂園のようになつていたかもしれない」

「そんなことはありえない!! 黙れよ!!」

絶叫を掻き消すようにパシユンと空気が擦れる音がした。

一寸の後に枢木ゲンブの丸太のような体が崩れ落ちた。

スザクの動体視力は何が起こつたのかを正確に把握していた。両足の足首が常人には視認さえ困難な速度で斬り落とされたのだ。

解体途中の家畜のように倒れたゲンブの向こうに、扉を背にしたジェレミアが手に立っていた。手には日本刀が握られていた。

ジェレミアは背筋がぞつとするような優しい笑みを浮かべていた。あの監視カメラの映像を覚えていなければそれが誰なのか面識のあるスザクであつても分からなかつただろう。

表情に温度が欠片も感じられない。もし悪魔というものがいればこんな顔をしているに違いない。いつものプライドの高そうなオレンジ色の瞳が、業火の最底辺の色をしていた。思わずスザクは気絶したままのルルーシュを抱きしめて庇つた。ゲンブからではない。ジェレミアからルルーシュを護ろうとしたのだ。

怖い。恐ろしい。

「な、何を、貴様、」

絨毯を爪でがりがり掻きながらゲンブは必死にジェレミアから離れようとする。

悍ましい真似をしたとはいえ、実父であり、そして6年前の父の遺体を目にしていたスザクは僅かながらの憐れみを覚えた。

これから父は生きてままだ肉の塊にされる。

しかしジェレミアから父を庇うことはできなかった。父が死んで当然だと酷薄な感情を抱いたのではない。ジェレミアがあまりに恐ろしかったのだ。

自分の方がジェレミアより強いと理性の面では分かっている。しかし憎悪の塊と化した、ヒトのような何かに理性以外の全ての面が怯えていた。

ジェレミアは日本刀を構えて今度は手首の先を斬り落とす。丸々と太った芋虫のような指が生えた掌がくるくると宙を飛ぶ。悲鳴と血飛沫が上がった。スザクは幼いルルーシユの頭を掻き抱いてその光景が見えないように視界を奪った。

「ひい、ひいひいひい!!止めて、止めてくれ!!私が悪かった、私が、」
血の混じる懇願に対してジェレミアは表情を笑みの形で固定したまま何も言葉をかけることはなかった。言葉をかける価値も無いと羅刹のような表情が無言で告げた。

そうしてジェレミアは石造りの笑みを被ったまま、声帯が引きちぎられるまで悲鳴を上げ続けた枢木ゲンブを、肉の一筋に至るまで解体した。

実の父が肉の塊にされるまでをスザクは見届けた。壁掛けの時計を見ると30分しか経っていない。鮮やかな手際だった。

そして迷わない素晴らしい手際の方だけこの人が恐ろしい。

ジェレミアは貼りついてきた笑みをようやく剥がして汗を拭いていた。表情はいつも見る笑顔と変わらない。

人をあんな無惨な方法で殺しておいて笑うだなんて、狂っている。そこまで思っ、しかし復讐のためにフレイヤを撃った自分が人のことを言う権利は無いなどスザクは思い直した。

騎士というものはどこか狂っていないとなれないのかもしれない。しかしこの男の本性を知っていて惚れるだなんてルルーシユはどこかおかしいんじゃないだろうか、今度はルルーシユの方の正気をスザクは疑った。

「おい、口に出さなくても聞こえているぞ。いい加減自分が集合無意識の中にいると自覚したらどうだ」

「え?」

腕の中で身じろぎするルルーシュを見下ろす。ルルーシュはしっかりと目を見開いてじつとりとスザクを睨んでいた。

腕の力を緩めるとルルーシュはベッドから飛び降りて猫のように伸びをして、よし、と息を吐いた。先ほど強姦されたとは思えない凛とした表情を浮かべている。

「すぐにシュナイゼルが攻めてくるぞ、スザク。早く森に逃げなければならん。近い内にここはブリタニア軍に占領されてしまうだろうからな。ジエレミア」

「は、」

「ナナリーの車いすを押せ。スザク、お前は道案内だ。荷物は……まあ、いいか。そこまで正確に過去を辿る必要もないしな」

記憶通りに日本刀を床に突き刺したジエレミアは未だすすり泣くナナリーの車いすを押した。

スザクは吐物やら血液やら、他にも色々なもので酷い有様になった絨毯をそろそろと渡る。

「ほら、さっさと行くぞ」

「う、うん」

他に選択肢も無く、スザクは駆けだしたルルーシュを追いかける。4人で薄暗い枢木邸を出た。

外は夜の冷めた臭いがした。鼻の曲がるような異臭は、いつの間にか燃え盛っていた土蔵の放つ炎の臭いに紛れて消えていた。

記憶通りに森の中へと逃げる。歩き始めてから4時間は経過しただろうか。深い草を踏みしめて只管に歩く。道中の会話は無かった。ナナリーは声を殺して泣いていた。

慰めるべきだとは思ったが、ルルーシュをレイプしていたのはスザクの実父だ。それに今のナナリーを慰めることはルルーシュしかできないだろう。そのルルーシュは泣き続けるナナリーを気に留める

ことも無く足を動かしている。ジェレミアも機械的な動作でナナリーの車いすを押すばかりだった。

深い森を抜け、記憶にある見晴らしの良い高台に到着してルルーシユは足を止めた。

視界いつぱいに街が広がっている。水平線が視界を横切っていたが昏い空と海の境目は酷く曖昧だった。ルルーシユはスザクの手を取って自分の隣に立たせて、その光景を肩を並べて見せた。その光景はスザクの記憶と寸分違わない。

昏い水平線にはぽつぽつと燃え落ちる寸前の線香花火のような灯が幾つか並んでいる。ブリタニアの航空母艦だ。上空には虫のような戦闘機がぶんぶんと飛んでいる。市街地は燃え上がって炎を空に吹いていた。

悲惨な光景を前にスザクの心は湖面のように静かだった。遮るものの無い高台の上は風が気持ち良いとさえ思った。ただ哀しかった。

「スザク、お前は樂園に行きたいんだったな」

「……うん」

久しぶりに感じるルルーシユの体温からスザクは手を離れた。握った手も握られた手も氷のように冷たかった。

「ここからやり直せるなら、僕はやり直したい。」

「それは無理だ」

「なんで？」

集合無意識

「俺は本物のルルーシユじゃない。お前の記憶から作り出された、多くの人がそうであろうと想像するルルーシユだ。幾分かの理想や妄想が織り込まれた、つまりは幻想だな。ジェレミアもそうだ」

ルルーシユの背後でジェレミアが深々と頭を下げた。

そうだろうなとスザクは思う。本物のルルーシユならば泣き続けるナナリーを放つてスザクに話しかけるなんてありえないだろう。

父を殺した時のジェレミアは本物のようだったが、あれは枢木ゲンの記憶が再現したジェレミアだったのではないだろうか。今のジェレミアは強姦された直後であるルルーシユを気遣うことも無くただ直立している。これもまたありえない。

「だから過去をやり直すというお前の望みは叶えられない。俺はただの幻想だから、この世界でいくらお前が頑張ってもルルーシユが救われることはないんだ」

「……もういいよ」

ゆるゆるとスザクは頭を横に振った。

楽園はどこにもない。スザクはもう気付いていた。

過去は変えられない。ならば完璧な楽園も存在し得ない。傷はいつまでも残るのだから。

傷を見て見ぬ振りをして、見た目だけ綺麗な、自分だけが幸せな楽園なんて完璧とは程遠い。

そこに意味は無い。

ルルーシユ^幻は憂いの影を落とした顔のまま項垂れるスザクを見降ろした。

「スザク、気持ちちは分かる」

「……ルルーシユには分からないよ。楽園に行きたいだなんて、馬鹿しいとしか思わないだろう?」

「分かるさ。俺だってそう望んだことが……あつたかな?」

なんとも締まらない返答に苦笑が滲む。

それもしようがないことではある。この幼い12歳の少女はルルーシユではないのだから、本当の本当にルルーシユが何を思っていたのかなんて知りようが無いのだ。

「まあそれはどうでもいい。それでどうするんだ。ここにはお前の望むような楽園は無い。そうと知っていてここに留まるのか。それとも現実に戻るのか」

「君は僕にどうして欲しいの?」

「俺は、お前に好きなようにして欲しいと思う」

少年の小ぶりの頭をルルーシユは撫でた。馬鹿な弟を慰めるような手つきだった。

「どうして?」

「お前がとても頑張っていることを俺は知っている。今はもう世界中の人が知っている。お前がどれだけ頑張ったのか、どれだけ酷いこと

をしたのか。その全てを。お前にはきつと自分の運命を自由に決める権利がある」

ただ、と言葉を繋げる。

「きつと本物の俺は、お前に会いたいと思っっている」

「——僕がいても何の役にも立たないよ。きつと君は、嫌な思いをする」

散々にルルーシュには酷いことをした。自分のせいでナナリーはいなくなってしまった。

いや、それだけではない。そもそも自分は誰も救うことはできないのだ。そういう人間なんだ。

自分がいたらまたルルーシュは何かを失うことになるかもしれない。

顔を覆ってスザクは齒の隙間から嗚咽を零した。

嗚咽は少しずつ音を大きくする。耐えようと思うも涙腺を襲う哀しみは勢いを増した。まだ12歳のスザクは子供のようにすすり泣いた。

もしこの時に戻れるのなら。幻想などではなく、本当に、何も無かったことにできるのなら。

まだ誰も殺していない、ただの純粋な子供だったころに戻れたならば。

この高台から飛び降りて死んでしまいたい。

無垢な子供のまま死にたい。

「僕は、何もできなくて、誰一人助けられなくて、何も気づかなかった……っ」

「——いいんだよ、そんなことは」

ルルーシュの表情は奇妙な程に柔らかかった。見たことの無い顔だ。何か眩しいものを見るような目つきをしていた。

いつの間にかスザクの体は18歳のものへと変わっていた。鍛えられた手足は引き絞られ、顔立ちも精悍なものへと成長している。

地面に蹲る自分より遙かに大きな青年を少女のルルーシュは抱きしめてあやすように背中を撫でた。小さな肩が涙で濡れた。

「本物の俺は集合無意識の中にはいない。でもお前や、カレン、シャリー、ミレイ、リヴァル、クロヴィス、シユナイゼル、それにユファイ……俺は、俺を知る全ての人が作り出した、俺にとっても近い存在だ。だから俺なら、お前に何を言うのか、俺には分かる」

酷く温かい。手は冷たいのに。そうだ。ルルーシユの手はいつも冷たかった。

そんなことも忘れていた。友達なのに。

自分のことで手いっぱいだったのだ。ユファイを愛していた。その復讐のことしか考えていなかった。

復讐を終えた後は、自分の罪を背負うことばかりだった。生きる希望なんてどこにも無かった。

「それじゃあスザクはどうして生きていたんだい？」

聞きようによっては酷薄な質問が背後から飛んできた。しかし透明な声色は責める色合いを含んでいなかった。

振り向かなくても分かる。シユナイゼルの声だ。

「どうして」

「君は生きる希望を無くしたと言った。主君を亡くした。沢山の人を殺した。友達も失った。ではどうしてまだ生きているんだい？私の頼み通りにナイトオブラウンズになって、働いて。自殺しようと思えば幾らでも機会はあった。」

君がまだ生きていてくれることにはきつと意味がある筈なんだ

「僕は、」

意味。意味とはなんだ。

何もできない。人を傷つけることしかできない。

指先がかたかたと震えた。自分が生きていて誰かが救われることは一度としてあっただろうか。

自分に意味のある瞬間が、一度でも。

否、一度として。涙が洪水のように溢れた。自分は意味のある存在ではなかった。

それなのにどうしてまだ生きているんだろう。

「この人殺しー!」

聞いたことの無い声が爆発した。一度も直接遭ったことの無い人だ。しかしそれが、フレイヤに巻き込まれたギアス嚮団による人体実験の被害者だと集合無意識が無言でスザクに教えた。

その人物だけではない。幾人もの人々が声高に叫ぶ。ブリタニアが日本に攻め込む鬨の声に入り交じりつて砲弾のようにスザクを襲った。その度にスザクは体を震わせて縮こまった。18歳の青年は嬰兒のように小さく、小さく、体を丸めた。

「——お前のせいで俺は死んだんだ!」

「日本を取り返したいって言うならどうして黒の騎士団に敵対したのよ」

「私の子供を返してよ!」「本当は人を殺したかっただけのくせにっ」

「この同族殺し!!!」

「死ぬ!!!」「あいつが死ぬばいいのに、どうして、お兄ちゃんがっ」

「これだけ殺してまだ足りないのか!!」

「どっかいつてよ！近寄らないで!!」

「スザク」

「気持ち悪い」

「誰がお前なんかを必要とするものか」

「枢木はナンバーズの惨状を知らないんだ。だからあんな風に人を殺せる……」

「人非人だあいつは」

「本当は日本なんてどうでもいいのよ」「同族殺しのイレブン風情が」

「ユーフェミア様に媚びを売って……」

「売国奴が!!貴様のせいで、娘も、妻も、弾けてし、死んでしまった、死んで、うう、くそ、くそ」

「フレイヤで大量虐殺してさぞ楽しかったんだろなあ」「弱者ばかり殺しやがって」

「痛い、痛い、痛いよう、助けて、」

「ユーフェミアの次はルルーシユの騎士になって食いつぶすつもりなんだろう」

「あんな奴死ねばいいのに」

「一番嫌いな奴だ。優柔不断で、誰も救ってくれない」

「ああああ痛い、痛いいいいいいいいいい!!」

「スザク」

「赤い血が流れてないんだ。化け物だあいつは」

「人殺ししか能の無い男め」「お父さあん、お父さああああん」

「E・U・でも日本でもブリタニアでも南極でも大量に人を殺して、どうしてそんな面で生きていられるんだ?」

「俺はブリタニアの貴族だぞ。なのに殺されるとは、どうして」「痛い、フレイヤが、眩しい、怖い、」

「私の弟は兵士でした。枢木スザクに殺されました」

「俺は両足を千切られたんだ。ランスロットに踏み潰されて」

「お母さんを返してよ!あたしのお母さん!!」「お願いします、子供だけは助けて下さい、子供だけは、」

「この悪魔め!!お前なんかが生まれて来なければ俺は死なずに済んだ」

「というのに!!」

「父親の顔に泥を塗って恥ずかしくは無いのかねえ」「人間の屑の見本みたいな奴だ」

「お前に殺された人間は数万人に上るが、救った人間の数は片手で数えられる程度しかないぞ」

「妹だけはどうか……頼む、助けてくれ、妹だけは!!」

「ユーフェミアも救えなかった、誰も助けられなかった、生きてる価値があると思っっているのか?」

「助けてよ、いつか日本を取り戻すより今みんなを助けてよ!!」

「よくも裏切ったなああ!!」

「お前に味方なんているものか」

「苦しめ、苦しんで死んでしまえ! 楽に死ねると思うなよ!」

「お前が生まれてさえいなければ——」

「スザク」

「スザク」

柔らかい指がスザクの髪に埋まって撫でる。

よしよし、とルルーシュはスザクの頬に流れる涙を冷たい指で拭いた。恐る恐る見上げるとルルーシュは微笑んでいる。しかたない

なあと言わんばかりの、甘やかな顔で。

6年前と同じように。何も変わらず。

「気にするな、友達だろう」

心臓の奥が痛んだ。生まれた感情は歓喜ではなかった。ただふと気づいた。

理屈ではない。生きる意味と呼ばれるものがあるとするれば、それはここにあった。ずっと前からここにあったのだ。

——どうして忘れていたんだろう。

くしやりと顔を歪ませてスザクはゆつくりとその言葉を噛みしめた。苦い味がした。小さい背中を掻き抱いた。

「そうか。そうだった。そうだったんだね」

そうだ。自分はそのために。

日本のためでも、弱者のためでもなくて。

ましてやルルーシュのためでもなくて。ユフィのためでさえなくて。

完璧な楽園のためだなんて、そんな、必ずいつか崩れ去るようなもののためでもなく。

今この時のような、生きていたら時折訪れる、生きていてよかったと思える、その一瞬のために。

人生の長さからしてみれば儂い程に短い欠片のためだけに。

使命や運命、優越感、劣等感、罪悪感、無力感、他者との完璧な相互理解。それは誰かに決められたものだ。そのためだけに生きることのなんて虚しいことか。

スザクは幼いルルーシュの肩に顔を埋めた。驚くほどに小さい体躯をしている。

この小さい体に一体どれだけの熱情が詰まっているのかと思うと、自分の腕の中に納まってしまうことが奇跡のように思われた。

大きな体に抱きしめられてルルーシュは背筋をびくりと震わせたが、おずおずと手をスザクの背中に回して何度も撫でる。肋骨を一本一本なぞるような不器用な手つきだった。しかし心地よい。指先は冷たいのに温かい。

「僕はそのために戦っていたんだね」

子供の頃だってこんな泣いたことは無かった。ユファイが死んでしまった時はあまりに悲しみが大きすぎて泣く余裕すらなかった。

止めどなく涙を零し続けるスザクの頬をルルーシユは微笑を交えながら懸命に拭い続ける。

しかし指先の柔い感触は突如としてスザクから引き剥がされた。

温い体温が突然没収されて、驚いたスザクが見上げると、最高に不機嫌な顔をしたジェレミアがルルーシユを子猫のように摘まみ上げていた。

口の両端を引き結んでじつとりとした目つきでスザクを見下ろしている。激しいまでの怒りではないが、気に食わないという感情を全身で体現していた。

心地よい子供の体温から引き剥がされたことが不満でない訳では無い。出来得ることなら暫くはああして甘えていたかった。

しかし自分が想像するジェレミアならばルルーシユと同じ年頃の男がべったりと引っ付いている状況は不快極まりないだろうとも思うため、下手に非難も出来ない。

むしろジェレミアの思慕の熱量を考えると父と同じように解体されなかったただけマシと思うべきか。

「スザク、決まった？」

とはいえスザクからしてみればルルーシユは親友であり、それ以上でも以下でも無い。

愛する女性是他にいた。自分が持つ全ての愛を差し出した女性の声に振り返る。

シユナイゼルと並んでユーフェミアが待っていた。二人共薄暗い森の中で光源のように輝く柔らかい笑みを浮かべている。並ぶと顔のパーツがどことなく似ているように見えた。異母とはいえやはり兄妹と言うべきか。

だがスザクの目にはユーフェミアしか映っていなかった。見慣れた淡いピンク色のドレスを着たユーフェミアは瞳を涙で潤ませてい

た。

綺麗だと思う。ユーフェミアは世界で一番綺麗な女の子だ。

「うん。決まったよ」

足をユーフェミアの方へと向ける。額が擦れ合うまでの距離まで近寄ると、ああ、そうだと思いつく。

ユフィはいつも良い匂いがした。身長は自分の目のあたりの高さで、瞳は董の色をしていた。星が鏤められたような瞳は今自分だけを映している。自分の瞳も今はユーフェミアしか映していない。

幸せだ。生きてきて良かった。

体を少しだけ屈めてキスをした。背中に腕を回して、深く。暫くしてからゆっくりと体を離す。体温が腕に残っていた。

この温度のことをきつと死ぬまで忘れない。

「僕は現実に戻る。そして戦う」

「そう。そうね」

うん、とユーフェミアは深く頷いた。はたはたと涙を零す。

進み出したシュナイゼルが泣き出したユーフェミアを宥めるように肩を摩った。ぽんぽんと細い背中を叩きながらスザクへと顔を向ける。

「スザク、頼みがあるんだ」

「何でしょう」

「現実に戻ったら私にギアスキャンセラーをかけるようジェレミア卿に伝えて欲しいんだ。難しいのは分かっているけれど……」

「それは、シュナイゼル殿下を集合無意識から抜け出させるために？」

「ああ。一応の備えとして準備していた策がある」

とはいえ、と秀麗な顔にシュナイゼルは影を落とした。

「成功するかどうかは賭けになる。成功率はそう高くは無い……しかし、」

「僕たちはシャルルの完全な後手に回っています。殿下の策と言うのであればやってみる価値はあるかと」

「そうだ。このままだと全人類は集合無意識として統一される。まだ私達には自己の意識が残っているが、完全に他者と融解してしまうと

どうなるのか想像もつかない」

ふとスザクは一人車いすに座るナナリーに目をやった。完全に他者と融解して一つになるという人間には想像もできない状況を望み、強大なギアスを揮って実行してしまった少女。

ナナリーは顔を掌で覆って何も目に映らないようにと顔を俯かせていた。視界に映る全てを怖がっているように見えた。目の見えなかった頃に戻りたいと訴えてさえいるようだった。

何をあんなに恐れているのだろうか。ルルーシユはナナリーを何もかもから全力で護っていた。それは全てナナリーの幸せのためだった。

ナナリーのことをルルーシユは本当に心から愛していたのに。

いや、だからか。

ルルーシユの愛は深く、重過ぎる。自分の姉が自分のために純潔を売っていたという事実は15歳程度の少女には重すぎる現実だった。

そしてきつと他にもルルーシユはナナリーのために自分の身を削っていたに違いないのだ。スザクが知るだけでも、ブリタニアが日本に攻めて来た時にルルーシユは自分の食事をナナリーに譲り、寝床も一番温かい場所をナナリーのために使っていた。

ルルーシユがナナリーのために流した血と涙の量は如何程だったのか。

集合無意識にルルーシユが来れば否が応でもナナリーはその事実を突きつけられることになる。

突発的な哀れみが込み上げた。ナナリーの行いが正しかったとは思えない。

ただナナリーはあまりに幼く、真実と愛が重過ぎた。

「ナナリー」

声をかけてもナナリーの答えは無い。憐れみを誘う儂い有様に氣遣う言葉を重ねようとしたが、その言葉を遮るように未だ瞳を潤ませたままのユーフェミアがナナリーに近寄り、俯いたままの頭を撫でながら静かに首を振った。

「スザク、あなたが助けないといけない人はナナリーじゃない筈よ」

「でも、」

「自分の行動には責任を取らないといけないのよ。あなたも、ナナリーも。知らなかったじゃ済まない事なの。それがちゃんと生きるってことなのよ」

はつとするような鋭い目つきにスザクはナナリーから目を逸らした。

ユーフェミアの言は正しい。

集合無意識を作り出したのはナナリーだ。これからナナリーがどうその責任を取るのかはナナリーが考えなくてはならない事だ。

スザクやルルーシュが肩代わりできることではない。

「うん……じゃあね、ナナリー。元気で」

アツシユブロンドの長い髪のカートンの向こうに声をかける。反応は無く、スザクも期待していなかった。

その場に揃っている人たちを見回す。ユファイ、シュナイゼル、ルルーシュ、ジェレミア。そして姿は見えないが無数の人々がそこにいる。

彼ら全員を自分は背負って行く。世界中に響き渡るような高らかな声でユーフェミアは宣言した。

「大丈夫、スザクなら、私の騎士ならきつと勝てます！」

「勿論」

ユーフェミアから送られた騎士章を握り締めて、ナイトオブブラウンズのマントを翻す。

負ける気がしない。ユファイがいる。シュナイゼルもルルーシュもいる。カレンも、ジェレミアも。ミレイも、ロイドも、シャリーも、リヴアルも、これまで自分が殺した全ての人々も。全く無関係の全ての人々でさえ。

今この場所にいる。

「必ずや勝利を、ユファイ、君に」

足元が崩れ去る。世界が崩落して真白に変貌する。

幻想のルルーシュも、ジェレミアもいなくなる。シュナイゼルも、

ユーフェミアも、まるで最初からいなかっただかのように掻き消える。ナナリーも顔を掌で覆ったまま色彩の奔流の中に姿を消した。

しかし本当は居なくなっただけではないと鳴り響く鼓動が訴えていた。彼らはスザクの中に戻ったのだ。体を構成する全ての細胞に無数の意識が宿っていた。

全てが消滅した白一色の世界の中で、スザクだけが鮮明な姿を保っていた。

声高にスザクは崩落する世界へ訴える。

「行きましよう皆さん、ルルーシユの所へ。Cの世界へ！」

悲喜こもごも、賛否両論の声が体中から噴き上がる。

副生徒会長のルルーシユ。ルルーシユ皇帝。ゼロ。ルルーシユ・ラッペルージ。

その存在をスザクは知っていた。つまり、集合無意識はその存在を知った。

スザクの中で無数の人々は入り乱れ、腕を組みながら笑い合い、泣き叫び、恐怖に戦き、歓喜に沸いた。スザクに向けられた嫌悪と憎悪の声よりも巨大な憤怒がうねりあがり、同時に賛美の合唱が響き渡った。

肌の色も瞳の色も性別も国籍もそこには無く、ただ彼らの口からは一人の名前が繰り返し叫ばれた。

ルルーシユ、ルルーシユ、ゼロ、ゼロ！

我らがゼロ！我らが皇帝！我らがルルーシユ皇帝！

オールハイルルルーシユ！オールハイルゼロ！！

我らの最も憎らしく悍ましく愛おしい唯一皇帝！

あの彼方にルルーシユ様がいらっしやる！我らが皇帝がいらっしやる！

集団は声を上げながら、込み合い、押し合い、あるいは躓き、また転び、それでも表情を曇らせる者はいなかった。かえって喜色さえ浮かべていた。自らの手で運命を拓くことができるからだ。

ああ、そうだ。人間は命令されるがままではいられないのだ。それが愚かであったとしても、自分の意志で行動せずにはいられないの

だ。

彼らを阻めるものなどあるわけが無い。彼らは人類だ。彼らこそが集合無意識、彼らこそが神だ。

スザクは理解した。ナナリーは間違っていた。たとえギアスであろうとも、世界が一つになんてなれる筈が無い。

自分自身を手放せる程に、人の意志は弱くは無い。

だからこの世に樂園は存在しない。

戦いが終わることは無い。

人が歩みを止めることも無い。

まだ終わる訳には、ゆかない。

Cの世界へと向かう。しかし方向が全く分からない。

そもそもスザクの目の前に道らしき道は無かった。ただ膨大な白い空間が横たわっているだけだ。雑草一本生えていない。足元は透明度の高いガラスのような物体で覆われているが、底は見えない。網膜が焼けそうな程に只管に白い。

さつきまで自分がいたのは集合無意識の記憶が作り上げた空間の中で、つまりは幻覚か夢のようなものだったのだろう。そこから抜け出たらすぐにCの世界に辿り着くと思っていたのに現実はその甘くは無かった。

案内板でもあれば楽なのだろうと思うも、そんなものが存在するわけが無い。むしろあったら罨かと警戒する。

「そもそもここってどこなんだろう……」

目印も無く足を動かしながら独り言をぼそりと呟くと、体の内側から「実は宇宙空間なんじゃないのか?」「ホワイトホールとか」「でも星も見えないぞ」「いいからさっさと歩けよ」などと言う好き勝手な意見が無数に飛び出してきた。

神経が病みそうな程に何も無い空間に放り出されはしたものの独りで彷徨っている訳ではなく、むしろ無数の人間が内にいるためか大きな不安は無かった。

しかし集合無意識の全責任を擦り付けられている状況は精神的な負荷があまりに強い。それに加えて脳内で常に誰かが口喧しく喋っているせいで自然と眉根に深い皺が刻まれる。煩くてしょうがない。複数のラジオ番組を同時にイヤホンで流し聞きしているような感覚がする。

ぎゃあぎゃあわあわあと騒ぐ意識達の中から聞こえた、情報がほとんどない状況で議論しても意味は無い、とにかく歩いてCの世界を探すんだ、という比較的建設的な意識の言葉に従ってスザクは足を動かした。眩しい程に真白の空間に目を細めながらとにかく前へと進む。

しかしいくら歩いてても景色は変わらない。只管に白く、何もかもが凍結したような静寂が満ちている。

何か音が聞こえないかと耳を澄ます。期待はしていなかった。だが予想と反し、耳を澄ました瞬間に奇妙な音が四方から聞こえてきた。

足音にさえかき消されそうな微かな呻き声や喚き声が空気を震わして鼓膜を僅かに揺さぶる。少し耳にするだけでも背筋が凍り付きそうな音の響きにぶるりと体が震えた。

それは人間の声ではなかった。かといって動物の声でもない。もつと異質な声だった。

ひ、とごごもつた悲鳴が口から零れる。体内で沢山の意識が毛を逆立てて「危ない、危ない、離れる、離れる」と大合唱で悲鳴を上げた。スザクも彼らの意見に異論は無かった。

速足でそこから離れるも、逃げ出した先でも何かしら恐ろしい声は聞こえてきた。

何も存在しない真白の空間からこつちへ来いという誘い声が手招きしたり、ねっとりとした恨み辛みを吐き出す声がぶちまけられたり、爆発するような笑い声を馴れ馴れしく投げ付けられたり。

無数の声に追い立てられるようにスザクは足を速めた。

「ここは何なんだ、どこなんだっ、Cの世界は、」

恐怖に鳥肌を立てながら逃げ惑う。

不意に足元が凍り付くような寒気が吹きすさんだ。歩き続けている足が止まる。見下ろすと膝から下がぐくぐくと震えていた。

背筋を冷汗が伝う。額を震える腕で拭うとびっしょりと濡れていた。がちがちと煩い音がすると思ったら、自分の歯の根が噛み合わされずに打ち震えているせいだということにようやく気付いた。

怖い。何に対してかは分からないが、今、自分は酷く怖いと思っっている。

少しでも気を抜けばその場に蹲ってしまいたいそうになる体を叱咤しながら振り子のように顔を左右に揺らして周囲を見回す。真白い空間に変わりはない。

ただこれまでの奇矯な響きの声とは違う、態と調子の外れた楽器をかき鳴らしているような、心臓を素手で鷲掴みにされているような音がした。

「……………何の音なんだろう」

そんな状況ではないと分かっているながらもスザクはその音に耳を敬てずにはいられなかった。

ドンドン、ホウホウ。ドンドン、ホウホウ。

聞こえてきた音は幾分か譲歩して漸く音楽と形容することができ、単音の羅列だった。クラシックでもジャズでもポップでも無い。強いて言うなら民族音楽のようだが、それにしても旋律に統一性が無い。お世辞にも美しい音楽とは言えない。むしろ聞いているだけで鼓膜が痛みそうな不協和音は長く聞いていると不穏な気分を引き起こす。

しかしそれは奇妙な吸引力を持ってスザクを引き寄せようとしていた。

ふらふらと足が動く。音源に近づくにつれて太鼓とフルートの音は大きくなる。ドンドン、ホウホウ。耳鳴りする程の反響はスザクの正気を揺さぶった。

歩き出してから時間になると数分といったところだろうか。ドンドン、ホウホウ、という音に激しいダンスを踊っているような足踏みが加わり、周囲に響きわたる音楽は古代の祭りのような音に変化していた。そこでスザクは唐突に気づいて瞠目した。

何かしら神聖な者達がそこら中に、路地裏に投げ捨てられた生ごみのように溢れ返っている。

視界には変わらず白一色の空間しかない。しかし何か近くにいる。目には映らない、自分達とは存在の次元が違う何かがある。

集合無意識という神になっていなければスザクはその存在に気づくことは無かっただろう。生きる世界が文字通りまるきり違う存在であるのだろうか。

しかしいる。確実に。ここにいる。

冷汗が間欠泉のように額から噴き出した。しかし拭うこともでき

ない。彫像のように体が動かない。

その存在を見ては駄目だ。生存本能が金切り声を上げる。心臓が狂ったように鼓動をかき鳴らす。喉がひっ、ひっ、と口笛のように鳴る。浅く速い呼吸が頭蓋内で反響して酷く煩い。

今のスザクを構成する全意識が同じ叫び声を上げた。

気づかれては駄目だ。

ほんの少しでもこちらに興味を持たれたら、私達は塵一つ残さずかき消されるぞ。

逃げろ、早く逃げろ！

スザクも自分の中にいる無数の意識達と全く同じ意見だった。幸いなことに神聖な者達はまだこちらに気付いていない。

それはきつと自分が、集合無意識でありマリアンヌには神とも称された自分が、あれと比べればただの人間や足元を這う虫とも大して変わりの無い存在であるからだ。あれから見れば集合無意識は興味を持たれる価値も無い矮小なものでしかない。

今ならまだ逃げ出せるかもしれない。

しかしもしあの存在がこちらを視界に映してしまうと、逃げる暇もなく自分達は消滅することだろう。

絶対にその存在を視界に映さないように、音をたてないように注意しながらじりじりと後ずさりする。

太鼓とフルートの音と鳴り響く足踏みは今やスザクの周囲を取り囲み、獲物を追いつめるように囃し立てられていた。ダンダン、ホウホウ、ドンドン。ホウホウ、ドンドン、ダンダン……少しでも気を抜くと乾いた喉が悲鳴を上げそうになる。

絶対に音を出さないように、気配を感じさせないようにと脳神経が金切り声を上げる程に集中する。

しかしスザクが数歩後ずさりした時、無情にもその神聖な者が持つ数多くの触手の内の一つがこちらを向いた。

こちらに気付いている訳ではない。またスザクもその触手を眼にしたわけではない。その存在が触手を持つのか、それとも持たないのか。そもそもそれが物体として存在するものなのかどうかもスザク

には分からなかった。

ただ触手としか形容のできない何かがちちらを向いていることを本能が悟った。もしかするとそれは触手ではなく、その存在が宇宙に張り巡らしている無数の神経の一本だったのかもしれない。

小さな惑星を生きる矮小な生命体がぐちゃぐちゃに混ぜ合わさって新しい矮小な生命になったという、その存在からしてみれば気に留める価値も無いありふれた小さなイベントが偶然彼の神経に触れたのだろう。

直にその存在を眼にした訳でもないというのに、それがちちらを向いているだけで全身が砂になって吹き飛びそうな感覚がする。頂さえ見えない巨大な山脈が押し掛かってくるような威圧感にカチカチと歯の根が鳴る。

「ひ、」

「声を出すな」

口を塞がれて一瞬恐慌状態になりかかったが、自分の口を塞いでいるのが人間の指だということに気付いて一気に安堵した。

状況は一切分からないが、とりあえず自分に触れているのは人間だ。それだけで涙が出る程の安堵が沸き上がる。

こくこくと頷くスザクからそれはゆつくりと手を離れた。

振り向くとルルーシュが立っていた。何故か学生服を着て、透き通った紫水晶の色をした瞳は興味深そうにスザクを見降ろしている。しかし額からはスザクと同じように汗を滝のように流していた。

驚いて目を見開くが、し、と彼は唇に人差し指を押し当てた。

「声を出すな。あいつらに気付かれない内にここから離れるぞ」

どうしてCの世界にいる筈のルルーシュがここにと疑問が湧いたが、それは脇に置いておいてもかくあの何か恐ろしい者から離れることをスザクは優先した。

他のことは全て後回しで良い。ナナリーのギアスだろうがシャルルだろうが、あれより恐ろしいということは絶対にありえない。

「走った方が良いな。まさかこちらに興味を示すとは思えないが万が一ということもあり得る」

がくがくと何度も頷いてスザクは颯爽とルルーシユを抱え上げて走り出した。

音を立てないようにと気を付けていたが、もう知るか。とにかくこの恐ろしい空間から一刻でも早く離れたい。半ば恐慌状態に陥っていたスザクは逃避本能のみを活性化させて他の一切を切り捨てた。ルルーシユの体力を鑑みると自分が担いだ方が圧倒的に速い。

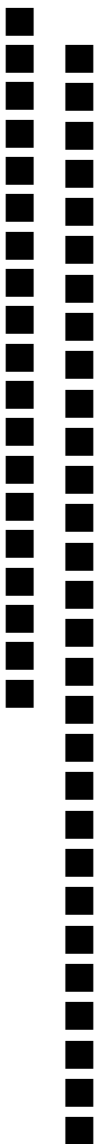
俵のように抱え上げたルルーシユは何やら文句を叫んだようだが、人間の限界域に達する速度で疾走するスザクの耳に彼の声は届かなかった。そもそもルルーシユの言葉などを気にする余裕は微塵も存在しない。

もう恥も外聞も無かった。脱兎の如く逃げる。あれから一歩でも離れるために。

ここから先には踏み込むべきではない。

あの神聖な、支配者達の領域に二度と近寄るべきではないのだ。

それは静かに蠢くだけの矮小な存在からすぐに興味を失って、またゆらゆらと騒めいた。



成人一人を抱えて距離にして数kmを全力疾走したスザクの息は酷く荒かった。しかしそれは肉体的よりも精神的疲労によるものが強い。今もまだ背後からあの恐ろしい存在がこちらを見ているのではないかという怖気で鳥肌が立つ。

膝をがくがくと震わせるスザクの肩をルルーシユは撫でた。息を切らせるスザクを前にして、珍しいものを見たと言わんばかりに瞳をばちくりと見開いている。

「あ、あれは、あれは、」

「あまり首を突っ込まないことをお勧めする……設定通りなら集合無意識でさえあれにとっては羽虫の一匹だ。変に関わると存在丸ごと最初から無かったことにされかねんぞ」

こくこくと何度も頷く。

ルルーシユに言われずとも自分（集合無意識）の中にはオカルト趣味の者が何千人と存在する。スザク自身は特にオカルトに興味を持ったことは無いが、オカルト趣味を持つ意識達の知識を引っ張り出すとあれの正体が何となく分かった。

何人かのオカルトマニア達は興奮気味に外なる神々だとか白痴の神だとか叫びながら、こんな機会は今後一生ありえない、すぐに戻ろう、あの存在に触れようと鼻息も荒く声高に訴えていたが、ふざけるなど怒気を露わにした他の意識にぼっこぼこに叩きのめされて口を閉じた。

取り敢えず絶対に関わらない方が良い存在だということだけはスザクにもよく分かる。

兎も角も自分の中に存在するオカルトマニア達曰く、ただの人間があれに会う機会はそうそう無く、姿を見ることは永劫無いだろうと知った。それだけで十分だ。もう二度と近寄りたくない。

「……そういえばこれもクトウルフネタになるのだろうか。それならタグに付け加えるべきか?」

「え?何?」

「第四の壁の向こうの話だ。気にするな」

どう思う?とこちらに問いかけた後に、ルルーシユはさて、とスザクの方へと振り返った。

そこでふとスザクは、どうして自分はルルーシユに触れたのだろうかと疑問が湧いた。

先ほどルルーシユを抱え上げた時に何の抵抗も無かったのだ。集合無意識が造り出した幻覚のルルーシユならともかく、目の前のルルーシユは実存在だ。ギアスの掛けられている自分が触られる筈は無い。

だがスザクの困惑を他所にルルーシユは呆れ顔を取り繕うともせず肩を竦めていた。

「さっきから見ればどれだけ迷子になるつもりなんだお前は。迷子属性なんて無かっただろう。Cの世界に行くつもりなんじゃないのか?」

「う、うん。そうなんだけど、道に迷っちゃって、というか道が無くて、そもそもここがどこなのかもよく分からなくて。せめて方向だけでも分かればどうにかなると思うんだけど……というかルルーシユはどうしてここにいるの?Cの世界にいるって集合無意識から聞いたんだけど」

「ここはまあ、俺にもよく分からない空間だからな。元々俺がいた世界からそちらに移る時に一度経由したかその程度の知識しかない——そして勘違いしているようだから言っておくが俺はお前のルルーシユではないぞ」

そこまで話してスザクはようやく目の前の人物がルルーシユではないことに気付いた。

ギアスが作動しなかっただけではない。顔つきも髪型も雰囲気もルルーシュそのものだが、目の前の人物は骨格がルルーシュよりもしっかりとしていた。肩幅はやや広く、骨盤は逆にぎゅっと狭い。指は骨ばっていて筋が微かに浮いている。そして全身を覆う脂肪が若干薄い。少し注意して見れば紛れもなく男だということがすぐに分かる。

しかしそれでも実はルルーシュなんじゃないのかという印象をどうしても拭えなかった。

それは外見よりも、長い間友達として接してきたスザクでさえ困惑する程に、彼の小さな動作からルルーシュ独特の仕草や喋り方が感じ取られたからだだった。皮肉の混じる口調、片頬を持ち上げる厭味ったらしい笑い方、他人を見下すように半月状に反らされた背筋。

ちよつと似ているとか上手く演技をしているというレベルではない。彼の動きはルルーシュそのものだった。

「……………あなたは本当にルルーシュじゃないの？」

「そういえばまだ自己紹介をしていなかったな。俺はロロだ」

「ロロ？」

「そうだ。今はそう名乗っている」

ロロはスザクの手を取り、白い世界を何の迷いも無くすたすたと歩き始めた。突然引つ張られてスザクは数歩たたらを踏んだ。

「え、ちよつ、」

「Cの世界までは案内してやるよ。お前は俺のスザクではないと知ってはいるが、ここで野垂れ死にされても寝覚めが悪い。ただし到着してから先はお前達が決めることだ」

「貴方は、ロロさんは何者なんですか。どうしてここに」

「俺は傍観者だよ」

「傍観者……………C・C.と同じような？」

ロロが何者かは分からないが、こんな非常識な空間にいるのだから只者では無いということは分かる。

そもそもギアスキャンセラーを持つジェレミアと、彼の近くに居たルルーシュとコーネリアとギルフオード、そしてコードを持つC.

C・とシャルル、後は元々Cの世界にいたマリアンヌとビスマルク以外の全意識は今スザクの中に居る。

スザクの中に居らず個体として存在している時点でロロはコード、もしくはギアスキャンセラーを持っているか、元々Cの世界に居たということになるのだった。

警戒と疑惑の入り混じった視線を向けられたロロはしかし然程気にする様子もなく目を細めた。

「あれとはちよつと違う。そうだな……さっきの者達とは比較にならない程に格が低い外なる神というか、異世界転生したチートキャラの成り損ないというか……まあ、些細なイレギュラーさ。気にする必要も無い」

ずんずんと歩くロロに引つ張られるがままスザクは歩いたが、視線はルルーシユと同じく襟足付近で切りそろえられた黒髪を突き刺していた。

そう言われても非常に気になる。頬がむつつりと膨らむ。何しろ外見がまるきりルルーシユなのだ。

この人は何なのだろうと考えると「異世界からやってきたルルーシユの一つの可能性」「多次元世界からやってきたルルーシユ」「ルルーシユに助けて欲しいというスザクの幻覚」「ルルーシユとは何の関係も無い、外見を自由に変えることのできる外なる神」「未来のルルーシユがCの世界を経由してやって来た存在」と、多くの意識が見を出す。

それらの意見はあまりに膨大に過ぎ、纏めることも出来ず、ただふよふよと宙に浮かぶばかりだった。あまりに意見が多過ぎると取りまとめるのも一苦勞であり、残念ながらスザクには議論の中心となつて意見を纏めるような才覚は無い。

だがいくら怪しくとも今はロロについていくしか選択肢が無い。

この広大で目印の何もない空間の中、Cの世界を求めて彷徨う余裕は無いのだ。怪しい事に変わりには無いが、少なくとも人の形をしているロロは人類の敵では無いだろうと希望を抱くしかない。

スザクは黙ってロロに引つ張られるがままに歩いた。沈黙に何を

思ったのか口口はそれにしても、と口を開く。

「お前も災難だな、集合無意識の纏め役を押し付けられるとは。主導者というタイプでも無いだろうに」

「……うん。でもあのまま全部ぐちゃぐちゃになるよりもずっと良いよ。僕が断つたら、ナナリーのギアスに逆らって集合無意識を先導出来る人材も居ないし」

「しかしルルーシユのギアスが無ければこんな目に遭うことも無かつただろうにな？」

自嘲気味に口口が笑う。その仕草もはつとする程ルルーシユにそっくりだ。

しかし皮肉の色はルルーシユより濃いように思えた。世界で最も端正だろう顔を態と歪めて醜くしているのではないかとさえ思う。

この口口という人物をどこまで信用して良いのかは分からないが、全く話さないのも失礼だろうと思えばつぽつと言葉を零す。

「そうかもしれないけど、でも結局は自業自得だ。ルルーシユが僕にギアスを使ったのはゼロを捕縛しようとした時だったんだけど、もしあの時に僕があんなことをしていなければ……」

「ゼロがあの場合でコーネリアに捕まったとしても、正体が皇族のルルーシユだと発覚すれば死刑にはならなかっただろう。そして捕縛されようが投獄されようが奴は復讐とナナリーのために再起するさ。ルルーシユという存在は死んでも蘇りかねないように創られているからな」

「でも日本の奪還は遅れていた。死者もきつともつと多かつた」

「多くなかつたかもしれない。もしゼロが居なければユーフェミアの行政特区日本が上手く行っていたかもしれない。そしてユフィは死ななかつたかも知れない……お前はルルーシユに毒されているようだな」

「っ、何が言いたいんだ」

「あのタイプの人間を盲信する以上に恐ろしいことは無い。あいつは台風の目のような奴だ。生きている限りルルーシユは戦うことを止めないだろう。止められないと言っても良い。あいつはそういう業

を背負って生まれて来たんだ。でもお前は違う」

前だけを見て歩く口口の表情はスザクには見えなかった。しかし氷が割れるような声色から、きつと表情の一切存在しない仮面のような顔をしているのだろうと察せられた。

「お前はルルーシユから離れて、もつと幸せな、平穏な生活を送れる可能性もあると知った方がいい」

お前のためだ、と付け加えられた言葉にスザクはかっとな頭に血が上るのを感じた。

ルルーシユが酷く侮辱されたような気がしたのだ。まるでルルーシユの傍にいる人間は皆不幸になると確信しているかのような物言いだった。スザクのことを心配しているようで、その実口口はただルルーシユが憎いだけのように思えてならなかった。

初めて会った人間にどうしてここまで言われなければならないのだという怒りと共に口を開くと思つたよりも強い語調が飛び出した。

「僕にルルーシユを放って逃げろって言うのか」

「そうは言っていない。この騒動が治まった後ルルーシユが皇帝を続けるのか隠居するのか知らないが、いずれにせよもう関わらない方が良いと言っているだけだ。その方がお前にとって幸せだろう」

「僕は幸せになりたいわけじゃない」

「でも幸せでないより幸せである方が良いのは当然だろう」

「それはお前の勝手な思い込みだ。僕とは関係ない」

繋がった手をスザクは握り締めた。手の中で骨が擦れる音がする。

力加減を間違えれば骨をぐちゃぐちゃに折ってしまいそうな程に柔い手だった。だがしつかりとその手はスザクの手を握り返した。

「僕は逃げる訳にはいかないんだ。フレイヤを撃つ決断をしたのは僕だ。フレイヤを撃っていないければナナリーがギアスを使うことも無かったかもしれない。ブリタニア軍人になったのも僕の決断だし、日本が敗戦した時にブリタニアへ渡航したのも僕の決断だ。そして僕は沢山の人を殺した。その責任を果たしたいんだ。ルルーシユは関係ない」

「しかしあの女がいなければお前の父は道を外れることは無かったか

もしれない。お前だつて人を殺さないで済んだかもしれない。それでもお前はルルーシュに生きていて欲しいと思うのか。存在自体が間違っているとは思わないのか」

「思う訳が無いだろう。僕はルルーシュの友達だ」

躊躇の欠片も無い返答を聞いてロロは足を止めた。よく見ると握り締めた手の指が細やかに震えていた。

前に回ると異形の怪物を見るような顔でロロはスザクを見据えていた。絶句したまま視線をスザクの全身に彷徨わせる。眼窩から眼球が零れ落ちるのではないかと心配になる程に目を見開いていた。

何でそんなに驚くんだとスザクの方が驚いた。顔の造りはルルーシュそのものであるが彼女がこんな目でスザクを見たことは一度も無い。疑惑と不信を前面に押し出した表情だった。

そんな顔をする程にこの人は友情や親愛を信じられないのだろうか。

勝手な事ばかりを押し付けるように言い放つロロへの不快感を掻き分けて突如として哀れみが湧き起こった。

友情も親愛も信じられないだなんて、この人はなんて可哀想なんだろう。

「——嘘吐きでもいいんだ。人を沢山殺していても。最低最悪の屑野郎でも。それがルルーシュだつて言うんなら僕はルルーシュを肯定したい。ルルーシュの味方をしたいんだ」

「何故だ。そこにお前の利益は無い。俺は——ルルーシュに、そこまでの価値があるとは思えない。あいつは結局自分のためだけにしか生きていない男だ。ナナリーやジェレミアのためと口では言っている、それは自己満足のためでしかない。そしてルルーシュは死んでもそんな生き方を変えられない。そういう奴なんだよ」

「でも僕はそんなルルーシュが嫌いじゃないから」

ロロにわざわざ言われずともルルーシュが非常に自分勝手な思考回路を持つ、傍迷惑な人物であることなど昔から知っている。

自分にとって大事な人間以外は駒のようにしか思っていないし、その大事な人間にしたって胸襟を開いて話し合うことは稀だ。

大事な人だからこうしてあげよう。こうした方がきつとこうした方がこいつは幸せだ。こんな事は知らない方がきつと幸せだから告げないでおこう。そうやって自分の考えを無理やりに押し付けて満足するような、そんな自分勝手な奴なんだ。

秘密主義者で嘔吐きで病的な負けず嫌いで、粗雑なくせに細かい事に口煩くナルシストで人を見下す癖がある。人間として割とダメな部類に入ると思う。

どうしてジェレミアがルルーシユに惚れたのか全くもって理解できない。いやジェレミアも割とあれだから割れ鍋に綴じ蓋という具合なのだろうか。

しかしそこまでルルーシユという人間の欠点を知っていながらもスザクはルルーシユが嫌いではなかった。

理由は知らない。どうでも良い。人間関係に計算はいらないだろう。欠点の数と美点の数を見比べて友人を作る奴がいれば、そいつは馬鹿だ。

「僕はルルーシユが自己中心的な考え方しかできない馬鹿でもいいんだ。一番辛いときに一緒にいて、手を貸して、間違えていたら教えてあげて、頑張ろうって言いたい。僕が辛いときにルルーシユは言葉をかけて、手を差し出してくれたから。僕はその手を握り返せなかったけど——ルルーシユが辛い時には、僕もそうしたいんだ」

「——それが気まぐれだとしても？」
「うん」

深く頷く。それはどうでも良い事だ。

大事なことは相手の考えではない。自分がどう捉えたかのほうがずっと大事なことだ。ロロは俯いてスザクの足元に視線を落とした。

「僕もルルーシユも自分勝手だった。沢山の罪を犯して沢山の人を殺した。でも僕たちが死んでも罪が無くなる訳じゃないから。神様でさえ過去を変えることは出来やしないのに、僕たちが罪を贖うために死んでも、それこそ自己満足でしかないじゃないか。」

僕はルルーシユに生きていて欲しいと願うよ。これから先も、生きて一緒に戦いたい」

俯いたロロは口を閉じた。

嘲笑して更にルルーシユを非難する言葉を浴びせかけるのではないかと身構えていたが、そんな様子は無くほっと胸を撫でおろした。

しかし鼻を鳴らす音が聞こえてふとスザクはロロの顔を覗き込んだ。澄んだ碧色の瞳を大きく見開いた。

「ロロ、どうして君が泣いているんだ」

16. 大丈夫だ、安心しろ

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

迷子になった少年のようにジェレミアはルルーシュを掻き抱いて視線を彷徨させた。白い皇帝服の右胸が血に染まっているルルーシュの有様は12年前に遭遇した謎の侵入者と気持ちが悪いくらい程によく似ている。そのせいか、6歳の幼いルルーシュの姿がちかちかと蛍光灯のように瞼の裏で点滅して存在を主張していた。

自分はどこで間違った。

胸に手を押し当てて圧迫するも出血は止まらない。上手く酸素が回っていないせいで顔色は白と紫が混在した網目模様に変色している。絞り染めされた布のようだ。

ジェレミアが持つ戦場の経験は、ルルーシュはもう長くは無いと告げていた。助けを求めて彷徨させた視線の先にはルルーシュの実父母と彼らの騎士しかおらず、全員がルルーシュの敵だった。

全世界の存在がルルーシュが痛めつけられているのをにたにたと嘲笑っているように思えてならない。

そうだ。いつだってそうだった。いつだって世界はこの人を陥れて、弄び、決して放っておいてはくれない。この人が9歳の時からずっとそうだった。

唇が寒気を逃がすようにぶるぶると震えて息を吐く。冷静になれ。ルルーシュのために出来る限りのことを為せ。

遺伝子の螺旋のように渦を巻く集合無意識を懇願するように見上げるも応える声は無い。無情に矮小な人間を見下げて上へと昇っている。昇った先に何があるのかは見えない。

もしこのままルルーシュが死んでしまったらあの中に取り込まれることになるのだろうか。そうすればもうルルーシュは酷い目に遭うことはなくなるのだろうか。脳裏に浮かんだ考えがじくじくと膿むように苛む。

誰よりも長く、誰よりも近くでルルーシュを見て、護ってきた。幾度も理不尽な目に遭い、その度に自他の血を流す姿は痛々しくてならなかった。ルルーシュは元来心優しく繊細な少女だったのだ。それが今では瞬き一つせずに人を殺すことができるようになった。

もういいだろう、と思う。ルルーシュがゼロを辞める前からジェレミアはそう思っていた。どこか穏やかな土地で、命を奪ったり奪われたりしなくても生きていける普通の生活にこの人は戻るべきだ。そう口にしようと何度も思い、しかしそれをルルーシュが望まないと知っているからこそ口を噤んでいた。

浅はかだった。嫌われようと憎まれようと真つすぐに口に出して言うべきだったのだ。カレンのように。

ナナリーが去る前にそう言っていれば今もこの人は平和に生きていられたかもしれない。口に出しても無駄だと最初から諦めていた。自分とルルーシュは違う存在なのだから、口に出して喋る必要がもつとあつただろうに。

ルルーシュを掻き抱くジェレミアを前にしてマリアンヌは肩を竦めた。大輪の薔薇のように艶やかな微笑は娘に剣を突き立てた後だというのに微塵も損なわれず、氷漬けの仮面のようにでさえあつた。

「そんなに悲しまなくてもいいのに。今や死は一時の別れに過ぎないものなんだから。すぐにまた会える——あなたはルルーシュと同じものになるの。死んで一つになるのも究極の愛じゃない？」

「……………」

「……返事をするのも嫌？あなたはあんなに私が好きだったのにね。ま、12年もの時間があれば好きな人ぐらいコロコロ変わって当然だけど。意識は時間と共に簡単に変容するものだから……そして貴方の意識にもう意味は無いの」

五月蠅い女だ。今やマリアンヌの全てがジェレミアの癩に障った。ルルーシュに似た黒髪と艶やかな容姿さえ汚物のように見えた。

意識を失ったルルーシュを抱きしめる。肉体から離れたルルーシュの意識はどこにあるのだろうか。少なくとも目に見えるもので

はあるまい。

集合無意識に目を向けると空へと上がる速度が緩やかになったような気がした。

目の錯覚かと瞬きをするが、見間違いなどではなく集合無意識は戸惑っているように眼球や触角を振り乱している。迷子の子供のような仕草であった。

「貴方は現実世界に残された肉体がみんな死んだ後にギアスキャンセラーを使うようになってきているのよ。肉体は負荷がかかり過ぎて壊れて死んじゃうでしょうけど、死んでキャンセラーから解放されたあなたの意識は集合無意識に取り込まれるわ。そうなればあなたはルーシユと一つになるの」

夢見るように滔々と告げられた言葉が集合無意識へ向けていたジェレミアの視線を引き戻した。それは後だ。

マリアンヌは集合無意識に取り込まれれば全ての意識は無条件で幸せになれると思いついて入っているようだが、それで全てが円満に解決するとはとても思えなかった。

そもそも他者と一つになるという状況が全く理解できない。

誰だって自己は自己として、他者とは別のものとして確立している。自己と他者の間には超えることのできない境界があり、人間は自己の境界の内側にしか存在できないのだ。

人間がたった一人で生きていくには世界はあまりに理不尽で、寂しい。それはなんとなく分かる。自分を理解してくれる人間が誰もいないというのは不幸なことだ。そして自己を誰かが完全に理解してくれることなどあり得ない。

人間は根本的に孤独だ。いくら言葉を尽くして、体温を擦り合わせようとも、性交しようとも、子供を作っても、一つにはなれない。自分自分しかいない。誰かに自分を理解して貰いたいという願いは生涯叶わない。

だから自分がルーシユを完全に理解することも永遠にありえないだろう。集合無意識に取り込まれない限りは。

「でも私は嫌です」

血の気が引いているルルーシユの頬を撫でる。触つても境界から溶けて一つになることは無い。どうしてルルーシユがC・C・Cから無理やりにコードを引っぱがして生き延びようとしてくれないのか理解できない。

でもそれで良いのだ。ジェレミアにはルルーシユを完璧に理解することは出来ない。完璧どころか半分も理解できていないのではなにかと思う。そしていつか理解できるようになるとも思えない。だからこそ愛おしい。

集合無意識のうねりが止まった。

空気がぴんと張りつめた気がして見上げると、上にばかり進んでいた集合無意識が完全に静止している。側面に浮かび上がる様々な生物の表情も凍り付いたように身動きを止めており生々しい彫刻のように見える。

「……あら？」

「——集合無意識よ、どうしたのだ」

螺旋状の柱のような集合無意識へシャルルが歩み寄る。様子がおかしいと掌にコードの赤い鳥を輝かせて手を伸ばした。

巨大な亀裂が集合無意識に走った。目を見張る。

マリアンヌもシャルルもクレバスのような裂け目に目を取られていた。完璧な彫刻に傷が走ったような取り返しのつかない悲哀と驚愕が瞳に走っていた。

浮かべていた秀麗な笑みを落としたマリアンヌが顔を顰める。

「神が、何？どうして、」

「これは……神が怒っているのか？いや、集合無意識に怒りなどある筈がない。神は感情に揺り動かされるような未熟な生命体ではない」シャルルの言葉を否定するように裂け目は蜘蛛の巣状の罅割れを肥大化させた。生々しい質感を持つていた螺旋は罅割れを中心として灰色の石に材質を変える。

ガラスが砕けるような音を響き渡らせて罅割れは進行していく。

「——ク、」

「ルルーシユ様？」

薄らと瞳を開いたルルーシユの口元に瞠目したジェレミアは耳を寄せた。同時に覆い被さって頭上から降ってくる集合無意識の欠片からその身を庇う。

いつもの捻くれた、自身に満ち溢れた表情を瞬間浮かばせてルルーシユはくはつと嗤った。悪戯ばかりする子供を窘めるような愛おしさが混じった口調だった。

「ああスザク、やっぱりお前か」

閉じられていた瞼をこじ開けて体を起こす。咄嗟にジェレミアがその体を支えた。

顔色は死人のように青白いままだったが体には僅かながら活力が取り戻されているようだった。集合無意識が来した異常のおかげで意識が取り戻されたのかもしれない。だがまだ呼吸は荒く、全身に網状皮斑が走っている。

ジェレミアは傷口を抑えながら集合無意識の亀裂へと注がれるルルーシユの視線の先を共に見る。

「何が起こっているのでしょうか」

「分からん。あの馬鹿の、やることは、大抵俺には想像がつかんっ」

灰色の彫像に一際大きな亀裂が走った。そこから腕が生える。目を見張る程に鍛えられてはいるが細長く伸びる腕はどう見ても人間のものだ。

腕は無理やりに亀裂をこじ開けるように彫像を押しやり、頭を隙間から抜け出させた。そこから肩をねじ込んで胴体までを引きずり出し、両足を亀裂にかける。その様子は赤子が必死になって母体の膾から生まれ落ちようと足掻いているようだった。

生まれ落ちたのは青い騎士服を着た十代の青年だった。瞳は陰影が混じる碧色に煌々と輝いていた。

両足で集合無意識の残骸を蹴って宙に飛び上がる。人間とは思えない跳躍力だ。サイボーグであるジェレミアでさえあれ程の身体能力は無い。

青年の容姿は年齢の割に幼げで仔犬のような愛らしさを残しておりジェレミアもよく見知った顔つきをしていた。だが彼の表情はこ

「こ最近の陰鬱さを欠片も残しておらず6年前の少年めいた明快さに満ちていた。」

「枢木、」

スザクは青いマントを体に纏わせるように回転しながら音も無く着地する。視認できない速度で抜き払った剣先はシャルルに向いていた。

咄嗟にビスマルクがシャルルの真正面に立って剣を振りかぶる。しかし次の瞬間にはビスマルクの首と胸が離れていた。

噴き出した血が周囲に飛び散るがスザクの騎士服には一滴の血も付いていない。石畳を抉るような速度でスザクはシャルルへ向かって走る。

「今や死という概念に意味は無いと知っていても、戦友が目の前で殺害されるとするのは気分が良いものではない。」

軽く眉を顰めたマリアンヌが迎え撃とうと剣を振りかぶる。だが一歩踏み出す前に足を止めざるを得なかった。

忌々し気に足元を見る。妹に似た濃いストロベリーブロンドを振り乱したコーネリアが足首にしがみついていたのだ。歯を剥き出しにした鬼気迫る表情で両手の爪を白い肌に突き立てている。爪には血が滲んでいた。死んでも離しはしないという決心が顔面に浮かんでいた。

「離しなさいコウちゃん。ユーフェミアに会いたくないの?」

「——ユフィは死んだ、もういない。そうだ、死者は生き返らない……っ」

それでいいんだ。

嗚咽するように吐き出した言葉が終わる前に、マリアンヌは振りかぶった剣を足元に振り下ろした。

コーネリアの胸元が血で染まる。しかし足に縋りついている10個の爪は肌に突き刺さったまま離れない。

うっとうしそうにマリアンヌはコーネリアの手首を斬り落とした。ぱつと血が散り、甲高い絶叫が鳴る。手首だけになっても足に纏わりつく執念を無造作に振り払う。

毬のように飛んで行つた手首の向こうに立つシャルルを見ると、既にスザクはシャルルの目の前まで迫つていた。

ビスマルクの血糊が残る剣先が煌めく。後ずさりしたシャルルは自身の腕を背中に隠そうとしたが、スザクの方が遙かに早い。

スザクの剣は過たずシャルルの手首を両断し、切断面からは鼓動のリズムに合わせて血液が噴出した。地べたが真っ赤に染まりシャルルの膝が崩れ落ちる。シャルルが纏う青い皇帝服に血が飛び散って黒く変色した。

斬り落とされた手首が血で滑る地面にぼとりと落ちる。痛みのあるまりに零れた呻き声を無視してスザクはコードが宿る手首をルルーシユの方向へと蹴り飛ばした。

「ジエレミアさんー！」

サッカーボールのように手首が飛ぶ。手を伸ばしたジエレミアを遮るようにマリアンヌが走り出そうとしたが、足首を捕まえる力にバランスを崩し、歩みを止めざるを得なかった。

足元を見下ろしたマリアンヌは薔薇のような容姿から血の気を引かせて眉間に青筋を盛り上がらせた。驚愕とも憤怒ともつかない形相で、血の気が引いて蟻のようになった肌とは対照的に真っ赤な唇を打ち震わせる。

「っ、いい加減にしなさいコーネリア!!!」

両手首から血を噴き出しながらコーネリアは歯茎を剥き出しにしてマリアンヌの足首に噛り付いていた。

芋虫のように這いつくばり、開ききつた瞳孔は真上から見下ろすマリアンヌへと一心に向いている。瞳にはマリアンヌでさえ背筋を震わせずにはいられない程の化け物染みた執念が燃えていた。

噛みしめた歯は白い足首の皮膚を食い破り、滴り落ちる血がコーネリアの舌を濡らしていた。

生まれてきてから一番不味い味のように思われた。錆びた鉄に腐った野菜を振りかけたような味だ。マリアンヌには似合いの味だろう。

頭上から剣が空気に擦れる音が聞こえてコーネリアは視線をル

ルルーシユに向けた。手首を受け取ったジェレミアはルルーシユの首元へコードが光る手首を押し当てている。

露わになった首元と胸に繋がるラインは柔らかかで、胸には微かな膨らみがある。彼の、彼女の肌の白さはユーフェミアに似ていた。それに華奢な体の線も。視界が滲む。

どうして気付かなかったのだろうか。

「妹だったんだな———そうか、」

最後に護れたか、私は。妹を。

コーネリアは深く最後の息を吐いた。

ルルーシユの首元に赤い鳥が飛ぶ。視界に映る全てを嘲笑うように口元を引き上げて、ルルーシユはジェレミアの肩を借りて立ち上がった。

傷の修復はまだ済んでいないものの体を覆っていた倦怠感と寒気は既に治まっている。コードとは凄まじいものだど再認識する思いだった。

首元を赤く光らせるルルーシユにリアンヌは無表情で斬りかかるも、スザクがその背中を蹴り飛ばす。地面を転がり体を石畳に打ち付け、ごほごほと息を吐くリアンヌへスザクが追撃に走った。

「ジェレミア卿、シユナイゼル殿下にギアスキャンセラーを！」

「シユナイゼル殿下？しかしどこに、」

「僕の中に！」

そのままリアンヌと人外染みた速度での攻防を開始するスザクに、ジェレミアは意味が分からないとルルーシユを見た。ルルーシユは崩れ落ちる彫像と化した集合無意識を見上げた。

それはもう形だけしか残っていない神の残骸だった。生き生きとした意識の煌めきは何一つ残っていないかった。

はっとスザクへ視線を向ける。その姿はルルーシユが知るスザクのままだ。さらに正確な所はルルーシユにも理解は出来ていない。

だが生き生きとしたスザクの姿にルルーシユは高らかに響く砲弾のような声を出した。

「あいつが集合無意識だ！ シュナイゼルの意識があそこにあるんだ！
ジエレミア、行け！」

ジエレミアは弾かれたように走った。

ギアスキャンセラーを光らせてスザクを見る。

一度集合無意識にギアスキャンセラーを使った時と同じように、スザクの中に立ち込める膨大な意識は神経を爪弾くように騒めいていた。あまりの情報量に再度頭痛が走る。

しかしスザクという存在が集合無意識を纏めているおかげだろうか、以前よりはまだ五月蠅くは無い。大量の意識を掻き分けるように目を細める。

その中でこっちだと言わんばかりに一つの意識が声を上げていた。聞き慣れたシュナイゼルの声だ。

無数の集合無意識の中から一つに対してだけギアスキャンセラーをかけるなど、やったことが無い。しかし出来ないで済まされる問題ではない。

金切り声を上げそうになる神経を怒鳴り散らしてその一つの意識に集中する。青い光が満ちる。

「——シュナイゼル殿下、」

ギアスキャンセラーによりナナリーのギアスから解放され、数十億という膨大な自分の中の一つが間引かれるように去って行く。それは振り向く事もせず真つすぐに自分に肉体へと向かって飛んで行った。

その背中を見送るように目を細める。同時にマリアンヌが何かをスザクへと蹴飛ばした。

咄嗟に避けるとそれは数度バウンドして地面に転がった。目を向けると、それは綺麗に切断されたコーネリアの首だった。血で固まった髪が布のように地面に広がる。口元には血が滲んでいたが瞼を閉じた表情は安らかだった。

スザクは息を詰めてマリアンヌを睨む。別段仲が良いという訳では無かった。だがユーフェミアへ向ける彼女の愛情は本物であり、先

んじてV・Vへの復讐を遂行した事へスザクは少なからず羨望を抱いていた。噛みしめた奥歯が擦り切れる音がする。

殺意の籠った視線を受け止めながらもマリアンヌは微塵も揺らぐ事は無く、逆に責めるような視線をスザクへと向ける。

「神よ、どうしてこんなことをするの？貴方が余計な事をしたせいでコーネリアが死んじゃったじゃない」

「どの口がそれをつ、貴方が殺したんでしよう！」

「あなたが楽園の中で揺蕩うことを否定して外に出てくるから余計な死者が出たのよ。ずっと楽園にいれば苦しみも何も無いっていうのに」

馬鹿な子と首を振る。マリアンヌの視線はルルーシユの首へと向いていた。

隙を見せればルルーシユのコードを奪うつもりだろう。シャルルは手首から先を斬り落とされて蹲ってはいるものの、死んでいる様子は無い。

「コードを奪えば集合無意識は解放されるものと予想したんだが樂觀的だったか。スザク、どうすれば集合無意識が解放されるのか分かるか？」

「分からない。ナナリーのギアスのせいだけじゃないのは何となく分かるけど、でもそれが何なのかまでは……」

マリアンヌに剣の矛先を向けたままスザクは額に汗を浮かばせる。

荒く呼吸を繰り返すルルーシユは舌打ちを零した。呼吸をするたびに穴の開いている胸元から空気が漏れ出る音がする。

床に倒れたC・Cを見ると顔色は幾分か回復しているようではあった。しかし呻き声を上げはするものの意識は戻っていない。意識を取り戻すまでにはあと数十分は必要だろう。

蹲るシャルルに寄り添ってマリアンヌは美しい形相を歪ませる。この女が顔を歪ませる所をルルーシユは初めて見た。

マリアンヌはシャルルのことだけは本当に大事に思っているらしい。シャルルの手首を切り飛ばされていつもの余裕を貼り付けたような薄ら笑いを浮かばせることすら出来ないようだった。自分の子

供を一切省みることには無かった癖に。

だが男に寄り添う母を見てルルーシュは微かな安堵が胸に浮かび上がることを不思議に思った。それは血のつながった母が完全な異常者でないことを喜ぶ気持ちだった。

何故だろう。だが恐らくは彼女の血が自分に流れているからだと思っただけだ。

少なくとも自分の母は自分自身以外に大事なものがある女だった。それだけで自分は母に満足すべきなのかもしれない。むしろそれ以上の人間性をこの女に要求するのは傲慢なのではないだろうか。

この女は母親になれるような高尚な生き物では元々無かったのだろうから。

「ルルーシュ、いい子だからコードを返しなさい！」

「生憎と生まれてこの方がいい子だった覚えが無いな」

「もう、どうしてそんなに聞き分けが悪いのよ。皆が幸せになれるのよ？ 永遠の樂園が来るのに！」

聞き分けの悪い子供はどつちだと、苛立ちも露わにぶんぶん剣を振るマリアンヌに思う。

閃光のマリアンヌと称されようともこの女はただの女だ。それも恐ろしい女だ。自分の考えが間違っていると微塵とも疑わないというただ一点でもって人は非常に恐ろしい化け物になれる。

マリアンヌがルルーシュに母親らしいことをしたとすれば、その身を以って行き過ぎた自尊の恐ろしさを教えた事だろう。

最早ルルーシュはそれ以上の価値をその女に求めることはしなかった。そしてこの時を最後にルルーシュが母親に何等かの意識を向けることは永遠に無かった。

マリアンヌの背中越しにルルーシュは周囲が薄暗く変貌していることに気付いた。落ちる夕陽の赤色から段々と紫、昏い青、濃紺、黒と空の色が変わる様に周囲を取り巻く色が変わっていく。

見上げるとドームで覆われている天井の、集合無意識が繋がっていた黒い穴が面積を広めていた。黒い穴は世界を食い破る口のように思えた。口の中には星のような白い点が煌めいて夜空のようだった。

黄昏が落ちる。

そうだ。終わらない日は無いのだから。

夜が来る。

色の変わる空を見上げてシャルルは手首を抑えながらも瞠目した。

「……………どういうことだ？ラグナレクはまだ終わっていないというのに何故日が落ちる」

「あなた、」

斬り落とされた片腕を庇いながら蹲るシャルルは、見る間に夜空に変わっていく空を見上げてまさかと呟いた。痛みのみならず額に冷汗を流すシャルルの背中をリアンヌが撫でる。

細いリアンヌの指を握り締めながらシャルルはわなわなと震えて顔を足元に落とした。そして体の全ての動きを止めて、呼吸さえすることを忘れた。

一瞬の静寂の後、シャルルは爆発したような笑いを吐き出した。豪快な笑い声はCの世界へと響き渡り、集合無意識の残骸すら震わせた。

元は皇帝の座にあり、世界を歪んだ方法で一つにしようとした男が上げるには随分と快活な響きを持つ笑い声に、その場にいたスザクとルルーシュ、ジエレミアはぽかんとシャルルを見やるしかなかった。

それはリアンヌも同様で、片腕から未だ血を噴き出しながら笑う夫に動揺しながらもその肩に寄り添った。

シャルルは黄昏が過ぎて行く世界の中で高らかに敗北を宣言した。

「やりおったなああ、シュナイゼルうううううう!!!」



今、世界で意志を持って動く者はシュナイゼルしかいない。世界は静けさに満ちていた。

全世界のギアス遺跡へ向けてフレイヤを発射した後、シュナイゼルはコンソールの前で床に四肢を投げ出した。

壁に貼り付けられた無数の画面はフレイヤにより破壊された大穴を映し出している。シュナイゼルの手により発射されたフレイヤの数は数十にも及んだ。元は歴史ある遺跡だった痕跡を微塵も残さない漠々たる爆発の後だけが画面に貼りついていた。

帝国宰相に相応しい白い豪華な衣服を振り乱して冷たい床に寝そべっている姿は、この世界で二番目に権力を持つ貴人というより遊び疲れた子供に近い。

「こんなにならなくなったのは久々、だな。もう、特派の場所はもうちよつと皇宮に近い場所しておく、べき」

言葉を切ってシュナイゼルは頭を抱える。ああ、ああ、うー、と動物のように唸り声を零しながら頭皮をがりがりと指で削った。

頭蓋内でガンガンと雷鳴のように叫ぶ声が煩く、まるで脳細胞を一つ一つ潰されているような悍ましい感覚がした。そしてそれ以上に耐えがたいのは、その声が自分から発せられているような奇妙な感覚だ。胃の中で沸騰した胃液がごぼごぼと音を立てるように脳内の声はシュナイゼルへと囁きかける。

この声がシュナイゼルのものであるのは間違いではない。認めたくはないが、この声もシュナイゼルの声なのだった。ただし感情の無いシュナイゼルだ。

数か月前までは自分よりも優位な立場にあった自分自身の声だが、今となつてはそれが自分だと認めたくは無かった。

声の響きからして柔らかみが無く機械音声のように冷たい。しかし人が好意を持つように計算した発声はどこか艶やかで、その正体を知っている今となつてみれば不快でしようがなかった。

今すぐフレイヤの目標地点を各国の主要都市に向けるんだ。そして撃て。

「駄目だよ。どれだけの被害が出ると思っているんだ」

今のうちに人類の力を削ぎ落しておけば集合無意識が解放された後に人間同士で戦争を起す余力を奪うことができる。

今多くの人が死んだとしても、それは一時の被害だ。今後長く戦争を起さないようにするためにはその方が良い。

「五月蠅いっ」

ぶんぶんと頭を振つてその声を逃がそうとする。しかし頭の中から響いている声が消えることは無い。

コンソールパネルに開かれている画面を見る。フレイヤは無事全弾着弾したようだった。威力も計算して制限したため、人的被害も最小限に抑えられた。

ギアス遺跡はこの地球上から完璧に失われた。嘲笑うような笑みが浮かんでくるのを堪えられない。

「いい気味だ、父上。ずっと計画していたものが崩壊するのはどんな

気分ですかね」

そんな事はどうでもいい。それより多くの人類を救うために今すべき事を早く為さなければならぬ。

「そんな事より私にとっては父上がどれだけ屈辱的な思いをするかの方がずっと大事なことだよ」

何を馬鹿な。そんな事だと、人類の未来がかかっているというのに。

「そんな事さ」

どっこいせと体を起こす。壁に背中を預けて息を吐いた。

耳を澄ますも、意識の存在しない機械が忠実に動く音以外には何も聞こえない。護衛の兵士の足音も、メイドのお喋りの声も。人間が生じる賑やかな騒めきが一切この世界には存在しない。いつもなら煩わしい羽虫の音さえ今は恋しく思えた。

今、自分は一人きりだ。一人きりで問答を続けている。

「自分自身の意識でさえこんなにも纏まらないというのに、無数の人々の意識を一つにするなんて無理があるように思えるんだけどね……でも確かに集合無意識は成立していた。あれがコードの力なのかな」

何を躊躇っているんだ。早く起き上がれ。

シュナイゼルである私が今行動しなければ今後戦争で失われる血の量は膨大なものになる。自分の手が血で染まる程度のこと何だというのだ。

「その発想はルルーシュとちよつと似てるね。もしナナリーとジェレミア卿が居なかつたらルルーシュは君みたい……ぞつとしないな」人間は進化し過ぎたのだ。ここで足を止めなければいつまでも戦い、遂には自壊するだろう。明日が今日より良いものになるとは限らない。世界は今日で時を止めるべきだ。

「五月蠅いぞシュナイゼル。お前に私は従わない」

お前もシュナイゼルだ。お前はギアスによって作られたシュナイゼルの偽物だ。

本来の私には感情は存在しない。お前はキャンセラーによって消

え去るべき存在だ。

「そうなのかもしれない。しかし私は偽物ではない。私は君とは全く別の存在として確立している。私は人間が、たとえばいつか滅びるとしても、足を止めるべきではないと思う。この思考こそ私が私として成り立つ自己を形成している」

懐から自衛のために持ち歩いていた拳銃を取り出した。

射撃訓練を受けてはいるものの実戦で撃つたことは無い。しかしこうも近距離であれば外さないだろう。

「私のことをお前には理解できない。感情の無い、理性と知性しか存在しないお前には——」

非論理的だ。

「そうだとも。人間とは元来非論理的存在だ。論理の外にこそ人間の本质がある。そうと知っているからこそお前はいつだって誰かを矢面に立たせて、自分は一步下がっていた。民衆は論理では動かないと知っていたから、非論理的な感情を持たないお前は皇帝には成り得ないと知っていたんだ」

成程。確かにそうかもしれない。

ではお前は どうするんだ。非論理的感情を持つ私。シュナイゼル。君はどうする。

世界を平和にするために君は、

「知るかそんなこと」

拳銃で右膝を撃ち抜いた。

焼けるような痛みに呻く。拳銃を取り落としそうになるが、しっかりとグリップは握り締めたまま体を震わせて激痛に耐えた。

何を、という声を見殺してそのまま左膝も撃ちぬく。骨が砕ける音がした。あまりの痛みに呻き声が口端から漏れ出した。

息を吐いて床に横倒しになり拳銃を遠くへ放り投げる。武器はもう何も持っていない。

足を動かそうとすると軋んだ骨が削り合って傷口から血が噴き出した。それでも無理やりに動かそうとすると千切れた腱が悲鳴を上げるようにびくびくと痙攣する。無事に関節を破壊できたらしい。ど

うやつてももうこの足では歩けはしないだろう。

これで体の主導権をあのシュナイゼルが得たとしても、何もできはしない。

地べたに横たわったシュナイゼルにとってフレイヤ起動を司るコンソールは巨大な城塞のように見えた。

「平和なんてどうでもいいんだ。あの父親が気に食わなかった。恨んだ。嫌いだ。死んでしまえばいい。よくも私の感情を奪ったと、怒りのあまり死んでしまいそうになる程に憎い。復讐したい——死んでもいい。復讐さえ叶うのならば」

シュナイゼルの声に返答は無かった。ただ呆れるような溜息が聞こえた。

ふふ、とシュナイゼルは口端で笑った。理解できないだろう。それでいい。さようならだ。人間の屑め。二度と会うことも無いだろう。

冷たい床に接している頬に温い感触がして何かと見ると、足から流れた血液が床を侵食して頬を濡らしていた。貧血のせいかわるくなる息をなんとか落ち着かせながら両手で両足を掴んで止血しようとする。

しかし失血し過ぎたのか両手はがくがくと震えて強く力を籠めることは叶わなかった。掌が真っ赤に染まる。両足からは止めどなく血が流れ続ける。

どうしてだろう。悲しい。復讐は成した。感情も取り戻した。何も後悔は無い筈なのに。

死んでもいいと思った感情は嘘ではない。しかし怖い。両手足が寒気以外の理由でがくがくと震える。

死んだらどうなってしまうのだろう。何もかもが消えて無くなってしまうのだろうか。何もない空間で一人。その想像は臓腑を凍らせるような恐怖に満ちていた。

もう二度とルルーシュと遊んだり、ロイドの軽口を聞いたり、カノンと一緒に仕事をしたり、シャーリーの薄い紅茶を飲んだりすることはできなくなってしまう。

集合無意識の中でスザクにギアスキャンセラーをかけるよう頼んだ時から死ぬ覚悟はしていた。しかしそれでも間近に死を感じると恐怖に体が竦む。

両目からぼたぼたと涙を流しながら凍えているように身を振らせた。寒い。

死がひたひたと近寄る音がする。誰かに傍にいて欲しかった。誰でも良いから。一人は嫌だ。

「嫌だ、嫌だ……死にたくない、死にたくないようう」

シユナイゼルはただ一人取り残された世界の中心で恐怖に打ち震えながら心から祈った。何に祈っているのかは彼自身にもよく分かっっていない。

ただ死にたくない。生きていたい。戦いが止むことの無い理不尽で残酷な世界で。

感情のある人間として――

17. 世界は続いてゆくものだから

スザクから零れ落ちた意識は灰色の彫刻と化していた集合無意識に戻る。

意識と融合して生き生きとした姿を取り戻した集合無意識は自らの意志で風化したかのようにぼろぼろと崩れて、次々と石畳の向こうに広がる巨大な穴の下へと飛び下りた。

氷河が砕けて海に落ちる姿に似た幻想的な光景だった。鳥の群れが頭上に弧を描き、悠々と穴の下へと飛び降りて行く。鳴き声を上げながら飛び降りる猿の群れ。屈伸運動してから飛び降りるお調子者の姿も見えた。

「あ、リヴェアル」

スザクがそう言って指さした先を見ると青みがかった髪色を持つ友達が競泳の飛び込みのように穴の中へと落ちていく姿が見えた。落ちながらぶんぶんとこつちに手を振っている。口を動かして何か言っているようだったが、動物の鳴き声やら人間が上げる歓声や鳴き声やらで内容までは分から無い。しかし超人的な五感を持つスザクはその限りでは無かった。

「推薦入試落ちたー！ってさ」

「この騒ぎの中でよく聞こえるな。動物園のど真ん中より煩いぞ」

「このぐらいの距離なら聞こえるよ。それより何であんなこと言いながら飛び降りたんだろう」

「……………受験勉強でストレス溜まってたんじゃないか？」

あはは、と笑って若干の現実逃避をしながらスザクは穴の中を覗き込んだ。

集合無意識から離れ、現実世界へ戻ることを選んだ生物達が昏い穴の中で星のように煌めきながら落ちて行く。

その光景を眺めながらマリアンヌとシャルルは深い諦観の籠る息を吐いて首を振っていた。

「ルルーシュ、あなたって子はどうして言うことを聞いてくれないのかしら」

「俺は主観でしかものを考えられない生物だ。俺にはお前の考えは理解できない。理解したいとも思えない。お前の考えに共感もできないし、お前の人間性に好意を持っている訳でも無い。賛同する理由が一つたりとも無い」

肩を竦める。呆れたとばかりにマリアンヌは眉を八の字にへし折った。

体に落ちる幾つもの影に気付いて真上を見上げると多くの生物がぐるぐると弧を描いては螺旋状に渦巻きながら興味津々といった目つきでこちらを見降ろしている。水族館の水中トンネルをくぐっているような気分だった。魚だけではなく哺乳類や鳥類や虫まで多種多様な生物が空中を遊泳している。

ひらひらと手を振ると甲高い笑い声が上がって彼らは手を千切れんばかりに振り返した。ルルーシュだ、ゼロだ、と口々にきやあきやあと騒いで満足したという顔で穴の下へと落ちて行く。

幻想的かつ非現実的な光景を前に脳の芯が痺れるような恍惚を味わいながらも、何が起こっているのだろうというポカンとした感覚がルルーシュの中には横たわっていた。

どうして集合無意識がスザクの形をしていたのか。そして何故集合無意識がスザクの中から出て行って、あの穴の中に落ちて行くのか。

あの穴の先はどこに繋がっているのか。現実世界なのだろうか。恐らくは現実世界へと戻ったシュナイゼルが何かをしたのだろうと思う。もしやフレイヤを使ってギアス遺跡を破壊したが故に集合無意識が解けたのかもしれない。

元々黄昏の扉とCの世界は繋がっていた。コードを利用してラグナレクの接続を為していたのであれば、コードとCの世界に関係が深かった黄昏の扉がラグナレクの接続に関与していたとしてもおかしくは無いのだろう。多分。恐らく。

断定が出来無いのはその理屈が全く分からないためだ。

フレイヤをぶっ放しただろうあの兄も計画における理屈の部分は理解できていなかったのではないだろうかと思う。

多分なんとなく世界中のギアス遺跡が全部吹っ飛ばせばシャルルの計画が全部おじゃんになるかもしれない、勘だけどね、程度の思考回路だったのではなからうか。シュナイゼルに直接聞かなければはつきりとしたことは何も分からないけれど、彼は集合無意識から離れて現実世界に既に戻ってしまっている。

まあ現実世界に戻ってから聞けば良いか。何が起こったのか今後研究するにしても資料は手元にあることだし。ルルーシュは首元の赤い鳥を溜息と共になぞった。

無数の生命を貪欲に飲み込む集合無意識が中心から生えた大穴を見る。外壁が崩れるように集合無意識に取り込まれていた生物が次々と大穴に落ちて行く。その代わりに集合無意識は段々と細く儂く変化していた。

「——この下はどこに繋がっているんだ」

「これが思考エレベーターだ。落ちれば現実世界に戻れる。恐らくは」

ふらふらとした足取りでC・C・が立ち上がる。スザクがその肩を支えていた。

顔色は青白いものの蠟のような生気の無さは脱している。集合無意識を前に眩しそうに瞬きを繰り返す琥珀色の瞳には生命力があった。

「大丈夫か」

「死んではいけないさ。直に完治する。取り合えず循環器系は全て治った……おいマリアンヌ、いい加減諦めたらどうだ。コードを奪われたお前達に出来る事はもう無いだろう」

「あら、そうかしら」

「それを決めるのはお前達ではあるまい」

腕を抑えながらシャルルは立ち上がり、頭上で飛び回る生物達を見上げて溜息を吐いた。悲し気に目頭を押さえた姿は死者を悼んでいる姿にも似ていた。その細やかな仕草にさえ苛立ちが募る。

マリアンヌとシャルルがどういった理由で意気投合してラグナレクの接続を計画したのかは知らない。だがマリアンヌは多分に愉快犯的な思惑だったのだろう。自分本位な思考回路は嫌悪感を沸き立たせるものだが同時に得体の知れない気味の悪さもあり、人間としての好悪より先に警戒心が前面に立つ。

シャルルに対して込み上がる侮蔑感、マリアンヌに対してのそれとは種類が違った。まるで自分が被害者であるかのように振る舞う厚顔無恥な態度が癪に障ってしょうがないのだ。

自分とナナリーを捨てておいて弱者気どりなど許せることではない。他の誰が許しても、たとえナナリーが許しても、自分だけは絶対に死んでも許さない。この男はナナリーを捨てたのだから。

「全ての生物をと願ったのだが———そうか。失敗か」

「はい。失敗ですね。残念ですお父様。全生物を、とは行きませんでした。偏に私の力不足のせいでしょう」

かつかつと石畳を歩く音が鳴る。振り返る。

集合無意識を背にナナリーがこちらに向かっていた。柳の枝のように華奢な足でしつかりと大地を蹴っている。

アツシユフオード学園の制服を身に着けてこれから登校するかという軽やかな足取りだった。

ナナリーが歩いている。6年振りのその光景にルルーシユは打ち震えた。今自分がいる世界が虚数空間であり現実世界でないと感じていても、両目で前を向いて凜と歩く妹の姿は夢にまで見る程に待ち望んだ光景そのものだった。

「ナナリー、ナナリー！」

ルルーシユはナナリーに駆け寄り華奢な体を抱きしめた。服越しに触れた柔らかな体はルルーシユの体を温めた。豊かなアツシユブロンドに顔を埋めて頬を擦り寄せる。頭1つ分以上小さい妹はすっぽりと両腕の中に納まり抵抗も無くルルーシユの為すがままだにされていた。

「ナナリーっ、良かった無事だったんだな。心配した、心配したよ、」

「———はいお姉様。ナナリーは無事でした」

お姉様、と再度呟いた後に唇を強く閉じてナナリーは姉の背中に腕を回した。スザクが何か言いたげにルルーシュを見たもののナナリーが唇に指を添えたために口を閉ざす。

大人しく黙ったスザクにナナリーは頬を持ち上げるだけの捻くれた笑みを浮かべる。ナナリーのためにルルーシュが払った多大な犠牲をナナリーが知っていると、ルルーシュは知らなくて良いのだ。

ナナリーは抱き着いたルルーシュの体が思っていたよりも細く、触れれば指が沈むように柔らかいものであることに気付いて目を潤ませた。もつと姉は大きい人だと思っていた。しかしこうして両足で立つと自分とそう背丈は変わらない。

集合無意識の中で姉についての情報を知り得た今をもってしても愚かな姉だと思う。自分勝手に他人のことなんてまるで考えていない。大事だと嘯く自分とでさえまともに話し合った事は一度として無かった。

こうすれば幸せだろう。こうした方が良いだろう。こんなことは知らない方が良いだろう。いつだって押し付けるばかり。本音で話し合うなんてしようもしない。

それが嫌で嫌でしようがなかった。きつと自分が頼りなく、幼く、何の力もない障碍者だからまともに扱ってくれないのだろうと卑屈にもなった。自分よりも美しく賢い姉に腹の底が煮えるような嫉妬さえ抱いた。

何より、自分も同じ意志のある人間だと認めて欲しかった。

そのためだけにこんな所まで来たのだ。

全人類が言葉も無く相互理解を可能とする世界を創ろうとした。全ては姉と完璧に理解し合うため、そして姉に成し遂げられなかったことを自分が為すために。

何て自分勝手なことだろう。姉を笑えない。しかし自分でも驚くほどに後悔は無かった。あるのは清々しい敗北感と達成感だ。

全てを知った今でも集合無意識は優しい世界に繋がる唯一の手段だと信じている。全てを知る事は自傷とそう変わりのない愚行だとしても人類が楽園に辿り着くためには集合無意識になるしか方法は

無い。人類はこうでもしないと完璧な相互理解なんてできやしないし、平和が訪れる日は来ない。

しかし集合無意識の中に耽溺し、姉のことを知れば知るほどに悲しくなることもまた事実だった。

全てが愛故だと知ってしまったがために。

「——お姉様は、馬鹿です」

「すまないナナリー、すまない」

姉が何に対して謝っているのかナナリーには分からなかった。聞こうともしなかった。きつとそれは的外れであろうと分かっていた。

ナナリーは血に濡れたルルーシユの胸元にそつと手を浴えた。指先が酸化して赤黒く変色した血液で汚れたが濡れるような感触は無い。新たな出血は無く、傷は完璧に塞がっているようだった。顔色はまだ青白いものの重篤である様子は無い。

赤い鳥が飛ぶルルーシユの首元に手を浴える。首を絞めるような仕草にジェレミアが駆け寄りかけたが、足を踏み出す寸前にC・C・に腕を捉えられた。苛立たし気に視線だけをC・C・に向ける。

「何を、」

「黙って見ている」

2人の姉妹を見やるC・C・は湖に沈む石を見ているような顔をしていた。憐れみと嘲笑が半々に入り混じった奇妙な表情はジェレミアの足を凍らせた。常は飄々とした態度の下に隠されている、数百年を生きた魔女の酷薄な芯が顔の上に剥き出しになっていた。

「C・C・？」

「いつだって行動には責任が伴うものだ。そしてナナリーの責任はナナリーにしか果たせないものだ。愛では解決できない問題なんて幾らでもある——これもその中の一つということだ」

冷やかな言葉からナナリーの意図に気付いたジェレミアは焦る心持を即座に落ち着かせて寄り添う姉妹を見た。ナナリーの両目には達成人の証である赤い鳥が羽ばたいている。

ルルーシユは両手で首を包みこむナナリーに首を傾げた。

怒りのままに不老不死になった姉の首を絞めようとしている様で

はない。むしろナナリーの顔は晴れ晴れとした微笑みに満ちている。まるで透き通った仮面を被っているようだ。

「……ナナリー、何か気になることでも？」

「お姉様、申し訳ありません。これは頂いて行きます」

何をと問う前にナナリーの両目が赤く光った。

体を満たしていた充足感が消える。忘れていた倦怠感が戻り足が震えてその場に膝をついた。

傷痕を襲うじくじくとした痛みがぶり返し、まさかと額に汗を浮かばせながらナナリーの掌を凝視する。

姉の視線に気づいて悪戯めいた笑みを浮かばせたナナリーはコード飛んでいる掌が良く見えるように掲げた。冷水を浴びせられたように体が一気に冷えた。

「ナナリー！何をするんだ！」

「これが無いと集合無意識が保てないようなので、頂きますね。お姉様にはもう不要なものでしょうから」

「まだそんなことを言っているのか！もう集合無意識は終わりだ。皆現実世界に帰る。俺達もいい加減に帰ろう！」

「これは私の責任なのでお姉様。ほら」

細い指先に誘導されて視線を向けると、次々と零れ落ちる生物の中で集合無意識から離れようとせず石像のように硬直したままの意識が見えた。

螺旋状の彫刻のようだった集合無意識の中心で、まるで鉄芯のようにその意識達はその場から微塵も動こうとしない。

「——帰れない人もいるのです。現実世界より集合無意識の中に居る方が幸福であり、確かな楽園だと感じている意識もいらっしやるのです。私は彼らと共に行かなければなりません」

「っ、どうして」

「どうかへ」

聖母のように微笑んだナナリーは優雅な足取りでC・C・に近寄り、ルルーシユへしたように小さな掌を額に押し当てた。

C・C・は黙ってナナリーの手を受け入れて目を閉じた。

「コードが2つなければ安定しないとお父様がおっしゃっていましたが……申し訳ありませんが」

「私にとってみれば都合が良い。欲しいのなら持つていけ。しかし言うておくが、その先は地獄だぞ」

地の底から這い上がってくるような声だった。額から離れていく掌を感じてC・C・は目を開いた。目の前には両の掌にコードの赤い鳥を浮かばせたナナリーが微笑んでいる。C・C・の言葉を受けても一切崩れない笑みはどこか神秘的であり、手で払えば消える霞のように見えた。

「いえ、楽園です。一切の瑕疵の存在のしない楽園ではないかもしれませんが。しかし私が考えられる一番の幸せが集合無意識の中にあります。私は無数の意識をその楽園に呼び込みました。だから私には、留まる者達を導く義務がある」

柔らかな声にC・C・は黙って顔を伏せて、同意も否定もしなかった。その額はただ白いだけであり赤い鳥は居ない。

口を閉ざしたC・C・にナナリーは背を向けた。もうこの場に留まる理由はない。両の足で大地を押しやる様に歩き、マリアンヌとシャルルを通り過ぎて集合無意識の眼前へと立つ。

無数の意識で構成された生きた彫像を背にナナリーは背を伸ばして張りのある声で宣言する。

「私がコードの所有者です。これからは私がラグナレクの接続を、集合無意識を率いて行きます。お父様とお母様は大人しく集合無意識の中に向かいなさい。ここに留まる必要性は既にあなた方には存在しない」

「それはそうだけれど……このままだと集合無意識に残る意識はそう多く無いわ。それはどうするつもりなの」

「どうもしません。私は自分の意志で集合無意識に残る者しか連れて行きません」

無然とした表情をするマリアンヌの肩にシャルルが手を沿えた。顔をゆつくりと横に振り巨軀にそぐわぬ穏やかな声を出す。

その光景を眺めていたルルーシユは突然シャルルが初老と言つて

も差し支えない年齢であることに気付いた。彼の年齢はデータとして知ってはいたが、既に老いに侵食されかかっている。然るべき男であると思つたことは無かつた。

この瞬間にシャルルの老いを強く感じたのは彼の表情を色濃い疲労が覆つていたためだつた。

「——出来得る限り沢山の人が、出来得る限り幸せに。僕はそれが最善であると、償いだと思つていた。だがそうは行かなかつた。結局は自分の意志で残る人々しか僕は幸せにすることができない」

「自分の意志で幸せになりたいと思う人しか幸せにできないのは当然でしょう」

「そもそも貴様に誰かを幸せになどできるものか。実の子供でさえ不幸にすることしかできなかつた癖に、思い上がりも甚だしい」

とはいえ年経た疲労を斟酌してやる義理はこちらには全く無い。

シャルルは実の娘たちに完璧な拒絶を言い渡されて小さな苦笑を浮かべた。そのまましつかりとした足取りで集合無意識に向かう。その後をマリアンヌが追つた。

最早ルルーシユには欠片程の意識さえ向けず、マリアンヌは颯爽とした足取りで真つすぐにシャルルの元へと向かう。しかしナナリーの隣を通り過ぎる時に一寸だけ足を止めてマリアンヌは小さく呟いた。

「悲しいわね、ナナリー。セックスもできない。子供も作れない。恋情の可能性すら与えられない……ルルーシユが男のままだったら違う終わり方があつたのかもしれないのにね」

「……………黙りなさいマリアンヌ。もう言葉は貴方には必要ないでしょう」

随分と姉に似た表情をする。氷点下の冷気を纏わせる視線を浴びたマリアンヌは肩を竦めてシャルルの隣へと向かつた。

ナナリーの秘められた欲に気付いたのはマリアンヌだけだつた。集合無意識であつた枢木スザクは気づいたかもしれないが、ルルーシユに教える時は来ないだろう。

あの子の恋は芽吹くことなく、誰にも気づかれずに死んでゆく。そ

れも美しいとマリアンヌは口端で嗤った。

石畳の端で並び、手を繋いだ2人は躊躇う事無く集合無意識へ向かって飛んだ。

頭上を飛ぶ無数の意識と同じようにマリアンヌとシャルルはふわふわと空中を漂う。しかし他の意識のように迷うように旋回したり螺旋を描いたりする事無く、真つすぐに集合無意識へと向かった。

そのまま2人は集合無意識へ突入し、瞬く間に溶解した。蠢く生物の中に2人の肉体は埋まり直ぐにその姿は見えなくなる。繋いだ手は繋がれたまま集合無意識の内に消えた。傍迷惑で苛烈な生き様を送ってきた2人の終わりは拍子抜けする程に呆気なかった。

数秒と掛からない内に2人は集合無意識の一部と成り果てて、ルルーシユの知るマリアンヌとシャルルは永遠にその姿を消すだろう。自分の人生を散々に弄んだあの2人に会う事は二度と無い。

体の内が焼け爛れる程に抱いた憎悪と嫌悪を向けた相手が消滅したと言うのにルルーシユの内には悲哀も歓喜も沸き上がる事は無かった。無数の意識の中に溶けて消えるまでを見届けた後に軽く眉を顰める。それがルルーシユが2人との別離で与えた全てだった。

自分の人生はあの2人から始まったというのに、2人が消えた瞬間に心の内に湧き起こる感慨は何も無かった。

まるで最初から何も無かったかのように2人は溶けて消えた。後には何も残さず。その事実だけをルルーシユは消化して冷ややかな眼差しだけを与えた。

憎しみは心の内にまだ籠っている。しかしそれより優先するべきものが幾つもある。その内でも最も貴い人がルルーシユの前で佇んでいた。

ルルーシユとそう変わらない表情で2人が集合無意識に溶けたのを見守った後、ナナリーは振り返り背後に佇む姉を見た。シャルルとマリアンヌに向けていた視線よりもずっと温かな色があった。

「ナナリー、」

「お姉様は集合無意識には戻られないのですよね」

当然といった表情でナナリーはルルーシユと相對する。

ぐ、と言葉を詰まらせてルルーシユはナナリーに向けた腕を下ろした。再びあの中に戻りたいとは思えない。自分が無くなつていく感覚は筆舌に尽くし難い違和感があった。

確かに幸福感はあった。しかしそれを上回る反逆の意志がルルーシユの中では渦巻いていた。そもそも他者に迎合して集団の中の一粒になるなどルルーシユの在り方に真つ向から反対する生き方だ。

だがナナリーは集合無意識を率いて行くと言った。それはつまり集合無意識の中に戻るといふことなのだろう。

現実世界に戻っていく意識達を尻目に、上へ、上へと昇っていく集合無意識は異形でありながらも生き生きとじていて、輝かしいまでの生命力に満ち溢れている。美しいと言つてもよかった。ナナリーはあの中の一部として生きるのか。

ぶんぶんと顔を横に振る。認められるわけが無い。ルルーシユはナナリーに手を伸ばした。

「コードを返すんだナナリー。アツシユフォード学園に帰ろう。お前が帰つて来るのなら俺も皇帝の座をシユナイゼルに渡して、ただのルルーシユに戻るから。何か不満があるなら全部叶える。約束するから……」

「では私の意志を尊重して下さい。これはもう私のものです。お姉様には返しません」

「それは玩具じゃないんだ、不老不死のギアスの源で——きつとお前を不幸にする」

「不幸にであるかどうかは私が決めることですよ。お姉様ではありません」

小さな子供を窘める口調だった。駄々を捏ねているのがまるでルルーシユであるかのように錯覚させる声色は既に子供のものではなかった。初めて聞くナナリーの口調に押し黙ったルルーシユからC・C・へとナナリーは視線を移す。

「元々ラグナレクの接続はコードが2つ必要だったのです。2つ無いと何が起ころるか分かりません。C・C・さんにも返しませんよ」
「私はもうそんなもんいらん」

ひらひらと手を振るC・C・の表情にコードへの未練は一切無かった。むしろ清々しい笑みを零している。

「生きるといふのはこういう感覚だったんだな……懐かしい。心臓が貫かれたり頭蓋が潰れたりしたら死んでしまうとなるとちよつとした外出でさえ怖く感じるよ。それにあと20年もしたら老化が始まってしまうのか……皺に白髪、シミ、ほうれい線、ああ怖い」

シミ一つ無い肌を摩りながらC・C・は言葉とは裏腹に嬉しそうに自分の体を抱きしめた。

老いる事、簡単に死んでしまう事、それらに対して恐怖を感じる事さえC・C・にとっては喜びでしかなかった。

諦めかけていた死への過程、その全てをC・C・は渴望していたのだから。ナナリーの言葉はC・C・に染み込むような安堵を与えた。「ええ、もうお返ししません。これは私が持つて行きます。C・C・さんはもう二度とコードを持つことはありません。お姉様も」

両手を祈るように合わせてナナリーは微笑む。ルルーシユはもう何を言ってもいいのかわからなかった。ただナナリーの選択をどうしても許容できなかった。

集合無意識に戻ってどうするのか。どこに行くのか。何をするのか。

ただこのままではもう二度と会えなくなる事だけは確かだ。

堪らずルルーシユはナナリーに駆け寄った。

勢いのままに華奢な体を抱きしめる。小さな体だ。アツシユブロンドの柔らかい髪が頬を撫でる。どうしてナナリーが集合無意識に戻ろうとしているのか理解ができない。いつか理解できるとも思えなかった。

ナナリーと自分が一つの存在になることは永遠に無いのだろうか。

「行くなナナリー」

「いえ、私は行きますお姉様。さようならです」

二度と離さないと抱きしめる腕に力を籠める。その力に応えるようにナナリーはルルーシユの背中に腕を回して爪を立てた。

体温は愛だ。これから自分は体を捨てる。姉から愛を受け取るのはこれが最後になるだろう。涙が零れて視界が濁る。ナナリーは眼を閉じてルルーシユの背中に縋りついた両の掌を赤く輝かせた。

ルルーシユの視界全てが白く染まった。

空虚で寒い空間に突如として放り出される。しっかりと抱きしめていた筈のナナリーは腕の中に居なかった。

寒くて肌が粟立つ。一体ナナリーはどこに消えたんだと周囲を見回すも視界全てが純白で覆われている。

茫然とする間もなく周囲の景色は純白から複雑な色彩へと姿を変えた。眩暈を起こすような色の変化に耐えながら何が起こっているんだと周囲に目を走らせると、目まぐるしく移り変わる景色は自分の人生の一場面を繋ぎ合わせたものであることに気付いた。

走馬燈を逆に回すように脳裏に染みついてきた記憶がかわるがわる周囲に浮かび上がっている。

人生の記憶一つ一つが閃きながらモザイクを砕いたカケラのように散らばり、繋がって道を描いていた。眩しい道程は所々目を背けたくなる程に汚らしい色をしていたが、ルルーシユはそのモザイク状の歪な道を歩むしか無かった。

他に道は無かった。いや、あったかもしれない。しかし自分は自らの意志で以って一つ一つカケラを選び、自分の手で道として敷き詰めたのだ。こんな筈じゃなかった。歪なモザイクの道を消してしまいたいと思えば想う程に涙が零れる。

俯く瞳から涙を受け止めた過去は閃き、通り過ぎて行く。

集合無意識の中で感じた冒瀆的な記憶

マリアンヌの宣言と共に世界中にギアスがかかった瞬間

皇帝位への登極

ゼロとして黒の騎士団から受けた弾劾

カレンに救われた黄昏

ナナリーがシャルルの元へ向かった時

ユフィの死

ジェレミアの帰還

合衆国日本の建国

ブラックリベリオン

行政特区日本の式典

C・Cの本名を知った時

ナリタ連山での戦闘

ゼロとして初めて表舞台に立った時

シンジユクゲッターでの掃討作戦

ジェレミアが死んだと思った瞬間

アッシュフォードでの幸福な日々

スザクとの別れ

枢木ゲンプを殺した夜

ジェレミアとの再会

屈辱の日々、そしてスザクとの邂逅

マリアンヌの死

初の戦場で嗅いだ鉄火の臭い

ジェレミアとの出会い

—— おぎやあ、おぎやあという泣き声が聞こえる。

花が咲き乱れる離宮の庭でルルーシユは花を摘んでいた。しかしアリエスの離宮中に響き渡るような煩い泣き声に耐えられず、花を摘む作業を中断して顔を顰めながら音源を探そうと四方を見回す。すると近くのベンチに母が腰掛けていることに気付いた。

近寄るとマリアンヌは腕の中に何かを抱えているらしかった。腕の中にすっぽり収まる程度の小さいものだ。3歳の子供らしくルルーシユはよたよたと頼りない足取りでベンチの上に乗った。

母の肩にもたれ掛かる様にベンチの上に立って柔らかな腕の中に納まっている小さい生き物を見下ろすと、それは自分に似た色合いの董色の瞳を瞬かせてこちらを見上げた。

一瞬泣き声が治まる。しかしそれは本当に一瞬のことで直ぐにその小さな生き物は再度泣き声を上げ始めた。あまりの甲高い声量にルルーシユは驚いてのけぞった。この生き物は何なんだろう。

しげしげと泣き続けているその生き物を研究者のような目つきで観察した。顔はくしゃくしゃで赤らんだ猿のような外見をしている。申し訳程度の短い髪が頭に生えており、手足は豆粒のように小さい。頬は丸々としていてリンゴのように赤い。

恐る恐る指を伸ばして頬をつつくと思じられないくらいに柔らかかった。おやつに食べるマシユマロのようだ。

頬をつつかれたのがむず痒かったのか赤ん坊はさらにポリュームを上げて泣いた。

しかしマリアンヌがよしよしと赤ん坊の小ぶりな頭を撫でると、スイッチが切れたかのように泣き声を上げるのを止めた。そしてこれまでの騒ぎようは何だったのかと思う程に穏やかに目を瞑って眠り始める。

なんて挙動不審な生き物だろう。

好奇心からナナリーを凝視するルルーシユにマリアンヌは苦笑した。

「もうあなたはお兄ちゃんよ、ルルーシユ。これからはナナリーをちゃんと守りなさいね」

「お姉様、愛しています。永遠に愛しています。だから、いつまでも私のことを忘れないでいて下さいね」

ナナリーは崩れ落ちたルルーシユをその場に置いて集合無意識に向かう。足取りに淀みは無い。

シヨックイメージの影響で全身を震わせながらも、ルルーシユの視線はナナリーを一心に見つめていた。その視線を感じながらもナナリーは振り返ることは無かった。

螺旋を描きながら昇り続ける集合無意識を見上げてナナリーは眼を細めた。

どこまでもどこまでも昇っていく。その先には楽園があるのだろうか。

集合無意識が向かう先を捕まえようとするかのようにナナリーは両の掌を掲げた。そしてそのまま集合無意識に向かって飛ぶ。

背後でルルーシユが絶叫するのが聞こえたが、ナナリーの足を止めるには至らなかつた。

意識だけになったナナリーは集合無意識の中に入り込み、溶け込んだ。無数の意識にもみくちゃにされて小麦の粒が練り合わさって一

つの塊になるように集結の一点を目指す。

降り注ぐ大量の記憶と意志で摩耗していくナナリーの自我は自分の名前を忘れ、自分が以前は独立した一つの個人であったことさえ忘れようとしていた。

瞼の裏に沢山の人々が別れを告げるように浮かんでいく。そして次々に去って行く。自分を通り過ぎて去って行く人々の名前も、性格も、顔も、その自我は忘れていく。

最後に記憶の隅に残った一人の、名前も忘れた黒髪の美しい女性がその自我の記憶から名残惜し気に立ち去ろうとしていた。

その女性の凜とした後姿を見送り、あれは誰だったのかと思いつくとしたが、もうその女性に関する記憶は自我の端にも残っていない。記憶は綺麗にまつさらになった。

無数の意識の奔流に飲み込まれて完全に消滅しようとしている自我は穏やかな心持のままその時を待った。しかし波打つ奔流に溶け込もうとする最後の瞬間にふと、誰に向けるでもなく呟いた。しかしその呟いた言葉さえその自我は直ぐに忘れてしまった。

「——自分の一番正しいと思うことを、自分の好きなようにしましょう。そうする権利は誰にだってあるのです。きっと、誰にだって。そうするために私は世界を壊し、そして、世界を——」

望んだ殆ど全てのものを連れて、ナナリーは現実世界を去って行った。

戦争や悲しみ、理不尽さが存在しない空間。完璧に互いを理解し合える人々。

自分を大事にするように他人を大事にできる、すれ違いなど起こりようもない優しい世界。

地球上全てとはいかずともナナリーは多くの意識を連れて永遠の楽園を求めて旅立ったのだ。

愛以外のものを全てをナナリーは手に入れた。

しかし愛だけは、



「このようなところにお一人で、」

「大丈夫だ。見届けたらすぐに行くから」

お前らは先に帰れと言うルルーシュを一人この場に残して行くことに賛同できないのはジェレミアだけでなく、スザクも同様だった。

こんな得体の知れない場所に一人で残すなんてできる筈が無い。もし敵がいきなり現れたら、もしルルーシュだけ帰れなくなってしまうらと思うと肝が冷える。

だがCの世界がどんな世界なのかこの場で唯一具体的に理解しているC・Cはルルーシュを窘めることは無かった。

「別にそう長い間じゃない。あの頭上で旋回している無数の意識が集合無意識に残るか、それとも現実世界に帰るか決めるまでの間さ。迷う意識がどんな決断を下すのか見届ける義務が俺にはあるだろう」

「そんな、ルルーシュ様は集合無意識が創られたことに何の関りも無いでしょう。むしろ被害者の側ではありませんか」

「——俺にだって責任はあったんだよ」

集合無意識を良しとしたナナリーがとうとう理解できなかつた。それこそが自分の罪だとルルーシュは思う。

もつと早くナナリーを理解できていればこうはならなかつただろう。きつと集合無意識など創られることは無く、そもそもナナリーがV・Vに唆されてギアスを持つことも無かつた筈だ。

「たった一人の妹なのに俺は理解してやれなかつた。大事にしてやれなかつたんだ。俺のせいだ。俺がもつと、何にも悩まなくて済むように、」

「ルルーシュ様は十分にナナリー様を大事にしておられました。ナナリー様が居なくなられたのはルルーシュ様の責任ではございません」
「ではどうしてだ。誰のせいでナナリーは居なくなつたんだ。シャルルか、マリアンヌか、V・Vか、それともお前のせいだとも言うつもりか?」

齒を食いしばって詰問するルルーシュの背中をジエレミアはゆつくりと撫でた。

大きな掌で撫でられてルルーシュは息を吐く。眉間には深い皺が寄っていた。

「悪い、八つ当たりだった」

「お気になさらず」

力なく肩を落とすルルーシュの姿は珍しいものだった。

ナナリーの喪失からルルーシュが立ち直るためには長い時間が必要となるだろう。それまでルルーシュはナナリーを理解できなかつた自分を責めるに違いない。しかしいつかは、ルルーシュも理解でき

るとジェレミアは信じた。

他人を理解できないことは何も悪くないのだと。理解できないことを認めることも、また理解の一つなのだ。聡明なルルーシユはきつといつか気付くだろう。

「ナナリー様は御自分の意志で自分の道を選んだのです。誰のせいでもございません。ルルーシユ様が自らの意志で復讐することを決めたとように、ナナリー様も自ら決めたのです。ルルーシユ様が御自分を責めるようなことをすれば、それはナナリー様にとって侮辱となるでしょう」

「でも集合無意識を創ってしまうまでにナナリーを追いつめたのは俺だ」

もういい、とルルーシユは首を振った。

「二人にしてくれ。必ず帰るから」

しかし、と食い下がろうとしたジェレミアにルルーシユの視線は既に向いていなかった。

今のルルーシユはナナリーのいる集合無意識にしか視線を向けていない。ここで自分が何を言っても届かないだろうということは容易に察せられた。

だがこのまま一人で残るだなんてと躊躇うジェレミアの肩をスザクが押した。自分よりも上背のある、それもサイボーグ化されているために見た目よりもずっと重量のある男を、しかし何の抵抗も感じていないかのように集合無意識の根本に繋がる大穴の方角へと押していく。

石畳に靴を引っかけて足を止めようとするが、まるで背後からダンプカーに押されているようで全く足が止まらない。一見細身で優男然といった風貌をしているスザクが持つ筋力に空恐ろしくなる。

「枢木、おいっ」

「こんな時ぐらい一人にしてあげましょうよ。ナナリーはルルーシユの一番大事な人だったんですから」

「そんなことは貴様より私の方が分かっている！だがこんな得体の知れん場所でお一人にするなどっ」

「それは僕も同意ですけど、でもコードを持つナナリーが集合無意識の管理人みたいなものなんですからもうルルーシユに危害を加えるような奴は現れませんよ」

「どうして貴様にそんなことが言えるのだ！」

「だって僕もさつきまで集合無意識の管理人みたいなことしましたから、何となく分かるんです。大丈夫ですから」

しかし、でも、と続けようとするジェレミアをスザクは問答無用でぐいぐいと押して行く。足を突っ張って止まろうと奮戦するがジェレミアの足先は摩擦でばちばちと火花を散らせながらも一向に止まる気配は無かった。

どんな筋力しているんだこの青年は。中身はサイボーグか何かか、とサイボーグであるジェレミアは本気で訝しんだ。

遂には穴の淵に足先が半分出た状態でわたわたとジェレミアは両手を振り回した。しかしスザクはジェレミアの背中を押す手を微塵も緩めない。際で踏み留まるジェレミアは背後から迫る力を逸らそうと振り子のように体を前後に揺らす。

「おい、押すなよ。絶対押すなよ！」

「振りですか？」

「いやこれはリアルなやつ」

どん、と最後に大きく背中を押され、ジェレミアは真つ逆さまに現実世界へと落ちて行った。

「おのれ枢木いいいいいいいい」とエコーを響かせながら思考エレベーターへと落ちて行くジェレミアをルルーシユはあーあと見下ろした。

「帰ったら騎士同士で喧嘩とか止めてくれよ。お前たちが喧嘩すると建物が壊れて修理代がかさむ」

「そんなことしないよ。ジェレミアさんは君が思っているより忍耐強くて思慮深い人だから」

そうか？と首を傾げるルルーシユへスザクは曖昧に微笑んだ。

一度は集合無意識という神になった身として深く物事を理解できるようになったと思う。

ジエレミアだけでなくナナリーやユーフェミアに関しても、多くの人々の多面的思考を獲得したスザクは誰よりも彼らの思考展開や行動論理を理解していた。

だがこれは一瞬のことだろう。自分が神になった時間はそう長くは無かった上に情報量は膨大に過ぎた。それに人間の思考回路は複雑で、そう優秀な頭脳を持っている訳でも無い自分が長く覚えていられるようなことでは無い。

しかし今この瞬間スザクはルルーシュという人間のことを誰よりも理解していた。ナナリーよりも、ジエレミアよりもだ。

そしてその上でスザクはルルーシュの親友であつてよかつたと思う。

そして同時に、ルルーシュがロロのようにならなくて良かつたと心から安堵した。

スザクも淵に立って真下を見下ろす。穴の底は見えない。真つ暗闇だ。しかし不思議と恐怖感は無かつた。現実世界ではないからだろうか。

その隣にC・Cも並んで穴の下を見降ろす。こちらも恐怖は顔に表れていない。よし、と息を吐いてルルーシュへと振り返った。

「じゃあ僕は帰るね、また後で」

「私も先に帰るからな」

「ああ。また後で……スザク」

「何？」

集合無意識の中でユーフェミアには会えたか？と聞きたかつたが、ルルーシュは言葉が出る前に口を閉じた。

あまりに無遠慮な質問だと思つたのだ。それに顔を明るくした、少年だった頃のように快活なスザクを見ると答えは明らかであるような気がした。

スザクの深い憂いを払うことができる人物など一人しか思い浮かばない。

一瞬ルルーシュはスザク越しにユーフェミアの姿を見た。

記憶のままに長い髪を靡かせて、あのピンク色のドレスを着て。

ユーフェミアは微笑みながら手を小さくルルーシユに向かって振った。目には微かに涙が浮かんでいた。

瞠目して瞬きをするとすぐにその姿は掻き消える。本当に一瞬のことだった。

錯覚か、それとも一瞬だけ最後に姿を見せてくれたのか。ルルーシユには分からなかった。

だが錯覚とするのはあまりに彼女の姿は鮮明だった。それにここはCの世界だ。何が起ころうとも不思議ではない。

ユーフェミアが集合無意識に残る選択をするとは思えない。ならばユーフェミアはコーネリアと共に死後の世界に行ったのだろう。最後にその姿を見せてくれたのだ。そうルルーシユは思った。そう思ったのなら、そうなのだ。自分の中では。それでいい。

「何でもない、じゃあまた後でな」

スザクとC・Cは頷いて、その場を去った。

ルルーシユは一人その場に残った。石畳に腰を下ろしてナナリーが混じっている集合無意識を見上げる。呻き声や鳴き声などが響いているが、多くの意識が既に現実世界に戻ったためか最初と比べると幾らか静かになった。とはいえ未だ動物園のど真ん中にあるような騒がしさは残っている。

目を細めて幻想的な光景を一人で見上げると寂寥がぽつぽつと浮かんでくる。自分でここに一人で残ると言ったのに、いなくなったらいなくなつたで寂しいとは現金なものだと苦笑いが浮かんだ。

頭上を迷っているように旋回する意識の数は数えきれない程だ。数百や数千ではない。下手をすれば数億を超えているかもしれない。だがそれほど長い時間はかからないだろうと思う。

迷うということは、それだけ自分の決断を大事にしているということなのだから。集合無意識に入るかどうかというのは自己をどれだけ重要視しているかという問いなのだ。迷っている時点で答えは出ているようなもの。

両足を投げ出して集合無意識を眺める。あの中にナナリーがいる。そう思うと体が朽ちて無くなるまでずっと見ていられるような気がした。

しかしそうもいかないのだ。そのまま無言で様々な記憶を脳内に浮かび上がらせながらルルーシユは集合無意識に視線を注いでいた。

だが数分もしない内に背後から迫る足音に気付き、怪訝な顔をして振り返る。

自分と全く同じ容姿を持つ従兄が立っていた。1年前のただの学生だった時は自分と随分と似た容姿だと思ったが、今は全く同じ顔だと認めざるを得ない。幾多の戦いで挫滅した精神が滲み出た顔つきは今の自分のそれと全く同じものだった。

驚いて目を見開く。だが驚いたのはそこにロロがいたということではなく、ロロが身に纏っている衣装のためだった。

自分と全く同じ皇帝服をロロは身に着けていた。細かい模様も宝石のついた帽子も同じ。それどころか胸を染める赤い血の汚れまで全く同じだった。まるで自分のドツペルゲンガーを見たような気分だ。

唯一違う点を挙げるとするならば、自分の右胸を中心とする衣服の汚れがロロは胸の中心部にあることだった。あの場所を剣で貫かれると心臓が潰れて即死することは間違いない。

だがロロは痛みの欠片も顔に上せることは無く颯爽とした足取りでルルーシユの隣まで歩き、許可を得る事も無く当然のようにその場に腰を下ろした。

一体どこからやって来たのか。何のために来たのか。従兄とはいえそれ程によく知っている訳ではない男に脳内で疑問符が次々に飛び上がった。

だがこの男を前にすると不快感が先に立つ。自分によく似ている顔が醜悪に見えてしょうがない。客観的に見ると絶世の美貌だと言わざるを得ないが、自分と同じという点が拭いようのない不快感を沸き立たせる。

喋りかけた口調には無意識の内に舌打が交じっていた。

「一人にして欲しいんだが」

「俺もお前だ。俺がいても一人であるということに変わりはない」

「——何を言っているんだ。俺もお前だと？」

「俺は並行世界のお前だ。楽しませてもらったよ」

ほら、とロロは首元を広げて赤いコードを羽ばたかせた。先ほどまで自分がコードを有していた場所と同じ場所にコードが光っている。

そうだったのか、と思う。

数時間前ならば「並行世界？は？そんなものある訳が無いだろう。どうせ何か企んで嘘を言っているに違いないんだこの皮肉屋で性根の曲がった従兄殿は」と言い返しただろうが、今のルルーシユはすとんとその事実を胸の中に落とし込むことができた。

集合無意識の中に居た時に遭遇した冒瀆的な恐ろしい者達。あんなものが実在するのだと知った今では並行世界の自分がいても別におかしくないだろうとさえ思う。

並行世界など非現実的であるとは思うが、現実には想像を超越するものがあると既にルルーシユは知っていた。

人の理解できる物事はきつとそう多くは無い。理解できないままに飲み込むことも必要な時がある。ナナリーの情動のように。そうまで思っただけルルーシユは首を振った。今となってはもう何もかもが遅いことだ。気を取り直して視線をロロに向けた。

「そうか。前々からお前は俺に似過ぎていると思ったんだが、そういうことか」

「思ったよりもあっさり受け入れたな。俺なら「並行世界なんて実在する訳が無いだろう。どうせ何か企んで嘘を言っているに違いないんだこの嘘吐きで性格の捻じ曲がった従兄殿は」くらい言うかと思っただが」

「ちよつと惜しい」

だがかなり近い。本人の言う通り確かにロロは自分であるようだった。外見だけでなく思考回路も自分とかなり重なっている部分がある。

しかし、生地の厚い皇帝服ではよく分からないが、以前に見たラフ

な格好のロロの体格は間違いなく男のものだった。

ロロは男であった場合の自分なのだろうか。いや、元々は自分も男だったと思い直し、ギアス適正率を向上させるための手術を受けた副作用が発現しなかった場合の自分だとルルーシュは結論付けた。

無論その他にも色々違う箇所はあるだろうが、あまりにそっくりなロロと自分の差異は性別以外にそうは無いように思えた。他にあまり違いは見られない。

指先だけを合わせるような拍手をしてロロは鼻を鳴らした。

「ともあれお疲れ様。お前の話はもう閉幕といったところか」

「まあこの件に関してはそうだろう」

だが人生は続く。そう言うルルーシュは口を閉じた。ロロも皮肉気に唇を歪めて黙る。

2人で空を泳ぐ意識達を眺めた。しかし暫くしてからロロはふと呟いた。

ロロのことは好きではない。だが不思議と居心地の悪い沈黙では無かった。きつとロロも無言で他人と2人きりという状況を別段不快に思っている訳でも無いだろう。

ただ単に自分自身と出会う稀な機会をこのまま黙って過ごすのもつたいないとしても感じたような口ぶりだった。

「暇つぶしに、何か話でもしようか」

「急にどうした」

「いや、俺とお前はどうか違ったのかと思ってな」

「ギアス実験の副作用の有無だろう。思考回路にそう差異は見られないと思うが」

「そうとも言えない。少なくとも俺がお前だったら、なんとしてでもナナリーを集合無意識から取り戻そうと最後まで足掻いた」

「——俺だってナナリーには帰って来て欲しいと思っている」

「何としてでもという程ではないだろう。コードを奪われてナナリーの意志に気付いた後、ジェレミアに命じてナナリーを取り押さええてコードを奪い返すこともできた筈だ」

俺ならそうした。そう言ったロロに、確かにどうして自分はそうし

なかったのだろうとルルーシュは疑問に思った。

そんなことは思いもよらなかった。

そうすればナナリーは集合無意識に溶けることは無かったかもしれない。コードが無ければ集合無意識が安定化しないと云っていた。ならばコードを取り戻していれば集合無意識は崩れて全ての意識は現実世界に戻り、ナナリーも現実世界に戻っていたかもしれない。

しかしそうと気付いたとしてもあの場でナナリーの意志をへし折るように暴力的な手段を取ることを自分はしなかったように思う。

その理由は、よくは分からない。

「…………俺とお前は違うんだだろうか」

「少なくとも生まれは同じだった。手術の副作用でお前は女になったが、性別でそう大きく思考回路が変わると思えん。そもそもお前は女というより男女と言った方が正しいだろうしな」

「五月蠅いな…………というかお前はいつからこの世界に居たんだ。もしかして何年も観劇でもするように俺が慌てふためいているのを楽しんでいたのか？」

「否定はできないな。12年前からだよ。俺は12年間、お前があらゆることに慌てふためいて無様な真似を晒すところを観させて貰った——
——実に不愉快だったよ、自分の愚かさを目の当たりにしているようだった」

「ふん、じゃあさつきと自分の世界に戻ったらどうだ。お前が俺ならば傍から見て文句を言うだけの愚昧な群衆の一粒に成り下がるなど許せることじゃ無いだろう。自分の世界に戻って好き勝手暴れて無駄に高いプライドのせいで大失敗して罵声を浴びせられると良い。お前はそれがお似合いだ」

「その発言はブーメランだぞ…………お前に言われなくてももう帰るさ。呼ばれているようだから」

「何こ？」

「俺の世界の集合無意識に」

ロロは肩を竦めて頭上に飛んでいる意識を見上げた。

この男の事情は良くは分からない。しかしロロが12年前からこ

の世界にいるという言葉に嘘は無いように思えた。そもそも嘘を言う理由は既に無い。

12年前、つまりは自分が6歳の頃からか。

思っていたよりも長い期間を観察されていたと知り言葉にできない不快感に舌打ちした。一方的に知られているというのは相手と自分の間に否応なく立場を作る。知られている方が弱者だ。

こちらの失敗や経験を知っている上で相手は自分の情報を抱え込んで背中を向けているというのは、日記を勝手に見られたような言いようのない苛立ちと気持ちの悪さを湧き起こした。

「お前の話を聞かせろ」

ん？とロロは首を傾げた。その小さな仕草までもが嫌味な程に艶やかで、マリアンヌに似ていることが神経に障る。それはつまり自分がマリアンヌに似ているということなのだから。

「俺の話？」

「俺のことばかり知っているというのも不公平だろう。どうせ時間はある」

頭上を飛ぶ意識はまだ数億とある。彼らが道を決めるまで少なくとも数時間はかかるだろう。

いくら波乱万丈の人生だったとしても、たかが18年程度の短い人生だ。語るにそう時間はかからない。それに多少省略されてもきつと自分には問題なく理解できる。

「どうしてお前に俺の話をしなければならなんだ」

「その言葉は俺の人生を観劇したお前へのブーメランだぞ。お前が俺の人生を観て参考にしたように、俺もお前の人生を参考にする権利がある」

そうは言うものの別段ルルーシユはロロの人生を参考になどする気など無かった。気に食わない男の人生を参考にして、さらにこの男に自分が似るなど嫌に決まっている。

今ルルーシユを突き動かしていたのは単なる負けず嫌いの精神と、存在の根本に刻まれた不平等への反逆精神だった。

そのことを言われずとも理解しているだろうロロは、ルルーシユに

何を言っても無駄であると判断したようだった。流石によく理解している。こうなったら相手に自分の要求を飲ませるまでルルーシュは食い下がる、非常に面倒くさい男女なのだ。

それに加えてロロにしても嘘をついたり虚勢を張ったりする必要も無い相手に出会うことは初めてであり、自分を語るといふ普段であれば全面的に忌避することへ無意識の内に乗り気になっていた。

他者との完璧な相互理解への諦念と、相手に自分を理解して欲しが
る欲求とは併存し得るものなのだから。

元々存在が抹消された幼少期を過去に持つロロは自己存在への承認欲求は人一倍強かった。だが親友には存在の根本から否定され、妹にも人殺しだと貶された。生徒会の友人達は自分から捨てた。

残ったのは自分一人だ。だから一人で死んだ。

目の前のルルーシュは自分自身だった。ならば遠慮する必要など何もないのだった。自分の過去や感情を詳らかに話しても絶対にこの女は自分に優しい言葉なんてかけやしないし、同情なんて絶対しない。

同情こそが自分の最も憎むべき敵であることをルルーシュは理解している。実の親に存在を否定されるのも、仲間だった連中に銃口を向けられるのも、親友に斬り殺されるのも、悪逆皇帝として永遠に蔑まれるのも今となつては我慢できる範囲内のことだった。

しかし同情だけは許せない。それは自分を下に見ているということだ。それだけは嫌だ。憐れみの籠った視線こそがロロ、ルルーシュという存在を否定する最も凶悪な攻撃だった。

銀細工のように伶俐な視線でロロを睨みつけるルルーシュには同情の欠片も無い。それがロロには小気味よかった。他者から見れば自分の人生には幾分か同情する点があるだろうが、ルルーシュは絶対に同情しない。心からそう信じられる。

一度口を開くと言葉が次々と溢れかえった。

男の、ジエレミアという騎士が居なかったルルーシュがどうやってここまで生きて来たのか。ルルーシュは頭上で螺旋を描いて飛ぶ集

合無意識に視線を向けたまま口口の言葉に耳を傾けた。
長い長い話だった。

0. ゼロの再誕

「——そしてゼロレクイエムを成し遂げた俺は悪逆皇帝として死んだ。全ての罪科と過去を背負って、スザクに未来を押し付けてな。そして死んだ後、今から12年前に俺は集合無意識によってこの世界のアリエス宮に飛ばされたんだよ。覚えているか？よく昔隠れて泣いていた場所だ」

ロロの問いかけにルルーシュはしぶしながら頷いた。もう12年も前のことだが思い当たる場所があった。あまり思い出したくない、情けない過去が脳裏に過った。

華やかな庭園の奥まった茂みの中。人通りが無く、警備の薄いその場所は一人になりたい時には最適の隠れ場所だった。

湿った土と草の苦い臭いが混じった狭い空間は快適とは言えなかったが、嘲笑混じりの視線や刺々しい嫌味は無く、幼い自分を安心毛布のように優しく静かに包んでくれた。貴族に嫌がらせを受ける度に幼い自分はこの場所に逃げ込んでいた。

当時を思い返すと、どうして貴族共のみみっちい嫌がらせをあんなにも辛く感じていたのか理解できずに首を捻る。鼻で笑えば済むような小さい事があの頃の自分にとっては世界中で一番の重要事だった。成長すると幼い頃の自分はほとんど他人のようになって理解さえ困難になる。

目の前のロロにしたって自分自身とも言えるルルーシュの成長を目の当たりにしながら、彼女の思考はとても理解できないとこの12

年間何度も首を傾げただろう。そんなものだ。人間を理解するのは全くもって不可能なことだ。それが自分自身であれ、他人であれ、そう変わりはない。

しかしそれにしてもジェレミアと初めて出会った切っ掛けがこの男だったとは……唇の両端をルルーシユは真下に引き下ろした。

出会いの切欠を与えてくれた札を言うべきなのかもしれない。しかしこの男に向けて札を口にするのは癪でしょうが無かった。鉛を口に突っ込まれたような気分だ。全てを知った今でも口口という人間がどうにも気に食わなくてしようがない。同族嫌悪だと分かっている、この男の無暗矢鱈に自信満々で自意識過剰な無駄に美しい顔を見ていると張り倒したくなる。

そして何より札を言うとなれば、ジェレミアとの出会いが不審者と勘違いされて毛根から引っこ抜けるほどに髪を掴まれた事から始まったことまで喋らなくてはならないのだ。かなり情けない出会い方だったという自覚はある。出来れば口にしたくはない。

数秒間悩み、ルルーシユは口口による自分の人生の大きな変換点を記憶の彼方に追いやることに決めた。わざわざ自身の過去を教えるやのような義理も理由も無いのだから。

ルルーシユの思案に気付く様子もなく口口は当時を思い返しながらぼつぽつと喋り続けた。

「最初は何が起こったのか全く分からなくてな。慌てたよ。アリエス宮だということはすぐに分かったが、まるでマリアンヌが生きていた頃のように庭の手入れはされているし、警備兵は居るしで。もしや過去に飛んだのか、もしくは異世界かと慌てて市井に下りて情報収集に努めたんだ。それから俺の世界とこの世界の違いを調べたり、お前を観察したり、ギアスとコードについて情報を集めたり……基本的に何もしていない。あくまで傍観者としての12年間だった」

「……この世界で再び自分の人生を生きようとは思わなかったのか？」

「俺の居場所は俺の世界以外には無いと分かっていたからな。それに色々と疲れていたんだよ」

ゆつくり過ごしたかつたんだと言ってロロは微笑を滲ませた。

ロロの18年という期間に圧縮された人生は、聞いているだけでも情報が膨大過ぎて頭を痛くする程に苛烈なものだった。当人にとつては更にだろう。暫く休みたいと思ってもそうおかしくは無い。

しかしこれまで見たロロの表情の中で今の微笑が最も生き生きとしていた。それもそうだろうと思う。

戦わなくてはルルーシュはルルーシュ足り得ないのだ。平穏な日常を心から求めながらも、今日を毎日繰り返す無為な日々には耐えられないのがルルーシュという生き物だ。12年というあまりに長い休暇にロロは飽き飽きしていたのだろう。呼吸の合間に深々とした溜息が淡色の唇から零れていた。

「それにしてもこの12年間で色々あった。この世界だけじゃないぞ。集合無意識にあつちの世界こつちの世界と飛ばされてな。俺が何故かC・C・の家庭教師をしていたり、ジュリアスという名前でブリタニアの軍師になったり、サーヴァン●オブスローンズに呼ばれ、グラフィティ●マツシュに呼ばれ、ついこの前には黒猫が喋る世界に呼ばれ、ガン●ムだのエヴァン●リオンだのがいる世界に飛んだりもした。ZEXISの面々とも……ナナリーがKMFを乗り回す世界もあつたがあれはとも見ていられなかった。危険過ぎるだろう。あの世界の俺は全く不甲斐ない……」

「……俺はそんなに沢山いるのか」

「数えられない程にな。少なくとも何千何万と存在する」

深刻そうな顔をしたロロの言葉に頭の中でアツシユフオード学園の制服を着たり、皇帝服を着たり、ゼロの衣装を着たりした大量の自分がわっさわっさと虫のように集まっている光景が浮かび上がってしまい思わず眉根を顰めた。

顔の美醜はともかく、同じ顔が大量に存在するというのは気持ち悪い。それも自分の顔だ。想像するだけで鳥肌が立つ。

肌を撫で摩るルルーシュにも気づかずロロはこの12年間を思い出しながら唇を滑らかに動かす。

この12年間で何万という自分自身と遭遇し、言いたいことを募ら

せながらも誰にも吐き出す事ができなかつたのだろう。目の前のルルーシユは恰好の愚痴の吐き出し相手であるに違いなかった。固く握りしめられた拳には血管が浮いていた。

「とういか何で俺とスザクが、その、そういうった関係になる世界が多いんだ。多過ぎるだろう。『あれ？実は俺は自分でも気が付かない内にスザクと付き合っていたのか？』とこっちの記憶が修正されかねない勢いだぞ。俺は断固として言いたい。確かにあいつは俺の掛け替えのない友人であり騎士であつたけれども、それ以上でもそれ以下でも無いと。無論ジェレミアともジノともシユナイゼルともそういう関係を持った事実は一切無い。とういか、そもそも俺は、ゲイじゃない!!!」

「……それはその世界のルルーシユのことであつて、お前自身では無いのだから別にどうでもいいだろう」

「そうだ。その通りだよ。それはそういう世界だと言われたら納得するしかないのは分かっている。しかし考えてもみる。集合無意識に連れられて違う世界を覗いたら、自分と全く同じ顔をした男が同性の友人とべつたべつた触り合いながらデートしていた拳句に夜には自分から素っ裸になり上に跨つて何時間も——」

「自分の情事を詳らかに説明するな。気持ち悪い」

「——を垣間見てしまった俺の気持ち分かるか？未だにそういう自分と遭遇するともうどんな反応をしたらいいのやら全く分からん。はつきり言ってしまうとお前とジェレミアに対しても俺は凄まじく微妙な気持ちになるんだよ。俺にはゲイへの差別偏見は無いが別世界の自分自身となると話は別だ。元の世界に戻つた後にスザクやジェレミアをどんな目で見れば良いんだ俺は。気まずくてしようがない！」

「知るか童貞。あと俺がジェレミアと付き合つてもセツ●スしても別にゲイにはならんだろう。少々歳は離れているが至つてノーマルだ」

「それは、いや……ど、どう、お、女がそんなことを言うな！」

顔を真っ赤にして猫が威嚇するように歯を剥き出しにする口口に
ああ、これは、と察してルルーシユは口を閉じた。

いい歳をして未だ童貞を守っている男へ嘲りが沸き起こることは無かった。何せロロと自分との間には性別以上に大きな差異は見受けられず、自分が男のままだったらこの男のように純潔を貫いていただろうという仮定は想像に難くなかった。ただ女である自分の純潔は奪われたと言うのに男の自分は清らかなままなのかと思うと、羨ましさと哀れみが等分に混じった感情が込みあがってなんとも形容し難い複雑な心境に追いやられる。

……それにしてもカレンやシャーリー、C・C。だってロロの世界にも居ただろうに何とも不甲斐ない。

憐れみの籠ったルルーシュの視線から赤い顔を隠すようにロロは紫眼を無理やりに集合無意識に向けた。苛立たし気に唇を真一文字に引き結ぶ。腕を組んで自身の尊大さを強調するように背筋を反り返らせた姿は確かに凜としているものの、赤い頬が全てを台無しにしていた。

こんな初心な青年が全世界の罪を被って悪逆皇帝として死んだなどとはとても信じられない。だが自分もゼロや皇帝としての顔とは別に、脆い精神を剥き出しにした顔を持っている。今はしまっているだけでロロも悪逆皇帝としての顔を確かに持っているに違いなく、その性格からするとむしろこうして自分自身を露わに話す事の方が例外なのだと察せられた。

近くこの世界を離れることが決まっており、尚且つ話す相手が自分自身であるがためにロロは年相応の顔を見せているのかもしれない。その顔は自分と同じか、さらに脆い。四六時中意地と強がりで生きている張り詰めた生き物であるように思えてならない。

少なくとも自分がロロの立場にあれば、ゼロレクイエムなどと言う前向きな自殺行為はしないだろう。C・C。に自分の恰好をさせて身代わりをさせるなり、病死したという偽装を行うなり、違う手段を取ってなんとしても生き延びようとする筈だ。

自分とロロの違いはどこから始まったのか。ロロの話聞き、その原因として一番に思い当たったのはジェレミアの存在だった。あのルルーシュの存在全肯定男がロロの傍には居なかったのだ。

この男にはナナリーを護るといふ信念以外に何も存在を肯定するものは無かった。

もし自分もそうなっていたらと思うと背筋が冷える。12年間何もかもを振り捨てて尽くした騎士が居ないとなると、実の父に叩きつけられた死んでおるといふ言葉を誰も否定してはくれなかった。あまつさえこの男は神根島で、全くもって自業自得とは言え、スザクに自己の存在を根本から否定されていた。

このルルーシュを護る者は何も居らず、生きていると自分に嘘をついて、ナナリーに否定され、その果てに自己存在への自己満足のために死に果てたのだ。そしてその生き様にこの男は十分満足しているようだった。世界の創造のために一度死に、漸くロロは自分の存在を肯定できるようになったのかもしれない。

何故そこまですなければ気が済まなかったのか。それはジエレミアが居たルルーシュには到底理解できないことだった。

この男と自分との一番の違いは自身の存在理由への確信なのかもしれない。

集合無意識に視線を向けたままロロは当然と言わんばかりに口を開いた。

「まあいい。俺は俺のことを話した。次はお前の番だ」

「——俺の人生はもう知っているだろう。傍観者として俺の人生を見ていたんじゃないのか？」

「本人の口から聞くのはまた違う側面の発見に繋がる。あくまで俺は自分の眼で見たことしか知らないからな。俺が見逃した、お前しか知らない人生の一面もあるだろう」

ロロは赤裸々に自分の人生を話した。その人生譚から学ぶところが無かったとは言えない。むしろ、認めるのは癪だが学ぶ事は多かった。

思考回路や行動原理。そういったその人の芯となる部分は本人の口から聞かなければ理解できないだろう。ロロはつまり、自分が話したようにルルーシュにもそれを話せと言っている。

「俺が話してお前が話さないというのも道理に合わない。それにまだ

まだ時間はありそうだ」

ロロにつられて見上げるとまだ多くの意識が自分の道を決めかねていた。当初からまだ半分程度にしか減っていない。

自分の人生を他人へ赤裸々に話すなど真つ平御免だ。人生の過半数を共に過ごしたジェレミアにでさえ、これまでの人生における全ての内心を吐露するなど出来そうにもない。話すとしても自分にとって都合の悪い部分を改竄し、嘘を交えて淡々と喋ってしまうだろう。誰にも言いたくない、自分の胸の内にだけ仕舞っておきたい物事というのは誰にだってある。

だがロロに対して自分の人生を赤裸々に話すと考えても不思議に抵抗を感じなかった。

それはロロが自分自身であるというだけではなく、近い内にロロはこの世界からいなくなるという確信があつてのことだった。

二度と会うことが無いのならばそれは自分にとっては死ぬのと同じだ。ロロに向かって喋るのは明日死刑になる死刑囚に向かって独白するのとそう変わりはないように思えた。

ロロの隣に座り込み、ぼんやりと自分の人生を振り返る。18年という長くも無い人生だが密度はロロに負けず劣らず濃い。全て話すとなると丸一日でも足りないだろう。

適当にかいつまんで話すとして、まず一体どこから話せば良いのだろうか。すっかりと話す気分になって首を捻る。ジェレミアと出会った12年前からが妥当か。こいつの話から繋げることもできる。

いや、ジェレミアとの出会いの切っ掛けがこいつだったなんて教えたくは無い。却下だ。

では日本に捨てられた時から？

それはあまりに略し過ぎだ。ジェレミアと出会ったことで自分の運命は大きく変わった。少しぐらい前日譚を話すべきだろう。

ならばジェレミアと出会った直後からはどうだろうか。

それも駄目だ。話が長くなりすぎる。そもそも昔の事過ぎて細部は自分でもよく覚えていない。

ぐるぐると考えるも、ロロからは好奇心も露わな視線が向けられて

いて居心地が悪い。

しかしこうして他人に自分のことを赤裸々に話すのは初めてで、肌を焼くような羞恥心と妙な高揚感が全身を覆っていて変な気分だった。それは不安感とは全く別の感情だった。

「なんだか、少し恥ずかしいな」

「何が」

「他人に自分の人生を知られてしまうのは。でも不思議なことに、恥ずかしいと思う反面、俺が何を思い、どういう行動を取って来たのか知って欲しい気もする——妙な気分だ」

「……やはりお前は俺なんだな。まさかここまで似ているとは」

口の端で困ったように笑って口口は肩を竦めた。普段の嫌味な仕事ではなく純粹に感嘆しているような声だった。

「どういうことだ」

「何でもない。ただ俺も同じような事を思ったことがあるというだけだ。それで、話してくれるのか？」

爛々とした自分と同じ色の瞳が眩しい。本当に無駄に容姿が整っている。性格は自分勝手極まりなく性悪の一言に尽きると言うのに、この男の容姿は内面を裏切るように美しい。内面と外面が両極端になるのはマリアンヌからの遺伝だろうか。容姿もマリアンヌにそっくりであることだし。

そこまで思っただルルーシュは息を吐きだした。止めよう。この男を幾ら罵倒しようとも全て自分に跳ね返ってくる。

思考を自分の人生譚に移し、顎に手をやって話の切り口を探す。

自分の人生を話すのならば、あの時からだろう。あの時から自分と口口は決定的に運命を違えた。あの日から自分は戦いに身を置くことが決定付けられたのだ。そしてあの日からずっと、自分は走り続けている。

今思うとあの日は安寧との決別の日だったのだ。

あの日、ジエレミアはいつものようにアリエス宮にやってきた。

忠義の騎士。理解不能な思考回路。自己の利益を考えない大馬鹿野郎。

前を見ると神はぐるぐると螺旋状に渦巻きながら、多くの動物や、虫や、魚や、鳥を見ては、じつと眼を凝らしていた。沢山の眼球はこちらを見ているようで、見ていないような、他人行儀な穏やかさに溢れていた。

隣に座るロロがこちらを見て静かに促す。先に人生を、罪を告白した爽快感はその顔に見当たらなかった。

ルルーシユはロロに何と云っていいのかわからなかった。何か言葉かけなきゃだつたのだろうけれど、言葉のかけようも無かった。言葉をかけられることをロロも望んでいないように思えた。

しかしルルーシユにはロロは誰よりも潔く、度し難い程の馬鹿であり、愛を知らない憐れな男のように思えた。憐れまれることはロロが最も嫌うところであることを誰よりも知っていながら、そう思わずにはいられなかった。

少なくとも自分は愛を知っている。その点において、自分は彼よりもずっと恵まれていた。

ルルーシユはロロから目を逸らし、神へ、集合無意識へ——ナナリーへ眼を向けたまま自分の話を始めた。

「——あのな、馬鹿な騎士がいたんだ。俺は9歳だった。そいつは初任務の前日にアリエス宮にやって来た。俺はその時、小型のKM Fを空に飛ばして遊んでいた——」

浮上する感覚に任せて意識を自由に飛ばす。気付いた時にはル



ルーシユは自らの肉体の内に入った。

肉体とは非常に重く、狭苦しいものだ。とルーシユは初めて知った。長い間宇宙で活動をしていた宇宙飛行士が地球に戻った時はこんな感触なのではなからうか。

生物は肉体の内側に閉じ込められているというだけで既に苦行を強いられているのではなからうかと思う。だが悪い感覚ではなかった。自分の意識はすぐに自分の体に浸透し、肉の檻の中にみっちり詰まった。

愉快的感覚ではないもののやはり体がある方がよい。どうしてその方がよいのかは言葉にし辛いが、より生きていくという実感があつた。体を受け止めているマットレスの感触が心地よい。

このまま眠ってしまいたいという誘惑が足を引っ張るも皇帝という立場である以上呑気に寝こけていられる状況ではない。

地球上に存在する全ての意識が肉体から離れ、そして戻ったのだ。現実世界が大混乱の最中にあることは必至だ。

酷く重い瞼をこじ開ける。眩しくて何度も瞬きを繰り返す。

光に慣れた網膜は天井の明かりを背景に、見知った顔の騎士2人が心配そうな顔でこちらを覗き込んでいる光景を脳に送った。ジェレミアとカレンだ。

ぱちりと目を開くと2人の顔は目に見えて明るくなつて同時に安堵の息を吐いた。この2人、なんだか最近似てきているような気がする。2人が揃っているのと犬が2匹……シエパードと柴犬がセットになつて並んでいるような愛らしさがある。

ジェレミアとカレンは共に目尻に涙を溜めてふるふると震えていた。思わず笑いが口から噴き出た。

「ジェレミア、カレン。なんて顔をしているんだ」

「あんたが帰って来るの遅いからよ」

「全くです。どれだけ心配したことか」

本気で心配していたのだろう。2人とも握り締めていた拳の指先が白い。ぽんぽんと2人の頭を宥めるように撫でると揃って息を吐いた。

目を擦りながら起き上がる。恰好は皇帝服のままだが、場所は執務室ではなく自分の寝室のベッドの上に移動していた。先に目を覚ましたジェレミアかカレンがここに連れて来たのだろう。

ベッドヘッドの置時計を見ると、執務室で仕事をしていた時から4時間が経過していた。ロロと調子に乗って長話をし過ぎたかもしれない。

体を横にずらしてベッドに横座りになり、部屋を見回す。部屋にはC・C・とロイド、セシル、咲世子が待機していた。外見上異常は見当たらず、顔色も悪くない。

「無事に帰ってきたようだなルルーシユ」

「お前も。C・C・、コードは」

C・C・は無言で髪を掻き分けて額を見せた。

何も無い。真っ白い額を覆うように翠の髪が靡いている。

「見ての通り、完全にナナリーに奪われた。お前のコードもそうだろう」

「……………そのようだな」

C・C・のようにコードの扱いに習熟している訳ではないが、コードが体の内にある感覚はまだ覚えている。そしてその感覚は既に跡形もなく無くなっていった。喉元に手をやるが赤い光が零れているようには見えない。

「コードだけではないぞ。報告されている限りでもまだ意識が戻ってきていない人間は数千万と存在する。お前が帰ってきたと言うことは……………もうこれ以上戻ってくる意識も無いのだろうな。随分と持つて行ってしまったよ、あの女は」

「……………それだけ貢ぐ価値がある女だったんだよ」

肩を竦めたC・C・の表情は口調を裏切るように明るかった。晴れ晴れとした外見年齢相応の笑みだった。

慰労の意味を込めて頭を撫でると鼻でふふんと笑う。この相手を小馬鹿にするような仕草が照れの一つであることはもう分かっていた。

「ナナリーはいい女だったと思うか？」

「最上級に。少なくとも、俺にとっては」

「そうか……お前の価値はこれから全世界から測られる。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。もう逃げられんぞ。お前の義務も責任も、もうお前のものだ。覚悟はあるのかな？」

「——ゼロだった事どころか女である事も世界中にバレたんだな。俺はルルーシュ・ランペルージにはもう戻れない……そうか。俺、いや……私は皇帝か。そうだな」

C・C.の言が正しいのならば、数千万という人間がたったの4時間での世を去ったことになる。前代未聞の犠牲者数だ。

さらにナナリーのギアスが発現した時に運悪く車を運転していた者、飛行機に乗っていた者、プールや海で泳いでいた者、高所で作業をしていた者——全て合わせれば億単位の人間がこの短時間で死んだと考えて間違いは無い。あまりに甚大過ぎる人的被害に目が眩む。

爪痕は大きい。唇を噛む。ナナリーは自分の責任を果たすために楽園を探しに行った。

この世界で最も強大な国の皇帝として、ナナリーの兄として、自分の責任はどこにあるのか。

一度大きく目を瞑りルルーシュは立ち上がった。声を張り上げる。部屋は一気に騒がしくなった。

「カレン、皇宮に非常災害対策本部を打ち立てろ。各部署の責任者にすぐに連絡を。各州に軍隊を災害派遣のために送る準備をしておけ」

「い、イエス、ユアマジエステイ！」

「C・C.、外交官と連絡して中華連邦、E・U.、それに日本での被害状況を早急に纏めろ。支援要請などあれば優先的に回せ」

「はいはい。人使いが荒いな」

「ロイド、災害時救助用のKMFを全て動かせるようにしておけ。それとセシル、数が足りないだろうから災害派遣部隊のKMFから攻撃用装備を外し救助用の臨時装備を装着するよう手配を進めろ」

「イエス、ユアマジエステイ」

「じゃあ蜃気楼の絶対守護領域使ってもいいですか？多分救助に使え

ますから〜」

「許可する。好きに使え」

「はいはい!」

「咲世子さん、アツシユフオード学園の被害状況を調べて下さい。被害があるようでしたら駐屯しているブリタニア軍の権限を渡すので迅速に救助を。黒の騎士団にはこちらから連絡しておきます」

「承知致しました」

「それとシュナイゼル兄上はどこだ。私だけでは手が足りない。それにスザクは？シャーリーも姿が見えないが」

「……御二人はシュナイゼル殿下と一緒に病院に行かれました」

慌ただしく部屋を出ていく面々の内、部屋に残ったのはジェレミアだけだった。

いつになく顔は昏く声色は平坦なものだった。視線はルルーシユより少し下の位置で固定されたまま説明する言葉を探していた。

「兄上が病院に？何があったんだ」

シュナイゼルは皇宮の中にいた。それも危険な作業をしている途中だったという訳でも無く、病院に行くような羽目に陥っている筈は無い。

だがジェレミアの顔を見ると嫌な予感が膨らんだ。倒れて頭をぶつけたとか、そんな笑い話では無いようだった。唇を一度強く引き締めた後にジェレミアは小さく首を振った。

「……後で説明致します。それよりお体に何か異常はございませんか？」

「私は大丈夫だ。何も無い」

珍しく端切れの悪い言葉遣いに釈然としないものを感じながらも自身の体を見下ろす。特に傷は無い。

数時間意識の無い状態でいたためか筋肉が凝固しているような感覚が多少は残っている。しかしそれ以外には何も違和感を感じなかった。

心配そうな顔をするジェレミアを見返す。見る限りでジェレミアにも特に不調は無いようだった。

「お前はどうかんだ」

「私は大丈夫です。何も異常ありません」

「なら良かった。では私達是对策本部に向かうぞ。被害状況を知らねば話にもならん」

「御意」

ベッドから飛び降りて部屋を出ようとしたルルーシュは、しかし途中で足を止めてくるりとジェレミアに向き直った。

こうして向かい合うと随分と長身な男だと思う。ジノと同じくらいの身長なのだが、あちらが少年らしく細く未発達な体つきをしているのに対し、ジェレミアには完成した軍人らしい安定感があった。根を深く張る巨木のような男だ。そんなに物静かではないが。

12年前からずっとジェレミアと一緒に居た。ナナリーは15年前から一緒に居た。ずっと一緒に居られるものだと思っていた。

しかしもう居ない。この世界は現実だ。

「しゃがめ」

「?はい、」

「3分だけだ」

言い訳をするように呟いて、その場に膝を折ったジェレミアにルルーシュは飛び込んだ。かなりの勢いをつけて飛び込んだのによろけもしない。

顔を胸に擦り付けて染み出すように溢れる涙を拭いた。突然のルルーシュの行動に慌てたもののジェレミアはその体を抱きしめた。体は酷く冷えていた。

じわじわとその実感が湧いてくる。震える指先で広い背中を掻き抱いた。

「ジェレミア、ナナリーが行ってしまった」

口にするのと恐怖が増す。

ナナリーの小さい背中が去って行く光景をまるでほんの数秒前のように思い返すことができた。

きつと死ぬまであの背中を自分は忘れないのだろう。長いアツシユブロンドを靡かせながら堂々と旅立っていった眩いまでの後姿。

愛していた。世界で一番愛していた。何よりも愛していた。そしてきつと、きつとナナリーも自分を愛してくれていた。しかしもう会えない。

涙が次々と溢れて止まらない。騎士服に歯を立てて嗚咽を噛み殺そうとすると髪を梳くように頭を抱かれた。

短い髪を頬で感じながらジェレミアは小さく頷いた。微かな感触でジェレミアがしかと頷いたのが伝わり、無言の肯定に様々な感情が沸き上がって止まらなかった。

ナナリーと、ジェレミアと、3人で暮らした。あの時間は平穏と幸福の象徴だった。いずれあの時間に戻るために自分は戦い続けてきた。

しかしもう二度と帰って来ない。戦って戦って、色々なものを手に入れたけれど、一番欲しいものはとうとう手に入らなかった。体の中心に穴が開くような喪失感だった。これまで体を支えていた芯が溶けてそこから流れ出ていくような感覚がした。

しかしそれでも体の中が空っぽになるようなことはなかった。

ナナリーは自分の存在意義だった。

だった、だ。

いつの間にかそうでは無くなっていった。

ナナリーが居なくなつてとても悲しいし、辛い。もう一度過去をやり直せるなら何を犠牲にしたってやり直すことを選択するだろうけれど、死にたいとは思えない。

既に自分の価値はナナリーの上にだけ存在する訳では無いのだった。自分の価値は、もう自分で持っていた。

ナナリーが居ない世界で呼吸をすること、生きていくこと。そんなことは不可能だと思っていた。しかしこんなにもあつさり自分はまだ生きていられる。

なんて浅ましい。大事な妹ともう二度と会えないというのに、自分は後を追うという思考すらできない。ナナリーと共に行ってしまった数千万という意識達を羨ましいとさえ思えなかった。

小さい頃、悪夢に魘されていた自分を抱きしめてくれた時のように

ジエレミアはぽんぽんと背中を叩く。づううと獣の唸り声のような声が歯の隙間から零れ出た。声には悲しみとも後悔とも言い難い感情が練り込まれていた。

「——御自分の事を『俺』ではなく、『私』と呼ぶのですね」
「ん」

「無理はしなくても良いのですよ?」

公だけでなく私的な場でも皇帝らしい一人称を使うのは、もう後戻りできないことを覚悟してのことだと思っただのかジエレミアが優しく告げる。

唸り声を上げるのを歯を食いしばって止めて、ルルーシユは緩く首を横に振った。決別の意味が無かったとは言わないが意図するところは別にあつた。

「いいんだ。私は女だから、もう『俺』は使わない——男の私は還ってしまった」

「どうして?」

どこにだろう。自分と同じ顔をした、自分自身とも言える男の皮肉気な笑みを思い浮かべる。

彼がまた居場所を見つけるとすればそれは彼の世界に他ならない。12年前、一度死んだ場所から彼はやり直すのだろうか。悪逆皇帝として蔑まれ続ける、誰も彼を肯定しない悪夢のような世界で。

多分、そうだ。ふっと唇を吊り上げた。

あの男が、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニアが世間から隠れて大人しく生きるだなんて殊勝なことを出来る筈が無いのだ。アツシユフォードで大人しく暮らしていたのは世界に反逆するための力を蓄えながら機を見ていただけだ。

ルルーシユの死によって全ての憎悪を帳消しにしたゼロの世界で、彼はきつと再び立ち上がる。

ナナリーと同様に二度と会うことの無いだろう自分自身へ、ルルーシユは言葉にならない激励を送る。

せめて後悔の無い最期を、と。

「——ゼロへ」



現実世界へ去って行くルルーシユの背を見送って、独りになった口はさてと振り返った。

「12年間、か。楽しかったよ。そのせいか短く感じたかな」
過ぎ去った12年の歳月を思い出して口口——ルルーシユは生

前にはナナリーにしか向けたことの無い柔らかい笑みを浮かべた。

長いようで短い時間だった。あまりにも多くのことが通り過ぎて、自分を追い越して行った。だから自分はそれを追いかけて行かなければならない。

足をCの世界の深淵に向ける。この世界のルルーシユにはああ言ったが、ルルーシユには自分の世界へと戻る自信があった。何の根拠もない自信だが肌の神経一本一本が引っ張られてそちらの方向へ引っ張られているような感覚がする。

あの世界が自分を呼び戻している。自分が創った世界が高らかに自分の名前を叫んでいた。

「今更俺を呼んでどうするんだか……まあどうせ碌な理由では無いのだろうな」

それは間違いが無い。独り言ちながら苦笑を零すと脳裏に幾人もの人々の姿が浮かんだ。

親友であったスザクが自分を突き刺した時に浮かべた涙。

共犯者の呆れ顔。

最愛の妹の無垢な微笑み。

拳を握る。自分の行った事に何も後悔は無い。何一つとして。

自分がするべきことは一つ残らずやりきって、そうして汚辱に塗れた死を迎えた。

しかし世界は自分が想像していた以上に理不尽だったらしい。こちらの都合など知りもせず好き勝手に振る舞ってくれる。

一歩足を踏みしめる毎にこの12年の記憶は靄がかかるように朧げなものへと変わる。同時にルルーシユは元の世界へと戻るという確信を深めた。肌があの世界の空気を覚えている。近い。

あの世界が体の細胞一つ一つを強烈な力で引っ張るせいで、体が溶けて滑らかな流動体へと変貌する。逆らうことなくルルーシユはその流れに身を任せた。Cの世界を乗り越えて、ルルーシユはあの世界へと流れて行く。

あの世界に存在していなかった12年間の記憶が異物と認識されたためか、こそげ落すように剥ぎ取られて自分という存在が作り変え

られる。記憶が無くなる感覚は死ぬ時と同じ喪失感を心中に生んだ。凍り付くような寒気が内臓に染み渡ったが、自分の世界へと向かう速度は緩めない。

さつきまで話していた別世界のルルーシユの人生譚がもう思い出せなくなっている。他の色々なルルーシユの思考や辿った運命を克明に刻んでいた記憶が弾けるように消えて行つた。積み重ねてきた記憶が12年前の、良く晴れた自身の処刑日にまで巻き戻される。

だが自分の世界が再び息を吹き返し、この12年間に彷徨つたありとあらゆる世界の記憶を失う前に宣言しておかなければならない事があつた。

ルルーシユは不敵な笑みを浮かべてこちらを見やりながら高らかに声を張り上げた。鼓膜さえ破るような声が空気を打ち震わせた。

「諸君、嘘吐きの魔王は死んだ。諸君らも知る様に一遍の後悔も無く、正しく悪逆に相応しい足跡を残して、最後まで嘘を吐いたまま……だがまだ終わらない。道はまだ潰えていない。そう、諸君らが知つての通り！」

自らを奮い立たせるように世界に轟く声を上げる。

元居た世界、もしくはあのルルーシユのいる世界、そしてこの世界から何処からともなく喝采が沸き立つて拍手が鳴り響いた。

溢れんばかりの喝采には泣き声や笑い声、無関心な声、舌打ち、怒声、歓声がない交ぜになって異様な熱を生んでいる。調子の外れた合唱のような声の集団は一つ残らずルルーシユの頭上に降り注いで体を濡らした。

ルルーシユは生きていて良かったと祝福する声には鷹揚に手を振って、あそこで死んでいた方が良かったのという罵声には大胆不敵に唇を吊り上げる。

しかし何を言われても足を止めることだけは無い。真つすぐに、自分の意志の赴く方向へと歩く。

観衆に惑わされて足を止めるなど思いもよらないという足取りは自分の世界へと向いていた。

ルルーシユは紫の瞳を瞬かせて明日を掴まんと手を伸ばす。不遜

な高笑いが周囲に木霊した。

「12年の時を経て、再び魔神は蘇る！」

さあ、幕が開ける。

S
u
r
r
e
c
t
i
o
n
2
0
1
9
/
0
2
/
0
9
N
E
X
T
t
o
L
e
l
o
u
c
h
o
f
t
h
e
R
e
;

黄昏時。かあかあとカラスが鳴きながら頭上を飛んでいる。

皇宮の一角には花園が広がっている。隅々まで手入れが施され雑草の一つも生えていない。風に煽られて花卉が飛ぶ。赤い夕陽に照らされた花園は幻想的なまでに美しい。

アリエス宮にどこか似ているこの庭園は皇帝ルルーシュが半年前、前皇帝シャルルと王妹ナナリーの思惑を妨害した功績に対し、実兄に下賜した褒美の一つだった。下賜されて以来シュナイゼルは一心に花の世話に熱意を注いでいる。

シュナイゼルは車いすに乗ったまま花園を囲む茂みの中に手を伸ばした。白い指は茂みの上に落ちていた小鳥を拾い上げた。小鳥は掌にちようど納まる愛らしい楕円形をしており、凍えるように羽を小刻みに震わせていた。凝固した血液が蜘蛛の巣のように小鳥を覆い尽くしている。

銃弾で撃ち抜かれてから動く事の無くなった膝の上にハンカチを広げ、その上に小さく身動きをする小鳥を乗せる。震える指先で小鳥の頭を撫でてシュナイゼルは信頼するメイドの名前を大声で呼んだ。

「シャーリー、シャーリー！」

「シュナイゼル殿下、どうされたのですか？」

シュナイゼル付きのメイドに出世を果たしたシャーリーはシュナイゼルの珍しい大声に息を切らせながら駆け寄った。

シュナイゼルに仕えてから既に半年が経つが、穏やかで聡明なシュナイゼル王兄殿下がこうまで取り乱すような声を上げたことは一度も無い。

まさか侵入者か、と思うも、今日の警備担当はナイトオブセブンの枢木スザクである。あの実直な騎士が侵入者を許すような不手際を取るとはとても思えない。

駆け寄るシャーリーの姿を認めたシュナイゼルは自分の膝を指さした。若干の緊張と共にシャーリーはシュナイゼルの膝の上に横たわる小鳥を見た。

ハンカチには小鳥を中心として血の滲みが広がっている。野鳥に襲われたのか腹の部分が深く切り裂かれていた。小鳥は腹を上にして引き攣る様に身動きはしているものの、飛ぶどころか歩く力も無いようだった。

「茂みに落ちていたんだ」

シュナイゼルは目を真っ赤にして泣きそうな顔をしていた。口を弓のように曲げて眉根を下げている。段々と動かなくなっていく小鳥の頭を指の腹で何度も撫でさすっていた。

どうやらシュナイゼルの身に何か起こった訳ではないらしい。安堵しつつも、涙目のシュナイゼルにつられてシャーリーも眼を潤ませながらシュナイゼルの隣に屈んだ。

この半年で知能面においても情緒面においても大きく成長したものの、死を目の当たりする経験はまだこの王兄殿下には無かった。血塗れの弱弱しい小鳥はシュナイゼルの幼い心に深い傷を付けたようだった。小鳥の体温はシュナイゼルの指を優しく温めた。

「そうでしたか。可哀そうですね」

「お医者さんに診せたら治る？また飛べるようになる？」

「…………それは、」

どう見ても先の長くない小鳥を前に、どう返事をしたものかとシャーリーは返事に窮した。

この幼く純真な精神を持つ王兄殿下は、どうやっても助けることのできない命というものがあることをまだ理解できていないのかもしれない。

もう助けられないんですよ、死ぬしかないのです、とは、シャーリーには言えなかった。この純朴な青年に非常な現実を伝えるだけの勇

気が無かったのだ。

押し黙るメイドを前にシュナイゼルは耐えるように口元を引き結んだ。

並んで動きを止めた小鳥を2人で見下ろす。シュナイゼルはとうとう涙を零し始めた。膝の上にぽたぽたと涙が落ちた。冷えた空気のような沈黙の帳が落ちた。

だが柔らかな声が沈黙を破った。聞き慣れた声に2人共振り返る。「どうされたのですか兄上。シャーリーも」

「っ、ルルーシユ！」

頼りになる妹の声にシュナイゼルは顔を明るくした。皇帝であるルルーシユに出来ない事は無いとどこかシュナイゼルは盲信している節があった。

ルルーシユは即位してから半年で未曾有の大災害を一段落させた辣腕として名高い皇帝である。伶俐な美貌通りの合理的かつ先進的な手腕は、略奪を旨とするブリタニアの名を挽回するのに半年も必要としなかった。

現在のブリタニアはラグナレクの接続に伴う甚大な被害からの復興における陣頭指揮を担っている。

政務に携わっていないシュナイゼルも、ルルーシユが凄い人物であるということは多くの人から聞いていた。

具体的にどう凄いのかはまだ分からないけれど、ルルーシユに追従する部下達だけでなく、ブリタニアの庇護下に無い国々も嫌々ながらルルーシユ皇帝が有能であると認めているのだから間違いは無いだろう。

車いすを自分の手で操って近寄るシュナイゼルをルルーシユは温かみのある笑顔を浮かべて迎えた。皇帝服のデザインは変わらず男性のものである。しかし半年前より髪が伸び、甘やかな曲線を描く体で凛と立つ姿は明らかに女性であった。

その背後で本日の警護役であるスザクも騎士服に身を包んで微笑みを零す。こちら半年前と比較し落ち着きと深みの増した顔をしていた。共に18歳とは思えない貫禄のある姿だった。

「3日振りですねシュナイゼル兄上。お変わりはありませんか？」
「何にも変わらないよ。ただね、小鳥を見つけたんだ」

ほら、とルルーシユに膝の上に乗った小鳥を見せる。一度目を見開いた後にルルーシユは眼を細めた。

ルルーシユの眼にはもう小鳥は死んでいるように見えた。目を閉じて足を小さく折りたたみ、腹を上にして微動だにせず剥製のような姿を晒している。シュナイゼルは瞳を潤ませながらルルーシユを見上げた。

「ルルーシユ、ルルーシユなら治せる？また飛べるようになる？」

「——いえ、」

ルルーシユは顔を横に振った。

「もうその小鳥は死んでしまってますよ、兄上」

冷徹にも聞こえる言葉にシュナイゼルはぶわりと瞳に涙を大量に浮かべて、小鳥の死骸の上にはぼたぼたと落とした。ぎゅつと口を噛みしめてしゃくりあげる。

姿は成人をとうに過ぎた青年のものだというのに、幼児のように泣く仕草は不思議と違和感を与えなかった。内面が幼い子供のように純真無垢であるからなのかもしれない。

それもそうだろう。シュナイゼルは未だ生後半年の幼子のようなものだ。無垢であつて当然だ。

そうと知りつつも小鳥のために涙を流すシュナイゼルにルルーシユは言いようのない安堵感を得た。なんて心優しい人なのだろうと感嘆すら覚えた。

しかしこのままではいけないとも気付いている。彼はナナリーのようになつてはいけない。

シュナイゼルには現実の酷薄さを知り、それを受け止めて生きるだけの度量を持つ人物になつて欲しかった。

「僕がもっと早く気づいてあげれば、助かったかもしれないのに」
ぐすぐすと鼻を鳴らす兄の肩をルルーシユは優しく叩いた。

「兄上、お墓を作つてあげましょうね。お庭に埋めてあげましょう」
「う、うん」

「——兄上のせいではありませんよ。小鳥の運命だったんです」

ほら、と小鳥をハンカチで包む。シュナイゼルはハンカチをゆりかごのように揺らして指先で小鳥の形を撫でた。母親が子供を撫でるような仕草だと思った。その位にシュナイゼルの動きには慈愛が満ちていた。

「でも、でも可哀想なんだ。何かしてあげたいって思うんだ。僕がもっと何かしてあげていれば、こうならなかったんじゃないかって、僕はすごく、すごく思うんだよルルーシュ。これって間違いなのかなあ」

「間違いではありません。それはとても貴く優しい考えです。しかし同時に少し傲慢な考えでもあるんですよ」

「ごうまん？」

「小鳥の運命は、小鳥のものです。兄上のものではありませんし、責任を感じることもありません……それに小鳥は精一杯生きたのですから、あまり可哀想とは思わないであげましょうね」

ルルーシュの言葉がシュナイゼルに正確に伝わったのかは分からない。だがシュナイゼルは深い知性の宿る目を閃かせて深く頷いた。

小鳥の死骸は花園の隅に埋めた。簡素な墓の前で手を組んで一心に祈るシュナイゼルの背中を3人で見守る。

シュナイゼルに聞こえないよう3人は声を潜めて言葉を交わした。「殿下、かなり精神的に成長してきたね」

「ああ。最初は乳児のようだったのに今はもう10歳程度の情緒を備えている。このまま行けば実年齢に至るまであと1年もかからんだろう」

「………ついこの前まで夜泣きしてたのに、不思議ね」

シュナイゼルを見るシャーリーの眼はただのメイドのものにしてはあまりに優し気だった。母親が子供に向けるようなものともまた違う。一番近いのは年の離れた姉が弟を見るような視線のように思えた。

半年前、シュナイゼルは感情を喪失する事を拒否して自らの両足を撃ち、失血のあまり命の危機に晒された。

その時地球上にはシュナイゼル以外に意識を有する生物はおらず、誰からの助けも得られないままシュナイゼルは特派の施設の一室で冷たい床の上に血を流し続けた。

シュナイゼルが救急搬送された後にその現場をルルーシュも見たが、床一面に広がる血の海に背筋が凍った。戦場での経験からどれだけの血を流すと人が死ぬのか理解していたルルーシュはそれが致死量に近い出血量だと一目で分かったのだ。

だが現実世界に帰還したスザクとシャリーが迅速に医療機関へ運び、さらに王兄であるとして最優先で手厚い治療を施された事からシュナイゼルは辛うじて一命を取り留めた。膝から下と引き換えに、シュナイゼルは二度と歩けない体となった。

だが生きてさえいれば、シュナイゼルを知る者達は彼の運命に祈った。

祈りが通じたのかは不明だが、当初はショック状態であった容体は順調に回復した。不摂生を一切していない若く健康な体であった事が功を奏したのだろう。蟬のような肌は元の淡い肌色を取り戻し、鎖のように体中を覆っていた医療器具は日々その数を減らした。そして入院してから数日後にシュナイゼルは意識を取り戻した。

その報告を受けて病院へ急行したルルーシュは、未だ幾つものチューブに繋がれながらも、集中治療室のベッドの上で目を開いたシュナイゼルを前に安堵の息を吐いた。体に大きな後遺症は見当たらず、命の危機は脱したと医師は説明した。

説明を受けた後に震える両手を繋げた妹へシュナイゼルはガラスのように澄んだ視線を向けて、喃語を幾つか口にした。

目を覚ましたシュナイゼルは全ての記憶を失っていた。その精神は幼児のように無垢なものへと退行していた。

祈りを終えたシュナイゼルは息を吐いてルルーシュ達の方へ振り返った。

「ねえ、ルルーシユ。ここに花を植えてもいい？」

「勿論良いですよ。この庭は兄上のもものなのですからね。しかしどうして？」

「花がいっぱいの方が小鳥も嬉しいかと思って」

真剣な顔をするシユナイゼルにルルーシユは優しく目を細めた。

本当に心優しい人だ。人の痛みを自分のことのように思いやれる、深い慈愛を持っている。

心優しいだけの人間では駄目だ。しかし今のシユナイゼルもルルーシユは否定したくはなかった。

いずれは現実の理不尽さをこの人も知ることになる。

この人を取り巻く環境はそう甘いものではない。それに近い内にこの人は悪魔のように鋭敏な頭脳を取り戻すだろう。こうして小さな命へ限りない慈愛を抱いていられるのはそう長い期間ではあるまい。

無垢とは無知のことだ。賢くなるたびに人は無垢ではなくなる。それは決して悪いことではない。

ルルーシユは心の隅でシユナイゼルもナナリーののように無垢が故の暴走に走ってしまうのではないかと恐れていたが、それがただの杞憂であるとも察していた。安穩とした日々の中で無垢なままに生きる事はこの人は不可能なことだ。

ナナリーを護る様に、自分はシユナイゼルを護るつもりは無い。ならばいずれこの人は無垢ではなくなる。

ルルーシユは懐から翼をあしらった装飾を取り出してシユナイゼルへと差し出した。ルルーシユの掌の中で黄昏の夕焼けを反射してきらきらと光るそれにシユナイゼルは感嘆の声を上げた。

「兄上、これをどうぞ」

「……いいの？」

笑みを浮かべて深々と頷くルルーシユに、シユナイゼルは恐る恐るそのネックレスのような装飾を持ち上げた。注意をして扱わないと壊れそうなほどに繊細な意匠が凝らされていたのだ。

それはナイトオブゼロの騎士章であった。

華やかな容姿のシュナイゼルに相応しく宝石がふんだんに使われている。しかし細やかな装飾が彫られた、シュナイゼルの髪色に似た色合いをした白金の縁取りが全体のデザインを品よく引き締めていた。

騎士章を指先でなぞったり、陽に翳したりして検分した後にシュナイゼルは小さく笑みを浮かべた

「すごくきれいな。ルルーシユ、これを僕にくれるの？」

「はい。差し上げます。鎖がついていますので普段は首に下げてくださいとよいかと」

そう言うないなやシュナイゼルは細い白金の鎖を首にかけて再度感嘆の声を上げた。

無邪気な兄を前にルルーシユは少し目を曇らせた。兄の許可も得ずに勝手にナイトオブブラウنزの一席を押し付けたのだ。兄の身をおもったことだとはいえ、それは兄の意志を無下にする強引なやり方であった。

言い訳をするようにルルーシユは声を低める。

「――兄上の現在の立場は非常に微妙なものです。兄上にそのようなつもりがない事は私も重々承知しておりますが、今後兄上が貴族制度の復旧を目論む輩に担ぎ出され、利用される恐れがあることは否定できません。そのため兄上の精神が成長なさるまで、失礼ながら私のナイトオブゼロとなって頂くことと致しました……勝手なことをと思われるでしょう。しかしその騎士章があれば兄上が私の騎士であると周囲に知らしめ、今後も兄上の立場をお守りすることができま

す」

「はい」

ルルーシユはシュナイゼルの金色の頭をゆっくりと撫でた。その手つきはナナリーの頭を撫でるそれとよく似ていた。

そしてルルーシユはおろか記憶を失った本人でさえ知る由も無かったのだが、生まれて来てからこの方、シュナイゼルは血の繋がった家族にそのような甘やかな手つきで撫でられたことは一度として

無かった。

シユナイゼルは生まれた瞬間から多大な責任を負わされながらも、その責任を完璧に果たしてきた。完璧な理論の宮殿で一人暮らすシユナイゼルを無垢な幼子のように撫でる者はこれまで誰もいなかったのだった。

ただひたすらに甘やかせるような手つきをシユナイゼルは照れ臭そうに受け止めた。

「兄上がその意味を知るまでの処置です。いつか兄上が、ナイトオブゼロという名の意味を——唯一、私が心から敵わないと思い、私よりも君主として相応しい人物であると認めたという意味を知った時、その騎士章を返上するか、それとも持ったまま置いて下さるか、決めて下さい」

ルルーシユはシユナイゼルが、いつか元のシユナイゼルに……：自分に勝る明晰な頭脳と、ユフィに並ぶ優しい心を持つシユナイゼルに戻る日が来る事を確信していた。

シユナイゼルはギアス嚮団に奪われた日々をやり直しているのだ。新生児だった頃に感情を奪われて、長い間を知性により構築された人形として過ごしていた。ルルーシユのギアスにより感情を取り戻した後もギアス嚮団への復讐のために動き続けていた。彼は復讐のための人形であった。

記憶を失い、まっさらな状態に戻ったシユナイゼルはギアス嚮団のことを知らないし、これからも知ることの無いまま成長してゆくだろう。

二度とギアス嚮団がシユナイゼルを苦しめる事は無い。
きつと、それで良いのだ。

「くんしゅとしてふさわしい？」

こてんと首を傾げたシユナイゼルにルルーシユはくすくすと笑みを零した。

「申し訳ありません。まだ分かりませんよね」

「ルルーシユの言うことはたまによく分かんないよ」

「今後気を付けます。それは無くさないように気を付けて下さい」

「うん、シャーリー！見てみて、ルルーシユにもらった！」

シユナイゼルはシャーリーの方に向けて車いすを走らせた。シャーリーは純朴な子供を見るのと同じ、果てしなく優しい瞳でナイトオブゼロの騎士章を自慢げに翳すシユナイゼルを見た。

いつかシユナイゼルは成長し、自分を追い抜くだろう。

その日がやってきた時にシユナイゼルがブリタニア皇帝の座を求めれば、躊躇いなくシユナイゼルに皇帝の座を明け渡すことをルルーシユは決めていた。

この座に居座るには、あまりに自分は罪深い。皇帝の座に君臨するのは自分よりもユフィヤナリー、そしてシユナイゼルの方が遙かに相応しいのだ。清廉で純朴で日向を歩く彼らのような人々こそが民衆が仰ぎ見るに値するのだから。

しかしブリタニア皇帝の座は彼らにとってあまりに薄汚かった。血汚れや謀略の埃に塗れた椅子はシユナイゼルが座るなり彼を攻撃してしまうだろう。

だからその日が来るまでにルルーシユはブリタニア皇帝を美しく整えることを決めた。

数世紀に渡り続いた神聖ブリタニア帝国全ての汚濁を払拭し、あの兄上に相応しい座へとしなければ。そして兄上が座らないというのなら、さらにその次の世代のために。

ルルーシユは戦い続けることを決めた。この命が終わるまで。

「忙しくなるな」

「うん。そうだね」

スザクとルルーシユは並んで黄昏が落ちる空を見上げた。夜が来ようとしていた。

■ ■ ■
執務室の机で伸びをしてルルーシユは息を吐いた。

「とうとう明日か」

「ええ。準備は滞りなく済んでおります。今日はゆっくりお休みください」

スザクはお疲れ様でしたと手慣れた仕草でお辞儀をした。

明日は式典が控えている。参加する各国の代表数百名が今日はペンドラゴンに宿を取って明日を待っている事だろう。

この半年の中で最も豪華な式典になる予定であり、その中心にあるのは自分だ。作り笑いも演説も得意分野に入るが明日丸一日がそのために費やされるのかと思うと今からうんざりしてくる。

髪が伸びて女性と目に見えて分かるようになってからは猶更その面倒くささに拍車がかかる様になった。最近では男の視線とはこうも熱と湿度の高いものだったかと鳥肌が立つことも多い。

「兄上が皇帝に登極した後に実現する筈の策だったのにな」

「計画には常にイレギュラーが起こるものでしょう。それに皇帝陛下のような方が在野でのほほんと暮らすだなんて無理な話です」

「それはどういう意味だ」

「陛下は稀に見るトラブル体質だということですよ」

否定したいが、否定するだけの材料は無かった。肯定する材料だけが供給過多な程に積み上がっている。

口を閉じて自室へ戻ろうと腰を上げたルルーシユは「あ、少々お待ち下さい」と呼び止めるスザクの声に首を傾げた。

今日の政務は全て終わった筈だ。何かしら緊急の案件が起こったとしても、それにしてもスザクの声には緊張感が微塵も無い。ただスザクは首を捻りながら通信越しの要請を皇帝に伝えた。

「皇帝陛下、ナイトオブワンの紅月カレンより面会の要請が来ております」

「カレンが？今日は報告するような事は無かった筈だが」

「はい。業務内容についてはないとのことです」

カレンは本日事務作業の予定であり、ペンドラゴンにいた。私的な用事であれば友人として直接端末に連絡して来るだろう。態々警備担当であるスザクを通じたということは皇帝にナイトオブワンとして話があるということなのだろうが、思い当たる節は無い。

許可を出すとすぐさまにカレンが執務室に現れた。

赤い騎士服を身に纏い、半年前よりも堂々とした態度で皇帝の前に跪く。深々と下げられた赤い髪は燃えるようであり十代の女性とは思えない迫力を体中から発していた。声は朗々と執務室に響いた。

「急な事であるというのに拝謁の許しを頂き感謝に堪えません、皇帝陛下」

「この場には私とスザクしかない。楽な言葉遣いで良いぞ」

「あ、オツケー」

あつさりとカレンは口調を砕けさせた。

カレンとルルーシユの根底にあるものは友愛であり、主従では無い。公の場以外で遜ることをルルーシユはカレンに一切求めなかったし、カレンもその気質から堅苦しい態度を好まなかった。

無論公の場ではジノやジェレミアに叩きこまれた騎士として相應しい言動を崩す事は無かったものの、あまりに長時間規定で引いたような礼儀正しい態度を取り続けるのは精神的に辛いものがある。庶子として生まれ、貴族らしい教育を受けたことの無いカレンにとっては猶更だった。

跪いていた体勢から立ち上がり腕を組んだカレンはマントを邪魔そうにはためかせた。

「それでカレン、今日はどうしたんだ？仕事で何か問題でも」

「ううん。それは大丈夫。ただちよつとね……相談したいことつていうか、決めたことがあって……」

ちらとももの言いたげな視線をスザクに向ける。え、とスザクは眼を瞬かせた。

「僕、出て行った方が良い？」

「うん。ちょっと2人きりにして欲しいんだけど」

そう言っているカレンもそれが難しいことは理解していた。

今日の警備担当はスザクなのだ。皇帝親衛隊（ロイヤルガード）の長であるジェレミアが他の任務のため不在である以上、スザクが皇帝の傍を離れることは許されない。

ルルーシユは少し悩んだ後に駄目だと首を振った。カレンが信用できない訳ではない。ただ公私の別は分けるべきだと思った迄だ。

「正当な理由なく警備担当のナイトオブブラウズを傍から離す事はできない。たとえお前の要請でもな。どうしても言うのなら理由を言え」

きっぱりとした皇帝陛下の言にカレンは唇を尖らせてそわそわと指先を弄りながら声を潜めた。

秘め事を打ち明けようとする少女のような挙動だと思った。喋りたいという心情が前面に押し出されているのに、躊躇いが口を重くしている様子だった。

「……うん、分かった。あのね……ここだけの話んだけど……」

いつも快活な声を出すカレンに訝し気な視線を向けながら耳をカレンに近づける。

続いたカレンの言葉にルルーシユはカツと目を見開いた。

「……昨日の夜、歓楽街で派手な女の人と腕を組んでるジェレミアの姿を見かけたんだけど、」

「よしスザク、さっさと出ていけ。ここで聞いた話についての他言を禁じる。これは勅命だ」

公私の別なんて知るかと言わんばかりに綺麗に掌を返したルルーシユにスザクは慌てて声を上げた。

警備担当のナイトオブブラウズとしてそう簡単に傍を離れる訳には行かない。そして何より、ジェレミアとルルーシユがいつ結婚するか、もしくはいつ別れるかの賭けに参加している者の一人として聞き逃すにはあまりに重要な話題だった。

ナイトオブブツが皇帝の愛人であることは皇宮において公然の秘密であった。

そもそも2人には全くもって隠す気が無く、平気で互いの部屋に泊ってはそのまま出仕するのだから噂好きのメイドが吹聴しない訳が無い。

やれ今日は風呂を一緒に召したただの、朝は同じシトラス系の香水の匂いがしたただの、使用済みの避妊具がゴミ箱に5つ捨てられていたただの。皇族にプライベートなど皆無である。無論無暗に吹聴するような輩は居ないが、同じ主人に仕えるメイド同士であればつい口が軽くなる。

そしてメイドから警備兵に噂が飛び、警備兵から皇宮に出仕する役人に誤爆が飛び、いつの間にか皇宮に勤める者の殆どが2人の愛人関係を知った。

その結果根も葉も無い多くの推測が日々皇宮中を飛び交うこととなった。

お互い良い年齢だというのに、いつまで愛人関係をだらだらと続けるつもりか。このまま結婚するのだろうか。

ただのお遊びだろう。皇帝陛下が何時か政略結婚する際に性技に拙いとあれば問題だから、信頼の厚いジェレミア卿が夜伽の教師役となっているに過ぎまい。

互いに独身なのだから結婚するつもりが有るのならとつくに婚約している筈だ。

ジェレミア卿が手練手管で以って初心な皇帝を弄んでいるのではないか。

いや実はジェレミア卿の方が若く美しい皇帝にぞっこんで、皇帝はあの忠犬を掌の上で転がして楽しんでいるのでは。

きっと本当はそれぞれ本命の恋人がいてそのカモフラージュに互いを利用していただけなんだ。

ジェレミア卿は陛下と瓜二つのマリアンヌ前皇妃に思慕を寄せていて、皇帝はユーフェミア殿下の恋人であった枢木スザクが好きで、実らぬ恋を互いに慰め合っているのでは。

人の口に戸は立てられず、根拠のない噂話がドローンのように空中を浮遊する毎日が続いた。皇帝とナイトオブブラウنزという目立つ

立場の2人の間のことだけに、皇宮に勤める者達の好奇心と妄想は限界知らずに高まりに高り続ける。

そうして高まり切ったハイテンションが向かう方向を見失い、迷走の後に勃発したのが「ナイトオブツールと皇帝はいつ破局or結婚するのかトトカルチョ」である。ちなみに胴元はC・C・だ。コードを手放してからC・C・は人生を喉が枯れる程に謳歌していた。

C・C・に目を付けられたのが運の尽きか、巧みな誘いに乗せられたスザクは笑えない金額をその賭けに突っ込んでいた。賭博などしたことが無いスザクはC・C・の良いカモにされたのだった。

「ちよ、ちよつと待って！僕も聞きたい！話によってはオツズが変わりかねない！」

「駄目だ。お前はジェレミアにチクる可能性がある」

「浮気した友人を庇う男ってホント理解できないわ。どうせ男は浮気するのも甲斐性とか思ってるでしょ。サイツター」

「まだ僕何も言っていないよ!？」

「同じようなことは思っただろう」

「どうせ女友達と二人つきりで飲みに行つてキスして腕組む位セーフ、最後のラインを越えて無かったら許されて当然とか思ってるでしょ。同じ事彼女にされたらキレる癖に。サイツター」

「思っていないし何も言っていないよ!？」

「黙れスザク。ヴィレッタ」

「はっ」

ジェレミアの代理として皇帝親衛隊の任を務めていたヴィレッタは皇帝陛下の声に機敏に反応し、俊敏な動作で扉の外から姿を現した。

指先まで神経の渡っている敬礼をして凜と背中を伸ばす。軍人の見本のような動作は全身に覇気を纏わせていた。目元鋭く皇帝の指示を待つ。

「そいつを部屋からつまみ出せ」

「イエス、ユアマジエステイ」

「待ってルルーシュ！掛け金が、僕の給料3カ月分が!!」

「あんたそんなに突っ込んだの!?馬鹿じゃないの!？」

呻き声を上げ続けるスザクをヴィレッタはずるずると引きずっていく。

態と抵抗していないとはいえスザクを腕一本で引きずって行くのだから、皇帝親衛隊副隊長であるヴィレッタの腕力も相当なものだ。精銳ばかりを選びすぐっている皇帝親衛隊の副隊長として大過無く任を果たしているだけのことはある。

ヴィレッタがスザクを扉の外に放り投げて扉を閉めたのを確認しながらルルーシユは首を傾げた。

「突っ込んだ?掛け金?何の話だ」

「……………うん別に何でもないので。本当に何でもないので」

カレンは顔を引き攣らせながらぶんぶん顔と顔を横に振る。カレンも賭けの参加者の一人であり、口を割る気は無かった。スザク程ではないがカレンもそれなりの額を突っ込んでいたのである。ルルーシユの怒りに触れた挙句に皇帝権限でトトカルチョがおじやんになり、掛け金返却無しとなれば泣くに泣けない。

口を割る様子の無いカレンに、それなりに厚い信頼をナイトオブワに置いている皇帝はそれ以上の追求を止めた。

話から察するに、何かしらの賭け事で遊んでいるのだろう。カレンとスザクが関わっているというのならそう問題があるようなこととも思えなかった。

「……………よくは知らんが、賭け事は程々にしろよ」

「分かってるわよ。そこまで馬鹿じゃないわ。適度に掛け金は配分して大勝はしないけど大負けもしないように調整してるんだから」

「なら良い。よしカレン、先ほどの事について詳しく話を聞かせろ。場合によっては切り落としてやる」

「何を?」

「ナニを」

ちよきんとハサミでナニかを切り落とす仕草をするルルーシユにカレンの頬が引き攣る。

冗談ならば良いが、どこまでが冗談なのかよく分からない。実際に

以前裏通りで襲ってきた男の一物を切り落とすようギアスをかけた実績のあるルルーシユである。

流石に同じことを恋人にはしないだろうが、絶対にしないと言い切れないのがこの皇帝の恐ろしさなのだ。妹には見返りの無い愛情を際限なく注いでいたというのに、恋人に注ぐ愛にはしっかりと見返りを求める上に嫉妬心も人並みに持ち合わせている。

ルルーシユはありとあらゆる面で普通とはかけ離れた女だが、恋情という点においては割合普通であるように見えた。

スザクを追い出すためとはいえジェレミアに無実の罪を着せた罪悪感にカレンは額から汗を零した。思わず視線が部屋の四隅に逃げた。

神聖ブリタニア帝国最高の騎士が挙動不審に体を揺らす様をルルーシユは瞳を危うげに光らせながら鼻先で笑った。

「どうしたカレン。何か言い難いことでもあったのか？昨日お前は何を見たんだ？」

「いや、いやいや、違うの。あのね、その、嘘じゃないのよ。確かに昨日その、ペンドラゴンの繁華街の飲み屋で、酔いつぶれた派手な格好した、認めるのは癪だけど割と美人な女と腕を組んで、っていうか担いでたジェレミアを見たんだけどね。でもあのジェレミアがまさかかって思っつて、ちよつと後を尾行して見たのよ。それで女の方をよく見たら、」

一拍置く。ルルーシユの喉が緊張で鳴った。

「C. C. だったのよ」

「ああただの勘違いか」

脱力してルルーシユは息を吐いた。そのまま机に突っ伏す。

無駄に緊張して馬鹿みたいだ。まさかとうとう愛想を尽かされたのかと危惧したのに心配は杞憂で終わった。

目に見えて緊張を解いたルルーシユにカレンは苦笑いを零した。

「C. C. とジェレミアが浮気するっていう発想は無いの？」

「ありえん。浮気をするにしてもジェレミアにだって相手を選ぶ権利がある。そんな勘違いをするなんてジェレミアに失礼だろう」

「あんたC・C・を何だと思ってるのよ」

あまりの言いように頬が引き攣る。性格と性根はともかくC・C・は新芽色の髪と琥珀色の瞳という稀な色彩を併せ持つ美女だ。カレンやルルーシュでは持ち得ない透明感のある雰囲気は一種の神秘性さえ獲得している。

しかしルルーシュはありえないと肩を竦めた。

「美女だとは思っているさ。中身もいい女だとも。しかしジェレミアがあれに引っ掛かるとはどうにも思えん。C・C・もジェレミアのような暑苦しくて生真面目な男はタイプでは無いだろう。お互い遊びの相手になるような人物かどうか分からん程に馬鹿じゃないしな」

C・C・は見た目だけなら類稀なる美女である。さらに今はコードを持たない、至って普通の人間だ。彼女や妻がいる男でも揺れるほどの色気がある。

しかしコードが無かろうと手を出すのにはそれなりの覚悟を要する類の女であることに間違いは無かった。その事に気付かない程ジェレミアは愚昧ではない。

気を取り直してルルーシュは一人執務室に残るカレンを前に息を吐いた。

「それで態々スザクを追い出して、何の話なんだ？」

「バレた？」

「浮気の嫌疑があった訳でも無い。どうせ飲み屋で潰れたC・C・の回収に向かわせられたとか、愚痴の聞かせ相手として召喚させられたとかだろうか？」

「うん。LINEで聞いたらそうだったらしいわ。飲み代も代わりに支払ったって」

「分かった。飲み代はC・C・の給料から天引きしてジェレミアに返してやるよ。それで？」

先ほどとは違う色の視線がカレンに飛ぶ。

きつと部屋の外でスザクは聞き耳を鋭くしていることだろう。スザクとルルーシュの配慮に顔を伏せてカレンは一度息を吸った。

目を閉じて自らの騎士章を握る。紅蓮聖天八極式。これは自分の

誇りだ。

臉の裏に戦塵が巻き上がる。長い戦いの日々だった。深々と頭を下げる。ルルーシユは目の前に晒されたカレンの白い項に目を落とす。目を細めた。

「皇帝陛下」

「うん」

「ナイトオブワンの座を、返上したく思います」

「———そうか」

臉を帳のように下ろし、深くルルーシユは息を吐いた。カレンの言葉を半ば予想していたかのような静かな顔つきだった。

「顔を上げろ、カレン」

「はっ」

顔を上げたカレンの顔は澄んでいた。瞳はきらきらと光っていて蒼天を思わせた。立ち上がった勢いでマントに波が立つ。少女の肩には重い衣装だろう。だが立派に着こなしていた。

「それがお前の決断だと言うのなら、私にはお前を引き留める権利は無い。だが、理由が聞きたい……私は君が仕えるに不満のある主君だろうか」

「いえ、皇帝陛下は素晴らしい主君であらせられます。ゼロも、私にとつて掛け替えのないリーダーでした。無論の事陛下は完璧な人間ではありませんが、それは私がナイトオブワンの座を降りる理由には成り得ません」

「では何故？やはり日本に帰りたいたいのか」

カレンの母親は未だ日本にいる。多額の仕送りをしているようだが、それでも一緒に暮らしたいという思いは長いすれ違いの経験のある母娘として当然だ。

しかしカレンはルルーシユの予想とは反して首を横に振った。

「二度日本に戻って、アッシュフォード学園を卒業する予定ではありません。留年して追加の単位を取得すれば卒業させてくれると学园长が保証して下さいましたから。しかしその後はブリタニアに戻ってくる予定です」

「何故」

「きちんと整備されている大学が日本には無いからです。私は高校を卒業したらブリタニア本国の大学に進学します」

「母親はどうするつもりだ」

「出来れば一緒にブリタニアに来て貰いたいと思っています。しかし母が日本に残るのなら、私一人でブリタニア本国に戻って来ます。今はブリタニアと日本の間に渡航の制限はありませんから、たまに日本に行つて母に会うことはそう難しいことはありません」

「そうか。では大学を卒業したら、」

「そしてっ」

カレンは声を張り上げた。扉の向こうのスザクにも届け、と思つた。

声はカレン自身が思つたよりも大きく、涙が混じつた。たった半年だ。しかしこれまで生きてきた中でここまで充実感のある半年は無かつた。

自分の価値をよく理解できた半年だった。そしてこの場に居続ければ自分の価値はこれから先、日々色褪せて行くに違いなかつた。

それは許せないのだ。いつだって自分はルルーシユの騎士として価値ある存在でありたい。ならば紅蓮に乗り、人を殺すしか能の無い自分から卒業するしかないとかレンは決意したのだった。

「大学を卒業したら、私は文官になります。私は文官として皇帝陛下にお仕えしたく思います!!」

破裂するようなカレンの宣言を聞いてルルーシユは感慨深く目を見開いた。

騎士の決意に知らず目頭が震えていた。思えばカレンとはもう2年近い付き合いになる。

最初は駒としてしか見ていなかった。次には類稀なる優秀な駒だと、手に入れた幸運を喜んだ。そして今やカレンは自分の騎士であり友人なのだった。

カレンはルルーシユにとって替えの利かない存在になっていた。いつの間にか。

戦場でしか能力を発揮出来ない自分からカレンは脱却しようとしているのだ。それは友人として誇らしいことだった。もうカレンも18歳であり、立派な成人である。自分の道を悩み、考え、決めなければならぬ年齢に差し掛かっている。

そしてカレンがナイトオブブラウンズを辞めて新たな道を行きたいと言うのならルーシユにはそれを止める権利は無い。それどころか黒の騎士団エースとして、ナイトオブワンとして多くの命を屠ったカレンが、もう手に血を塗ることが無い道を望むのは喜ばしいことだった。

だがそれでも胸の窓を開け放ったような寂しさが通り過ぎる。ルーシユは掌を握り、寂しさを押し殺した。

「行政に携わるとなれば帝立コルチエスター学院大学が最も良いだろう。官僚はあその出身者が多い。今のうちに文官達に話を聞いておけ」

「はい」

「あそこは社会人入学に積極的だからナイトオブワンとしての経歴は役立つだろう。必要ならば職場の上司として推薦状を書いてやるから遠慮せず連絡しなさい」

「はい」

「皇宮にあるお前の荷物はそのまま置いておけ。アツシユフォードを卒業して、受験に合格してこちらに戻ってきてから大学の近くに引っ越せば良い」

「はい、ご厚意に感謝致します皇帝陛下」

「——カレン」

「はい」

「カレン」

「はい、皇帝陛下」

迷いなく返って来る張りのある声に微笑が浮かぶ。ルーシユは椅子から立ち上がり、カレンの前へと動いた。こうして真正面から見るとカレンは自分より頭一つ分は小さい。

こんな小さい体で戦場を駆け回っていたのだからカレンは凄い。

慣れないブリタニア軍のトップにいきなり配属されて、周囲の助けを借りながらもナイトオブワンとして任務を果たし続けてきた。

そしてカレンが負けることは一度として無かった。いつだって凛と前を向いた。

騎士章を握るカレンの白い手をその上から握った。年頃の女の子とは思えない程に傷だらけで、皮は分厚くKMFのデヴァイサー特有の胼胝が浮いている。そしてルルーシユの手も似たり寄ったりの手をしていた。カレンの手は熱かった。

「出来るだけ早く、帰ってきてくれ。私にはお前が必要だ」

深い森に木漏れ日が落ちるような笑みを浮かべたルルーシユに、カレンはついに自分はルルーシユの騎士となったことを悟った。ゼロではなく、皇帝陛下でもなく、ルルーシユという一個人へ捧げ続けた忠誠をようやくルルーシユは受け取ってくれたのだ。

カレンは涙を拭い、頬を紅潮させて、小さな体に秘めた海のように多大な忠誠全てを指先に乗せてルルーシユへと敬礼した。

紅蓮のデヴァイサーとして幾度となくゼロと皇帝を死の淵から引きずり上げた紅の騎士、紅月カレンが軍人としてルルーシユへ敬礼したのはこの瞬間が最後であった。

ナイトオブワンの職務を返上した後、紅月カレンは帝立コルチェスター学院大学法学部へと進学し、卒業後は政界へと身を投じた。

30代半ばという若さで内閣府に名を連ねた彼女は、神聖ブリタニア帝国の憲法制定において中心的な役割を果たした。彼女の功績により神聖ブリタニア帝国は専制政治から立憲君主制へと大きく舵を切り、歴史の波に乗ることとなる。

だが政務に全く落ち度が無いルルーシュ皇帝の頭上に憲法という天井を建築した彼女には少なくない非難が集中した。

一人の超人の華麗な歩みに全てを任せる専制政治ではなく、多くの民衆が手を携えて恐々と歩む民主主義が確かに当時の政治の主流ではあった。ルルーシュという一人の偉大なる君主の出現により逆行しようとしていた歴史の歩みを押しとどめた事実、後年彼女の偉業の一つとして数えられる。

だが憲法が制定された当時、皇帝の権力を無駄に削ぎ落とし、結果として国政を滞らせたこともまた事実であった。

後世においては、非難でなくとも、生涯優れた統治を行った皇帝の御世において必要な政策では無かったという消極的な批判的意見も散見される。

しかし紅月カレンは自身に向けられた非難に対しこう発したという。

皇帝陛下が私欲無く、さらに自己を省みる稀有な能力を有する方であるという事実には国民が甘えるわけにはまいりません。皇帝陛下は偉大な方ですが限界のある人間であり、それもたつた一人で世界の重責を担って歩んでおられるのです。その歩み方を助言するに耳に優しい諫言ばかりではかえって皇帝陛下へ礼を失することとなりましょう。

皇帝陛下の歩みを助けるために、ナイトオブブラウンズ以外の手が必要なのです。

ジェレミア卿や枢木卿よりも躊躇なく、皇帝陛下の頬を張ることができる長い手が――

結局ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアは政治的な大過を犯すことなく皇帝としての務めを終え、憲法の意義はルルーシュ皇帝の時代には明らかにはならなかった。

しかし彼女の次の時代、遙かなる明日において憲法はブリタニアの国を長く守って行く事になる。

クラスメイト、ゼロと騎士、皇帝とナイトオブワン、女帝と政治家。幾度となく関係性を変えながらも紅月カレンはその生涯をルルーシュの忠臣として過ごし、一度も叛することは無かった。

ナイトオブワンの経歴を持ちながら結局大群を率いることの無かった未熟性。黒の騎士団エースでありながら積極的な立案をせずゼロへ全て依存していた短絡的思考。血の気が多い短気な性格。日本を取り戻すという初期の目的から離れブリタニアへ所属することとなった変遷など、彼女に向けられる後世の批判は多い。

だが賛否両論あれ、多くの歴史書は紅月カレンをこう評する。

彼女はあの激動の時代における、ルルーシュ皇帝最高の騎士であった。

.

Epilogue 2. 楽園爆破の犯人たちが

カレンが退室した後、ルルーシユは深く息を吐いて立ち上がった。
「スザク」

「はっ」

返事に呼応するようにスザクが入室する。軍人らしくぴんと背筋を伸ばし、胼胝の浮かぶ手を体の横に揃えていた。碧の瞳を閃かせてナイトオブブラウンスの騎士服を翻す姿は精悍だ。

仔犬のような童顔は変わらずだが年齢に似合わない貫禄のある面構えは重厚な騎士服と釣り合うものだった。

「今日の仕事は終わりだ。部屋に帰る」

「了解致しました。ちなみにどちらの」

「自分の部屋だ」

純白のマントを靡かせて部屋を出る。スザクは数歩後ろを影のようについて歩いた。

そのさらに後ろを皇帝親衛隊副隊長のヴィレッタが続く。しかしヴィレッタは親友でもある皇帝とナイトオブセブンの邪魔にならないよう意図的に自身の気配を殺して足音までもを潜めさせた。

細かい気遣いのできる女性の仕事ぶりに目を細める。あんな部下が居れば仕事が楽だろう。ジェレミアの下に付けて正解だった。

「陛下、何か楽しい事でも？」

「いや。私は部下に恵まれていると思っただけだ」

「紅月卿のことでしょうか」

親友として最大限に譲歩して表現したとしても、スザクは他人の繊細な心遣いに気付くような聡明さは持ち合わせていない。はつきり言ってしまうと鈍感という文字を固めて鋳型に流し込んだような男だ。ナイトオブツアの副官であるヴィレッタの存在すら気にも留めていない可能性もある。

そして伝統ある皇帝執務室の扉は重厚ではあるが防音仕様ではない。人外感覚を持つスザクなら扉越しにカレンと自分の会話を盗

み聞く等容易だっただろう。

スザクの思考がカレンの辞任へ傾くのは当然だと軽く肩を竦めた。「ああ、それもある」

周囲に気付かれないよう視線を回す。いくらヴィレッツタが気を利かせていても皇帝親衛隊隊員は周囲を警備しており、メイドの耳もある。

皇宮で仕事をする多くの者は噂好きだ。殊にメイド達は噂話を収集して吹聴することに人生の意義を見出しているレベルに達している。聞かれて困る会話ではないが、どう育つかも分からない噂の種を振りまく必要も無い。

「ところでスザク、お前もこれで仕事は終わりだろう。暇ならお茶でも一杯飲んでいかないか？ 皇殿から日本茶を貰ったんだ。お前なら日本茶の味も分かるだろう」

「はい、是非に。お邪魔致します皇帝陛下」

意を得たとスザクは騎士として完璧な仕草で頷いた。

ルルーシユの自室は皇帝のものとは思えない程に質素に整えられており、リビングと簡易キッチンと寝室、そしてトイレとバスルームで完結している。調度品は一級品を揃えてあるものの一見簡素な造りだ。現在地上で最も権力を持つ者の私室にはとても見えない。

どこかアッシュフォードのクラブハウスを思わせる庶民的な内装にスザクは何とも言えず口を閉ざした。

ルルーシユが意図的に私室をクラブハウスに似せているのは明白だった。スザクの眼には、それはナナリーが居た日常を忘れまいとする足掻きのように見えてならなかった。

皇帝として公に身を晒して緊張を強いられるルルーシユが唯一心を安らかにできる私室をどう改造しようと勝手ではあるが、こう目の当たりにすると哀れみとも憐憫ともつかない感情が胸の中で渦を巻く。

まだルルーシユはナナリーのいない日常に慣れていない。ナナリーとジェレミアと、日々を安寧の中で過ごしたアッシュフォード学

園の日々はルルーシユの中で神聖化しているのかもしれない。アツシユフオードこそがルルーシユにとつての失われた楽園なのかもしれない。

カレンがナイトオブワンを辞めてアツシユフオードに戻ると聞き、唯一無二の戦力を手放す事になると言うのにルルーシユは反対する所かむしろ背中を押した。親しい友人であるカレンがああ楽園に短期間であろうとも戻ることが単純に喜ばしかったのだろう。

その喜びの中に羨望や嫉妬があつたのかはスザクには分からないが。

部屋に入るなりルルーシユはマントを脱いでクロゼットに仕舞い、大粒の宝石が飾る上着も脱いで暗色のカーデイガンを羽織った。重厚な皇帝服から一転、随分とラフな格好で簡易キッチンに立って湯を沸かし始める。手つきは素早く、慣れていた。

ルルーシユに倣ってスザクも豪華で重いマントを脱いでクロゼットに仕舞う。

体に密着するパイロットスーツのみだとスザクの軍人にしては細身な体が露わになるため、部下に舐められないよう常に騎士服はきつちりと着こなしているが、この場にはルルーシユしかいないため気にする必要も無い。

ナイトオブブラウズとしての威厳のためにじやらじやらと飾りのついたマントは邪魔以外の何物でも無かった。肩から深い青色のマントを滑り落とすと解放感で体が軽くなる。だが生地の高い皇帝服の重さはこのマントの比では無いだろう。華奢なルルーシユがよく耐えていると思う。

「扉は防音だから口調は気にしなくて良い。神楽耶から貰った日本茶なんだが玉露と玉緑茶どっちが良い？私は玉緑茶にする」

「日本茶の味はよく分からないからカフェオレの方が良いな」

「お前な、日本人としてたまには緑茶にしたらどうだ。いっつもコーヒーかカフェオレばかりだろう」

「元々日本茶なんて麦茶ぐらいしか飲んでなかったから緑茶の味なんて分かんないよ。それに僕ブリタニア歴もう6年目だよ。6年もあ

れば麦茶党からコーヒー党に鞍替えするよ。あ、砂糖は無しでお願い。ミルク多めで」

「はいはい」

呆れ声を出しながらルルーシユは棚から緑茶を引つ張り出してスプーンで掬い、茶器に注ぐ。その隣にコーヒーカップにフィルターを乗せてミルで豆を挽き始めた。

いつもはリビングテーブルの上にお茶請けのクッキーやらチョコレートやらが置いてあるのだが、今日は見当たらない。鳴りそうな腹を抱えてスザクはきよろきよろと部屋を見回した。

「何かつまめるようなものってない？夕食まだだからお腹空いてて」

「この前作ったパウンドケーキの残りなら冷蔵庫にある」

「分かった」

勝手知ったる友人の部屋だ。冷蔵庫を開けて寂しく2切れ残っているパウンドケーキを遠慮なく引つ張り出す。

食器棚から適当に皿を2枚出してずっしりと重いケーキを乗せた。断面は黄金色でみっちり詰まったオレンジの果実と胡桃が端に姿を見せている。

その上に冷凍庫から引つ張り出したアイスクリームを乗せていると、ルルーシユはむっとりとした顔で湯気の立つカフェオレと緑茶をダイニングテーブルに置いた。

「緑茶とパウンドケーキか……まあいいか。しかし和菓子でも作っておけば良かったな」

「美味しそうだねこれ。どうしたの」

「アーニャとシャーリーがお菓子を作れるようになりたいと言って来たからお手本として作ったんだよ。味は咲世子の保証済みだから安心して良い」

「保証なんて無くてもルルーシユの作った物なら美味しいって分かるから大丈夫さ。それにセルさんに鍛えられてるから味は多少悪くても食べられるから。それにしてもアーニャとシャーリーが？意外な組み合わせだね」

「それでも無い。年齢も近いし、最近よく話をしているところを見る。

アーニヤは内向的に見えて割とずけずけ喋るからあつけらかんとしたシャーリーと話しやすいんだろう。料理をしたり遊んだりしているらしい」

相槌を打ちながらアイスクリームを絡めたパウンドケーキを口に含む。甘いがオレンジの酸味が適度に混ざっていて美味しい。胡桃も歯ざわりが良く舌を楽しませる。カフェオレも丁度良い濃さでスザクの口に合った。

皇帝なのだから一言命じればお茶とお茶受けの準備などメイドがやってくれるだろうに、ルルーシユは出来得る限り自分の手を動かすことを好む。

元から料理好きで人の世話を焼くのが趣味と言える女だ。それに他に仕事もあるだろうメイドにわざわざ命じて茶を淹れさせるより、自分で淹れた方が早いし人材の浪費も無い。

だが何もかもを自分でやっていた昔の習慣が崩れるのが嫌なのかもしれないとも思えた。クラブハウスに似たこの部屋で、ラフな格好でお茶を淹れるルルーシユを見ると時が戻ったような感覚がする。

カフェオレを飲んで一息ついて、スザクはパウンドケーキを咀嚼しながら「我ながら美味しい」と呟くルルーシユに目を向けた。

「……それで、カレンは騎士を辞めるって?」

本題を切り出されてルルーシユはきよとんと眼を見開いたものはあと息を吐いた。

「やはり聞こえていたか」

「扉の前にいたからね。それに何となく予想はしていたよ」

口の中のケーキを飲み込みルルーシユは眼を落した。

ルルーシユもカレンが騎士を辞めようとしている事には以前から気づいていた。

カレンはバレないよう陰でこそこそと仕事の引継ぎをしたり、自分の部下の次の配属先を探したりと奔走していた様子だったが、仕事の引継ぎ先であるジェレミアの口はルルーシユ相手だと非常に軽い。24時間フルオープンと言っても良い。ジェレミアはコンビニ以上の手軽さでルルーシユにカレンの情報を売り払っていたため、カレン

の動向は全てルルーシユに筒抜けだった。

だからルルーシユも何時カレンが騎士を辞めても支障の無いように仕事内容の分配やナイトオブワン直属部隊の今後の配置などを既に考えていたのだった。

カレンを引き留めようとは思わなかった。元々カレンは日本奪還のためにテロリストになったのであり、ブリタニアの皇帝に仕え続ける理由は無い。彼女を引き留める権利は自分には無い。

日本が戻り、シャルル皇帝関連についての問題も一応の決着がついた今、祖国に戻って母親と暮らすことを望むのは当然の人情だ。母という存在への思慕をとうとうルルーシユは理解できなかったが、それが普通の人にとってとても大切である事は理解している。

だからこそルルーシユも涙を呑んでカレンの抜けるであろう穴を埋めるために余計な仕事を増やしていたのだ。まさか文官になるためにナイトオブワンの肩書が邪魔だから捨てようとしているとは思わなかった。ナイトオブワンは軍人の最高峰だ。軍事大国であるブリタニアにとつては皇族の次に高い地位にあり、文官より遙かに高い権益を有している。

それをぼん、と。大学に進学するために捨てるとは。

予想していた、と告げたスザクに淡々と問いかける。

「そうか。どうして」

「これから先戦争が少なくなつてナイトオブブラウنزの出番が減るのは明らかだから、僕とは違って戦場以外でも戦えるカレンが悩むのは当然だよ。ルルーシユは政治の重心を文官による行政の方に移して行く予定なんだろう？ だったら進路を変更するなら今は良い時期だしね」

「…………お前だって戦場以外でも、」

「僕はカレンとは違うよ。僕はここで戦うと決めたから」

苦笑いと共にスザクはフォークで空中に円を描いた。

「僕は戦場で戦うことしかできないんだ。他の事をしようとしても上手く行かない。カレンみたいには行かないよ」

「行政特区日本のことか？ 一度の失敗で何を言うんだ。お前らしくも

ない」

「いや、失敗した事だけじゃなくて……多分、僕が文官になったとしても大きな功績は残せないよ。僕の文官としての能力は凡百かそれ以下だから。それよりカレンの抜けた穴を埋める方が僕の存在は有意義だと思うんだ。それは僕にしか出来ないことだろうし」

まるで自分のことを駒であるかのように告げるスザクに眉根を顰める。

フレイヤを撃った直後よりもずっとマシになったが、スザクの根底には未だ自嘲と自責が渦巻いていた。これはユフィの存在とともにスザクの根幹に打ち込まれているものだ。

呪いのようなものだと思う。人は忘れる生き物だ。しかしスザクは自分の罪を生涯忘れることは無いだろう。忘れない限り、スザクにとって自分の命はユフィの望む世界を手に入れるための駒の一つに過ぎない。

自分にはどうすることも出来無いだろうと分かっている上でルルーシユはぼそりと呟く。

「お前だって、したいことをしたいようにしていいんだぞ」
「しているよ。だからここにいる」

あつけらかんと口にしたスザクは嘘を言っているようには見えなかった。フォークで描く円は見事な正円で、最初と最後は計ったようにきっちり合わさっていた。スザクの中で全ては論理的に説明できる事なのだろう。

「集合無意識の中で僕は多くの人生を知った。自分の望みと自分の能力が解離しているなんて全然珍しい事じゃないんだ。自分がやりたいたい事だけやって欲しい結果を得るなんて不可能なんだよ。どこかで妥協は必要だ。僕にとっては戦場こそが妥協だ」

「妥協が大き過ぎる。お前はそうやっていつまで身を削るつもりだ」
「僕が一番欲しいのはユフィが望む優しい世界だから。望みに比べたら小さな妥協さ」

カフェオレお代わり、と微笑みながら差し出されたカップを取り上げてキツチンに向かう。

カップを洗い、新緑色のお茶を注いでルルーシユはスザクに手渡した。文句ありげに見上げる仔犬のような視線を鼻で笑う。

「神楽耶はお前にも飲んで欲しいと思つて渡して来たんだろう。せめて飲んでやれ」

「……うん」

ブリタニアの騎士として骨を埋める覚悟をした。その為に捨てたものの中の一つ、今も日本のために奔走している幼い従妹を思いスザクは顔を少し伏せた。

元首相の息子であるというのにスザクは合衆国日本の立ち上げに全く貢献していない。

それどころか敵国ブリタニアの騎士として散々に神楽耶の道を妨害し、今やブリタニアのナイトオブラウンズだ。

二度と日本に帰ることは無いだろうスザクを神楽耶はどう思っているだろうか。少なくとも好意的には思っていないに違いない。ありとあらゆる重荷を幼い従妹に背負わせてしまった自覚はある。

カップに満ちた若緑色の透明な液体を口に含む。

「味はよく分かんないけど良い匂いだね」

「最高級の茶葉だ。香りも味もまろやかで美味しい。分けてやるから持つて帰れ」

「僕じゃ上手く淹れられないかもしれないけど……うん、ありがとう。神楽耶は元気でやってるかな」

「この前映像通信で話したが元気だったぞ。田中首相も藤堂も居る。そう心配は無いさ」

「そっか」

「明日の式典には神楽耶も来る。顔ぐらいいは見せてやれよ。過程はどうあれ、日本人でありながらナイトオブラウンズであるお前は日本とブリタニアの友好の証でもあるんだ。最初にお前が望んだようにお前が立派なブリタニアの騎士である日本人だと証明すれば、それは平和への道を舗装する石の一つになる」

「……もう1年以上前のことなのによく覚えてるね」

「なんて馬鹿な奴だと呆れた分印象に残ったんだよ」

うん、と返して日本茶を啜る。ルルーシユの言う通り、首相の息子であり同時にナイトオブワンに成った自分は日本とブリタニアの架け橋としての役目を背負うことになった。ゼロがルルーシユであったと知られた今では日本人が抱くルルーシユ皇帝への忌避感はその大きくはないが、自分の存在がその一端を担っていることは自意識過剰では無いだろう。

一番最初に願っていた、騎士として立派であれば日本人へ向けるブリタニアの視線が変わるだろうという浅くて甘い思惑は幾つもの変遷を経てスザクの手元に戻って来た。その手触りは思っていたよりも心地よくは無かった。自分が胸を張って立派な騎士だと言えるような人間では無い事は自分が一番良く知っている。

そもそも騎士とは多少狂っているような人間にしか成れないのだろう。主君の為に大量虐殺も厭わないような人間がまともな人間である筈が無いのだから。スザクの知る限りでまともな人間であり同時に素晴らしい騎士であると断言できるような人間は、紅月カレンしか居なかつた。

ジェレミア同様かそれ以上に自分もまともな人間ではない。ユフィの復讐の為にありとあらゆる物を振り捨てた。神楽耶は自分の顔も見たくは無いらろう。

明日の式典ではナイトオブブラウンズとして会場警備につきつきりで居ようとスザクは決めた。そうすれば各国の親善大使と顔を合わせる機会も無い。

何より明日の式典はユフィが望んだ、平和で優しい世界への第一歩になる。万が一にでも問題が起こらないよう万全を期しておかなければならない。

大人しくなったスザクにルルーシユは息を吐いた。ユフィの望む世界のため、ユフィの騎士として相応しい行いを。ユフィユフィユフィ。

とつづくに死んだユフィのためにスザクは命を燃やしている。ルルーシユだつてユフィが好きだつた。それどころか初恋の君であり、

実の妹だった。身内の鼻根目を除いても可愛くて優しい少女だったと思う。

だが死んだユフィのためにここまで尽くすスザクの心情は全くもって理解できない。

ルルーシユにしたつてもう二度と会えないナナリーのことを忘れた日は一日も無い。だがスザクのようにナナリーのことだけを思っ
て、ナナリーが望んだ優しい世界のために身を削るような事は自分には出来無いだろうと思う。

それどころかこれから生きていく中で、ナナリーを思い出さない日の方が増えていくだろう事をルルーシユは感じていた。針で胸を突くような罪悪感に時折苛まれるものの、しょうがない事だと既に半ば悟っていた。

ナナリーの事を忘れる日は何があるかと生涯やって来ないだろう。これまでの人生で最も愛した人だった。ナナリーが居ないと今の自分は存在せず、そもそも生きる意味も見失って廃人のようになっていたかもしれない。

しかし生きていく限り明日が来るのだ。これまでの人生で最も愛したのはナナリーだが、明日もそうであるのかは分からない事だ。これから先の人生、居なくなってしまったナナリーの事だけを考え続けるなんて不可能なことだった。ルルーシユは今でもナナリーを心から愛しているが、ナナリーだけを愛している訳では無かった。

だがスザクは瞼の裏にユフィの姿が押印でもされているような生き方をしていた。スザクの中の一部はユフィの死と共に永遠に歩みを止めたようだった。

「全く、ユフィ、ユフィと……お前はどれだけユフィが好きなんだ。まだお前は18歳なんだぞ。これから先もつと別の道も出てくるかもしれない。ナイトオブブラウズを辞めてアツシユフオードに戻ればただの学生として生きることできる。それを、」

「好きじゃない。愛しているんだ」

声はそう大きくは無かったが、間違えることは許さないという口調だった。出会ってから数か月にも満たない間に死別した恋人を思う

ような生易しい感傷では無いことは容易に察せられた。

スザクにとつてユーフェミアがどんな存在なのかはルルーシュには理解できない。ただの主君や恋人とするにはあまりに違和感があった。スザクの存在の根幹にユーフェミアの名前はあまりに深々と突き刺さっている。

ジェレミアがどうして自分に12年も仕え続けているのかさえ理解できていないのだから、当事者でさええない2人の感情の端切れも理解できないことは当然と既に理解を諦めていた。

ただこれから先スザクはユーフェミアと過ごした期間の何倍もの時間を使って、ユーフェミアに相応しい優しい世界を創ろうとする事は確信できる。

それを愛だとスザクが確信しているのなら、そうなのだろう。

ルルーシュは茶化すように肩を竦めた。

「はいはい。お熱いな。分かったよ、好きにしろ。私には口を出す権利なんて無いんだからな。だが知っているか？この前雑誌で特集された、結婚したい騎士ランキングでお前2位だったんだぞ。それが恋人一筋で脇目も振らないとは勿体無い」

「だから僕が愛してるのは……え、2位？どうして。僕は日本人なのに」

本気で驚いたのかスザクは元から大きな瞳を更に大きく丸くした。だが大きい瞳はこれまで自身を取り巻く熱い視線に気付く事は無かったらしい。

アツシユフォード学園に居た時からスザクは割とモテた。柔らかな物腰と童顔な外見、そしてナンバーズながら出世街道を駆け上がる経歴がギャップになって多くの女性の心を掴んでいたのだ。さらに誰に対しても親切な態度を取るのだから一層性質が悪い。

ユーフェミアの恋人であるという疑惑が広まっていなければ勘違いする女生徒は山の如しだっただろう。

異性の視線を敏感に感じて常時警戒していた身としてはあまりに鈍感過ぎると鼻で嗤おうとして、しかし思い留まった。

ここで嗤い、ではお前はジェレミアの思慕に何年間気付かず放置し

ていたのかと反論されるとぐうの音も出なくなってしまう。その点に関してだけはルルーシュは自身の目も節穴だったと認めざるを得ない。当たり前障りのない返答だけを口にした。

「それだけナイトオブブラウズというステータスは強烈という事さ。それに日本人に対しての差別は薄れ始めては来ている。お前の容姿の良さも相まってかなり人気がある様だぞ」

「容姿が良いってルルーシュに言われてもね。それに今のナイトオブブラウズって何故か美形が揃ってるからそう言われてもあんまり実感が湧かないよ」

「お前は美形というより可愛い顔立ちから余計に目立つんだろうさ。雑誌曰く、アジア系の童顔な顔立ちが今は流行っているらしいしな。ちなみに1位はジノでカレンは3位だ」

「カレンって女性なのにそんなに高かったんだ。アーニヤは？」

「アーニヤはランク外だ。女性向け雑誌の質問コーナーだから基本的には男性の騎士しかランクに載って無かった」

「数秒前の自分の発言忘れた？」

「カレンはしようがないだろう。イケメン過ぎる。はつきり言ってお前やジノよりカレンの方が男前だぞ。私としてはカレンが1位じゃ無かった事の方が意外だ。あんなにイケメンで頼りがいがあった聡明で性格も良くて将来性の高い騎士なんてそうはいないからな」

「ルルーシュってカレンの事結構好きだよね……あれ？ジェレミアさんが1位とは思って無かったの？というよりジェレミアさんは何位だったの？」

カレンが退任する以上次のナイトオブワンになるのは確実である、最も皇帝の信頼の厚い男の名前が出なかったことにスザクは首を傾げた。

ジェレミアの容姿は美形揃いのナイトオブブラウズの中では可もなく不可も無いという評価に落ちるが、平均よりは上に位置する。軍人らしい体躯と精悍な顔は、戦場帰りの硝煙の臭いさえ漂わせていなければ女性の眼から見ても良い意味で男らしいものだろう。立ち振る舞いは貴族出身らしく礼儀正しく、経歴も士官学校出身の後に現皇

帝の選任騎士を拝命と堅固なものだ。

流石に大公爵家出身であるジノには劣るが、日本人の自分と比べると明らかに優良物件である。しかしルルーシュは口端でせせら笑いながら「12位」と口にした。

「え、ひつくい!!え、どうして?確かに顔は整っているとか整っていないとかいう以前に強面の長身で近寄るとかなり怖いし、性格は面倒くさくて鬱陶しくてキレたらとんでもなくぶっ飛んで怖い人だけど、収入と経歴だけは良い人なのに。もしかして9年以上に渡るロリコンの性癖がバレでもした?確かにあれは僕もヤバいと思うけど。初対面の変質者と間違えてドロップキックしたのは実は間違っていないかったんじゃないかって今更ながらに思ったりもするけど。今でもルルーシュとジェレミアさんが一緒に居る所を見ると「あの人って6歳の頃からずっと一緒に18歳女子とあんなことやこんなことしてるんだ……うわあ……うわあ……警察に電話しなくていいのかな……」とか思ったりしちゃうけど、でも本当に、本当に収入と経歴だけは最高の人なのに、」

「お前そんなに口が悪かったか?」

「ルルーシュの友達やってれば性格の一つや二つ捻じ曲がるよ」

澄んだ瞳で真つすぐに言われてきゅつと唇を閉じる。あの素直で可愛い小型犬のようだったスザクはどこに行ったのだろうか。見た目も今は小型犬のようなのに中身が全く可愛くない。

溜息を吐いて日本茶を啜る。紅茶とはまた違う風味があつて美味しい。和やかな香りが口から鼻に抜けてささくれだった神経を癒す。

「本当にジェレミアがロリコンならとつくに私を捨ててアーニヤに走っているさ。もう私もロリと呼ばれる年齢じゃないしな。だからあいつはロリコンじゃない……多分……恐らく、うん。

そう信じている……信じてる……そう……そう……だよな?私はいつを信じていいんだよな?いや別に疑っている訳じゃないんだ。ただ性癖というものは人それぞれ千差万別に異なっていて当然であつて、実害が無い範囲内では自由であるべきだと思うだけで別に私は疑っている訳じゃないんだ。今のところは別にそう

特殊性癖っぽいものは無いようだけど、でももしかしたら、ほら、我慢してるかもしれないし、そういう事を知って理解して協力するのは恋人として当然というか、別に疑っているわけではなくて、」

「そう言えばこの前ジエレミアさんアーニヤをアーちゃんと呼んでたよ。かなり仲が良いみたいだね。もしかしたら成人しちゃったルルーシユよりあの位の若い年齢の女の子の方がタイプなんじゃ」

「いや違う。断じて違う。あれは皇宮の裏庭でジエレミアが始めたオレンジ栽培にアーニヤが興味を持って仲良くなっただけであって………というかそういう話止めろ、本当に止めろ、不安になって来るだろうが!!」

「あ、不安はあったんだ」

空になったカップをソーサーに置くとガチャンと音を立てて鳴った。歯ぎしりの音と震える指が陶器を弾く音が不吉に協調する。

「当たったり前だろう! あいつは私の愛人か遊び相手としか周囲に認識されて無いんだぞ、不安にもなる! アーニヤはまだ良いんだ。年齢が離れすぎているからな。それより社交界で良く見かける貴族の子女とか、若いメイドとか、いや、嫉妬する女はうざったいとは分かっているんだが、」

どうにも、と続けながらのこぎりで金属を切断するような歯ぎしりをかき鳴らす。

こうした女性としてみっともなく嫉妬する姿は絶対にジエレミアには見せないのだろうし、カッコつけたがりであるルルーシユの性格からしてカレンやシャーリー、C・Cなどの女性陣にもあまり見せていないのだろうとスザクには察せられた。

気の置けない間柄である自分が溜まった鬱憤のはけ口になっているのだろう。友人として頼ってくれていると思えば良い気がしなくも無いが、それ以上に良い迷惑である。

これが噂好き・恋愛話好きの女性陣であれば皇帝の年上の恋人への苛立ちやら嫉妬やらを聞いてきやあきやあと盛り上がったたりもするのだろうが、友人の恋愛事に一切の興味の無い自分は面倒だなあと思えない。そもそもいくらルルーシユが嫉妬しようともあの堅物

が浮気をする訳は無いのだから、これは果てしなく不毛な会話でしか無いのだ。面倒かつ非生産極まりない。

しかし自分の身代わりを務められる人物はリヴァルかシュナイゼル程度しかおらず、リヴァルは現在大学生であり、シュナイゼルの精神はまだ良くて小学生かそこらにまでしか成長していないためにこんな苦行を押し付けるのはあまりに気が引ける。

つまりこの砂糖を吐くような愚痴に耐え得る人材は広大なブリタニア領の中で自分しかないのだった。

大人しくスザクはずっと湯気の立つ日本茶を啜った。なんやかんやあったがルルーシユは親友だ。恋人への愚痴を聞く程度の事、お茶代と考えればどうと言うことも無い。

ルルーシユは歯ぎしりの合間に言葉を叩きつけるように重ね続けた。

「だから男は嫌うだろう嫉妬心を隠しながら周囲を牽制するために、態と露骨にあいつの部屋に寝泊まりしていたんだ。メイドだけではなく貴族の子女も噂には敏感だから、皇帝のお手付きだと知ればあいつを誘う女性は減るだろうと思つてな。現段階で私へ喧嘩を売るような真似をする馬鹿はそうはいないし、居たとしてもそんな馬鹿をあいつが相手にする訳が無い」

「お手付きって表現がなんだか間違つてるような……手を出されたつて方が正しいんじゃないかな」

「しかし噂が拡散する範囲が想定よりも広くて、市井にまで広がったんだ。しかもジェレミアを誘惑したら皇帝に抹殺されるという噂も広がりつつあって、その結果の12位だ」

「色々ツツコミたい事はあるけどとりあえず置いておいて、アンケートとは言え皇帝の愛人を夫にしたいだなんて書いて万が一にでも皇帝の不興を買うのは避けたらいいって事か。確かにそれなら納得だね。議会の設立もまだまだ計画段階で皇帝が絶対権力者である事に変わりはないんだから、その愛人と結婚したいだなんて無謀な」

「違う。あいつは愛人じゃない。恋人だ。愛人だとなんだか、こう、不誠実な関係に聞こえるだろう！」

頻繁に耳にする噂に余程腹を立てていたのかルルーシユは目をバネのように吊り上げた。

しかし多少皇帝の不興を買ったところで屁でも無いスザクは気にせず肩を竦める。この程度で遠慮しているようではそもそもルルーシユの友人なんて務まりはしない。それに今のルルーシユが苛立っているのは愛人としてか恋人を認識してくれない世間一般に対してであって、スザクという個人ではないことは重々に承知していた。

「いや、ジェレミアさんが君の愛人なのは事実だろう」

「だから、愛人じゃない！恋人だ！」

「困ってる時点で恋人じゃなくて愛人としてか言えないんじゃないかな」

「困ってる訳じゃない！ただ肉体関係はあるけど結婚する事ができなくて、表立って恋人だと言うことも出来なくて、申し訳無いから色々プレゼントしたり住居を用意しているというだけだ！」

「それを困ってるって言うんだよ」

悔しそうな顔で歯噛みするルルーシユに、そもそも、とため息もつかない息を吐く。

どうして恋愛経験が豊富でも無い、ようやく成人したばかりの自分がこんなアドバイスをしなければならぬのだろうかと頭痛が湧く思いだった。

だがここで無理やりにも会話を断ち切って帰ろうと思わない位には、この割れ鍋に綴じ蓋のカップルをそれなりに自分は好ましいように思っているのだろう。

この2人、そしてナナリーと初めて出会った6年前から何もかもが変質してしまい、多くのものを失った。世界は幼いスザクには想像も出来ない程に理不尽であり、非情だった。しかしこの2人を見ると、何も変わらない物はこの世界にも確かに存在すると信じられる。それが非常に貴重なものだという程度のことは理解出来ているつもりだった。

「愛人だつて言われたくないなら結婚すれば良いのに。それで変な噂も無くなるだろうし、身分的にも年齢的にも性別的にももう問題は無

い訳だから……僕としてはできればルルーシユが20歳になってから結婚して欲しいとは思うけど。一点賭けしちやったから」

「そう簡単には行かないんだよ。カレンが辞めた以上次のナイトオブワンが務まるのはジェレミア以外に居ない。だというのにこの上私と結婚して王配にしてしまうとあいつへの権力の集中が無視出来なくなる。ジェレミアが権力に溺れて馬鹿な真似をするとは思われない、もし馬鹿な真似をしたら私は躊躇なくあいつをナイトオブワンの座から強制的に蹴落とす心積もりではある。だが周囲はそうは思わないだろう。反対は必至だ」

「そう言えばマリアンヌ皇妃は皇妃になるためにナイトオブブラウズを辞めたんだっけ」

「そうだ。軍事的に大きな権限を持つナイトオブブラウズが皇妃や王配を兼ねるのは望ましくないから、慣例として選任騎士やナイトオブブラウズが皇族と婚姻する場合には騎士の職務を辞する事になっている」

慣例などこれまで散々鼻で嗤って叩き潰してきたルルーシユが無視出来ないというのならば、それなりに理屈の通っている慣例なのだろう。

確かに権力の集中というのはルルーシユの好むものではない。自分に集中するのならばともかく、他人に集中するのはそれがジェレミアであれ忌避するべきだと考えているのかもしれない。

しかしその慣例が長らくまかり通ってきているのならば、もしユーフェミアが生きている内に自分と結ばれて婚姻する事になったとしても騎士の座は返上しなければならなかったのかとスザクは思い、最初から茨の道だったのかと内心で呆れ声が湧いた。

騎士として愛するユフィをずっと護るというのは端から不可能なことだったのか。結婚や婿入り等という具体的なことを考える間もなく死別したためそういった面倒事に思い悩む暇も無く、気付くことさえ無かった。それどころか恋人だと口に出して言うことさえ叶わない、思えば短い恋と愛だった。

そう回想すると目の前で面倒事に悩まされているルルーシユが酷

く贅沢者に思えてくる。無論本人としては本気で悩んでいるのだろうし、皇帝として無視できない問題なのだろうが、自分からしてみればなんて些細な事だろうと思う。

死んだらお終いなものだから、後悔しないよう行動すれば良いだけだろうに。

「だったらジェレミアさん以外の人をナイトオブワンにしたらいんじゃないかな。ナイトオブワンと王配の兼業が難しいならせめてナイトオブツーと王配にすれば、」

「じゃあ聞くが、他に誰がナイトオブワンの候補に挙がるんだ。ナイトオブラウンズ12名が揃っていない皇帝なんてブリタニア史上では珍しくも無いが、ナイトオブワンが居ないというのは有り得ないぞ」

「……ジノとアーニヤは経験が足りなさ過ぎる上、ルルーシュ皇帝の部下として仕えた期間があまりに短すぎて不適格だろうね。シュナイゼル殿下はナイトオブゼロっていう例外措置を受けている上に、まだまだ精神的に幼過ぎる。カレンは文官に転向しちやったし。あとは……僕？」

「お前のようなメンタル不安定野郎をナイトオブワンになぞ出来るか。大体18歳が軍の最高権力者なんてあまりにも若過ぎるだろう。あと10年戦場を這い回ってようやく候補の一人と言ったところだぞ。有り得ないにも程がある」

「ルルーシュ、ついさっきまでナイトオブワンだった女性の年齢覚えてる？」

「カレンは良いんだ」

「本当にルルーシュってカレンのこと好きだよね」

「ああ、そうだな。彼女は良い女だ」

今や親友となった女性を思いルルーシュは息を吐く。

手放し難い部下を失ったが、友人としてのカレンはまだ繋がっている。何時か帰って来てくれると願いつつ、今は手持ちの部下で最善の状況を作らなければならない。

そう思うのならば自分の私情は後回しにして、最善の人材を適切な

地位に置くことが皇帝としての役目であることは間違いないのだった。王冠を賭けた恋を演じる程の余裕は今は無いだ。

「婚期が遠のくな……シユナイゼル兄上が元の精神年齢を取り戻したらさっさと譲位の準備をしなければ、このままでは妊娠適齢期を逃す可能性もあり得る」

「婚活に勤しむO.Lみたいな事言ってるね」

「その位切実なんだよ。それに早めに結婚しないと浮気の可能性も高まるし、もしシユナイゼル兄上が皇帝に成りたくないと言ったらどうなるのか……」

深々とした溜息は地の底に突き刺さりそうな勢いだった。珍しく本気で悩んでいるらしい。

政務に關しての事であれば徹底した情報収集と国家の優先順位に則った正確無比な決断を下す癖に、この友人はたまに変な事で悩む。

「反対されても押し切って結婚すれば良いじゃないか。皇帝なんだからその位権力でゴリ押しできるだろう」

「前例が無い。まず間違いなく多くの政務官が反対するだろう。皇宮には皇宮のルールがある。いかに皇帝とは言ってもルールを無視すれば誹りは免れん」

「ルールなんて壊せばいいじゃん」

鼻で嗤ってスザクは唇を吊り上げた。その顔にルルーシユは6年前の、悪戯を仕掛けてははしゃぐ悪童の姿を思い出した。つられてくしやりと口元が緩む。

スザクはこの数年で随分と大人びたが、今はその隙間から無邪気で我儘な子供という本質が見え隠れするようにもなった。幾多の血生臭い経験で一度は酷く荒んだ内面を、ユーフェミアという女性の記憶が強く補強しているのだった。

遠慮がちでクラスに馴染めないイレブンの少年はもう何処にも居ない。居るのは、皇帝にも臆せず意見を言い放つ怖いもの知らずの騎士だけだった。ルルーシユは苦笑いを零した。

「お前がそれを言うか……」

「色々とゼロから学ばせて貰ったからね。政治家も皇帝陛下も、もっ

とゼロみたいに頭を柔軟にするべきだよ。

大体絶対権力を持つてる皇帝って私欲を満たすために酒池肉林とか身内鬮肩とかするものなのに、ルルーシュは碌に休暇も取らないで仕事ばかり頑張っているじゃないか。多少ルールをぶち破って私利私欲のままに動いても文句を言われる筋合いなんて、有るかもしれないけどわざわざ耳を傾ける義理は無いだろう。それに世界を救った皇帝陛下が長年連れ添った騎士と結ばれるなんておめでたい事じゃないか。きつと君が思っているより反対は少ない。もし後から問題が起きたらそれは後から考えれば良いし、反対が出るようだったら僕が力尽くで黙らせてやるさ」

短絡的かつ楽観的だと自覚した上でスザクははつきりと言つてのけた。

これが自分のルルーシュの騎士としての役目なのかもしれないと臆気ながらスザクは思い至っていた。現実を見て慎重に考えるのはジエレミアと、そしてシュナイゼルの役目だろう。自らの信じる所へ向かい、恐れを知らぬ勇み足で居る事。それは他の騎士には出来ないスザクの役割だった。

ルルーシュもジエレミアも子供ではない。自分の行いには自分で責任を取れる程度には大人だ。ならば何も問題は無い。そしてこれから先も2人に付きまとう地位やら身分やらが色々と邪魔をするだろうが、彼らはそんなものに足を掬われるような素直な人間でないことは確信をもって保証できる。

つまりはルルーシュの背中をほんの少し押してやって、これまでナリーのためだけに揮ってきた公私混同お構いなしの全力パワーをほんの少し自分のために使わせてやれば良いだけだ。自分だけでは力不足だと言うのなら、ミレイやカレンを誘って波状攻撃を仕掛ければ良い。彼女達に弱いルルーシュは割と簡単に羽目を外すだろう。

そうなればもう何も問題は無い。何しろ慎重派であるシュナイゼルは現在精神的な幼児でありあと数年は反対意見を言える立場には無い。最後の扉はジエレミアだろうが、あの男は何の障害にもならない。

シャーリーが言っていたが、恋はパワーらしい。ならば羽目を外したルルーシュにジェレミア程度が勝てる訳が無いのだ。むしろあの男はルルーシュより先に恋に目が眩んでいてもおかしくは無く、もしかするとルルーシュより先に腹を括っているかもしれない。

「お前、かつこいいいな」

「ユフィとルルーシュの騎士だからね」

当然、とスザクは胸を張った。騎士章は胸に一番近い所に今も飾られている。

時計を見ると既に時刻は夜の8時を回っていた。皇帝と騎士の立場にあるとは言え妙齢の女性の部屋に長居をするのは良い事ではない。

何よりジェレミアが帰って来る時間が近づいて来ていた。2人の邪魔にはなりたく無い。それはルルーシュとジェレミアの為と言うより、自分の精神衛生のためだった。椅子を引いて席を立つ。

「もうこんな時間だし、失礼するよ」

「そうだな、もうこんな時間か。明日は頼む。コップはそのままが良い」

「じゃあお言葉に甘えて」

マントを羽織って背伸びをする。この重みにもそろそろ慣れた。

一言二言明日の式典に関して事務的な連絡を行った後に皇帝の私室らしい重厚な扉に手をかけた。皇帝の見送りを受けながらノブを握り、ふと思いついた言葉をスザクは口の端から零した。

「したいようにすればいいんだ。ナナリーだけじゃなく、君も。僕も好きにすると決めただから」

僅かに目を見開いたルルーシュを振り返り、後ろ手に扉を開ける。予想外の事を言われて返答に困っているのか唇を震わせるルルーシュへ曖昧な笑みを向けた。

自分でも深い意図があって発した言葉では無い。こんな状況で何か気の利くような事を言えるような性格では無く、思いついた事を口にしたただけだ。ただルルーシュはもうほんの少しだけ好きに生きて

も良いように思えた。

一步、ルルーシユの楽園から足を踏み出し、スザクは騎士らしく背筋を鉄筋のように伸ばした。

「では失礼致します、皇帝陛下。明日に備えてどうかお休み下さいませよう」

「——ああ、お前もな」

凜とした背中を見せて立ち去るスザクの背中を見送る。

定規で測ったようにその背中には真つすぐと歩き、揺るぎもしなかった。これから先もスザクの足取りに揺るぎは無いだろう。ああして真つすぐ生きることがスザクの好きに生きるといふ事ならば、それを否定する言葉を自分は持たない。

ただどんな生き方をしようともスザクは死ぬまで自分の親友であるだろう。

「ユファイが生きていればあいつは義弟だったのか」

ぞつとしない。ルルーシユは肩を竦めた。

枢木スザクは何を考え、何を望んでいたのか。

後年の歴史は、枢木スザクに対する評価を批判と擁護の2つに大きく分けている。彼の功績は著しいが、同時に非難されて当然の行動もまた多大に過ぎた。

ブリタニアに侵略された日本の返還を求めてブリタニア軍に入隊したというのに、黒の騎士団と敵対し合衆国日本建国の最大の障害となつて立ちはだかつたこと。

ユーフェミアの騎士となりながらも主君を護る事が叶わず、それどころか慈愛の姫と称された彼女の復讐のために大量殺戮兵器を無断で使用したこと。

ゼロであつたルルーシュと敵対関係にあつたにも関わらず、ルルーシュが皇帝に登極したと同時に彼女の麾下に加わつたこと。

激動の時代とはいえ、彼の所属の変遷と行動の奇異性は異様なものに映る。彼は当初日本返還のためブリタニア軍に所属したというのに、いつの間にかその目的さえ忘れていたらしい。合衆国日本建国後、彼が日本を顧みる言動をしたと示す歴史的資料は一つも無く、ブリタニアでの立身を果たした彼にとつて日本は捨てた故郷以上の意味を持っていなかったと評する論もある。

しかし彼を擁護する論も決して少なくは無い。

彼は軍人としては精神的にあまりに純粋であり、多くの戦場で殺人を繰り返す度に彼の精神には多大なる負荷がかかつていた。そのために日本奪還よりも戦争の終結を優先することが正しいと考え、当時テロリストと称されていた黒の騎士団と相対するしかなかったのだ。

現にルルーシュが皇帝の座についた後は忠実に彼女に仕え、一度も叛することは無かつた。これはゼロを辞め、テロという暴力行為に頼

らず皇帝として善政を敷くルルーシユを認めただためだと論ずる風潮もある。

いずれにせよ彼は強く平和を希求しながらも、平和を手に入れる才には恵まれず、また平和に生きる性質を持ち合わせていなかった事は後年の歴史研究者達の同意するところである。

皇帝ルルーシユのナイトオブツーンとなった彼はテロや暴動、反社会的勢力、犯罪組織鎮圧のために世界各地を飛び回った。彼はナイトオブワンと皇帝政務補助の役職を兼任したジェレミア・ゴットバルトや、文官に転向した紅月カレンとは比較にならない程に多くの戦場に赴き、多くの人間をその手で殺した。

そしてまたその手で守った人間の数も同様に膨大であった。

複雑な多面性を持つ枢木スザクは戦場でしか生きられず、そして戦場にしか彼の死に場所は無かった。

枢木スザクの葬儀は生前の偉大な功績に相応しく盛大であり、喪主は皇帝ルルーシユが直々に務めた。花に埋もれたスザクの遺体を前にした皇帝ルルーシユは、常の威厳が微塵も見られない気弱な少女のような表情をしていたという。

生前と同じ柔和な笑みを浮かべた遺体の手にルルーシユは剣と翼を模した騎士章を握らせた。

「——スザクは頑張ったから、怒らないであげてくれ。ユフィ、長い間ごめん」

この呟きを聞いたのはルルーシユの護衛として同席していたナイトオブワンのみであり、彼はこの皇帝の呟きを生涯誰にも告げること無く、歴史に残ることも無かった。

枢木スザクの墓所は生前の要望通りユーフェミア・リ・ブリタニアの墓所の隣に建てられた。

枢木スザクは自らの人生を他者へ赤裸々に語ることは生涯無かった。そのために彼が何を考えて戦い、何故敵対関係にあったゼロであるルルーシユに仕えたのか、後世には何も伝わっていない。

妻を持つ事も子供を儲ける事もせず、家庭の温もりから遠い所へ身を置き、ただ皇帝ルルーシユの下で戦いに身を投じ続けた日々はユーフェミアを護れなかった彼の贖罪であったのだろうか。

それとも彼は、ただ死を求めて戦場を彷徨っていたのだろうか。

それとも——彼の人生にとって、何かを護るための戦いこそが人生の意義であったのだろうか。

戦いだけが彼の安寧だったのか。

ルルーシユ皇帝の下で戦友と共に戦場を駆け抜けた日々は、彼にとって幸福と呼べるものだったのか。

事実を知る者は誰もおらず、全ては推測の域を出ない。

今はただ小さな墓石と、歴史の波が揺蕩うばかり。

枕元でけたたましく鳴り響くアラームをひっ叩いて黙らせる。時計は床に転がり落ちた。目を開くと朝日が網膜に突き刺さって地味に痛い。

皇帝の座に登極してから早半年が経つというのに、朝早い目覚めには一向に慣れる気配が無かった。

このまま再度柔らかいシーツの上に寝転がりたいたいという誘惑を引き剥がしつつ、ベッドの端で体を起こす。生来の低血圧のせいで寝起きは頭が回らない。ぼうつとした眼のまま部屋を見回すが、部屋には自分しか居なかった。昨夜一緒に眠った男はもう起きているのだろうか。

同じベッドで寝るようになってから初めて知ったが、ジェレミアは朝が早い。寝惚ける事も滅多に無く、低血圧の自分では考えられない程に朝から機敏に動く。規律に厳格であれと教え込まれた下士官時代の習慣が残っているのかもしれない。もしくは体内に目覚まし時計でも仕組まれているのだろうか。今度教えてもらおう。

こうしてお互いの知らなかった事を一つ一つ知っている事に変えていく日常は楽しい。終わりのない宝探しをしているにも似た胸の高鳴りを毎日感じる。

もう12年の付き合いになるのに、互いの知らない事は意外にも多くあった。お互い別に隠している訳でも無かったが主従や家族の距離感では気付かない事は意外にも多い。

引っぱたかれた衝撃で床に転がった時計を拾い上げると午前5時を回っていた。式典は9時から始まる。そう時間は無い。セミロングに伸びた髪を手で梳きながら寝室を出る。

寝室はリビングに繋がっている。ダイニングテーブルとソファ、ローテーブル等、一般家庭とそう変わりのないリビングはルルーシユの趣味に合ったものだった。一見するとアツシユフォードの生活とそのまま地続きになっているのではないかという錯覚さえ起こす内

装は和やかな空気に満ちている。

ソファに座るジェレミアは既に騎士服に着替えて端末を片手に今日のスケジュールを確認していた。

朝っぱらから礼服を隙なく着用しているジェレミアと比べ、主君であるこちらは素っ裸のままというのは聊かの羞恥心を煽ったが、そもそも脱がせたのはこいつだ。故にこいつが悪い。自分が恥ずかしい思いをするのは間違っている。

そう思い直してルルーシュは堂々と背筋を伸ばした。生憎と見られて恥ずかしがるようなスタイルはしていない。逆にジェレミアは見慣れている主君の裸体を前に顔を赤くして目を背けた。

「おはよう」

「お、おはようございます。朝食は食堂に運ばせますか？それともこちらで」

「ここで食べる。ジェレミア」

「は、はい」

「抱っこ」

「は、」

返事を言う前に裸のまま一度抱き着いて、よし、とすぐさまに離れてシャワーを浴びに向かう。

数秒の硬直の後に咲世子に朝食をリビングに運ぶよう指示するジェレミアの声が聞こえた。その声は何時よりも幾分か上ずっており思わず顔がにやける。もう一通りのことはやっているのに、年上の癖に、変な所で初心だからあの男は面白い。

シャワーを終えて、重苦しい皇帝服の上着とマントを外した格好に着替える。そのまま軽く化粧をして、ラフとは言えないが公に出るには聊か緩い恰好でリビングに戻るとダイニングテーブルの上には朝食が既に並んでいた。

朝食のメニューはアッシュフォードに居た頃から変わらない普通の家庭のようなものが並ぶ。皇帝となった当初は食べきれない程の豪華な食事が朝っぱらから並んでいたが、シェフに平凡な家庭と同じものを頼んでからはごくごく普通の朝食が並ぶようになった。

ありとあらゆることが良くも悪くも変わってしまったけれど、変わらないものが幾つかあって欲しいと思う。このリビングにしたって一般家庭に近い内装に作り替えたのはそういった自身の生ぬるい感傷から来る我儘だった。

二度とあの日々に戻ることは無いと知っていながらも、捨てきれない弱さが自身の中でじくじくと膿を吐いている。半年経っても未だにナナリー、ナナリーと弱弱しく泣き叫ぶ自分が体の内側で縮こまっているのだ。この部屋も、朝食も、そんな自分への慰めだった。

皇帝としては脆弱過ぎる精神なのだろうとは思うが、愛する妹と共に過ごした生活を平然と忘れてしまう人間になりたくはない。そんな機械のような人間が皇帝に相応しいとも思えない。

故にこの部屋の内側だけがただのルルーシユの領域だった。部屋の外では皇帝ルルーシユで居なくてはならない。昨晚部屋を訪れたスザクも気づいていただろうが、この部屋はアッシュフォードという懐かしい楽園を思い出す縁だった。何時か全てが思い出になるまでこの部屋はこのまま有り続けるだろう。

ジェレミアと並んで朝食を食べる。テレビを点けると今日の式典についてニュースキャスターが澆漑とした声で解説していた。ニュースキャスターは金髪碧眼の笑顔が眩しい見慣れた美女であった。学生だった頃とはまた種類の違う笑みはどことなく大人びた色がある。釣られて笑みが零れた。元氣そうで何より。

「そう言えばアッシュフォード令嬢から皇帝にインタビューをさせて貰いたいという要請があつたとディートハルトから連絡がありましたね」

「ミレイなら別に良い。許可を出しておけ。日程は任せる」

「イエス、ユアマジエステイ」

「それとその醤油取ってくれ」

「イエス、ユアマジエステイ」

「ん、ありがとう」

醤油を受け取りながらも視線はテレビに向かう。

式典についての話題が終わると、野球の試合結果、ブリタニア地方

都市で開催された祭り、有名女優の不倫発覚、ゲリラ豪雨への注意喚起と節操無くニュースが移り変わる。暗いニュースはそう多くは無い。半年前の大災害の余波は未だ深い爪痕を世界中に残しているが、ようやく終息が見えて来た。

ラグナレクの計画が失敗に終わり、現実世界に戻った直後の忙しさを思い出すと未だに頭痛と胃痛で悶える。Cの世界ではリアンヌに物理的に殺されかけたが、現実世界では過労のせいで何度か死の深淵を垣間見た。

こうして和やかに朝食を食べる時間が取れるようになったのも実は最近のことだった。つい最近までは官僚やナイトオブラウンズと席を同じくして書類と睨み合いながらパンを口に押し込む日々だった。

まだまだ仕事は山積みだが、ようやく一段落したと言って良いだろう。

朝食を食べ終えてぼんやりとニュースを流し見るルルーシュの前にジェレミアは湯気の立つ紅茶を差し出した。水面にはオレンジの薄切りが浮かんでいる。

カップを掴まんで鮮やかな紅色に染まった液体を口に含む。温度も濃さも精密に計算されていて、朝食の余韻を良い具合に消し去り胸元がほんわりと温まった。芳醇なオレンジの香りが口の中いっぱい膨らんで小気味よく鼻から抜ける。

プロ顔負けの腕に思わず笑みが込み上がった。シャーリーが淹れた紅茶よりずっと美味しい。メイドより紅茶を淹れるのが上手い騎士とはどういう事なのだろうか。

「お前紅茶を淹れるのが上手いよな。誰に習ったんだ？」

「篠崎メイド長に空き時間を見て教わっていたんです。ようやく免許皆伝を許されました、これだけはそこのメイド以上だと自負しております。ルルーシュ様にご指摘されてから9年も経ちましたので」

嬉し気に胸を反らすジェレミアに何を言っているのかと首を傾げるが、思い当たる所があり、あ、と声を上げた。

まだ9歳の子供だった時、ジェレミアより自分の方が紅茶を淹れる

のが上手いと言ったことがあった。事実そうだった。家にメイドを住まわせる余裕のある貴族のお坊ちゃんやんが紅茶の淹れ方なんて知っている筈が無い。そういえばその時、こいつは上手く紅茶を淹れられるように努力すると情けない顔で言っていたような気がする。

暫くの間ぱちくりと目を見開いていたルルーシユは、片手で紅茶のカップを掴まんだまま胸奥から沸き起こる笑みを耐える事無く声に出した。いきなり笑い出した皇帝にジェレミアは訳も分からずに目を瞬かせる。その仕草が滑稽でまた笑みを誘った。

こいつはそういう奴だった。小さく零れ落ちた大事なものを一つ一つ拾って、目の前に翳してくれるような奴だった。

その度に自分は、無くさなくてよかったと涙を零しながら、落としたものを拾うのだった。

「ジェレミア」

「は、」

「ありがとう。好きだよ。愛してる」

いきなり上機嫌になったルルーシユの告白にジェレミアは顔を真っ赤に染めて、え、あ、はあ、と纏まりの無い声を上げながら後ずさった。

落ち着きの無い挙動に笑みを深めて、カップをソーサーに置いて立ち上がる。時刻は午前6時。式典開始までにいろいろと準備があり、あまり余裕は無い。

「そろそろ時間だ、行こうか」

「あ、は、はあ、あの、」

「ん？」

「ルルーシユ様、私も、私も愛していますよ」

「知ってる」

「ルルーシユ様が思っているよりもずっと深く、愛しています」

「うん」

自然と顔が笑みを作る。

何も変わらないものは確かに存在する。そして他者と完璧に理解し合うことが出来ないという事実は、決して、決して悪い事ではない。

目の前の男がその証拠だった。

現に今、張り裂けそうになる程に嬉しい。重ねた手は自分の手よりずっと熱い。



式典はペンドラゴンの街中に座している巨大なドームで開催された。

規模こそ比較にならない程に大きいものの、どこか行政特区日本の開会式典を思わせる施設は色とりどりの国旗が幾十と飾られている。行政特区日本を知らないジエレミアだが、テロを警戒してドーム内への一般市民の参加を制限したため会場付近にたむろする市民の盛り上がり活気に期待を感じた。

耳を澄ませば声高にルルーシユ皇帝の名前を叫ぶ声があり、小さく皇帝への不満や疑惑を口にする声があり。2種類の意見が入り混じり何かしら革新的な事を始める予兆となって胸を躍らせる空気を作り出している。

皇帝への不満を口にする市民が存在する事はそう悪い事では無いと思う。全国民が何の不満も感じず幸福に暮らせる政治というのは理想であるが、決して理想の域を出ない夢物語でしか無いものだ。

最も悪いのは不満があるのに口に出来ない事だろう。不満を口にすると言うことは、つまり市民は皇帝陛下に聞く耳があると分かっ

いるのだろうか。前皇帝シャルルの御世においては皇帝への非難を口にする事さえ憚られていたことを考えればルルーシユ皇帝の治世の方が遙かにマシであることは言うに及ばない。

ルルーシユの手により開催された初の国際式典における警備の統括には現ナイトオブワンの紅月カレンが任じられた。ナイトオブワンを辞する予定のカレンにとってはこの式典の警備が最後の大事な仕事となるだろう。

そのためジェレミアは開会式における皇帝陛下の身辺護衛にナイトオブワンを置くようルルーシユに直訴し、自身は会場警備の纏め役を買って出たのだった。警備統括ともなれば式典の最中は忙し過ぎてルルーシユの傍には碌にいられない。だが開会式の身辺護衛を兼ねていれば、少なくとも開会式中はルルーシユの傍に居られる。

一時的とはいえ皇帝親衛隊隊長としての座を譲る形になったが、おふぎけとは言え三人官女 *with B* だと誓い合ったのに一人抜け駆けした自覚はある。その借りを思えばこの程度と言うことは無い。

一定の間隔を置いて立つ警備兵の横を通り過ぎながらナイトオブワウンズの騎士服を探す。

会場内は外程に騒々しくはないが、次々に入場する民族衣装を着た国賓と彼らを取り巻く警備で色彩の渦が巻き起こっていた。突き抜ける青い空と足元に広がる赤い絨毯も相まって、目に映る景色は絵の具を全色混ぜ合わせてラメをぶち込んだようであり、目に鮮やか過ぎてちかちかする。

瞬きを繰り返しながら周囲を見渡す。予定されている参加者の数はそう多くは無いが、各国の代表が多く招かれているため警備状況はこの上なく厳戒態勢を敷かれていた。和やかに談笑を楽しんでいる参加者達を他所に警備兵の雰囲気は凍り付いた湖面のように張り詰めている。

ジェレミアは会場警備を担当しているナイトオブスリーとナイトオブシックスを式会場の隅に見つけて足を向けた。若年の騎士2人は周囲の張り詰めた空気を他所に何やらぶつぶつと顔を突き合わ

せて喋っている。アーニヤは普段と同じく呆れの僅かに滲む無表情を浮かべていたが、ジノの方は酷く深刻そうに眉根を顰めていた。

年齢不相応に仕事が出来る2人であるが思考回路は年相応に無邪気だ。特に陽気な性格であるジノの方はおふぎけが過ぎる事が多々ある。近寄って耳を澄ますと予想通りと言うべきか、仕事とは全く関係が無い会話が交わされていた。

「ヤバい、年齢差の大きいカップルはさっさと別れると踏んでいたのに予想が甘かった。せめて3年以内に別れるって賭けておけばまだ可能性があつたのに、俺の家賃1カ月分が……っ」

「ジノは詰めが甘い……男が浮気しても我慢強い性格の女だったら数年は耐える。オレンジが浮気しても陛下なら3年は我慢すると予想するのが定石」

「くっそ、やっぱスザクのアドバイス聞いとくべきだったなあ。でも絶つ対篠崎メイド長かヴィレッツタ卿と浮気してると思ったのにあの堅物オレンジは……スタイルで言えば陛下よりヴィレッツタ卿の方がずうっと豊満だつてのに」

「顔は陛下の方が上」

「顔はそりゃあな。でも陛下ってプライド高すぎて付き合うとなると面倒くさそうだし、ヴィレッツタ卿だつてかなり美人なんだからスタイルと容姿と性格を総合して考えると俺はヴィレッツタ卿の方が」

「……………何を話している、仕事次第ぞ。そして私は浮気をした事は無いしこれからもしない」

口を挟んできたジェレミアにようやく気付くと、若い騎士2人は悪びれもせず視線を向けて「あ、オレンジ」と声を被らせた。頬が引き攣る。人の事を何だと思っている。

「誰がオレンジだ。人に変な呼称を付けるのは止めたまえよ」

「だあつて皇室の庭でオレンジ栽培を始めるっていう狂気の沙汰をやらかしたんですから。ニックネームにもなりますよ」

「あれはルルーシュ様が皇室の花園を見て、食べられない花ばかり植えるより果実を付ける物を植えた方が有用じゃないかと言ったから始めたまでだ」

「そこでオレンジをチョイスするセンスが微妙。普通はプチトマトとかハーブとかもつと手頃な物にする。オレンジじゃ結実するまで2年はかかる」

「ぐ、」

マリアンヌが体から出て行ったことでそれなりに情緒が豊かになったアーニヤは、無表情ではあるがオレンジの世話をそれなりに楽しんで行っている節があった。貴族出身の彼女は植物の世話など初めてなのだろう。土で指が汚れるのも厭わずに雑草を取る姿は年相応の少女としての感性を懸命に取り戻そうとしているようにも見えた。

しかしそれと何故オレンジ栽培を、という疑惑はまた別らしい。そう言われるとジエレミアも返答に詰まる。

妊娠したらすっぱいものが食べたくなると聞く。だから数年の内に入用になるかもしれないから、という邪心をこの場で口にするほどジエレミアの神経は凶太くは無かった。

オレンジが結実する頃には。一人拳を握り締めた所にジノの言葉が容赦なく突き刺さった。

「そもそもそんなに悠長に構えていると結実する前に飽きられて陛下と別れてるって事もあり得ますよ。10代後半女子の恋人なんて毎シーズンごとに変わって当然なんですから。幾ら陛下でも、いや、引く手数多な陛下だからこそ搔つ攫われないよう油断は禁物ですよ」

「……それは身を以って学んだ知識かなヴァインベルグ卿？」

「それはもう。社交界のお姉さま方にはたつきさん学ばせて貰いましたから」

唇を両頬へたくし上げたジノは火遊びを十分に堪能してきた若者特有の雰囲気纏わせていた。どことなく軽く、視線が年齢の割に落ち着き過ぎている。ジエレミアより10も年下だというのに女性の扱い方を既に心得ているかのような慣れは世慣れぬ少女の眼には大人びた魅力に映るのかもしれないが、年上の男にとっては眉根を顰める類の物だった。

これでジノの女性のタイプが大人しい令嬢であれば何も問題は無

い。だが現在ジノが狙っている女性は令嬢と形容できる範疇には無いことは明らかであり、むしろ深窓の令嬢のように扱えば鉄拳が飛んでくる事は想像に難く無かった。

少なくともカレンの趣味はジノのような手慣れている雰囲気の、悪く言えば軽薄な男ではあるまい。むしろその対極の筈だ。そして多少表面を取り繕った程度でジノの軽薄さを聡明なカレンが見抜けないとも思えなかった。

「そんな考え方では紅月に相手にもされんぞ。彼女は割と潔癖な所がある。気分を害するかもしれないが、ヴァインベルグ卿では言い寄ったが挙句機嫌を損ねて首の骨をへし折られてもおかしく無いぞ」

「カレンは本命ですからそりゃあ紳士に！誠つ実にお付き合いを申し込めますよ！ほら、意外に俺って本命の女の子には一途ですからね！」

「自分の事を『意外に一途』と言っている時点で信憑性も何も無い」「全くだ」

冷やかな瞳で見下され膨らませるジノを他所に、懐から端末を取り出す。時間に余裕が無い訳では無いがこうして雑談をする理由も無い。

2人はジェレミアが端末を取り出すなり表情を一変して騎士に相応しい凛々しいものへと変えた。この2人は騎士の名に相応しく仕事は出来るのである。

端末に式典会場の警備状況を映し出す。それぞれの任務内容を確認しながら3人で頭を突き合わせて、開場してから何かイレギュラーが起こってはいないか相互に報告を行う。

とは言っても当初の予定通りスムーズに進んでいるのでそう確認し合うことも無い。警備状況も問題なく、順調に国賓も入場して来ている。ジノとアーニヤの報告は淡々としたものだった。

「会場内は既に厳戒態勢を敷いています。出入りしている車も全て問題なし。会場からは爆発物や毒物等も一切発見されませんでした。会場外で不審な行動をしている奴も今の所は見当たりません」

「要人も問題なく到着している。銃火器、爆発物の持ち込みは無し。」

自衛のために拳銃を持ち込もうとした奴が居たけど取り上げといた」
「宜しい。皇帝陛下の警備も特に異常なし。今は紅月卿が護衛を担当している。また現在、皇帝陛下は日本代表として来場された皇神楽耶殿及び藤堂幕僚長と謁見されている」

「スザクは？」

「何か問題が起こればランスロットアルビオンで急襲出来るよう予備兵力として控えている。異常無しと先ほど報告があった」

「予備兵力が最強過ぎるでしょう」

「問題が起きたら要人ごと抹殺されかねない。人選が間違っていると
言わざるを得ない」

「それを防ぐのが要人警護を担当するお前達の仕事なんだが」

「KMFが無い状況でそれは無謀。命が幾つあっても足りない」

「右に同じ。自殺行為ですよ」

左右からサラウンドのように上がる非難の声にジェレミアも内心で同意した。

戦力としては十分以上の信頼があるものの、自制心という面におけるスザクへの信頼は限りなく薄い。プライベートではそれなりに友人として付き合っているようだが仕事においてはまた別ということなのだろう。つくづくと子供らしくない2人だと思う。仕事をし易いのは有難いが。

上空でひゅるる、ドン、という音が鳴って反射的に首を向けると花火が打ちあがっていた。ニーナが手すさびに作った火薬を使った花火が色とりどりの光を空中に投げかけている。日が昇りかけている途中の時間帯だというのに花火は鮮明に空を照らした。

次々に様々な形をした花火が上がり、その度に歓声が会場のあちこちから上がる。鮮やかな花火は来場した人々への歓迎の証であると同時に、直に開会式が開幕する合図でもあった。開会式が始まるまであまり時間は無い。

ジェレミアと同様に花火が打ち上がる音に反応して即座に空を見上げた2人だが、それがテロから放たれた砲弾の音では無いと分かるなり視線を戻した。

「ラグナレク前よりはマシになったけど、それでもスザクは独断専行が過ぎる。自分勝手な正義感で突っ走った尻拭いをするのはゴメン」
「そもそも予備兵力として控えるのは咲世子さんだけでスザクは皇帝陛下付きじゃなかったですっけ。日本の姫がスザクの従妹で、久しぶりに会う機会が来たんだからって陛下が御配慮なさったと聞いたんですけど」

「それが今日になってスザクが予備兵力へ配置換えを希望したらしい。万が一に備えてと言っていたが、恐らくは皇殿と顔を合わせ辛いのだと、」

「おいそのオレンジ」

背後から声を掛けられて振り向くと、何時もの皇帝側近としての衣装を纏ったC・C・Cがこちらに向かつて歩いて来ていた。特に今日仕事割り振られていた訳でも無いため式典の見物にでも来たのだろう。

しかし見物に來ただけにしては余りに大きなボストンバッグを抱えている。これから長旅にでも向かうかのような荷物は黒を基調とした皺一つない皇帝側近の衣装とあまりに合わない。しかしその事に違和感を覚える余裕がその場の面々には無かった。

C・C・Cのトレードマークとも言える神秘的な翠の髪が、首元の辺りでバツサリと切られていたのだ。

体に纏わりつくようだった髪は無く、短くなった髪の先端は自由につんつんと四方へ跳ねて新緑から零れた雫のように輝いていた。元から翠という珍しい色をしていたが今は陽光を反射してさらに幾つもの複雑な色を映している。

ジェレミアだけでなくC・C・Cの姿に気付いたジノとアーニヤも近づいて来るミディアムヘアの美女が誰かと一瞬いぶかしみ、それがC・C・Cだと気付いて茫然と口を開いて目を点にした。彼らの心情がジェレミアにはよく理解できた。

ただ単に髪が短くなったというだけではない。不遜な笑みを浮かべる表情も猫のようになりくりとした琥珀色の瞳も変わらないが、重苦しく纏わりついていた髪が切り落とされ浮世離れしたC・C・Cの

雰囲気は一気に現実味を帯びていた。絵画の中で動いていた女性が現実に飛び出してきたかのような衝撃がその場の面々を容赦無く襲った。

目の前のC・C・はしっかりと地面を踏みしめて歩いていた。髪が短くなつた分、前を向いている琥珀色の瞳が良く見える。

驚愕で震える指先で短くなつた髪を指さす。C・C・はふふんと髪を掻き上げた。

「お、おい、貴様、髪を切ったのか」

「鬱陶しかったからな。動くのにも邪魔だしバツサリ切つたんだ。似合うだろう」

似合わないとは言わせない口調は流石のC・C・であり、そして確かに随分と陽気に跳ねている髪はよく似合っていたためジェレミアは素直に肯首した。その様子に満足したのかC・C・は胸を張って抱えていた巨大なボストンバッグをジェレミアに渡す。バッグは見た目通りの重量があつたもののジェレミアにとってはそう重いものでは無い。

よろめきもせずにはバッグを受け取つたジェレミアへC・C・はよく通る声で言い放つた。

「この式典が終わつたら旅に出ることにしたんだ。だからルルーシュに最後の挨拶でもしておこうと思つてな」

「……はあ!？」

腕を組んで見上げてくるC・C・は不遜な笑みを浮かべたままだ。何時旅に出るのか、何処へ、そもそもこの華奢な体でどうやってこのバッグを持つて来たのかと疑問は尽きない。

だが今の一番の問題はC・C・の発言にあつた。C・C・はブリタニア政府において特段重職にある訳でも無い。だがルルーシュにとってC・C・は大事な共犯者であり確固とした信頼関係にある女性の筈だ。そんな彼女が居なくなるなど、と思ひ、もう2人の共犯関係は解消されたのだとジェレミアは察した。

ルルーシュは復讐のため、C・C・はコードを消失させるための共犯関係だつた。そして互いの目的は完璧に達せられたのだ。最早2

人を繋ぎとめる理由は無く、そして人間に戻ったC・C。がどこに行こうともそれは彼女の自由だった。

五百年に渡る苦悩と孤独を経た人間の心情というものをジェレミアは理解し得ないが、自らの主君がようやく人間としての自由を獲得したC・C。を無理に皇宮の中に押し留めておくような人間でないことは理解できる。気まぐれなC・C。が人間に戻ってから半年もの期間を狭い皇宮の内に留まっていた事の方が余程驚愕に値する事だったのかもしれない。

「……そうか、旅か。一体何処に向かうんだ」

「まずはE・U。だな。それからインドに行つて、中華連邦を目指す。日本に行つてもいいな。あちこちを回つて、まあその後の事は気楽に考えるさ。トトカルチョのおかげで資金はたんまり稼げたから暫くは高等遊民を気取る予定だ」

「トトカルチョ?」

「お前は気にするな。ほらさっさとルルーシュの所へ連れていけ。バッグに傷は付けるなよ」

いつの間にか自分が運ぶ事になっているらしいボストンバッグを片手に眉根を顰める。

今ルルーシュは神楽耶と藤堂と謁見の最中だろう。早めに終わっていたとしても直ぐに開会式が始まる。そもそも国賓との謁見最中に知った仲とは言えC・C。を割り込ませるのは失礼にあたるように思われた。

「……今すぐには無理だ。各国代表との挨拶が終わり、その後開会式でのルルーシュ陛下の演説が終わった後ならば多少は時間が取れるかもしれないが」

「今すぐ捻じ込め」

「無茶を言うな」

「お前は私に貸しがあったらどう?」

びつとC・C。はジェレミアの前に3本の指を突き出した。言葉に合わせて一本一本を拳の中に捻じ込んでいく。その度にジェレミアの額から冷汗が落ちた。

「一つ、お前が頭の中身すつからかんのオレンジだった時にナリタ連山でゼロを射殺しようとしたが、私が庇って代わりに撃たれた。一つ、ブラツクリベリオンの時に私はお前に銃弾でミンチにされた。一つ、Cの世界でお前は死んでもいいからルルーシュにコードを渡せと私に脅迫した。この借りを返す甲斐性も無い男がルルーシュに相応しいと言えるのかな?」

「……その、申し訳無かった」

「謝罪は要らんからさっさと案内しろ」

無然とした表情を浮かべている自覚がある。仕事に私情を持ち込むのは本意ではないが流石にこれまで3回殺しかけた、内2回は実際に殺した事実を詰め寄られると無下に扱う事も出来ない。

国賓と謁見しているとと言っても、相手は藤堂と神楽耶であり知らない仲ではない。C・C.の性格を知っている2人でもあり、突如乱入して来てもそう文句は出ないだろう。溜息を吐いて端末を取り出した。

「待っている、紅月に聞いてみる」

「移動しながらな」

既に許可を得られる事を前提とした物言いに溜息を吐くがC・C.の足はその程度では止まらない。ジノとアーニャに何かあれば無線で連絡するようにと命じると2人は未だに視線をC・C.の髪に固定したまま頷いた。

前を歩くC・C.の後をバッグを持ちながら追い、片手ではカレンに繋がる無線を耳に押し当てて。コールしてから3秒で繋がった。聞き慣れた明るい声が無線越しに鼓膜を震わせる。

『こちら紅月。何か問題でも』

「こちらジェレミア。C・C.が皇帝陛下への謁見を申し入れてきたのだが、皇殿との謁見はどうなっている」

『C・C.が?今は神楽耶様と藤堂さんと一緒に話してるけど別にC・C.なら大丈夫なんじゃない?一応皇帝陛下にお伝えはしてるけど』

「分かった。では皇帝陛下にこれからC・C.を連れて戻るとご連絡

を。難しいとの事であればすぐに連絡を頼む」
『了解』

はつきりとした小気味よい返事と共に切れた無線を仕舞って、先を歩くC・C・Cを溜息を吐きながら追いかけた。C・C・Cの足取りはこの上無く颯爽としている。

部屋の外で歩哨に立っていたヴィレッタはジェレミアとC・Cの姿を認めて扉を開けた。

ブリタニア皇帝の控室は一面に毛の長い絨毯が敷かれ、新たに制定されたブリタニア国旗が壁に掲げられていた。随分とシンプルなデザインに変更となった国旗は目にする機会の多いジェレミアにもまだ慣れないものだったが、この会場にはあちこちにこの新しい国旗が飾られているため今日一日で随分と見慣れる事になるだろう。部屋の中には他にソファアールとローテーブルしか置かれていないが、一級品だと一目で見て分かる色と艶をしている。

部屋の中心に据えられたソファには神楽耶、そしてその反対側にルーシユが腰かけていた。神楽耶の後ろには藤堂がまるで警備兵のように立っている。神楽耶は扉から入ってきた美女を見るなりぱつと顔を輝かせた。

「あら、お久しぶりですわC・C・Cさん。髪をお切りになられたんですか？お似合いですわよ」

「神楽耶か。少し大きくなつたか？」

「成長期ですもの。まだまだ大きくなりますわ」

うふふと優雅に笑う神楽耶は可愛らしいのだろうか、C・Cの従者のようにポストンバッグを片手に扉から入ったジェレミアの視線は部屋の隅でカレンに羽交い絞めにされるスザクに釘付けになっていた。

スザクの背中にはカレンの豊かな胸が押し付けられているが、押し付けている方も押し付けられている方も欠片も気にしている様子が無い。年長者として紅月をはしたないと諫めるべきなのか、それとも

見て見ぬ振りをすべきか悩んでいる間にもスザクの首はぎりぎりと悲鳴を上げていた。

「カレン、離して、も、もう逃げないから、」

「あんた自分の発言には欠片も信憑性が無いっていい加減認識したらどうなの？それとも今更あんたの言う事を信じる程あたしが馬鹿だつて思ってるわけ？」

「地味にひどい、いや、ちよ、首、首が、タツプタツプ！レフェリー！レフェリー！」

「逃げないようしつかり地面に縫い付けておけよカレン」

「イエス、ユアマジエステイ！」

「ル、ルルーシユうううううううう」

ふかふかの絨毯に押さえつけられながらもがくナイトオブセブンを見降ろしてジェレミアは見て見ぬ振りをすることに決めた。指摘した瞬間にスザクの意識はカレンの手によってCの世界に還るだろう。流星にそれは忍びない。あまりカレンを刺激しないよう足音を殺しながらルルーシユの傍へと移動した。

「陛下、あれは」

「カレンが無理やり連れて来たんだ。元々あいつは護衛役だった筈なのにいきなり職務放棄して予備兵力として引き籠った訳だからな。カレンは真面目だから納得が行かなかつたんだろう。あと、」

「あと？」

「神楽耶がスザクに婚約の請願を出してきたから、断るにしても受けるにしても逃げずに誠実にしろと」

「ああ……………」

ルルーシユが女と知られた今、神楽耶が望んだルルーシユとの婚姻の夢は儚く露と消えた。

ならばと神楽耶が次に狙うとすれば日本国内の有力者か、元々婚約者であった枢木スザクであろう。あとは年齢も近くブリタニアの権力の中枢に在るジノも候補に挙がるかもしれないが、やはり外国人となるとハードルが高い。相手がブリタニア皇帝ともなれば話は別なのだろうが、古い血を継いでいる皇家当主としては出来れば日本の血

を守りたい筈だ。

だとすると日本人でありながらナイトオブブラウンスまで立身し、皇帝陛下の親友でもある枢木スザクに白羽の矢が突き刺さってもそう可笑しいことでは無い。

「私としてはヴァインベルグ卿やジェレミア卿でも良かったのですけれど、馬に蹴られる趣味はありませんもの。妥協の末の苦肉の決断ですわ」

「御冗談を」

ジェレミアの思考を読んだのか日本人形めいた可愛らしさを誇る神楽耶がくるとこちらを向き半ば反射的に首を横に振った。年端も行かない少女が吐くにはキツイ冗談だ。

あまりに必死な様子が可笑しかったのか神楽耶は優雅に笑みを浮かべてコロコロと笑い声を上げる。その仕草にはルルーシュとはまた違う慎み深い気品が詰まっているように見えた。

「ええ、冗談です。初恋の君であらせられる皇帝陛下を哀しませるような事は致しませんわよ」

「それでも断りますよ。幾ら皇殿でもジェレミアは婿に出すには惜しい人材ですからね……しかしだからと言ってあれを希望するとは」「私の希望ではありません。他のキョウト六家からの有難い助言を聞いたという体裁を整えるがためですよ。16歳になった途端に余計な助言を寄越す輩が増えたもので……失礼、つまり今日はあくまで陛下の理念に共感した国を代表する立場の一人として参ったのです。婚約などおまけの用事に過ぎません」

あれ、と指さされたスザクは「僕の方からお断りだよ……」と呟きカレンにヘッドロックを決められていた。

「ちよ、カレン、ギブギブギブ！」

「あんだ女の子になんて事言うのよ!!断るにしても言い方ってもんがあるでしょ!!」

「いやそもそも僕が妥協だの苦渋の決断だのと言われて……」

段々と声が小さくなるスザクはカレンの腕に指をかけて振りほどこうと身を蠢かせている。しかしマウントを取ったカレンを振りほ

どくとなるとそれ相応の筋力を必要とし、スザクが全力で身を震わせると近くに座っている皇帝にも害が及ぶ可能性があった。

地べたへ虫のように張り付けられるスザクへC・C・Cが溜息を零す。

「それが婚約を望まれた男の態度か情けない。せめてきちんと立って挨拶をしたらどうだ」

「出来たらやって、痛い痛い、いや、背骨、背骨がみしみしつと今、「ええ全くよC・C・C……え、C・C・C？」

C・C・Cの短く切りそろえられた髪にようやく気付いたカレンの全身は硬直し、鍛えられた腕から解放されたスザクの体が地面に落ちた。庇護を求めてルルーシュに這い寄るスザクを他所にカレンの視線はC・C・Cの短い髪に注がれていた。照明を反射してC・C・Cの髪は自由気ままに跳ねている。カレンはぼかんと口を開けてあわわわとC・C・Cの頭を指差さした。

「し、しししC・C・C!?!あんだ、か、髪、髪が!!」

「五月蠅いぞカレン。この程度の事で一々取り乱すな」

「で、でも、でもあんた髪がばつさり!ちよ、ばつさり!!」

急いで駆け寄り指先で短いC・C・Cの髪を撫でながらカレンは驚愕の面持ちのまま瞬きを繰り返した。別人のように雰囲気を一変させたC・C・Cの姿はあまりに眩し過ぎた。

「い、いきなりこんなに切るなんて……ギリギリギリミディアムヘア位の長さじゃない、ロングからここまで切るだなんて……あんた失恋でもしたの?」

「的外れでは無いが、それ以外の理由の方が強い」

ふふんとC・C・Cは不遜に笑う。髪が短くなるうともC・C・Cの態度は一分たりとも変わらなかった。

「私は旅に出ることに決めた。この方が歩きやすいんだよ。それだけさ」

あっさりとした返事にカレンは一瞬きよとんとした顔でC・C・Cの顔を凝視した。言葉を咀嚼するように俯く。暫くの後に口を閉じて「そうなの」とぼつりと呟いた。

長い付き合いとは言えないが黒の騎士団時代からなんやかんやと言葉を交わしている2人だ。ジェレミアには理解し得ない所でカレンはC・C・の言葉を消化したようだった。

猫を被ったカレンの髪型と少し似ているように見えるC・C・の髪の端をカレンの指が梳く。翠の髪は若葉のようにはらはらと指の間から零れ落ちた。

「ま、この方が楽よね。似合ってるし」

「当然だ。私はC・C・だぞ」

「知ってる」

「ではこれは知っているか？」

茶目つ気を交えた笑みを浮かべたC・C・は「——」と告げた。よく通る声はジェレミアの耳にも聞こえた。人名のようだが知っている名前ではない。しかし美しい響きをしていた。

その名を聞いたルルーシュが少し驚いた顔をしたが、どこか納得した顔をしてC・C・の軽くなった髪を見やった。

「何？」

「名前だ」

「誰の？」

「私の」

もうルルーシュにはこの名前で戸籍を作らせたとC・C・は笑った。これまでのC・C・を知る者から見れば驚くほどに晴れやかな笑みだった。

神楽耶とカレンは並んで口の中で何度か「——」と呟き、同時に嘔き出した。

「あんたにはあんまりに綺麗な名前過ぎるのになんか似合うわね。不思議」

「美しいお名前ですこと。美しいC・C・さんにぴったりですわ。これからはそちらの名前で呼びびしても？」

「好きにしろ。しかし発音を間違えるなよ。ルルーシュは未だにちゃんとした発音で呼んでくれないんだからな」

「しようがないだろう、まだ俺も呼び慣れないんだから。暫くすれば

正確に発音出来るようになるさ……旅に出るのか?」

「ああ」

「そうか」

2人の関係を知る者にはその返事はあまりにそっけないもののように聞こえた。しかしジェレミアの知らないところでルルーシュはこの時が来ることを疾うに予見していたのだろう。「寂しくなるな」と呟いたルルーシュはC・C.の背中を柔らかく叩いた。

ルルーシュとC・C.が揃って立つ姿は一幅の絵のようだった。視線を合わせる2人がこれから離れ離れになるなど思いもよらない程にお似合いのように見えた。自身とは違う意味でC・C.はルルーシュにとって掛け替えのない存在であり、ルルーシュが存在する上で重要な部分を占めている事をまざまざと見せられた思いがした。胸奥にもやもやとした厚い雲が湧き起こるような感覚がしたが、嫉妬しても意味の無いことだと分かっていたために口にはしない。

ルルーシュがゼロであった間、彼女を支えていたのは紛れも無くC・C.ただ一人だけだったのだ。その彼女が去るといふのならばそれ相応の寂寥があつて然るべきであり、そこに自分が介入する余地は無かった。

黙って見つめ合う二人に背中を向けて神楽耶の背後に立っていた藤堂へと目を向ける。ふと藤堂の無骨な指の一本にシンプルな銀色の指輪が嵌っていることに気付いた。よくよく見るとそれは左手の薬指だった。

存在を控えめに主張する指輪に注がれる視線に気づいたのか、藤堂がこちらを向いて軽く会釈をする。挨拶として交わされる日本人らしい控えめな仕草を真似てジェレミアもぎこちなく頭を軽く下げた。

「久しぶりだ。壮健でなにより」

「お互いにな。結婚したのか」

「ああ。その、2カ月前に婚姻届けを出したばかりなのだが、千葉風沙という名前の部下と結婚したんだ。貴公も黒の騎士団の時に会った事があるだろう」

「……ああ、あの黄色いパイロットスーツを着ていた気の強そうな女性か」

千葉と聞いて黒の騎士団で幾度か顔を合わせたことのある女性の顔が浮かんだ。日本軍では珍しい女性士官でありながら気後れする様子の無い、黒髪の気の強そうな女性だったと記憶している。日本人らしく慎ましやかで清楚な容姿だったように思うが、同じ日本人でもカレンの方がよっぽど容色が優れている上に、会う度に疑惑と軽蔑を混ぜ合わせた眼で突き刺すように睨まれた記憶しか無いため良い印象は無い。

しかしあの女性が藤堂と思うと確かに似合いの2人であるように思われた。ブリタニア人へ向けていた露骨な嫌悪は戦時中の軍人である事を鑑みると当然であり、むしろ色々な義務と責任を背負い込まされた藤堂を公私共に支える胆力が有るとも取れる。男性社会である日本軍の中での若さで出世したのだからそれなりには有能なのだろう。

「おめでとう。式はもう挙げたのか」

「いや、時勢が時勢だ。仕事も忙しいから挙式は来年になる予定だ。招待客の殆どが仕事で忙殺されているから今挙式を強行したとしても誰も来る余裕があるまい」

「ラグナレクの接続の余波を日本もかなり被ったと聞いたが、そこま

でか。無論最も忙しいのは統合幕僚長である貴公だろうが」
「政庁のシステムがようやく整ってきたから仕事量は徐々に減ってはきている……しかし多くの国民が集合無意識の中に残ってナナリー殿下と共に行ってしまった。戦争で心を病んでいる者が多かつたせいだ。扇も……遺族も多い。後始末はまだまだ終わりにない」

顔を曇らせる藤堂を前に、ジェレミアはこの場に親衛隊一員であるヴィレッタが居ない事に安堵した。

ブリタニアから見ればヴィレッタは忠実に任務を果たしたただけであるとは言え、扇が足を踏み外した切っ掛けの原因は美しく心優しい、扇を心から慕っていた千草であることは間違い無い。もし千草と出会うことが無ければ扇は頼りないながらも黒の騎士団の中間管理

職の役を全うしていた可能性もある。

ほぼ全てが扇の自業自得とは言え、黒の騎士団員として仲間だった藤堂が皇帝親衛隊として立身を果たしているヴィレッタを目の当たりにするのは気分の良い事では無いだろう。

気を取り直すように藤堂はC・C.と黙って見つめ合うルルーシュへ視線を投げた。女性と性別が判明した今も皇帝服のデザインは変わらず、体格があまり出ない服装のままだが、少し伸びた髪と軽く施された化粧は懸命に女らしさを主張していた。雰囲気も男性らしい硬質な鋭さは幾分かを潜め、女性特有の艶やかさを纏わせ始めている。神楽耶、C・C.、カレンと楽し気に喋るルルーシュを男性と間違える人間はそうは多く無いだろう。

「貴公の方は色々と難しそうだな」

「全く」

同情の色の濃い藤堂の言葉に深々と頷いた。自分が指輪を買うのは何時になるのだろうか。

「そろそろ開幕のお時間ですし、名残惜しいですが私共は退室させて頂きますね。貴重なお時間を頂きありがとうございましたルルーシュ皇帝陛下」

「開幕の挨拶が終われば今度はこちらから伺います。また後程お会いしましょう」

「それとこの脳筋馬鹿に宛てた婚姻の請願書は破り捨てて下さって構いません。むしろ破り捨てて下さいませ」

「い、いえ、その判断はスザクに任せますので」

ルルーシュに対して穏やかな微笑みを向けながら深々とお辞儀をした神楽耶は、皇帝の背後に隠れたスザクをじろりと睨みつけて「まあ、以前よりも大分マシな顔にはなりましたわね」と呟いた後に優雅な足取りで退室した。その後ろを、こちらは軍人らしくきびきびとし

た動作で頭を下げた藤堂が追う。

2人が去った部屋でルルーシユは背伸びをして時計を見た。開幕までそう時間は無い。窓の外では花火が未だに撃ち上がり空を飾っている。

「会場の方はどうなっている」

「滞りなく進んでおります。司会を務めるルーベン・アツシユフォー
ド卿も会場に到着したと。シユナイゼル殿下も間もなくご到着なさ
るそうです」

「そうか。じゃあ私も行くとしよう」

立ち上がり、周囲をナイトオブブラウンズに護られながら部屋を出る。C・Cも軽い足取りでその後について行った。

迷いない足取りで広々とした廊下の中心を歩む皇帝の左右と後ろを騎士が囲み、周囲をさらに皇帝親衛隊が取り囲んだ。自分一人を中心としてロールケーキのように周囲を囲む物々しい兵士達にもようやく慣れた。

ギアスで命じなくともブリタニア軍最高峰に位置する皇帝親衛隊の兵士は精鋭ばかりであり、皇帝のプライベートに口を挟む事も、外部に情報を漏洩する事も無い。そのためルルーシユは周囲から声が聞こえないよう過度に配慮する必要も無く、自身の左を護りながら歩くとスザクへ顔を近づけて小さく耳打ちをした。

「悪いな、顔を合わせ辛かったから予備兵力に回ったんだろうに無理やり連れて来てしまつて」

「お気になさらず。むしろ良い機会でした。今後皇殿に見える機会などそう多くは無かつたでしょうから」

一応周囲からの視線と耳を気にしたのだろう、スザクの口調は敬語のまま崩れない。しかし声色はプライベートで話す時と同じように和やかだった。

「そうか……婚約は、」

「こちらからお断りしておきます。陛下はお気になさらないで下さい」

「そうも行かない。適当な理由を付けて私の方からキョウト六家に断

りの返事を入れておくからお前にも一筆書いて貰うぞ」

あちらも本気では無かったのだろうが、一応は皇帝を通してナイト
オブラウンズへ正式に申し込まれた婚約だ。断るにしても皇帝と皇
家の面子を立てて断らなければならない。スザクがそのような立ち
回りを出来るとは思えなかった。その事を自分でも自覚しているの
だろう、スザクはルルーシユの傍で盾として歩きながら顔を俯かせ
た。

「承知致しました。お手を煩わせてしまい、」

「それは別に良い。ただ、お前はこのまま——」

独身でいるのか、と聞こうと思い、しかし首を振って口を閉じた。
スザクは頑固だ。愛する人が居るのに他の女性に目を向けることは
出来ないだろう。

スザクの心の中で最も神聖な場所には不可侵の女神としてユー
フェミアが君臨しているに違い無かった。手を繋いで、デートをし
て、キスをしただけの女性をスザクはこれから先一生崇め続けるのだ
ろう。

それは不幸な事なのだろうか。ルルーシユには生涯分らない事
だった。

式典会場は歓声に満ちていた。観客席より高い所に据えられ、ドー
ム全体を見回す事が可能なバルコニーの中心には繊細な彫刻を施さ
れた趣味の良い椅子が一つ置かれている。

バルコニーに出るなり色とりどりの肌と髪色の入り混じる観衆が
コロッセウムのように広がっている様子が一望出来た。空には未だ
鮮やかな花火が途切れることなく上がり続けている。その度に観客
席からは歓声と拍手が上がっていた。

「陛下、こちらに」

「うん」

誘導されるがままに前へと進む。ルルーシユが日の下に姿を晒す
と会場から爆発的な歓声が沸き上がった。

空に撃ちあがって雲まで散りそうな爆発的な歓声を前にルルーシユは微笑みを浮かべて軽く手を振る。その仕草で歓声はさらに高まり、オールハイル・ルルーシユという歓声とゼロの名を呼ぶ叫び声が混じってルルーシユを突き刺した。

優れた容姿と悲劇的な出生、ゼロとして弱者を救済した経歴、皇帝に座してからの平等な執政、ラグナレクの接続の余波で生じた多くの混乱への早期対応、それら全てが重なり現在ルルーシユ皇帝を支持する層は厚く広い。

今やルルーシユは世界で最も支持されている支配者と言えるだろう。

そして向けられている期待もまた膨大だ。

期待は容易に失望へと変換し得ることをルルーシユは理解していた。世界各国の国民は長い戦争で傷ついており、ようやく訪れた平和へ膨大な期待を寄せている。その期待は戦争の終末を齎したルルーシユの双肩へと押し掛かっている。そしてその殆どが「きつと自分には想像もつかない凄い事をして、傷ついた自分に完璧な平和を齎してくれる」という無責任な期待の形をしていた。

その期待に応えられなかった時自分は悪し様に罵られ唾を吐かれるのだろう。民衆は愚かで勝手だ。だからロロが言っていたように優秀な指導者が要る。皇帝とは幾ら罵られ、唾を吐かれても不遜に笑って前を向けるような人間でなくてはならない。

悪逆皇帝を成し遂げたロロと同程度の精神力は備えているだろう自分は、未だ戦争の余波が残るこの時代における皇帝として最も適任に違いない。自分はきつと何が起こっても笑っていられる。ナナリーが居なくなつた今でさえ笑っていられるのだから。

「陛下、シュナイゼル殿下がいらつしやられました」

「分かった。スザク、迎えに」

「イエス、ユアマジエステイ」

そう言うと同時にスザクがシュナイゼルを迎えに行く。その後姿を見送ったカレンがそう言えば、とルルーシユに声をかけた。

「陛下、今回の式典が開催されている間、ナイトオブワン直属部隊の者

を4名程皇帝親衛隊に加えさせて頂いております。私が退役した後はそのまま皇帝親衛隊として陛下にお仕えすることとなりますので、至らぬ点などございましたらお伝えくださいますよう」

「ああ、分かった。とは言えカレンの部下なのだからそう心配はしてはいないがな。見た目を裏切る訓練の苛烈さだと噂に聞くぞ」

「過分なお褒め言葉ありがとうございます」

「とはいえ、お前に似て敵に突撃しないかという点は非常に心配だが」「いえ、部下は常に私を諫める立場の者が多かったのでその点は問題ございません」

「胸を張って言う事か」

談笑する皇帝とナイトオブワンの様子を微笑ましく見守りながら、カレンがとうとうナイトオブワンを辞めるのかと思いきやジェレミアは僅かな寂しさを心中に感じた。

自分とカレンの付き合いは長くない。さらに性別が異なる上に年齢も10近く離れている事もあり、頻繁にC・C・やシャーリーを交えて女子会なるものを開いているルルーシユとは違い、ジェレミアとカレンはプライベートでの付き合いは全くと言って良い程に無かった。

しかしナイトオブワンのサポートも業務に含まれていたジェレミアはナイトオブワンである紅月カレンに最も近い人物だった。戦闘のセンスこそ卓越していたものの他の面はごくごく一般的な少女であつたカレンはナイトオブワンに就任した当初慣れない業務に日々目を回し、頻繁にジェレミアが手を貸した。

ルルーシユ並に素直さが欠落しているカレンは書類仕事で行き詰まると部下にヘルプを求める事も出来ずに止まってしまふ。そして早々にカレンが困っている事に気付いたルルーシユは度々ジェレミアにカレンのヘルプに回るよう命令した。この1年間はそんな日々の繰り返しだった。

書類一枚碌に処理できないカレンの姿は正直頼り無かつたが、しかし決して投げ出さず懸命に努力をし続ける少女の姿には素直に好感を抱いた。そのカレンが居なくなるとなれば今のナイトオブブラウン

ズを形成している良い雰囲気は少なからず揺らぐ事になるだろう。

ナイトオブワンはナイトオブブラウンスの顔であり、兵士の最上級にあるナイトオブブラウンスの纏め役でもある。個性が強いナイトオブブラウンスを纏めるとなれば単なる戦闘能力以外に強い牽引力や調整能力が必要になるが、カレン以外に誰がそんな役割をこなせるだろうか。

カレンからナイトオブワンを辞めるといいう話は聞いていたが、その後釜についてまでは聞いていなかったジエレミアは漠然と枢木スザクが任命されるのだろうと思っていた。

ルルーシユとスザク、両者を共に深く傷つけた長い間のすれ違いはCの世界でスザクが一度神になった事で解消され、今では親友の間柄に戻っていた。たまにスザクの眼にはルルーシユが男として映っているのではないかと訝しむような遠慮の無いやり取りも多いが、ともあれ仲が良いには違いない。思慮の浅さやメンタルの不安定さ等色々と不安要素はあるものの、皇帝からの信頼の篤さと今後の伸びしろを思えばスザクはナイトオブワンに相応しい人材であるように思えた。

それが面白い訳でも無いが、ナイトオブワンを選択するのは皇帝の権利であり同時に義務でもあり、自身が口を出すなど許される訳も無く、ジエレミアはそつとカレンとルルーシユの邪魔をしないために下がろうとした。

が、ああそうそうとついでのように言つてのけたルルーシユの言葉にジエレミアは全身を凍結させた。

「色々決め事があるから1ヵ月後にはなるだろうが、次はお前がナイトオブワンになるんだからそれなりの褒美を考えておけよ、ジエレミア」

「……………」

「ナイトオブワンにはエリア統治権が与えられるのが慣例だが、これからはエリアの解放を進める予定だからそうは行かないからな。代わりに何か他に望みが有れば可能な限り叶えてやろう。給料アップとかどうだ」

「……………」

「給料は現状のままでもいいのか？ならお前はあんまり宝飾品には興味は無いから、他に何か……………土地、株、爵位、女は却下として……………そうだ、ロイドに頼んでKMFのエンジンを積み込んだ車を造らせようか。そう言えばアツシユフォードにいた頃ドルイドを搭載した車をプレゼントしたな。ロイドならあれより良い物が造れるだろう」

「……………」

「おーいジェレミア、おーい」

「……………」

「返事が無い。ただの屍のようだな」

「いや生きてるわよ」

ルルーシユからかけられる言葉にもC・Cからの揶揄にも反応する余裕も無く、ジェレミアは目を見開いてその場に直立不動となった。

目を瞬かせ白昼夢でも見ていたかのようにきよとんと幼い表情を晒している。もう三十路の見えるいい加減いい歳の男だということに今この時は少年のようだった。

その表情にデジャヴを感じて首を傾げると、ジェレミアは進化寸前のポケモンのようにぶるぶると震え始めた。

「い、今、なんと？あ、厚かましくも、私かな、ナイトオブワンだと聞こえたような気が」

「そうだが」

キョトンとしたままのジェレミアに、そういえばカレンの後釜としてジェレミアを次のナイトオブワンに任命する事を知らせていなかったとルルーシユは今更ながらに気付いた。

しかしカレンから仕事の引継ぎについて相談されていたジェレミアはナイトオブワンの座が空くことを知っていた筈であり、誰かがその後任者にならなければならない事にも気づいていたに違いなかった。そして残ったナイトオブ라운ズのメンバーを考えれば候補なんてこいつ一人しか居ない。自身が次のナイトオブワンに選定される事などとづくにジェレミアは気付いているとばかり思っていた。

だがその予想に反してジェレミアは滂沱の涙を両目から噴き出した。うわ、とドン引きするカレンとC・C・に内心で同意しながらも恋人兼上司としてルルーシュはよしよしと背中を撫でる。しかし呆れ交じりの視線を向ける事だけはどうにも我慢出来なかった。

「——る、るるーしゅさま」

「おい泣くな。なんで泣くんだ」

「わ、わだ、わたしのような者が、あなた様のナイトオブワンになれるとは思っても」

「いやそこは思っておけよ。他に誰が居るんだよ。お前以外にはメンタル日本製ガラス細工とチャラ男と幼女の20歳以下トリオしか居ないんだぞ。選択肢ほぼ一択だろうが」

「し、しかし、私は、近い内にお、王配になると思っていましたので、ナイトオブワンになるのは流石に無理かと諦めていたので、ま、まさか王配とナイトオブワンを兼任するという身に余る光栄を与えて頂けるとは、」

「おいこいつ謙虚な振りして全然謙虚じゃないぞ」

「むしろ当然のように皇帝と結婚するつもりでいるなんて臣下としてどうなのよ。傲慢過ぎるんじゃないの?」

「全くだ………いや、しかしこいつを逃すとルルーシュは行き遅れまっしぐらな気もするからそう傲慢とも言えないか?」

「あー、いや、うん、それはあるかも……ルルーシュってモテるんだけどプライド高すぎ、性格ひねくれ過ぎであんまり彼氏と長続きしそうにないし」

「彼氏は居れども結婚はできず、仕事が出来るからこそ金にも困ることなく焦る気持ちも起こらず、いつかいつかと思いつながら仕事も優先した結果ずると独身を続けていつしか四十路に突入……有り得るな」

「おい止めろ。私はまだ18歳だぞ。花の女子大生と同じ年齢でどうして行き遅れの心配をされなきゃいけないんだ」

おーいおいと泣くジェレミアの肩を叩くとすんすんと鼻が鳴る。

そのまま数分が経ち、ようやく涙腺が落ち着きを取り戻してから

ジエレミアは「失礼しました」とやや赤みの残る目をぎゅつと閉じた。両足でしっかりと立つ様子を確認してからルルーシュはそつと離れる。

「落ち着いたか」

「はい。申し訳ございません、予想外の事で、私がナイトオブワンになど……非才の身には余る光栄、皇帝陛下のご期待には全力でお応えできよう死力を尽くす所存でございます」

深々と頭を下げたジエレミアの頭頂部に渦巻くつむじを見ながら「ああうんしつかり励めよ」と返事をして、王配についてはどうするべきかなと頭を悩ませる。

制度やら周囲の視線やら面倒なことは多々ある。しかしもう少し我儘に頑張ろうかと思う。スザクを見ると微かに笑って頷いていた。そうだな。そうしよう。

皇帝なのだから多少の我儘は許されて然るべきではなからうか。そうでないと言うのなら、戦いを挑んでくると良い。叩き潰してやろう。その位の心構えで居ればよい。自分が道を踏み外してもカレンとスザク、そしてジエレミアは頬を殴ってくれるだろう。ならばそれは自分が心配するべき事では無いのだ。

「陛下、シュナイゼル殿下が御到着なさいました」

「そうか。通せ」

「イエス、ユアマジエステイ」

スザクに先導されてシャーリーとカノンを引き連れたシュナイゼルが姿を現した。

金色の髪を靡かせて澄んだ瞳を瞬かせている。車いすの車輪を自分で押してシュナイゼルはルルーシュの元へと近寄った。白い礼服の胸元を繊細な細工が施されたナイトオブゼロの騎士章が飾っている。

「ルルーシュ、お待たせ」

「お待ちしておりますましたシュナイゼル殿下。どうぞこちらへ」

皇帝の椅子に最も近い場所へとシュナイゼルを呼ぶ。空に撃ちあがる花火にうわあ、と感嘆の声を上げながらシュナイゼルは皇帝の玉

座の隣に車いすを並べた。

「凄い広いね、花火も沢山で綺麗。空が花火でいっぱいだ」

「花火はニーナが作ったものなんですよ。ここは国内でも最大級の施設で、今回の式典は多くの国から注目されているから参加者も多いんです。皇宮からいらして頂いてお疲れではありませんか、兄上」

「大丈夫。カノンとシャーリーも一緒に来てくれたからね」

シユナイゼル付きの秘書官であるカノンとメイドであるシャーリーは揃ってシユナイゼルの後ろに立った。目の前に広がる人の波にシャーリーは目を回しながらも、どこかでこの光景をリポートしているだろうミレイを探すために目をきよろきよろと走らせた。

「開会式の後は色々といイベントがある予定ですから、兄上も楽しめると思いますよ。お疲れになったらすぐに教えてくださいね」

「うん……ねえ、僕ってここに座っていいの?」

「それはどういう意味で?」

シユナイゼルはルルーシユの顔を覗き見ながら玉座の位置から車いすの場所をほんの少し下げた。

「ルルーシユは皇帝だから、ルルーシユのお兄ちゃんだとしても僕は下がっているべきなんじゃないの?」

「……………兄上は良いんですよ」

シユナイゼルの言は尤もだった。皇帝の兄であり、血統的にはルルーシユより余程皇帝に相応しいシユナイゼルの立場は非常に難しい。ナイトオブゼロの称号を与えはしたが、ここでシユナイゼルを特別扱いして自身と立場を並べるような事はしない方が良いのは明らかだった。下手をすれば無用な諍いを生みかねない。

しかし、シユナゼルは皇位継承権第一位の座にある身分でもあった。そしてルルーシユ自身がシユナイゼルは自分よりも皇帝の御座に相応しいと自覚していた。今はまだ精神が幼いが、いずれ成長したシユナイゼルにこの座を明け渡す日が来るかもしれない。

何よりもナナリーとユーフェミアの姿が純真なシユナイゼルの背後に浮いて見えるような気がしたのだ。あの2人と同じ美しい血がシユナイゼルの中に流れている。そのシユナイゼルを自分よりも後

ろに下がらせる事が正しい事なのかルルーシユには分からなかった。「兄上は私の次に皇帝になるかもしれない方なのですから、私の後ろに下がることなんてありません」

「どうしてルルーシユがずっと皇帝で居るのは駄目なの？」

「私は……私はとても酷い失敗をしてしまっただけです。そんな私より、兄上の方が皇帝に相応しい御方ですから。兄上なら私のような失敗はしないでしよう。だからいずれ兄上がご成長為された時に兄上が望めば、」

「失敗する事って悪いことなの？」

シユナイゼルの眼は残酷なまでに美しく、大気圏の最外層の色に輝いていた。純真な子供に勝てる者などこの世界には存在しないのだと突きつけられたような気がした。どう返事をしてよいのか分からずルルーシユは言葉を詰まらせた。

言葉を失ったルルーシユにシユナイゼルはええとね、と拙い言葉遣いで言を重ねた。

「この前ね、シャーリーに紅茶の淹れ方を教えて貰っただけで失敗して、すつごく苦くなったんだ。でも次に失敗しないよう注意したら美味しい紅茶が淹れられたんだよ。失敗したから注意しようと思えたのに、失敗するって悪いことなの？」

「それは……しかし取り返せない失敗もあるのでよ、兄上。私は許されない事をしたのです」

「誰が許してくれないの？」

「誰が——」

誰だろう。

自分が背負った罪は確かに背中の上に押し掛かかっている。その罪の形もちゃんと理解している。

だが誰がその罪を乗せたのだろうか。絞り出すようなルルーシユの声にシユナイゼルは首を傾げた。淡色の唇から零れたのは窒息しかけた鳥のような声だった。

「全てです。私が殺した人々、生き残った人々、楽園に去って行った人々。きつと、誰もが私を、」

「……………陛下、開会宣言のお時間です」

スザクの声にはつと前を見ると、空を飾り続けていた花火が打ち止んだ。会場は徐々に静まり、ルーベンの観客へ注意を促す事務的な声が辺りに響いている。

誰が私を許さないでいてくれるのだろう。

立ち去る前にナナリーが見せてくれた自分の人生は、多くの人々を殺し、沢山の血を流す酷い者だった。きつと許される事など無いと分かっていた。自分は罪に塗れている。

「じゃあルーシユ、僕はちよつと下がってるからね」

「あ、兄上」

シユナイゼルはルーシユが止める間もなく玉座のほんの後ろに下がった。目の前には多くの人種が混ぜ合わさった人の海が広がっている。彼らの視線は皆ルーシユに向いていた。

悪意のある視線も当然向けられているだろう。しかし好意や敬意の混じる視線の方が多い。その両方の視線は、むしろ後者の方がより深く自分を傷つける可能性のあるものだとは知っていた。

自分へと向く幾多もの視線を弾き返すように前を向いたまま、思わずルーシユは友人である騎士へと言葉を向けた。同じく罪を厚く重ねた彼ならば答えを知っているような気がした。

「スザク」

「何でしょう陛下」

「……………私は許されるのだろうか」

許されたいと思ったことは無い。むしろ許されるべきではないと思う。ひじ掛けに置いた拳を白くなるまで握りしめる。

スザクは一瞬きよとんと眼を見開いたが、直ぐに微笑んで目を細めた。傷ついた子供を見るように優しい表情をしていた。

「ううん。そんな日は来ないよ。僕も君も、絶対に許される事なんて無い。僕達は死ぬまで罪を背負って生きて行かなきゃいけない」

「……………そうか、そうだよな」

優しい気な口調で言われてルーシユも深く頷いた。沢山の人を殺した。その事実がある限りルーシユの罪科が消えることは無いだ

ろう。死者が蘇ることは無く、過去を変える事も出来る筈が無いのだから。

スザクは目尻を緩めてでも、と言葉を続けた。

「でも僕はもうとっくに許したよ。ユーフェミアも、ナナリーも。他にも沢山の人がもう君を許したよ」

開会を宣言するルーベンの声と共に歓声上がる。歓声に紛れたスザクの声はルルーシユの耳を突いた。

「君を一番許さないでいるのは君だ。僕も僕を許さないでいるから、どうか君もそのまま居て」

『それでは開幕に続き、神聖ブリタニア帝国99代目皇帝、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア陛下よりお言葉を頂戴致します』

カメラが自分に向けられているのが分かった。反射的に立ち上がり前を見据える。しかしスザクの声は耳の中で反響していた。

自分を一番許さないでいるのは自分だ。

そうなのかもしれない。あのルルーシユの贖罪は死であり、一時の平和として世界を覆った。自分の贖罪の形は今、人類の海として眼下に広がっている。

自分が自分を許す日はきつと来ないだろう。そうであって欲しい。自分だけは、自分を許してはいけない。スザクやロロのように、人類全てを引き連れて行ってしまったナナリーのように、自分だけは自分の罪の大きさと形を忘れてはいけない。

ルルーシユの声はマイクを通して会場中に高らかに響き渡った。心臓を射抜くような鋭い声でありながら、どこか優しさを滲ませた声は世界中の人々の鼓膜を強く鳴り響かせた。

「諸君、樂園を否定した我が共犯者諸君。今日この場に集まってくれたことを嬉しく思う。多くの国から多くの人種が集まったこの光景は正しくこの会を象徴するものである。この日を迎えられる事は私

にとって何よりの僥倖である。まずはこの場に集まってくれた人々に、そしてカメラの向こうでこの光景を見てくれている人々に私から礼を言わせて欲しい。

今日この日を迎えることが出来たのは貴方方のおかげである。前皇帝シャルル、その妃であったマリアンヌ、そして我が妹ナナリーが作り上げた樂園を否定し、この世界に戻り、そしてこの半年を生きにくれた貴方方が居たからこそ、今日この日を迎えることができた。神聖ブリタニア帝国皇帝として深く礼を言わせて頂く。ありがとう」

歓声上がる。Cの世界での出来事を覚えている者は少ない。しかし完全に記憶を失った者もまた少なかった。

奇妙な世界で多くの生物と一体化した快樂は現実世界に戻ったからと言って忘れるにはあまりに強烈過ぎるものだった。奇妙な経験は世界中全ての人々の中に根付きぼんやりとした一体感を残した。

それは非常に曖昧な感覚だったが、長い戦争を中断させ、一時の平和を齎すには十分なものだった。いずれは殆どの者が集合無意識であつた事を忘れるだろうが、今この時において世界中全ての人々が誰も他人と言いつけることは出来ないような不思議な親密さを有していた。

歓声が治まるまでルルーシユは微笑み、カメラに向かって手を振つた。何時になく晴れ晴れとした気分だった。視界がよく澄んでいた。空が高く、広い。

会場が割れんばかりの音が止み、ルルーシユは再度声を張り上げる。

「諸君、樂園に後ろ足で砂をかけた我が共犯者諸君。我々は戦い、そしてこの世界に残ることを望んだ。あの何もかもを与えられる樂園を否定し、自らの力で戦わざるを得ないこの世界に残ったのだ。それは勇氣ある選択だ。

私はここに保証しよう、君たちは間違つてなどいない。自らの力で勝ち取ったものでなければ手元には残らない。平和も、安寧も、与えられるものではない。勝ち取るものだ。

人々よ、私達は家畜ではない。与えられるがままに生きてはならな

い。与えられる事だけが人間の役割ではない。自分の頭で考え、自分の敵は自分で見定めるのだ。それが自らの意志を持つという事だ。敵は人種でも性別でも立場でも決まるものではない。自由を阻害する者達、食事を取り上げる者達、家から追い出す者達、見下し、指図し、奴隷のように扱う者達。そしてそういった制度。それが敵だ。奴隷を作るために戦ってはならない。自由のために戦うのだ！」

拳を振り上げる。ルルーシユの声は会場全てに響き、電子の波に乗って世界中に響き渡った。

その演説に涙を浮かべる者もいれば、欠伸交じりに聞く者もいた。綺麗事をと舌打ちする者もいた。だが誰もがその声に程度の差こそあれ耳を傾けずにはいられなかった。声に熱が籠る。

ルルーシユの声には強制的に人々を振り返らせる力があつた。ギアスではない力が今のルルーシユの内には溢れんばかりに満ちているのだった。ルルーシユの強靱な意志がその声を通して人の内を揺さぶっていた。

「諸君、永寧の樂園を爆破した我が共犯者諸君！我々は未だ平和とは言い難い状況にある。未だ人種や身分といったものに囚われて人を見下す者がいる。理不尽な理由で他者の物を奪う者がいる。飢えて死ぬ子供達がいる。

だが諸君らよ、それは絶望するには値しない。私達に覆いかぶさる不幸は、単に過ぎ去る貪欲であり、人類の進歩を、明日を恐れる者達の憎悪なのだ。憎しみも、悲哀も、いずれは消え去るものだ。人々から奪い取られた権力は人々の物に返されるだろう。決して人間が永遠に生きないように、決して自由と平等が滅びることも無い！今日この日はその象徴となる！！

私はここに、国際連合の設立を宣言する！国際連合は国際平和と安全の維持、経済、社会、文化等に関する国際協調の実現を目的とし、決して平和に対する脅威、平和の破壊、侵略行為を許さない！！国際連合はいかなる国の政府からの指示も受けず、各国には1票の表決権が与えられ、多数決によってその活動を決定する！！」

その声と共に何百人という各国の代表が立ち上がり歓声と共に拍

手の音が鳴り響いた。その拍手にはルルーシユの言葉への強い同意が込められていた。神楽耶もその中に交じり、小さな手が赤く染まる程に打ち鳴らした。

神楽耶も、今日この日から完璧な平和が訪れるなどとは思っていない。国際連合はまだ生まれただけの幼い組織だ。問題も多く起ころう。

しかし人類は今日確実に前へと進んだのだと確信できる。それが嬉しかった。その歩み以上に価値あるものは無い。隣に座る天子も神楽耶と並び何度も拍手を送る。

拍手に負けない、鐘が打ち鳴らされるような高らかな声でルルーシユは言葉を続けた。

「諸君、今日この日を迎えた我が共犯者諸君。私はここに宣言しよう、あの楽園を否定した我々は微塵も間違っていないかった！」

あの楽園は爆破され、否定され、価値無き物として見捨てられるに相応しい惨めなものだった。我が両親がああ楽園を善なる物だと考えようとも、我が妹がたとえああ楽園を肯定しようとも、1億人の人々が我が妹に付き従いああ楽園へ随行しようとも、私はここに宣言しよう、ああ楽園は我々が目指すべきものでは無かった！

我々が目指す世界は今日の前に広がっており、我々は今日この日にその世界へ一歩を踏み出したのだ！

諸君、この地に生きることを選択した我が共犯者諸君！我が国民、我が同胞、我が戦友諸君！！

私はここに宣言しよう、この地にも楽園は築けると。前に進み続ければ、明日を迎え続けられ、その日は必ず訪れると。そのために我々は戦う、私は戦おう！

そうして戦い続ける限り、長く続いた戦争の犠牲者の死は決して無駄にはならず、誰も忘れる事は無い。この先に私は疲れて倒れ伏す事もあるだろう、心が挫ける事もあるだろう。しかし私は仲間を支えられ、友人に励まされ、私と戦う多くの人々の姿を見て自らを奮い立たせ、私は戦い続けよう！！

だが私一人が戦い続けてもそれは何の意味も無い事だ。私一人が

何をしても、この世界を楽園に変えることは決して叶わない。だからこそ諸君らにも、私と共に戦ってくれ、切に望む。あの楽園を否定した時のように、どうか平和を脅かすものを、不平等を、理不尽を否定して欲しい！どうか戦ってほしい！！

諸君らにはその力があると私は確信している！！

そして諸君らのような人々を我が共犯者と出来たことを、私はいつまでも、いつまでも誇りに思っている！！」

ルルーシュが口を閉じ、振り上げた拳をゆっくりと下げると広いドームには更なる歓声が沸き上がった。

カメラの向こうでも同様の光景が広がっているだろう。人種の違う者が立ち上がって肩を組み、目に涙を浮かべている。幼い子供を肩に乗せて笑う親子がいる。各国の旗が同じ高さに並んで風にはためいている。耳に痛い程の拍手が何時までも鳴り響いている。

今見ている光景を、ルルーシュはまるで物語の最終幕のようだと思った。

世界は救われ、皆が笑顔で拍手をしている。人種も性別も年齢も関係なく誰もが大声で歓声を上げている。

もしこれが物語であるのなら、最後の一文はこうだろう。

そうしてみんな、優しい世界でずっと幸せに暮らしました。

だがそう終わる物語は絶対に嘘だ。

何故ならば、大団円などありえないからだ。ここで終わりとエンドロールが流れることもありえない。

物語が終わっても人生は続く。そしてすぐにまた何かが起こる。人生はいつだって人を弄び、嘲笑い、甘やかし、打ちのめし、さらなる悲劇や喜劇を与え、決して放っておいてはくれない。

そしていずれ人生は終わり、他の誰かに受け継がれる。受け継がれ

た誰かも人生に翻弄され、いずれは人生を終え、また誰かへと続いて行く。

この世界に生きる全ての人々は、数え切れないほど多くの人生を受け継いでいる。

そろそろ皆気づくべきだ。死んでも終わりなどではないこと。人生。つまりは情念、妄執、執着。罪と道徳。愛。意識。それらは死んでも続いて行くものだ。ロロのように。マリアンヌのように。シャルルのように。ユフィのように。ナナリーのよう。

人生は続く。明日はやって来る。どれだけ絶望的なものであったとしても。たとえ死んでも。必ず。そうして生きてゆく。いつか全てが終わる日まで。

自分達は彼らの人生を引き継ぎ、この理不尽な世界で生きることになった。決めた。

誰かを愛して、愛されて生きる。嘘を吐いて、裏切り、裏切られ。傷つけ、傷つけられ。恨み、恨まれ。それでも生きる。明日のために。自分の人生を全うし、誰かに引き継ぐために。

自分だけではない。楽園爆破の犯人たち、その全員がそう決めたのだ。その理由はもう誰もが知っている。

何故ならば楽園を捨て去ってしまう程に、人生、そして世界は美しい。

隣に立っているジェレミアの手をそっと握る。握り返して欲しいと願う。

上から温かい視線が落ちる。そうして何も言わず大きな手に強く握り返される。そこに愛を感じる。カレンがそっと肩を支えて、スザクの手が背中を撫でて、C・Cが微笑みを浮かべる。シュナイゼルが拍手をして、シャーリーが涙を浮かべている。神楽耶が笑顔で手を振り、藤堂が満足げに頷いている。

黒の騎士団、日本人、ブリタニア人、中華連邦、E・U、顔も知らぬ多くの人たち。歓声が鳴っている。泣きそうだ。胸が張り裂けそうになる。

無くしてしまったもの、手に入れたもの、変わらなかったもの。そ

の全てに意味があつたのだと、今ならそう信じられる。だから明日も生きていたい。そう思う。心から。

そう思う程に今のこの瞬間、世界は驚くほどに美しい。たとえ次の一瞬で消え失せる刹那の瞬きだったとしても、これ以上に価値のあるものは無い。

いつの日か全ては終わるだろう。

しかしそうだとしても、この瞬間の世界の美しさに比べれば、永遠の楽園なんて。

神聖ブリタニア帝国は99代目皇帝ルルーシュ・ヴァイ・ブリタニアを最後の皇帝とし、民主政治へと移行する事となる。長年に渡って続いた世界大戦はルルーシュ皇帝の下、艶やかな花火が消えるように生ぬるい余韻を残して世界から姿を消した。

戦争に伴う憎悪や哀惜はその後長い尾を引いたが、若き指導者の台頭は人類の眼を無理やりに明日へと向けさせた。

その後、長く平和の時代が続くことになる。

だが永遠なる平和などありはしない。

ルルーシュの存命中も、死後も、そして民主政治へ移行した後も、人類は飽くことなく諍いを続けた。諍いは容易に暴力を呼び覚まし、そして時たまに戦争へと発展した。

戦争が起こる度に人類は平和の貴さを確認し、声高に人命の尊さを訴え、そして平和な時代を迎え、いずれ平和に飽いた。そしてまた戦争が呼び起こされ、平和を望む。

人類は歴史に学ぶことができる程度に賢いが、学んだからと言って覚えていられる程に賢くは無かった。

人類が戦争という隣人と袂を分かつ日が来るのだろうか。いずれにせよ、この世界は楽園となる機会を永久に逃したことは確かであるようだった。ナナリーがこの世界に還ることは二度となかった。

しかしそれは不幸と言える事なのだろうか？

而して楽園は落日し、人類は荒野へと向かう。
確かな足取りとともに。

・ 楽園爆破の犯人たちへ 劇終

おまけ　く復活についてネタバレしたくない方は
バックプリーズく

ここから先復活のネタばれ注意
!!!!!!!

復活のルルーシュ ラストより

「さて、まずはどこへ行くかな……路銀もこれからはどう調達したのか」

「それなら心配は無いぞC・C。すでに幾らか投資で稼いだ」

「ほう、流石だなルルーシュ」

「パソコンさえあれば金については何とかなるさ。まずはギアスについて調べて、その後は俺の状態についてももう少し詳しく検査をしよう。このまま不安定な状態というのも気持ちが悪い」

「そうだな。恐らくはこの1年間お前の心がどこかへ飛んで行ってしまったために、未だにそちらへと引っ張られているのだろうか……お

前、この1年間の記憶は残っているか？」

「こちらの世界についての記憶はほとんど無いな。死んだ瞬間に気を失って、気が付いたらあの門の前に居た」

「心の大半がどこかに飛んで行ってしまっていて、身体の方に残っていたのは残骸のようなものだ。だからなあ。心がどこに居たのか覚えてるか？やっぱりCの世界を彷徨っていたのか」

「いや、色々と放浪していたような記憶がある……………」

「放浪？」

「ああ。かなりあやふやな記憶だがな」

「思い出せるか？お前の存在をここに固定するための情報があるかもしれない」

「そうだな。なんだか酷くぼやけているが、思い出そうとすれば少しは……………あ、」

「何だ。何か思い出すものがあつたか」

「——家庭教師」

「は？」

「……………むつきむきなゼロ。喋る猫に、エヴァンゲリオン。やたらめつたらにハイスペックなライという少年と、秘密武装警察特命少年特務警視……………」

「おい、どうしたルルーシュ」

「ツツコミ系の帽子屋、おでん屋ナナちゃん、サーヴァントオブスロウズ、キセキの誕生日でのネタバレツイッター問題……………」

「る、ルルーシュ、気を確かに持て！そつちに引きずられるな！お前はもうここに居るんだ！」

「す、スザルル、シユナルル、ジノルル、女体化、ジェルル……………そうだ、L.L. という名前も散々あつちの世界で見た名前で……………ルルCエンドネタ……………そうだ、俺は、俺の居場所は、俺という存在は……………うううううううう、違う、俺は違う、う、うああああああああ!!」

「大丈夫だルルーシュ、大丈夫だから、もう大丈夫だから、暴れるな。お前を害するものはここには何もないから。ここに居るんだルルー」

シユ。」

「嫌だ、思い出したくないっ、俺は、俺はっ」

「思い出さなくても良い。そんなに嫌な記憶なら、思い出さなくても良いんだ。お前はもうここに居るんだから。もうあっちに行くことは無いから。大丈夫だ、大丈夫だぞ、」

「違う、違うんだC・C、まだロストストーリーズが、それにこうしている間にも、いや、今この瞬間にも、俺は増えて、これからまだ、まだ……俺は、俺は、」

「大丈夫だルルーシユ。お前はここにいる。私と一緒にだ」

「……………一緒」

「そうだ。私とお前は一緒だ」

「……………C・Cと、一緒」

「ああそうだ。一緒に居てくれるだろうか？ギアスについて調べて、お前の存在についても調査して、それから、そうだな、いろんな場所に行つて、いろんなものを食べて、数十年もしたらお前の顔を覚えている人も少なくなるだろうから、何か仕事をしてもいいな。暫くはそうやって過ごそう。お前はもう一生働いただろうから、少しぐらいそうやってのんびり過ごしてもいいさ。お前はまだガキの癖に働き過ぎだ」

「……………のんびり……………」

「そうだ。のんびり生きよう」

「……………生きる」

「そうだ。生きるんだ。無意味に死ぬな。そんなのはもう許さない。私も、スザクも、カレンも、シャーリーも、ナナリーだって」

「……………ナナリー……………あのルルーシユは、生きて罪を贖った。ナナリーを失ってさえ——」

「？」

「なのに俺は……………いや、俺もそうなのか。そうか、そうだな……………俺も生きて、背負うのか」

「そんなもの、好きに背負って好きに捨てる。死ぬよりも生きている方が辛いんだ。罪がどうのと、いつまでもうじうじ考えている暇など

無いぞ」

「……………ふん、お前が言うと言得力が違うな」

「おや、やっと調子が戻ってきたな」

「ああ。悪い、記憶が少し戻って混乱した」

「そうか……………酷い記憶だったのか？ 思い出したくもないような、」

「いや、まあ、ある意味では酷い記憶だったが、一生もののトラウマにはなりそうだが……………思い出したくもないという程では無い。あくまであれは俺であって俺でないから」

「そうか。無理はするなよ？ またあのぼやぼやな状態に戻られても困る」

「ぼやぼや……………いや、大丈夫さ。ちよつと思いつくくらいなら何という事も無い」

「なら良い。それで、その記憶の中にお前の存在をここに固定するための情報はあったか？」

「少しなら」

「そうか。それは何だ」

「……………幾多もの俺の可能性に、飲まれないようにすること、かな」

「お前の可能性？」

「長い話になる。幾つもの世界があったから。全てを覚えている訳でも無いが、それでも切れ切れの話を総合すると凄まじい長さだ。そうだな、今日の宿を見つけてから話そう」

「たった1年間で随分と壮大な旅をしたんだな」

「……………ああ、」

1年間観察していたルルーシュ達について、12年間分の話をしよう。

長い、長い話を。